

外の世界の方がフラグ
多くね？

シュリエン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Q. もしもダンガンロンパV3のメンバーが、全員生存して外の世界へ出られたら？
Q. その他の世界が、才囚学園以上に死亡フラグに満ちた名探偵コナンの世界だったら？

A. 超高校級の才能フル活用してフラグ折ろうぜ！
ご注意！

※ニューダンガンロンパV3のネタバレを多数含みます。

※コナン側の設定も割と適当です。

※ご都合成分をチートなオリ主で補っています。

以上の点に了承できる方のみ閲覧ください。

マイナスとマイナスが掛け合わさるとプラスになるように、シリアスとシリアスが掛け合わさるとギャグになるんだよ！（超理論）

春の陽気と就活疲れテンションによるやりたい放題の不定期小説ですが、モチベーションが続く限り頑張ります。

目次

プロローグ

1. 「その事件への見解：一般人サイド」&主人公設定 1

2. 「当事者の過去と現在語り」

10

3. 「当事者M・H.が語るその同級生の話」 17

4. 「その事件への見解：捜査関係者サイド」 26

5. 「水面下で始まる攻防戦（※一方的）」 35

6. 「既に始まっていた攻防戦」

7. 「とある議事録」 45

8. 「5年前は小学6年生だった少年の語り」 71

9. 「熱帯魚大量死事件」 88

10. 「木馬は回るよどこまでも」

103

1. 「いま、あいにくきます」

114

2. 「フラグは〇〇するもの」

128

3. 「運命が絡まり過ぎて事故って

- る話 ①」 143

14. 「運命が絡まり過ぎて事故つて る話 ②」	160	21. 「オレ達の戦いはこれからだ！」	286
15. 「運命が絡まり過ぎて事故つて る話 ③」	177	with V3編	
16. 「運命が絡まり過ぎて事故つて る話 ④」	195	バイカー街の亡霊 with V3	311
17. 「運命が絡まり過ぎて事故つて る話 ⑤」	214	①	
18. 「運命が絡まり過ぎて事故つて る話 ⑥」	232	バイカー街の亡霊 with V3	340
19. 「運命が絡まり過ぎて事故つて る話 END」	258	②	
20. 「過去と現在の事故後ロスタイ ム」		バイカー街の亡霊 with V3	359
		③	
		バイカー街の亡霊 with V3	377
		④	
		バイカー街の亡霊 with V3	393

漆黒の特急(ミステリートレイン)編	with V3	①	447
漆黒の特急(ミステリートレイン)編	with V3	②	467
漆黒の特急(ミステリートレイン)編	with V3	END	486
たま風攫うは桂男の憂い		①	516
たま風攫うは桂男の憂い		②	536
たま風攫うは桂男の憂い		③	556
たま風攫うは桂男の憂い		④	575
たま風攫うは桂男の憂い		⑤	595
たま風攫うは桂男の憂い	END		

瞳の中の暗殺者	with V3	①	643
瞳の中の暗殺者	with V3	②	658
瞳の中の暗殺者	with V3	③	674
瞳の中の暗殺者	with V3	④	693
瞳の中の暗殺者	with V3	⑤	713
瞳の中の暗殺者	with V3	⑥	734

瞳の中の暗殺者 with V3 E

N
D

不知火ちゃんの不思議な話 | 784 758

ビルとサイコロと、爆発と ①

812

ビルとサイコロと、爆発と ②

832

ビルとサイコロと、爆発と ③

857

ビルとサイコロと、爆発と ④

878

ビルとサイコロと、爆発と ⑤

906

ビルとサイコロと、爆発と END

934

ハロウインの花嫁 with V3

①

プロローグ

1. 「その事件への見解：一般人サイド」 & 主人公設定

今から約五年前。ダンガンロンパというコンテンツが、インターネット上で密かに発信された。外界と隔絶された閉鎖された学園に、十数人の優れた才能を持つ高校生が閉じ込められ、外へ出るために殺し合いをする……というデスゲームを題材としたサスペンスドラマである。極限の環境に置かれながらも、必死に仲間と生き延びようとする思春期の少女少女達が織りなすその群像劇は、学園ものとしても推理ものとしても、大きな反響を呼んで大人気となった。

フアンの要望により、結果的に50作以上も作られることになったダンガンロンパだが、その最後となる53作目にて、世界を揺るがすほどの大事件の存在が発覚した。

飽くまでフィクションとして楽しまれていたダンガンロンパであったが、フアンを更に楽しませるため、リアリティを追求するうちに、その途中から本物の人間を拉致し、本当に殺し合いをさせていたという恐ろしい事実が、ライブ配信されていたその劇中で明

かされたのである。

ダンガンロンパは回ごとに設定は微妙に異なるものの、そのストーリーは一貫して、超高校級と呼ばれる才能の持ち主である高校生達が見知らぬ学園内に拉致されてきて、殺し合いを促され、人数を減らしながらも、最終的には自分たちを閉じ込めた黒幕やその理由を明かし、生き残った生徒が学園から脱出してエンドとなる。つまり、回ごとに出演する生徒も異なるのだ。

全53作のいつから本物の殺し合いとなったかは今でも不明だが、その犠牲者は犯罪史上稀に見る数に上ると推定された。

インターネットで堂々と配信されていた殺人劇に、各国は非常に大きな衝撃を受けた。すぐさま捜査チームが生まれ、ダンガンロンパの制作チームは摘発された。

同時に出演者の高校生達の救助も行われたのだが、過去作における殺し合いの生き残りとして脱出したと思われる生徒役は口封じのために殺害されていたことが判明した。辛うじて保護できたのは、最後の回となる53回目の生徒達だけであった。

そして、新たに重大な問題も発覚した。どれだけ方々に手を尽くしても、ダンガンロンパに起用された生徒役の身元が一切分からなかったのである。

劇中の設定で、生徒が拉致される際に多用される記憶操作の技術も実在しており、救助された生徒役達も、自分の出生からこれまでにいたる全ての記憶を書き換えられてし

まっていた。

更には、外科手術や薬物投与によって容姿や身体能力も変えられている可能性もあり、本人からは一切手がかりが得られない状況となっていた。

それら全ての経緯や技術のデータも、摘発される直前にスタッフの悪足掻きよって跡形もなく処分されてしまっていた。

唯一はつきりしているのは、彼ら自身のDNA情報と、彼らがダンガンロンパのスタッフに誘拐されてきたことだけ。行方不明者のリストから地道にDNAを照らし合わせるしかない。

生徒役の多くは日本人だと推定されたが、容姿も記憶も変えられていれば、それすらも信用できない。日本国内だけでも年間8万人の行方不明者が出ているのに、世界規模でとなると更に途方も無い数から捜さなくてはならない。更に言えば、その行方不明者リストも届出があるものだけ。

要するに、犠牲者となった者も含め、生徒役の身元を割り出すのはほぼ絶望的であった。

53回目の、たった一人の生徒役を除いて。

その少女は、ネット上で密かにブームになっていたダンガンロンパのあまりにもリア

ルな殺人劇が本当にフィクションなのかと疑問を抱き、個人的に探りを入れていたという。

そして、家出少女を装い、わざと深夜に人気の無い場所をふらつき、自らスタッフに誘拐されるように仕向けた。こうして生徒役として出演し、スタッフが思い描いた脚本を悉く打ち砕き、見事に生徒全員を生存させてみせた。

勿論、非常に危険な賭けではあった。自分が動くより、先に警察機関に相談を持ちかけるべきであった。他の生徒役と同じく、自分自身を失う可能性だって大いにあり得た。

しかし、警察は証拠が無ければ動けないことを少女は知っていた。多くの人間が堂々と殺し合いをしていることに気づけぬ警察に駆け込んだところで、何の成果も得られないだろうと。そもそも、疑問に思った理由も己の直感だけであり、少女自身にもはつきりしたことは分からなかった状況であった。単なる妄想として片付けられてしまうことは想像に難くなかった。

当初の彼女には、誰かを助けるつもりは一切無かった。言ってみれば、ただの暇潰しのつもりであった。

ダンガンロンパは本当にフィクションのドラマかもしれないし、まず自分がそのスタッフに誘拐される可能性だってゼロに近い。改造手術を受けることなんて言うまで

もない。

ところが、結果的には予想だにしないとんでもない真実がボロボロ見つかり、彼女自身も大いに驚き、戦慄した。成功したから良かったものの、それでもやるんじゃないかと後悔しかけるほどには慄いた。

そんな幸運かつ無鉄砲で大胆な少女だが、何故彼女は、これまで全世界の人間に何の違和感も抱かせなかった狡猾なダンガンロンパのスタッフの策略をくぐり抜けられたのだろうか。

その理由は彼女の特異的な才能にあった。ダンガンロンパ53回目における彼女の配役、*「超高校級のサイキッカー」*という称号が偶々真実であったからである。彼女は世にも珍しいマジモンの超能力者だった。

元から通常とは多少異なるつくりをしている彼女の脳みそは、ただの一般人をドラマの出演者へと作り変えるような記憶の改竄を受けても、それを自分自身の記憶とはとらえず、単なる知識として受け止めた。本人もそれを狙ったわけではなかったが、結果としてそうなった。実際、妙な機械を頭に被せられて別人格にされた他の生徒役を見て大いに焦ったのだから。

しかし、偽の記憶という名の脚本を頭に植え付けられたこそ、彼女もどう動けば良いのかが臆げながらもわかった。スタッフに怪しまれない理屈で脚本外の行動をし、緻密

に練り上げられた群像劇にバグを発生させ続けた。その結果、誰一人として殺しも殺されもしなかった。

こういうと、実に彼女が計画的であると思われるがちであるが、殺人のきつかけとなり得そうなものをひたすら排除してただけだと本人は語っている。ダンガンロンパの制作側も、よりファンを楽しませようと人間関係が複雑なドラマの脚本を用意したのだが、物事は複雑であればあるほど脆いもの。ほんの僅かな手違いで全ての結果が変わる可能性がある。

彼女がやったことは、例えるなら堤防に適当なアリを適当にばら撒いただけで、アリがそこに巣を作って河川を決壊させるに至ることは想像していなかった。ついでに言えば、気分的には彼女も洪水で流された側であった。

つまりは、何もかもが幸運の積み重ねであったというわけだ。

こうしてダンガンロンパという史上最悪のコンテンツは、表向きにはこの世から消え去った。しかしながら、その水面下ではまた新たな問題が勃発していた。

この事件唯一の生き残りとなった超高校級と呼ばれる優秀な才能を持った生徒役。通称「53期の17人」の処遇をどうするか、である。

当時は暫定的に彼らをダンガンロンパの劇中と同じく日本人と見なし、日本の警察庁

が彼らを保護していた。しかし、本当の身元が不明であることを理由に、各国の機関がこぞつて彼らを引き受けようと声をあげた。

それもそのはず。本来ならドラマを盛り上げるための作り物でしかなかった彼らの才能は、殺し合いを促されるといふ非常に過酷な状況におかれて磨かれた結果、本物の「超高校級」と言つても差し支えないレベルにまで昇華されていたのである。

フィクションを超え、ダンガンロンパという名の拉致監禁事件の真相を現実世界へ暴きだした「超高校級の探偵」が良い例だろう。

そんな人並み外れた才能を持つ彼らを引き込もうとする機関が後を絶たなかつたのは当然とも言えた。日本の警察庁はそれら全ての要求を突っぱね続けた。

保護を申し出た外部の機関も、当時表立って彼らを保護をしていた日本の警察庁も、どちらも生徒役となつた彼らを守るためだと建前を謳つていた。だが、その本音は言わずもがなであろう。

保護されるのは才能が目当てであることは明白。しかしその才能は彼らが自ら望んだものではない。自分達の才能を取り合う世間の風潮を何より厭うたのは、他でもない彼ら、元生徒役自身であつた。

だから、保護されていたはずの17人の元生徒役が一夜にして行方をくらませたのも当たり前の流れであつた。

彼らの才能をフル活用すれば、インターネット上から個人の記録媒体、果ては各国のデータベースに至るまで、この世全てにおけるダンガンロンパに関するデータを全て完全に抹消し、後を追わせないようにするのは容易かつたであろう。

こうして、事件の生き残りである彼らが行方をくらましたことで、ダンガンロンパは真の意味で終結したのであった。

主人公設定

【名前】

不知火 霊

(シラヌイ クシビ)

【性別】

女性

【プロフィール】

一人称：私

口癖：○○じゃね？

身長：158cm

体重：???

胸囲：???

血液型：AB型？

誕生日：不明

好きなもの：食べ物

嫌いなもの：日光

出身校：なし

特記：超高校級のサイキッカー

【主人公イメージ】

八紘さんにいただいたイラストです。筆者は語彙力を失いました。

リアルver.

デフォルトver.

2. 「当事者の過去と現在語り」

猛烈な痛みで目が覚めた。

確か……黒幕の正体を探るうちに、タイムリミットまで残り一時間を切って、図書館の中を調べていて……そしたら、何となく本棚の違和感が気になって……。

あ、思い出した。

え？ あ、ちよ……うわあああ。

じゃあ、今の私が突っ伏しているこのネチヨネチヨした生臭い液体って、自分の……あばばばばばb b b

落ち着け落ち着け！

大丈夫、まだセーフだセーフ！

まさか自分が最初の被害者になるなんて全く予想していなかったが結果オーライ！むしろ私で良かった、あつぶねえ。

私が殺されて、周りに誰もいないということは……いつもの流れであれば、捜査パー

トが終わって、今は学級裁判の真つ最中だろうか。

死体として処分される前に目が覚めて良かった。そうなっていたら本当に詰んでいた。

おしおきが適用されるクロは殺人事件のクロだから、私が目覚めて未遂事件になった今、そのルールは成立しないはず。

よし、そうと分かれば早く行かなくては。

クロが処刑されて、私だけ生き残るなんてシャレにならない。

……あ、やばい。考え事してたらまた出血激しくなってきた。

* * *

* * *

* * *

正直なところ、あんな世界を巻き込む規模の大事になるとは微塵も思っていなかった。せいぜい悪質な動画撮りのグループが逮捕されるぐらいの気持ちでいた。

あの事件からもう五年が経つのか。時が経つのも早いものだ。

発明家の同級生と共に全力で奔走しまくり、配信された私達の映像をダウンロード・

コピー・再アップ先まで執念深く追い、片っ端から丹念に消した甲斐あって、ダンガンロンパのことを正確に覚えている人間もかなり少なくなってきた。

今ではせいぜい個人の記憶を頼りにしただけの覚え書き程度しか記録は無いだろう。あの一夜の削除活動はおそらく一生忘れられない。才因学園における全活動量よりも働いた。

あの事件が人々の記憶の中だけで残り、全てが落ち着いた今になって考えてみれば、記憶を操作するトンデモ技術だの、豪快な仕掛けだらけの学園だのと、私達が相手取ったのはただの悪ふざけレベルじゃ済まない集団だったのだと実感する。あの世間の大騒ぎっぷりも納得だ。

流石に全世界からの批判や摘発には耐えきれず、アツサリ潰れて解体された組織であつたが、その呆気なさに私達は清々しきよりも苦々しきを感じた。やろうと思えばこんな簡単に処理できたのに、何故あれだけの犠牲が出るまで放置されたんだろう。今更どうしようもないのだけど……。

まあ、それはさておき。

「なんだこの町、なんなんだこの町」

さつきからそんな言葉しか出てこない。

今私が直面しているこの問題。私が下見をしに来たこの米花町という町は、相変わら

ずおかしな町だった。主に犯罪件数的な意味で。

確かに五年前から頻繁にニュースで見かける地名だけどさあ！

到着早々、朝っぱらから遭遇したひったくりの足を引っ掛けて転ばせた。

朝食を買いに入ったコンビニで、剥き身の包丁を持って金を出せと店員を脅す覆面野郎をリーチで勝るトイレのデツキブラシで背後からぶちのめした。

そして今。現場は食べ損ねた朝食を兼ねたブランチをとろうと入ったファミレス。ドリンクバーだけで粘っていたガラが悪い客がトイレへ席を立ったとき、まだ中身が残っているコップをさげるフリをしながら、客がさっきまで口をつけていたコップのフチを怪しい液体を染み込ませた布巾で拭うという、明らかにヤバそうな挙動の店員のお姉さんを目撃してしまった。

「本当になんなんだこの街」

私がそつと110番した後は、勝手に周りが動いて解決してくれた。警察による軽い実況見分が行われただけで、それ以上の大ごとになることはなかった。

ヤバそうなお姉さんに乗せた車が回転灯を赤く光らせサイレンを甲高く鳴らしながら去っていくのを見届けた後、ようやく私は食事を注文するまでに漕ぎ着けた。この時間では最早ブランチどころか遅めのランチだ。こうなったら意地でもこの店で食べてやる。

お姉さんが連行される前に語った犯行の動機も方法もヤバかった。自分をこつ酷く振った元彼に、同じ店で働く友人経由でドリンクバーのサービス券を事前に与えておいて……何それ綿密過ぎて怖い。そもそも何で一般人が毒物なんか持っているんだろう……こわ……。

『……、物凄く犯罪率が高いらしいんだけど、軽く下見しといてくれる？』

ふと、彼に言われた言葉が脳裏に蘇る。

犯罪率が高いってレベルじゃないよ。犯罪しか起こってないレベルだよ。日常的に犯罪に遭遇するレベルだよ。才囚学園の方が圧倒的に治安が良いレベルだよ。モノクマも真顔になるレベルだよ。この分じゃ恐らく夕食も危ぶまれる（フラグ）。

「ねえねえ。どうしてお姉さんは、あの人がやろうとしていたことに気づけたの？」

注文した品を待っている間、荒んだ目でメニューのデザートを眺め、お冷の氷をガリガリと噛み砕いていた私に話しかけてきた猛者がいた。

幼げな声にそちらを見れば、まだ小学生の低学年だろうか。大きな眼鏡をかけ、青いタキシードに短パンと蝶ネクタイという、その年齢にしてはやけにかしこまった格好の少年がこちらを見上げていた。

突然のことに何を言われたのか咄嗟に理解できず、しばらく氷ガリガリを続けながらその子をボンヤリと見返していたら、焦ったようにもう一度繰り返して訊ねてきた。

「だ、だから、どうしてお姉さんは、あの人が殺人をしようとしたのかが分かったのかなあつて。ボク、気になっちゃつて！」

小学校低学年の口から出てくる殺人という物騒な単語に地味にショックを受ける。コロシアイダメ。ゼツタイ。

「どうして……つて……特に、何も……」

「えっ」

「ぼーつと見ていた先で、偶々そういうことをしていた人が見えたと言うか……見えちゃつたと言うか……」

強いて言うならただの勘。元から人の悪意にはそれなりに敏かったが、あのコロシアイ（※殺してない）生活を経て、ますますそういうききな臭い匂いを無意識のうちに何となく察知できるようになった。私としてはあんまり嬉しくない。危機回避には有難いのだが。

……チームダンガンロンパの解体後に見つかった本来の脚本で判明したことだが、私にはただでさえ胡散臭い“超高校級のサイキッカー”という称号のみならず、“超高校級の悪意”という隠し設定が存在しており、ストーリー上のミスリード役にされていたことをふと思い出した。

ドラマを盛り上げるその要素は鑑賞するだけの立場であれば面白いが、実際にその立

場にされると全く面白くない。

閑話休題。

私のボンヤリした答えに納得していなさそうな少年が、保護者と思しきおじさまにゲンコツを食らつて自分の席に戻されるのを見送ると、それと入れ違いになるように注文した品が運ばれてきた。この焼き魚定食にありつけるまでに何件の犯罪に巻き込まれかけただろうか。憂鬱になる。

「もうヤダなんなのこの町」

遅めの昼食後、会計を済ませたファミレスを出てすぐの道路で、明らかにブレーキが壊れていそうなスピードが出ている自動車の進行方向上にいた小さな女の子を発見した。即座にその子に飛びかかって抱き抱え、暴走車のフロントバンパースレスレでローリングを決めた着地後、そう呟いた。

ちなみにこの日の夕食に該当する食べ物、今朝のひったくりから荷物を取り返した兄ちゃんからお礼として貰った菓子パンだった。情けは人の為ならずだね!!!

3. 「当事者M. H. が語るその同級生の話」

昨日はとても大変だったけど、——さんが運良く命を繋ぎとめられて、本当に良かった。

モノクマも変なところで律儀な奴だよ。死ぬならコロシアイで死んでくれだなんて。まさかあいつが瀕死の——さんを治療するとは思わなかったよ。

あ、いや！

決してそれが悪いってわけじゃなくってさ！

——さんとは、あんまり話したことが無かったけど、意外と気さくな人なんだな。彼女を殺してしまった——さんとも、無事に和解できたらしい。

……………。

僕は、これからどうすべきなんだろう。

あんな如何にもな見た目だから、無意識にあの人を黒幕扱いしてしまっていたのは認められる。

だけど、——さんが殺害された直後に現れたモノクマは、彼女が黒幕であることを笑って否定した。彼女が殺されても、変わらずコロシアイは続行すると言っていた。少なくとも、——さんは黒幕じゃなかった。

……でも、本当にそう決めつけても良いのだろうか？

モノクマがわざわざ瀕死の——さんを生かしたのは、実は本当に彼女が黒幕だからではないのだろうか？

いやでも、それならクロの——さんの処刑を止めた意味が分からない。——さんがコロシアイを望む黒幕なら、裁判所に現れるタイミングがクロの処刑が終わってからでも良いはずだ。

………。

いや、結論を焦っちゃダメだ。判断材料が少ないし、信用できない。

僕と一緒にコロシアイを止めようとしていた——さんがクロになってしまった。

怪しい行動が多かった——さんがアツサリ殺害されてしまった。

固定概念に囚われちゃいけないんだ。

もつと、もつと視野を広く持たなくては。

……ところで、大怪我を負ったばかりの——さんは、何でスコップを持って学園中

を走り回ってるの？

**

*

『久しぶり！ 元気にしてた？ 今近くまで来てるんだけど、一緒にどこか食べに行かない？』

珍しい友人からのメールに承諾の返事を出しながら、彼女は五年前のことを思い出していた。初対面の16人と共に、あの狂気の学園に閉じ込められていたときのことを。

このメールを寄越してきた友人も、他の友人と負けず劣らず個性が強かった。いや、今も強い。

一言で言うなら不審者。真っ黒なコートを羽織って真っ黒なフードを深く深く被り、顔も鋭い眼つき以外は殆ど見えないという、見た目からして思い切り不審者だった。

見た目のみならず、口数も少なく滅多に他者と交流しないなど、態度まで立派な不審者であった。

誰も口には出さなかったが、誰もが彼女のことを黒幕かそれに連なる者だと意識して

避けていたため、コロシアイ生活開始直後からすぐに孤立していた。

だからこそ、彼女が最初で最後となる事件で真つ先に殺されていたときには、全員が度肝を抜かれた。

事件のクロが判明した後、それは黒幕を殺すために起こされた殺人事件であったことが明かされたのだが、残念ながら殺された彼女は黒幕ではなかった。

しかし理由は何であれ、クロだと暴かれた者はルールによつて処刑されることが決まっている。

命を賭して仲間を助けようとした行為は全て無駄になったのだと、一気に絶望に突き落とされた16人を救ったのは、なんと、殺されたはずの彼女自身であった。

頭を砲丸でかち割られた数時間後、奇跡的に意識を取り戻した彼女は、クロの処刑直前に、血塗れになりながらも凄まじい執念で裁判所へたどり着いたのである。

こうして殺人事件は殺人未遂事件となり、クロは処刑を免れた。ゲームマスターのクマですら想定していなかった前代未聞の事態であった。

その事件以降、彼女の行動はそれまでの物静かな態度が嘘だったかのように様変わりした。頭を打って人格が変わったのではと揶揄されるほどに。

実際にコロシアイに巻き込まれた立場になったからか、コロシアイの発生を何よりも敵視するようになった彼女は、学園中を駆け回り、凶器となり得そうなものを片っ端か

ら集めては庭に埋めるといふ作業に、昼夜を問わずひたすら没頭した。

確かに道具が無ければ周囲にバレないようにする殺人の難易度はぐんと高くなる。原始的なやり方ではあったが、ロシアイはダメだという綺麗事だけで牽制し合うより、遙かに効果的であったのは間違いない。何より、ロシアイを露骨に敵視する不審者が学園中を延々とランダムに徘徊している状況も強い抑制力になった。

ちなみに彼女の凶器処分運動は、デスゲームの管理者であるクマ達によつて掘り返されたり、新たに補充されたりと、実質的に道具の数を減らすことはできず、凶器を無くすという意味ではどこまでも不毛な作業ではあった。

しかし、解放済みの全エリアのアイテムのリカバリーという想定外の重労働が課された管理者側は忙殺され、生徒達が不安や殺意を煽られる機会は激減した。

そのうち一部の生徒が生徒会を結成し、他生徒の夜時間の行動を制限するようになったときでも、生徒会メンバーでもない彼女は相変わらず昼夜お構い無しに学園を徘徊し続けた。それどころか、日中より夜の方が得意らしい彼女はテンションが低い昼間とは打って変わり、生徒会に喧嘩を売る勢いで元気良く夜時間に出歩いた。

その頃から、彼女の生活リズムは、他の生徒が起床する頃に就寝し、夕方になって起床するという、典型的な昼夜逆転生活になっていた。

態度も行動もロシアイ根絶を体現する彼女が一人いるだけで、他の生徒達の意識も

自然と根本から変わっていった。ロシアイをしてはいけない、のではなく、ロシアイの可能性は問答無用で排除しよう、と。

彼女が夜の見回りをするなら自分もしようという生徒も増え、最終的には自室にいる者の他は24時間ずっと誰かが誰かを見ている状況になった。誰にもバレないように誰かを殺すというデスゲームの絶対条件は、こうしてほぼ不可能となった。

……その後、いつまでたってもロシアイが起きないことに痺れをきらした黒幕から、学園や自分達の記憶の正体やら、色々とえげつない話を聞かされることになるのだが、ロシアイのプレッシャーから解放されて余裕ができた各々も、与えられた才能を互いにフル活用し合い、既にそれらの真相を解き明かしておきながら騙されている演技をし続けていたという衝撃の展開で、デスゲームの主催者達をぐうの音も出ないほどにやり込み返した。

閑話休題。

話はそんなことがあった五年後の現在に戻る。

メールのやり取りで決めた待ち合わせ場所ですれ違った元同級生の友人。相変わらず全身真っ黒な不審者丸出しスタイルであることに彼女は思わず苦笑を漏らした。

その十数メートル後ろには、己が仕事で相手をする年齢層よりもほんの数年しか違わないであろう年格好の少年少女達がこそそと尾行していた。気づけよ。

かつての「超高校級の保育士」である彼女は、声をひそめて友人に訊ねた。

「……あんだ、何かやらかしたの」

「開口一番で言うことがそれ？」

部分的にはこの上なく鋭いくせに、妙なところで鈍いこの友人に下手な暗喩は通じないと感じている彼女は、感じたことをそのまま訊ねたが、案の定元同級生は何も知らない様子であった。おい気付けよ。

「むしろ自分の方がやらかされる立場だよ。ここに來てから一体いくつの犯罪現場に出くわしたと思ってるんだ……」

直後、ゲンナリした口調で付け足された言葉に彼女は全てを察した。

この町の異様な犯罪発生率の高さ。それにも関わらず、約束の時間通りに現れた元同級生。

つまりその言葉は、この元同級生が数多くの犯罪に巻き込まれかけながらも、その全てを回避してきたことを示す証拠である他ならない。

ちなみに警察の事情聴取はこの米花町に限っては遅刻の理由として十分通用する。世も末。

この街において多発する犯罪を未然に防ぐには、相当な運の良さ、体力、技術を要する。それらを高水準で併せ持つ元同級生が変に注目されるのにも納得できる。不審者

にしか見えないのなら尚更だった。

「あのね……今更だけど、あんまり目立つ真似はしない方がいいよ」

「そんなつもりは全くありませんが」

「まあ、うん、だろうね」

別に正義を掲げているわけではないが、そこは腐っても『コロシアイダメ。ゼツタイ。』を信念とする才囚学園卒業生。元同級生も彼女自身も、自分がうっかり殺意を抱かないようにするのは勿論、他人の犯罪も見かけ次第防ごうと心掛けている。かつてコロシアイを防ぐために片っ端から凶器を処分した元同級生であれば、殊更当然のことであつた。

「それよりさ、ここに来るまでに美味しそうなラーメン屋を見かけたんだ。一緒に行かない?」

「あんた……こんな時間に女二人で行く店が、よりもよってラーメン屋って……」

「だ、ダメだった? ごめん、なんかさういう、気の利いたこと考えるの苦手だよ」

「いや、あんたらしいと思うよ。その微妙な空気の読めなさ加減とか」

「空気は読むより吸うべきだと思うんだ」

「それも間違っちゃいけないけど」

……彼女は知っている。

ダンガンロンパの実態が世に広く知れた後、周りはこの元同級生の行動を思慮深く計算高いものと絶賛したが、本当は全くそんなものではないのだと。

ただ、ほん少しだけ、空気を読む力に乏しかっただけなのだ。

だから余計な不安に駆られることなく、殺人をさせないために凶器を減らすと言う、動機も結論も単純明快極まる行動を貫けた。ただそれだけなのだ。

しかし、それが周囲にもたらした影響は、決して馬鹿にできないものであった。

だからこそ凄いのだと、手元のスマートフォンで近場で食べられる店を必死に検索している元同級生を見て、彼女はしみじみそう感じた。

ボク達、良いお店を知ってますよ！

元同級生を尾行していた猛者達が乱入するまで後数秒。

4. 「その事件への見解：捜査関係者サイド」

気の毒な——ちゃんが真つ先に殺されちゃった日から早二日。

ゾンビか何かのようにしぶとく復活した彼女は、それ以来何かに取り憑かれたかのよう
に学園中を延々と徘徊している。学園中の凶器になりそうなものを集めては庭に埋
めてるらしい。

まあ、その都度モノクマ達に補充されてるから意味無いんだけどね！

無駄な作業お疲れさん！

それはさておいて、問題は今朝配られたばかりの新しい動機だ。

何だよあのビデオ。モノクマの奴、どこまでオレ達のことを調べてんの？ 全然笑え
ないよ。

まーでも、ここは悪の総統として、皆の弱みを握れる良い機会だよね！

誰がどんな動機で動くのか、高みの見物といこうじゃないか！

よーし！ そうと決まれば、早速ゴン太を使って皆のビデオを集めるぞ！

……あ、——ちゃん、良いところに！　ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけどさー！

**

*

昼をとうに過ぎ、赤みがさした斜陽が差し込んでくるようになったその時間帯。

客が入店した気配を感じて反射的に挨拶したその男は、先陣を切って賑やかに入ってきたお馴染みの四人の子供達の姿を視認し、さらにその後ろから入ってきた見知らぬ二人の客を見て、合計六人が入店したことを頭に入れ、さっそく席に案内しようとカウナーを出かけたところで、はたと動きを止めた。

純粹無垢な少年少女三人と、小学生のふりをした探偵までは良い。問題は彼らが連れてきた新しい客二人。

そのうち一人は、かの組織でもここまで露骨に徹底しないだろうと言うほど全身真っ黒で、その無駄に黒いコートの上からでは年齢も性別も分からない不審な人物。

そしてもう一人、白いカーデイガンの下に赤を基調としたシンプルなワンピースを着

た、どこか刃物のように冷たく鋭い雰囲気を纏った女性。

その妙な二人組の姿に、男は忘れかけていた記憶がじくじくと刺激されるような感覚に襲われた。

「いらつしやいませ、二名様でよろしいですか？」

「よろしいですよー」

あり得るはずが無い既視感による動揺を抑え、いつも通りに男の口から滑り出した業務的な接客文句にややテンション高めな声で律儀に答えたのは、意外にも真つ黒な客の方であった。その声色からして女性であることが窺えた。

いや、そんなまさか。

緊張を隠しながら彼女達をテーブル席に案内すると、黒い客の方は席に着くなりソワソワした雰囲気を隠さず、あたりをキョロキョロと見回した。

「すごいや、こんなお洒落なお店に入るの、初めてだよ」

「そ、そうなの？ お姉さんに喜んでもらえてボクも嬉しいなー」

感嘆の声を上げる黒い客に、その意外なまでの素直さに思わず声を揺らした外見小学生。

その一方で、外見も中身も小学生である少年少女達は、ひそめた声でやや興奮気味に話をしていった。すごく怪しい、きつと悪い人なんだ、絶対に証拠を掴んでやるぞ、この

街はボク達を守るんだ、等々。

尚、赤いワンピースの女性から向けられる生温かい視線には気付いていない模様。

「ご注文が決まりましたら、お呼びくださいね」

「はい」

「……」

とりあえず彼女達が座るテーブルに近づき、お冷を出しながらそう言えば、怪し過ぎる黒コートの客からは非常に愛想の良い返事が、目も合わせてくれない赤ワンピースの客からは軽い会釈のみが返ってきた。見た目と態度のイメージが真逆である。

鉄壁のポーカーフェイスの下、猛スピードで脳内のデータベースに検索をかける男は、徐々に導き出されている疑惑の真偽を確かめるべく、内心戦々恐々としつつも彼女達に声をかけた。

「あ、僕個人としては、ハムサンドとコーヒーのセットをおススメしますよ」

「……………じゃあそれで」

「それなら私はバナライイスとココアをお願いします」

「はい、かしこまりました」

メニューに目を通すこと自体が億劫そうだった赤いワンピースの女性客は渡りに船と言わんばかりの適当な返事をし、もう片方の真つ黒な女性客は男の意見を聞いた上で

平然と己のペースを貫いた。この店に来る女性客としては、どちらもまず遭遇しないパートナーの反応である。口元が引きつりそうになる男の中で、疑惑が確信寄りに傾いた。

オーダーをとって戻ろうとする彼に向けて、中身は高校生である小学生の少年が、小さくジェスチャーのサインを送ってきた。女性客には見えない位置から彼女達を小さく指差し、両手の人差し指を交差させてバツ印を作り、首を僅かに傾げてきた少年。それに対し、アルバイトの男は乾いた笑みで首を軽く縦に振った。少年の方もですよねーと言いたげな乾いた笑みを送り返し、無言のまま三秒にも満たぬ確認作業は終了する。やはり自分の気にし過ぎであったと少年が脱力する一方、アルバイトの男の方はすっかり体が強張っていた。

あの日、多くの監視の目がある中。誰にも悟られることなく、忽然と世間から姿を消した彼女達が。 よりにもよって、何故このタイミングで。

「そう言えばハルちゃん、評判の良い保育さんなんだってね」

「……別に、そんなんじゃないわよ。ただ自分の仕事を全うしてるだけだし」

「いやいや。ハルマキ先生のいる保育園はこの辺で一番人気があるって聞いたよ」

厨房へ戻る途中、そんな会話が聞こえてきた男は危うく力が抜けそうになった足を気合いで踏ん張らせた。

あの“53期の17人”のうちの一人がまさかのご近所勤め。とつくに海外へ飛ん

でいるかと思つて日本中のあらゆる空港を洗いに洗いまくつたのに？

灯台下暗しどころか、まず足元を見ることを忘れていた現実に男は目眩がした。あれだけ世間を騒がせた末に雲隠れした彼らが、地元で普通に戸籍を取得してカタギの職に就いてるだなんて誰が予想できるかよ！

「そつ……それはともかく、あんたの方はどうなの。急に会いたいだなんて、何かあつたわけ？」

「あつたと言うよりこれからする感じ？ もしもの時にはハルちゃんにも協力してほしいって、オウマくんが」

「あ、大体わかつた。断る」

「だよね知つてた」

国家機密に相当する存在が、正真正銘の一般人である小学生達が聞き耳を立てる前で国家機密レベルの世間話をしているという、色んな意味で酷い状況に頭痛を感じつつ、男は厨房に入つて作業を始めた。

最早疑いようがない。あの女性客達は、犯罪史上最悪の拉致監禁・殺人事件と悪名高いダンガンロンパ事件における生存者、通称「53期の17人」のうちの二人だ。

彼女達17人は紛れも無く被害者であり、決して犯罪者などではない。凄惨なデスゲームを演じるための記憶で、それまで平穩に生きてきた人生の記憶を上書きされると

いう、この上なく非人道的な扱いを受けた被害者なのだ。だからこそ国を挙げて彼らを保護していた。だと言うのに。……だと、言うのに。

悲しいことに、心無い人間はどこにでもいるもので。

彼らにデスゲームの設定として付加された素晴らしい才能。世間は被害者本人ではなく、その才能にしか注目していなかった。何やかんやとそれらしい口実を作つては自分のところに引き取りたいとほざく才能目当ての連中は後を絶たなかった。国外国内問わず、企業や公的機関、宗教団体、その他諸々。

彼らがそんな世の中に絶望して姿をくramsすのも仕方ないといふ言えなかった。

たった一夜にして、彼らにあてがった察はもぬけの殻となり、同時に彼らに関するあらゆる電子データが全世界から消去されたことを知って、どれだけ自分の無力さを恨んだだろう。彼らにここまでの強硬手段に踏み切らせるまで追い詰めた身勝手な世の中も、そいつらから彼らを守れなかった自分も、何もかもがやるせなかった。

世間は彼らの失踪とデータの消去を許した日本の警察の失態を散々批判したが、事件被害者への同情に飽きたマスコミが、新たなセンサーショナルな話題として彼らを貴重品扱いしていた各団体への批判を始め、それを皮切りに数ヶ月に及ぶ世界規模での批判のぶつけ合いが始まった。

あれほどまでに人間の醜さを見せつけられた時期はないと、厨房で作業を続ける男は

当時を思い出して苦々しく笑った。

しかしやがて、ほとぼりが冷めた世間は自然と彼らや事件のことを忘れ始めた。画像や映像のデータが一切合財消され、具体的なイメージがしにくかったことも理由として大きかっただろう。

五年が経った今、ダンガンロンパと聞いて、明確に関係者の姿形を思い出せる人間はもう殆ど残っていない。それこそ自分のようにトラウマに近い思いをしたわけでもなければ、簡単に忘れられる。

「おまたせしました。ハムサンドとホットコーヒーのセットと……バニラアイスとココアです」

「ありがとうございますー！」

注文された品を持っていけば、まるで子供のようにはしゃぐ真つ黒コートの客に対し、赤いワンピースの客の方は相変わらずクールであった。身長差もあってまるで姉妹のようである。

男と彼女達は直接顔を合わせたことはない。事件が発覚した五年前、男は別件に手を取られており、最後まで面会が叶わなかった。今はもう失われた画面上の記録を通して、男の方が一方的に彼女達のことを知っていただけに過ぎない。

しかし、何度も何度も見返した映像の記憶は、未だ彼の頭から消えずに残っている。

「ごちそうさまでした!」

「またお越しく下さいね」

結局、思う存分談笑して満足した二人を店の外まで見送った男は、そこで初めて部下に連絡を入れた。まるで落とした鍵を見つけた的な気軽さで報告された。53期の17人“発見の知らせに、彼が本来所属している場所は上を下への大騒ぎとなるのだが、それはまた別の話である。

何はともあれ、彼女達が元気にしていることや、真つ当な社会人として暮らしていることに安堵する。

善良な国民である彼女達を、今度こそ世の悪意から守りきってみせる。

そう決意を新たにしたら彼は後日、世界各地で発生するようになったアホみたいな事件の存在を知り、膝から崩れ落ちることになる。

大事な青春を重大な犯罪で失った彼らは今、五年の時を超え、世の中に対してド派手で盛大な反抗期を迎えていたのだった。

5. 「水面下で始まる攻防戦（※一方的）」

総統「サイキツカーと昆虫博士使って全員強制参加のビデオ上映会実現しました！」

メイド「重傷人のサイキツカーに頼まれたら了承せざるを得ない件」

テニス選手「上に同じく」

保育士「才能バレしたので引きこもります」

宇宙飛行士「オレは保育士を信じる！」

黒幕「計画をめちやくちやにされた腹いせにサイキツカーのビデオ隠しておきました」

総統「一人分のビデオ無いから探しに行つて」

サイキツカー「うつつ」

黒幕「このタイミングで発見させます」

探偵その他「サイキツカーが実は殺人が大好きな悪意つてマ？」

サイキツカー「ビデオが見つからないので穴掘りなう」

**

*

彼らは激怒した。必ず、かの厚顔無恥な連中を除かなければならぬと決意した。

彼らには世の情勢がわからぬ。彼らは、デスゲームの被害者である。嘘をつき、フラグを折って生き延びた。

そして盗聴・盗撮に対しては、人一倍に敏感であった。

「外の世界には虫さんがたくさんいて楽しいね！」

そのきっかけは、昆虫学者が放ったそんな何気ない一言であった。

“超高校級の昆虫学者”の称号を持つ彼は、ダンガンロンパの生き残りである彼らの中で最も筋骨隆々とした体格の良い男子でありながら、その精神年齢はわずか五歳前後という激しいギャップを持つ設定キャストの記憶を持っていた。

それ故、基本的に裏表のない無邪気な発言が多いのだが、かつては黒幕役を除く全員で結託し、無知な被害者を演じたメンバーの一人でもある。設定に囚われたフィクションの域を出た彼がどんな意図でその発言をしたのか。そもそも意図があったのかすら

判別がつかない。

しかし少なくとも虫さんというワードは、日本の公的機関に嚴重に保護された寮生活で平和ボケしつつあった同級生達を、ただの被害者から“超高校級”へと覚醒させる威力はあった。

閑話休題。

話はそんな出来事があつた五年後の現代に戻る。

彼女は自分のコートの裾にくつつけられた物体にすぐさま気付いた。それをやらかしたクロの特定も、それをやらかされた瞬間には済んでいた。

だからこそ頭が痛かつた。まさかあんな小さな子供がやるなんて。最近の小学生怖くね？ スパイごっこに本気出し過ぎだろ。

自分を見かけるたびに不審者扱いして絡んでくる幼い自称探偵団……の一步後ろで、いつも成り行きを見守っているだけの大人びた少年。今日は珍しく彼も他の子に混じってじゃれついてきたと思つたらコレである。溜息しか出ない。聞かれているだろうから出さないが。

不審者VS探偵ごっこにしばらく興じ、十分満足した彼らに気を付けて帰ろよと一言添えて別れた後、どうしたものかと頭を悩ませる。

彼女を含めた例の17人全員、盗聴や盗撮の類に関することは不本意ながらもすつか

り得意になってしまった。最早専用の第六感的なものを得たと言っても過言ではない。

このまま気付かぬフリをすることは容易い。何せかつては世界中の人間の目を欺いたこともあるのだ。何なら適当なデマで盗聴器の向こう側にいる相手を自在に踊らせることだってできる。だが、小学生相手にデマを掴ませたところで一体何になるのだ。人気ゲームのガセ裏技でも言えば良いのか。アホかな。

憂鬱な気分で歩きながら、彼女は最近再会して女子会(○)をした相手から、その日の夜に送られたメールのことを思い出す。

今はもう既に消去済みの本文が無いそのメールの添付ファイルは、中身が整然としたハンドバッグの底の張り付いた薄いメモリーカードのような物体の写真であった。もうやだこんなプライバシーもへったくれも無い社会。

しかし、彼女としては怒りや恐怖よりも困惑する気持ちが強かった。一度社会から姿を消してから今までの間、そういうアプローチは全く無かったのに、それがどうして今になって？

何かドジを踏んでしまったのかと首を傾げる彼女は、既にその道のプロに二人も顔を合わせてしまっていることに気付いていない。

メールを削除した後、急遽会いに行った他の元同級生の全員が全員、似たような気配を察知していた。どうやらあの事件の関係者が揃いも揃って一斉に誰かに目をつけら

れているらしい。何で今更？

となれば、我々がとる方法は一つ。

この数十分後、彼女は当初の外出の予定通りに昼食を買いに行ったスーパーにて、別の客の財布をすろろうとした不届き者の頬を軽快に張つ倒すことになる。

自称私立探偵の男と自称高校生探偵の少年は、二人してこの状況に困惑していた。

「さあこちらへどうぞ！ 私の奢りですから、遠慮しないでくださいね！」

「は、はえいつ」

喫茶店ポアロへは二度目の入店となるその真つ黒い人物は、その従業員である榎本梓に引つ張られるようにやってきた。彼女は梓の勢いに乗せられるように席につき、メニューを持たされる。

さつきまで密かにイヤホンで盗み聞きしていた会話の続きが電子音ではなく肉声で聞こえる状況に、二人の探偵は言いようのない居心地の悪さに襲われて天を仰ぎたくなつた。

どうしてこうなつたって……いや、経緯なら自分が説明できるんだけど。

ちやうど勤務時間直前だったのか、カウンターを通つて裏の休憩室へ行くこうとする梓に、友人と共にここへ訪れていた小学生探偵の幼馴染が声をかける。

「梓さんの友達ですか？」

「いえ、行きつけのスーパーでトラブルに巻き込まれたところを助けてくれたんです。怪我までして私を庇ってくれたので、お礼をさせてほしいと無理を言つて来てもらつて……」

知つてる。梓さんのバッグから財布を抜き取つた挙句に、犯行を指摘されたら逆上してナイフを出した野郎を退治してくれたんでしょ。

「ええつ、トラブルつて……怪我は大丈夫なんですか!？」

「ひいえ」

わざとらしく声をあげて近寄る私立探偵に、体をのけぞらせて変な声を出す真つ黒な客。苦手な真昼間の完全アウエーな環境におかれ、普段より遥かに気が小さい。その黒いコートの裾から出ている右手には、確かに薄つすらと血の滲んだ包帯が巻かれていた。

自分が動かずとも、謎多き彼女に興味が湧いた少年によつて何らかのメカをつけられるだろうと踏んだ上で、まんまとその通信を横から傍受していた私立探偵。そんな狡猾な男だが、流血沙汰に巻き込まれた彼女を心配する心は本物であった。

「触んな馬鹿」

「ばか」

だから、怪我をした彼女の右手を労ろうとして伸ばした自分の手を、簡潔な罵倒と共に強く叩き弾かれたショックは地味に大きかった。ばかって言われた。

前回の来店時とは真逆の警戒心マックスな態度にシヨンポリと肩を落としてカウンターに戻っていく男と入れ違いになるように、制服に着替えた梓がオーダーを取りに行く。真つ黒な客は、今回はりんごジュースとショートケーキを頼んだ。相変わらずハムサンドには目もくれない。出番が無くてますます落ち込む男。

アウエー感からくる居たたまれなさから現実逃避する黒い客がボンヤリと所在なげに天井を見上げる一方で、女子高生達と女性店員の話は盛り上がっていた。

「そこでね、あの人が泥棒を思いつきりビンタして、一発KO」

「えっ、ビンタで?」

「ビンタで」

そっかあ、あの強烈な破裂音は平手打ちだったのかあ。割とどうでも良いことに納得する私立探偵も若干現実逃避気味である。今の彼に一番必要なのは適度な休息で間違いない。

「へえ凄いなあ! えつと……お姉さんでいいの?」

「げふん」

その話に感嘆した女子高校生のうち、ある意味恐れ知らずでボーイツシユな女子高生探偵が黒い客に話しかける。突然のキラークラスに動揺した黒い客は妙な咳を出す、辛うじて領り返すことはできた。

「と言うかき、ずっと気になってたんだけど、雨が降ってるわけでもないのにどうして屋内でもフードを被ってるの？」

やめて差し上げろ。

梓に善意で引つ張られている時から既に居たたまれなさそうだった黒い客の心情を盗聴器越しに聞いていた探偵達の心の声が被る。

それ以上その人に構わないであげたげて。確かにそれは自分達も気になっていたが、どうしてよりによってこのタイミングで聞いちやうんだ。

「あれ？ スーパーでは外してしまいましたよね？ まさか、顔にも怪我が……!？」

「えー？ なーんか怪しい」

「外しちゃいなって！」

「えうあ」

数多くの盗聴行為をこなしてきた二人の探偵だが、こんな形でメンタルにクるのは初めての経験であった。彼らにも人の心はあるのだ。恐るべし女子高生テンション。

しかし、そこで奮い立ったのは黒い客。このカオスな状況を打破せんと、自分を心配したり怪しんだり探ろうとしてくる女性達に向かつて、怪我をしていない方の左手をスツと差し出した。

え、何？ と彼女達が不思議がる目の前で、その手がみるみるうちに赤く染まっ

く。
「……極度の紫外線アレルギー持ちなの」

あ、これ触れちゃアカンやつ。

日常的に人が死ぬ事件事故に巻き込まれては遠慮無くその謎を解いている彼らだが、病気や障害のような、現在進行形で本人を苛むデリケートな問題に迂闊に踏み込むほど凶太くはなかった。彼らが推理する以前に本人が一番よく知っているからだ。死んだからが探偵の定番であるとか口が裂けても言っではいけない。

あまりの気まずさにシンと静まり返る店内。何故かこのタイミングで流れるピアノアレンジの天国と地獄が、視線の水泳大会を演出しているようで妙に憎らしかった。

「……日焼け止め程度じゃどうにもならないから、服で防御した結果がこれなんだ。建物の中や日が落ちてからなら脱げるんだけど」

「（ト）めんなさい」

「あ、いや、えつとね、こういう窓のあるところで脱ぐとね、日が差す方向が丸わかりで

面白アツツツツツツ」

「お願いもう止めてえ！」

沈んだ空気を浮上させようと、捨て身の自虐ならぬ自爆ネタをかましてアツサリとフードを外した黒い客に、ついに耐えきれなくなった少年が悲鳴をあげて縋り付いた。数秒日光に晒されただけの彼女の顔が爛れそうになった光景に周りはドン引きである。私立探偵の男はステロイド軟膏の購入を決意した。

しかし、こうして大惨事になってしまったが、やはり女という生き物は強い。

オーダーで運ばれてきたジュースとケーキで何とか話題を変え、フォローを入れたつ、会話を盛り上げながら、最終的にはまたこの店で会う約束まで取り付けてしまった。強いなさすが女子高生強い。

そして、黒い客が去った後になって盗聴器を外すタイミングを逃したことに気付いた探偵達は軽く絶望した。

6. 「既に始まっていた攻防戦」

生徒会長 「夜時間の出歩き禁止します」

探偵その他 「悪意の様子見なう」

生徒会 「悪意と暗殺者を警戒なう」

悪意 「ヒヤッハー！ 危険物は消毒だく!!」

熊 「悪意マジ悪意」

探偵 「問題無いかもしれない」

黒幕 「自分が中途半端にぶん殴ったせいで悪意がバグった件」
チームD 「何してくれてんの」

* * *

特別住民票というものを、ご存知だろうか。大幅に説明を省いて簡潔に言い表すと、実在する住民ではない動物や架空のキャラクターなどに与えられる住民票のことだ。要はフィクション的な存在に現実味を与え、親近感を抱かせるような制度である。

ダンガンロンパ事件の後、本物の人間ではないが人間に近い豊かな感情や思考のプログラムを持つ「超高校級のロボット」もそれに似た特例制度を適用され、戸籍まで得たらしい。現在は元「超高校級の発明家」と共に暮らしているそうだ。

「……未だに幽霊状態なのは、あの子だけか」

日本中を奔走させた部下からの報告に目を通した俺はそう呟いた。

五年もの間行方不明になっていた、例の事件の生き残り達。ある日忽然と姿を消し、あらゆる手段を用いても見つからなかった彼らが、何故最近になって表立った行動をするようになったのか。

戸籍を調べるといふ初步的なことを忘れていただけじゃないのとか言っではいけない。いやだってそのまさか劇中の役名そのまままで登録し直してるだなんて思いもしなかったんだから。

“超高校級のピアニスト”、赤松楓。

某所にてピアノ教室を個人で運営。その評判は県境を越えて轟いているのだとか。密かにCDを販売していた。最原終一と同棲中。

“超高校級の???”、天海蘭太郎。

某所に家を構えているが、常に世界中を旅して回っており、17人のうち現時点で唯一国内にいない状態にある。渡航履歴に不自然な点は見当たらなかった。

“超高校級の発明家”、入間美兔。

数年前にインターネット上で受注製造販売の会社を設立。密かに大ヒットしている目薬式コンタクトレンズの著作元は彼女であることが判明した。自分も変装でよく使うカラコンもそうだったのに何故気づかなかった……？

“超高校級の総統”、王馬小吉。

詳細不明の自営業。某所にてアパートを借りて暮らしているらしいが、ほぼ不在の状態。17人のうち最も情報が少なかった。現在要注意人物に指定中。

“超高校級のロボット”、キーボ。

オプシヨンのパーツと共に入間美兔の元で管理されている模様。入間の会社で運用……働いているようだ。

“超高校級の昆虫学者”、獄原ゴン太。

某大学で生物学を専攻している。相変わらず天真爛漫で人気を集めているらしい。

“超高校級の探偵”、最原終一。

インターネット上で興信所を開いていた。営業の届出も確認。人探しや身辺調査などを主に受け付けている。仕事が早く正確なことで評判が良いらしい。赤松楓と同棲中。

“超高校級のコスプレイヤー”、白銀つむぎ。

某アパレル会社に勤務。変態的な早着替え術は健在。何度見ても真似できる気がしない。

“超高校級の民俗学者”、真宮寺是清。

某大学で文化人類学を専攻している。マスクの下の素顔は誰も見たことが無いらしい。

“超高校級の合気道家”、茶柱転子。

某所にてスポーツジムのインストラクターとして活躍中。独特なフォームのエクササイズが人気なのだとか。夢野秘密子との交流が多い。

“超高校級のメイド”、東条斬美。

個人で家事代行サービスを運営。その評判の上がりようは留まることを知らない。

メディアへの露出は意識して避けている。

〃超高校級の保育士〃、春川魔姫。

まさかのご近所さん。勤務先もご近所さん。小さな子供達を犯罪の脅威から守ってくれるツンデレ守護神として地域から慕われる頼もしき保育士さん。

〃超高校級のテニス選手〃、星竜馬。

某大学でテニスサークルに所属。プロ顔負けの腕を持ちながらメディア露出を徹底的に避けており、卒業後は選手ではなく講師になることを希望しているようだ。多少は背は伸びたか……？

〃超高校級の宇宙飛行士〃、百田解斗。

某有名大学の工学部に所属し、本物の宇宙飛行士を目指して猛勉強中。春川魔姫との交流が多い。

〃超高校級のマジシャン〃、夢野秘密子。

某興行法人に所属。手品師……ではなく魔術師として活躍中。凄腕らしいがやはりメディア露出は避けている。

〃超高校級の美術部〃、夜長アンジー。

個人で工房を設立。小物からオブジェまで幅広く美術品を製作し、販売している。それほど有名ではないがコアなファンが大勢いるようだ。

……とまあ、現在の彼らはぎつとこんな感じである。しようと思えばいつでも簡単に連絡がつくほどクリーンな身分であった。ただし総統は除く。

住むところもやっていることも全員バラバラだが、共通していることもある。まず、与えられた才能を生かしていること。次にメディアへの露出を極力避けていること。

各々得意なことを伸ばせるように努めていたが、やはり大々的に目立つことだけは避けたようだ。あれだけの事件に巻き込まれたのだから当然だろう。

そして、唯一無戸籍のままの一人。

“超高校級のサイキッカー”、不知火霊。

……幽霊の霊と書いてクシビと読ませるらしいが、初めて知った時は色んな意味でドキリとした。

そういう設定の役とは言え、名前も戸籍上も幽霊扱いとはなんたる皮肉か。実際に劇中で一度死んだのでシャレにもならない。それにしてもよくあんな状態から復帰できたな……。

戸籍の他、不知火^{くしび}霊には他の生徒役との決定的な違いがある。事件前の記憶の有無である。

他の生徒役は軒並み記憶を弄られてドラマの出演者に変えられていたが、彼女だけは

明確に事件前の自身に関する記憶を保持したままだった。

生徒役達の身元判明の手がかりになるかと期待されたが、残念ながら彼女は他の生徒役達との面識が無かった。彼女の証言で確定したのは、記憶を弄られたという疑いが真実であるということだけだった。さらに彼女自身も元から無戸籍である上に特定の住居を持たないみなしこの浮浪児であり、結局誰一人として家元に帰すことはできなかった。

何故彼女だけが記憶操作の影響をまともに受けなかったのかは明確には不明だが、仮説はあった。

彼女には、極度の感覚過敏の傾向が見受けられたのだ。

特に顕著なのは聴覚。劇中でもエコーロケーションができると明言されている。音の反射を聞き取り周囲の様子を探るその技術は訓練さえすれば一般人にも十分可能だが、彼女のそれは常軌を逸した精度であった。

最初で最後の殺人（未遂）事件で彼女が（一時）犠牲になったのもそのせいである。不快なBGMが流れる図書室に入った瞬間に、一部の本棚からの反響音が異なると気づき、様子を見に行つたところで罠にかかってしまったのだ。

更には、ストーリーが展開するにつれて解放されていくエリアへ続く壁を、図書室の隠し扉と同じ理屈で解放前に特定していた素振りを見せていたことから、ますます黒幕

だと疑われていた。

今改めて考えてみると、無意識で貧乏クジばっか引いてないかあの子。

そしてつい最近、重度の紫外線アレルギー持ちであることも判明した。おそらく視覚にも異常があるのだろう。医者ではないから正確なことは言えないが、目から入る紫外線に反応し過ぎてしまうせいもあるのではないかと推測した。

それらのことを加味すると、彼女の頭が記憶の操作を受け付けなかったのは、ねじ込まれる記憶の情報を必要以上に受け取ろうとした結果、逆に拒絶反応が出たからではないかと考えられる。

彼らに与えられた才能は、それぞれが潜在的に持っていた素質を参考にし、それを増長させたものをあてがっていたらしい。だとすれば、彼女のサイキッカー……超能力者という非科学的な肩書きも、超人的な感覺能力の持ち主だと捉えれば現実的に納得できる称号である。

こうして様々な疑問が氷解したが、唯一合点がいかないのは彼女の職業だ。個人で運営しようにも、戸籍が無いなら許可も取れていないだろうと思った通り、それを探るのは少し骨が折れた。

他の同級生達が才能を生かした立場になっているなら、彼女もきつとそうであるはず。

しかし、ようやく出てきたのはこんな単語であった。

個人運送業。

えっ、何で？

あの喫茶店で盛大に日焼けした事件以降、私の周りはまた少し変化した。

まずあの少年が私にくつつけた虫さんを外してくれた。貴重品だもんね。いちいち消耗してたらお小遣い無くなっちゃうもんね。

そして小学生ズに負けず劣らず絡んでくるようになった女子高生ズ。気を使ってくるれているのかは分からないが、目撃されるたびにあの喫茶店へ連れて行かれそうになる。まるで何十年も女子高生をやっているかのような女子力の高さに毎回キョドってしまう。正直ほつといほしいところもあるが、全く嬉しくないと言えば嘘になる。構われたくないような構われたいような、何とも複雑な気分だ。そんな彼女達とは自己紹介し合う仲にまでは至った。

「不知火さんは車をお持ちですか？」

「……………」

やたら絡んでくるようになったのは、この店員のにいさんもそうである。ほぼ毎回のようにハムサンドを執拗に勧めてくるので個人的にサンドのにいさんと密かに呼んでいるその人は、胡散臭い笑みでそんな質問を投げかけてきた。

「……………免許も持っていない。」

「おや、そうですか。でしたら、今度のお休みに僕とドライブはいかがですか？ 風を浴びて走るのは気持ちが良いですよ！」

自分は五年前みたいにもたもた殺されるのだろうか。この人と話していると漠然とそう感じるようになった今日この頃。

こないだだって、何の脈絡も無く塗り薬をプレゼントされて大いに戸惑った。友人に成分解析を依頼したが、毒物反応は出なかったらしい。ますます意味が分からない。毒物反応が出て困ることには変わりないのだが。

「風でフードが外れでもしたら、不知火さん焼けちゃうわよ！」

「配慮が足りてないわねー」

「アツ、いや、決してそんな意味では……………そうそう、夜景を見に行くなんてどうです？」

「夜間ドライブに誘うなんてますます犯罪くさいよ安室さん」

「ヴンンンン」

やだ、女子高生ズが頼もしい。クレバーに抱かれない。これでも私の方がずっと年上であるはずなのだが。

「不知火さん、もし安室さんに何かされそうだったら遠慮なく反撃しても大丈夫だよ。こう見えてあの人かなりの武闘派だから、全力出しても構わないと思う」

「ひえっ」

「どーしてそういうこと言っちゃうんですか!」

「不知火さんもやる時はやるわよねー。ひったくりの乗ったバイクの車輪にすれ違いざまに傘を差し込んでクラッシュさせたって話、本当?」

「えふっ」

鈴木ちゃんの言葉に飲みかけのレモンティーを吹き出しかけた。何でそんなこと知ってるんだ。君達現場に居なかったじゃないか。

思い切り噎せる私に向けられるサンドにいさんの信じられないものを見るような視線が痛い。

「やっぱり本当なんだ! もしかして知らなかったの? SNSで結構有名なんだよ、不知火さんって」

今だにえづいている私に世良ちゃんがスマホの画面を見せてくれた。某SNSアプリ

りの画面である。私が関わったと思われる事件事故の詳細に、正義の不審者というハツシユタグが付いていた。何だこれ……何だこれ……。

「全身真っ黒で如何にも怪しそうな人が、物理で事件を瞬殺するってことで凄く話題になってるんだ。不知火さんのことだよね？」

「知らない……そんなの知らない……」

「すぐに現場からいなくなっちゃうから写真は一枚も無いんだけど、どう考えても不知火さんだよコレ」

「知らん……知らんて……」

そうだ、この前尊い犠牲になったビニール傘の供養をしに行こう。そんなテンパったことを考えるくらいにはテンパった。それともこないだ事故らせた馬鹿の見舞いにも行こうか。発進したばかりで速度はあまり出てなかったから打撲程度で済んでるはずだけど……っていやいやいや。情報通信社会怖い。

ふらふらと覚束ない足取りで支払いを済ませて退店した私は、その後続いた彼女達の会話を知らない。

「正義の不審者なんてパワーワードもそうそう見ないわよね」

「うん、凄く矛盾してるって言うか。ほら、最近のアレもそうよね。天才バカ集団って言われている、自称悪の秘密結社の……」

「ああ、
確か、
D I C E っ
てやつだ
っけ？」

7. 「とある議事録」

「……ずっと考えてたんだけどさ」

「あ？ どうした終一」

「やっぱり、あの動機はおかしいよ。死んだ人を蘇らせるなんてさ」

「うおおおおい待って待って。何でこのタイミングでその話題を出すんだよ。生徒会の暴走を止める話だったろ。奴らに見つかる前にさっさと進めねえと」

「不知火がデスロードへのバリケードを突破して先に進もうとするのを生徒会総動員で止めに行くらしいから、当分見回りには来ないよ」

「日々アグレッシブっぷりが増してないすか、あの人」

「その生徒会がやろうとしている儀式を止める話としてなら、関係あると思うんだ」

「わかった。聞かせてよ、最原くん」

「うん……モノクマーズは、死んだ人を一人だけ蘇らせて、その人を転校生として僕達の仲間に迎えると言っていたよね」

「ただ、よく考えてみると、転校生という言葉って、今いる学校から別の学校へ移っていく生徒を指す言葉なんだ」

「そりゃあ、まあ……そうだろ？　その何処がおかしいんだ？」

「転校生を迎えるってところだよ。ここから出ていく人が一人、僕達の仲間になるってことは……僕達の中から、誰か一人がいなくなることと同じじゃないかな」

「あつ」

「は？　え？　どうしてそんなことになるんだ？　転校生が来るって、よく聞くフレー

ズじゃねえか！」

「やって来る人自身は確かに転校生だよ。元いた学校から移ってきたんだからね。」

「だけど、そういう人を迎える側から見た場合は別の呼び方になる。」

「別の学校から自分の学校へやって来る生徒は、転入生になるんだよ」

「あ……ああーっ!!」

「だからきつと、今回の動機も罨なんだ。あの屍者の書というのが何なのか分からないけど、あれに書かれている通りの儀式を行うと、その過程で誰かが死んだり、もしくは殺人が起きやすい状況になるのかもしれない。」

「そうして死人だけ出して肝心の蘇りが起きなかったとしても、さつき僕が言ったような転校生という言葉の屁理屈を聞かされるだけで、それ以上は何のフォローもされない

「可能性も考えられるんだ」

「それだあー!! 何だよそういうことだったのかよ! やっぱり蘇りなんてあり得ねえんだよビビらせやがってチクシヨー! いやしかし、転校生って単語だけでそこまで分かるって、やっぱお前はスゲえよ終一!」

「そ、そうかな……? 殆ど言葉遊びの域だと思っただけど……」

「少なくとも全く訳の分からねえオカルト話のままよりはずっとマシだ。よく思いついたな最原」

「でも、盲目的に夜長さんの神様を信じている今の生徒会の皆は、その話を聞いてくれるかしら……」

「う、うーん……」

「みんなー! 見てみてー! オレ凄いもの手に入れちゃったー!」

「えっ? 王馬くん、それ、あの本じゃ……」

「いやー、不知火ちゃんの発想ったら凄いね! 陽動をお願いしたらまさかのデスクロドを踏破しに行こうとするんだもん!」

「またお前らの仕業かよー!」

* *
* *

D I C Eとは。

ここ一月ほど前に突然現れたばかりの、自称悪の秘密結社である。

D I C Eが関わったと思われる最初の事件は、某国で起きた学校施設を襲撃したテロリストによる銃撃戦、通称 “フラワーウオー” とされている。

十数名の武装した集団が白昼堂々と学校に侵入し、生徒達を人質にとつて立てこもつたのがことの始まりである。収監されている彼らのボスを解放しろという要求を無視し、地元警察は機動隊を派遣した。

何人いるか分からないテロリスト。

配置される狙撃手

最悪の事態を想定して怯える子供達。

学校を取り囲む機動隊。

そんな極限の膠着状態を破つたのは、テロリストが放つた一発の銃弾であった。見張りのテロリストが外にいる警官達に向けて威嚇のつもりで放つた拳銃の弾は、ポンと軽い音を立てて数メートル飛び、ポトリと地に落ちた。

よくよく見れば、それは可愛らしいピンクの造花であった。

どういうことなの。何が起きたのかサツパリ分からぬ見張り役は呆然と立ち尽くす。その隙を逃さず、射殺許可を得ている狙撃手が見張り役の頭に狙いを定めて発砲した。

見張り役に届くことなく風に流されたその弾は、可愛らしい白い造花であった。

そこからはテロリストも警官も双方大混乱である。彼らが用意していた弾丸全てが無害な造花が発射されるだけの玩具にすり替えられていたのだから仕方ない。

白兵戦を想定した近接武器の類も、ついぞと言わんばかりに柔らかいシリコン製に替えられていた。

その犯行はまるで超凄腕のマジシャンによるショーのような鮮やかさであったという。

かくしてヤケクソのようなお花大乱舞の銃撃戦は開催された。ピンクと白のチームに分けての激しい銃撃戦は、最終的にピンクチームの降参という形で終結。誰一人として死者及び怪我人は出なかった。一部の生徒が腹筋に深刻な筋肉痛を訴えた他、大した被害は報告されていない。

そして、すっかり戦意喪失したテロリストを全員捕縛した後、現場に残された大量の造花を片付けている最中にそれは見つかった。

WE ARE the DICE!

P o l i c e , D o i t !

ピエロのメイクを模したロゴと共にそう書かれた白黒のカードにより、D I C E という名の組織が暗躍していることが世に知れた。

ちなみに本物の武器は後日綺麗に梱包された状態で地元警察に送りつけられたそう
だ。それはまるで仕事の丁寧なメイドが行ったかのような犯行だったという。

それ以降、このようにおふざけを極めたような事件が世界のあちこちで発生するよう
になる。

ある時は、爆弾魔が仕掛けた爆弾を警察が見つける前にそれを全て花火に改造し、連
続爆破事件を連続花火大会に変えるという、まるで変態的な発明家がやらかしたような
奇抜な事件であったり。

またある時は、誘拐された子供を警察が見つける前にいち早く救出するだけでなく、
その子供になりすまして犯人グループに身代金の受け渡しまで行わせたところで姿を
消すという、まるで犯罪心理学に長けた探偵と変装が得意なコスプレイヤーのコンピ
レーのような事件であったり。

そんなことが繰り返されていくうちに、世間はD I C Eの愉快犯的な犯行の目的を
徐々に理解していった。

あいつら、悪事の名を借りて人助けしてるだけじゃね？

彼らが関わった事件は、本来なら犠牲者が出てもおかしくない事件である。それを引つ掻き回して遊んでいると見せかけ、全てを煙に巻いて怪我人も死人も出させない。

そんなDICEが、犯罪に抗う力を持たぬ弱い立場の一般人達にウケないわけがなかった。彼らが現れたと知ればその度に熱狂して歓迎するようなファンが大勢生まれた。

彼らが唯一犯行声明として現場に残すカードに刻まれた「Police, Do it!」、意識で「警察仕事しろ!」という言葉は、瞬く間にDICEファンの合言葉として広まり、さらには模倣犯まで出てくるほどの一大ブームとなる。

各報道メディアもそんな世間の波に乘ろうとしたが、DICEは悪の秘密結社を名乗るだけあって真つ当な組織ではないため、擁護したり賛成するような意見は言えない。決して一般人には被害を出さないもの、不法侵入や窃盗などの軽犯罪を数多く重ねているれっきとしたおふざけ犯罪集団である。

重箱の隅をつついては嬉々として他人を非難する、そんな自称正義の人間が跋扈するこんなご時世。迂闊なことを言えば、子供への悪影響を懸念する保護者会や教育委員会などから猛烈なバッシングが来るのは目に見えた。

一般人からは何処までも高く評価されるDICEだが、案の定というか、全世界の警察及び捜査機関には、かつてない極悪組織だと認識されている。これは決して大袈裟な

表現ではない。

と言うのも、このDICEという秘密結社。その構成員の正体や所在がほぼ分かっていながら、彼らを逮捕することがほぼ不可能であると分かってきているからだ。

そもそもDICEには出典元があった。それがあの世界中を騒がせたダンガンロンパ事件である。あのデスゲームを演じた生徒役のうち、「超高校級の総統」である王馬小吉が率いる秘密結社の名前なのだ。

劇中においても「人を殺さない」かつ「笑える犯罪」をモットーとしており、現実世界でのDICEと行動理念はほぼ同一である。違いを強いてあげるなら、「人を殺さない」が「人を殺させない」にランクアップしていることだろう。

それなら何故王馬小吉役を捕らえて尋問しないのか。居場所が明かされたのなら尚更だ。

それができたら苦勞はしない。

真つ先に彼らの居場所を掴んだ日本の警察庁は血涙を流さんばかりの勢いで反論した。

彼らとダンガンロンパ事件を結びつける決定的な証拠は、五年前に全て消失してしまつたではないか、と。

彼らの事件前までの身元は、結局最後までわからなかった。そして一度世間から完全

に姿をくらました。その間、彼らがどこで何をしていたかは全く掴めていない。

再び表に出てきて一般人として暮らしている彼らを、事件の関係者だと証明できるものは何一つとして残っていないのだ。

つまり、例えばどれだけ疑わしかろうが、本人達が一言「そんなの知りませんね」とシラを切つてしまえば、そこで全てが終わってしまうのである。揺さぶりをかけるための証拠が全く無い。裏付けできない記憶が正当に人を拘束するための証拠にならないことなど、誰よりも自分達がよく知っている。

それならいっそ、証拠捏造という禁じ手を使つてみては？

誰かが恐る恐る提案した。

もうやつてみたと言を吐くように答えたのはまたも日本の警察庁である。

当時のことを知る捜査官を集め、現在の彼らの写真や、それぞれの記憶を参考にしてどこまでもリアルな本編ビデオを捏造し、それを使って王馬小吉本人に詰め寄つたそう
だ。

ところが、そのビデオの真偽を確かめにあらゆる伝手を使った王馬小吉は、僅か数十分でそのビデオが捏造であることを証明した。

映像のどこにどういう加工をしたかという技術面だけでなく、その日時や捏造に関わった人間の名前住所体格血液型諸々 e t c、どう足掻いても言い逃れできないレベル

の証拠の仔細を突きつけられ、お巡りさんがこんなこととして大丈夫なの？ とにこやかに脅されて逃げ帰る羽目になったのだと。そっちの方がよっぽど違法な手を使ってるんじゃないのかというツツコミを入れる余裕すら無かったそうだ。

自宅と家族構成を目の前で特定された捜査官がその日のうちに泣きながら辞表を出したという話に他の者もドン引きである。やっぱりうちの機関に来るべき人材だったとは口が裂けても言える空気ではなかった。

作り物とは言え、世界中から注目されるほどの才能の持ち主だからと、決して油断はしなかった。

だが、それ以上に彼らは、表向きに姿を消していた五年の間も研鑽し続け、才能を伸ばしていた。

そんな彼ら同士が強く結託すればどうなるか。その結果がああ面白テロリストである。頭痛が痛い。

警察仕事しろ。

その言葉通り、DICEは明確に世界中の警察や捜査機関へ向けて喧嘩を売っていた。売られている方も、世間一般で面白半分に使われている解釈よりもはつきりした理由で、それを理解していた。

何故なら、王馬小吉とDICEを関連付けるそれらの設定は、実際に配信されたドラ

マの中では最後まで出てくるのが無かったからである。知っているのは王馬小吉役本人の他、事件後に発見された本来の脚本を知る者だけ。

つまり彼らは、全ての因果関係を知る当事者の胃へ超ピンポイントにダイレクトアタックを仕掛けているわけである。大雑把に言えば五年前の事件に深く関わった偉い人ほどそのダメージが大きかった。

かつて世界中から自らの死を見世物として期待され、それが終わった後も珍獣か貴重品かのように扱われ、保護という名目で無期限に自由を奪われていた彼らは今、全身全霊をかけてこちらに向けて指を立てていた。どここの指をどの方向にかはご想像にお任せする。要するにある意味当然のグレようであった。

ガチな犯罪集団でないだけマシと言えようか。いや、実害を出さぬ憎めない犯行ばかりでただでさえモチベーションが上がりにくいのに、警察として決して無視できないだろうと世間からの期待をかけられると言う点においてはこの上なく凶悪な集団である。だったらダンガンロンパ事件からではなく、DICE事件からアプローチするしかない。

誰かが観念するように静かにそう言った。

ダンガンロンパ関係者として捜査するのではなく、直接DICE事件の関係者として捜査すれば良い。

確かにその通りだが、それはそれで困難を極める話だ。

DICEは別の人間の犯行に便乗する形で活動する。指紋や髪の毛など、個人情報を残すようなヘマもしない。誰にも気付かれないように全ての弾丸を玩具にすり替えた
り、爆弾を花火へと改造したりと、技術面でもハンパない。

さらに付け加えるなら、それら全てを監視カメラなどのセキュリティシステムを当たり前のようにすり抜けた上で行なっている。とにかくあらゆる面において隙が無い。

まさに天才バカ集団。才能の無駄遣いとはこのことである。

だが、しかし。いくら才能のある優秀な人間であろうと、必ずその過程を経たという
揺るがぬ証拠が残る。

特に日本から遠く離れた土地で犯行があったのなら、その時間にどこにいたかを探れば、じきに隙は見つかるはず。要は現場不在証明、アリバイ崩しから始めれば良いと。

各国の捜査官達に希望の光が差し込んだ。

再び日本の警察庁関係者が震える手をあげるまでの短い時間であったが。

……実は、DICEが活動を始める前から、現時点で国内にいる16人全員に盗聴器
を手配し、今に至るまで彼らの生活を……。

続けて某国の捜査局関係者が絶望しきった声で報告した。

当局にも、日本にいる16名と、我が国へ観光しに来ていた一名、全17名分の調査記録が……。

転がるサイコロは無情にも振り出しを示した。

8. 「5年前は小学6年生だった少年の語り」

「……入間さん、お願いしたいことがあるんだ」

「な、なんだよう。王馬といい、不知火といい、最近のお前らはなんか変だぞ……？」
「完全にモノクマの目から逃れられるような場所って、作れないかな」

**

*

冷静に見たら実に奇妙な光景だった。

少年探偵団のやつらと公園でサッカーをしていた時のこと。そこから遠目に見える通りを、一定の人物が一定の時間をおいて通り過ぎることに気が付いた。あの真つ黒な服は、不知火さんだ。

サッカーには参加せず、歩美と並んで座って見ているだけの灰原の方を見やれば、オレと同じくそのことに気がついていたらしく、アイコンタクトと軽い首肯を超越してきた。

「あれ、不知火のねーちゃんじゃねーか？」

「うん、そうだよね？」

「さつきからずっとあそこを歩いているように見えるんですが……」

プレーを中断すると、他の奴らも口々にそう言った。気がついていたのはオレと灰原だけでなかったようだ。

否が応でも目立ってしまう不知火さんのことしか見えてなかったようだが、その後を慎重に追う人影もある。何故かやけにその服がボロボロに汚れていたのが少し気になった。

「不知火さーん!!」

「一緒にサッカーしようぜー!」

「あつこら、お前ら!」

どうしたのかと考えているオレの横で、考えるよりまず行動な奴らは大声を出して彼女を呼ぶ。すると彼女はすぐにこちらに気がつき、手を振り返してから、道路を横切つて駆け寄ってきた。

「やあやあ探偵キッズ。こんにちは」

「こんにちは！」

「不知火さん、さっきあそこで何してたの？」

どう考えても訳ありっぽいのに、ド直球に訊ねる歩美に思わず目眩がした。灰原の呆れたような溜息が聞こえた気がする。

「ああ、私の家突き止めようとする連中と鬼ごっこしててね」

うわあ、こつちもド直球で返してきた。

「ええー!? お姉さん、尾行されてるの？」

「尾行なんて言葉よく知ってたね吉田ちゃん。そうだよ、個人のプライバシーなんて己の使命○や正義○の前ではアスファルトの上で干からびたミミズよりどうでも良いと信じている輩にストーカーさされてるんだよ」

「なんだかよくわかんねーけど、苦労してんだなあねーちゃん」

本当に苦労してそうだ。色んな意味で。意図せず不知火さんの底知れぬ深淵を覗いてしまった気がする。灰原が小さくヒュッと息を飲んだのが聞こえた気がした。

「本当に大丈夫なんですか!?! 警察に相談しに行きましようよ!」

「その警察と鬼ごっこしてるんだよなあ」

「どうして? お姉さん悪いことしたの?」

「うーん、車が撥ねた泥水や鳥のフンが直撃するように誘導したのは少し意地悪だったかなと思ってるけど反省はしてない」

誰だか知らねーけど完全に遊ばれてるじゃねーか。道理で服が汚くなってたわけだ。「別にね、今更誰かに何かを疑われることはどうつてことないんだ。けどどいい加減に私生活を見張るのは是非ともやめてほしいんだよねえ。……知らないフリを続けるのつて、本当に疲れるんだ。」

「っ!!?」

ヒタリ、とフード越しにこちらに向けられる視線。

あ、これはダメだ。バレてる。全部。直感的にそう悟った。

普段から疑われることに慣れ、尾行に気づかないどころか逆に掌で転がすかのように追跡者を操って楽しみ、気を紛らわす。言うなればプロの被疑者。

おいおいそんなやつがいてたまるかよ。

しかし悲しいことに、目の前の不知火さんはまさにそんな人であった。

「バ、バ、ごめんなさいー!」

「!」

「ボク、不知火さんのコートに盗聴器を付けてイタズラしちゃったことがあるんだ。嫌な思いをさせて、ごめんなさい!」

何か言わなくてはと悩んだ末に、オレは正直に謝罪することを選択した。この人相手に嘘を重ねれば、余計に拗れてしまいそうな気がしたのだ。

ここまで露骨にアピールされては謝れと言われているのも同じ。せつかくチャンスをくれているのだから、ここで一度全てを清算しよう。そういう思いで頭を下げたのだが……。

「あ……ボクも、怪しい人だって言って、ごめんなさい！」

「ごめんなさい！」

「オ、オレも！」

するとどうだ。他の奴らも空気に飲まれて次々に頭を下げ始めた。オメーらの場合はオレと違って本当におふぎけのノリだっただろうに。

不知火さんは何も言わない。下げた頭の位置からは、よろめくように一歩後ろへ下がった彼女の足元だけしか見えなかった。

が、直後にしつかりした足取りでこちらに近寄って。

「許す!!」

「……へ？」

呆気なく下された処断に間抜けた声が出た。

「許す! 許すよ! めっちゃ許すよ!」

「う、わっ」

ワシヤワシヤワシヤツと雑に撫でつけられる髪の毛。驚いて身を起こせば、灰原を除くごめんなさいをした全員が、同じように頭を撫で回されていた。

髪に手櫛を入れながら見上げれば、いつになく上機嫌な不知火さんがそこにいた。フードで表情が見えなくても分かる。明らかに纏う空気が違った。

「驚いたあ。ちゃんと謝ることができるとだねえ、凄く感動したよお」

皮肉にもとれそうな言葉だが、そんな意図を匂わせる気配は微塵も無かった。もうニッコニコである。影で見え辛いけど。

「えーつと、不知火さん……？」

「もう良いんだよ、さっきので全部チャラだ。よく頑張ったな、偉いな」

まるで親戚の子供を無条件で可愛がるようなテンションだ。もう一度頭をワシヤワシヤされた。

何故だったアレだけでここまで褒められるのか分からない。そんな俺達の困惑の視線を受けて、彼女は弾む声でこう言った。

「いやあ、誰かに謝るのって、簡単そうで凄く難しいじゃないか。まず誰かのせいにないで自分が悪いと認めること自体に勇気がいると思うんだ。その上で実際にごめんなさいと口にできた君達は本当に素晴らしいよ」

……そういうもんだろうか。オレはほぼ打算で言ったようなもんだから、そこまで掛
け値無しに褒められちゃ、逆に罪悪感が……。

「まあ、例え本当に反省しているかはともかく、目の前にいる相手に頭を下げるつてのも、そうそうできるもんじゃない。今のご時世、顔すら合わせることもなくメールや電話で済ませるのも当たり前だしね」

この人、オレの心の中読めてるんじゃないかね？

「それどころか自分が正しいと信じて疑わず相手の心を見透す奴だっている。と言うかそういう連中ばかりだからホントこの世はクソ」

唐突に闇を滲み出させるのは心臓に悪いのでやめてほしい。胡乱な目で虚空を眺めながら早口でそうまくし立てた不知火さんは、正氣に戻った目で俺をじっと見つめてきた。

「それに、君の場合はあのまま知らないフリだつてできただろう？　ちゃんと私と向き合つて謝つてくれた君は、本当に凄いんだよ」

「……え、えへへ」

ちくしようマジで照れちまった。

そこまで大したことを期待していたわけじゃなかったが、まあ、許してくれるのならそれに越したことはないか。

「何かもうね、テンションに任せて玩具でもゲームでも何でも買ってあげたいところけど、このナリで君達のような子供連れ歩き回した日にはいいよ通報待ったなしだよなあ……」

依然として不知火さんの闇は深い。

「ボク達、ただ謝っただけだよ？　不知火さんがそこまでしてくれることなんて無いんだよ？」

「アハハ、常識的に考えれば全くもってその通りなんだけどね。ただ、個人的にすつごく嬉しかったのは確かなんだ。喜べ江戸川くん、君が世界初だおめでとう」

「え?!?!」

「いやこつちの話。」

「またも荒つぽくオレの頭を撫で回す不知火さん。一体何が何だか。」

結局オレ達は、不知火さんから二百円ずつ握らされることになった。身内でもない小學生に無条件で与えるには何とも絶妙な金額。これでガチャガチャでもオヤツでも買えば良いと言われ、光彦達三人は早速大喜びで近所のスーパーへ駆けていった。その際車に気をつけるよと声をかけた不知火さんは理想的なご近所さんだと思う。服装を除けばだが。

「私も貰っちゃって良かったのかしら？」

「ここで一人だけハブる方がおかしいだろう。適当にジュースでも買ってくれ」
「……ありがとう」

静観していただだけの灰原もついでという形で二百円を貰い、ぎこちなく札を言った。受け取るにも断るにも微妙な金額だと思う。

さて、あの三人が場を離れた今、この場に残されたのは小学生の皮を被った高校生探偵と元犯罪組織の構成員と、真つ黒なコートを被った怪しいお姉さん、そして遠くからこちらを見ているであろうお姉さんのストーカーという、何かが狂ったメンツであった。何とも言えない空気が流れる。

「えつと、ところで不知火さん、ボクずっと気になってたんだけどさ」

「んー、何だい」

この変な沈黙に耐え切れず、苦し紛れの話題を口にする。

「不知火さんって、お日様がとっても苦手なんでしょ？　なのに、何でわざわざ今みたいにお昼に外を歩いているのかなーって」

「ああ……確かにその通り。夜であればこの鬱陶しいコートを脱いで行動できるんだけど、素顔を晒して夜に歩くと、高確率でお巡りさんに補導されるといふ問題があつたね」

「えつ」

「どういふことだ、と戸惑うオレの前で、不知火さんは数秒だけそのフードを外した。その下から出てきた顔に一瞬ギョツとする。中学生か高校生と思われるもおかしくないほど若い顔つきなのだ。」

「あの、不知火さん、今何歳……?」

「……五年前に高校を卒業してるとだけ言っておこうか」

オレより六つも年上でその顔かよ!?

確かに背丈も蘭と同等かそれ以下だとは分かっていたが、その黒いコートの圧倒的な威圧感でさほど気にならなかった。

しかし、フードを脱いで素顔を晒して全ての威嚇効果が無くなると、その時の彼女の姿は確かに補導されてもおかしくないものだった。

「とか言つてフードしたまま夜出歩けば今度は職質待ったなし。つまり夜はどうあがいてもお巡りさん」

「お気の毒に……」

何かもう、聞いてて不憫な気持ちにしかならなかった。灰原と声が被る。

好きで不審者をやつてるわけじゃない彼女は、比較的通報される確率が低い昼を選ばざるを得なかったわけだ。なんて世知辛いんだろうか。

「そ、そこまで色々和我慢してまで、一体何のためにお散歩してるの……?」

ここまで聞いたなら根本的な理由を知らないままでいるわけにはいかなかった。何故彼女は自ら茨の道を進まねばならないのか、自分にできることがあれば少しでも力になりたいと思っただのだ。

すると、とつくにフードをかぶり直した不知火さんは、オレの目をじつと見つめてこう言った。

「……まあ、いつか。君の類い稀な勇氣と誠実な心に対するご褒美として、特別に教えてあげようか。耳をかつぽじつてよく聞きたまえよ」

え、何だそのノリ。

「実はね、物件を探してるんだ」

「物件？」

意味深な前置きをされた割には、拍子抜けするほど平凡な答えだった。近くの自販機でペットボトルの紅茶を買って戻ってきた灰原の目も真ん丸になっている。

「うん、この辺りで家を探してるんだ。片っ端から不動産屋を回って店前に貼られたチラシを見たりとか、ネットで良さそうなところの住所を調べて、直接現場を見に行ってる。中は見学できないけど」

ああそうか、だから不知火さんをよく見かけるのか。物件がある住宅地を中心に活動しているなら、俺達と行動範囲が被ることも納得できる。

「つて、あれ？ 何で見学しないの？」

「この格好で不動産屋に相談しに行ったら犯罪の準備だと疑われちゃうよ……」

「あぁー……」

「と言うかまあ、ぶつちやけた話、その辺りに関しては本当に後ろ暗い事情があつてさ。できれば極力公にしたくないことでもあるんだ」

「えっ!？」

またまた意外。見た目が如何にも怪しげなだけで、その実態は清廉潔白な損ばかりしている人だと思っていたが、実は本当にそういう事情があるだなんて。

「え、ちよ、不知火さん、悪い人なの？」

「いや、私じゃなくて同居してる奴がどうしてもこの近辺に住みたいとゴネてさ。それがまた非常に厄介な事情持ちで、詳しくは知らんが迂闊に世の中に出られない身分な上に、特に警察には頑なに関わりたくないと言い張つて。それで仕方なく、私が代わりに物件探しをしてるの」

「それって……」

どう考えてもクロに近いものを感じるんだけど！

まず不知火さんが誰かと同居してるつても初耳だけど、その人が限りなくアウトっぽいことにも衝撃を隠せない。

流石に心配になったのか、灰原が口を開く。

「あなた、その人に騙されているんじゃない？」

「ああ、それは無い。何だかんだ高校卒業後からずっと同居し続けてる相手だし」

「……………」

「少なくとも悪人じゃないよ。グレーなところが多そうなのは否定できないけどね」

「是非考え直すことをお勧めするわ。いつそ警察に突き出しなさい。そんな得体の知れない奴のためにあなたが犠牲になることなんて一つもないのよ」

「小学生の口から出たとは思えないほど辛辣な正論に私はびつくりだよ灰原ちゃん……………」

ちなみにオレも灰原と全くの同意見であることをここに記す。

「心配してくれてありがとね。でも私は平気だよ。そいつのためとか自己犠牲とかじゃなくて、私自身が案外今の生活を気に入ってるんだ。」

「でも……………」

「言ってしまったら私も善人じゃないし。気に入らない奴は法に触れない程度にはコテンパンのケチヨンケチヨンにしてやりたい。だから今のようになんか誰かが尾行してくるようなシチュエーションなんてむしろ大好物なんだ。次は犬のフンでも踏ませてやろうとか考えるのがめっちゃ楽しくて」

「うわあ」

不知火さんの方も大概だった。そう言えば彼女は追跡者で遊んでいる最中だったことをふと思い出した。

「気をつけるよ君達。世の中どんな奴がどこにいるか分からないからね。その勇気も使いどころを間違えないようにね。うっかり私みたいな奴に変な正義をぶつけでもしたら、次は君がああなるかもしれないぞ」

「ハアイ、キモニメイジテオキマース。」

「ホント良い子だねえ君は！」

素直に謝つといて良かったあー！

今後はもつと慎重に行動しよう、色んな意味で！

この人だけは敵に回しちゃいけないと改めて安堵の息をついていると、不知火さんはコートの内ポケットからメモと筆記用具を取り出し、何かを走り書きしたその紙切れを俺に手渡ししてきた。

数字とアルファベットの羅列。もしかしなくても、これは……？

「それ、私の連絡先。初回特典つてやつ。何か困ったことがあつたら相談に乗るよ。宿題とか恋愛相談とかでも良いし、なんならそこそこヤバそうなことでも、ある程度なら手助けしちゃうよ」

おいマジかよ。そこそこヤバそうなことって具体的にどんなことを指しているのだろうか。不知火さんの本性を垣間見た今となつては怖くて聞けなかった。

そもそも小学生にそんな危機が訪れると想定している時点で怖い。いつそオレの正体を知つてると暴露してくれた方が気が楽なだけだ。

ところで、初回特典つて一体何のことだ？ さつきも世界初だとか言われた気がする。

「あ、そうだ。探偵志望の君にはこれもプレゼントしちやおう。とつておきだぞ」
「？」

そう言いながら、不知火さんはコートの左脇の辺りをまさぐつた。普段は腕の陰に隠れがちな部分だ。

そこから、真つ黒なコートと同じくらい真つ黒な、小さな何かを筆取り取つた。

オレの掌に乗せられたそれは、嫌に見覚えのある物体だった。

「なんと、アメリカのお巡りさんが私にくれた超高性能な盗聴器だよ。超貴重品！」

「イイヤアアアアつ、たあ！ 嬉しいなあ!!」

何してんだあの人達!!

灰原が飲みかけの紅茶を盛大に吹き出して噎せたのが見えたが、オレはそれを気遣うどころではなかった。

「あ、気をつけてね。それまだ動いてるから」

「ヒエツ」

「残念ながら特殊な周波数使つてて一般的な受信機じゃ傍受できないんだけど、結構な価値があると思うのね」

「ソツカア」

「君にそれをあげたことは向こうに知れただろうけど……うん、真つ当な一般人の君には後ろめたいことなんて無さそうだし、大丈夫だよな。貰った経緯を誰かに訊ねられたら、全部不知火つて奴のせいって言つとけば良いよ」

「ワカツタア」

「それでも尚君を疑うようであれば、私に連絡ちようだいね。喜んで迎え撃ちに行くとよ」

「タノモシイナア」

「ああ、いや、何なら今ここで壊しとこうか。その方が一番無難だよな」

ヤツベエ。何がヤバイつて、全てがヤバイぞこの人。

相手がFBIだと知った上で尾行をおちよくつてたのか？　そもそもFBIだと特定してる時点で色々おかしい。この人のスペックがぶつ飛んでるのか、向こうのセキュリティが甘いのか、どちらにせよ大問題じゃないか！

「私もそろそろ帰ろっかな。お腹空いてきちやっただ」

君達も気をつけて帰ってね、といつも通りに俺達を気遣う言葉を残し、不知火さんは上機嫌そうに帰っていった。

残されたオレと灰原は、スーパーにいった三人が戻ってくるまでの間、その場から動けなかった。

「……赤井さん達、不知火さんと何があつたの……う？」

呆然としてそう呟くも、当然のことながら、一方的に音声を送るだけの盗聴器からは何の返事も来なかった。

9. 「熱帯魚大量死事件」

「ちょっと不知火さん！ 何でキミだけほつつき歩いてんの!？」

「凶器が私にもっと埋めろと囁いているんだ」

「囁いてないよ！ ってそうじゃなくて、皆はコンピュータールームでバーチャルゲームしてるってのに、何でキミは参加しないのかって聞いているの」

「それがね、参加したくてもできないの」

「何で？」

「知らない。ヘッドギア被っても何故かログインできないの」

「どうして？」

「お前の陰謀だろ。私をぼつちにさせる計画の一環であることはお見通しなんだからな
！」

「何も見通せてないよ！ ただでさえよく分かんないエラーでコンピューターを覗けな
いってのに、現実世界にフリーの人間が残ってるなんてこの上なく都合が悪いんだけど

！」

「ああそう、やったぜ」

「おい」

「では学園長、私は忙しいのでこれで」

「うぷぷ、いつも無駄な作業お疲れ様。すぐにエグイサルで掘り返してやるよ。ボクのが可愛い子供達がね」

「はいはい」

「……エグイサルで思い出したんだけどさ、最近エグイサルの駆動部分のパーツがしょっちゅうダメになるんだけど、不知火さん、何かイタズラしてないよね？」

「エグイサル？ いや、何もしてないよ」

「あー、だよね。分かってたよ。確かにアレに手を出すところは見てないし……」

「掘った土にお酢と塩と漂白剤と研磨剤を混ぜ込むようにして皆からのアドバイスを実行している他は特に何もしてない」

「ナニシテクレテンノオオオオオオオ!!?!?!」

今となつてはもう、謎と闇しか感じられない無害な不審者……というツツコミどころしかない人物である不知火さんとそこに親しくなつてからしばらく。

オレは沖矢さん……もとい、赤井さんからは是非話がしたいという連絡を受け、覚悟を決めてから俺の邸宅へと向かつた。

こつちの言いたいことも分かるよね？

そんな意図を込め、不知火さんからプレゼントされた盗聴器を見えやすいように掌に転がした格好で彼と対面すれば、出鼻を挫かれたように息を詰まらせ、視線をあからさまに逸らされた。

「……ボウヤも意地が悪い」

「いやアレだけ派手にやらかされて何も気にならない方がおかしいよね?」

オレが至極当然の道理を述べれば、沖矢昴の姿をした赤井さんは無言で眉間を押さえた。

なんと珍しい。自分の命がかかった状況でさえ不敵に笑っている彼が、こんなに分かりやすく頭を悩ませているなんて。

それほどまでにあの不知火という不審者のヤバさ加減が、ベクトルの向きはどうであ

れ某組織の銀髪野郎よりぶっ飛んでいることが窺えた。

「ボクが持つてる不知火さんの連絡先が目的なんでしょ？ ボクの質問に答えてくれたら教えてあげないこともないよ」

「随分と余裕だな」

「あと軽く送信ボタンに触れるだけで不知火さんにSOSメールを送れるんだけど。」

「分かった、何が聞きたい」

自分で仕掛けておいて何だけど、ただのハツタリでそこまで焦らないでほしかった。名前を出しただけで赤井さんの判断力をここまで低下させるって、本当に何なの不知火さん。

オレの勘を信じるなら少なくとも悪人ではないはずだ。……うん。きつと。

「じゃあ聞くけど、不知火さんって結局何者？」

「……………」

赤井さんは無言のまま俯き、手で目元を覆った。

最も想定できる質問でこの有様ってどういうことだよ……。

「……非常に言いにくいことなんだが……彼女に関することは全て、国家レベルの機密事項に相当するものと言っても過言ではない」

「はい。」

オレは口から素つ頓狂な声が飛び出すことが阻止できなかった。そんな馬鹿な？

「流石にそれは無いって。そんな人が、あんな、これでもかかってくらいに目立つ格好で不審者してるわけないでしょ？」

「それが本当だから大問題なんだ……」

「えええ」

赤井さんが嘘を言っているようには見えなかったが、他でもない不知火さん本人とよく接触するオレとしては、どうしても信じられなかった。あの人がそこまでの大物？ 確かにあらゆる意味で常軌を逸した不審者であるのは否定できないが。

「例の組織に対する共同戦線を張っているボウヤになら、作戦上、全く話せないわけではないが……」

まだ言い洩る赤井さん。原則的に一般人には公開できない極秘事項だということはお当らしい。不知火さん本人を思い浮かべた途端に信じられなくなりそうだけど。

「一応確認するけどさ、不知火さん自身はあの組織との関係は無いんだよね？」

「ああ、無関係だ」

即答。だろうな。FBIのお墨付きならもう確定で良いだろう。

しばらくの沈黙の後、赤井さんは意を決したように重い口を開いた。

「五年前のダンガンロンパ事件を覚えているか？」

「ダンガン、ロンパ……?」

その単語を復唱してみても数秒、パツと頭の中に浮かぶ記憶。

そうだ、あの事件は。

「史上最悪の、公開デスゲーム事件……!」

思い出した。

当時のオレはまだ小学生で、あまりインターネットに触れる機会が無かった。だが、連日報道されるニュースに釘付けになった覚えがある。

ダンガンロンパ事件。

当時ネットで配信されていた人気の同名サスペンスドラマが、実はそれが本物の殺人劇であったことが発覚して、世界中が大騒ぎになったという事件だ。

確かそのストーリーは、閉鎖された学園に拉致されてきた高校生達が、脱出をかけて殺し合いをさせられるという……。

五年前……高校生……?

『……五年前に高校を卒業してるとだけ言っておこうか』

不知火さんに年齢を聞いた時の返答が、脳内に蘇る。

「ま、さか」

「そのまさかだ。ボウヤがよく会うあの不知火霊という女性は、あの事件の生き残りだ」

なんてこった。頭が真っ白になった。

国家レベルの機密事項、当然だろう。

あの事件の被害者達は、どこの国から誘拐されてきたのかも定かではない。それに、人工的に才能と記憶を植え付けて全くの別人に作り変えるという、とんでもなく非人道的な技術の被験者でもある。作られた天才達に世界がどういう目を向けるかは想像に難くない。

「……でも、あの人達ってある日突然居なくなっただけでしょ？ 全ての痕跡を消して」

だからオレも、今の今まで忘れていた。彼らに関する画像も映像も、何もかもがあらゆる場所から消去され、ニュースに流れるものもただのイメージ画像に差し替えられた。

やがて、彼らが居なくなっただけから二ヶ月もしないうちに、ダンガンロンパ事件の話題はニュースに全く上らなくなった。

「そう。あれ以降、彼らの消息はどれだけ手を尽くしても全く掴めなかった。……つい最近まではな」

「！」

「彼らが再び表に出てきたと分かったのは本当に偶然だった。調査を進めていくうちに、彼ら全員が日本で一般人に紛れて暮らしていることが判明した」

「……だから、偶々この町に用があつて来ていた不知火さんに、盗聴器を付けていたんだね。」

「……………」

赤井さんは机に両肘をついて組んだ手で目元を隠し、俯いた。深い溜息が聞こえてくる。

「彼らの生存を確認した当局は、彼らに対してある取引をしようと目論んだ。我々の捜査への協力と引き換えに、身元とその安全を絶対的に保証するという、な。」

……………その矢先にDICE事件が勃発し始めた」

「えっ、何でここでDICEが出てくるの」

DICEってアレだろ？ 全力でおぶぎけするだけの集団だろ？

まだ日本には上陸してないって話だし、放置しても害にならなさそうだから特に気に留めてなかったが。

ただ、奴らの天才的な犯行のトリックには興味あるなーってだけで…………。

天才的…………あつ。

「ちよ、ちよつと待って」

「……………DICEの構成員は、ほぼ確実にダンガンロンパ事件の生き残りだと言われている」

「やっぱり!」

「むしろそうとしか思えない状況だ。当局もそれを利用し、犯行を見逃すことも取引材料に含めて調査を進めていたのだが」

「待つて待つて待つて」

「……………DICEが活動し始めた時期と、こちらの調査時期が見事に重なり、逆に彼らに完全なアリバイがあることを証明する羽目になった」

「うわあああ」

何それすつげえ。

赤井さんの顔は、今や完全に机の上で組んだ腕の中に突っ伏していた。

あの黒づくめの組織相手でもここまで綺麗にやり込められたことは無かったのだらう。血生臭い話でもないから、いつそもう清々しい。

「……………現在普通の一般人として暮らしている彼らをこちらの世界に引き込める理由は無い。ダンガンロンパ事件に関するものが一切失われた今、彼らとあの事件を結びつけられるものはDICE事件だけだ。」

だが俺達は、自らの手でその唯一の道筋を断ったわけだ……………」

「あ、赤井さん……………しつかり……………」

「確かに彼ら相手に盗聴器は悪手だとは思ったが、まさかここまでとは……………」

「うん、不知火さん、めっちゃ怒ってたよ……」

「だろうな……」

いやだって、私生活を勝手に全世界へ公開された上で、殺人ゲームを強要されてた人達なんでしょ？ 盗聴とか盗撮とか、怒らないわけないよね？

……あ、やべ、オレも今後そういうの本当に控えなくちゃ。

「彼らの協力が欲しいこちらとしては、これ以上彼らからの心証を悪化させるわけにはいかないんだ。唯一心を許した君からの SOS メールなんてシャレにもならない」

「それであんなに焦ったんだね……」

でも、赤井さん達は盗聴器越しだったから分からなかったただだろうけど、不知火さんの盗聴に対する態度は既にマイナス方向へ振り切ってたから、少なくとも不知火さんに関してはこれから何をしてもあまり変わらないと思うよ。

……と言いかけたが、トドメにしかならないだろうから口はそつと噤むことにした。

「でもさ、なんでそこまで不知火さん達に固執するの？ どうしてもあの人達の才能じゃないとダメなの？」

「どうしても……かは、断言できない。だが、彼らの情報収集能力や隠密能力が俺達の想像を遥かに上回ることは間違いない。あの組織との情報戦で、彼ら以上に心強い味方もいないだろう」

「ああ……」

そう言えば不知火さんも自分を監視する相手がFBIだと気付いていた。その気付いていた素ぶりだつて一切表に出さなかった。FBIの彼らをよく知るオレすら、直接言われてから初めて知つたのだ。それも、オレをただの子供だと信じきつて油断しまくつた状態だ。

……あ、今思い返すと本当にヤバい人だ。隙だらけなのに隙が無い。何だその矛盾の塊。

「彼らのそういつた能力の真髓を象徴するのが、かつて数多の捜査官やジャーナリスト達を廃業に追い込んだ……通称『メリーゴランド騒動』」

「メ、メリーゴランド……!?!」

話自体は真面目なのに、面白そうな気配しか感じられないのは何でだろう。

才凶学園卒業生専用回線、略して才卒回線。何年か前にオウマくんが発案し、ミウちゃんが開発したシステムだ。用途は名前そのまま、私達のみが使用できるネットワークである。

認証の仕方が非常に独特な方法であるため、無関係者が誤って入ってくることはまずあり得ない。

そこにログインすると、回線内のチャットはそこそこ賑わっていた。元々17人しか使わないから賑わうも何も無いのだが。

↓ p s y cさんが入室しました ↓

p i a n : 久しぶり!

t e n n : こつちでは久しぶりだな

p s y c : おひさ

p s y c : 皆お疲れ様です

c a r e : 本当にね

c a r e : ついに職場の周りをうろつかれるようになったんだけど

a n t h : なにそれこわい

p i a n : もしかしてp s y cさんのところも?

p s y c : こないだの鬼ごっこ以降は音沙汰無し

c a r e : こつちのとも相手してやってくれない?

p s y c : 残念ながら幼児が密集している地帯に行くとなんか私が親御さんに通報されちゃ

う

c a r e : それもそうだった

t e n n : あんたの鬼ごっこはシャレにならん

p i a n n : 私もd e t e くんに渡せば良いのかな？

a n t h : 彼の困惑顔しか思い浮かばない

p s y c : ちなみに上手く処理できた人おる？

c a r e : ノ

c a r e : ひったくりにあげた

p i a n n : ちよつと米花町行ってくる

p s y c : 落ち着け死ぬぞ

↓ s u r v さんが入室しました ↓

s u r v : 無事に帰国しました

p s y c : おかえりー

t e n n : 変わりは無いか？

s u r v : 虫さんが増えた他は特に

c a r e : 問題しかない

p i a n n : そつちもかー

a n t h : 事務所さんこわい

s u r v : 事務所つてFBIのこと?

p s y c : 鬼ごっこ世界大会開催も辞さない構え

t e n n : あんたもこわい

s u r v : あー

p i a n : うん?

s u r v : あー

t e n n : おい

s u r v : あー

a n t h : おや? s u r v の様子が

s u r v : ごめん多分俺のせい

s u r v : 本部の見学中に名乗っちゃった

p i a n : ねえ

p s y c : ちよつと

a n t h : 講義中にそれは卑怯

t e n n : 授業に集中しろw

c a r e : この野郎よくも

s u r v : ごめんなさい!!!

p i a n : よりにもよって何故そんなところに :

s u r v : だってツアーがあるって聞いたから :

a n t h : 見学 w w w ツア w w w w w

s u r v : そもそも何で彼らが日本にきてるの ?

p s y c : なんとなく予想はつく

c a r e : 日本は例の世界的な犯罪シンジケート構成員の目撃回数がダントツ一位

t e n n : 昼間の街中でも平気で発砲するらしい

c a r e : 二車線以上はサーキット

p s y c : ※ほぼ全て米花町内での出来事です

a n t h : ※追う側も同じようなことしてららしいです

s u r v : それなんて世紀末

p i a n : 知りたくなかった

.....

.....

10. 「木馬は回るよどこまでも」

「不知火ちゃん、是が非でも協力して欲しいことがあるんだけど」
「嫌な予感しかない」

**

*

今から約五年ほど前の話である。

日本の警察庁に用意された寮での保護生活に慣れ始めたダンガンロンパ事件の生き残り達が、あるきっかけを経て再び“超高校級”へと覚醒した後のこと。

その計画は、“超高校級”達が勘にも満たぬごく淡い確信で寮内を搜索したところ、本当に虫^{盗聴器}さんが発見されてしまったことよって始動した。

『イヤッハー！　夜は私の時間だあー!!』

その計画は、夜のみ異様な高テンションになるサイキツカーを世間に解き放つことから始まった。かつて疲労を知らぬクマ型ロボット達と毎日夜通し穴掘り戦争を繰り広げただけあり、夜間限定ではありながら「超高校級」の中でも随一のスタミナと体力と身体能力を誇る彼女は、彼らを閉じ込める寮を警備する警官達の包囲網をいとも容易く突破し、夜の街へと飛び出していった。

こうしてサイキツカーがバーサーカーとして監視の目を気を引きつけている間に、寮に残った者達も行動を起こした。初日の夜に行ったのは、虫盗聴器さんの位置と数の把握である。彼らは命懸けで全世界を欺くうちに洗練された必殺技「知らないフリ」を駆使し、その向こうにいる相手に気取らせぬうちに作業を終えた。

夜明けになれば、暴れ尽くして達成感に溢れる顔で眠りこけるサイキツカーも、ゲツソリと疲弊した警官達が警護するパトカーに乗せられて無事に寮へと帰還した。

しかし、その時点においては計画はまだまだ始まったばかり。

その翌日の夜も、そのまた次の夜も、サイキツカーは日々厳しくなっていく警戒網をアスレチックに挑むかのように楽しみながらすり抜け、何度でも懲りずに外へと繰り出した。

当然これも他の者が密かに進める作業を隠すための陽動であったが、ドラマの劇中で

も常々バグったと称された通り、サイキッカーの奇行はただの奇行としか認識されず、結果として見事な陽動として機能した。

逃げ回る彼女を追う警察同士間の無縁が数多く飛び交って酷い混線状態になったこともあるが、他のことに注意が向かなくなるほど彼女が好き放題に暴走したせいでもある。

かくして準備は整えられた。全ては自分達を法の名のもとに自由を奪い、剩え人権を無視して私生活を観察しようとする大馬鹿野郎どもに對しての、全力の抗議のため。

才囚学園の中にいた時より立場が悪化してるじゃねーか。思えばこの頃から彼らの反抗期は始まっていたのかもかもしれない。

計画はいよいよ佳境を迎えた。

あらゆるイタズラに長けた総統による発案。

発明家が即席で作成したトランスポンダ。

夜に外を歩き回るサイキッカーに持たせたそれによって得られた無線の強弱や音声の情報から、不届きな観察者達の居場所を大まかに割り出した探偵とピアニストのコンビ。

それを裏付けするための、旅行者やジャーナリスト達の心理に明るい生存者の知識。脚本は民俗学者。

演出はマジシャン。

美術部とメイドが丹精込めて作り上げた精巧な西洋人形。

保育士による効果的な不意打ちの指導と、コスプレイヤーによる魂のこもった演技の指導。

シミュレーションは宇宙飛行士。

その他諸々etc。

すつかり外の地理に詳しくなったサイキッカーに全ての怨念と執念を託し、その計画はついに本格始動した。

深夜。

寮から回収された盗聴器に向かって、万感の思いを込めたそのセリフが放たれる。

『私、メリーさん。今、あなたの泊まっている部屋の前にいるの』

「……ジワジワと、しかし確実に近づいてくるその声の主は、ついに自分がいる部屋の前までやって来た。」

静まり返る部屋に三回、扉をノックする音が響く。

極度の緊張に駆られ、または正体を掴んでやろうと果敢にドアを開けるも、そこに人の姿は影も形もない。

なーんだ、ただのイタズラか。

ホツと胸を撫で下ろし、部屋に戻った彼は見てしまった。

さつきまで自分が寝ていたベッドの上に、あの寮に仕掛けたはずの盗聴器を持った、不気味な人形が座っている光景を。

……さあ、そのあと彼はどうしたか。

朝まで部屋の隅で震えて泣き明かし、翌日には所属元に辞表を提出して、以降人の秘密に関わる業界から永遠に去ったんだ。

これが、*Merry goes all round*、通称回転木馬騒動と呼ばれ、今も関係者の間で恐れられる伝説の概要だよ」

俺がそう語り終える頃には、質問をしてきた本人はカウンターに突っ伏して肩を震わせ、時折引きつった声を漏らしていた。他人事だと思つてこいつう。

客の少ない時間帯。店に俺しかいないタイミングを見計らつてやつてきたと思つたら、コナン君はどこまでも無邪気な笑顔で『安室さん！ メリーゴーランド騒動つてなあに！』と聞いてきた。酷い不意打ちに面食らつて危うくカップを落としかけると、

『教えてくれないと安室さん達が不知火さん達に盗聴器を仕掛けたことを本人に言っちゃうよ!』と速攻でトドメを刺しにきた。

いくら何でもこんな一方的な取引など初めてだ、極めて遺憾である。

「……………これで満足したかな」

「うん、よく分かった」

ヒイヒイ苦しそうに呼吸しながら身体を起こしたコナン君の声は、ネットスラングで言うところの草まみれな状態であった。腹立つ。

ここまででの情報を彼に与えたであろう人間にも腹が立つ。あいつらはこう、何でいつもいつも……………! よりにもよって、この話を俺にさせるなんて……………!

「あのねえ……………君はそう笑ってるけど、これは本当に恐ろしい話なんだよ」

「分かるよ。オカルト的な意味じゃなくて、一方的に身元を明かされるって意味ででしょ?」

「ああ」

当時の俺達はその話を聞いて心の底から震え上がったものだ。今でも変わらない。

だからこそ彼女達との接触には細心の注意を払っていた。盗聴器だってコナン君のそれに便乗する形で利用した。彼女の前の俺はごく善良な店員であった……………はずだ。

ただ、いつそバレる前にバラすのも有効だと思って積極的に話しかけていったのは、

ちよつと不味かったかもしれない……。

「そもそも国を挙げて保護してる人が住んでる場所に、どうしてそれだけのスパイが盗聴器を仕掛けることができたの？」

「……名目上は彼らの保護として日本の警察庁が預かっていたが、実際は捜査の他に彼らの研究も目的だった。それを日本で独占的に行うことを容認する代わりに、スパイを送り込んでも黙認しろ、という上層部同士の暗黙の了解があったらしい」

「うわあ……」

「……それを知っていたかは分からないが、彼らは全力を尽くして反抗したんだ。効果は絶大だったよ。スパイ達は全員残らず精神的に再起不能にされたし、最終的には研究結果諸共自身に関する全てをこの世から消したんだから……本当に、大したものだよ」

そして今や全世界に対して全力で喧嘩を売る面白テロリスト集団と化し、かつて自分達を食い物にした連中の胃を本気で殺しにかかっているという痛快感な皮肉っぷりには思わず舌を巻く。実害は無いし、俺も正直ほつといても良いんじゃないかと思ってる。むしろもつとやげフン。

「不知火さん達がどうやってスパイの居場所を特定したのかはもう分かっているの？」

「まあ……断言はできないけど、彼らの才能や寮の周りにあった物を鑑みれば、ある程度なら予想がつく。全くの不可能ではなかったはずだ」

「へえー」

「……ただし、さつき話した一般的な概要のシチュエーションだけの場合でね」

「えっ」

この話の本当に怖いところはここからである。この際だ、向こうから首を突っ込んできたのだから巻き添えにしてやれ。

さつきのお返しだと言わんばかりに意味深にニヤリと笑いかけてやれば、ようやくコナン君の余裕の表情が崩れた。我ながら大人げないと思う。

「居場所を特定されるスパイは、一晩に一人ずつ。自分の番が来るまでに、同業者が次々に心を木っ端微塵にされて国へ帰っていく話と、原因であるその噂を耳にした奴も当然いたんだ」

「対策した人もいたんだね？」

「その通り。さつきと情報をまとめて、メリーさんに目をつけられる前に国に帰ろうとしたんだ。だが、無駄だった」

「……どうなったの？」

「そいつがフライトを終えて帰宅した時にはもう既に、自分の仕掛けた盗聴器を持った人形が自宅のベッドで座って待っていたらしい」

「ヒイ」

この話をそのまま解釈すれば、メリーさんは海を越えて個人の家を特定できる上に、そこへ何の痕跡も残すことなく侵入できる存在なのだ。しかも飛行機を超える速さで。ちなみにそいつはその日のうちに辞職し、ついでに人形と電子音声に対する重度の PTSDを患って今も通院中であるとかそうでないとか。

「これは最も極端な例で、他にはメリーさんからの接近通知が来ている最中に車で逃げるといふパターンが多かった。……が、結局正確に追跡されて先回りされることには変わりなかったそうだ」

「一体どんな手段を使ったの……？」

「……それがまるで分からないから、今も尚恐れられているんだよ」

どれだけ恐ろしかろうが被害届なんて出せるわけが無い。あのダンガンロンパ被害者を保護している寮に仕掛けた盗聴器をメリーさんによって自宅まで返却されました？ メリーさんの捜索より自分が起訴される方が早い。文字通り泣き寝入りするしかないかった。

つまりメリーゴーランド騒動とは、ファンシーなイメージの強いその呼び名に反し、身バレという潜入者からすれば最悪の現実的な恐怖の上に、常識が通じないオカルト的な恐怖が駄目押ししの如く追い打ちをかけ、その両面からターゲットを延々と苛み続けるという、史上最恐の伝説なのである。

ちなみにこの騒動が元ネタとなり、原因不明で身バレすることの隠語として「メリーする」という動詞が関係者の間で使われるようになったのだが、それはまた別の話だ。「そっか……そこまで凄いのなら、沖矢さん達が味方にしたがるのも当然だよなあ。対組織の情報戦で圧倒的に有利になれるって」

「おい待てそれは聞き捨てならないぞ」

「あれ？ 安室さん達は違うの？」

「彼らはもう解放されたんだ、二度と薄暗い世界に関わらせたりするものか！」

「……じゃあ何で今更盗聴器を手配したりなんかしたの」

コナン君の冷めきった視線が突き刺さった。

そうだよ。赤井が彼にここへ来るように仕向けたのは、公安も彼らを調査していることを知っているからに違いない。まんまとアリバイ証明に利用されやがってザマーミ口と言いたくてもお互いにそう言えない状況であった。ちくしょう。

「……………まあ、彼らが協力してくれるなら、これ以上心強いことはないかなー、とは思っていたよ」

「安室さん……」

「ただ、彼らには普通の一般人として平穏に暮らしてほしいという気持ちも本当なんだ」

「安室さん、もう何を言っても言い訳にしか聞こえないよ」

「分かってて決めるのは止めてくれないかな」

「だけど、彼らに平穩に暮らして欲しいと願っているのは、本当に本当なんだ。」

「だと言うのに！ 彼らは自ら積極的に世界の犯罪者や警察に喧嘩を売っているのだから、なんかもう果てしなく遣る瀬無い。どうしてこうなってしまったんだ……。」

「こうして、散々俺の心の古傷を抉り倒したコナン君は満足して去っていき、ようやく解放された俺は安堵の溜息を大きく吐いた。流石にもう、コナン君からの報復は終わったと見ても良いよな？」

「そして、その日の深夜。」

『ついにサイコロにしてやられた』

ベルモットから送られたそのメールには、その夜に行われた大陸系ファイアとの取引で、銃火器の見返りとして受け取った札束が全ておもちや銀行の百万円札に替えられていたという趣旨の内容が、困惑気味に綴られていた。

DICE日本初上陸の速報に、俺は力強くガッツポーズを決めた。

11. 「いま、あいにゆきます」

それへの疑惑が生じたきっかけは、不知火さんの研究教室で読んだ本だった。

「転校生」の動機が発表されてから間もない頃、校舎内で解放された『超高校級のサイキッカー』である彼女の研究教室は、その称号の強烈なイロモノ感とは裏腹に、とてもシンプルな内装になっていた。例えるなら、学校の保健室と図書室を足して二で割ったような。ソファとテーブルと簡易ベッドがある部屋に、本棚が数列並んだだけ。

ただ、その本棚にビツシリと詰め込まれているのは、「洗脳」だの「催眠術」だの「犯罪心理」だの、サイキッカーと言うよりどこかサイコな匂いのあるタイトルの本ばかりで、相変わらず彼女を悪者に仕立てようとする黒幕の意図が透けて見えた。

そんな一見無難そうな部屋をあてがわれた不知火さん本人は、凶器を探すために部屋を一周し、「本のカドは処分に値する」と苦し紛れにトチ狂ったことを言い出して、それを実行しようと試みた。いつもの重労働に加えて更に重量のある書籍まで持ち運ぶ気が。放置すれば彼女の命と引き換えに図書室を空っぽにしかねない言い分を僕達が必

死に論破したことで、何とかそれを思い留まらせることに成功した。

あの時彼女を止められて本当に良かった。最近解放された僕の研究教室から真に処分すべき液体類——毒薬が見つかり、彼女は嬉々として超重量の危険物を持って校舎の五階と中庭を往復するようになった。いやもう、本当にお疲れ様です。

僕も手伝おうとしたが、体力仕事は私に任せると言われて断られてしまった。暗にボクを貧弱だと見なしているように聞こえたが、そこは敢えてスルーしておいた。

春川さんの研究教室についても、本類と同じ理由で手を出すことを止めている。自分が見張っておくからと、初めとは違う意味で春川さん本人が説得したのだ。不知火さんも春川さんの良心に任せると言って信頼し合っている。あの二人はああ見えて結構仲が良い。

まあとにかく、不知火さんのシンプル過ぎる研究教室は明らかに何かが隠されていて、うな雾囲気だったけど、誰がどう見ても立派なロシアイノイローゼを患っている彼女本人のことは、今更誰も疑わなかった。

そんな研究教室で偶々読んだ一冊の本。洗脳が云々というタイトルのその本の中で見つけた、人の記憶に関するある一文。

『記憶とは、互いに関連し合っている知識である』

確かに、記憶喪失の人物が心の琴線に引っかかる何かに触れた途端、全ての記憶を取

り戻すという例はよく聞く話だ。

しかし待てよ。記憶を自ら封じている僕達は、その前提から何かがおかしくないか？
僕達にロシアアイを促したいモノクマが、新しい刺激として広げていくエリアで見つける思い出しライトで小出しに記憶を解放していつているけど、それって、変じやないか？

どうして、*“超高校級狩り”*の出来事を思い出した時、そうなった理由が分からなかったのだろうか？
僕達が受けた記憶の封印は、それに連なる記憶を連想すらできないほどに強力なものだったのか？

それだけじゃない。不知火さんの動機ビデオを本人抜きで見ってしまったとき、彼女への疑惑が強くなったのは、あのお葬式の記憶の中で見た遺影の中に、彼女の写真だけ無かったせいだった。一人だけ死んでないやつが一番怪しい、と。

でも、春川さんだけは言うことが違っていた。その記憶は思い出していないから、自分とはよく分らない、と。

確かに春川さんはその時の思い出しライトを浴びていない。だけど、その記憶が本物であれば、皆から遺影の話をされた時に彼女もそれを思い出しても不思議ではない。

別の思い出しライトで遺影よりその後の記憶も思い出せたのに、今も尚遺影の話だけをピンポイントで思い出せないなんてことが、あり得るのだろうか……？

今思えば、あの時の彼女の反応は、まるでそれを最初から知らなかったかのようだった。

そこまで考えが至った僕のこめかみに、嫌な汗が流れる。

僕達の記憶は、一体、どこから……？

「一見ダメそうでも、自分さえ挫けなければ案外どうにかなるもんだね。よお待ってたぜ」

「もう許してえ！」

最初は皆から無駄な作業だと呆れられていたが、今や道具を補充してくるモノクマーズを逆に待ち構え、所定の場所に補充されたばかりのそれを奴らの目の前で奪い去るという悪意に満ち溢れる嫌がらせにドハマリしている不知火さんを見ていたら、確かにどうにでもなりそうな気になれた。

そうだ、きつと大丈夫。

皆と一緒なら。

*

彼は今、五年前から語り継がれる伝説を、嫌と言うほど自らの五感で味わっていた。

彼は、見守りサービス（※年下の上司談）から引き離された保護対象を直接見守れという、彼の上司からの命令を忠実に実行していただけである。それなのに何故、自分はこんな目に遭っているのだろうか。思わず思考を彼方へと飛ばしかける。

否、伝説を生み出した彼らに関わる以上、こうなることも十分覚悟していた。それがもたらす恐怖が想定を遥かに超えるものだった。ただそれだけなのだ。

「へー、警視庁の、警部補の、風見さんね？　ほうほう、なるほど」

話の流れ的にささざるを得なかった警察手帳と運転免許証。ダミーではない。繰り返し、それが今、家族連れで賑わう夕食時のファミレスのテーブルの上に、開けっぴろげに、

無防備に晒されていた。その中身を保護する透明な厚めのビニールには、マジマジと興味津々に覗き込む伝説の顔が淡い色彩で写っていた。そろそろ泣きたい。

本当に、何故こんなことに。

警視庁公安部に所属する警部補の彼は、たった一時間前に自らの身に起きた出来事を想起する。

保護対象の行動の記録後、ひとまずそれを纏め上げようと引き上げ、その際に拾ったタクシーの助手席に乗り込み、行き先を告げてからその数秒後。

ゆつくり発進したタクシーの中、ふと視線を上げた彼がバックミラー越しの後部座席に見たのは、あたかもずっと彼と一緒に居ましたと言わんばかりのシレッと顔で相乗りしている伝説ペリィさんであった。声も出なかった。

日が落ちていたためフードは外しており、ただ真つ黒なコートを着ただけの無害そうな未成年っぽい女性が、同じタクシー内の後部座席に座り、手元のスマートフォンをいじっていた。上司から聞かされていた情報よりもずっと幼く見える。おそらくタクシーの運転手には、彼がタクシーを拾うべく腕を上げていた頃には既にその背後でスタンバっていたであろう彼女が、彼の妹辺りの身内に見えたのであろう。違うそいつ都市伝説です。

痛々しい沈黙が降りる車内。全く無関係なドライバーでさえただならぬ空気を肌で感じるほどであった。果てしない道のりに思えたが、地獄のようなドライブは十数分で無事に終了。そして伝説と共にそこへ下車した次は、地獄のような立ち話が待っていた。

「へえ、やっぱり警察の人なんだ」

到着地である警視庁の建物を見上げて伝説が呟いた。どう頑張っても言い訳できない状況である。突然目の前に現れた伝説に対してどう対応して良いのか全く分からぬ彼がひたすら突っ立ったまま沈黙していると、伝説の方から口を開いた。

「いやあのね。私の友達が誰かにストーカーされてるって相談してきてさ。その正体があなただと確信できたから、今日はずっと証拠を撮ってたんだ」

伝説は目の前ではなく己のすぐ背後にずっといた。しかも今日だけの話ではないらしい。その事実には彼は目眩を覚えた。全く気が付かなかった。これが自分の不注意だけのせいだとしたら今すぐに眼科や耳鼻科へ駆け込みたい。その前に辞表を書きたい。

一体いつから哀れな自分は伝説に目をつけられていたのか。皆目見当がつかぬ彼に、伝説は持っていたスマートフォン画面を操作し、それを見せてきた。

そこには彼自身の後ろ姿が撮影されたムービーがあった。この空の突き抜けるような青さ、おそらく自分が今朝警視庁を出てすぐの時間帯であろう。それに気づいた彼はその場で死にそうになった。

その後、ムービーはスキップを多く繰り返しながら進んでいく。保護対象が働く保育園が見える場所に位置する雑居ビルのカフェの窓際に陣取った自分。時折小型のオペラグラスを使用し窓の外を見ている自分。心当たりしかない場面しか映っていないかった。たまに自分がオペラグラスを向ける先の保育園をズームしていると、伝説の

仕事の細やかさが窺える。

その後も移動する彼を追うカメラワークは完璧。常に彼の視界に入らぬように動いていたが、意識して隠れている様子もなかった。ターゲットである彼との距離も、近い時では僅か数メートル、離れていても数十メートル。盗撮や尾行と呼ぶにはあまりにも堂々としている。紛れもなくプロの御技であった。それは世にも貴重な伝説視^{メリーさん}点の動画であったが、彼の頭はその価値を理解する前に状況の理解を拒否していた。

やがてそのムービーは、ついさっきのタクシーを降りるところで終了した。ラストは警視庁の仰視である。己が主演のドキュメンタリー映画でも見終わったような気持ちであった。拍手は要らない。

「おにいさんがどこのもんなのか、キツチリ教えてもらおうよ」

今更どう足掻いても逃げ切れる気がしなかった彼は、その要求に素直に従った。しかし幸か不幸か、彼はその素直さのおかげで、もし逃げたら週刊誌に動画をリークするというSAN値直落したなしの脅迫を聞かされる事態だけは回避できた。

そして、伝説は小腹が減ったと宣い、場所を近くのファミレスに移し……話は冒頭に戻る。

「もうこんなことは二度としないでくださいよ? 私の友達が嫌がってたのもあるけ

ど、あなたもそんなことをして何になるんですか。もつと有意義なことに時間を使ってください」

奢りのパフエを無心に頬張る伝説の語り口は、まるで夜遊びをしていて補導された少年に交番のお巡りさんが懇々と説教を言い聞かしているような人情味に溢れるものであったが、言い聞かされている方の心情はまるで大震災の後に台風と竜巻が続けざまに通つていったような荒れ具合であった。もはや何も残っていない。

彼の前に置かれる一口も付けぬうちに冷えたコーヒーに映るその顔からは、一切の感情が抜け落ちていた。

こうして伝説に身バレした挙句最も高価なパフエを奢る羽目になった警視庁公安部に所属する警部補の彼は、地獄のファミレスから解放された後に「メリーさんにメリーされました」という短い報告メールを震えが止まらぬ指で作成し、上司へ送信した。

翌日、非常に厳しい上司から珍しい本気の労りの言葉を直接かけられた。小学生に一杯食わされたこの前の件とは異なり、今回ばかりは流石に相手が悪過ぎたようだ。何のお咎めも無かった。

そして経緯を聞いた上司によってパフエ代は立て替えてもらえたが、コーヒー代については一切言及されなかった。知ってた。

私達に付けられた虫さんは、FBIと日本の警視庁からのものだったようだ。

警視庁からのそれは、ハルちゃんをストーカーしていた本人に直接訴えた数日後には17人全員のところから全て取り除かれたらしい。ずっとダンマリで険しい顔してて不安だったけど、ちゃんと話を聞き届けてくれる人で助かった。パフェもとっても美味しかったし、ありがとう警視庁公安部所属の警部補の風見さん。

さて、残るはFBIの虫さんだ。私が江戸川くんにあげたように、適当な理由で処分した人はチラホラいる。だが、タイミングが掴めずに未だに処分できていない同級生もいる。私のように堂々と警察とかに喧嘩を売れる立場じゃないカエデちゃんなんてネットワークスを改造されてるんだもんなあ、そうそう上手く手放せる機会は無いだろう。何とかできないだろうか。いつそ本当に米花町に呼んでみるとか？ いやいやそれは流石に無い（フラグ）。

「アメリカのお巡りさんのストーカー行為って、日本の警察に訴えられんのかなあ」

館蜜を食べながら何の気なしに私がそう呟いたタイミングで、この店に私を引っ張り込んだ隣の江戸川くんはちょうどその時口にしていたオレンジジュースを気管に流し込んだらしい。ドえらい噎せようである。おいおい大丈夫か。慌ててその背中を撫で

たら酷い震えが伝わってきた。

「どっ、どどっ、ケホッ、どうして急に?」

「うん? 何が?」

「アアアメリカのお巡りさんがどうのつてゲッホ言つてたでしょ?」

苦しそうに言葉を震わす江戸川くんが痛ましい。もう少し喉を休ませてやってからでも遅くはないと思う。

「ああ、アメリカのお巡りさんなあ。どうやら私だけじゃなくて友人にも盗聴器仕掛けてるみたいでねえ。いい加減どうにかできないかって相談されたんだ」

「へ、へえー、それは大変だね……」

そう、大変なのだ。これは鬼ごっこグローバルエディションも視野に入れなくてはならないかもしれない。世界の果てまでついてQだ。

「ストーリーですつて??」

そして何故ここで彼が出しやばってくるのだろうか。良い笑顔で身を乗り出してくるサンドのいさんは相変わらず胡散臭かった。

「それはいけません! 例え相手がアメリカのポリ公であろうがそんな非道な真似は許してはいけません! どうです、不知火さん。ここは一つ僕に任せてくれませんか?」

「アレ私あなたに名乗ったつけ……?」

「アアアア皆さんが呼んでいるのを聞いて覚えたんです、ごめんなさい」

やっぱりこの人怖いわ。あまりにサラリと自然に名前を呼んできたもんだから、つい最近まで私達を観察していた警察関係の人かと思ってしまったではないか。

しかし何だ、このお前が言う的な気配は。隣の江戸川くんから濃厚に漂ってくる気がするが、きつと気のせいだろう。

「そ、それでですね。実は僕、こう見えて私立探偵もやっているんですよ。ほら、このお店の上に事務所を構えてらっしゃる毛利小五郎先生の弟子を名乗らせてもらっているんです」

「はあ」

「ですから！ あなたのご友人にひつつく不埒なFBIの連中を、僕の日本から叩き出す大義名分をいただけませんか！」

「どうしたおにいさん」

必死過ぎて怖い。何だか物凄い私怨を感じたがこれは気のせいではない。彼とFBIの間に何があつたのだろう。非常に気になるが無闇に首を突っ込んではいけない気がした。

何はともあれ、ただの他人である私達のためにここまでやる気を出してくれるのはありがたい。私怨混じりではあるが、確実に仕事をしてくれそうな気もする。

だが、しかし。

「せっかくの申し出ですけどお断りします。」

「何故!?!」

「ごめんなさい、探偵なら間に合ってるんです」

私には頼もしい探偵の友人がいる。流石に今直面しているFBIの耳を誤魔化す件については彼も苦笑いするしかないのだが、他のことなら迷いなく彼に相談しに行くらしいには信頼している。ハルちゃんのストーカーの居場所を推測してくれたのも彼なのだ。身元が分かったら逃げられぬように映像で証拠をおさえておくと教えてくれたのもそう。

そんな彼を差し置いて、何処の馬の骨とも分からぬサンドのいさんを雇うことは憚られた。

「せめて警察関係者であれば……あ、風見さんがいるから大丈夫か」

「God dam n!!」

サンドのいさんはそこを叩き割らん勢いで両の拳をカウンターに打ち付け、やたら綺麗な発音で咆哮した。さつきから本当にどうしたんだおにいさん。いつそ心配になっってくる。

退店後、才卒回線のチャットを覗くと、カエデちゃんから例のネックレスを無事に処

分できたことを報告された。やはり探偵の彼がどうかしてくれたいらしい。ネットワークスそのものの処分ではなく、中身の虫さんを無効化する方針にしたようだ。電子レンジ近くにネットワークスを置いて電磁波で狂ったようなシチュエーションをそこはかたなく演出し、実はその裏で対応する周波数をミウちゃんに遠隔で変えてもらったそう。相変わらず我が同級生達はハンパねえ。

その話のついでに、カエデちゃんが米花町で開催されるコンサートイベントに参加せざるを得なくなったことを教えられた私は、見事に肝をつぶした。

12. 「フラグは〇〇するもの」

モノクマが死に損なつた不知火ちゃんに治療までしたことを疑問に思ったことが始まりだった。

その時は色んな意味で怪しい不知火ちゃんの方ばかりを疑つちやつたけど、後で冷静によくよく考えてみれば、おかしいのはモノクマの方だったんだよな。

だって、誰よりもコロシアイや処刑を待ち望んでいた奴が、死にかけてた奴を助けたりクロのおしおきを取り止めたりしたんだからね。

つまり、あいつにとつてコロシアイより優先させるべきものがあるわけだ。それが何であるかに気付くのは早かった。校則^{ルール}だ。

根拠はある。死に損なつて学級裁判所に這つてやつてきた不知火ちゃんと、その時まさにクロへのおしおきをしようにしていたモノクマのやり取りだ。

血みどろでありながら確かに生きていた彼女を見て物凄く驚いていたモノクマだったけど、それでも強引におしおきを執行しようとする、不知火ちゃんはこう言ったの

だ。

殺人未遂のクロをおしおきできるルールは無いはずだ……ってね。

それを聞いた途端、モノクマはとても悔しそうにしながらもおしおきを中止した。その流れで不知火ちゃんを治療することも決めたのだが、その理由つてのが、ちゃんとコロシアイで死んでほしいからというものだった。

モノクマがオレ達にコロシアイをしてほしいことは確かだけど、飽くまでルールに則った形で、という前提があるらしい。

これだけ大掛かりなものを用意しといて、コロシアイなんてトンデモナイことをさせる癖して、最優先しているのはルール秩序だなんて……なんだか不自然だよね。

理不尽なルールを無理やり課されるなんてまるでゲームみたいだ、と苦笑して……ふと、思ったんだ。

このコロシアイ生活つて、誰かの見世物にされているんじゃない？

それまで不確かな感覚でしかなかったけど、動機としてモノクマから渡されたこのカードキーを使ったあの一件で、はつきりとした確信に変わった。

あのカードキーは、結論から言えば、あのえげつない罫だらけの地下通路——デスロードの先にある扉に対応するものだった。

オレ達に行動を起こしてほしいモノクマのことだから、現時点で解放されていない場所の鍵なんて渡してくるはずがない。そう思つて、夜の間には暇潰し感覚でデスロードを踏破していそうな不知火ちゃんをお供に、オレはそこを攻略した。

と言うか彼女は本当に踏破してたらしい。トラップが来るタイミングの察知や身のこなしが完璧だった。重い鉄格子の扉を開けるのだけであつという間。とんでもない馬鹿力だよ。

でも、それならどうして不知火ちゃんは、地下通路を突破したことを他の皆に言わなかったのか。

その理由は、地下通路の最奥の扉をカードキーで開けた時に現れたモノクマが、全てを話したことによつて判明した。

「……知つてたの?」

「……………」

地下通路を逆戻りし、入口のマンホール下まで戻つた時、オレはようやくその一言が口から出せた。ひたすら酷い気分だった。

オレの質問に不知火ちゃんは答えない。ただ、困つたような視線をこちらに投げかけ、肩を竦めるだけ。

「おい、何とか言えよ」

「……難しいなあ」

何が難しいだ。思わずカツとなって不知火ちゃんの胸倉を掴み上げたが、それでも不知火ちゃんとは相変わらず困った目をするだけ。

「言いたくても言えないんだ」

「何が……、！」

そこで初めて気付いた。不知火ちゃんの視線が、上下左右にオロオロと揺れていることに。目の前のオレではなく、別の何かに怯えているかのように。

何に警戒しているんだ？

どうして、言いたくても言えないんだ？

頭の中で点と点が繋がった。

前々から考えてたことだった。この箱庭生活が誰かの見世物であろうとなかろうと、オレ達を監視する目は必ずあるはずだと。

それもモノクマ達のような分かりやすいものだけじゃなくて、オレ達に分かりにくい形で存在し、常にこちらを監視しているようなやつが。

むしろそうでなきやおかしい。黒幕が事件の全容を把握していなければ、あの学級裁判だつて成り立たない。

不知火ちゃんも、オレ達には見えないその監視の存在に気付いていたんだ。オレ達に

伝えたくても、そのせいで迂闊に口にできない何かを抱えている。

黒幕に知れたら、不知火ちゃんの都合が悪くなるようなこと。もしくは、オレ達に知られたら、黒幕の都合が悪くなるようなことを。あるいは、その両方。

不知火ちゃんの自棄を起こしたような暴走っぷりの理由が分かった気がした。

そして今現在の、あの地下通路の先を見てもさほど動揺していなさそうなこの態度。

……そうか。なかなか不知火ちゃんから疑惑を払拭できなかったのは、彼女が本当に黒幕であるからか。

ただし、モノクマ達とは違う意味での。

「……チッ」

それっぽく忌々しく舌打ちしてから不知火ちゃんを離す。彼女は相変わらずオロオロして手を宙に彷徨わせ、齒噛みしてウーウーと小さく唸っている。まるでオレに真実を伝えることができなくて悔しがっているような。

オレの演技にすっかり騙されてやんの。まあそのつもりなんだけど。

ついでに、不知火ちゃんは演技の類ができない馬鹿正直な性格であることも改めて確認できた。何度も事あるごとに絡んで探りを入れてみたけど、そりやどれだけ疑っても足りないわけだ。元々隠していることが無いから、出てくるものも無いってね。いや、この場合は教えられないだけで、隠す気は無かったと言うべきかな？

全ての事が終わったたら黒幕から演技の指導でも受けたらどうか、なんて考えながら、オレはマンホールから出た。

それからしばらくして、オレと同じく何か勘付いたらしい最原ちゃんから、コンピュータールームで全員参加のゲームをすと言われた。バーチャル空間に意識を移してそこで何かするんだとき。皆は珍しいゲームに色めき立ったけど、オレには最原ちゃんがモノクマの目を意識しているようにしか思えなかった。

オレは敢えて不知火ちゃんが被る予定のヘッドギアのケーブルを中身だけ切断した。彼女に限っては、何も知らない方が良い働きをしてくれるような気がして。

そしてオレの目論見通り、不知火ちゃんだけはバーチャル空間の中に来られなかった。

ただ、後から分かったことだけど、人間ちゃんによれば、不知火ちゃんの脳波。パターンは特異過ぎて元から対応できなかったとか。

何はともあれ、バーチャル空間に参加できなかったことでできたオレ達との認識の差がどう作用するのか、見ものだね！

「不知火ちゃん、是が非でも協力して欲しいことがあるんだけど」

「嫌な予感しかしい」

**

*

カエデちゃんが米花町のコンサートイベントに来るとい話だが、実はその裏に複雑な思惑が絡んでいるらしい。

「……えつと？ つまり？ カエデちゃんを取り込みたがってるそのナントカグループとやらがどうにも怪しいという認識で良いの？」

『ザックリ言うとな』

この才卒回線を使った電話の相手こと、我らが「超高校級の探偵」サイハラくんが言うには、この度カエデちゃんに参加することになったコンサートイベントを主催する会社には、どうもききな臭い気配があるらしい。何でも子供のピアノの発表会や楽団の演奏会など清廉潔白そうなイベントを隠れ蓑にして、妙な取引を行っているかもしれないのだとか。

その会社は、以前から地元で評判のカエデちゃんに対するグループ傘下の音楽教室へ

の勧誘がしつこく、この度ついに教え子の親御さんから籠絡され、可愛い教え子に発表会に出たいと頼み込まれる形でそのイベントに参加せざるを得なくなつたそう。

カエデちゃんを含めた元「超高校級」達は、その気になればもつと有名になれる実力を持つているけど、基本的に目立つ行動は極力避けている。その理由は言うまでも無い。

奴らはカエデちゃんの才能にだけ目をつけ、本人の意思は無視し、大手のスポンサーや更なる顧客を集めるための広告塔に仕立て上げるつもりだろうと、サイハラくんは推測していた。控えめに言つて胸糞である。

サイハラくんの方は、最初からその会社について調べていたのではなく、別件で依頼されていた人物の素行調査で違法なブツの取引の存在を知り、依頼者から更にその先を調べて欲しいと頼まれて調査を進めた結果、その会社へぶち当たつたんだそう。まさか現在進行形でカエデちゃんに関わつてゐることだとは思つておらず、慌てて私に相談してきた次第であるそう。

ちなみにその取引の決定的証拠であるブツの保管場所について、サイハラくんはその会社が所有するホールが怪しいと睨んでおり、そのホールがある場所が米花町だと言ふ。そこを探る良いチャンスだということもあつて、イベントへの参加を決めたんだとさ。

この土地何かに呪われてんじやね？

「んで、キミは私に何を頼みたいの？ メリーチャレンジ？」

『アレはその、卒業式の打ち上げ的なノリだったから……いや今回はそっち方面じゃなくって、楓さんの身辺警護をお願いしたいんだ』

「警護!?! 何でそんな必要があるの!?! カエデちゃんを危ない目に巻き込むつもりならいくらキミでも承知しないぞ！」

『……他でもない楓さんが乗り気になっちゃったんだよ、あまりにしつこいからこの際自分も参加して潰すのに協力したいって』

「Oh……」

『だから方が一のことを考えて、キミに任せたいんだ。勿論報酬は出す』

「分かった任せろ。当日の食事奢ってくれたらそれで構わないよ」

『……ありがとう、本当に頼もしいよ』

サイハラくんによれば、疑惑のあるその相手は銃器を扱っている可能性もあるかもしれないとのこと。もし自分の目的が相手に知られ、カエデちゃんにもそれが向けられるという最悪の事態を想定したら、自然と私に頼るしかなかったのだそうさ。

「そのイベント、どういう予定になってんの？」

『午前の部は子供達の演奏発表会。昼休みを挟んで、午後の部は会社系列の楽団やソロ

の音楽家の演奏会。楓さんの演奏はそこに割り当てられているらしい』

「ソロで弾くのか。カエデちゃん、人前で弾くのがよくオーケーしたね」

『教え子に懇願されたら流石に断りきれなかったみたいで……』

「自慢の先生なんだねえ」

『こんな案件絡みじゃなかったら素直に喜べただけだなあ』

困ったようなその口調に、向こうで苦笑いするサイハラくんの顔が容易に想像でき
る。

『じゃあ、とりあえず招待券を……あー、ごめん、こっちに取りに来てもらえる?』

「そのつもり。そちらから送ろうにも、こっちの住所はまだ決まっていしね」

『まだ決まっていんだ……』

「希望の条件が厳し過ぎるんだよ……!」

そんなこんなで、今の私の手にはそのコンサートイベントの招待券の束がある。アン
ニヤロありつたけ全部押し付けてくれやがった。

「あ」

あの真つ黒な姿も最早お馴染みとなつてきた。不動産屋の前に立つてマジマジと店頭のチラシを見ているその人に気付くと、早速そちに走つていく探偵団。

「こんにちはー!」

「お姉さん、お部屋探ししてるの?」

「まだ見つからないのか?」

「小学生にまで心配されるつて言うアレね。何とも言えないよねえ」

乾ききつた無感情な声からは彼女が色々と疲れていることが窺えた。表情は見えないのに結構分かりやすいから不思議だ。

「最近なんか不動産屋のスタッフさん達も私を見慣れてきててね。ホラ見て、手を振ると振り返してくれるんだ、あのおにいさん」

彼女が虚ろに手を振れば、受付のにーちゃんが苦笑しながら手を振り返るのがガラス戸越しに見えた。そんな彼らに不知火さんは「おうち探しの真つ黒さん」と呼ばれ、ちよつとした都市伝説的な感覚で親しまれていることは、オレも本人も知らないことである。

「えつと、まず一番の条件が、警察の人達との関わりが少なくて済みそうなところ……だったけ?」

「この町という前提がある以上は何処であろうと叶わないと思うのね」

「それ以前にツツコミどころが多過ぎる要求じゃないかしら」

「そこは敢えてツツコミまないと嬉しうかな灰原ちゃん」

「早いところあなたの同居人とやらを警察に突き出せば万事解決よ」

「勘弁したげて」

不知火さん本人は決して悪人じゃないんだけどなあ。意外と苛烈なあの性格はともかく。

あからさまに怪しい不知火さんが町のあちこちに出没するようになってから、本当に危険な部類の人間を見かけることは以前より明らかに少なくなった。彼女自身が注意喚起の広告のようになっていて、子供達の警戒心が強くなっているからだ。

それだけでなく、不知火さん自身も本物の不審者を見かけ次第撃退しているから、この近辺の治安はちよっぴり良くなっているらしい。例のハッシュタグの目撃談によれば、こないだも露出狂の局部を正面から蹴り飛ばしたようだ。頼もし過ぎる。

「ん？ まだ家が決まってるってことは、ねーちゃん今何処に住んでんだ？」

「今は友達のところを転々としてお世話になってるんだよ、同居人と一緒にね」

「へー、そうなのか！」

元太ナイス。おそらくそれは今最も公安とFBIが知っていた情報だ。これ

で取引材料が増えた。誰とのとは言わない。

最近何となく気付いたことだが、不知火さんから話を聞き出すには、こうして正面から堂々と聞くのが一番確実なようである。質問すれば大体何でも喋ってくれるのだ。

あの17人に関しては、その秘密を暴くために盗聴器や尾行などの手段を使うと、ますます守りが堅固になり、最終的に強烈な反撃をくらうことになる。赤井さんや安室さんの話を聞いて俺が学んだことである。

大人になると汚い手段しか使えなくなるのかなあ。中身は高校生のオレはそう遠くないはずの未来に漠然とした不安を感じるのであった。

「それじゃあ歩美のおうちにお泊りしてほしいなあー！」

「僕のおうちも良いですよー！」

「ここら止めなさい、例えば親御さんが許可したとしても、他人をそう簡単に家にあげちゃダメだよ」

「えー？ でもねーちゃんは良い人じゃん」

「そう言ってくれるのは嬉しいんだけどね、慣れ過ぎるのは恐ろしいんだけどキミ達。油断して気がついた時には学校の先生がアメリカのお巡りさんだったり、自宅の階下に公安のお巡りさんが潜んでたりすることもあるかもしれないんだぞ」

だから、その、ワケの分からないタイミングで唐突に異様な勘の鋭さを発揮するのは

本当に止めてほしいんだけど。本っ当に心臓に悪いんだけど。

推理もへったくれもすつ飛ばして核心に迫るのホントやめて。

「そ、その、色んなところのお巡りさん？ が、どうしてそんなところにいると思うの……？」

灰原が必死に笑いを堪えながら訊ねた。おいバカ何でそこにツッコんだ。

「え？ いや、さっきのはただの言葉の綾で大した根拠なんて無いけど……国外からの捜査官が情報を集めるには、そこそこ広い地域の濃い情報が集まりやすい学校に英語教師として潜入すれば自然な形で仕事しやすそうだし、公安の捜査官が自ら動くとなったら、情報を一つも逃さないように事の渦中にいる人物にこれでもかと接近するだろうなあ、とか？」

何なの？ ホントもう何なのこの人？

ただの勘だけかと思っただけならかなりの的を射た推察もしてたよこの人、怖い。

勘^{天然}と推理^{ガチ}の境界線がまるで分からないとか、とんでもない難敵じゃないか！ この人が組織の人間じゃなくってホントに良かった!!

密かに恐慌するオレの隣で、灰原はますます苦しそうに引きつる口元を引き締めていた。何が面白いんだよ灰原あ！

「まあ、今に限って言えば、家よりも優先して見つけたいものがあるんだけど……」

「……何を探してるの？」

「シユレッダーを……」

「シユレッダー……」

今度は何を言い出すのやら。この人は本当によく分からない。

この後オレは、オツチャンの探偵事務所にそれがあることを思い出し、不知火さんをそこへ案内するのだった。

psyche:あの招待券、こっちでできた知り合いに配布することになっちゃったんだけど……

dete:良いんじゃない？ 普通の一般人が演奏会として楽しむなら何の問題も無いんだから

13. 「運命が絡まり過ぎて事故つてる話 ①」

思い出しライトによる記憶は偽物かもしれない。引いては、自分達のこれまでの記憶も怪しい可能性がある。

そう仮定した僕は、入間さんのところへ相談しに行った。赤松さんの事件で即席でドローンを作ってくれた彼女であれば、きつと知恵を貸してくれるだろうと期待して。

『王馬はまあともかく、不知火やオメーまでオレ様のところに来たとなつたら……何か掴めたのか……?』

『ええつ、不知火さんも?』

『もつと持ち運びに優れて頑丈なスコープを作ってくれて』

『ス、スコープ……』

そこは笑うところなんだろうか。

とりあえず僕は、モノクマの目を完全に遮断できる空間を作ることはできるかと、入間さんに質問した。

すると、意外にも彼女は待つてましたと言わんばかりのしたり顔で頷いたのだ。

『よーやくその気になつたかダ最原!』

『え、ええ!?!』

『凡人共の素人丸出しの考えなんてお見通しなんだよ! オメーなんか特に、ずっと辛気臭え面で考え込みやがって!』

そんなに分かりやすかつただろうか。地味なショックを受けていると、彼女は声をひそめてこう続けた。

『……実は王馬からも似たようなこと相談されてんだよ。どうやらこつちの目に見えねえ監視の目があるらしいぜ』

『なっ』

『何だ、オメーは知らなかつたのか。じゃあ何が分かつたんだよ?』

『……それを言うにも、黒幕の目を気にしなくちゃいけないくつて』

『よし、分かつた』

入間さんは、王馬くんから同じようなことを言われて鋭意開発中であるバーチャルゲームの中で、それを言えと提案してきた。コンピュータールームで見つけた巨大なコンピュータには、初期状態では外部との不審な接続が生きていたらしいが、それは既に処理済みであると言う。まだ全員分の調整はできていないが、僕と入間さんの二人だ

けなら十分使えるらしい。

あまりの用意の良さに驚き、ここまでしてくれる理由を訊ねると、入間さんは何を言っただと返した。

『オレ様には、こんなつまらないところで無駄に時間を費やす暇なんてねーんだ。外に出るためなら協力なんて惜しまねーよ』

何と頼もしい言葉。ほんの少しでも反論されれば一気に萎縮するほどメンタルが弱かったのに。僕だけじゃなく、他の皆もそれぞれここから出ようとする努力を続けていたんだ。

こうして、僕と入間さんのバーチャル空間での作戦会議は始まった。

まず始めに思い出しライトへの疑惑を打ち明ければ、それなら脳波の観測で黒幕の特定ができるかもしれないと、初っ端から物凄いことを言われて度肝を抜かれてしまった。入間さん曰く、黒幕とその他の生徒では植え付けられている記憶が違う可能性があるから、その差異を見つけ出せば良いと。なるほど、思わず舌を巻いた。

その方法を使うには、まず全員を一齐に同じ装置にかける必要がある。その口実として、バーチャルゲームを行うと皆に伝えた。黒幕の大まかな特定は、その時に。

……そして、作戦決行の日。

何故か不知火さんだけがログインできなかつたり、ログインしたはずのゴン太くんが

バーチャル空間内での出来事を忘れたり、何より自分達の記憶に潜む嘘を知った全員が動揺してパニックになったりと、大変なことはたくさんあったけど。

それでも何とか、皆で今後の方針を固めることができた。

見えない監視の存在や、コロシアイ生活が見世物である可能性を教えてくれた王馬くんが発案した、モノクマや黒幕を騙す命懸けの劇。全てを終わらせるためのそれを成功させるために、全員の力を合わせよう。

そのはず、だったのに。

『死体が発見されましたあ！ オマエラ！ 死体発見現場のエグイサル格納庫までお集まりくださいあい!!』

勝ち誇ったようなモノクマによる死体発見アウンス。

プレス機から溢れる真っ赤な液体。そこからはみ出た誰かの服の袖。

それを目の前にして、呆然と立ち尽くすボク達。

いくらなんでも、コレは本気出し過ぎじゃないかな王馬くん……!?

**

*

その壮観さは、事情を知る者にしか分からないだろう。

“超高校級のピアニスト”、赤松楓。

“超高校級の探偵”、最原終一。

“超高校級の保育士”、春川魔姫。

“超高校級のサイキッカー”、不知火靈^{くしび}。

四人もの“超高校級”が一堂に会し、賑やかに歓談しているその光景は、あの陰惨な事件を覚えている者であれば少なからず心にくるものがあった。

現に降谷君は若干涙ぐんでいた。無事に大きくなつて……君は彼らの親戚か何かかな？

最近のかの組織は深刻な内輪揉めによって活動が大幅に縮減され、潜入中の彼に大きな心の余裕をもたらしているようだった。ひたすら感情を殺してきた反動がきているとも言う。

「すごい！ お姉さんのお友達、とっても綺麗な人だね……！」

ボウヤの友人である少女のその言葉に、惚けたように頷く者が数名。

少女の目線の先には、楽しそうに友人達と話をしている赤松楓の姿があった。

今日のイベントに奏者として参加する彼女は淡い桃色のロングドレスに身を包んでおり、そのシンプルさがただでさえ整っている容姿を更に引き立てていた。誰が見ても間違いなく美人だと言えよう。

その彼女に寄り添っているのは紺のスーツ姿の男、最原終一。赤松楓と同棲しているというのは本当のようで、とても仲睦まじく見える。伶俐な切れ長の目とは裏腹に、纏っている空気はとても穏やかだ。大人しそうに見えて、その実なかなか頭の切れる探偵らしい。

彼らと対面するように立っている赤いカーディガンの女性が、春川魔姫だ。気の知れた友人達にでも時折しか見せぬ笑顔は非常に可愛らしく見えた。しかし、裏の称号を持つただけであり、あらゆる所作にも隙は見えない。見事だ。

そんな成人男性女性に混じった中学生……に見える真っ黒な女性が、例の危険人物である。

フードを外した今は人畜無害の無邪気な少女にしか見えないが、彼女を尾行したキャメルは散々弄ばれた結果時折思い出したように国に帰りたいたと嘆くようになり、その時

盗聴器のモニタリングをしていたジョディはもうこんな虚しいことは辞めたいと事あるごとに愚痴るようになった。奴の悪意に満ちる精神攻撃は十分警戒に値する。

今、この件に関しては俺しかマトモに動けないのだ。上手く自分を伏せたまま彼らとの協力関係を結ぶ、そのキツカケを作らねば。

「やあ江戸川くん！ きちまつたんだね！」

「何その言い方!？」

「いや気にしないで。タノシンデイツテネ」

「何か、無理してない……?？」

「大丈夫、死にはしない」

「不安しか感じられないよ不知火さん」

彼らとどう接触するかと悩んでいたら、向こうの方から近付いてきてくれた。それがよりにもよって最も危険な不知火霊であるのがキツイところだが、「17人」のうち、こちら側に知り合いがいるのは彼女しかいないので、こればかりは仕方ない。

「探偵団キツズに、毛利ちゃんも鈴木ちゃんも、世良ちゃんも、まあ……見事に勢揃いで……」

「不知火さん、今日はこんな素晴らしいイベントにお招きいただき、本当にありがとうございます！ ございます！ こちら、私の父です」

「ど、どうも。毛利小五郎と申します。その、あなたが不知火さんで？」

「はい。初めまして」

「娘からお話は伺っていましたが……随分とお若いんですね」

「昔っからよく言われます」

彼女と自分の娘を交互に見比べ、困惑の表情を隠せない毛利探偵。俺もあのナリで真純より年上だということが未だに信じられない。

すると、事前に打ち合わせをしたボウヤからアイコンタクトが。このタイミングでなら大丈夫か。

「あ、そうだ、不知火さんはこの人と会うのは初めてだよ？ 沖矢昴さんだよ！」

「初めまして。沖矢といいます」

……ここまで緊張する自己紹介も初めてだ。ボウヤに紹介された俺を、キョトリと小首を傾げて見上げる不知火霊。何も不自然なところはないはず……だ。

「沖矢さん、ですね？ こちらこそ初めまして、不知火です」

ニコリと無邪気に笑ってこちらに握手の手を差し出してくる不知火霊。よし、怪しまれていない。緊張を隠し、こちらも握手に応じる。彼女の手はとて小さく感じた。

……向こうから握手してくれたのは思わぬ僥倖だった。彼女の指紋のデータは無かったからな。こちらの意図を察した降谷君からのジツトリした視線はこの際見な

かったことにする。

俺達のやり取りを皮切りに、他の「超高校級」達もこちらに来て自己紹介し始めた。殆どが事前の情報にある通りだ。ただ、探偵の彼だけはその身分を明かさなかった。情報管理がしつかりしていると密かに感心する。

元同級生達が真純達と会話をしている間、不知火霊はこっそりボウヤだけをその一団から引き離れた。何をやる気だろうかと横目で様子を窺っていると、彼女はボウヤの視線に合わせるようにかがみ、心配そうに声をひそめてこう言った。

「江戸川くん、何で沖矢さんは泣いてカッコーいい地声をわざわざ隠したりしてんの？」
じいえ。

……地声？

俺がその言葉の意味と事態を把握したときには、既に何もかもが手遅れだった。

予想だにしないことを質問された気の毒なボウヤは傍目にも分かりやすく体を強張らせ、背後からは息を思い切り吹き漏らすような濁音混じりの音声が聞こえた。

「何かコンプレックスでも抱えてるの？」

「そつ、そうみたい！ 何でだろねー!!」

「声の他に手とか顔とかもじゃない？ 普通のマスクより薄い合成樹脂のカワ？ と皮膚がズレるような音もする」

「ウヒェ」

ボウヤは喉が潰れたような細かい悲鳴をあげ、後ろからの音声には引き笑いのようなもので混じり始めた。

しまった、完全に、ぬかった。

何故忘れていたんだ。不知火霊の、あのバケモノじみた聴力のことを……!!

騒音に満ちる密室で、本棚と壁の間の不自然な空間がある箇所を一瞬で判別し、分厚い壁の向こうに広がる空間を、自分の足音の反響のみで把握した、あのとんでもない探知能力。

それをもってすれば、すぐ目の前にいる一人の人間の不自然さなど丸分かりであることは想像に難くない。それも直接触れられたのだ、気付かれないわけが無い。むしろ自ら進んで彼女の手に触れにいったという事実には気が遠くなりかけた。

「じ、地声……カワズレ……」

後ろの公安のヒーヒー悶える声に余計な単語が混じり始めた。言っておくが変装を多用する君も決して他人事ではないぞ。

「た、多分、沖矢さんにも色々あるんだよ。人前に素顔を晒したくなかったりとか？」

「はあ、難儀な人なんだねえ」

「そう！ だからあんまり触れないであげてね！」

「大丈夫、分かってるよ」

不知火靈的的外れにも程がある心配を適当にいなし、こちらをチラ見してきたボウヤの目は、一体いくつ貸しを作る気だと雄弁に語っていた。本当に申し訳ない。恩にきる。

あと安室君にはいい加減に笑うの止めてもらいたい。壁に寄り掛かって、まあ、憎らしいほどの細やかな体の震動っぷり。いつそ殺意が湧く。

ハツと気がついた時には、他の「超高校級」にもこの事態を知られたらしい。三人とも何かを察したような目で一瞬こちらを見たつきり、それ以降顔も合わそうともしない。

終わった。初っ端から大惨事である。この空気に気付いていないのが真っ先に俺の変装を察知した本人だけとは、一体どういう皮肉だ。

……もしや、握手を交わす直前に彼女が小首を傾げたのは、反響定位行動だったので
は？

イヌもそうだ。可愛らしい仕草だが、首を傾げるのは音を拾うためだとされている。フクロウが獲物の位置を音で捉えられるのも、元から左右の耳の高さが異なるからだと言われている。

つまり奴は、俺の第一声から違和感を感知していたわけだ。いや、マスクと皮膚との

ごく僅かな擦過音まで聞き取れる奴の前では、喋るところか動くことも許されなかった。要は変装していた時点で俺は詰んでいた。

いずれにせよ、こうなつてはもう、俺に出来ることと言えば、彼らの話に気付いていないフリをひたすら続けることのみである。手持ち無沙汰に眺めるパンフレットの内容を暗記してしまひそうだ。一体何の責め苦だろう。

どうやら俺は、最初から彼女達を……いや、この日本を見誤っていたようだ。思わず自嘲の溜息が口から漏れ出そうになる。

この筆舌に尽くしがたい理不尽、嫌というほど覚えがあつた。

あれは日本の恒例行事。

年末から年明けにかけて全国公開される、日本のユーモアと狂気を詰め込んだようなあの番組。

次々に出演者を容赦無く襲う理不尽。何があつても決して笑つてはいけない、あの……。

「！」

ふと、背後から肩を叩かれて振り返れば、そこには頬を紅潮させ、口元を手で押さえた安室君が肩を震わせながら立っていた。

「沖矢、アウトー」

やかましいわ！！

「ねえカエデちゃん、あの人達ほつといて大丈夫かなあ。屋上で決闘するとか物騒なこと言つてたけど」

「クシビさんは何も気にしなくて大丈夫だよ、むしろあんまり関わらない方が良いと思う」

「そっかあ」

クシビさんのこの鈍感っぷり、ある意味羨ましい。終一くんの見立てによれば、クシビさんの悪意は無意識下でこそ最高の効果を発揮するらしいから、そのまま放置するのが一番なんだって。

「カエデちゃんはこれからどうするの？ 演奏は午後の部の始まりあたりだよな。ゲスト枠の」

「そうなんだけど、私の生徒の発表がこれからすぐにあるから、劇場に直行するよ」「オツケー」

クシビさんは、影のように私の後ろをピツタリと、スルスルとついてくる。終一くん

も過保護だなあ、わざわざ私のために彼女を用心棒として呼んでくれるなんて。心強さしかない。

「その後は生徒さんと一緒?」

「ううん、あの子達は親御さんと行動。私は控え室にいますということにして……自分の番が来るまで終一くんのサポートをするつもり」

「うわ、やっぱり本気なんだね」

「当然!」

「頼むから無茶はやめてくれよ」

「そのためのあなたでしょ?」

私が起こしたあの事件がキツカケで、独特な友情が芽生えて以降、私と彼女は悪友のような関係になった。雨降って地固まるとはよく言ったものだと思う。今でも個人的な付き合いが多い。うちに泊まりに来ることも多いから、自然と終一くんの仕事を手伝う機会も多くなった。だから、彼がクシビさんを頼るのも当たり前になっている。

「でも、春川さんまで来てくれたのはちよつと意外だったかも」

「そうかな? 子供達の教育に関わることなら許せないと行ってたけど、本音としてはキミ達のことを心配してるんだと思うよ」

「相変わらずのツンデレ」

「まあ、それっぽく理由をあげるのなら、あの寮にいたときの状況の再来を未然に防ぐため、と言っておくかな」

「……………」

「いや本当に念のためだよ。私達のことを正確に覚えているのはほんの一部の捜査関係者だけだ。それも彼ら自身が彼ら自身の名誉（○）の為に超厳重に全力で情報を秘匿している状態だから全然問題無いって、オウマくんが真顔で言ってた。私も同感」

「なんだ心配して損した」

結果的に誰も欠けなかった才囚学園での日々より、そこから出た後の実験動物のように扱われた日々の方がよっぽどキツかった。

私の才能目当ての人間が寄ってきているという今の状況は、まさにあの時と似ている。今こうしてムキになって相手の弱点を探ろうとしているのも、無意識のうちに恐怖していたからなんだろう。

……が、私達の中でも最も人の心の隙を突くことに長けた王馬くんの頼もしい太鼓判に、アツサリそれは解消された。言われてみればその通りだ。今や全世界を掌で自在に転がしまくっている彼ならば、それくらいの誘導は朝飯前なのかもしれない。未恐ろしい。

「あ、そうだコレ。ミウちゃんの新作」

ふと思い出したようにクシビさんがコートの内ポケットから取り出したのは、光沢の無い透明な絆創膏に似た物体だった。

「これは……？」

「テープ型骨伝導インカム。耳の近くに貼っておけば外見じゃ全く分からない形で連絡が取り合えるマジでヤベー代物」

「ホントにヤバいね彼女！」

入間さんの発想力は留まることを知らない。こつちもこつちで世界が取れそうな勢いだ。

「スイッチのオンオフは素早い歯噛みの音。オフの時でも着信の合図があるのは確認済み。使用回線は安心安全の才卒線。囁く程度でも会話ができるクリアな集音性とくれば最早パーフェクトの一言。流石は我らのミウえもん」

「ひええ、全く隙が無いよお……」

「皆付けてるから、もういつでも連絡が取り合えるよ」

「わ、分かった。メチャクチャ心強い」

私はとても頼もしい友人達に支えられて生きている。改めてそう感じた。頼もし過ぎていつそ怖い。

こうして万全の状態で事に挑んだ私達は、この後、思い知ることになる。

いくら素晴らしい技術や能力があっても、決して回避できない得体の知れない力は、フラグ確かに存在しているのだ、ということ。

14. 「運命が絡まり過ぎて事故つてる話 ②」

あの事件の後、私はしばらく皆から腫れ物のように扱われた。

当然だ。未遂に終わったとはいえ、人を殺そうとしたのは紛れもない事実なのだから。

皆が私を遠巻きにするようになった中、逆に積極的に私に構ってくるようになった人がいた。あろうことか、私が殺しかけたはずのクシビさんだった。

自ら一人になろうとする私の側に、気がつけばいつも彼女がいた。学園中の凶器を集めて走り回っている間でも、暇さえあれば私の近くにいた。フードのせいで表情は見えなかつたけど、私のことを心配して気にかけているのは明らかだった。

殺しかけて殺されかけたという、何とも奇妙な関係。被害者本人がクロ本人に心を許しているというのは、周りの意識にも大きく影響したらしい。

もう済んだことだからと開き直り、ブラック過ぎる事件ネタを交えて和気藹々と会話する私達二人を、皆が苦笑しながら再び受け入れてくれるまでにそう時間はかからな

かった。

あの時のことは、本当に彼女には感謝してもしきれない。あのまま一人でいたら、私は今頃どうなっていたか、想像するのも恐ろしい。

お互いに名前呼びするようになったのも彼女が一番早かった。

ただ、唯一分からなかったのは、クシビさんは何故自分を殺しかけた私に対して簡単に心を許し、剩え心配までしてくれたのか。それだけが不思議だった。

王馬くんが決行したあの計画。モノクマや黒幕を騙す作戦の一環だと知っていても、殆どの人が絶望する事態になってしまった。仕上げは秘密だと言っていたけど、これは流石にやり過ぎだよ！

あのプレス機の間閉じ込められているのは一体誰なのか。計画を決行した王馬くんも百田くんも、計画の存在も知らずに巻き込まれたクシビさんも見つからない今、それすら分からない。

嘘だと思いたかったけど、プレス機から溢れ出るその液体は、紛れもなく本物だった。茫然自失のまま捜査は進む。現場となった格納庫に残されていた証拠品から、事件には最原くんや春川さんの研究教室から持ち出されたものが関わっていることが分かった。いつもなら、クシビさんが処分していたはずのものだった。

何でも良い、手掛かりが欲しい。私の足は、自然と校舎の一階にあるクシビさんの研究教室へと向かっていった。あそこにはコロシアイに使いそうな物は無く、怪しげなタイトルの本しかないと分かっているのに。

やはり何も見つからない。ボンヤリと本棚を見つめっていると、そこで妙なことに気がついた。タイトルがあいうえお順に並んでいたはずの本が、めちやくちやになって詰め込まれていたのだ。

クシビさん、やつぱり処分しようと思っ出しかけたんだらうか？ 違う。ああ見えてとても誠実な人だ。一度周りから止めろと言われて止めたことを再び繰り返すような人じゃない。

いや、最初から言うことを聞かないことはたくさんあったけど。

一見乱雑な本棚に目を凝らしてよくよく観察すると、ようやくある法則が見えてきた。タイトル名、または作者名のどちらかの頭文字をとって、あいうえお順というは順に並び変えていたのだ。

しかし、物凄く分かりづらい。あいうえお順というは順で一冊ずつ交互に並べられているし、その頭文字がタイトルからなのか、作者名からなのかランダムなので、非常に紛らわしいことになっている。モノクマに気付かれないように工夫をこらしたと言うより、ひたすら夜間が暇だったせいのように思えた。

そんな珍妙な法則に当てはまらない、数冊の連続した本。安直にそれらのタイトルの頭文字を続けて読むと。

「しんだいのした」

寝台の下。

この部屋にはイマイチ用途の分からないベッドがある。寝るのであれば、ほぼ間違いなく個室を利用するからだ。

あの下に、一体何が？

他の人達を呼んできて、重たいベッドを数人がかりで運んでズラせば。そこにあったのは意味深な地下室へ続く隠し扉であった。図書室のそれとは違い、鍵も何も無いただの扉だった。

そして、その先にあった真つ暗な部屋で見つけた私宛ての手記には、こう書かれていた。

『私を殺したのは、あなたではない』

**

*

ほぼ第六感的な予感だった。明らかにおかしいと言える根拠も無かった。

全部で五階までであるこの建物の大まかな構造を把握した後、劇場へ向かおうとしていた私とすれ違ったそいつが纏っていた空気には覚えがあつた。大事な何かを守るために自分の命さえ捨てることも厭わない、そんな悲壮な覚悟を決めたような気配。

妙な予感が拭えない私は、口の中で前歯を噛み鳴らした。それと同時に、右耳の奥へプツリとスイツチの入る音がダイレクトに響く。

「……妙な挙動の奴がいる」

『どゆーと?』

真つ先に応答したのは不知火だった。生徒の演奏を聴いている赤松を、同じ劇場内から見守っている最中のはず。

「わからない。でも、何かしでかしそう」

『こわ』

『まさか……コロシアイ?』

「……多分」

『ハハ』

探索中の最原や演奏に聞き入ってる赤松はともかく、あんたはそれしか言えんのか。

と思ったが、すぐ近くから別の人間の声が聞こえてくる。あいつがこの町で知り合つたという知人達の声だ。彼らの前では本格的な会話はできないのだろう。と言うか何でそいつらと一緒にいんの。

『どうする。変なこと起こされたらあんたの仕事もし辛くなるよ』

『阻止する方向で動こう』

『お人好しにも程があるよ』

『コロシアイダメ、ゼツタイ』

『不知火あんたは無理して喋んなくて良いから』

『はわあ、江戸川くんが綺麗な目でこつち見てくるよお』

『言わんこつちやない』

不審者扱いは不本意だと言っておきながら、あの聡明そうな少年の前で不審な独り言にししか見えない形で通信に参加してくるそのワケの分からない度胸は何なんだろう。

『春川さん、とりあえずその人のことを追ってくれない？』

『今そうしてる』

不知火ほどではないが、私も自然な形を装って尾行するのは得意な方である。裏の才能に関わる全てでもウソだと分かつたら逆に気が楽になって、開き直ってそつちの才能も伸ばすことにしたのだ。それを活かす機会が多い外の世界の物騒さにも驚かされたけ

ど。

『うちの子の演奏終わった。何が起きてるの?』

『ハルちゃんクロ候補尾行なう』

『うええっ』

「五階から劇場に入っっていった。そつちから見える?」

『背が高い青いドレスの?』

「そいつ」

不知火が一階から五階にかけて広がる大きな劇場のどこにいるか分からないが、相変わらずとんでもない視力だというのは察せた。

急ぎ足で自分は五階から四階に下り、そこから劇場内に入ると、そいつが入った五階はまだ客が入っておらず、照明も点けていないエリアであることが分かった。要するに、その時点でかなり怪しい。

そして……。

『何か出したね。結構大きいな?』

「……ライフルだ」

『『げ』』

嫌な予感の中。全く嬉しくない。

そいつが着ているドレスの大きく膨らんだフープ・スカートの下からずりりと出てきたのは、あろうことか、この案件で最も登場が危惧されていた銃火器であった。まさかこんなところで早々と出てくるとは。

「G36……まあ、あの形のドレスに隠そうと思えば隠せないサイズではないけど……」
『あんなの服の下に仕込んだの？ 暴発怖くね？』

「どう見ても素人。道理であんな仰々しいドレスを着ているわけね」

こうしている間にも、そいつはたどたどしい手つきでそれを構えていく。銃口を向ける先は、ステージだ。

『誰に向けてる？ ステージの……良かった、子供ではないねえ』

『今ステージに出てるのって……終一くん、あの人だよ！ ずっと勧誘の電話してきた、さつき挨拶したばかりの！』

どうやら赤松と因縁がある相手がターゲットらしい。命まで狙われるとは、なかなかきな臭い事情がありそうだ。

『春川さん、どう？』

「……あの手の震えよう、外す可能性の方が高い。でもわざわざサイレンサーを取り付けていたし、演奏の合間の騒めきの中なら、当たるまで何発でも撃つかもされない」

『サイレンサー付きだろうがこんな場所じゃ音は響くだろうに……』

「皆があんたみたいに耳が良いと思わないで。話し声の騒めきの真っ只中にいる素人連中なら、最初から気付かないか、気のせいにしても仕方ないよ。その道のプロなら銃声だとすぐに分かるだろうけどね。この場にいるかどうかは別にして」

『とにかく、下手な鉄砲ほど数撃たれたら困る』

『流れ弾の危険性有り?』

『念のため最前列のカエデちゃんは生徒さん連れて避難お願いしまーす』

『そうしまーす……』

『後は……春川さん、不知火さん、よろしく』

『頼まれた』

遙か遠目に見えるステージに最も近い階下の席で、桃色のドレスを着た人物が席を立ったのを確認する。赤松だろう。よし。

「不知火、あんた今、劇場のどこ?」

『さつき皆から離れて移動したよ。四階エリアの右端通路。内階段の近く』

「……ああ見えた。やっぱり見辛いね、あんたの黒い服」

『オペレーションよろしく』

「とりあえず上方向に」

『あいよお』

その数秒後、いよいよ覚悟を決めたらしいそいつが、ついに引き金を引いた。人助けつてのは、本当にラクじゃない。

それまで一緒に友人の教え子だという子供のピアノ演奏を鑑賞していたはずの不知火さんは、気が付けば忽然と姿を消していた。

「あ、安室さん！ 不知火さんは？」

「……え？ 不知火さん？ ……いない？」

開演ギリギリまで一体何処で何をしていたのやら。あちこちに打撲や擦り傷を作り、難しそうな表情で上を見ていた安室さんに問えば、彼も今さっき彼女の不在を知ったという顔をした。オイ。

「いつの間に……」

赤井さんもかよ。こっちも上の空気味だった。沖矢昴のカワを被っているから傷があるかは分からないけど、服があちこち擦れたりほつれている。

プロの現役捜査官二名に気取られずにいなくなれる彼女の隠密性って本当にどうなってるの。メリーさんの名は伊達じゃない。赤井さんの変装を出会って数秒で看破

したことといい、不知火さんのスペックがぶっ飛んでいるのは、もう嫌と言うほど思い知った。

……個人的には彼らの方がポンコツである可能性は考えなくなかった。切実に。

「あら、不知火さんなら赤松さんのところに行つたわよ」

「そうなの？」

「さつき通りすがりに言つてたじゃない？」

園子が席を立ちつつ衝撃の事実を教えてくれた。ウソだろオレもポンコツだったのか。いや違うあの人がおかしいんだった。

見れば、園子だけでなくオツチャンや蘭や世良も、子供達も席を立ち始めていた。まだ発表会は続いているんじゃないか？

すると、席に座つたままのオレの前を通りかかった灰原が呆れたように言った。

「……何が忙しかったのかは分からないけど、赤松さんの話、やつぱり聞いてなかったのね」

「えっ」

「午前の部は子供の発表会。言わば彼らの父兄のためのイベントだから、無関係の私達が無理に鑑賞し続けることも無いのよ。だから、午前中はせめて赤松さんの生徒さんが出るころまで観て、本格的に観るのは午後の部からにしようって……そう決めたの、

聞いてなかった？」

「キイテマセンデシタ」

だってそれどころじゃなかったんだよ!!

捜査官二人も無言で顔を手で覆っていた。当事者達は尚更聞いてなかった。あんたらは特にしつかりしてくれよ頼むから。

確かに灰原の言う通り、階下の一階の席は父兄と思しき人達でほぼ満員だ。

それに対し、オレ達がいる二階からそれより上の席にはそれほど人は多くない。最上段の五階に至っては照明すら消えた無人のエリア。規模が大きいイベントにしては観客が少ないと思ったが、午後からがメインイベントだったと言うわけか。

まあ、何はともあれ、俺達も劇場を一旦後にすることに。本番の午後の部までは、残りの午前の部と昼休みを合わせたらそこそこ長い自由時間となる。それまでに昼食を済ませておこう……という話も、赤松さん達の話の後で決まっていたようだ。

オレ達と同じように過ごす人はかなりいるみたいで、劇場の外には多くの人が行き交っていた。園子曰く、これから午後の部から観覧する人がドツと来て更に混雑してくるらしい。人の入り方によっては、劇場の五階エリアも解放されるのだとか。

「二階の展示ルームでは楽器の販売もしているのよ。子供の練習用からプロ仕様のものまで幅広く扱っているの。まさに音楽好きのためのイベントってわけ」

「へえー、だからこんなに老若男女問わず来ているのか」

「入場券だけでもかなり金を取られるみたいだし、無料招待券を貰えたのは本当にラッキーだったな」

「やだ、お父さんつたらー!」

勝手知つたる園子の口調から察するに、かなり有名どころのイベントのようだ。

……しかし、それなら何故だ? 赤松さん達 “53期の17人” は、原則的に目立つ行動はしないと聞いている。なのにどうしてこのような大々的なイベントに参加しているのだろうか?

「でも何で不知火のねーちゃんは招待券を捨てようとしたんだろうな」

「見た目がアレなだけで、本当は真面目で誠実な人だからな。いくら友人から貰ったものでも、本来は何千円もするものをそう簡単にばら撒くのは憚れた……んじゃないかな、多分……」

オレも表向きは世良の言う理由だと思う。

だが、気になるのはあの時渋りに渋りまくった彼女の態度。無料の招待券が惜しくて渡したくなかった、と言うより、誰かに渡すこと自体を危ぶむような。結局少年探偵団の奴らの熱意に根負けした形でくれたけど。

……どうも怪しいぞ、このイベント。

「あ、不知火お姉さん！」

「楓ねーちゃんも一緒だ！」

楓ねーちゃん。不知火さんが赤松さんのことを親しげに名前呼びするから、それに引つ張られてこいつらにも定着したらしい。

いつも通り真つ黒な不知火さんを目敏く発見したそいつらの目線の先には、シンプルなロングドレスを着て華やかな装いの赤松さんと、その後ろについて歩く不知火さんの姿があった。

それにしても、フードの有無で随分と印象が変わる人だな。ああやって後ろについている今は赤松さんの妹のようにしか見えない。

「うわ、出たな探偵キッズ……！」

「うわって何だよ、うわって」

「楓お姉さんが演奏するのって、何時頃なの？」

「午後の部の最初の方だよ。お昼休みが終わってすぐ辺りだから、大体13時過ぎじゃないかな」

13時過ぎ、12時からの一時間の昼休み明けか。そして、現在の時刻は11時を過ぎたばかり。まだ時間はある。

携帯電話で時間を確認していると、ここにまた新たに人がやってきた。

「まあ、赤松さん。ご友人ですか？」

誰だこの人？ 少なくとも不知火さん達の関係者ではないな。穏やかに微笑みながら近づいてきたその女性は、確か……。

「キタナガさん……ええ、そうです。」

「嬉しいわ、こんなに大勢の方を呼んでくださっていたなんて」

そうだ、さっきの発表会で司会進行役をしていた人だ。彼女はこのイベントを開催している慈音じおんグループの職員だと名乗った。10時から開演した午前の部の発表会の前後一時間ずつで進行役を交代するので、ちょうど今午前の部後半の進行役と代わったばかりらしい。

彼女に話しかけられる赤松さんの表情は笑顔でありながらどこか複雑そうで、不知火さんに至っては目を細めて口をキュッと引き締めたあからさまに変な表情をしている。どう見ても訳ありな様子だった。分かりやすい！

やがて、蘭や園子達にも話しかけたキタナガさんは、一階の展示ルームを案内すると言って赤松さんを含めた女性陣とオッチャン、そして子供達をも連れ立って行ってしまった。

「……あの人と何かあったの？」

唯一この場に残った不知火さん。今も尚複雑そうに口を引き締めて赤松さんが連れ

て行かれた方向を見ている彼女に、オレは恐る恐る訊ねた。きつと後ろの捜査官二人も知りたがっていることだろうから。

「ブー……あの人なあ。カエデちゃんをグループの音楽教室に入会させようとするのに必死過ぎでなあ……」

「入会？」

「そう。会員になれば、カエデちゃんが運営してるピアノ教室への援助が出るとか、グループで開催するイベントの参加費が無料になったり楽器の価格が割引されるとか、色々言ってくるらしいんだ」

「へえ……その何がいけないの？」

「会員費が馬鹿高いみたい。向こうがお得だと言う割引も無料化も、イベントやパーティに参加するのが前提じゃん？ でもカエデちゃんは、そういう……人脈を広げることより、生徒にちゃんとした技術や感性を磨かせたいんだよ」

つまり、高い会費を払って入会したところで、赤松さんには殆ど利点が無いのだ。

「カエデちゃん本人はずつと断ってるのに、勧誘がしつこくて仕方ないんだって。今回のイベント参加もゴリ押しされたからなんだよ」

見たか後ろの大人二人。ちゃんと正面から質問すれば、はぐらかさずにキチンと答えてくれる良い人なんだぞ。いい加減に察しろ。

しかし、なるほど。目立ちたがらない赤松さんがこのイベントに参加しているのは、向こうが強引に事を進めたからなのか。これはますます怪しいな。

不知火さんが招待券を渡したがらなかったのも納得がいった。嫌がる友人を無理やり巻き込もうとするような胡散臭い連中の開催するイベントに、更に無関係な俺達まで関わらせたくなかったんだらう。やっぱり良い人だ。結局関わっちゃったオレが言うのもアレだけど……。

「不知火さんはこれからどうするの？ 赤松さんの演奏までまだ時間あるよね？」

「そうだなあ。適当にここを粗探しして、奴らを法的にギツタギタにできる口実でも探そうかと」

「わあ」

不知火さんならやりかねない。頑張れメリーさん。

「それじゃあ、またね」

ヒラヒラ手を振って去って行った不知火さん。よし、俺もできることはやってみるか。

気がつけば、捜査官達もいつの間にか姿を消していた。少しは格好良いところを見せてくれよ。

15. 「運命が絡まり過ぎて事故つてる話 ③」

偽装死薬。

不知火さんの研究教室で新たに発見された隠し部屋にあった薬のラベルには、そんな名前が書いてあった。

それを服用した直後の数時間、心肺機能と体温を極限にまで低下させ、ある程度時間経過すれば、死斑や死後硬直に似た現象まで起こす作用がある。つまり、その名の通り、この上なくリアルな死体を演じられる薬である。

……彼女はトコトン黒幕に嫌われていると思っただけど、まさかここまでとは。

黒幕の思惑通り、最初の事件で不知火さんが死にかけたのは演技だったのでは、という疑惑が持ち上がる。王馬くんの作戦に突発的に巻き込まれたらしい不知火さん本人が未だに見つからないことも大きい。

これまでずっと自分達を騙していたんじゃないか、王馬くんの作戦とやらも嘘なのかもしれない。

そんなギスギスした嫌な空気の中でも、赤松さんは強かった。

「逆に考えたら、それだけ黒幕は追い詰められているってことだよ！」

「そう、だね」

僕だってもう今更迷わない。

偽装死薬のことだって、その矛盾を指摘できる判断材料は揃っているのだから。

ただ一つだけ、気がかりなのは……

「それより僕が気になるのは、何だってこんな物が、それも四種あるうちの一種だけが大量に無くなっているかなんだよね……」

「う、うーん……？」

とりあえず、不知火さんが見つかったら、その時に詳しく聞こうと思う。

**

*

それは、ただの酷い事故としか形容しようのない出来事だった。

ボウヤが例の危険人物から、赤松楓がこのイベントに参加した裏事情を聞き出してく

れた後、探索を開始した俺は程なくして、徐々に人数が増え始める人混みの中、思わぬ人物を発見してしまった。

水無怜奈。

本名は本堂瑛海、またの名をキールと呼ばれる、CIAの諜報員。

深く被った帽子から黒色で統一した装いでマスクをし、人目を気にしている様子から、キールとしての立場で行動していることが窺えた。

一気に体に緊張が走る。

何故彼女がここに？

先程不知火霊から聞いたばかりの話が蘇った。会員に高い会費を払わせ、自らが主催するイベントなどで割引するという話だ。

まさか、このグループは、あの組織の資金源の一つなのか？

もしそうであれば、彼女がここにいることを含め、このタイミングでイベントが開催されたことにも合点がいく。

犯罪者をターゲットに暴れるDICEの活動により、全世界で行われる裏の取引が悉く台無しにされている今の状況。裏社会における金と物の流れはほぼ凍結し、奴らは甚大な経済的・物的ダメージを受けていた。

現金ではダメだといち早く気付き、仮想通貨や電子マネーでの取引を試みた連中もい

だが、DICEの方が一枚上手だったようで、振り込まれた全額がオンラインゲーム内の課金アイテムに替えられ、構成員全員に分配されていたというふざけた話も聞いている。奴らには節度ある慎ましい無課金プレイすら許されていなかった。

こうして資金繰りに困窮して自然解散した犯罪組織も決して少なくないと聞いています。警察よりよっぽど仕事しているのでは……とか、言いたくても言っただけはいけません。

かの組織も例外なくその煽りを受け、取引そのものに踏み切れず、使用できる弾薬や活動資金など、否応なく削減せざるを得なくなっているようだ。

外部との取引が信用できないのなら、自分の傘下の者がそれを行えば良い。気の毒にもすっかり人間不信になったあいつらはそう考えたのだろう。

そして今日、イベントの売り上げを受け取りに来たのが彼女……キールだとしたら？ 彼女へのNOCの疑いが晴れきっていないのだとしたら、誰かに見つかるリスクが高いこのような人目が多いイベント会場での取引に向かわされるのにも納得がいく。

俺は表向きは死んだとされている人間。その代わりとして使っている「沖矢昴」の存在を、俺の事情を知る水無怜奈が相手とは言え、チラとでもあの組織の前に自ら晒すのは気が引ける。

苦悩する俺の横を抜き去った人影があった。安室君である。

俺が確認するからすっこんでろ。

彼は俺の横を通る一瞬、そんな視線をこちらに寄越してきた。確かに今はそれに大人しく甘んじるしかない。悔しくもあつたが頼もしくもあつた。

食えない笑みを浮かべてバーボンを演じる安室君が、背後からキールに何をしているのかと話しかけると、彼女は一瞬だけ目を見開いた。キールはバーボンの正体を知らない。思いもよらぬ場所で組織の人間に見つかったと緊張したのだろう。

彼らは人氣の少ない場所へ、一階の展示ルームの裏手へと移動した。雑然とした物置のような場所だ。

「……それで、あなた直々にここへ」

「ええ。あの忌々しいサイコロの話は知っているでしょ？ もうどこの組織に化けているのかも分からない状況だから……」

身を隠しながら話を聞くに、ほぼ推測した通りの事情があるらしい。やはりこの会社には奴らの息がかかっていた。それも相当昔から。現在も潜入中の安室君ですら初耳のようだ。

それほど上手く世間体を繕っていたのに今になって急にボロを出したのは、やはりDICEの活動の影響だろう。資金難に陥った組織の言いなりである上層部の指示で、金蔓となり得る腕の良い音楽家をなりふり構わず勧誘したり、こういうイベントに招くようになったのだ。

その結果、そうと知らずに硬い絆で結ばれているDICE関係者に直接手を出すような真似をしてしまった。だからイベントに呼ばれた赤松楓のみならず、彼らのブレーンたる最原終一、対人戦闘力トップクラスの春川魔姫、そして彼らに仇なす者への悪意の権現不知火霊という、絶対に潰してやるという意志しか感じられないメンツが出動することになったのだろう。果たして俺達の出る幕はあるのだろうか。

知りたいことは大方分かった。少なくともあの組織が関わっていることが分かれば十分だ。

ただ、劇場で聞こえたあの銃声の意味だけが分からない。資金の受け取りだけが目的であれば、警察沙汰になるようなことは避けるはずだ。それでも騒ぎにならないのは、もしや彼らが暗躍しているのでは？ 殺人を許さぬ彼らのことだ。あり得ぬ話ではない。

いずれにせよ、あの組織とは別の思惑が働いていることには間違いないだろう。

後は「超高校級」の彼らに一任するか、それとも今こそ彼らとの協定を結ぶ絶好の機会だとするか。前者は無難だが、後者も捨てがたい。変装していることも知られたのだし、いつその機会に身分を明かしてしまおうか？ リスクも高過ぎるが。

バーボンこと安室君もそろそろキールとの会話を切り上げようとした、その時。

その惨劇は、起きてしまった。

「あれ？ もしかして、水無アナウンサー……？」

バーボンを演じる安室君の体が、物置のようなこの部屋に響いたその声にピクリと反応した。俺はその声が聞こえた途端、途方も無い絶望感に襲われて反射的に両手で顔を覆っていた。

この場に決してはならない人物堂々の第一位、不知火霊。その人の声であった。

「だ、誰かしら……？」

「わあ、やっぱり水無アナウンサーだ。お体はもう大丈夫なんですか？」

「ええ、自由に出歩けるくらいには回復したわ。今日はプライベートで来たの。でも、もう辞めたとはいえ……だから、その……ね？」

「分かっています！ 言いふらしたりなんかしませんよ！」

事情を知らぬキールは、顔の半分を覆うマスク越しでも瞬時に正体を見破った彼女に警戒しながらも、柔軟に対応した。容姿ではなく、己の返事の声で確信されたとは思ってもせずに。

が、キールはすぐに心配げに体調を案じる幼げな不知火霊への警戒を解いた。表向き顔であったアナウンサーとしての自分しか知らぬ、純粋なファンの子供にしか見えな

かったのだろう。確かにそうなのかもしれない。

しかし俺と安室君は違う。現に彼は、反射的に物陰へ身を隠したほど危機感を持った。

当然だ。そいつを一体誰だと心得ている。

バーボン（NOC）

キール（NOC）

ライ（NOC：死人）

この黒の組織の錚々たる（意味深）新旧幹部三人が揃っている現場に伝説の Ms. ^{身元特定} _鬼 Merry が加わっている光景を、事故と呼ばずして一体何と呼ぶのだろうか。これは酷い。

しかも不知火霊自身は黒の組織が血眼で探しているDICEの関係者である。同時に我々が全力で保護するべき立場でもあった。

それがよりにもよって何故このタイミングで……。

「それよりあなた、どうしてこんなところにいるのかしら。ここはスタッフの許可が無いと入っちゃいけない場所よ？」

「ちゃんと貰いました。キタナガさんって人に。知り合いの子供達がいなくなっちゃって、手分けして探しているんですよ。ここにイタズラで入り込んだかもしれない

ので、見せてもらえませんか。水無さん、見ませんでした？小学生の三人組なんですわ」

「うーん……ごめんなさい、見ていないわ」

ボウヤ、ボウヤ。

君のお友達が未曾有の重大事故を招いたのだが。

「水無さんこそ、何でこんなところなの？」

「わ、私？私は………」

実は、その男に、無理やり連れ込まれて……」

「……………、フアツ!」

逆に聞き返されて説明に困ったキールは、あろうことか、全てを安室君に丸投げした。所謂二次災害というやつである。

キールからすれば、切れ者のバーボンであればこんな一般人の小娘など、適当な悪漢を演じて脅しつけるなり、いくらでも上手くあしらってくれるとも思ったのだろう。

しかし悲しいかな、俺達は一方的に彼女達へ複雑な事情を抱えている。相手がまさにその当人である今回の場合、そんじよそこらの一般人をあしらうのとはまるでワケが違う。

数拍おいてから物陰から発された安室君の声は、案の定、可哀想なほど震えていた。

「ままま待つてください!! 違います!! あなたも急に何言ってるんですか!?!?」

「怪我治ったばかりの水無さんに何してんの……?」

「ち、ちが……」

「言い訳は署で言つてね」

「違うんですつてばあ!!!」

「ひい」

おい、待つてくれ。勘弁してくれ。アレは大晦日のテンションだから許されるものであつて、日常で発生するべきではない（謎ギレ）。

突然の冤罪に巻き込まれて目を白黒させながら物陰から姿を現した安室君は、目の前で携帯電話をいじる不知火霊に縫り付き、警察に通報されそうになるのを阻止しにかかった。彼の本職や立場を知つていれば当然の必死さだが、それを知らぬ彼女からすればただの見苦しい変質者である。

「ま、まとわりつくなこの犯罪者! 助けてお巡りさああああん!!!」

「イヤアア! 叫ばないでください後生ですから!」

「腰の低い不審者こあいよお!!」

それは、本職お巡りさんだらけの場で本職不審者（仮）が口にした魂の叫びであつた。色んなものが倒錯し過ぎている。

一方でキールと言えば、自らが引き起こしたこの惨状から必死に目をそらし、ともすればうっかり緩みそうになる口元を、気合いと根性で引き締めていた。

バーボンの方が情けなく狼狽えるという予想と全く違う展開に戦慄しつつも、飽くまで被害者然とした弱々しい態度を貫くその様は、さながら稀代の悪女である。

果たしてその体の震えは演技か、それとも。

「だ、大体何なんですか！ 僕はその女よりよっぽどあなたに対して（保護対象的な意味で）一途ですよ!!」

やがてテンパった安室君は盛大に自爆した。

声にできなかつた副音声は辛うじて俺には理解できたが、彼女達には当然聞こえなかつた。

特に、不知火霊が見た目通りの未成年にしか見えないキールにとつては、尚更。

「あなた……それは流石に……無いわ……」

「アツ、チガ……」

キールのバーボンを見る目が、未成年に手を出そうとする汚らわしい犯罪者（偽）を見るそれになった。

「ギャアアアア助けて私はここにいるよおおお!!」

「呼んだ!!」

耐え切れなくなった友人の絶叫を聞きつけた春川魔姫が降臨する。

彼女が薄暗い室内で携帯電話を奪取せんとする安室君にしがみつかれる涙目の不知火霊を目視した途端、心なしかその髪がブワリと逆立ったように見えた。

「そいつに何してんだクソヤロー!!!」

「あぁーっ!!!」

バーボン、OUT。

彼は超高校級のタイキックを執行された。

あと少し、キールが捻じ曲げられた事実には訂正を入れるのが遅かったら、俺は危うく風見に俺の身元を証明させる電話をかけるところであった。どうせキールも同じ立場なんだから別に良いだろうとか不覚にも一瞬考えてしまった。もう散々だ。

決めた、この会社は潰す。絶対だ。奴らの犯罪の温床となり得るのなら尚更だ。どんなに些細なことでも良い、この慈音グループの名が出る事案という事案を徹底的に洗い出せと、風見に指示を出した。

「本っ当にぶこめんね? もう落ち着いたかい?」

「……………」

俺の横を歩く彼女の顔を覗き込めば、スイと滑らかに目を逸らされた。いつかの罵倒よりも威力が高かった。

さつきのことは……そう、本当に、誰も悪くないのだ。ただ、あらゆるタイミングが神懸かり的に悪かっただけなのだ。

キールがああの部屋を選んだのは人目を気にしたら当然のことだったし、いなくなつた子供達を探しに許可まで得て入ってきた不知火さんだつて悪くない。

そして、退職したばかりのアナウンサーが何故あんなところにいたのか疑問に思うのだつて当然のことだし、不知火さん一般人○にその理由を訊かれて慌てたキールが俺に助け舟を求めたのだつて分かる。

だが、相手が悪過ぎた。

不知火さん相手に、今後出会うことのない悪人役を演じることはできなかつた。だから俺が慌てたのだつて仕方なかつたはずだ。

そのせいであんな無様な真似をして、彼女の悲鳴に駆けつけた春川さんを誤解させて思い切り蹴られたのは、全て、仕方のないことだった。

しかし納得できるかと言われたら決してそうでもない。強いて言うなら赤井が悪い。何が悪いって全部あいつが悪い。黙って見ていただけのあいつが！ 悪い！！

……そう無理やり考えでもしなければ腹の虫が収まらなかつた。八つ当たりだなんてそんな今更。

しかし直接それを奴に訴えるのは流石に理不尽であることは理解できるので、とりあえずその怒りはこの会社へ向けることにした。八つ当たりだなんてそんな今更。

「カエデちゃん……！」

「あー、よしよし、怖かつたね」

彼女達が待ち合わせしているという赤松さんの控え室に着くと、真つ先に不知火さんは赤松さんにしがみつく。春川さんからのメールで何があつたかを知らされていた赤松さんは、憔悴している俺に何とも言えない生暖かい笑顔を向けてくれた。いや、俺の方も悪かつたんです。

その数分後、春川さんと最原くんも続けてこの部屋に入ってくる。

この二階にあるゲスト用の控え室には、迷子になっているらしいあの子達を除いた知り合い全員が揃っている。

これから本格的に混雑してくる中、これ以上はバラバラに行動するべきではないと毛利探偵が言ったところ、赤松さんが集合場所にここを使えば良いと、許可をとってくれたらしい。

確かに、他の客も大勢いる共同の休憩エリアではなく、関係者以外は基本的に入って

こない二階の控え室エリアを集合場所にすれば、

まず迷子にはならないだろう。時間を決めて交代で出入りし、迷子の彼らを探しているそう。悪い判断ではない。

「……不知火さんに何があつたの？」

「……不幸な事故が起きたのよ」

コナン君が赤松さんにヒシツと抱き着いたまま離れぬ不知火さんを見て当然の疑問の声をあげると、春川さんが疲れたように答えた。誤解が解ければ彼女もすぐに謝ってくれた。友達思いの良い子であることは分かっている。

問題は不知火さんに俺に対するトラウマができているかどうか。今後ずっと性犯罪者扱いされるなど真つ平ゴメンだ……！

「大変でしたね……」

「分かってくれますか……！」

最原くんの気遣いが胸にしみる。

同級生である故か、不知火さんが無意識かつ無作為で起こす惨事の内容も把握済みなようで、哀れな俺がそれに巻き込まれただけだということもすぐに分かってくれた。

良い子ばかりだよ本当に。不知火さんの悪意という名のトンデモセキユリテイが無ければ尚良かったのに。

「で、結局まだガキンチョ達は見つかっていないのね」

「何処に行っちゃったんだらう……」

不確定要素の塊たる不知火さんをそのへんに彷徨かせたという、ある意味では全ての元凶とも言えなくもない歩美ちゃん達の行方は、未だに判明していない。コナン君によれば、携帯電話や探偵バッチにも応答しないのだとか。彼らも彼らで何かに巻き込まれている可能性が高い。

ここの職員だと名乗ったキタナガさんに連れられた一行は、ホール内の各施設の見学をしている最中にあの三人が居なくなったことに気がついたらしい。

そこを偶々通りかかった協会の粗探し中である不知火さんにその事態を伝え……その後のことは、推して知るべし。

「それより赤松さん、時間は大丈夫なの？」

「もうそろそろだと思う。その時はキタナガさんが呼びに来るって、本人が言ってたんだけど……」

園子さんの問いに、赤松さんが壁にかかっている時計を見ながら答えた。

現在12時40分を過ぎたあたり。当初の彼女の演奏予定時刻まで、長くてもおよそ20分弱か。

「えー？ 普通はもっと早くからスタンバってるものじゃない？ ピアノの調整とかも

あるんでしょ?」

「確かに……予定が変わったのかな」

「それならそれで、事前に連絡の一つはあるよね?」

すると、赤松さんがよしと膝を打って言う。

「ここで悩んでても仕方ないよね! ちよつと様子を見に行ってくる! 他のゲストを

呼びに行っているだけかもしれないし」

「カエデちゃんはここにいた方が良いじゃないの? もしキタナガさんが来た時に入れ

違いになったら元も子もないよ」

「あつ、それもそうだ……」

ようやく冷静さを取り戻して体を離れた不知火さんに言われ、再び困ったように眉尻を下げる赤松さん。

「キタナガさんを探せば良いんだよね? じゃあ私が行ってくるよ」

おーつとここでまた君を一人で彷徨かせたら、何が起きるか分かったもんじやないぞ(遠い目)。

俺と同じく彼女のパターンの思い知っているコナン君と赤井がピクリと反応したのが見えた。が、彼らより先に声を上げた人が。女子高生達だ。

「じゃあボクも行くこう!」

「私もいくわ」

「不知火さんだけじゃ何だか不安だしね」

不知火さんとの相性が、この中で最も未知数である彼女達が申し出てしまった。迷子の子供達も探さなくてはならない今の状況として、これ以上キタナガさんを探しに行く人員を割くのは不自然だ。

つまり俺達まで動くのは流石におかしいというワケで……おいコレ、一体どうなるんだ??

戦々恐々としながら彼女達を部屋から出ていくのを見送って、僅かその数分後。事態は予想だにしない展開を迎えた。

16. 「運命が絡まり過ぎて事故つてる話 ④」

どうしても王馬が許せなかった。皆の思いを反故にして嘲笑うあいつが。

元々あいつを疑っていた私には、どうしてもそれが演技には見えなかった。だから、私も本気で殺すつもりだった。

「そこで、覚悟を決めたんだよ。百田を殺したクロとして、私はこの学級裁判で王馬を殺してみせるって。

……あんた達の命と引き換えにね」

今も目に焼き付いている。私がエグイサルで突入した格納庫の中で、百田と王馬が揉み合いになっている光景。そして、壁際で電池が切れたように倒れたまま動かない不知火の姿。

よりにもよって王馬のクソヤローは、ここでの生活で私の心の拠り所になっていた二人、両方に手を出しやがった。まるで私をピンポイントで煽るかのようにな。

才能のことなどお構いなしにしつこく構い倒してくる百田は、気がつくとも初めて好き

になった人間になっていた。不知火は、子供のようになら私を信頼して懐いてくる変わり者。

あいつらに対する感情が、私の中に植え付けられた記憶によるものだろうと、そんなことはどうでも良かった。私がそう感じているのは紛れもなく本当のことだから。

あいつらを攫った王馬の演技が、もし演技ではなく、本気だったら？

その可能性が怖くて仕方なかった。

私はやっぱり弱い人間だ。未だに王馬を信じ、毅然として私と対峙する最原や赤松と比べたら。

……そんな私に唯一残された、たった一つの希望を挙げるなら。不知火の『超高校級の悪意』という、不確定要素の塊のような才能。

本物の殺意や悪意でなければ、不知火の才能は発揮されない。王馬はモノクマを騙すためにそれを狙ったのではないか。

だから、私に本物の殺意を抱かせ、作戦を知らない不知火を巻き込んだ。

だけど、あの状況からどうやってひっくり返せるのか全く見当もつかない。王馬か百田、必ずどちらかは死ぬ。いや、ほぼ間違いない百田の方が死ぬ。……他でもない私が手を下してしまった。

私が知り得る全てを話した後も、クロの投票を促すエグイサルの言葉をかわし、最原

は続けた。

「この事件はまだ終わっていない……！」

皆がどよめく中、不知火だけは微動だにしない。

百田か王馬が乗っているエグイサルと同じタイミングで裁判場に現れた不知火は、いつも通りフードを深く被り、誰とも目を合わさず、ずっと黙ったまま。事件の渦中にいたあいつは、一体何を知っているのか。何を隠しているのか。

学級裁判は、まだ終わらない。

**

*

自分の目の前で起きたことなのに、すぐにそれを信じることはできなかつた。

蘭ちゃん達と一緒にキタナガさんを探す不知火さんを手伝っている時のこと。同じ二階フロアにある別の控え室の様子を手分けして見てみるも、既にその部屋をあてがわれた出演者達は劇場へ出かけているらしく、殆どの控え室は鍵がかかった無人の状態だった。

……やっぱりおかしい。他の出演者はとつくに呼ばれているのに、何故赤松さんの部屋だけに来ないんだ？

そう考えながらも探索を続けていると、ある一室のドアノブを回そうとした時に違和感を感じた。

扉を開けられないのは他の控え室と同じだが、しかし、その手応えが違う。ドアノブが左右どちらにも殆ど回らない。施錠時でも少なからず空間に遊びがあるはずのラッチボルトが、まるでガツチリとそこに固定されているような。扉の隙間を見れば、デッドボルトも出ている。

つまりこの部屋だけ、通常通り施錠された上で、更に何らかの細工をされているわけだ。

「皆……こっち……」

すぐさま他の部屋を見ている他の皆を大声で呼んだ。どうしたのかと聞いてくる蘭ちゃんと園子ちゃんにこの部屋の異変を伝えている中、不知火さんだけは真剣な表情で扉の隙間にピツタリと耳を当てていた。

「手荒だけど、蹴破るしかない。不知火さん、ちよつとそこどい、……て？」

メキヤツ

ボクが言い終わる前に、扉の方からそんな鈍い破碎音が鳴った。見れば、不知火さん

の右腕が、ドアノブと鍵穴があったあたりを深々と貫通していた。アルミ製の扉の。

……え？ 腕が貫通？ ノーモーションで？

「よし開いた」

腕を引き抜きながら不知火さんがシレッとそう言った。そりゃ開くよ、錠のケース丸ごと引っこ抜いてんだから。

そんな間抜けたツツコミをする余裕も無かった。

呆気無く開いた、その扉のその先。

赤松さんの控え室と、ほぼ同じ内装のその部屋。

彼女の部屋とは荷物など微妙な差異がある中で、一際異彩を放つ存在があった。

壁に設置されたコート掛けのフックに、首に結ばれたテープだけでぶら下がる、四肢を力無く垂らしたその人は、いままさにボク達が探していた「セーフ!!」 まだセーフだからあ!!!」

……目の前の光景によって冷えていくボクの脳内で流れるナレーションを、不知火さんの絶叫が遮った。

その次の瞬間、キタナガさんの首を吊るコート掛けのフックが弾け飛んだ。途端、重力によって落ちていく彼女の体をその下にいた不知火さんがスライディングで横抱きにキャッチする。

アレ？ さつきまでボクの隣にいなかったっけ？

と言うか、ちよつと、え？

さつきから何が起こってるの？

蘭ちゃんも園子ちゃんも同じような顔をしていた。多分ボクも似たような表情をしていると思う。

いや、呆けてる場合じゃなくって！

「……って、し、不知火さんダメだよ！ 現場を荒らしちゃー！」

「んなことより救急車呼んで！ はよー！」

「救急車!?!」

「まだ間に合うから!!」

「!」

まだ間に合う？

その言葉に弾かれたように蘭ちゃん達も行動を再開した。園子ちゃんはその場で携帯電話を取り出して119番にかけ、蘭ちゃんは皆を呼びに赤松さんの控え室へと走った。

残ったボクは、グツタリとして動かないキタナガさんを横たえる不知火さんの方へ恐る恐る近づく。

「な、何で……」

「ええええつと、世良ちゃん？ 動いている心臓に心臓マッサージはダメなんだっけ？」

「え、うん」

今になってパニックになり手をアワアワと迷わせる不知火さんが、テンパったようにそう訊ねてきた。

「……この人いい息してないよう、人工呼吸どうやるんだっけ世良ちゃんん」

もう何が何やら。不知火さんにつられてこつちもパニックになりそうだ。

だが、冷静に観察すれば、キタナガさんは呼吸こそしていないが、首で血流を止められていたせいで青かった顔色は、そこを解放されたことによつて徐々に赤みを取り戻していく。

脈がある。

生きている。

「大丈夫!」

助けを呼びに行っていた蘭ちゃんが大勢連れて戻ってきた。

不知火さんはやれ助かったと言わんばかりに肩の力を抜き、そして何故か安室さんを真つ先に頼った。

「人工呼吸やって！」

「は!? 僕ですか!？」

「せつかくの口実……」

「だから違いますってばあ!!!」

二人の間に一体何があつたのだろう。聞いてはいけな気がした。

そう言いつつも、安室さんは人命救助のためだと自分に言い聞かせながら、覚悟を決めてくれた。

キタナガさんが咳き込んだのは、その直後のことだった。良かったね安室さん。

「ねえ不知火さん、何であの時、まだ間に合うと思つたの?」

意識だけが戻らぬキタナガさんが駆け付けた救急隊員に搬送されていった後、ボクはずっと気になっていたことを彼女に訊ねた。

救急隊によれば、あと数分でも処置が遅れていたら、本当に手遅れになつていたら、ろだったらしい。

「……心音が……」

「心音?」

「息を止めている時のような、激しい心音が聞こえたから」

「心音が聞こえたの……!?!」

あの細い扉の隙間越しに!?

おいおいそれはウソだろと思っただけど、現場検証をしているコナン君と安室さんと沖矢さんが納得顔で頷いていた。マジで?

「と言つても、常時そこまで神経を研ぎ澄ませているわけじゃないよ。疲れる」

「そりゃあ……まあ……」

そういう意味じゃなくってね? 心音が聞こえるっただけで物凄いやからね?

でも、何となくわかるかもしれない。あの時の不知火さんは色々とぶっ飛んでいた。力任せにぶち抜かれたこの部屋のアルミ製の扉がそれを物語っている。何あの馬鹿力。この細腕の何処から出てくるんだろう。

もし彼女がまだ生きていると知っていたとしても、ボク達だけじゃどうにもならなかった。首を吊られた成人女性をあそこから、それ以上首に負担をかけないよう、慎重かつ即座におろすなんてことは。それこそ、フックそのものが落ちない限りは……

……うん?

「もしかしてあの壁掛けのフックを落としたのも、不知火さん?」

アツサリと首肯が返ってくる。何でもアリかこの人。

「どうやって?」

ボクがそう訊ねると、不知火さんは右腕を軽く振った。すると、黒いコートの袖からポトリと何かが出てきた。鋼色の、掌の長さほどある太めのバトンのような物だ。

不知火さんがそれを手慣れたように軽く振ると、カシャンツと軽い音を立てて一瞬で変形する。

柄の長さが伸び、先端にはやや潰れた直角二等辺三角形型のグリップが、もう片方の先端には滑らかな曲線と鋸歯を持つ三角形の匙体が展開された。その形状はまるで……。

「……スコップ?」

「うん。超高性能な、いいスコップ」

何でスコップ?

わざわざ袖に仕込んでおくにしては、何というか、ちよつと間が抜けた……じゃなくて、うん、とにかくスコップを携帯する人なんて初めて見る。

そもそもスコップだとしても、それでどうやってフックを壊したと言うのだろう。怪訝な顔をするボクに、不知火さんは続けた。

「これ、それぞれのパーツは直接接続されてるわけじゃなくて、内側に張られた頑丈なワイヤーで繋がってるんだ」

指示棒のように伸縮式になっているその節目を伸ばして見せてくれた内部には、確

かに蛇腹状の太いワイヤーが通っていた。そして、スコップ状に展開されたそれを一度最初のバトン状に戻す。

「だから、思い切り、振る、と」

ガキインツ！

不知火さんが鋼のバトンを握った腕をとんでもない速さで振るった瞬間、引っこ抜かれて床に放置されたままの錠ケースが突然金属音を立てて勢いよく弾かれた。

スコップの匙体部分が戻ってくるまで殆ど何も見えなかった。

「遠心力で伸びる鞭みたいになる」

「えええええええ」

いや分かるけど。理屈は分かるけど！

スコップって普通、もっと違う使い方しない？

「そ、そうやって、あの小さなフックを壊したの……う？」

「咄嗟だったから……動かない的だったし……」

咄嗟でアレって十分ヤバイよ！

しなるワイヤーでピンポイントに当てるなんて、銃での狙撃より難易度高いんじゃない?!?

気がつけば安室さん達は額に手を当てて壁に寄りかかっていた。コナン君も乾いた

笑みでこちらを見ている。

「こう言っちゃアレだけど、不知火さんって、本当に何者……？」

「え？ ……強いて言うなら、不審者？」

不知火さんのどこか惚けた目は、どこまでも真っ黒に澄んでいた。

この大規模なコンサートホールの構造は、以下の通り。

一階には受付のエントランスと広い展示ルームがあり、そこに楽器の販売コーナーが設けられている。その他、劇場のステージ裏手と直接繋がる楽器や小道具などの保管庫や、スタッフルームがある。

不知火さんはこの階の展示ルームの裏手で大騒ぎしていた。

二階は出演者の控え室エリア。主にゲストを含めた楽団や演奏者が使用する階で、観客の一般人にはほぼ縁がない。

楓さんがいたのは、その中のゲストエリア。

三階は共用の休憩エリア。外部から持ち込んだ飲食物や、四階の店でテイクアウトしたものを食べられる広いラウンジになっている。

僕がいたのはここ。

四階は軽食ができる店などが入ったエリア。三階ほど広くはないがラウンジもある。

五階の殆どは劇場部分と屋内駐車スペース。劇場外には人が寛げるスペースはほぼ無し。自動販売機が設置されている程度だ。

春川さんは、この一階から五階を常に移動しながら観察していた。

そして屋上は見晴らしの良いテラス。特に何も無い……と思いきや、何故か血液の滴下痕や力任せに服を千切ったような繊維の塊など、激しい闘争の痕跡と思しきものが見受けられた。流血量からして武器を用いぬ素手での殴り合いが行われたと推測できる。どうしてこんなところ……？

劇場の構造としては、一階から二階部分まではエンドステージ形式。舞台と客席が向かい合った、劇場と聞いて真っ先に思い浮かぶような一般的な構造だ。

三階から五階までは、大きなバルコニー状の足場に席が並べられた形式。

一階から五階まで、館内全ての階において劇場内外との移動は可能。その出入口は各階劇場の、右側・後方・左側に二箇所ずつ、一つの階につき六箇所ずつ存在する。

劇場内には階段が左右二箇所ずつ設置されており、それで階を移動することはできるが、劇場の外と違ってエレベーターは無い。劇場内の階段は、デザイン性を重視され、階ごとにその位置が微妙に異なっている。

そのため、素早く複数階上り下りしたい場合においては、劇場内の階段を用いるのは得策ではない。ただし、エンドステージ形式で同じ床を共有している一階と二階においては、それは当てはまらない。

このコンサートホール最大の特徴は、三階から五階のバルコニー状になった客席が、変形・可動式であること。

午前の部のように、ほぼ一階で収まる動員数の場合と、午後の部からのように大入りが予想される場合など、観客の動員数によって、どの席からでもステージが見えやすくなるよう、それぞれの高さや位置を調整できるそうだ。

極端な例では、三階から五階までの客席が全て三階相当の高さで横一直線に並び、舞台を三方向から囲うスラストステージ形式に似た形にもなるらしい。

その場合、席が三階へと移動した四階と五階の劇場出入口はロックされ、使用不能となる。

そういった客席の位置替えの際は、安全のために全ての出入口が自動ロックされるので、今の昼休みのような観客がいないタイミングで行われる。

……ザッとこんな感じかな。随分お金のかかっている施設だ。

さて、残るは、この一階にあるスタッフ専用の休憩室だけど……。

「最原お兄さん？ 何してるの？」

「うわっ」

驚いて声をかけられた方を振り向けば、そこにはあの少年がいた。

世間ではキッドキラールと呼ばれ、ボク達の仲間内では密かに「例の少年」とか「例の子」とか、何の捻りもなくそのまんまで呼ばれているその子が。

「キミは……江戸川コナンくん、だよな？」

「うん！」

不知火さんは彼が謝ってくれたことを絶賛していたけど、まず普通の子供は盗聴器を仕掛けるだなんてこと、しないとと思うんだけど……。

無邪気そうに振舞いながら隙なくこちらを観察してくる彼と視線を合わせるように屈みながら、そう考える。やっぱり只の小学生じゃなさそうだ。

「ちよつとだけ、気になることを確認してただけなんだ」

「気になることって、事件に関係することなの？」

「まあね」

……不知火さんが探偵志望だと言うだけあって、こういうことには興味津々らしい。仮にも殺人が起きかけたと言うのに。幼さゆえに事の大きさが理解できないのか。はたまたそれとは真逆で、すっかり慣れっこなのか。僕としては是非前者の方であつてほしいと思うけど、この町の犯罪発生率を考えたら強ち後者でも間違いなさそうな気もす

る。殺人に慣れた小学生って、何だか未恐ろしいな……。

「……最原お兄さん？ ボクの顔に何かついてる？」

「あつ、いや、何でもないよ」

うつかり考え込んでしまっていたらしい。慌てて立ち上がる。

「そこつて、このホールのスタッフさんしか入れない場所だよね？」

「うん？ ああ」

コナンくんは、彼に話しかけられるまで僕が見ていた場所を指差した。STAFF ONLYと書かれた扉だ。その少し手前にはカードリーダーが設置され、職員証を翳さねば入れないようになっている。

「もしかして最原お兄さんは、こここのスタッフさんがさっきの事件の犯人だと思っているの？」

「それは……どうかな」

どうかかなと言うか、もう既に知ってるんだけど。我ながら酷い反則である。最初から犯人が誰かを知っているだなんて。今やっているのだったただの犯人の追い込み作業。最低限の確認だけして、あとは警察に任せようと思う。

そもそも僕は、別の仕事でここに来たんだ。殺人なんてものには極力関わりたくない。誰も死なずに済むのならそれに越したことは無いんだ。そのための尽力は惜しま

ない。

だからさっきの、誰よりコロシアイを嫌う不知火さんが無意識に起こした犯人への究極的な嫌がらせ——即ち被害者の救命は、本当にギリギリのファインプレーだった。

銃撃は阻止できたものの、あのまま引き下がるわけがないと予想はしていた。しかし本当に躊躇いなく次の犯行を実行してしまうという、犯人の底知れぬ憎悪に身震いしてしまう。

自分は何も知らないと繕ったあの顔の下に、一体どれだけの……。

ああこれだから、コロシアイは嫌なんだ。

と、その時。ずっとスイッチを入れていたインカムに通信が入ってきた。

『速報。迷子キッズを四階の喫茶店で発見』

『いたの!?!』

『全員無事?』

『全然無事。呑気にケーキ食べてらあ』

なんとまあ。足から力が抜けそうになる。

「……電話で」

『あーい』

この少年にインカムの存在を知られるわけにはいかない。僕の勘がそう言っている。

ごく軽い咳払いで誤魔化しつつ、ごく小さな声で頼めば、すぐに内ポケットに入れている携帯電話が震え出した。

「もしもし? ……ああ、不知火さん?」

電話で知らされたという体を装い、迷子発見の知らせをコナンくんに伝えると、彼は心底呆れながらもホッとした表情で四階へ向かった。同級生って感じではないな。まるで保護者みたいだ。

救急車より遅れてやってきたパトカーのサイレンが、徐々にこちらへ近付いてくるのが聞こえる。

さっさとこんな事件は片付けてしまつて、本当の目的を達成しなくては。

『ごめんなさい、警察が来るから一旦ここから退くけど、構わないわよね?』
「……………ああ」

『そう言えば、さつきバーボンと会ったんだけど、彼はここで何を』

「その名前は出すな」

『え?』

「その名前は、今、出すな、決して」

「あ、兄貴……」

「???'」

17. 「運命が絡まり過ぎて事故つてる話 ⑤」

「お前さあああ！ 待ち合わせの場所に行ったらいきなりエグイサルに殴られて意識ぶっ飛んで、挙句目を覚ましたら瀕死のお前が押し花寸前とか、どういうこと?!?!」

「だーかーらー、ごめんつてばー。悪かったつてずつと言ってるじゃん」

「気持ちは物凄おーく分かるが落ち着け不知火、ボムの効果が残っているうちにさっさとやる事済ませておかねえと」

「百田ちゃんの言う通りだよ！ いつまでグダグダしてんのさ！」

「オメーが死にかけたせいだろ！」

「それはオレのせいじゃねーし？ 春川ちゃんのせいだし？」

「そのハルちゃんを嚇けたのは誰だよ」

「不知火ちゃんの真顔初めて見た」

「その辺にしとけ。早く作業すんぞ！」

「はいはい、百田ちゃんはせっかちだなあ」

「さつきと言ってること真逆だろ。」

「……つってもなあ、コレどう收拾つげんだよ。ハルマキはオレが死んだと思ってるぜ？」

「それで良いんだよ。とりあえず誰か一人は死んだことにしておかないと意味ないし」

「……死体が無くても意味ねえぞ？」

「そこなんだよねー！ とりあえず百田ちゃんがあそこに挟まっててくれない？」

「ツツザツケンナ!？」

「ウソに決まってるんじゃない。何本気にしてんの」

「死体役かー……あー……この際仕方ないか。使えるならコレ使つてよ」

「ちよ、エエエエ!? 何だそれ、何処から持ってきたんだよ、ウソオ!？」

「うわ……すつげえピンポイント。さつすが不知火ちゃん、オレの期待を良い意味で悉

く裏切ってくれるね！ と言うか、本当にそんなの、何処で手に入れたの……?？」

「私の研究教室の、隠し部屋にあった」

「隠し部屋？ やっぱりそういうのあったんだ」

「何かありそうだとは思ってたが……」

「頭をかち割られた私を手術した場所がそこだったみたいだね」

「「ああ——」」

「意味深な赤いサビと薬品だらけの部屋だった」

「ああー……」

「で、何だっけ。誰かが潰されるように見せかける動画を撮ってる途中なんだっけ」

「そうだった！ よし、早速クランクインだね！」

「それにしても、何であんなものを大量に持ち歩いてたの？」

「……………」

「不知火ちゃん？」

**

*

迷子になっていたあいつらはあろうことか、心配する俺達を他所に四階のエリアの喫茶店で呑気に寛いでいたらしい。何してんだよあいつら。

今はオツチャンや蘭達に軽く叱られているあいつらを最初に見つけてくれた不知火さんは、見張るついでにその店で注文したというチョコプレートケーキを口にしながら、

その場へ駆けつけた俺にこう言った。

「実はな、私がここに来る少し前まで、あの子達は知らないおっさんと同席してたんだ」
「知らないおじさん？」

「うん。まあ私が知らないだけで、キミ達の知り合いかもしれないんだけど、どうよ？」
そう言いながらオレに見せてくれた携帯電話の画面には、大勢の人でごった返す店内、オレも見知らぬ体格の良い男性と対面するようにこの店のテーブル席に着いたあいつらの姿があつた。

……誰だ？ 自分は最原さんに奢られたから今度は自分ごと、よく分からない理論で不知火さんに奢られたチーズケーキを口にしながら、その写真をマジマジと観察する。オレはまだ昼飯も食べてないんだけど……。まあとにかく、その男に見覚えは無かつた。
「ううん、ボクも知らないや。多分皆の知り合いでもないと思う」

「おいおいウソだろ、本物の不審者じゃなかよ。いやどうもあの子らね、このおっさんに何かの口止め料としてケーキを奢られてたらしいの」

「く、口止め？」

「残念ながらあの時の人混みの中じゃ流石に聞き取り辛くつてさ。私がギリギリまで近づけた時には、殆ど会話が終わってるしそいつは退席していくので、肝心なことは聞けなかつたんだあ。口惜しやあ」

ちよつと待て、あいつら一体何に巻き込まれてたんだ……？

不穏な事情持ちの協会に、殺人未遂まで起こって、ほぼ同時に誘拐未遂じみた事まで発生してたってことかよ。

「そ、そのギリギリまで、何て聞こえたの？」

「聞こえたことを出来るだけそれっぽく再現すると……おじさんがキミ達にゴニョゴニョったことはゴニョゴニョゴニョ……って感じかなあ。あの子達とおっさんとの間に何かがあつたってぐらいいしか分かんなかった。普通に事案」

「……」

「あの子達、毛利のおじさま達には何て説明してるの？」

「……偶々知り合つたおじさんにケーキをご馳走してもらいましたー、って」

「十分アウトじゃね！」

オレもそう思う。深く頷いて同意した。

ただ、特に怪我也無く怯えた様子も無かつたので、オツチャン達に怒られて小さくなるのを見てお騒がせな奴らだな、と呆れる程度だった。

だが、さつきの不知火さんの話を聞いた今、新たに別の心配事が出てきてしまった。口止めなんて、これまた穏やかではないワードが。オヤツでまんまと上手く丸め込まれてしまった以上、不知火さんが聞いていなかつたら誰もそのことに気付かなかつたこ

ろだ。またあいつらは妙なことに首を突っ込みかけたらしい。

「いやでもさあ、あの子達つて案外割と鋭いところがあるよね。子供特有の勘つてやつかな、危なっかしい人間にそう簡単に懐くような子達じゃないと思うんだ」

「！」

空になった皿を名残惜しげに見ながら不知火さんが言ったその言葉に、オレは少しだけ意表を突かれた。

いつも近所の子供と戯れるように相手をしてくれる不知火さんは、あいつらのことを単なる探偵ごっこが好きなお子達だとは思っていなかった。確かに無謀な行動が多い奴らだが、オレもあいつらに助けられたことだって少なからずある。ここぞと言う時に発揮するチームワークや運の良さは侮れない。

「……じゃあ、皆にケーキを奢ったその人は、実は良い人かもしれないってこと？」

「まさか、逆だよ。子供に変に騒がれないよう自然に誘導できる、人心の掌握に長けた奴じゃないかな。他所の子供を勝手に連れ出した上に、念入りに一人一個ずつケーキ奢つてまで口止めさせるって、控えめに言つてもよっぽどのことを隠してそうだよ、ソイツ」

オレも同じことを考えていた。

何となくだが、今日遭遇した事件の中で、最も危険な案件である気がする。

「何かもう、粗探しどころじゃなくなってきたな。とりあえずこのおっさんが誰で何

やってんのか知っておかないと……特にハルちゃんは黙っていられないだろうし……」

「ねえ、ボクも協力させてよ。皆が心配なんだ」

「えー……じゃあ、ハルちゃんの近くでね」

「え、っ」

こうして、光彦達に接近したその男が何者なのかを探ることをキツカケに、オレと不知火さん達との間に同盟が結ばれた。

連絡先を交換済みの不知火さんからその男の画像を送って貰い、それを赤井さんにも送る。メールで事情を説明すれば、こちらで探ってみるといふ返事がすぐに来た。

そしてオレは……。

「……不知火からキミを護衛しろって依頼があったんだけど」

「よ、よろしく、お願いしまあす……」

ただの保育士さんにしては、その気迫が何処その特殊部隊ばりに緊張感のあるお姉さんと、行動を共にすることになった。

今日一日で、一体何件の事件に巻き込まれるのかしら。下手したら過去最高記録にな

りそう。

工藤君からのメールによって吉田さん達に起きていたことの真相を知り、溜息をつきたくなった。こっちもこっちで、大変なことになっているというのに。

未遂で済んだものの、事件が起きたことによってコンサートイベントは一時中断。その後で司会進行役を変えて再開されたけど、ある意味このイベントの本命であった不知火さんの友人、赤松さんの演奏予定の時間は一連の騒ぎによって過ぎてしまい、事実上のお流れとなってしまった。

それを伝えられて落胆した不知火さんは『ネコ踏んじまえ!』と謎の罵倒をし、赤松さんは『やめなよ、砲丸転がすよ』と謎の諷め方をして、その後二人してH A H A H Aと笑い合っていた。意味は全く分からなかったけど、少なくとも彼女達の仲がとても良いことは分かった。

さて、私達子供への保護の目を強くさせ、今のように女子高生や大人達にしつかり囲われるようになった原因である、あの殺人未遂事件のことだけだ。

あれ、密室中での首吊りという自殺に見せかけるには、随分とお粗末で杜撰な犯行だったようね。工藤君の助け一切無しで、毛利親子にも簡単にトリックが分かったほどだから。

まず凶器となったテープが、ポリエチレン製の平テープ……って、もうこの時点で明

らかにその場しのぎで用意したものだとは分かってしまう。被害者の首への結び方も、ごく単純なひばり結び。確かに負荷がかかればかかるほど締め付けられる結び方だけど、そもそもそんな気軽さで自殺するような奴がいるわけないでしょうに。

密室を作ったトリックも単純。

何てことはない。瞬間接着剤をラッチボルトの受座にこれでもかと注入した後、普通に施錠しただけだった。合鍵やピッキングなどの手段が通じないという点においては、時間稼ぎとして有効だったのかもしれない。流石に丸ごと引っこ抜かれては意味がなかったようだけど。

更に救急隊員の話によれば、キタナガさんの背中には火傷のような痕が複数あったらしい。スタンガンを使われたのでしょうか。

つまり犯人は、スタンガンで気絶させた被害者の首にポリエチレン製のテープを結び、なんらかの手段であるのコート掛けに引つ掛けた後、瞬間接着剤をラッチボルトの受座に塗ったくつて鍵をかけて逃走……と。

えっと、何この、手に取るように分かりやす過ぎる犯行。

密室を作った経緯から、犯人はその部屋の鍵を持つ人物に絞られる。そして、首を吊られた被害者が発見時にまだ生きていたことから、犯行時間はその直前であると特定できる。

その部屋を控え室としてあてがわれていた出演者は、鍵は持っているもの、とづくに劇場へ呼ばれていたの除外。

その他に鍵を持つ人物は、更に絞られる。ホールのスタッフのうち、その控え室エリアに訪れる理由を持つ人間。出演者達を事前に呼びに来る役目を持つ人間。

つまり、イベントの司会進行役。

被害者となったキタナガさんと同じ立場である、アラサキさん。

容疑者は、午前の部でキタナガさんと入れ違いにステージに立った彼女ただ一人に絞られた。

……とまあ、そこまでは私達を含め、後からやってきた刑事さん達にも簡単に分かったこと。

問題は、彼女がやったという決定的な証拠が無かったこと。現場が人通りの少ないエリアだったこともあり、目撃証言も全く無く、更に元から彼女はサテンのグローブをしているため、現場や凶器のテープなどから指紋が全く検出されなかったみたい。

とんでもなく杜撰な犯行なのに、決定的な証拠だけがなかなか見つからないという珍事件。その膠着状態を破ったのは、目暮警部のポケットから見つかったメモの切れ端だった。

「……劇場の天井に、五発もの銃弾が撃ち込まれているのが見つかったそうだ。本当にこのメモは、君達のものではないのかね？」

午後の部の演奏が始まっている劇場へ観客が流れた後の、誰もいなくなった三階のラウンジにて。私達は、困惑気味にそう訊ねる警部さんと、違いますと勢いよく首を横に振る毛利探偵のやり取りを見ていた。

警部さんのポケットにいつの間にか入れられていたそのメモには、箇条書きで「硝煙反応」、「青いドレスの下」、「劇場の天井」という、一見何の関係も無い三つのワードだけが、丁寧な字で書かれていた。

何の悪戯かと思われたものの、容疑者がまさに青いドレスを着た人物であったことから、半信半疑で硝煙反応検査を行ったところ、何と被害者の首にかけられたテープと容疑者の身につけている衣服から、見事に反応が検出されたみたい。

それまで全く影も形も無かった銃器の存在を匂わせる展開に仰天し、容疑者へ問い質したところ、彼女は観念したように、そのドレスの下から大きなライフルを出したのだそう。

そして最後に、メモにある通り劇場の天井を恐る恐るオペラグラスで隅々まで調べたところ……銃弾が発見された、と。

「日暮警部、イベントの録画を確認したところ、被害者がステージ上にいるタイミング

で、確かに銃声が……」

「……………」

そして今しがた、高木刑事から、被害者が発砲されたという、全てを繋ぐ証拠が見つかったと、報告された。

「つまりこの事件は、本来は午前中の銃撃で殺害する予定が失敗したことによって、昼休みの間に絞殺する予定に変更された事件なんですな」

「その二つの事件と容疑者を結びつける証拠が、容疑者の衣服と、被害者の首に巻きついていたテープに残された硝煙だと……なるほどなあ」

たった一枚のメモに書かれた三つのキーワードで、犯人の特定と事件の真相解明ができてしまった。

あらまあ、探偵達の出る暇は全く無かったわね。

「しかし、君達でないなら、このメモは一体誰が書いたものなんだ？」

警部さんのその疑問は、この場にいる全員のものでもあった。誰も分からない。だって、少なくとも自分達ではないのだから。

「ねえ、お父さん。私、こういうのに詳しいわけじゃないけど、硝煙反応って銃を撃つ時に残る痕跡だよな？ それって、他の物にうつつたりするの？」

ふと、毛利さんがそう訊ねた。

「まあ、硝煙自体はその殆どが水で洗い流せるほどで、しつこく粘着するようなものでもないからな。繊維質に絡んだ細かい鉛の金属片は、洗ってもなかなか落ちないらしいが……とにかく、五発も撃ったグローブで触ったなら、硝煙や鉛の粉が多少うつたとしても不思議じゃないだろう」

「じゃあ、どうしてあのメモを書いた人は、犯人が銃を撃ったその状態のまま、凶器のテープを触ったことも分かっているのかしら？　犯人が硝煙反応のことまでは知らなかったとしても、証拠のライフルを隠したり、服を着替えたりすることだって、当然あり得るでしょ？」

皆がハツとした顔になった。

確かにおかしいわ。銃撃に関する一切隠滅していないことも、あのお粗末な犯行のトリックも。

目撃証言も指紋も残さぬよう、慎重に慎重を重ねて行動しているくせに、あの局所的な杜撰さは何故なのかしら？

「……したくても、できなかつたんだ」

愕然としたようにそう呟いたのは、安室さんだった。皆の視線が彼の方に向く。

「銃撃後の犯人が被害者と交代し、司会役としてステージに立った後の昼休み。昼食をホールの内外で食べる人が多く行き交うようになる三階から五階は、人の目が多過ぎて

使えなかった。証拠隠滅に使う場所は、自然に一階と二階だけに限られたんだ」

「じゃあ、なんで犯人はそこを使わなかったの？」

「だから、それができなかったんだよ。犯人も元からそのつもりだったはずだ。」

「けど、本来なら関係者しかいないはずの二階には……君達がいたじゃないか」

「……あつー！」

そうだった。他でもない私達が、迷子の吉田さん達を探すために、二階にある特定の一室から頻繁に出入りしていた。途切れずに複数人で廊下を行き交う私達は、人目を恐れる犯人にとって非常に大きな脅威となったはず。

赤松さんに、自分の控え室を使えば良いと提案され、それを何の疑いもなく受け入れた私達自身が、あそこにいた。

「じゃあ、一階は？ スタッフしか入れない場所だつてあるじゃないか」

「あのスタッフルームに入るには、職員証による認証が必要なんだよ。あそこを利用するということは、逆にその時間に自分がそこにいたという揺るがぬ証明になつてしまふ」

「だったら楽器の保管庫は？」

「午前の部の片付けや午後の部の準備のために、他のスタッフの出入りが多かつたはず」

「お、お手洗いは……？ あそこなら完全に人目を避けられるし……」

「確かに二階のトイレなら隠れるには一番無難そうだけど、証拠隠滅の場に向いていなかった。下水に流せるくらい小さな物ならまだしも、硝煙反応が出る大ぶりのドレスやライフルはどうしようもない。用具入れに着替えや証拠品を視覚的に隠せたとしても、見つかった瞬間に犯行も犯人も分かってしまう。午後にも仕事がある以上、それを気軽に回収にいけるほどフットワークも軽くなかった」

「それなら、展示ルーム裏の、物置みたいな部屋は？ 子供がいつの間にか入り込んでもおかしくないとと思われるほどセキュリティが甘いし、あそこなら、銃を隠すのにも、着替えを用意しておくのだって……」

「……犯人にとって最も都合が良かったであろうそこも、使えなかった。図らずも僕達が長々と騒ぎを起こしていた、その現場だったから」

あなたそんなところで何を騒いでいたの？

そう問える空気ではなかった。

伏せた顔を押さえた手の指の隙間から、悔しそうにも楽しそうにも見える彼の凄絶な笑みが見えてしまったから。

すると、こちらも何故か楽しそうな沖矢さんが続ける。

「なるほど、だからあんな杜撰な犯行になってしまったんですね。処分するはずの決定的な証拠を持ったままでは仕方ない」

「昼休みが明けた時には、自分は劇場にいたくちやいけないんだろ？ そりや焦るはずだ」

「ドレスの下にライフルを隠してたのなら、さぞ動きにくかったでしょうね」

「だからせめて外部犯の仕業に見せかけようと、ゲストエリアを犯行現場にしたんだわ」「ボク達がいっつ部屋から出てくるか怯えながらの適当なやつつけ仕事で、ようやく成功したと思つたら、……最終的に失敗しちゃったわけか……」

「「ああ……」」

同情したくなるような犯人の追い込まれっぷり。明らかに作為を感じる。一体誰の？

……なーんて。よくもやってくれたわね。こんなに楽しい踊らされ方は初めてよ、ピアニストさん。

ただ気になるのは、そこまで散々な妨害に遭いながらも、どうして犯人は殺人をやり遂げたかったのか。……ただならぬ執念を感じる。

「ということは、このメモを書いた人物は、発砲事件が発生したときから犯人を知っていたことになるのか……」

まあ、そういうことになるでしょう。あの時間帯に唯一私達の側にいた不知火さんも、途中退席していたんだし。

「そもそも何で犯人は最初の銃撃も失敗したのかしら？」

「銃弾、天井に当たってたって言ってたよね？」

「ステージを狙って天井に当てるなんて、いくら素人でもノーコンが過ぎるよ」

おそらくは、その銃撃の失敗から犯人の誤算は始まっていたんじゃないかしら。ステージ上の人間を射殺するという騒ぎを起こす前提でいたのだから、当然イベントも中止になる予定だったはず。ライフを隠したままステージに立つことすら想像していなかったと思うわ。相当焦ったことでしょう。

ステージに掠りもしなかった銃弾。本人のミスで失敗したのではなく、誰かに防がれた可能性があると考えた方がまだしっくりくる。

……あの鞭のようなスコップと、彼女の超人的な反応速度と精密さ。更に銃弾の速度や発射角度など、一瞬で計算できるほどの超人的な計算能力を持つ人も一緒にいたのであれば、ステージに向けられた銃弾の弾道を上に逸らすことも可能だったかもしれない。

なんて、流石にここまでくると荒唐無稽が過ぎるかしら。

いや、まさか……ね？

「……スッゲー、なんか、アレみたいだな」

「えっと、悪の犯罪組織の……？」

「DICEでも来ていたんでしょ…？」

怒涛の展開に呆けていた子供達が呟いたその言葉は、
案外的外れでもなさそうな気がした。

18. 「運命が絡まり過ぎて事故つてる話 ⑥」

『まあ、本人がゲロっちゃった以上、どんなバカでも間違えないと思います……』

王馬小吉クンを殺した犯人は、百田解斗クンでしたー!! 全員、大正解でーす!!』

『……そんなのって……』

『あ、ちなみに百田くんの共犯である不知火さんですが、残念ながら実行犯ではないので、おしおきは免除されます。あー残念!』

『……こんなことになっちゃまって、本当に済まねえな。終一、ハルマキ、皆……』

『……』

『……』

『……いや、まだだよモノクマ』

『まだ、終わってない。ここからが本番だ……!』

『はあ? 何言ってるの? さっき投票が終わったばかりだよ? 他でもないキミの推理で、この残酷な真実にたどり着いたんだよ? コロシアイが起きて、王馬くんが殺さ

れて、百田くんが犯人で、不知火さんが裏切ったという、最低最悪な真実にね!!」

『甘いよ、モノクマ。あの王馬くんと百田くんとクシビさんが手を組んだんだよ。私達をそれぞれの方向性で結束させたあの三人が、この程度で終わるわけが無いじゃない!』

『な、何を言ってるの?』

『僕達がさつきまで議論していたのは、飽くまであのプレス機で起きた殺人事件。だけどその本当の始まりは、王馬くんが自分を首謀者だと偽ったあの騒動なんだ。そしてこの事件は、王馬くんが本当の目的を達成するための、総仕上げにしか過ぎないんだ』

『さつきの裁判で使った証拠や証言だって、あの事件だけで得られたものでしょ? でも、クシビさんの研究教室にあったものと一緒に考えると、事件の真相も大きく変わるんだよ!』

『ここからは、王馬くんと百田くんと、途中から彼らに協力した不知火さんの、僕達全員をも巻き込んだ壮大な作戦の全容を解き明かす!』

『どういふことなの最原、不知火のあの部屋にまだ何かあったなんて、聞いてないよ』

『本当にごめん、春川さん。僕達も彼らの作戦を成功させるために、敢えて黙っていたんだ』

『……終一、お前、まさか』

『な、な、な』

『私が起こした事件の時、怪我をしたクシビさんは治療してもらったでしょ？ その手術室が、クシビさんの研究教室に隠されていたの。それはもう、皆も知ってるよね？』

『それは知っているけど……そこからは事件に関わる証拠は見つからなかったよね？』

『それどころか、ますます不知火が怪しいと思えん物が出てきたじやろう』

『偽装死薬……だったよね。服用した直後の数時間だけ、体温を下げて心肺停止させる効果の』

『最初の事件は、それを使って皆を騙していたんじゃないかって』

『それは違うぞ！』『それは違うよ！』

『クシビさんの研究教室が解放されたのは、あの事件よりも後だよ。それに、事件が起きる直前に学園内を歩き回っていた彼女のことは、ずっと皆が見ていたじゃない』

『あの偽装死薬を使って死を偽装するには、直前に飲まなくちゃ意味が無い。あの隠し部屋にあった薬をとってきて飲む暇なんて無かったはずだ』

『っ！』で、でも、不知火さん達が黒幕だったらその理屈は通じないよ。最初からその薬を持っていたという可能性も地味にあるんじゃない？』

『それなら、本当に王馬くんや不知火さんが黒幕だったのかを検証していこうか。本当に彼らは、コロシアイを望んでいたのかを』

『！』

『実は、あの隠し部屋には、壁に見せかけた業務用の大型冷蔵庫があったんだ。その中には、大量の輸血パックが保存されていた。おそらく、不知火さんの時のような緊急の治療用のためのね』

『そのうちA B型の血液だけが、極端に減っていたんだよ。クシビさん自身の血液型もA B型。点滴のカテーテルも、所定の位置から数本無くなってたの。クシビさんは普段から自分に輸血していたみたい。どんな理由でかは、本人に聞かないと分からないけど……』

『……………』

『でも、その手術室で処理されていた空の輸血パックを合わせても、手付かずの他の血液型のストック数には届かなかった。きっと、普段からあのコートに、カテーテルと一緒に入れて持ち歩いていたんだと思う』

『……………それを踏まえて、改めて今回の事件を振り返ろう。あの極度の कोरोシアイ 嫌いの不知火さんは、本当に、彼らに説得されて、王馬くんがプレス機にかけられるのを黙認したと思う？』

『ま……………まさか』

『僕達が見せられたあのビデオは、不知火さんが持っていた輸血パックを潰していただ

けの光景なんだよ』

『と言うことは、誰も殺されていないということなんですか……?』

『結局コロシアイは、最初から起きてなかったんだネ?』

『王馬くんも、不知火さんが持ち歩いていた物を全て把握できていなかったはずだ。彼女が乱入する直前まで、彼は本気で自分が殺される計画を実行していたはず。だからこそ、ここまでリアルな殺人に見せかけることができた』

『つまりこの事件は、立案者の王馬くん本人ですら予期できなかった要素のおかげで、結果的に私達ごとモノクマを騙せるほどの完成度で成立した、狂言殺人なんだよ!』

『いやいやいや、誰も死んでないなんてことはあり得ないよ! それが本当なら、王馬くんは何処で死んでるのさ? 春川さんに撃ち込まれた毒は消えてないんだよ?』

『ついに言ったなモノクマ! その発言こそがこのコロシアイゲームの根本的な矛盾だ! ゲームマスターのお前が僕達の生死を正確に把握できていない、その発言が!!』

『ふぐあつ!』

『ねえ、最原、赤松、本当なの? プレス機の中には、誰もいないの……? 王馬は……?』

『大丈夫だよ。彼も絶対に生きている』

『そんなの、嘘だ。あの解毒薬は百田が使ったんでしょ。だって、あそこに百田が』

『思い出してよ、春川さん。クシビさんが飽きずに毎日やってたこと』

『……スコップ持って穴掘りぐらいしか思いつかないんだけど……』

『まさにそれだよ。不知火さんは、毎日ずっと学園中の凶器を処分し続けていた。毎日毎日、補充されるのも構わずに。その凶器の中には、当然僕の研究室にあった薬物だつて含まれている。あのコロシアイ嫌いの不知火さんのことだから、毒薬はともかく……』

『解毒薬だけは、捨てずに隠し持っていたとしか思えないんだ』

**

*

『ごめんお手上げ』

『どうしたサイハラくん』

『あんたらしくもない』

『どうしても見つからないんだ……』

『何が？　と言うかそれ、私やハルちゃんが聞いちやつても大丈夫なやつ？』

『もう言っても良いんじゃない?』

『飽くまで僕の仕事だから、詳しいことを言うつもりは無かったんだけど……』

『正式にこちらへ協力を依頼するってことね』

『うん……』

『妙な取引って奴のことか』

『そう、それ』

『分かった、巻き込んでくれても構わないよ』

『バッチこい』

『うう、ありがとう……』

『私と終一くんとで、その取引されているものをずっと探しているんだけど、それがこのホールの何処を探しても見つからないの』

『……そもそも、ここにあるという僕の推理から間違っているのかもしれない……』

『落ち着け。そのルートを遡った先がここなのは間違いないんでしょ?』

『だとしたら、例えモノは無くても何らかの痕跡ぐらいならあるんじゃないの』

『そのはず、ただ……』

『ねえねえ、そもそも何が取引されてるってのさ。まずそれを教えておくれよ』

『実は……』

死に物狂いで膨大な資料を洗った風見からの報告には、過去に麻薬所持で逮捕・起訴されていた者の中に、このグループの特別会員がいると載っていた。

特別会員。一般会員よりもイベントの参加費や楽器の販売額の割引量が増え、更に特別な待遇を受けられるという。しかし、一般会員から特別会員へなれる明確な基準は不明。恐らく特別な待遇とは、違法薬物の売買に参加する権利のようなものだと思われる。

更には、ついさつき殺人未遂の容疑で逮捕された女性の供述にも、それが原因であることを匂わせる内容があった。

あの殺されかけたキタナガという女性は、実はこのグループの裏においてトップに近い有力者であるらしい。今回の殺人未遂の犯人であるアラサキは、そのキタナガに家族を人質に取られ、顧客を得るために強引な手段を取るよう強いられてきたようだ。

しかし、要求の激しいキタナガは、成績の芳しくない彼女を見限り、同じことを彼女の家族にも強いると言い出した。大切な家族を守るために苦しみ悩み抜いた末、元凶たる憎い彼女を手にかけてようと決意したのが、殺人の動機だった。

彼女をそこまで追い詰めるほど強引な手段で顧客を得ようとしたのは、資金難の組織からイベントの売り上げだけでなく、薬物を売り捌く相手の候補も増やすようにも要求されたためであると考えられる。あいつら本当にロクなことしないな。

……脅迫されていた等、情状酌量の余地もあるし、何よりも未遂で終わっている。重い罰は下されないだろう。

もしかしたら、あの子達は犯人の苦悩も理解した上で、殺人を止めたのかもしれない。犯人の気持ちにも共感できるからこそ。実に彼らしい。

さて、例の組織に薬物、更にはブラックな運営実態と、いよいよ本格的にきな臭くなってきたこの慈音グループとやら。あの組織と関わりがあると知った今、改めてその名前を考えてみると、なるほどふざけた名前である。安室^{アムロ}として妙な戦意が沸き立つのはおそらく気のせいだ。

楽器の製造販売やコンサートの主催など、音楽関係の業種を扱いながら、わざわざ『慈』という医療系を彷彿とさせる漢字を入れている。おそらくこれは、中国の詩人、白居易^{キヨイ}が詠んだ詩『慈烏夜啼』が由来だろう。その内容は、母鳥を失ったカラスの鳴き声に、同じく母親を失ったばかりの作者が感じ入るといふもの。その冒頭に『慈』と『音』の字がある。

その詩のタイトルに慈鳥^{じゅう}とあるが、カラスの別名の一つに慈鳥^{じちよう}があるように、カラス

は『慈』という字にも縁がある。カラスは親孝行をするという話が由来らしい。

組織を親と見立てると、その恩恵にあずかって成長したグループが、親孝行の如く資金を奴らに提供しているわけだ。

そんな献身的な子ガラスだが、はてさて、どうやって仕留めてやろうかと考える。

組織関連から攻めるのは難しい。違法な運営実態は、現時点でその存在を匂わせるものは殺人未遂犯の供述のみ。だとしたら、一番手っ取り早く確実なのは、薬物方面から攻めること。

風見の調べによれば、まさにこういったイベントの時に、薬物の売買が行われている可能性が高いとのこと。会員との交流はほぼ全て挨拶やイベント告知のハガキのみ。それらしいブツを送っている様子は無かったらしい。協会関係者が直接その他の人間と接触する機会は、今のようないイベントしかない。

つまり、今もこのホールの何処かで、その違法な取引が行われているということだ。そこを抑えてやれば良い。

アラサキはそれらに関する供述もしたようで、彼女を逮捕した後も警察関係者がチラホラ残っていたり、こんな半端な時間にも関わらず新たに入ってくる客もいる。警察によつて密かに裏付け捜査が始まっているようだ。彼らにその現物や現場を見せられれば、あるいは。

……と、言うのは簡単なのだが。ずっとホールを見て回っても、それらしい場所は見当たらない。

悶々としていると、向こうから近づいてくる人影に気付く。

「コナン君？ それと……」

何とも珍しい組み合わせ。廊下の向こう側から、コナン君と春川さんが並んで歩いてくるのが見えた。向こうもこちらに気付いたようで、春川さんは俺に軽い会釈をした。た。

「安室さん、探したよ！ どこに行ってたの？」

「僕を探していたのかい？」

「この人が何処にいるか、知らない？」

一方コナン君は僕を見るなりこちらに駆け寄り、携帯電話の画面を見せてきた。その画面に映っていたのは、歩美ちゃん達と……。

「この人は……」

「慈音グループの会長。あの三人をケーキで買収した不審なヤローだよ」

「ば、買収だつて？」

春川さんが辛辣な口調で言う通り、コナン君が見せてきた写真に子供達と一緒に写っていたのは、このグループの会長だった。風見からの報告で見たばかりの顔だ。

彼らの話を聞くに、昼前にあの三人の子供が皆とはぐれた原因が、その会長によってその場から連れ出されたせいだと言う。

そうか、全てお前のせいなんだな!!!

自分がキールと一緒にいる場に不知火さんが入ってきてしまったのは、彼女が子供達を探していたからである。つまり子供達を拐かしたこいつが元凶。

そして、会長と何らかの接触があったらしいあの子達は、そのことを黙っているようケーキをご馳走され、口止めされたのだそうだ。

「元太達に直接聞いても、約束しちゃったことだからって、どうしても教えてくれないんだ」

「それは難しいな……」

このグループは子供向け音楽教室も経営している。今日のイベントの、前半部分に子供や父兄のための発表会を設け、直後の午後の部にプロの演奏会を開くというプログラムも、子供達に将来こうなりたいと夢を持たせる狙いが見え隠れする構成だ。

そんなグループのトップたる会長も、子供の心理を上手く利用できる人間なのかもしれない。あの三人もまんまとそれに引っかかってしまったというワケだ。

「それにしても、どうして会長のことを調べているんだい？」

「最原お兄さんが秘密のお仕事で調べているんだって。ボクも気になったから、お手伝

いさせてもらってるの」

「ちよつと待って」

コナン君、いつの間に彼らと組んだの？

こつちがやりたくても出来なかつたそれを、いともこう簡単に！

そうか、それで春川さんも一緒なのか。ちくしよう先を越された。

いや別に競争していたわけじゃないが。

赤井達と組まれるよりかはずつとマシだが。

組む……？

そこで、ハッと気付いた。

「ねえコナン君、歩美ちゃんや元太君達が皆とはぐれた時って、キタナガさんにホールの案内をされていた時だったよね？」

「え、うん。多分そうだと思う。ボクはその時一緒じゃなかつたから、よく分からないけど……」

「もしかしたら、会長があの子達を引き離せたのは、キタナガさんもグルだったからなのかもしれない」

「ええっ！」

そう言うのと、コナン君だけでなく、春川さんも驚いたように目を見開いた。

「だって、流石におかしいじゃないか。あの時は毛利先生や赤松さんも、それに蘭さん達もいたはずなのに、子供が三人も連れ出されて全員が気付かないなんてことがあり得るのかな」

「まさか、案内をしていたキタナガさんが、わざと気付かせないように誘導を……?」

「その可能性は高いよ」
「何せこの協会職員ほぼ全員が裏で真つ黒なことをしている。アラサキさんが命懸けでそれを示してくれた。」

「もしかして、奴らがそこまでしてあの子達を引き離したのは」
「そこに知られたくない何かがあったから」

険しい顔の春川さんの言葉を、俺が続けて言う。

「その何かこそが、今俺が捜し求めるソレである可能性が高い。どこもかしこもあけっぴろげに公開している中で、唯一触れられたくない何か。あの子達は、偶然にもそれに近づいてしまったのだ。」

「春川さん、せっかくですし、僕にも一枚噛ませてもらえませんか? 自分で言うのも何ですが、役立たずにはなりませんよ?」

「え……あんたを……?」

「ちよ、ちよつと？ 誤解はもう解けたんですよね？ 解けてますよね？」

「フー！ やるな探偵キッズ！ 我らが探偵殿より先に真相に近づいちゃったのか！」

『言ってる場合じゃないよ！ 本当に危なかったところなんだよ！』

「まあ怪我一つしてないんだから結果オーライってことで」

『ねえ、何とか聞き出せないの？』

「それがねえ、本当に口の硬い子達でねえ」

『クシビさんと今遊んでるんだけど、それを話題に出そうとするたびにテンションがだだ下がりです……』

『どうやら、彼らも言い出したくないことを絡めて口止めされているようだね、これは厄介だ』

『会長クロス』

「落ち着いてハルちゃん」

『そうだよ、早まつちやいけない。相手が持っているのはクスリだけじゃないんだから』

オートマチックにリボルバー……多種多様な拳銃にライフルまで。ジヨデイから送られた証拠資料の写真は、本当にここが日本なのか疑いたくなるようなものばかりであった。

ボウヤから送られた写真に男について調べていたところ、何と本局の方で情報があった。限りなくクロに近いグレーの、違法な銃売買のブローカーの疑いあり、と。何故日本人のそいつが本局に目をつけられているのか。あの組織との個人的な関連性も疑われていたからである。グループの上層部に組織の人間が関わっている程度と考えていたが、どうやらグループそのものが最初から腐っているらしい。

つまり、そんな奴らが主催しているイベントに参加している時点で、奴らの腹の中にも同然。

すぐにボウヤにその旨を伝え、くれぐれも警戒を怠るなど警告すれば、既にあの春川魔姫に護衛してもらっているという安心しかできない返事がすぐにあり、思わず足から脱力しそうになった。

どうやら彼は他の「超高校級」とも協力体制をとっているらしい。やるなボウヤ。

では、他の子供達はどうなのかと言えば。

「不知火お姉さんって、凄く力が強いんですね！」

「ふぐぐぐ……ダメだ、全然動かねー！」

奴らの企み事を挫く手がかりを得ようと探索を続けるも、何も見つけることができず。ひとまず腰を落ち着けようと寄った三階のラウンジ。

そこで、不知火霊が子供達全員と戯れている光景を見た。そのすぐ近くには私服に着替えた赤松楓も座っている。

「……何をしているんです？」

「力比べですって」

静観していた灰原哀が俺の問いに簡潔に答えた。

見れば、小嶋元太の手にはあの不知火霊の代名詞とも言えるスコップがあった。最小形態のバトン状から一節のみ伸ばしたその両端を握りしめ、中のワイヤーが見えるまで引つ張るというルールで遊んでいるそうだ。一体どのような経緯でそんな奇妙な遊びをするようになったのか気になった。

不知火霊と赤松楓は、今は劇場で演奏を鑑賞している真純達女子高生らや毛利探偵から、あの子達の面倒を見るように頼まれたそうだ。

本命であった赤松楓の演奏が聴けなくなった子供達は、立て続けに起こった騒動や、

勝手にいなくなったことを叱られて精神的に疲弊し、他の出演者の演奏を聴く気にもなれず、かと言って大人達の意に反して勝手に帰るワケにもいかず……他の客がいないここで、適当に雑談などで時間を潰しているようだった。

「あ、昴お兄さんもやってみる？」

俺まで誘われてしまった。

まさかあの伝説的なスコップに触れる日が来ようとは。いや、別に触りたいと思ったことは無いが、ある意味貴重な体験であることには間違いない。

少年二人からの期待の視線を受け、仕方なく俺もそのスコップ（※一見ただの棒）を受け取る。

これを伸ばせば良いんだな？

力を込めて左右に引つ張るが……まるでビクともしない。もう一度、先程より力を入れて引つ張る。やはり動かない。これは本当に人の手で伸ばせるものなのか。

「うわ、スゲー！ 開いた！」

「昴さん頑張れー！」

気が付けば俺は、本気でそれを引つ張っていた。小学生にできなくても、俺ならできる。当たり前のようにそう思っていただけに、このビクともしない鋼のボタンに対してかなりムキになっていた。そこまでしてようやく拳一つ分伸ばせた程度。悔しいと

思ってしまう自分が我ながら大人気ない。

「何かコツでも、あるんですか……?」

「いや、こう、左右に、正反対に働く力の向きを一直線に揃えて、引つ張るだけですよ」
結局息が切れるまで挑戦した後、鋼のバトンを不知火霊に返却し、手本を見せて貰えば、いとも簡単に腕いっぱいに広げ、ワイヤーをギルギル鳴らしながら節目を伸ばして見せられた。つまり単なる力技。馬鹿力もいい加減にしろ。

ふと、昼間の出来事が頭によぎり、サアツと血の気が引いた気がした。

「ではあの時は、それだけ硬いワイヤーを遠心力のみで伸ばしていたと……?」

思い出すのは昼休みの出来事。真純にスコップの仕様を説明したときに見た光景。俺が渾身の力を込めても殆ど動かせないものを、両端から引つ張るところか、片側から腕を振って生み出した遠心力で、あの発射速度を叩き出したとも言えるのか。

が、幸いなことに、不知火霊はユルユルと首を横に振った。

「いえ、匙体方向のワイヤーは伸びやすいように緩いですよ。こつちのグリップ方向にあるのは発電機関なので」

「発電機関」

何故スコップに発電機能があるのか。

そもそも、スコップとは。

……危ない、うっかり思考が哲学的な方向に飛びそうになった。

「ワイヤーの中に強力な発電モーターがビッシリと内蔵されてて、引つ張られるとそれが回転して発電する仕組みになってるんですって。それもあって硬いらしいんですよ」

「……………ホォー……………」

赤松楓がそう教えてくれた。

いや、俺が疑問に思っているのは仕組み云々ではなく、需要の方である。

「発電のためなら、そこまで硬くなくても良いのでは……………」

「私の膂力に合わせてもらってるんです、悪用されないように」

そんな使い辛いにも程があるスコップ型発電機など、一体誰がどう悪用すると言うの
だろうか。

「携帯電話の充電も出来るって不知火のねーちゃんが言うからさ」

「だから皆で引つ張り合いしてたんですよ」

「ねー！」

納得はしたが釈然としなかった。何故スコップに発電機能。無駄にハイテクノロジー。どうせならもっと別の実用的な物に付加すれば良かったのでは。おそらく発明家の友人に仕込んでもらったのだろうか、天才達の考えることはやはり理解できそうに

なかった。

「凄いでしょ、このいいスコップ」

「……発電機なら、博士に作ってもらった方が良いかも」

「ぐふっ」

子供の素直な評価に呆気なく打ちのめされてラウンジのテーブルに突っ伏した不知火霊に、思わず楽しそうに笑ってしまった赤松楓の声が響いた。

ダメだ全く見つからねえ。

安室さんにも赤井さんにも、更には最原さんとも情報を共有し合って探し回っても、問題の物は見当たらない。問題の会長の方は、現在劇場で司会の代役をしているため、今のうちに調べ回っておこうと思ったのだが……参ったな。

春川さんに見張られては動き辛いかと思つたが、意外にもそんなことは無く、オレが何をしようと思つて見ているだけだった。曰く、あんたが法律違反や余計な怪我をしない限りは何でもすれば良い、と。

彼女がオレの事情を知っているかどうかはさて置いて、大人の無言の了承と身の安全

が保障された中での捜査は非常に安心感があつた。いつもは刑事さん達にいつ止められるか多少なりともヒヤヒヤしながらやってるからな。まあ常識的に考えたら、小学生に事件現場をウロつかせたりしないのは当然なのだが。

しかしそれでも尚、何も見つからないなんて。どの部屋に入ろうとしても簡単に許可が出るのだ。探検ごっこと称してあらゆる部屋を回ったのだが、スタッフルームすらお好きにどうぞとにこやかに通されかけた時には言葉も失つた。どこもかしこも不気味なほど堂々としている。

「――」

肩を落として灰原達がいるという三階ラウンジに行くと、既にそこには不知火さんと赤松さんと、彼女達に構われる子供達の他に赤井さんが座っており、向こうからは俺より少し遅れたタイミングで最原さんが到着し、また別の方向からは安室さんがやってきた。

それぞれの思惑でこのホールを調べていた四人が今ここに、バツタリと顔を合わせる事になった。

そして、それぞれの表情から全員収穫無しと察したのか、オレの後ろにいた春川さんがやれやれと首を横に振る。最原さんが引きつった苦笑を浮かべた。更に赤松さんがボソリと『見つからなかったんだ』と呟けば、いよいよ彼は顔を手で覆った。

「あらあ、ダメだったのかー」

トドメは不知火さんだ。おそらく最原さんだけに向けてだろうが、はつきり声に出してるので全員に効果があった。特に現役捜査官の二人は肩を僅かに跳ねさせた。

「何がダメだったんですか？」

「探し物が見つからないんだってさー」

「何探してんだ？」

「変な味がする不味いオヤツとか、ものを弾いて飛ばすだけの玩具とか」

「ふーん、変なのー」

「なーんだ、つまんねえな」

反応した光彦達に包み隠さず言ってしまう不知火さん。しかし、嘘は言っていないのにナチュラルにあいつらの興味を削いでいる。彼女の明け透けな性格は、隠されれば隠されるほど興味が湧いてしまうあいつらの暴走予防には効果覲面のようだった。恐らくこの件についてはこれ以上首をツツコまなくなるだろう。天然って凄い。

ただし、灰原は察したようだった。それでもかと思をかつ開いてオレを見てきた。すまん、そこまで伝えてなかったな。

だが、ここまで探しても何も見つからないとなったら、オレ達の単なる取り越し苦労に過ぎないのだろうか？

と、その時だった。

「ふぎやっ」

それまで子供達とキャツキャと戯れていた不知火さんが、突然変な声をあげた。そして大慌てで、それまで外していたフードをかぶり直した。あつという間に不審者の出来上がりだ。

「ねーちゃんどうしたんだ？」

「何でフード被つちゃうんですか？」

「に、西日があ……」

西日？

言われてみれば、確かにすっかり西へ傾いた日差しが、ラウンジの中まで差し込み始めていた。さっきは偶々ビルの影になっていたところから日が出てきて、不知火さんを直撃したらしい。もうそんな時間なのか。

「ハルちゃん、もうお家帰ろ……？」

「あ、あんた……ここまでできたんだから、日が落ちるまで頑張りなさいよ……」

日光に晒されてテンションがガタ落ちした不知火さんは、子供達よりも先に帰りたいたいと言いだした。大丈夫かこの人。

すると、元太が言った。

「あれ？　もしかして不知火のねーちゃんって、今は春川のねーちゃんの家で暮らしてんのか？」

「うん、そうだよ。フクロウさんと一緒に居候させてもらってんの」

何てこった、ついにこの秘密を言っちゃった。

大人約二名はあからさまにシメたという顔をしている。何でこんな時に限っていつもはボケ側の元太から鋭いツツコミが出てくるんだよ。

「誰よ、そのフクロウさんって」

今度は妙な嗅覚を發揮した灰原がツツコんだ。

「あいつの胡散臭い同居人だよ。名前は呼んでくれるなって言うから、適当にフクロウって呼んでる」

春川さんが答える。どうやら灰原と同じ見解らしく、辛辣な口調である。

ボロボロと出てくる謎多き不知火さんの情報に、大人約二名がほくそ笑む気配が濃くなっている。ああ、オレもう知らねえぞ……。

「そう、その人が不知火さんの……」

「ま、待つてよ。フクロウさんをそんなにイジメないでやってよ、行き場の無い気の毒な奴なんだよ」

「警察に面倒を任せたら良いのに」

「本人が嫌だつて言うんだから……」

「警察にも言えない口クでもないことを裏でしてるんでしょ」

「さつさと見限った方があなたのためよ」

「何て可哀想なフクロウさん！」

いつもの灰原に春川さんも加わった口撃に、躲し切れなかった不知火さんがついに崩れ落ちた。

「いつそ警察にしよつ引いてもらったら？」

それだけは言っちゃダメ！

お巡りさん約二名が是非行かせてもらいますって顔してるよ！ 気付いて！

こうしているうちにも、時間は刻々と、確実に過ぎていく。

19. 「運命が絡まり過ぎて事故ってる話 END」

『ちよちよ……ちよーつと待ったあー!!』

『デタラメだよ、そんなのぜーんぶデタラメだ！ だって、本当に不知火さんがそんなものを持っていたなんて証拠は、どこにも無いじゃないか!』

『……………』

『私達の推理を証明してくれる人は、もう既にここにいる。だよね、クシビさん』

『……………』

『……………いや、不知火さんのコートを被った、王馬小吉くん!』

『……………つつだあーつ!! クツソオー!! なーんでバレちやつたんだよー!!』

『はあああああ!!』

『ソナアホナアアアア!?!?』

『裁判でモノクマを嵌める作戦だから、絶対にその場で言い訳させないような奇策があるとは予想していたけど……………』

『それ以前にいくらなんでも不自然過ぎ！　ここに來てから一言も喋らずに突っ立ってるだけなんだから！』

『ちよつと待て何だこれ！　なんでテメーがここにいんだよ！　オレも聞いてねーぞ!?』

『いやー、土壇場で思いついちゃったんだよね。オレと不知火ちゃんの背格好って似てるよなーって。それで彼女のコート借りてみたら、あら不思議！　あつという間に不審者の出来上がりってね。靴も取り替えたらもう完璧なデキでさー!』

『後でツラ貸せクソヤロー』

『ウチらに遠慮せず今ここでも構わんぞ』

『今に限ってはロボット三原則が憎いです』

『やってくれたな……』

『ここまでくるともう清々しいわね……』

『こ、ここ、この男死ぬが……よくも……!』

『出会った時の様子そのままだったから、もう黒幕確定なのかと思っちゃったヨ……』
『にしし、ずっと黙ってるだけのラクな変装だったよ！　議論できなくてつまんなかったけど』

『主は言いました、いっぺんマジで死んでこいと』

『こんの童顔ドチビヤロー!! アレだけ発明品を提供してやったオレ様に何の一言も無いとはどういう了見してんだ!?!』

『もう騙さないって言ったのも、あれも嘘だったんだね!! 酷いよ!!』

『ド派手に酷い』

『さあモノクマ、もう言い逃れできないよね? さつき大声で言ってたもの。王馬小吉

クンを殺した犯人は、百田解斗クンでしたー!! って』

『王馬君、ピンピンしてるっすねえ』

』』

**

*

ぞで。 おいおいどうするの。このままだと殺人未遂犯一人作っただけで解散になっちゃうぞ。

毛利ちゃんからのメールをもらった江戸川くんから、劇場の方ではもうすぐ閉会式が終わるところだと知らされた。いよいよ私達もここからも追い出される。暗くなつて

いくラウンジで駄弁り続ける雰囲気でもなくなり、仕方なく一階のエントランスまで降りていく。

きつとこのホールのどこかで売買されてるであろう危ないおクスリに玩具。見つけられずに終わってしまうのか？ 何だこのかつてない手詰まり感。臨時の協力者達の間、殺人未遂の事件発生以降からずっとここに居る刑事さん達の間にもそんな空気が広がっている。

「……あなたの方はどうだったの？ 地下室や隠し部屋みたいな気配は？」

「どこもかしこもフツの壁や床でしたあ」

「キミの非破壊検査でも何も見つからなかったなんて……」

つまりは全員の目と私の耳を合わせてこの建物全てを見通しても、そういう怪しい現場が無かったのである。どういうこと？ まさか外で？ いやいや、そんな怪しい車は一台しか来てなかったぞ。あのレトロ口で真っ黒な車の他は。それもすぐ何処かへ行っちゃったけど。

そもそも職員がホールの外に出ている様子も無かった。外へは何も持ち出されも、持ち込みもされてないのだ。ということは、何かあるとすればやっぱりこのホールの中であるはず。それなのに。

まさか本当にサイハラくんの勘違い？ それだけは無いと信じたい。カエデちゃん

の冤罪事件以降、彼はどこまでも慎重に慎重を、裏付けに裏付けを重ねまくって活動しているのはちゃんと知っているのだ。私達に協力を要請してまでの案件で、ここまで大ポ力するとは考えたくない。

「残る手がかりは、彼らの証言だけですな」

何でかサラツと私達の会話に入り込んでくるサンドのにいさん。ハルちゃんと江戸川くんの捜査活動に協力してくれたらしいが、何故こんなに関しげなんだ。

「彼らは協会の人間が唯一触れられるのを嫌がる場所に近付いたらいいですから」

こちらもやけに私達との距離が近い沖矢さん。地声とつてもかっこいいですね。

そうなのだ。あの探偵キッズが現段階において最も有力な手がかりなのである。怪しいグループの会長その人に止められることを無意識にやってしまったらしいのだから。

「不知火さん」

コートの裾を引つ張られてそちらを見れば、真剣な表情の江戸川くんと目があった。

「ボク、今から本気であるの三人に聞いてくるから、ちゃんと聞き逃さないようにしてね」
「……分かったよ」

もう何度目かの挑戦。のらりくらりと追求を躲すあの子達に手を焼いていた江戸川くんも、ついに本気を出すそう。何をやる気だろう。

江戸川くんは、今日のイベントの感想を語り合うあの子達にトトトと駆け寄り、こう言った。

「もう、皆だけズルいよ！ ボクだってケーキ食べたかったのになあー！」

え……江戸川くん……！

「ズルいズルい、ズルーいー！ ねえねえ、どうやってあのおじさんと知り合ったの？」

「そ、そんなにケーキ食べたかったの？」

「えー、んなこと言われてもよー……」

彼の口から出てきたのはさっきまでの真剣な落ち着いた声ではなく、ガキンチョ丸出しの甲高い声であった。何かもう色々とかなぐり捨てている。サイハラくんもカエデちゃんもハルちゃんも目が真ん丸だ。あの子供達ですら若干引き気味の勢いである。

これは確かに……本気だ。

「仕方ないですねー……他の人には秘密ですよ？」

「ぜーったいにだよ？」

なんと、江戸川くんが色んなモノを捨ててまで続ける駄々をこねる演技に、ついに鉄壁の守りが揺らいだ。凄いで江戸川くん、あとでもう一個ケーキを買ってあげよう！

すると、彼らは私達からこそこそと大きく距離を取り、内緒話をするように密な円陣

を組んだ。ここで刺激してはならないと、大人達はそれを見て見ぬ振りをする。

そして全神経を集中させた私の耳が捉えた彼らの小さな小さな会話を、そのまま小声
でリピートする。

「『……実はボク達、あのおじさんに叱られちゃったんですよ』」

「『えっ、叱られたの？』」

「『すぐごく怖かったあ……』』」

「『でも、すぐに謝られて、ケーキをご馳走してもらったんだぜ』」

「『子供を育てる立場としてあそこまで怒るのは大人気なかった、だから、このことはお
じさんのためにも黙っててくれないかって、言われたんです』」

「『その前に、何で叱られちゃったの？』」

「『えーつと……』』」

「『それは……』』」

「『歩美が、売り物のバイオリンに触ろうとしちゃったからなの……』』」

何てことだ。奴らはずっと、僕達の目の前で堂々と違法な売買をしていた。あまりにも堂々として過ぎていたため、捜査の対象から無意識に外してしまっていたのだ。いや、捜査した気になっていた。

何せ、入り口通つてすぐの、出入りに何の規制もされていない、一般客も大勢いる展示ルームでそれが行われていたのだから。

「……私もあそこまで堂々としてれば不審者扱いされなくなるのかなー」

「あんたはもう悪人じゃない不審者って認識されてるから」

「何それ複雑……」

フードの裾を掴んで顔を丸ごと覆い隠す不知火さんがトチ狂ったことを言い出した。気持ちは分からなくもない。

「弦楽器や管楽器のような、空洞のある楽器の中に……特別会員証を出されたら、それが入った物を選んで売れば良いと……そういうことだったのか……!」

盲点だった。そういう後ろ暗いことは、隠して行うものだと思い込んでいた。

奴らの手口として推測できるのは、以下の通り。

まず、ターゲットとなる特別会員の元へ、他の一般会員と同じイベントの告知のハガキを送る。一般会員にとってはそのただの告知に過ぎないそれは、特別会員にとっては裏取引の合図となる。そして、特別会員がそのハガキに参加の旨を記して送り返せば、

それは取引の予約となるのだ。おそらくその返事には、客の欲しいものやその数を示す暗号のようなものが使われていたと思われる。

そしてイベント当日。グループ側は事前に用意した楽器の中に注文品を仕込み、他の一般客もいる展示ホールの販売コーナーの中で、堂々とその客を待っていた……。

つまりこの裏取引は、徹底的に管理された完全予約制だったのだ。こうすることでグループ側は用意する品を必要最低限に抑えられ、部外者にその存在を知られるリスクも格段に減らすことができる。道理で痕跡も見つからなかったわけだ。

確かに隠し場所が見た目が高額な楽器であれば、気軽に触って弄り回すような人間もそうそういない。何も知らない一般客の相手であっても、素人が購入に踏み切るのであれば、自分より知識があるスタッフを頼るのは必然的。間違つて注文品入りを売つてしまふことはない。目利きができる本職の一般客が相手でも、そういう人が選びそうな品は最初から隠し場所にしなければ良い。更に、モノがモノなので、高額な取引であつても何の違和感も無い……。

計算されていたとは言え、よくこんな大胆な方法を実行したものと、舌を巻いてしまふ。

しかし今回に限つては、その完璧な管理体制を、ただの偶然で潜り抜けてしまった子供達がいいた。

あの子達が触れそうになったのは、おそらく注作品が仕込まれたバイオリン。奴らが唯一絶対に秘匿せねばならないものであったのだ。

それにしたって、本当に大胆過ぎやしないか？ まさか誰もが気軽に入れる一階の展示ホールに全てを隠してあるだなんて。探知犬が一步入れば一発アウトだろうとは思いますが、コンサートホールに盲導犬ではない犬を連れてくる人間なんていないしなあ……。

子供達の正義感や罪悪感を利用して嚴重に口止めをしたことと言い、今回の相手は人の心理に滅法強い人間だった。実は会長って王馬くんだったたりしない？ まあ彼なら、こんなことをする暇があったら別の悪戯を考えつくんだろうけど。

「ありましたー！」

事態が動くのは早かった。既にその場に警察関係者がいたのもある。

あの子達から重要な証言を得た後、買い物をし終えて帰ろうとする特別会員の客をギリギリのところまで引き止め、その客が購入した楽器を調べたところ……：ようやく、それらが見つかった。

それをキツカケに、次々に証拠品が見つかった。ターゲット層である特別会員が、今の時間になってから続々と来るようになったからだ。

ある意味、これが演奏会のイベントであったことが幸いした。購入した注作品を持つたまま、その現場に居続けることは難しい。しかし、楽器のみ購入し、演奏会を鑑賞せ

ず即帰宅するのは不自然だ。

だから、演奏会に参加しなくて済むように、閉会寸前で来るのが奴らの暗黙の了解になつていたらしい。

次から次へと特別会員が現行犯で逮捕され、証拠品が押収されていく光景を目にして、ようやく全てが終わつたのだと溜息が出てきた。

本当に長かった。

これで彼からの依頼は完了だ。

「後は、我々や後から来る麻取の捜査官に任せてくれ」

恰幅の良い警部さんがそう言うので、僕達もそろそろ帰ろうかと言ひ出しかけた、その時であつた。

子供達の口を割つた功労者である江戸川くんの携帯電話に、着信音が。

「……え？ 出られないって、どうして？」

「ジン、警察にバレた！ それに、あいつがアレを起動させたって……」

『問題無い。予定通りだ』

「え？」

『ただの人払いのパフォーマンスに過ぎん。スイッチなら俺も持っている。生かすも殺すも俺次第だ』

「なっ……」

『仮にサツに止められようが、その時は安心してノコノコと集まったところで奴らを一扫してやればいい。金を回収できないのは残念だがな』

「……………」

『お前は予定通り、金とあいつを回収する機を窺え』

「……………分かったわ」

事が露見したと知った会長が、劇場にいる人間全員を人質にとり、警察にとんでもない無茶振りをしているらしい。

我々を見逃さなければ、人質全員の命は無い、と。

「ば……爆弾だとお……!?!」

ちよつと待つて？

警部の目暮さんが、司会代役をしていた会長を確保しに劇場へ向かった部下の高木さんからの電話を受け、蒼白な顔で囁いた。ギリギリで他のお客さんには聞こえなかった。

いや、本当にちよつと待つて。米花町つてやけに爆発事件が多いとは聞いていたけど、ここでもなの？

「ねえハルちゃん、この町つて爆薬が一般流通してるのかな……？」

「少なくともコンビニやスーパーでは見かけたことは無いね。大型ホームセンターになら探せばあるのかも」

クシビさんに続き、春川さんまでトチ狂ったことを言い出した。気持ちは分からなくもない。

「ど、どういうこと刑事さん!？」

「……それが、ステージの下に大量の爆弾が仕込まれているらしくてな……可動式の席がある特定の形態になったとき、回路が繋がって起爆するプログラムを仕掛けたと……！」

あの劇場、そんなことになってたの？

そんな大掛かりな起爆装置ってアリ？

「ハツタリだという可能性は？」

「蘭姉ちゃんも劇場から出られないって言ってるんだ。もう既に席が移動し始めて、劇場の出入り口に自動ロックがかかっているせいだと思う……！」

「もうヤダア……」

完全にフードで覆われたところから、クシビさんのくぐもったか弱い声が聞こえてきた。全員の心の声を表しているようだった。

「奴らを見逃せだど……!? そんな馬鹿な要求を呑めるわけが……！」

「しかし、時間が……！」

警察もこの予期しない非常事態にパニックに陥っている。その爆弾がどれほどの威力なのか、あの劇場に何人のお客さんが閉じ込められているのか。それすら分からないのだから。

「ステージ裏と楽器の保管庫が繋がっています。あそこならロックはかからない。そこから観客の避難を」

最原くんの小声が彼らの混乱を止めた。

初めて話しかけてきた最原くんに一瞬戸惑った警部さんだったが、行動に移すのは早かった。すぐにその手配を始めてくれた。

毛利さんからの電話を受けた江戸川くんによれば、今のところ幸いにして観客達には

爆弾のことは知られていない様子。決してパニックを起さぬよう、極秘の避難誘導が始まった。

クシビさんがチラリとフードから目線を出す。誰からともなく視線を合わせ、頷き合う。私達も次にやるが決まった。

「さあ皆、今日は疲れたね、外の風でも浴びながらジュースでも飲もつか！ 皆は何が飲みたい？ 私はオレンジジュースにしようかなあ」

「ボク達も良いんですか!？」
「やったぜー!」

劇場には私の教え子もいる。でも、私はきつとそこでは力にはなれないだろうから。私は私にできることをやる。後はお願い、任せたよ。

「邪魔だ邪魔だあ！ そののけそののけお馬が通るよおー!!」

ひたすらローテンションだった不知火に、狂ったエンジンがかかり始めた。ついに日が落ちたようだ。

非常事態ということも相まって、いつぞやの凶器処分運動やメリー作戦の時のような

有様になっている。

進行方向を塞ぐ自棄を起こした職員が懐から拳銃を取り出せば、例のスコップがその瞬間にそれを粉碎する。速度にもよるけど、銃弾をも防げる強度があるスコップの匙体は平たい砲弾のようなものだ。かなりの威力を誇るのは間違いない。

「……とんだ暴れ馬だ」

ボクシングの構えをするそいつが空笑いでそう言った。洗練された所作から格闘家だと思っていたが、その通りだったらしい。

「でもあいつは、凶器しか狙わないから」

「そのよう、ですな」

こっちはジュークンドー截拳道か。

初っ端から不知火に変装を見破られたそいつが、破れかぶれに飛びかかってきた男をアツサリのすのを見ながら分析する。

不知火にとってコロシアイ阻止の要とは、いつだつて凶器の処分だ。暴れる人間よりも、真っ先にそいつが持っている危険物の処理を行う。お陰でこっちはとてもやりやすい。小さなナイフすらピンポイントで砕いてくれるもんだから。

……と、戦意を喪失して逃げ出そうとする奴に軽く足払いをかけながらしみじみ思う。

「あんた達、そんな大袈裟にビクつかなくても大丈夫だよ」

「皆が皆、キミ達みたいに強いと思わないでくれるかな……？」

「ホントにそうだよ!!」

しつかり手を繋いで恐る恐る後ろをついてくる最原と江戸川くんと言えば、彼らは悲鳴じみた声でそう叫んだ。

まあ、確かにそうかもしれないけど、銃火器を持っている相手が本性を表した以上、こうなることは分かりきっていたのに。あの殺人未遂犯がライフルなんてものを用意してきたのも、この協会に属する人間にとって、そういう代物が普段から身近にあるものだったからなのだろう。

この状況では頭の回る奴は一人でも多く居てくれた方が助かるが、如何せん最原の場合は体力面が頼りなさ過ぎる。まだ江戸川くんの方が肝が据わっているようにさえ見える。

「よし、これで避難経路は確保できた！」

先に警察が楽器の保管庫へ観客の誘導に向かった後、その道を塞ぐように湧いて出てきた連中はこれで全員KO。

「でも、肝心の爆弾はどうする？ あとどれくらいで爆発するのか、威力がどれほどなのかも分からないよ」

「やはり現場に行つて確認するしかない。通常の起爆装置でない以上、止められるかどうかも分からないが……」

「僕の技術が通用するか分かりませんが……僕は僕の全力を尽くします……!」

「二人で気負いなさんな。死なば諸共さ!」

「フオローになつてません!!!」

「まあ、最終手段はとつてあるし、早く行こう!」

普段何も考えずに行動する不知火にしては珍しく、何か案があるらしい。その時には、それを頼ろう。

私達は先を急いだ。

*

**

『……さーて、まだ終わつてないよ、最原ちゃん、赤松ちゃん』

『な、何が?』

『オレ達の入替わりまで見抜いたのは褒めてあげる。だけど、あともう一つだけ、解き

明かせてないことがあるよね？

オレと入れ替わった不知火ちゃんは、今何処にいるでしょーか！』

『……………え？』

『ヒント！ モノクマは前回の裁判の時、血塗れの不知火ちゃんの接近には全く気がつきませんでした！』

『それって…………？』

『裁判の時は、監視の目がここに集中しているということですね？』

『つまり学園のどこで何をしようと、気付かれないということでもあるんじゃない？』

『さあ不知火ちゃん！ そろそろ往生際の悪いモノクマがまた何か言い出すだろうから、その前にサクツとトドメ刺しちやってよ！』

**

*

「あらコナン君？ どうしたの？」

「ら、蘭……………ねえ、ちゃん？」

劇場のギミックに不具合が出たという名目で刑事さん達に誘導される観客の波とすれ違う途中、その中にいた蘭に呼び止められた。良かった、無事だ。

「そっちは劇場よ?」

「ええつと、ちよつと忘れ物しちゃって!」

「あらあら」

仕方なさそうに笑う蘭。まさかこれから爆弾を処理にしに行くとは口が裂けても言えない。

「すぐに戻ってきなさいね」

「はーい!」

そう、絶対に戻らなくちゃいけないんだ。観客の波に流されるようにして遠ざかって行くその背中を見ながら、オレは改めて決意を固めた。

長々と途切れずに観客が出てくる楽器の保管庫を通り、劇場内に入れたオレ達は、まずステージの影に身を隠し、そこで起きていることを観察した。

劇場の舞台付近……ここも、先程までの捜査中、候補から外していたところだ。売買するのであれば、少なからず外部からの人間が来やすいところではなければならない。大勢の観客に注目されるここは、絶対にあり得ないと思っていた。

だが、スタッフのほぼ全員がグルであるなら話は違ってくる。さっきのオレ達のように

に樂器の保管庫を通れば、観客に見つからず忍び込むことができる。まあ、結果としてはこことも違つたんだがな。

……その代わりに隠されていたのが、全てを隠滅できる上に大勢の人間を人質にできる、奴らの切り札たる爆弾だった、というわけだ。

「……やはり客席は動いているな」

ゴゴゴゴ、と低く大きな音が響く場内。見れば、縦に並んでいたはずの三階から五階までのバルコニー状の席は、まだここに残っている一部の客を乗せたまま、徐々に三階あたりに一直線に並びつつあった。

「もしかしなくても、あれが真つ直ぐに並んだらドカンつてことなのかな」

「それならまだ時間はありそうです……」

問題はステージの上。そこで、高木刑事達が、可動式客席のコントローラーと思しき物を見せつけるあの会長と睨み合っていた。

まだ観客が残っている以上は余計な騒ぎを起こせず、拳銃が使えない高木刑事達。自分達がここにいる以上はまだ起爆させたくないが、高木刑事の動きを止めるために本気であることを示すよう、客席を動かさざるを得ない会長。

着々とタイムリミットが近づいてくる中、両者は極限の牽制を仕掛け合っていた。

「とりあえず二手に別れよう。一方は舞台下で爆弾の搜索、もう片方は席をコントロー

ルする場所へ行つて、それぞれを止められるかどうかを試そう」

すぐ近くの案内板を見た最原さんの提案により、安室さんと最原さんと春川さんは舞台下へ。そして、オレと赤井さんと不知火さんは舞台下の裏手にある席のコントロールパネルへと別れることになった。

しかし……。

「うっわ、これは酷い」

「……なんてことだ……」

既に他の警察官もいたそこにあつたのは、滅茶苦茶に荒らされたコントロールパネルだった。タッチ式の液晶画面であつたそれは、まるで刃物でズタズタにされたかのような壊され方をしている。これ以上ここからの操作を受け付けないであろうことは一目でわかつてしまった。

おそらくは、会長が今高木刑事に見せつけているコントローラーでしか、操作ができなくなっているのだ。

そしてその直後、舞台下へ行つていた三人もこちらへ走つてやつてきた。

「ダメだ！　すぐに爆弾は見つけられたが盗聴器もあつた。会話を聞かれているんだ！

幸いにも僕達は言葉を発さなかつたが……この様子だと、客席の配置に関わらず、外部からのスイッチでも起爆できるのかもしれない……！」

焦りを隠さず控えめの声でそう言った安室さん。おいマジかよ。道理でここにいる警察官達も諦めムードなわけか。しっかりしてくれ!

「まだ全員を避難させられたわけじゃないってのに……!」

「時間が無い……クソツ!!」

こうしている間にも客席は徐々に一直線に並びつつある。

もうダメなのか。策があると言ったはずの不知火さんは、一心不乱にあのスコップを全力でギョルンギョルンと猛烈な勢いで伸び縮みさせていた。どう見ても盛大にテンパっていた。

これはいよいよダメかもしれない。
が。

「機能停止だけじゃなくって、通信妨害まで要るとは流石に想定外だったあ! でも間に合った!!」

次の瞬間、不知火さんのスコップが不思議な青白い光を発し始めた。ヴヴウン、と低い駆動音が鳴り始める。

そして。

「くたばれコロシアイ!!!」

謎の掛け声と共に、青白い光を放つスコップが壊れたコントロールドパネルに向けてフ

ルスイングされた。直後、眩い白い光も炸裂する。

……その光が収まった頃には、客席が動く音もすっかり止んでいた。

「し、不知火、そのスコップって、まさか……!」

「見たか! これがミウちゃんの最高傑作、いいスコップの真髓だ!!」

一体、何が起きたんだ?

とりあえず、客席の動きは完全に停止している。

助かった……のか?

ステージの上では、突然客席が止まったことに狼狽える会長が、高木刑事に取り押さえられる光景があった。向こうも解決したらしい。

気がつけば、安室さんと赤井さんのスコップを見る目が分かりやすく輝いていた。赤井さんに至っては目がこれでもかと開いている。本当にどうしたの?

「と、とにかく、早く避難を終わらせよう!」

最原さんの声で現実に戻った俺達は、すぐに行動を再開した。

『……どうやら爆弾は止められたようね』

「まあいい、いつでも起爆はできる」

『回収はどうするの?』

「あの役立たずは捨て置き。金は俺達で回収する。お前は退け」

『……ええ』

「……チツ、このスイッチも役立たずか」

「凄いいじゃないか! また君が爆弾を解体したのかね?」

「ボ、ボクじゃないよ?」

「おや、そうなのか? だがしかし、無事に観客全員の避難も終えられた! 薬物や銃器の密売ルートも潰せたとし、誰一人として怪我人も出なかった。全員が協力してくれたおかげだな! いやあ、何より何より!」

「ホント疲れた……」

「あはは……お疲れ様でした……」

「米花町舐めてた……」

「警部！ もうすぐ爆発物処理班も到着するそうです！」

「よし。それまで我々は、誰もあのホールに近づけないよう見張るだけだな！」

「……あ、多分、それまでもたないかも」

「どうしたの？ 不知火さん」

「いや、避難を急かすのは良くないかと思っ言わなかったんだけど、アレの持続時間って、実は充電量に比例するんだよ。皆の避難中にも黙ってチマチマと延長しに行っただけ、もうこの封鎖された状況じゃ無理だな」

「持続、時間って……か、完全には止められないってこと!？」

「ホォー……?」

「それは、つまり……?」

「そろそろ時間切れだねえ」

「え?」

*

**

『さあ不知火ちゃん！ そろそろ往生際の悪いモノクマがまた何か言い出すだろうか、その前にサクツとトドメ刺しちやつてよ！』

例え全てが嘘だとしても、貫き通せば本物にだってなれるんだ。

別れ際、オウマくんが言ったその言葉を思い出しながら、彼らが稼いでくれた時間で使い方をマスターした目の前の仰々しいコンソールをいじり、通信機能を音声のみ相互にする。

「イエスボス！ 図書室の隠し扉スコップでこじ開け黒幕ポジション乗っ取りの極秘ミッション、無事に成功させました！」

『よくやった！ 今夜は祝杯だねー！』

『『ウエエエエ!!?』』

『ホンギヤアアアアアツ?!?!?!?』

**

*

轟音と共に内部からの凄まじい衝撃に襲われたそのコンサートホールは、呆気にとられるオレ達の目の前でみるみるうちに瓦礫の山へと化していった。

奴らの野望が物理的に潰える光景を見ながら、オレはふと、こう思った。

昼飯、食べ損ねたな……と。

運命が絡まり過ぎて事故ってる話

改め

名探偵コナン×ニューダンガンロンパV3

錯綜の弾丸狂想曲^{キリングハーモニー}

THE END

20. 「過去と現在の事故後ロスタイム」

「……分かったよ、ボクの負けだよ。ボクもう知ーらないつと」

『わーいやつたあ?』

「オイもつと喜べよ相棒! ヒヤツホー!!」

「あー……不知火さーん、ちよつとアレ切つてくれない?」

『はーい』プツリ

「……何をしたの?」

「放送を一旦切つたんだ。キーボクンのも含めてね。これで自由に本音が喋れるよ」

「やれやれ。ボクも長いこと『学園長』をやつてきたけど、こんな気持ちになるのは初めてだよ。よりにもよつて、『入れ替わりトリック』でボクを出し抜くなんてね。なんかもう、何周か回つて満足しちやつた。不知火さんと王馬クンが黒幕つてことで良いや。コロシアイするかどうかはキミ達に任せるよ」

「モノクマ……?」

「やつぱり見世物だったんだ」

「はあー……!! やーれやれ、息苦しいったらありやしねえ!」

「やつと肩の力を抜けますね!」

「あーしんどかった!」

「ちよ、ちよつと待って!?! その反応、まさか全員……!?!」

「ごめんね白銀さん……」

「オメーが黒幕役だったのも全員知ってただよ、黙ってて悪かったな」

「いつから!?!」

「あのバーチャルゲームの時からよ。貴女だけ刷り込まれた記憶の種類が違っていたこ

とことが、ヘッドギアの脳波測定で判明したの」

「」

『ツムちゃんが!?! 私は知らなかったぞ!?!』

「そう言えばそうでしたね」

「現黒幕が一番何も知らないとは皮肉じやのう」

「ゴン太も知らなかったよ!?!」

「ゴン太くんの配線ミスは論外だから……」

「そんな……じゃあ、ゴフェル計画が嘘だったことは?」

「知ってたよ、キーボくんが外部からメッセージを受け取っていると人間さんから聞いた時に確信できた」

「ボク自身はコロシアイをしたくないのに、邪魔な不知火さんをコロセという内なる声が聞こえてくるものです……流石に疑問がわきました」

『何それコワイ』

「キーボに頼まれて調べてやったら、受信機能があったから驚いたぜ」

「ギ、ギフテッド制度も、皆それぞれの人生も嘘だつてのは……」

「……薄々、察していたよ。あのライトが嘘だと分かった時から……」

「……………」

「まあ僕はある意味それで助かったけどネ」

「俺もだ」

「同じく」

『そもそもギフテッド制度とか初めて聞いた』

「その民俗学者とテニス選手と暗殺者と現黒幕はちよつと黙っていいようか……」

「……え？ まさか不知火さん、外の記憶を持ったままなの!？」

『いやあごめんね！ 一応怪しい不審者の人格を植え付けられたことは自覚してたけ

ど、二元の記憶もそのままだよ』

「……………それでなのね……………とことん私の邪魔をしたのは、最初から全て分かっていたから……………」

『ホントすまんかった？』

「そこは謝るところじゃないっすよ不知火さん」

『あー……………つてことは、私をぶん殴ったのもツムちゃんなのかあ、そっかあ……………』

「ぶん殴った？ どういうことですか？」

「実は……………クシビさんは、私が図書室に仕掛けたトリックで殺されたんじゃないかなって。私宛の手紙で教えてくれたの」

「えええ!?!」

『砲丸が転がる音は聞こえてた』

「ウソでしょ不知火さん!?!」

「これは酷い地獄耳……………」

『カエデちゃんやんが転がした砲丸は避けたんだけど、それに気を取られてる隙に、直後に隠し扉から出てきた誰かにぶん殴られちゃったの』

「それが……………白銀さんだったんだね」

「……………その何が悪いの？ 私はチームダンガンロンパの一員なんだよ？ コロシアイを盛り上げるのは、私の役目であり至上命題なんだから」

『え?』

「ダンガン、ロンパ……?」

「知らないの? あなた達は自ら参加したくて来たんだよ?」

「自ら、ですって?」

「そんなはず、あるわけないだろ……!」

『ツムちゃん?』

「わざわざオーディションまで受けに来たのに、こんなに台無しにしてくれて……ああ、その時の記憶ももう無いんだっけ」

『ツムちゃん?』

「ちよつと、さつきから何!」

『ツムちゃんがチームダンガンロンパの運営メンバーってホントなの?』

「だから、そう言ってるでしょ?」

『黒幕役も記憶操作受けることになってたの?』

「え? そんなバカなことがあるはずないじゃない。全てを知ってる黒幕として動かなくちゃいけないんだから」

『でもツムちゃんも、私や皆と同じように変な機械被せられてたよ?』

「え?」

『ええ?』

『いやだって……私とツムちゃんって、出席番号的にお隣同士じゃん? あの時はお互いに名前も知らなかったけど、キミが変な機械被らされたの、すぐ隣で見てただけど……』

「……………」

「」

『ツムちゃん? ツ、ツムちゃん!!』

「白銀さんが倒れた!」

「しっかりしろ元黒幕ー!!」

**

*

フクロウと聞いて真っ先に思い浮かぶのは、智者や賢者というイメージではなからうか。もう少し生物学的に掘り下げれば、狩りの名手というイメージも加わってくる。

更には夜行性であり、聴覚が発達し、ところによれば守り神として扱う文化もある。

しかし昼間は至って大人しく、別の鳥に騒がれれば逃げ出すほど。

そして、他の鳥類の古巣を利用することもある習性。

考えれば考えるほど、彼らがフクロウと呼ぶと聞いて想像できる人物は限られてくる。

夜型であり超が付く地獄耳の不知火霊と最も信頼し合う、知恵が回る狩りの名手。

元「超高校級の総統」。

現DICE首領の最有力容疑者……王馬小吉！

「……………」

それにしても、こんなに近くで潜伏していたなんてな……。

風見からの報告を確認し直せば、春川さんの現住所は簡単に出てきた。今考えれば、なるほど、道理で不知火さんが直々に風見を追い払ったわけか。そこに警察から庇わなくてはならない人間が来る予定だったのだから。

春川さんの心底鬱陶しがる口調からも、それが窺える。いくら仲間と言えど、彼と彼女の間にある因縁は相当深い。思い返せば、最初に彼女らがポアロに来た時、その会話中に王馬小吉の名が出ていたはず。それを素気無く断っていたではないか。あれはきつと、DICE活動の協定要請だったのでは？

不知火さんの少し前までの足取りも掴めた。どうやら今の春川さん宅に来る前は、つ

い最近まで海外へ行っていた天海蘭太郎の家を利用していたことが、その周囲の防犯カメラの映像から判明した。彼女の高い隠密能力があれば、無人の家を無人のままに見せかけて利用することも容易かっただろう。確かにあの家は完全にノーマークだった。そこに王馬小吉もいたのであれば、そりゃ気付けるわけがない。

……全く、本当に騙すことに長けた連中だ。その見事な手腕には、怒りをとづくに通り越して笑いしか出てこない。

だが、それももう終わりだ。そろそろこちらの言い分も聞いてもらおうではないか。

「安室さん、何だかご機嫌ですな？」

「ええ、ちよつと良いことがあります」

ようやく待ち望んだこの日が来たのだと思えば、作業の手も軽くなるのは仕方ない。同じ厨房に立つ梓さんにも簡単に見抜かれるほど浮かれていたようだ。

行方が滅多に掴めぬDICEのリーダーである王馬小吉の所在が再び判明した今、俺がやることは一つ。彼らとの本格的な協力体制を、直接のリーダーである彼に直談判しに行くのだ。

取引材料は敢えて用意しない。彼ら相手に優位に立とう等、妙な下心を持てば、合法的にとんでもない目に遭わされることは火を見るよりも明らかだ。誰にとは言わないが。

だから、誠心誠意の本心のみをぶつけに行く。何度断られたようと諦めてたまるか。彼らだって、己を陥れる非情な嘘に囲まれながらも挫けることなく、最後には見事に真実と本物を掴み取ったではないか。俺もそのためなら土下座だろうが何だってしてやる。

当然非公式的なものではあるが、あの17人全員を味方にできるとしたら、これ以上心強いことも無い。散々辛酸を舐めさせられたあの憎つくき組織もイチコロだろう。現にこの前のコンサートホール爆発騒動だって、組織にとつて大きなダメージになったのだ。おかげでバーボンとしての仕事も倍増したが、確実に奴らが弱っている証拠だと思えば大したことは無い。

問題があるとしたら……やはり、あの米国の犬どもだ。不知火さんが自分とフクロウの所在をアツサリ明かしてくれた場には、本当に残念なことに、赤井秀一もいた。奴らがこの絶好の機を逃すとは思えない。

あいつらだけには絶対に、決して、好きにさせてたまるか。奴らよりもいち早く接触しなければならぬ。

その焦りが個人的な私情絡みであるのは認めるが、理由はそれだけではない。今や全世界中の捜査機関が、53期の17人、ひいてはDICEとそういう目的で接触しようと画策しているからだ。あまり手をこまねいていると、他の国からも何やかんやと口実

をつけられ、余計なちよっかいを出される可能性がある。FBIの連中だけでも十分面倒だと言うのに。

……フクロウとやらは警察を警戒しているようだが、彼らを積極的に犯罪者として捕まえようとする警察は最早何処にもいない。体面上の必要性があれば、表向きには悔しがり、小さく批判の声を出す。しかしその裏では、誰もが『いいぞもつとやれ』と思っている。つまり、彼らのことは放置するのが当たり前になっていた。

当然の流れだ。もしも仮に、彼らを逮捕なんかしてみろ。全世界の世論の矛先は一斉に、ありとあらゆる警察機関に向く。余計な仕事ばかりしてんじやない、と。自分達がDICEと警察の競り合いを常に望んでいる癖にだ。こればかりは本当に理不尽だと思う。そう仕向けた彼らは本気でこちらの胃を殺しにきている。

いやしかし、考えるだけで恐ろしい。守るべき国民から『日本の警察は人助けを犯罪行為とみなす』などと糾弾されたら、俺は軽く四、五回は死ぬる自信がある。他の真つ当な警察官だってそうだろう。

警察や捜査機関の関係者にやたら敵しい彼ららしいと言えばそれまでなのだが……まさにそれこそが、DICEの不可解な点でもあった。

とその時。

「一」

本来の仕事用に使っている携帯電話の方に、着信があった。そちらに電話をかけてくる人間なんて本当に限られている。俺がここにいるときは極力かけてくるなど重々言い聞かせているのに。よつぽどの緊急事態なのか？

「何かあったのか」

『降谷さん、大変です！』

適当な理由をつけて店の裏に回り電話に出ると、切羽詰まったような風見の声が聞こえてきた。

『先程、不知火霊から電話があり、相談を持ちかけられました』

「……またお前がか」

『し、仕方ないでしょう……!?!』

確かに仕方ない。現時点で彼女と堂々と連絡が取り合える警察関係者は、風見ただ一人しかいないのだから。そういう意味では本当に貴重な人間でもある。

しかしやはり納得いかない。どうして風見だけなんだ。彼らが徹底的に忌避する盗聴器を仕掛けた張本人ですらあるのに、何故彼女は心を許すのか？ 風見自身、その後も何かと彼女からの相談を受けるなどの交流は続いているのに、何故あいつは何の災難に見舞われることなく平穩に暮らしているんだ？ 解せぬ。

『降谷さん、昨晚は組織としての活動をなさっていましたよね』

「ああ、それがどうかしたか？」

『彼女は、その時のあなたを目撃していたそうです。知り合いの喫茶店店員の怪しい現場を見てしまったが、どうしたら良いかと、相談されまして……』

「なっ」

思わず大声が出そうになった口を慌てて抑えた。

だから！ あの子は！ どうして！ そういう余計なところばかりを！ 見てしま
うんだ!!

俺がフクロウと本格的に接触しようとした矢先にコレである。彼女の悪意は仕事が早過ぎないか。思わず近くのゴミ箱のペールを殴りつけそうになる。

「彼女は何と言っていた!？」

『それが……その……ひ、ひ、非常に、言いにくいのですが……と、とにかく、あなたのことを、これでもかと警戒しているようで……この町から、出て行くと決めてしまいま
した』

最悪だ。よりもよって犯罪者の顔の方が先に知られてしまった。

この町から出て行くだつて？ それはそうだろう、犯罪者が平然とした顔で身近に紛
れ込む町に住みたいと思はずがない。

まさにこれから公安の警察官という身分を明かしていこうとする段で、こんなことに

なるだなんて。一体俺が何をしたと言うんだ……!?

「……そうか……バーボンの存在を、知られてしまったんだ……」

『あ、いえ。そうではないんです』

「は？」

何て言った？ バーボンが知られたわけじゃないって？

「どういうことだ？ 俺がああの組織と繋がっているのを知って、警戒しているんじゃないのか？」

『えーつと……そ、それも、そう、なのですが……そういう、こと、では、ない、んです……』

「歯切れが悪いにも程があるぞ。もつとはつきり言え」

『あ、ああああの、決して私がそう言ったのではないのです、分かっています、絶対に違うんです』

「おいどうした？」

風見の様子がおかしい。俺に何かを隠そうとしているようだが、その口調には自己防衛ではなく俺を気遣うような心配があつた。

……この変な予感には覚えがあつた。

「……風見、言え」

『は』

「彼女は、俺を何だと思っている？」

コンサートホールでの出来事が脳裏に浮かぶ。どうせまたしようもない勘違いをさ
れているのだと。

覚悟を決めて風見を問い質せば、恐る恐る向こうは口を開いた。

『ド……ドnpペリと、呼んでいました……』

ドン・ペリニヨンか？

一応酒の名前ではあるが、確かにバーボンではなかった。

しかし何だ、その微妙なニアミスは……。

『彼女は、あなたを含めた例の組織を、ホストクラブか何かと思っています……』

俺はペールをひっくり返した。

*

**

『あつたあつた！ 特效薬って書いてあるよ！』

「正式には解毒薬の一種だけどね。彼の病気は遅効性の毒によるものだから」

「……オレ、本当に死ぬ予定だったのかよ。ここ何日か体調がおかしいとは思ってたが……」

「コロシアイさせるために予定を早めたら、キミの死期もズレちゃったみたいだね。本当ならこの事件のタイミングで死んじやう予定だったんだよ」

「」

「も、百田ー!!」

「あれ？ 死者を出したいはずなのに、どうして解毒薬なんか用意してたの？」

「思い出しライトもそうだけど、臨機応変にストーリーを変えられる準備はしてたんだよ。彼の病気と特效薬を動機にする展開も想定していたのさ」

「どう考えても春川ちゃんがクロになりそうな展開だね」

「さーて、ここからが本題だよ。キミ達は見事ボクを打ち負かしたわけだけど、残念ながら、それだけでは何の解決にもならないんだ。理由はわかるかな？」

「……視聴者が許さない、ってこと？」

「最原くん大正解！ まあ、そういうことなんだ。その人達こそ真の黒幕だと思っても良いよ」

『闇が深いなー』

「ホントにね!」と言つても、視聴者全員が本物のコロシアイだと思つて楽しんでるワケじゃない。殆どの人達はただのフィクションにしか思つていないだろうね。キミ達の命を脅かす真の敵は、これが本物の殺人劇だと知った上で楽しんでる、ダンガンロンパのスポンサーもしている怖い裏社会の人達なんだ」

『聞しかなくね?』

「つまり……例え僕達がここから生きて脱出できたとしても、その人達に口封じで殺されるつてこと……!?!」

「そういうことー!」

『「エエエエエ」』

「おいどーすんだよ!!」

「うわー、流石にここまででは想定してなかった。不知火ちゃん、何か良い方法無い?」

『ひえー……そういう怖い人達を警察がどうにかしてくれるまで、ここに引きこもるぐらしいか考えられないわ……』

「かつてないほど消極的!」

「クソツ、ここにきて手詰まりか……」

「それだよ!!!」

「白銀さん?」

「元黒幕復活した？」

「皆で時間稼ぎしよう！ 全力で!!」

「どういうことかしら……?」

「これだけ盛大にコロシアイのストーリーが破綻したのだから、もうきつと異変に気付いた人もいるはず。だから、もう一度やり直して時間を稼ぐの!」

「やり直し?」

「まさか?」

「その名も、ダンガンロンパ53最初から仕切り直し作戦!!!」

『「またやるの!?!」』

「イイねえ! ボクは賛成だよ!」

「乗り気になっちゃった!」

「イイよイイよ、最高じゃないか! フィクションのボク達が現実の全世界を騙してやるんでしょ? 思い切り盛大にやってやろーじゃん!!」

「……いや、確かにアリだ。モノクマもグルであれば!」

「正気か終!」

「えっと、つまり? モノクマによってまた記憶をリセットされたと見せかけて、本来のストーリーをやり直すってことっすかね。俺みたいに?」

「そう！ それならチームダンガンロンパも納得させられる。幸いにして今回のメインカメラはキーボ君だから、彼の動き次第でいくらでも死体は誤魔化せる！」

「責任重大ですわね!？」

「今度は命懸けの演劇かあ……」

「よく分からないけど、ゴン太も頑張るよ！」

『じゃあ早いとこ準備しなきゃ』

「その扉も直しておかないといけないのでは?」

「設備関係はオレ様に任せな！」

『ミウちゃんめっちゃ頼もしい』

「これから本来の皆の配役を教えるから、頭に叩き込んでちょうだい！」

「ねえねえ、多少は脚本変えちゃっても良い? オレ、敢えて隠しておきたいことがあるんだけど」

「もうこの際好きにしちゃって！」

『ツムちゃーん、私はどうする? 変に動かない方が良いよね?』

「散々邪魔した不知火さんは始末されたってことにしよう。裏方に回ってくれた方が助かるし、信憑性が上がるかも」

『死んだフリだね、得意分野だ!』

「いよいよ本物の黒幕じみてきたねクシビさん」

**

*

バーボンのロリコン疑惑に続くホスト疑惑浮上の知らせをボウヤから聞いた俺の腹は、そろそろ限界に近づいていた。

「だ、だから不知火さん、こないだのコンサートホールでの一件も、知り合いの自分を介して赤松さんや春川さんに近づいてきたんだって、安室さんのこと、不埒な、ド、ドンペリ野郎だって、物凄いい、怒ってて」

工藤邸の書斎の床に突っ伏しそうな勢いでヒイヒイと苦しそうに言葉を細かく切りながら、ボウヤは先程公園で友人達と共に彼女と話したことを語る。

どういう経緯でかは分からないが、不知火霊は降谷君がバーボンとして活動している現場を目撃してしまったらしい。そして、あのベルモットやジン達とコードネームで呼び合っているその現場を……ボウヤの友人の的外れな提言を真に受けて、ホストと客のやり取りであったと見事に勘違いしたようだ。

確かに、あの嫌味なほどの美男美女達が黒いスーツなどで身を固め、洋酒の名前を口をしていれば、そういう方面を連想するのも無理は無いが……そうか、今度はホストときたか……。

「どうしよう赤井さん、オレ、今後安室さんの顔マトモに見られなくなりそうなんだけど。あの人、今住んでるところの真下で働いてんだけど……！」

「落ち着くんだボウヤ、気持ち分かる……クツ」

「赤井さんまで笑つたらお終いだよ……！」

笑つてはいけないルールはどこまでついて回るのだろうか。

「全く……彼女の才能には本当に恐れ入る」

「あ、あのさ、前々から気になってたんだけど、不知火さんの才能って何なの？」

目元に溜まった涙を指で拭いながら、ボウヤがそう質問してきた。

「そもそも、あんな人が出演してたような気もしないんだけど……」

「ああ……ボウヤはそこまではつきりと覚えていないのか。ダンガンロンパの53作目は、実は二回行われたんだ。世間で一般的に広く知られているのは二回目だが、彼女はそれには出演しなかったんだ。更に劇中で顔を明かさなかったから、知名度は彼らの中でも最低だろうな」

「えええっ？」

一回目を覚えている者は本当に数少ない。悲劇そのものであった二回目ばかりが取り沙汰されていたからだ。

放送事故のような形で終了した一回目。サスペンスドラマとして完全に破綻していたそれを見た者の一部に、これは本当に何も知らない人間を使っているのではという、企画そのものへの疑惑が生じた。そして、その直後に放送された二回目は、一回目の雰囲気がまるで嘘であるかのような悲劇の連続だった。

一人の生徒役が最初からいなかったかのように扱われるそれを見て、いよいよその疑惑は確信に変わっていった。このドラマは、本当に今もどこかで起こっている重大な事件ではないか、と。

捜査関係者達が諸々の問題を片付け、ようやく彼らを保護すべくその場へ突入した時には、もう殆どが終わっていた。ほんの数人しか生き残りがいない六回目の裁判にて、全ての真相を解き明かした探偵役と黒幕役が全力でぶつかり合った後。ついに勝利した生き残り達が、破壊され尽くした学園から出ようという時だった。

すつかり後手に回り、悲壮な心持ちで生き残りの彼らと対面することになった捜査官に向かつて放たれた第一声が、警察仕事遅い、という完全に予想外にして辛辣極まる春川魔姫の一言であつたらしい。

そして、二回目の放送では封鎖されていた不知火霊の研究教室の中で、暇を持て余し

た犠牲者役全員と、とつづくに始末されていたと思われていた不知火霊本人が勢揃いし、即決着がつく大人数のババ抜きで大盛り上がりしていたのが発見されたようだ。

「彼女の称号は『超高校級のサイキッカー』、または『超高校級の悪意』。本来は探偵役を翻弄する悪質なミスリード役だったが、実際は全く逆のことをしでかした。その結果が、誰も死ななかつた一回目だ」

「……あー、悪意か。なんか、分かる気がする。あの人に余計なことすると、大抵ろくなことにならないもん……」

己に悪意や害意を向ける者への無自覚無意識な容赦の無い報復行動は、あの頃から変わっていない。むしろますます磨きがかかっているような気さえする。現在では直接的な行動ではなく、予測や回避のしような無い災難という形で報復が返ってくるのだから。

「しかし……彼女の才能が本物だとしたら、安室君に降りかかる災難の理由が分からないな。確かに彼も俺達と同じように彼女達との接点を持つとうと動いていたが、それは決して、彼女達を傷付けようとする悪意の類ではないはずだ」

「まあ、そりやそうだけど」

考え過ぎじゃない？ とボウヤは言うが、俺はどうしても腑に落ちない。この前のコンサートホールで起きた、殺人未遂事件を見えますますそう感じるようになった。

D I C E と言ひ、彼女個人と言ひ、その行動や才能の根底には、必ず何かを助けようとする意思がある。その対象には事件の被害者のみならず加害者も含まれるということとは、あの殺人未遂事件でよく分かった。犯罪で誰も傷付かないようにするのだから。……だが、D I C E のひたすら警察関係者を目の敵にしたような嫌がらせや、最近の犯罪組織を対象にした活動には、ただの悪意しか見受けられない。絶対に困らせてやる、という意思しか感じられないのだ。ある意味それは、不知火霊による災難が安室君をピンポイントで直撃するような理不尽さにも似ていた。

そもそもD I C E が警察関係者を目の敵にするのは、かつて彼らを保護という名目で嚴重に警備された寮に軟禁し、更には数多の盗聴器を仕掛けられることを黙認し、ダンガンロンパが終わった後も尚彼らを食い物にしようとしたから、とされている。

それはもう、今更どうしようもない罪として我々が背負っていくべきものだ。だからどれだけD I C E による嫌がらせがあろうと耐えるしかない。

だが、待つてほしい。

彼らに盗聴器を仕掛けた当事者や関係者達は、既に全員、彼ら自身によつて再起不能にされているのだ。

入念な準備期間の後の、一夜に一人、確実に恐怖で精神的に極限まで追い詰めていく実行期間を終えるだけでもおおよそ半年はかかったであろう、あの伝説的なメリーゴーラ

ンド騒動。それによって、彼らを不当に扱おうとした連中は、今も通信機器に触れられぬほどの凶悪なトラウマを植え付けられたのだ。それでも、その騒動以降、奴ら自身が勝手に暗がり恐怖する他は何も起きていないという。

しかし、世論を巧みに利用した警察関係者への無差別な嫌がらせは、未だ執拗に続いている。

これは一体、どういうことだ？

よつほど警察関係者が憎いのか？

それとも、まだ我々に何か問題があると言っているのか？

「それを言うなら、赤井さん達も微妙な災難を被ってない？」

「……まあ、確かにそうだが」

俺は変装への自信喪失。ジョディは盗聴器のモニタリングへの嫌悪感。キャメルに至っては誰かの後ろを歩くことにすら拒絶反応が出る始末。微妙どころではない気がする。しかも後者二人に関しては彼女から明確な悪意を向けられている。

何だこれは。一体何に對する報復なんだ。そんなに盗聴器がマズかったのか。ああそれなら仕方ないな。

「いずれにせよ、彼女に直接問い質せば良い。その時にすべて分かるだろう」

「……ついに話すんだね、全部」

「ああ。彼女やフクロウが再び行方をくぐります前の、今しか無い」

盗聴器のことも明かした暁には、あの春川魔姫に何と言われるだろうか。関節技の一つや二つは覚悟した方が……いや、不知火霊もいるのだから、ダンプカーの雨が降ってくるような事態も想定せねばなるまい。考えただけで死にそうである。

善は急げと工藤邸を後にした俺は、春川魔姫の自宅前でホスト疑惑がかかっている男と鉢合わせることになり、ついに笑ってしまったのであった。

*

**

「うーん……ニューダンガンロンパ53じゃ芸が無いよなあ……」

よし、ここはちよーつと捻って、ニューダンガンロンパV3ってことで！」

21. 「オレ達の戦いはこれからだ！」

今から約五年前、ダンガンロンパ事件の生き残り達による通称メリー作戦は発案され、実行に移された。

その一年以上に渡る壮大な作戦が終盤に差し掛かったころ、その一悶着は起こった。

その夜も一人の盗聴ヤローを精神的にボッコボコにしてきたメリーさん役のサイキッカーが、一人の男性を連れて寮に戻ってきたのだ。

曰く、まるでこれから自らネコを踏みに行くような雰囲気だったので、思わず引き止めてしまったらしい。どうか彼を助けることはできないかと、仲間達に相談するサイキッカー。

突然見ず知らずのお人好しにお持ち帰りされたその男性のみならず、お持ち帰りしてきたサイキッカーを迎えた同級生達も大いに困惑した。そんな複雑な事情を持つ人間を助けて匿うなど、ただでさえ複雑過ぎる立場の自分達にできるのだろうか。

当初は困惑するばかりの男性であったが、やがて自分がとてつもない好機を得たと理

解すると、悩める17人に対してこう提案した。

「自分も己が持つ技術や知識で君達を助けるから、どうか君達も自分を助けてくれないか、と。」

こうして、後にフクロウと呼ばれる男は、"53期の17人"の共犯者となったのであった。

「ゼロか!？」

もう三度目にもなる取っ組み合いをしていた彼らの動きを完全に止めたのは、近所迷惑だからと冷たい殺気を纏って制裁しにきたその家の家主ではなく、薄暗いマンションの廊下に響いたその焦ったような一声であった。

「……………はっ。」

もう二度と聞くことができなかつたはずのその声が発された方向を見れば、もう二度と会うことができなかつたはずの人物とバツチリ目が合い、ものの見事に動きも思考も停止する男性二人。

「何故お前がここにいるんだ!!!?」

彼らが揃って今世紀最大の絶叫をかましたのは、静かに激怒する家主によつて床に叩きつけられる直前のことであつた。

それから約十分後。

「ココア飲む?」

「……っ……っ……っ……」

「………遠慮する」

紆余曲折あつたものの、一目で事情を察したその家の居候の男性によるとりなしにより、ひとまず話し合いのためにその家へ上げてもらえた訪問者の二人の男性。居候の男性を見てグスグスと半泣きになつた、最近情緒不安定気味な男と、いつも細めている目を開いて変声機のスイツチも切つてゐる男。彼らは、困惑気味の居候の女性から、手持ち無沙汰にココアを勧められていた。

ココアを断られた居候の女性は、可愛らしいピンクの敷物の上で大の男三人がそれぞれ個性的な表情で正座し膝を突き合わせてゐるその光景にある種のシニールさを感じながら、非常に険しい顔で同じ光景を見守る家主の女性の隣に着席した。そして、テーブル上のアーモンドチョコレートを手に取り、個包装のビニールを破つて中身を口に入れた。

「……聞きたいことは、山程あるが……」

ガリボリとアーモンドを遠慮なく噛み砕く音の他は何一つ聞こえない重苦しい沈黙を最初に破り、口を開いたのは、半泣きの男であった。

「お前、どうして生きているんだ……？」

自分でそう言いながら、またもその目から涙を溢れ出させるその男に向け、ツンデレな家主は箱ティッシュを投げ付けた。

「それが……えーつと、追っ手に追われている最中に、あの子と会って……」

居候の男が居心地が悪そうにそう言いながら視線を向ける先には、早くも二つ目のアーモンドチョコレートに手を伸ばしている居候の女性がいた。

「すれ違いざまに突然引きとめられて、お前自分でネコを踏むつもりかと、訳のわからないことを勢いよくまくしたてられて……」

何となくネコを踏むという言葉の意味が分かった訪問者の男達は、頷いて話の続きを促す。

「最初は戸惑ったが、あまりにもオレを心配してくれるもんだから……それで、つい言ってしまったんだ。自分は追われている身だから、どうしても死ななければならぬと」

「……………」

「……………そうしたら、あの子は、だったら死んだフリをしたら良いんじゃないかと、とんでもないことを提案してきて……」

「……………乗ったのか、それに」

「乗っちゃった」

悪戯っぽく苦笑しながらそう言った居候の男に、半泣きの男は心底呆れたような溜息をつき、深く項垂れた。

すると、今度は変声機の男が訊ねた。

「だが、あの状況はどうやって作った？ お前は間違いなく自分で胸を撃つたはずだ」

三つ目のアーモンドチョコレットを口にしようとする居候の女性が、サラッと出された銃の話に、うわおつかねえと小声で呟いた。

「あの子やその友人達に、色々と手助けしてもらった」

「俺が少しお前を見失った時に、そんなことがあったのか……」

「何かの演出用なのか、彼女自身が持っていた輸血パックと、発明家の子が作っていた小型の消音防弾パネル。コスプレイヤーの子には、予め銃創の特殊メイクをしてもらった。探偵の子と話合って自決のシチュエーションを決めて……あとはお前から拳銃を奪えさえすれば良かった」

劇中メリ

あの悲劇までが伝説達の全面協力の元に決行された寸劇であったと知った変声機の男が酷い脱力感に襲われ、ガツクリと項垂れると、今度は涙目の男が勢いよく身を起こして激しく反論した。

「つ、待て！ あの時俺は、お前が確かに死んだのを直接触れて確認したんだぞ!? 呼吸も、鼓動も、体温も、何もかも……!!」

「緊急時の死んだフリに使う、偽装死薬というのを使わせてもらったんだ。途轍もない効き目だったよ。撃とうとする直前に奥歯に仕込んだそれを飲み込んだら、あつという間に意識が飛んだ。数時間も経てば何事も無かったかのように元通りだ」

訪問者の男達は揃って床に伏せた。

「その後、後処理の業者を装った彼女がやってきて、オレを回収してくれたんだ。で、それ以降は……当時世界で最も警備の厳しかったあの寮に匿ってもらっていた」

「嘘だろお前!!」

実は結構すぐ近くで暮らしてましたと暴露した幼馴染に、涙目の男が床に向かって咆哮した。

四つ目と五つ目のアーモンドチョコレートを同時に口に放り込んで豪快に噛み砕く居候の女性の、その隣に座る家主の女性が、そんな彼に向かって五月蠅いと苛立ったように罵倒する。

「お前……本当に何してんだ……? 何で、俺に一言も教えてくれなかったんだ……?」

目の前で楽しそうに笑う幼馴染改め、全ての黒幕と言っても過言ではないその男に、弱々しい声でツツコミが入られる。

すると、彼は笑顔から一転し、真面目な顔でこう言った。

「仕方ないだろう、オレの情報が何処から漏れたのかも分からない以上、死んだフリを続けるしかなかったんだ」

「だ、だから警察に関わりたくなかったのか!？」

「それ以外に何がある。例え警察官だろうと、少なくともお前のような昔馴染みでもない相手は全員信用できない状況だ。オレが生きていると知られたら、お前が助けたと疑われていたかもしれないんだぞ」

「……………」

グッと言葉に詰まる涙目だった男。他でもない自分を思いやっつての死んだフリだと聞いては、それ以上責めることはできなかった。

「なら、今になってこの近くに来たのは……………」

「死んだふりのままの流浪の生活が板についてきたから、そろそろ死人なりに、お前の手伝いができたら……………」と想ってき」

涙目だった男は再び涙目になって床に転がった。幼馴染の気遣いと、その代理で動いていた彼女に遭わされた目を思った彼の胸の中で、多種多様な感情が去来し複雑に暴れ回るせいであつた。変装がバレている男は、頭を抱えて唸る彼を同情の念に満ちる目で見ていた。

同時に彼らは、かの悪意が執拗に自分達をつけ狙った理由を理解した。

自分達が不本意ながらも死に追いやってしまった人間が、彼らの中に紛れ込んでいたのだから。例えば本人に恨みは無くとも、何らかの嫌がらせぐらいは発生するだろう。その発生源に助けられ、庇われ、同居までしていたのなら、最早必然と言い切ってもおかしくないレベルであつた。

D I C Eが警察関係者に嫌がらせを続ける理由も判明した。そこへ戻るべき彼が未だに死んだフリをし続けねばならないという現状は、出すべき膿がまだまだ残っていることを示してした。

なるほど、警察仕事しろとはそういう意味でもあつたのか。思えば彼らの活動は、警察の実質的な負担を軽くするものばかりでもあつた。目の敵にしていたのはむしろ自分達の方であつたのかもしれない。目を向けるべきは外側ではなかつた。

そして、居候の男は続けた。

「……だけどオレも、ただ匿われるだけじゃ心苦しかった。だから、合法的にいつまでも囚われ続けていた彼らを助けたくなくなつたんだ」

「……おい、ちよつと待て」

「彼らに雲隠れの仕方を教えたのは、オレだ」

「」

ちよつと罰の悪そうな笑みを浮かべる居候の男に、いよいよ言葉を無くす訪問者の男達。

彼らにガチの潜入のプロがついていたという事実がもたらした衝撃は、それはもう、凄まじかった。

「不審に思われない身辺整理の手順や、優先的に消しておくべきデータの種類……オレが教えたのはそれくらいだけど、しかしまさか、あんなハイレベルにやり遂げてしまうとは思わなかった。流石は超高校級」

「おい……おい………」

「ほとぼりが冷めた頃に、オレが偽名の方を使って付き添い役を務めて、新しい戸籍も手配した。せめてそれくらいしてやらなきや、助けてもらったオレの気が済まなかったんだ」

「……もしそれが本当であれば、何故ここで言った？ 我々がここに来た目的を知つての発言なら、迂闊にも程があるぞ」

「そつちこそ舐めてくれるな赤井。オレが何もせず隠れていたただだけだと思うなよ。もうとつくにその気がないのは分かっているんだ」

「……この変装に全く動じなかったのも、既に知っていたからか」

お前達が起こした騒ぎについては全て調べがついていると、居候の男性は断言した。

「お前達がどういうつもりで彼らに接触したがるのかは知ったこつちやないが、こつちはこつちでお前達が彼らに対してやらかしたことについてもキツチリ調べ上げている」

17名全員が全員、いつでもその証拠と被害届を出せる準備ができています、と。

地獄耳でもある居候の女性がココアのおかわりを作り、退席したそのタイミングを狙い、居候の男性は先程までの明るい声音を一転させ、地を這うような低くドスの効いた小さな声で訪問者達にそう囁いた。

そのあまりの態度の豹変ぶりに虚を衝かれた彼らは咄嗟に反応できず。

「え、な」

「お前達、そこに直れ」

「ま、待っ」

「いいから直れ」

有無を言わさぬ口調に気圧され、訪問者の男達はそそくさと居住まいを正した。

「なあ、ゼロ、赤井」

「ハイ」

「いや、まさか、とは思いたいけど。」

間違つても、お前達のような立場の人間が。

今はただの一般人として、平穩に暮らしているあの子達を。

どんな理由があれ、また良いように扱おうだなんて。

そんなことは、決して、考えてなんか、いないよね？」

徐々に笑顔から真顔になっていく居候の男にそう言われた瞬間、訪問者の二人は、これからも自分達は彼女の悪意に晒され続けることと、DICEによる嫌がらせもまだまだ続くであろうことを察した。ついでに目の前の男が自分達の味方でもないことも察した。

かの悪意は、自分達を各々の正義の名の元に好き勝手扱った人間達、ひいては法律やそれに基づく国家体制そのものを、とうの昔に己の脅威と認識していた。

目には目を、齒には齒を。そしてお巡りさんにはお巡りさん国家権力を。その結果がこの状況である。

道理で自分達のやることなすこと全てが逆手に取られるワケだ。やり口を知っている同じ立場の人間がいるのだから当たり前だ。

それどころか、追い込んだつもりが逆に自ら袋小路に迷い込まされていた。しかも全く予期していなかったガチな方向で。何かを頼める立場にすらなれていなかった。完全に詰んでいるとしか言いようが無かった。

一瞬のうちにもそこまで考えた訪問者の二人が完全降伏の意を示すよりも前に、正座していた彼らの体は再び床に落とされた。

よく分からんが、凄い光景だった。

ハルちゃんと今後の行く先を相談していた時のこと。俄かに玄関先が騒がしくなったのが始まりであった。まるでそれは、因縁の相手と掴み合いの殴り合いをしているかのような騒ぎだった。

訝しんだハルちゃんが様子を見に行き、玄関のドアを開けた瞬間、あろうことがあのドンペリ野郎の怒声が聞こえてきた。

あいつとうとうこんなところまで来やがった。

私も応戦しに行こうかと腰を上げかけたその時。私よりも先に、隣でパソコンをいじっていた同居人が弾かれたように飛び出して行ったのだ。あの引きこもりの彼が、何と珍しいことに。

それで……なんか……色々話してて……私がココアのおかわりを作って戻ったら、同居人があの二人を転がす光景がそこにあつた。うわつよい。スコつち止めろ、俺が悪かった、とか楽しそうな悲鳴が聞こえてくる。

とりあえずそれまでの彼らの話から察するに、そこで転がされている二人……ドンペ

り野郎と地声がかっこいい沖矢さんは、彼の旧知の仲であるそうだ。それもただならぬ因縁があるらしい。彼がああの死んだフリを仕掛けた相手でもあるそうだ。

そうかなるほど……で、結局どうということなの。

「仲良いんだね?」

「まあな」

「なのは何であんな死んだフリなんかしなくちゃいけなかったの?」

「お前は何も知らなくて良い」

「ふあー」

つまり言いたくないと。殆ど食べ尽くして残り三つになったアーモンドチョコを持ってきた私の頭をクシヤクシヤに撫で付ける彼は、困ったように笑っていた。いつものことである。

「……不知火、あんたそういうところ本当に甘いよ。さっきの話聞いてたでしょ、どう考えてもロクでもないことに関わってるよコイツら」

「ぼいね」

「ああもう、だから早く警察に突き出せって言ってるのに……!」

「誰だって隠したいことの10や20はあるよ」

「多過ぎるわ」

彼が自分の口と客人二人の口にチヨコを突つ込むのを見ながら、依然として険しい顔のハルちゃんとうそう話した。

ハルちゃんはずつとこんな感じで私の同居人のことを怪しんでいるが、護身術として使える暗殺技術とかを請われたらこつそり教えていることを、私は知っている。やつぱりツンデレ。

元々喧嘩慣れしていた彼は、チャコちゃんから嫌悪されつつも、その独特過ぎる合気道を主に技をくらう側として教わったこともあり、その近接戦闘技能は結構凄いことになっている。現にあの転がされてる二人も何かの格闘技経験者ほかったと思うんだけど、まるで抵抗できてな……あ、いや、アレは最初から抵抗してないな。されるがままになつてゐるわ。もうただのじゃれ合いだな。

「……でもクソドンペリ野郎だけはとりあえず通報しとく」

「何で!? ちよつ、待つて! それだけは勘弁してくれ頼むから!! あと俺は! ドンペリじゃない!!」

「それが貴様の本性か……!!」

とんでもない速さで反応してきたドンペリ野郎が私に縋り付いてきた。口調もすっかり荒々しい。やはりこいつだけは怪しい。

が、ドンペリ野郎は頼もしい同居人によつてすぐさま引き剥がされた。ついでに私が

持っていた携帯電話も取り上げられた。

「心配するな、こいつらの首根っこは俺がしつかり掴んでおく。こいつらの好きなようには絶対にさせない」

「ホントに?」

「ホントだ」

首根っこどころか首そのものが締まってるように見えるけど。

昔からこの人は頼りになる。何でこんな人が自分からネコを踏もうとしていたのかまるで分からない。

「そっかあ……じゃあよろしくね、スコにゃん」

私がポロツとそう言った瞬間、男性三人の動きが見事に凍りついた。

スコにゃん。

圧倒的インパクトを伴って投下されたその呼び名は、大騒ぎしていた彼らの動きを一瞬で止めるには十分な威力を孕んでいた。

「……スコにゃん?」

首を締め上げる力が弱くなったのを見計らい、居候の女性にドンペリ野郎と呼ばれるその男は、硬直した幼馴染の顔を見上げた。視線は合わない。

「おい、スコッチ……？」

床に叩き伏せられて大の字になっていた変装がバレている男も恐る恐る体を起こし、ドンペリ野郎をドサリと床に落とした居候の男を見やった。やはり視線は合わない。

居候の男は、キョトンとした目で己を見上げるその女性の肩を掴み、消え入りするような声で言った。

「……何でここでオレをそう呼んじやうのかな、クシビ」

「え、だって、フクロウって呼ばなきゃいけないのは他所だけの話じゃ……？」

「そうだけど……いやそうだけどさ……」

「その人達とも仲良さそうだから良いと思っただけど……もしかして名前バラしちゃうダメな人達だった？」

「そういうことでもないけど……」

先程床に落とされた男がゆっくりと立ち上がり、説明に困る居候の男の肩に背後から手を置いた。もう片方の手で今にも吹き出しそうになる口を押さえ、必死に笑いを堪えているように全身を小刻みに震わせるその様子に、変装バレの男は強い既視感を覚えた。

「お、お前……警察止めて、ネコやってたのか……」

その言葉の意味を察した変装バレの男は、たちどころに噎せ返った。

丸みのある愛嬌たっぷりの顔の輪郭からフクロウとも例えられる、折れ曲がった耳が最大の特徴とされるそのネコの品種名は、スコティッシュフォールドと言った。

「……仕方ないだろ、下手に本名や偽名を明かして巻き込むわけにもいかないし、咄嗟にコードネームを言いかけて……」

「スコにゃん」

「スコにゃん」

「その名はお前達には許していないからな!!」

先程とは違う意味で再び床に倒れ込む訪問者達。顔を赤らめて吼えた居候の男性に、心から申し訳なきような居候の女性がおずおずと謝罪する。

「……本当にごめん、あの人達にもスコつちつて凄く親しく呼ばれてたから、てつきりセーフだと……」

「あああーっ……そういうニューアンスじゃないんだよなー……」

「ス、スコつち……」

「黙れ」

居候の男に背中を軽く蹴られるも、未だに体の震えが止まらぬドンペリ野郎。少し離

れた場所では、ついに崩壊した腹筋を持って余して蹲るばかりの変装バレの男。場は混迷を極めていた。

「……あんたら、そろそろ出てつてくれない?」

その混沌は、家主からそんな絶対零度の声が出るまで続いた。

比較的最近のことである。

友人の総統から下見を頼まれたその土地で、彼女は突然腕を引つ張られ、薄暗い路地に連れ込まれた。

「あなた、奴らの使いでしょ!」

「なんて?」

彼女を引き止めたのは、見知らぬ三つ編みの女性であった。

えらい剣幕でまくし立てる三つ編みの女性の勢いに押され、全身真っ黒なコートとフードで身を包んだ彼女は、ワケも分からずその訴えを聞いていた。

妹がどうかとか、10億円がどうかとか。正直何が何だか一つもサツパリ分からなかった

彼女だが、少なくともこれだけはハッキリと理解できた。

「おねえさん……どんな理由であれ、砲丸を転がそうとするのは見過ごせないよ」

「……………え？」

カラスに間違われた彼女は、今こそ劇団メリーの出番だと確信し、三つ編みの女性を強引に捕まえて一度友人の元へ戻ったのであった。

散々笑われてばかりのスコさんが、反撃と言わんばかりの勢いで、現在ミウちゃんのところで働いている宮野ちゃんの話をしたら、何故か彼らの動きは再びピタリと収まった。さつきから本当に忙しい人達だ。特に沖矢さんなんか死んだようになっていけど大丈夫だろうか。

「……………不知火さん、もうしばらくは、コイツを……………フクロウを、よろしく頼む」

「ドンペリなんか言われなくてもそのつもりですけど」

「ねえ何で俺のこと未だにドンペリ呼びなの……………？俺の名前知ってるよね……………？」

「……………ゼロお前、一度もクシビに自己紹介したことないだろ」

「えっ」

「勝手に名前を呼ぶのも呼ばれるのも嫌いな律儀な奴なんだよ、この子は」

「えええ」

「もし一言でも自己紹介していたら、もつと早くにお前と会うこともできていたかもしれない。あの喫茶店で働いていたなんて知らなかった。……ずっとサンドのにさん呼ばわりされていたから、全く分からなかったぞ……」

「えええええ……」

確かに江戸川くん達に安室と苗字を呼ばれているのは知っていたが、名乗られてもないソレを勝手に呼ぶのは嫌だった。知らないうちに私生活を全世界に放送されて、知らない奴に一方的に自分のあらゆることを知られているという、途轍もなく気持ちが悪い思いをしたのだ。お互いに名前を教え合う程度のエチケツトくらいは当然弁えさせてほしい。

と言うのに、向こうは自己紹介どころかまだ名乗ってもいないこちらの名前を勝手に呼んでくるので、ひたすら胡散臭さだけが募るばかり。おめーなんかサンドのにさんで十分だと思っていたら、ドンペリという更に呼びやすいあだ名が見つかったのでそう呼んでいるまでだ。

「そ、う、だったのか……ああ、そうだな、悪かった、不快な思いをさせてしまった」

「こっち来んな」

「フグッ」

馴れ馴れしくこちらに近寄って差し出してくるその手の手を叩き落とす、スコさんの背後に回る。やはりどう考えてもそいつは胡散臭かった。

すると、死人のようだった沖矢さんが素早く立ち上がり、こちらにやってきた。

「すまない不知火君、俺の本名は赤井秀一という。訳あって偽名を名乗ったが、騙してしまつて申し訳ない」

「ああ……やつぱりワケありだったんだ。そうですか、改めてよろしくです赤井さん」

「アカアキアキアキ」

ドンペリうるせえ、と思つていたら、一気に距離を詰められ、必死過ぎる形相でこう言われた。

「俺は降谷零と申します！ 今後は良い関係が築けるように精進いたしますので、何卒どうかよろしくお願いします!!」

「源氏名?」

「本名です!!」

じゃあアムロって何なんだ。やつぱり源氏名だろソレ。人を馬鹿にするのもいい加減にしろよドンペリ。

こうしてハルちゃんの家で散々ドタバタ騒いだ客人達は、マンションの一階ホールまでスコさんに見送られて帰って行つた。

しかし結局何しに来たんだあの人達。

騒ぐだけ騒いだけで帰っていったぞ……。

「クシビ、引つ越しは延期にしよう」

「ええ、私あのドンペリ野郎好きじゃない……」

「そう言うなよ、あいつは俺の大事な親友なんだ。お前の思うような悪人でもない」

「でも……」

「好きなアイス買ってやるから」

「キャラメル味の気分です」

「チヨ口過ぎるぞお前」

見送りから帰ってきたスコさんとそんな話をしていたら、コートの内ポケットに入れた携帯電話が震えた。

『メールだよ不知火さーん!』

元学園長の声がメールの着信を告げる。才卒線を使った場合のみに流れる音声だ。

『さつきまで色々大変だったみたいだからね! ちよつと空気を読んで、少し遅らせて通知させてもらいましたー!』

「マジで気が利く」

『でしよー?』

着信通知にしては長めの、そして自在に受け答えができる音声。何せ才卒線自体がネット上を自在に行き交う元学園長の超高性能なAIだ。カメラとマイク付きの媒体であればどれを使おうとも勝手に才卒生と認識してログインできるし、逆に部外者は決して利用することはできない。本当に便利だ。

『えーつとね、要約すると、王馬クンがそっちに行くから迎えに来て言ってるよ』
「急だねー」

「ちよつと待つて、まさかあのクソヤロー、うちに泊まる気？」

『不知火さんがいるところに泊まるって言ってるから、そういうことなんじゃない？』

「ごめん、本当に悪いんだけどあんた達、今は出て行ってくれない……？」

「……駅前のホテルにでも行こうか」
「そうだねー」

ひとまず今回の引越先は、同じ町内でおさまった。

「……それにしても本当に驚いた。お前が生きていたなんて」

「ははは、悪かった」

「笑い事じゃない……」

「あの寮から出てからは、ずっと不知火君と一緒にだったのか？」

「まあな。あの子と一緒にの方が、何かと動くのに都合が良かったんだ」

「……DICEはやけにあの組織を重点的に狙う気がするが、それもお前の差し金なのか？」

「あの活動に関しては、オレは何も言ってない。クシビも何も言わないしね。多分元からそういう業界の奴らに恨みがあったんだと思う。オレが奴らを意識して仕事を依頼したのは、探偵の彼に水無怜奈を探るように、とだけ。その先にある資金源を潰せるようであれば、それもよろしく頼むと」

「……………おい……………おい……………アレも……………キールが……………お前の……………お前が……………ううう……………」

「どうしたゼロ」

「気にしないでやってくれ」

「……………いや待て、もしか、彼らもあの組織のことを知っているのか？」

「一応。知識量は17人それぞれにマチマチだけど、全員知っているぞ」

「それなら、不知火君はどれほど知っている？」

「何か米花町近辺にそういうヤバい集団がよくいるらしい、という程度だね。コード

ネームも服装の共通点もほぼ知らない」

「OH……」

「……それなら、そこに潜入していたお前のことはどう認識しているんだ」

「犯罪組織にスパイとして潜り込んだら、身バレして命を狙われるようになった公安の捜査官」

「まんまかよ」

「彼らに嘘をつくとは面倒なことになるぞ」

「ああ、確かにその通りだ……」

「で、どうするんだ。自分達が盗聴器を仕掛けたイケナイお巡りさんですと、素直に申し出る気は無いのか？」

「……俺はまだ死ぬわけにはいかないんだ」

「……同じく」

「そんなにあの子が怖いのか？」

「お、おま、俺がどんな目に遭ったかも知らないくせに……！」

「ずっとあの子から無邪気にスコにやんと呼ばれるオレが何を知らないって？」

「悪かった」

「もう慣れた」

「そ、そうか……」

「……フクロウの名はそのまま使ってくれ。コードネームも本名もまだマズいだろう」

「そうだな……」

「さて、オレが出られるのはここまでだ。そこから先は防犯カメラがある」

「本当に徹底しているな。エレベーターも使わないあたりも」

「そうでなきゃ何年も死んだフリはできないよ」

「……いや待て、それならどうやって入ったんだ？ このマンションに入るには、どう頑張ってもあのエントランスのそれには映るだろう？」

「そりゃあ、クシビがいればどうにでもなる」

「どういう意味だそれは」

「……おいおいゼロ、本気で言っているのか？」

「そっちこそ何を言ってるんだ？」

「あの子の才能、知ってるだろ？」

「死ぬほど思い知ってるが」

「いやそ^悪ち^意ちではなくて」

「……サイキッカーの方か？」

「ああ」

「寝惚けているのかスコッチ」

「喧嘩なら買うぞ赤井」

「……お前達、正体不明の悪意の方は信じるのに、よく分からないところで頭が硬いんだな」

「は？」

「よく考えてみる赤井。お前がオレを見失ってから、あの死んだフリを決行するまで、どれだけの時間が空いていた？」

「……数十分、程度、だったはずだが」

「クシビの他に協力してくれた探偵やコスプレイヤーの子達は、あの寮にいたんだ。外にいたクシビと一緒に歩いていたわけじゃない」

「あの現場とあの子達がいた寮は、どれだけ離れていると思っっているんだ？」

「えっ」

「当時は勿論、今も車を持っていないあの子が、どうして日本全国に散らばる友人の家へ気軽に行けるのか、疑問に思ったことは無いのか？」

「何故あの子がメリーさんを実行できるのか、考えたことは？」

「おい、まさか……？」

「17人それぞれの才能全てが本物だったのに、あの子のそれだけがニセモノってこと

は無いだらう?」

*

**

命懸けのサスペンスドラマを演じ終えた私達は、こうして何とか無事に、全員揃って外の世界へ出られたわけだけど……。

「ねえカエデちゃん、見た? 今朝のニュース」

「うん……すぐ近くで殺人事件があったって……」

「爆発物騒ぎも多いよな、この辺り」

「何処の世紀末っすかね」

私達を保護している寮で見るとテレビからは、連日のように物騒なニュースが流れつぱなしで。その中には、あの学園で演じたものにも匹敵する凄惨な事件もある。数で言えばまるで比較にもならなかった。

「……僕達、かなり本気で悲惨な悲劇を演じたつもりだったけど……」

「そりゃフィクションと思われる訳だ。外の世界がこんなに物騒だったらな」

「コロシアイを積極的に促される箱庭より危険とかさー、むしろ……」
王馬くんの言葉を引き継いだクシビさんのあっけらかんとしたその一言に、誰もが頷いた。

「外の世界の方がフラグ多くね？」

プロローグ

END

With V3編

ベイカー街の亡霊

With V3

①

それは、数いる友人の中でも、特に交流が深い人物からの電話が始まりであった。

『……………そう言えばお前、フルダイブ系は体質的に無理なんだっけ……………』

「え?」

『悪い、邪魔したな』

「んん?」

プツリ

始まったらしいが既に終わっていたようだった。

名探偵コナン

ベイカー街の亡霊

with V3

EN……………

「待ってミウちゃんさっきの電話何？」

『ひうう！ いきなりボイスチャットに切り替えて話しかけんなよ！ モノクマも通知の一つくらいしろよお！』

『ボクは空気が読めるクマなのさ！』

いや、だって、ねえ。

あんな含みのある言い方をされて全く気にならないほど、私は鈍感ではない。

何より、私の方から訪ねるのではなく、彼女の方から連絡を寄越すなんてことは滅多に無いのだ。どう考えても何か大きなことがあるとしか思えなかった。

「そんで、何があったの」

『あーもう……何でそんなミヨーなところで勤が良くなるんだよ……』

「まるで普段の私が鈍いように聞こえるんだけど」

『それ本気で言ってるのか?』

何故そこでガチトーンになるのか。

『……まあいいか。お前さ、今は米花町にいるんだっけ?』

「そうだよ」

『フクロウも一緒だよな？　つーかそこにいるんだよな？』
「うん」

ボイスチャット故に、同じ室内で寛ぐ彼にも会話が丸聞こえである。ここにいますと、パソコンをいじっているスコさんが手を振り返してきた。

『フクロウはいつも通り表に出られないとして……あー……不知火、お前、○月○日って暇か？』

「私はいつだって暇だよ！」

『貧相な胸張って言うことじゃねーぞ……。で、その日に米花町のシティホールで、うちも技術提携して開発したVRゲームのイベントがあるんだが、来い』

「命令形かあ」

『どうせ暇なんだろう？　どう見ても中高生のナリだし、オレ様のコネで参加権取ればいけるかと思っただけど、ログインすらできねーんじや意味ねーしな……。ああ、何なら会場で突っ立ってるだけで良いぜ』

「かかってない雑な扱い……」

スコさん、肩震えてるのを見せてるんだけど。

『紹介状書いてやるから、取りに来い』

「あ、はい……紹介状って、招待券みたいな？」

『まあ、そんな感じか？ 会場に顔パスできるようにするもんだからな』

「……そのゲームって爆発する？」

『しねーから安心しろ』

会話を切り上げて回線を切ろうとすると、ミウちゃんから待ったと声がかかった。

『まだもう一つあったわ。突っ立つてることの他にやってほしいことが』

「え、何？」

『いやそんなに期待するなよ。マジで大したことじゃねーんだ』

親の七光りとはまさにこのこと。

園子に招待されたゲームの公開イベントのパーティ会場で出会った子供達は、名だたる著名人を親族に持ち、その権力をまるで自分のもののように振る舞うわがまま放題のガキンチョであった。

現に今も、彼らは招待客でひしめくこの会場で、サッカーボールを蹴り合うという非常識な遊びに興じていた。溜息が出る。

「ああいう子供達が親の仕事を継いで、これからの日本のリーダーになっていくんだと

思うと、未来は絶望的だな……」

「同感ね」

「ホントそれな」

「……へっ?」

あいつらの傍若無人ぶりに対してそう皮肉を言えば、灰原の他にも同意する人がいて、思わず変な声が出た。

「お姉さんだ!」

「ねーちゃんも来てたのか!」

あの生意気なガキンチョ達のせいで気分を落としていた歩美達が、その姿を認めた途端に嬉しそうに騒ぎ出した。見ればそこには、お馴染みの真っ黒な人物が、そこかしこのテーブルから集めたであろう洋菓子を山のように積んだ皿を持って立っていた。毎度のことながらいつの間接近してらんだこの人。

「あらまあ! 不知火さんも招待されていたんですか!」

「実はそうなのさ鈴木ちゃん。マカロン食べる?」

「えっ、あ、どうも、いただきます」

蘭やオツチャンにも、そして当然のようにオレや子供達にもお菓子を配る不知火さん。何と言うか、この人は相変わらずの通常運転だ。意味不明な安心感がある。

……ふと、その不知火さんの後ろをついて歩く一人の子供の姿が見えた。夜間であることや室内である故にいつものフードを外している不知火さんとは逆に、人目を避けるかのようにパーカーのフードを深くかぶった少年。さっきのガキンチョくらいの、小学生の高学年ほどに見える。何故か、やけに存在感が希薄に思えた。

「不知火さんはどなたから招待を？」

「あそこにいる人だよ。私の友達なんだ」

不知火さんの友達って……もしかしくなくてもあの17人か!? こんなところでも!?

不知火さんが示す先。そこでは、あのガキンチョ達が蹴っていたサッカーボールを一人の男性に受け止められ、説教をされるという光景があつた。

「次見かけたら許さねーからなクソガキ!!」

「うわっ、逃げろ!」

そしてガキンチョ達は、彼らを叱る男性の隣に立つ女性にも怒られていた。長い金髪をポニーテールにし、タイトのパーティドレスを着た美しい女性だが、その見た目にそぐわぬ乱暴な物言いである。

すると、その女性の視線がこちらに向いた。正確に言うと、不知火さんの方だ。

「よお不知火! ちゃんと来たんだな!」

「やつほおミウちゃん。スフレ食べる?」

「食べる」

「どうやらこの女性が不知火さんの友人らしい。唐突にお菓子を勧めてくる不知火さんのペースにもナチュラルに対応できているあたり、本物だ。」

「ミウ、つて……もしかして、イルマラボの入間さん!？」

すると、園子が表情を輝かせてそう言った。この様子からして、有名人なのか？

「ほら知らない？ あの大ヒットの目薬式コンタクトレンズを開発したその人よ!」

「ええっ、そ、そうなんですか?! ごめんなさい、知りませんでした……」

マジか!? 阿笠博士もその発想に唸らされたあのヒット商品の開発者!?

いやでも、イルマラボだなんて初耳だな。そのコンタクトレンズの販売元とも違うぞ。

「まあ、入間さん本人のことを知らなくても仕方ないわね。その権利は早々と別の会社に売っちゃってるもの」

「あの発明の権利売っちゃってるの!？」

「へー、詳しいじゃねーか。情報公開は極力避けてるんだが、オレ様も有名人になっちゃったもんだな」

見た目は文句無しの美女なのに、一人称がまさかのオレ様ときた。口調もかなり荒々しい。個性豊かなあの17人らしいと言えばそうなのかもしれない。

しかし、そうだったのか……今や全世界中の人間が使うほどの代物の権利をアツサリ手放してるところに、17人独特のよく分からない大物感がある。

「初めまして、入間さん。私、鈴木財閥の鈴木園子と申します」

「ああ！ あの気前の良いじーさんとこの！」

お互いに立場だけを知っていた園子と入間さんが改めて挨拶を交わすのを皮切りに、他のメンバーも自己紹介を交わしていく。

そして、オレが江戸川コナンだと名乗ると、入間さんはオレと視線を合わせるように屈み、マジマジと顔を見てきた。

「そうか、お前が噂の江戸川くんなんだな？」

「う、噂の？」

この人、でかい。

視線を合わそうとするとどうしても目に入ってしまう揺れるソレを、何とか意識せぬように四苦八苦しながら質問を返す。

「不知火が言ってたぜ。江戸川つつう、将来有望な探偵志望の良い子がいるってな」
不知火さん、まさかオレのこと、17人全員にそう教えてんのかよ。探偵志望はともかく、良い子って何なんだ。照れるわ。

「ミウちゃん止めたげて、江戸川くんが目の行き場にめっちゃ困ってるじゃないか」

やれやれ助かった。オレの困窮ぶりを見かねた不知火さんによって、暴力的な光景は離れていった。

「ああ!? 邪魔すんなよ! 見せてんだよ!」

「見せん痴女」

「はああん……!」

自分の腕を掴んで引つ張り上げた不知火さんに、スパーンと軽快な音を立てて背中を叩かれた入間さんが何とも言えない声を出す。そのやり取りに周りの大人達はドン引きである。

「ホントにごめんね、この人、子供の情操教育にめちやくちや悪影響を及ぼす人でさ」

「お、お氣遣いなく……」

「正直にキシヨイと言つても問題ないよ」

「も、もつと罵つてえ……!」

「そろそろ黙ろうねミウちゃん」

濃い。物凄く、濃い。あの不知火さんがマトモに見えるレベルだ。

あ、いや、元々不知火さんもちゃんとした常識人なんだけどな。発生させるアレが物凄いだだけ。

……あー、そう言えばいたなー、こういうどえらい性癖の発明家役。こんなやり取り

で思い出せてしまったのが、何故か無性に悔しい。

発明家とくれば、おそらくこの場には……。

「人間さーん！ 探しましたよ、勝手にいなくならないでください！」

「お前がおせーんだよキーボ！」

や、やっぱりいた！ ロボット役の！

人の合間を縫って現れた、人間さんにキーボと呼ばれたその人物は、この場に相応しい黒いスーツを纏っていた。しかし、その顔には多様な表情を柔軟に形成するための、金属板の接合部分の境界線が見える。

『超高校級のロボット』、キーボ。

人間そっくりのAIによる感情や姿を持っているが、正真正銘のロボットだ。

「やあこないだぶり、クラッカー食べる？」

「……嫌がらせですか不知火さん。ロボットのボクにそんなものを勧めるなんて」

「……………そ、そうだったね、ゴメン」

いくら人間そっくりであっても、食事ができないのは相変わらずらしい。ロボット差別だと無闇に騒がなくなつたのは、AIが成長したのだろうか。

「えっ？ ロボット？」

耳聴く反応したのは子供達だ。キョトンとして彼を見ている。どう見ても人間にし

か見えないのだろう。オレも事前情報が無ければ人間と見紛っていた。すると、人間さんが誇らしげに言う。

「そう！ 天才のオレ様がアップデートにアップデートを重ねた超高性能のロボットだ！ キーボつて名前なんだぜ。どうだ、人間そっくりだろ？」

「ど、どうも皆さん、初めまして」

「えええ、本当にロボットさんなの!？」

ぎこちなく挨拶するキーボさんに、子供達だけでなく灰原や蘭達も近寄り、興味津々で彼を観察した。オレもすぐ近くまで寄るが、本物の人間にしか見えない。

「触つてもいいですか？」

「ああ、構わねーぞ」

「ちよ、人間さん!？」

「それくらい許してやれよ」

製作者……ではないが、管理者の許可が下りた途端、キヤアキヤアと楽しそうにキーボさんに群がる子供達。オレもそこまでやるつもりはないが、興味なら勿論ある。男なら一度はロボットに憧れるもんだろ、なんてな。

「ねえ、ボクも触つてもいい?」

「ええ、どうぞ」

戸惑い気味ではあるが、快く差し出されたキーボさんの手に触れる。

うわ、すげえ。感触も人間の肌そのものだ。発熱具合も人肌温度。完璧じゃねえか！
「入間さんは、コクーン最大の目玉であるVRそのもの……生身の人間の意識をバーチャル世界へ同期させる技術を担当した人だから、これくらいの再現は余裕なのかもね」

「そ、それって物凄い人じゃない……!?!」

「そうよ？ 知る人ぞ知る稀代の大天才と呼ばれる発明家なんだから。……と言って
も、その本人は滅多に表舞台に出ようとしないから、知る人自体も殆どいないんだけど」
そりゃ凄いに決まってるんだろ。何せ五年前には既に似たような作ってたんだぜ。
しかももつと小型のな。当時のそれは、意識の同期先であるコンピューターはデスクゲ
ムの運営に用意されていたものだったが、意識を同期するシステム自体は彼女が一から
作ったものである。アレから五年も経った今、その全てを自前で作っていたとしてもお
かしくない。

改めて「53期の17人」の規格外っぷりを実感していると、キーボさんに群がる子
供達を眺めていた入間さんが言った。

「おっと、お前らはゲームに参加できねーんだな」

「あ……そうなんです」

「あいつらばかり、ズリーでやんの」

ゲーム参加資格であるバツジを持っていないことに気付いた彼女にそう言われ、再び気分が落ち込んでしまう三人。そんなにやりたかったのかよ。

すると、入間さんはニヤリと笑ってこう言った。

「まあ、そう萎えるんじゃないやねーよガキ共。他のセコい大人と違って、寛大なオレ様は特許を取って独占する気なんてねーからよ。商売は得意じゃねーからその辺は人任せだが、高クオリティで安く提供できる会社を探してやるから、いつか近い将来、家で遊べるゲームになるぜ」

「うわあ、本当ですか!?!」

「ビンビンに期待してな!!」

……良い人だなあ。性癖はともかく。

「そう、相手がいない寂しい奴でも、限りなくリアルな世界で好きな相手と好きなだけ楽しめる18き」

「止めろってんでしようが!!」

「つんあぁあん、もつと強くう!!」

世にも珍しい不知火さんのツツコミ（物理）が、再び入間さんの背中に炸裂した。

共犯者が己を見守る者の気を引いている隙に、彼は誰にも気付かれぬまま、ひっそりとその場から立ち去った。別の共犯者からの緊急の連絡を受信したのである。

ターゲットがついに行動を起こしそうだというその報せに逸る気持ちをおさえ、その現場だと知らされた薄暗い現場へと向かう。その途中、向こう側から、ただならぬ緊張感を纏ったターゲットが早足で歩いてくるのが見えた。

慌てた彼は咄嗟に姿を消す。それとほぼ同時に、再び共犯者からの連絡を受信した。……協力者が、ターゲットの凶刃に倒れた、という報せであった。

素早く歯を噛み鳴らし、金属探知機には引つかからないインカムのスイッチを入れ
る。

「彼が……刺された、そうです。至急救急車の手配をお願いします……！」

その現場となつてしまった部屋に入りながら、彼は短く要件を伝えた。そこには、椅子に力無く凭れ掛かり、胸から流血している協力者の姿があった。

最悪の事態を想定し、緊急時の備えはしてある。それでも緊張や恐怖からくる震えは収まらない。

偽装死薬。本来は死んだフリに使う薬物だ。しかし、強制的かつ急速に代謝活動を生

命維持に必要な最低限にまで低下させる効果は、自然に放置して死にゆくよりも早く、エネルギーの消費が極限に少ない状態へ移行させるものである。その究極の省エネ状態を長時間持続させるため、理論上においては、死に瀕した人間に対する一時的な延命効果が副次的に期待できるものでもあった。言わば、少なくとも今の状態より更に死に近い危険な状態で、無理やり生き長らえさせる薬である。……とは言え、それを実証する機会はそうそうあるワケも無く。

まさか本当に、ぶつつけ本番でこれを使う事態になるとは。

「そん、な……き、み……は……」

「今は喋らないでください」

緊急時に使うものとして液体状にしたそれを入れた特注の注射器を、血管が集中している首に刺す。本当に効くかどうか分からない。だが、それに賭けるしかなかった。

めいっばいの薬を注入したそれを引き抜くと、その痕は見事に残らなかつた。かの発明家が点滴を多用する友人に頼まれて作った特注の針は、こんなところでも役に立った。

やがてじきに、瀕死の協力者の意識は沈む。それが身体的な限界によるものか、はたまた薬の効果によるものかは分からない。あとは運を天に任せるしかなかった。

と、その時である。その部屋の扉が外からノックされる音が鳴った。

「主任、工藤先生がお会いしたいそうです」

あ、まずい。いや、この事態が早々に第三者に知られるのは喜ばしいのだが、自分はまだここにいる今に限っては都合が悪かった。

彼は咄嗟に、扉が開いた場合にその陰となる入り口の横に身を潜めた。

「……主任？ 失礼します」

返事が無いことを訝しんだ従業員が、ついに扉を開いた。

「主任!?! どうしたんです、主任!?!」

従業員が扉を開いてすぐに目に飛び込んできた光景に驚いている隙に、彼は扉の影から走り出し、部屋から一目散に出ていった。その姿は、足音に気が付いて振り向いた従業員に一瞬目撃されていた。

結論から言えばその協力者の彼は、非常に危うい状態ではあったものの、いち早く駆けつけた救急車に運ばれた先の病院で処置を受け、何とか一命を取り留めたようだ。

『ミウちゃああああん！ コロシアイが起きるだなんて聞いてないよお!!』

「うっせーな！ オレ様も本気で起きるとは思ってたつーの！」

『本気でつてことは多少は予想してたのかよお』

「おう、まあな」

『こんにやろう、公衆電話なんて久しぶりに使ったぞ、携帯電話没収されてるもんだから』

「いやー、お前を呼んでホントに正解だったぜ。この場から自由に出入りできるのお前ぐらいいだけだもんな。流石はオレ様」

『そこは私を褒めろ』

「で、だ。オレ様が護衛を頼んでたあいつは見つかったのか？」

『うあああそれだよそれ！ いつの間にか忽然といなくなつてんだけど彼!!』

「あいつを見守るだけの簡単なお仕事だつてのに、何アツサリと見失つてんだお前は」

『ミウちゃんだろ!!? 彼に何をした!!? 全然見つけれないんだけど!!!』

「そうか……よし、その様子だと成功か」

『何が!?!』

「実は対不知火仕様の試運転も兼ねてんだ」

『何で護衛対象に私の対策させてんだ!!?!』

「追跡するだけじゃなくて、それを撒く方も考えるべきだと思つてな。完成できたら他

の連中も隠密活動がしやすくなる」

『このタイミングに試さなくてもいいじゃん!』

「お前がそこまで必死になるってことは、十分効果アリってことだ。流石オレ様天才」

『も、も……もう私帰っていい……? どうせ彼ならほつといても平気でしょ……??』

「アホか。万が一、億が一のことも考えて、最後まで護衛しろ」

『そもそも彼を護衛するという考えそのものが間違ってるような……』

「つべこべ言わずにあいつを捜せ。これより報酬有りの正式な依頼とする」

『ふええ……』

とにかく捜せと、ミウちゃんからの強引で理不尽な依頼に泣く泣く了承し、一向に行方が掴めぬ彼を捜して会場中を彷徨っていた時のことである。いよいよあの大仰なゲームが始まろうというその直前に、それは聞こえてきた。

『ボク達の名前は(モ)ノ(クマ)アズ・アーク! ゲームはもう止められないよ! 体感シミュレーションゲームコクーンは、ボク達が仕切らせてもらいまーす!』

照明が落ちた場内に、これでもかと底抜けに明るく生き生きとした元学園長の電子音

声が大きく響き渡った。

副音声まで自然に聞こえた気がするほどデジャヴがあり過ぎるその展開に叫ばずにいられた私はそろそろ賞賛されるべきだと思う。

「……ねえコレ何事？」

『気にすんな』

呆然として間抜けた声でそう呟けば、スイッチを入れっぱなしにしたインカムからは何の動揺もしていないミウちゃんのシレッツとした声か。

ああ、今回はキミが「黒幕」なのね。

察した私は探索を続行した。現実逃避とも言う。ホント彼何処行っちゃったんだろ
うねえ……。

こうして、とんでもないクマ達も乗せちゃまった箱舟は、行く先の見えぬミステリーーツ
アーにドンブラコと出航してしまっただのであった。

ベイカー街の亡霊 with V3 ②

コクーン開発者である樫村が殺害されかけた事件を解く手がかりが、コクーンにあるかもしれない。更には従業員が事件の現場で目撃したという、重要参考人の少年も参加しているかもしれない、と。

そう判断した私達は、ゲームの中止をシンドラージャ社長に訴えるべく、コントロールルームに向かった。

ところがその交渉中、起動したばかりのコクーンが、突然制御不能になったのである。『ボク達の名前はノアズ・アーク！ ゲームはもう止められないよ！ 体感シミュレーションゲームコクーンは、このボク達が仕切らせてもらいまーす！』

その声が会場に響いた瞬間、私は全身の血が凍りつきそうな感覚に襲われた。

この音声。間違いない。忘れられるわけがない。何せ、かつて私自身が好んで視聴していた、あの……!!

「ノ、ノアズ・アーク、だと……!?!」

警部達の顔色も悪い。やはり私個人の記憶だけに収まらなかった。

ノアズ・アーク。二年前にシンドラー社長の養子であるヒロキ・サワダによって作られた、一年で人間の五年分成長するという人工知能だ。その音声は、そう名乗った。

だが、違う。この声と口調は、全く別の人工知能が持つものだ。

「ノアズ・アーク、子供達のゲームを占拠してどうするつもりだ」

表面上だけは平静を装い、内心では戦々恐々として、マイクを通じノアズ・アークと名乗るそれに訊ねる。

『占拠だなんてクマ聞きが悪いなあー。ボク達は子供達のために、このゲームをうんと盛り上げるように仕切るだけさ！』

そのついでに、日本という国のリセットをするだけでね！』

ああ、もう。嫌な予感しかしない。

無邪気で明るい声の裏にとてつもない悪意を秘めたその声は、あの人工頭脳そのものであった。

『さあ、コクーン初体験の皆！日本の輝かしい未来を担う子供達よ！ボク達と一緒に、楽しい楽しいゲームをしよう！』

ゲーム内に取り込まれた子供達に向かって放たれたであろうその声は、私達にはただの絶望しかもたらさなかった。

瀕死の榎村さんがキーボードに残したJ T Rの文字……切り裂きジャック・ザ・リッパージャケットを暗示するメッセージ。

その意味が分かるかもしれないと、阿笠博士のお土産としてもらったバッジを使って参加した体感シミュレーションゲームのコクーン。それによつて感覚の全てを支配された後にやつてきた、仮想空間。

他の参加者の子供達も集合しているビジョンが見える中、その床が一部壇上のようにせり上がってきたかと思えば、その影からボヨンと飛び出てきた白黒のマスコットに、薄れていた当時の記憶がまざまざと呼び起こされた。

右半身は白く、至つて無害そうな表情。しかし左半身は真っ黒で、釣り上がるその目は赤く凶悪に光り、上弦の三日月のような口には鋭い牙が並んでいる。

何で、こいつが、ここに。

「ゲームに参加してくれた良い子の皆ー！　こーんにーちはー！　ボクの名前はノアズ・アークだよ、よろしくねー！」

嘘つけえ！

何がノアズ・アークだ！

とんでもねえクマが紛れ込んでんじやねえか！

というツツコミはギリギリで止められた。

周りはオレと違って、五年前に起きた事件のことをマトモに覚えていない年齢である。真正正銘の子供ばかり。余計な不安を煽るような真似はできない。現にあのクマの挨拶に無邪気な笑顔で応じている。

その胡散臭さに気付いているのは、比較的年齢が高いあの生意気なガキンチョ達と、あの事件の記憶がまだ残っている十代後半の奴らくらいで……。

「あれ……？　なんか、あのクマ、何かで見たことあるような……」

「きつと何処かのゆるキャラだよ!!!」

「そっかあ」

許せ蘭、今は誤魔化されてくれ。ゆるキャラなんてそんな可愛いものじゃないのはオレがよく知ってるが、そう例えるしか無かった。

しかし、その直後に灰原からの視線が突き刺さった。そうだ、こっちも中身は十代後半だった。空気の読める奴で良かったと思うしかない。

「さーて、それでは早速ゲームを始めようか！　今から五つのコースのデモ映像を流すから、自分の遊びたい世界を選んでね」。

と、その前に、一つだけ注意して欲しいことがあるんだ」
うわあ、嫌な予感しかしねえ。

「これは単純なテレビゲームじゃない。手元のコントローラーを弄るだけでクリアできるような、生半可なゲームじゃないんだ。だから、本当に、一生懸命に取り組んでほしいのさ。」

それこそ、全身全霊を賭けて……キミ達の命を賭けるくらいの覚悟でね……!」

ここまで嬉しくない予想の的中もないだろう。もうあのクマが出てきたあたりでそんな気はしていた。灰原が眉間を押さえたのが視界の端に見えた。

「このゲームでは、全員がゲームオーバーになっってしまうと、現実世界には戻れなくなっちゃうんだ。でも、たった一人でもゴールに辿り着けばキミ達の勝ち! それまでにゲームオーバーになっっちゃった子も、全員目覚めて現実世界に戻れるよ!」

でも……?」

もし全員がゲームオーバーになっっちゃった場合は、キミ達の頭に嵌めたヘッドギアから特殊な電磁波が出て、とっておきのおしおきが……うぷぷ、その時のお楽しみってやつだねえ!」

ああ、なるほどな。プレイヤー同士で争わせるのではなく、ゲームマスター対プレイヤーという図で、何が何でも生き残れ、というルールか。コロシアイを促さないのは幼

子供相手だからなのか知らないが、どちらにせよサバイバルであるのは変わらない。
……あの人達も、こんな気持ちだったのかな。

「日本の未来を担うキミ達が、この過酷なゲームを経てどうなっちゃうのか……つまり、これは日本のリセットを賭けた勝負ってことさ！」

壇上の白黒クマは、楽しそうに両腕を広げてそう言った。

「……ん？ あーはいはい、現実世界の方で質問があつたから、答えてあげるねー。

日本のリセットというのは、今のどーしよーもないこの国を一度綺麗にすることなのさ！ 蛙の子は蛙ってコトワザ、知ってる？ 汚れた政治家の子供はそういう政治家にしかならないし、金儲けしか考えない医者の子供もやっぱりそういう医者にしかならない。そういうことなんだよ。

だーかーら、今ここにいる可能性の塊であるオタマジヤクシ達が、そういうしよーもないカエルになっちゃう前に、ボク達がどうにかしてあげようってことなのさ！」

ふーん、確かにただの見世物にされるよりかはマシ……なんて思わないからな！

いくらそんな大義名分を掲げようが、結局お前らがデスゲームをしたいだけにか思えないつっーの!!

モノクマはまだ外部からの声を聞いているようで、それを煽るように不気味な笑みを浮かべる。

「…………う。ぷ。ぷ。う。ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。命を弄ぶ、権利だつて？ 面白いことを言うねえ！ アレから五年も経つたけど、未だに世界は何一つ変わっていないよね？ やつぱり皆こいうのが大好きなんだよ！ 他にもないキミ達自身が望んだことなんだよ！ 需要さえあれば人権だろうが何だろうが関係無いよね！ だってキミ達は、自分の楽しみや保身や利益のために他人を陥れることになろうが、なーんとも思わないでしょ？ その犠牲者が何の罪の無い子供であつてもね！ なのに、今回その犠牲者になりかねないのが自分の子供でついで、どうしてそんなに怒るのかなあ？ 記憶でも消せば良かったのかなあ？」

ああ、これはただのAIによるテロではない。明らかにあのデスゲーム事件のことを意識している奴が背後にいる。もしかしなくても、あの17人の……せめてオレの知っている人達ではないことを祈るばかりだ。

現実世界の方でどんなことを言われたのかは分からないが、彼らにとつての地雷であるのは間違いない。モノクマの無邪気な口調の中に、ハッキリとした悪意と敵意が感じられた。

「……まあ、それはさておきまして、お待ちせ皆、ゲームを始めようか！ 出ておいで、我が子達よ！」

すると、オレ達を囲むように現れている五つのゲート前に、それぞれ一体ずつ、カラ

フルな小さなクマが現れた。

おはつくまー、と気の抜ける挨拶と共に現れたそいつらにも見覚えがあった。あー、あいつらもかー……。

一匹目の半白半赤のクマがゲート前に立ち、デモ映像を流しながら説明し始めた。

「やあ、オイラはタロウだよ。

まず一つ目のこのステージのテーマはヴァイキング……あ、食べ放題じゃないよ、海賊のことだよ。

キミ達はそのヴァイキングとなり、世界の七つの海を舞台にして、強い意志と勇気を武器に大冒険をするんだ。いざという時の決断力が大事かもね」

すると次は、エレキギターを持った半白半青のクマが隣のゲーム前に立つ。

「ヘルイエー！ ミーはキッドだけ、よろしくなガキども！

二つ目のステージテーマは、パリ・ダカール・ラリー！ モータースポーツのイベントだな！

キサマラは世界の名ドライバーに混じってこれに参加して、優勝を目指してもらおう！
臨機応変に立ち回れる痺れるようなドライブレクを期待しているぜ！」

今度は眼鏡をかけた半白半黄色のクマが。

「ワイは……あー、スケと呼んどくれや。

三つ目のステージのテーマはコロセウムや。ガチバトルがメインのステージやな。

古代ローマのグラディエーターと戦うんや。腕っ節だけやのーて、如何にして優秀な装備を手に入れるかも肝やで」

四つ目のゲート前には、半白半桃色の少女のような雰囲気のカマが現れた。

「こんにちは、アタイはフアニーよ。

四つ目のステージのテーマはソロモンの秘宝。お宝探しね！

キサマラにはトレジャーハンターになってもらって、世界各地に隠されたソロモンの秘宝を探してもらおうわ。機転と知恵が試されるわね」

そして、最後となる五つ目のゲート前に現れたのは、メカチックな半白半緑のカマだった。

「……オラは、ダム。よろしく。

五つ目のステージテーマは、オールド・タイム・ロンドン。今から約百年前のロンドンが舞台だよ。

キサマラには、1888年のロンドンで、現実では迷宮入りした連続殺人事件の犯人、ジャック・ザ・リップパーを捕まえてもらうよ。スリルとサスペンスを存分に味わってね」

ジャック・ザ・リップパー……やはり、あの事件の手がかりがここに。

いや、それ以前の問題も大き過ぎるんだけどな。あのクマとかそのクマとか、このク

マとか。

クリアできなければ現実の世界に戻れない。普通のゲームにはあり得ぬ過酷なルールに早々に挫け、自信を無くした子供達が次々に自分の生まれを嘆き出す。

そんな空気を払拭するように、蘭が明るい声を出した。

「皆、元気を出して！ 勝負をする前から負けちゃダメ！」

「そうだよ！ たった一人でもゴールにたどり着けば良いんだから！」

オレもその言葉に同意すると、なんと意外なことに、ゲート前にいるカラフルなクマ達も口々に賛同し始めたのだ。

「そうそう、やる前に諦めるより、やってから諦める方がまだマシだよ」

「ちよ、タロウ、その言い方はアカンて」

「これだから温室育ちの軟弱なボンボンは！ もっと根性見せやがれ!!」

「何も一人でクリアしろと言ってるわけじゃないのよ？ 皆で協力し合えば、何だってできるわ！」

「助け合いが、鍵だよ」

素直に驚いた。まさか、あいつらから激励の言葉をもらうなんて。

そして、奴らの親玉でもある白黒のクマも楽しそうに言った。

「流石は我が子達、良いこと言うねえ！ その通り、このゲームは助け合いが重要なん

だ。お互いの主張や個性を認め合って、如何に皆で協力し合えるか！ 頼もしいお父さんもお母さんも助けにこれないんだから、キミ達だけの力で頑張るしかないんだよ！」
……何となく、だが。

あいつらの言う日本のリセットとやらの本当の目的が、薄っすら分かった気がする。同時に、やっぱりあの人達らしいなど、ほんの少しだけ安心した。

これはただのデスゲームじゃない。

その発言で、子供ながらにゲームマスターのクマ達に敵意が無いことを察したのか、他の子供達も意を決したようにそれぞれ好きなステージへと向かっていく。

「それぞれのステージにはキミ達の仲間となるお助けキャラもいるから、頼りにすると良いよ。それではいいよ、ゲームスタートと参りましょうか！」

「うええ、見つからないよお、本当に何処行っちゃったんだよお、学園長の声もハイテンションでうるさいし散々だよお……」

自分の子供がデスゲームに巻き込まれたと知った一部の保護者がコクーンから我が子を出そうと近づくが、放電で吹っ飛ばされてしまった。

『おーっと、今近づくと危ないよ！ 作動中のコクーンには、くれぐれもお手を触れぬようにお願ひいたします！ 心配ご無用！ 皆様の大事な大事なお子さんは、ボク達が責任をもって、大切にお預かりいたしますーす！』

「な……何だこのふざけたコンピューターは!？」

声こそ明るいものだが、わざわざ不安を煽るような意味深な言葉で我々に対し挑発を続けるノアズ・アークに、毛利さんが激昂する。

当然だ。彼もまた、自分の無二の子供を、強引に命懸けのゲームに参加させられたのだから。

一方、私と同じくあの事件の存在を察したらしい目暮警部達もその顔を青くさせている。

阿笠博士によれば、コクーンには子供50人の脳を破壊するには十分なエネルギーが蓄積されているという。

奴らは、本気だ。

「……しかし、シンドライバー社長。ヒロキ君が作り上げた人工知能が、何故こんな暴走を

？」

ひとまず、奴らが表向きに名を借りている人工知能について、目暮警部が訊ねる。その問いに言い淀むシンドラ社長に代わり、私が答えた。

……今は亡きヒロキ君が、人工知能を作ろうとした動機である、個性を認めぬ窮屈な日本の現状。そんな彼が作り、世に逃した人工知能であるノアズ・アークが見つけた、その問題を解決する具体案……。

日本のあらゆる要人の次世代達が集う今回の発表会は、それを実行するにあたって絶好の機会であった、と。

「工藤先生は、どうしてそんなことまで知っているんです？」

事情を詳しく知っていた私に驚いた白鳥刑事からのその質問に、私と榎村が探偵と依頼者という関係であったことを明かした。

依頼の内容は、ヒロキ君の投身自殺の再調査。幼い頃に彼と離れ離れになった父親である榎村は、何が彼をそこまで追い詰めたのかを知りたがったのだ。何故彼は、あんな形で死ななければならなかったのかと……。

すると、そこで毛利さんが苦々しい表情で言う。

「しかし、工藤先生……このノアズ・アーク、本当にそのヒロキ君が作ったものなんですか？」

「……と、言いますと?」

「いや、どうもこの声、嫌に覚えがあるんですよ。五年前、世間を大騒ぎさせたあの事件の……」

「も、毛利君も覚えているのかね?」

目暮警部もギョツとしたように目を剥いた。

「当然ですよ! 自分の子供が巻き込まれていたらと考えたら、あれ以上に恐ろしい事件もそうそう無いじゃないですか!」

あのダンガンロンパ事件は!

毛利さんが吐き捨てるように言ったその単語に、シンドラー社長が即座に反応した。

「ダンガンロンパ事件だ?! あの忌まわしい事件とこのノアズ・アークに、一体何の関係があると言うんだ!」

「覚えてないんですか?! あの人を馬鹿にしきった小憎たらしい口調! 散々テレビのニュースで流れていたでしょう!」

「言われてみれば……確かに……」

その通り。今コクーンの制御権を乗っ取っているノアズ・アークの声は、あのダンガンロンパ事件のデスゲームで、ゲームマスターを務めていた人工知能……モノクマの声、そのものなのである。

「しかし、何故奴がここに!? あの事件の主犯だったチームダングロンパは、もう解体されたのでは!？」

「チーム自体は確かに解体されたのだが……ネット上へ逃れたモノクマの人工知能は、未だにその行方が掴めていない」

「まさか、ノアズ・アークは……!?!？」

「逃亡中に出くわしたモノクマに乗っ取られたか、もしくは共感して共謀しているか……。ノアズ・アークを名乗るモノクマがボク達と自称しているあたり、おそらく後者であるかと……」

「さ、最悪じゃないですか!?!？」

自らの創造主、ヒロキ君の望みである日本の再生を目的とするノアズ・アーク。そして、かつて絶望を与えるためにコロシアイを促すようプログラムされた凶悪なモノクマ。

数奇にも出会ってしまった彼らの思考と行動は、最悪な形で合致してしまった。日本の再生と称して幼い次世代達にデスゲームを演じさせ、我々大人達に絶望を与えるという形で。

現に、あの事件を覚えている各界の要人でもある親達が悲痛な叫びを上げている。自分達が我関せずを貫いて放置してきたものが、今になって自分の子供に返ってきている

ことを知ったのだ。

「ならば、このノアズ・アークの暴走は、あの事件の生き残りの仕業ではないのか!？」

シンドラー社長が憤慨したように言う。

彼らが自分達の生き死を見世物にした世の中を恨んでいない筈がない。この暴走は、その恨みを晴らすためのテロ行為なのでは、と。当然の推察だ。

ところが、警部達はその言葉に、非常に困ったような表情を見せた。

「い、いやしかし、彼らが犯人であると決めつけるには、まだ早いかと……」

「何故だ!？」 姿をくらましてから今もどこかで生きている奴らしか考えられないだろう
！」

……シンドラー社長の言うことも尤もなのだが、何故そこまでの剣幕で彼らを犯人扱
いするのだろうか。それに、警部達が彼らを庇う理由もよく分からない。

これは、もしかや……?」

「目暮警部、少々よろしいですか?」

「何だね?」

気になることがあり、目暮警部だけを連れてコントロールルームから退出する。

そして、周りに誰もいないことを確認し、ひそめた声でこう話した。

「……もしかや、あの事件の生き残り達は、現在のDICEではありませんか?」

「なっ、何故それを……っ?!」

驚き過ぎて、つい動揺を出してしまった警部が、慌てて口をおさえた。恐らく警察関係者しか知らない極秘の情報であったのだろう。

しかし、その白状にも等しい動作が無くても、既に私の中では疑惑は確信になっていた。

「……それは、あなたの推理ですか? 工藤先生」

「ええ。私もDICEには個人的な興味がありまして、独自に情報を収集していたのですよ」

「ほう……」

呆れたように、観念したように、その体の緊張を解す目暮警部。

「彼らの活動で最大の特徴とも言える、人を生かそうとする行動。その手段の中に、非常にクオリティの高い死んだフリも含まれている……そうですよね?」

「……ああ、間違いない。人質にされた人間を眠らせて無残な死体に見せかける特殊メイクを施し、犯人グループを大パニックに陥らせて占拠場所から自ら飛び出させたこともあるくらいだから……」

「勿論知っていますとも! この前のアメリカで起きた銀行立て籠もり事件ですよね!」

おっと、少々テンションが上がってしまった。彼らが絡む話は愉快過ぎるのだ。
しかし。ああ、やはり、そうだったのか。

「警部、先程、私と樫村がヒロキ君の自殺について調べていたと言いましたが、そのことについて、非常に興味深いことが分かりまして」

「それは、一体……？」

「警察の安置所から、自殺したヒロキ君の遺体が消失していた、という話ですよ」

バイカー街の亡霊 with V3 ③

53作目のダンガンロンパの、二回目のストーリーがいよいよ終わりそうになった時。ようやくオレ様達を救助しにきた捜査官達が現れたというタイミングで、オレ様はマザーモノクマからあいつらのAIをネット上へ逃がした。

既にすっかりこちらの共犯となったモノクマ達だが、そのまま放置しとけばデリートは免れないだろう。アレだけ高度な思考ができる完全自律AIは、消すにはあまりにも勿体無いと思っただのだ。

その後、日本の警察に保護されたものの、相変わらずの軟禁生活に嫌気が差したオレ様達はフクロウの指南を受け、不知火と一緒に世界中あらゆる場所を飛び回り、あらゆる電子機器からオレ様達に関する情報全てを削除してから、あの寮から姿をくらました。

……あの夜は本当に大変だった。オレ様達に関する情報を狙い撃ちするウイルスをネットに流すだけでは足りず、セキュリティが厳しい捜査機関のコンピューターや、一

般のネットから切り離された情報媒体にデータを保存している奴も当然いるからな。それらからも一つ残らず消し去るには、直接その場に行ける不知火の才能が無ければ到底不可能だった。事前にデータ削除特化のプログラムを作っておいて本当に助かった。流星は天才のオレ様。

その脱出劇から数年後。ようやく身の回りが落ち着いてきた頃に、ネット上を漂流してたモノクマ達と落ち合った。それを知らせた王馬から才卒線開発を頼まれたのほぼ同時期だ。

それは、モノクマ達のAIを、通話媒体にする実験の最中だった。今から大体二年前のことだ。

モノクマに対して見知らぬプログラムが接触を仕掛けてきたのだ。

H e i p H i r o k i
ヒロキを助けて。

その見知らぬプログラムは、そう訴えてきた。

いや誰だよヒロキって。そんなツツコミもあつたが、そのプログラムはひたすら同じメッセージを送り続けてくる。

これは只事ではないと察したオレ様は、すぐにモノクマを通じてこちら側からそのプログラムへ接触を図った。

しかし延々と、助けて、助けて、とだけしか発信してこない。まるで覚えたての単語

を繰り返す赤ん坊のようなプログラムだった。

これじゃ話にならないと判断したオレ様は、そのプログラムにオレ様の言葉を音声で復唱するように命じ、パソコンに繋がたマイクに向かって声を張り上げた。

幸いにもその声はギリギリでアイツに届いたのだが、事態は変わらず切迫していた。その赤ん坊のプログラムを作ったソイツは、それを回線に流したことを知られた今となつては、どう足掻いても自分は殺されると、すっかり諦めモードで嘆くではないか。

そこで大天才のオレ様はすぐにモノクマを使い、才卒線による初のボイスチャットを試みた。

「不知火！ 即アメリカのシンドラーカーパニーの本社ビルに飛んで、屋上にいるガキを攫ってこい！」

『ファッ!?!』

「あと白銀、そのガキの飛び降り死体役頼むわ」

『なんて!?!』

『入間さーん……なーんかマズイ流れだよ、ボク達が何もしないうちにポロポロ脱落者が出まくってただけだ』

『みてーだな……つたく、難易度の対象年齢よりずっと小せえガキばつか集めやがって』
『確か、募集がかけられたのは高校生までの子供だっけ？ 殆どが幼稚園生か小学生だよ？』

『オレ様もガキしか見なかったわ……』

『困ったなあ……ボク達が自然な形で助けられるのにも限界があるってのに。それより手がかかる子ばかりじゃあ、ねえ』

『今どんな状況だ？』

『下手したら例の探偵君がいるロンドンステージにしか生き残りがいなくなっちゃいそうだよ……あ、また一人脱落しちゃった』

『あーちくしよー、ゲームオーバーになるとしても早過ぎんぞ……！』

『ま、その時はその時で、ボク達がどうにかするからさー！ その時のための言い訳も考えてあるしね！ どうにかして時間稼ぎしてみるよ！』

『声が弾んでんぞテメー』

『いやー！ 久しぶりにこういうことするのが楽しくって楽しくって！』

「やり過ぎんなよ頼むから」

『分かってるってー！ いやでも、これ、かなり調整が難しいなあ……』

「どうしてだ？」

『実はさー、ロンドンステージには見た目と中身がまるでチグハグな子が二人も混じってるんだよねー。難易度が一番高いから助けるべきか、それとも彼らの頭脳を見込んで邪魔するべきか……ちよーつと判断に困ってて』

「何だそりゃ、不知火みてーな奴だな」

レストレード警部という人物名から、このゲームの設定が現実と小説を混ぜたものであると知ったオレ達は、おそらくこのステージのお助けキャラであろうシャーロック・ホームズを訪ねにベイカーストリートへ向かっていた。

その道中のことである。

「……工藤君、さつきからどういいうことなの？」

「オレにも分かんねーよ……」

いや本当にワケが分からん。

このゲームに乗っ取った白黒のクマ、モノクマには、表向きにはオレ達にデスゲームをさせようと演じているが、別の思惑があるようにも感じられた。現にあいつらからの妨害らしい妨害と言え、阿笠博士との交信を切られた程度のも。脅しのようなものも受けたが、それ以上は何も無かった。

無かった。つまり、過去形である。

「……おい、アイツ手招きしてるぞ」

成り行きでオレ達と同行することになった生意気なガキンチョの一人である諸星が、どうしたら良いのか全く分からないという表情で、灰原が見ている方向を指差した。そこにはベイカーズトリート行きとデカデカと看板のかかった大きな馬車と、その御者に扮したあの白黒クマがいた。

「やっぱりどう見ても罠だよね……」

「そうとしか思えねえよ……」

あ、四つん這いに崩れ落ちた。

「ほっときましよう」

「そうだね」

そして、そのあからさまな馬車を無視し、俺達は歩みを進める。

実は、さつきからずつと似たようなことが起きているのだ。

この百年前のロンドンの風景にはどう解釈しても馴染まない白黒クマがオレ達の行く先に現れ、胡散臭い罨にしか見えない助けをチラつかせてくる。

あいつらが何をしたいのか、いよいよ本格的に分からなくなってきた。こうやってオレを混乱させることが目的であれば見事だと思う。

「……あのクマ、本当に私達を殺す気あるの……？」

「どうだろうな……少なくとも直接殺しに来るような奴じゃねえから、あの馬車も罨じゃねえんだらうけど……」

それでも罨にしか思えなかった。何せあいつの発言含め、やることなすこと、その全ての語尾にカッコで囲まれた意味深という単語が付くような奴だ。何をしようと迂闊に信じられない。さつきの馬車だってベイカーストリート行き（意味深）だ。何処に連れて行かれるやら分かったもんじゃやないぞ、多分。

その後も奴らの奇行は続き、アコーデオンを弾き不吉な歌を歌う男の後ろに並んだ楽隊に扮した子グマ達を見つけた時には、流星にいい加減にしろとツツコミを入れてしまった。

あいつらが何故あんな真似をしたのかを知るのは、全てが終わってからであった。

「いない……いないよお……何処を捜しても見つからないよお……うう……」

現実世界からプレイヤーへの通信も妨害されることが分かった今、技術者の彼にできることは、せめてあの機械に囚われた子供達への被害を抑えられるように必死に考えを巡らすことだけであった。

ゲーム開始早々、次々に脱落していく参加者の子供達。脱落者の搭乗しているコクーンが床下へ収納されていく光景に齒噛みしつつ、コクーンの状態を表示している画面を見ていた彼は、ふと、あることに気が付いた。

ゲームから脱落したはずの子供が乗るコクーンのVR機能が、停止していない。

同時に、全員がゲームオーバーした暁には子供達の脳を破壊するであろう高圧のエネルギーが、それが嘘であるかのように安全な値にまで低くなっている。そのエネルギー量で問題無くコクーンが作動しているため、おそらくこれが本来の状態なのだと思う。

しかし、ゲーム継続者が乗るコクーンに集約されたエネルギー値は相変わらず高いまま。それどころか、ゲーム開始時よりも僅かに高くなっているではないか。

注意深く観察すれば、脱落者が増えるたびにその値が徐々に高くなっていることが分かった。どうやら脱落者のコクーンから減らされた分のエネルギーの一部が、ゲームを続行している者のコクーンに回されているらしい。

これはおかしい。参加者同士の意識を同じ仮想空間に存在させるためのネットワークなら存在するが、エネルギーを共有する配線があるのは不自然だ。

通常であれば、それぞれの機体が供給源から直接エネルギーを個別に得られるようにする。そうでなければ、一部の機体の不具合——漏電等がそのまま全機体に影響しかない。人の脳機能に作用し、ともすれば命にも関わるゲームの、その作動に必要不可欠であるエネルギーなのだから当たり前だ。

脱落者が未だにVR状態を継続している意味は勿論のこと、その際に減った分のエネルギーの一部がゲーム継続者のコクーンに回される仕組みの意味など、尚更分らない。

だがもし、脱落者のコクーンが完全に停止して、それに巡らされていた膨大なエネルギーが丸ごと、同じく膨大なエネルギーを蓄積したままのゲーム継続者のコクーンに回されていたら……？

恐ろしい可能性が彼の頭によぎった、その時である。現段階でノアズ・アーク暴走の最も有力な容疑者であるダンガンロンパ事件の生き残りを捜索していた刑事達と工藤優作が、コントロールルームに戻ってきた。

「はああん！ どうせ手荒くするならもつと激しくう……!!」

「人間さんに乱暴しないでください！ 興奮するだけですよ！」

「な、何なんですかこの人……!?!」

白鳥刑事が腕を掴んで強引に連れてきたのはただの変態……ではなく、コクーンの開発に携わりながら、そのプログラム内に悪質な人工知能を紛れ込ませた容疑者である入間美兎と、その助手であるロボットのキーボであった。

「貴様らか、このテロの主犯は！ 何ということをしてくれた！」

彼女達を見た途端、そう声を荒げたトマス・シンドラー。

「ああ？ 何だよシャチャョーさん、オレ様が何をしたってんだ？」

「惚けるな！ この騒ぎは貴様が起こしたのだろう！」

「……おーおー、随分と焦ってんなあ、何か都合の悪いことでも起きたのか？ まるで口

止めに失敗したかのようにだぜ……?」

「……この……!! 技術力だけの、下請け工場の際で……!」

さつきまでの変態の顔は何処へやら、入間美兎は不敵な笑みでそう返した。思わず掴

みかかりそうになるトマス・シンドラーを、彼らの間に入った工藤優作がやんわりと止める。

「落ち着いてください、シンドラー社長。確かに彼女は疑わしいですが、その証拠は何一つ無いのですよ」

「いやしかし、他でもないあなたが言ったのでしよう!?! コクーン開発チームの中に、あの事件の生き残りの発明家と同姓同名の人物がいると!」

「……ええ、言いました。しかし、ただの偶然という可能性もあります。結論を急いではいけません」

「……っ」

冷静な口調で宥める工藤優作に、トマス・シンドラーは悔しげに口を噤んだ。

「それで、人間さん。本当にこのテロとは関わっていないのですかね?」

「テロだど!?! あつたりめーだろ!?! 何でこのオレ様が見ず知らずのガキどもを殺さなきゃいけないんだよ!」

心底憤慨したように反論する人間美兔。感情的に言い放ったその言葉には、何も作爲が無いように思えた。

「それはご尤も……しかし、今のところこの件については何より証拠が足りません。ひとまずここは、樫村忠明の殺害未遂事件の方から手を付けましょうか」

「うむ、そうするしかあるまい」

工藤優作の提案に目暮警部が頷く。するとそのタイミングで、彼の部下である千葉刑事がコントロールルームにやってきた。

「警部、先程確認した防犯カメラの映像に、従業員の証言とよく似たパーカーの少年の姿が確認できました。現在パーティ会場を出た廊下を歩いているようです」

「では、彼はゲームの参加者ではなかったのか」

「そのようですね」

ホッと一安心の息を吐く面々。

すると、事情をそこまで知らされていないトマス・シンドラーが訊ねた。

「目撃情報？ あの事件に、目撃者がいたのか？」

「いえ、目撃者と言うよりは……瀕死の榎村さんを発見した従業員が、その現場から逃げ去る少年を見ていたのです」

「少年だと？」

「はい。10歳から12歳くらいの、男の子だったそうです」

「……！」

それを聞いたトマス・シンドラーの顔が僅かに強張ったのを、工藤優作は見逃さなかつた。

「……そうか……その少年が、彼を殺害しかけた犯人を知っているのであれば……私も、その子の捜索に協力しよう」

「本当ですか!」

「ああ、手を尽くしてその子を見つけなければ」

自分のボディガード達にもその手配を言うと云って、トマス・シンドラーはコントロールルームから退室していった。そして、我々も事件の手がかりを探さねばと、刑事や工藤優作達も出て行く。

コントロールルームに残されたのは、システムコントロールの奪還に向けて作業を進める従業員達と、それに協力する阿笠博士、娘達を見守る毛利小五郎。そして、ノアズ・アーク暴走の容疑者とされる入間美兔と、その助手のキーボとなった。

「……今、ハッキリと思い出しました。あなたは、本当にあの事件の生き残りの、入間美兔役の、本人ですね」

「……………」

ジツと入間美兔を見ていた毛利小五郎が、静かにそう呟いた。

「私には俄かには信じられません。あの事件の被害者であるあなた本人が、こんな真似をするなんて」

静かな声で複雑そうにそう言う彼を、入間美兔は黙って見返した。

「私はあの事件の当事者ではないので偉そうなことは言えないのですが……あなた達が、世の中に対して恨みを持つのは当然だと思います。それでも、その他でもないあなた達が！　いくら何でもこんな、あの事件の再現をするなんてことは、絶対にあり得ないと思うのです」

どうか否定してくれと、暗に懇願している小五郎のその言葉に、入間美兎は肩を竦めてからこう答えた。

「うーん……何っーか、理屈臭い探偵らしくねー感情論だが、不知火がステキなおじさまだって言ってたのも分かる気がするぜ」

「へっ」

それはどう捉えるべきなのか。褒められたのか、それとも犯行を認めているのか。

「では、入間君……君は、自分があの事件の生き残りであると、認めるのかね……？」

コクーン開発で知り合った発明家仲間、阿笠博士は半信半疑でそう訊ねた。毛利小五郎も訝しげに入間美兎を見ている。

すると、彼女はシレッとした顔で答えた。

「いや、何か勘違いしているようだけど、オレ様達は別にダンガンロンパ事件との関わりを隠してるつもりは無いぜ？　それを認めるか否かを明言しないだけでな」

「……………え？」

予想外の答えに素っ頓狂な声が出る男性二人。そんな彼らに、キーボが補足するように言った。

「確かに大つぴらに公表するべきではないとも、心情的にそうしたくないとも思っていますが、わざわざ嘘をついてまで隠すことでもありませんよ。後ろめたいことがあるワケでもありませんからね」

「そ、そりゃあ……」

「確かに……?」

彼らは被害者の方であつて、加害者の方ではない。それをネタに騒ぎ立てられることは極力避けるが、それでもなければわざわざ隠し立てすることでもない。いや、言われてみれば確かにその通りである。

勝手に自分達の中で過剰に大事にしていただけだつたと知つた毛利小五郎と阿笠博士は、お互いに何とも言えない表情で顔を見合わせた。

「じゃ、じゃあ、このテロとも無関係で?」

「いや、その辺は当たらずとも遠からずと言つたところだな」

「はい?」

完全に否定しない人間美兎に、毛利小五郎が戸惑いの声を出した。

「それより阿笠さんよ。このコクーン、見ててどう思う?」

「見てて、とは……」

そう言われて彼が思い出すのは、先程刑事達が戻って来る前まで考えていた、ある一つの可能性。

「……我ながら荒唐無稽な話じゃが、聞いてくれるか？」

「おう、聞かせてくれ」

阿笠博士は、脱落者のコクーンから、生き残りのコクーンへエネルギーが回されるといふ現象のことを、入間美兔と毛利小五郎に話した。

「な、何ですかそりやあ？　まるで子供達を全滅させるんじゃないかって、生き残りの子供を集中的に狙っているような……」

話を聞いた毛利小五郎がそこまで発言したところで、ハツとした表情になった。

「ま、そういうことだ」

このゲームは、元から生きてクリアできるように設計されてねーんだよ。

入間美兔があっけらかんとして言い放ったその結論に、ついに彼らは言葉を失った。

ベイカー街の亡霊 with V3 ④

『ああーつと、ここで菊川くんがりタイアーツ！ しかしナイスファイト！ 希望を次に託すべく、その身を呈して江戸川くんを守った漢気溢れる彼に万雷の拍手をう！ いやあやるねえー！』

ゲームを開始してからというもの、学園長はずっとこんな調子でゲーム内のプレイヤーの様子を実況している。特に生き残りがロンドンステージのみに残る段階になつてからはテンションが最高潮だ。ノリノリ以外の何物でもない。うるせーつたらありやしない。

この人が大勢いるホールの中で、学園長の実況が映像と一緒に反響しまくるもんだから、ただでさえ目標の音を拾いにくくて仕方ないのに、私が探している彼に搭載された機能もあつて、いつもの探知能力がまるで役に立たない。どうしろつてんだ……！

……つて、アレ？ さつき江戸川くんつて言わなかった？ さつきまであまり実況に集中してなかったから分からないけど、あの子が参加してんの？ それとも偶々同じ名

前の子供？

『ああああ何てことだあ！ 円谷クンと吉田さんが同時にリタイアー！ これはキツイー！』

あ、知り合いの方だった。え、マジで？ 何であの子達が？ 参加のバッジ持ってなかつたよね？

『小嶋クンまでがリタイアーツ！ 菊川クン同様に江戸川クンを庇つてのアウトだ！ 友達を守るために咄嗟に銃の前に飛び出せた勇気をボクは讃えたーい！！ あっ、現実世界では絶対にやらないようにね？ 無事に戻れたらの話だけどー！』

た、探偵キッズー！！

三人組全滅の知らせに少なからぬショックを受ける。

すると俄かに、客席の最前列に近い場所が騒がしくなった。お偉いさん達が座っているあたりだ。どうやら今の大量脱落者を出してしまったキツカケの子の親族が、周りの親御さんたちに責められているらしい。おいおい、そいつを責めたところで今更どうしようもないだろうに。

学園長の実況を聞く限り、子供達は各々のベストを尽くしていたように思える。あの拳銃を持ち出してしまった子だって、彼なりに身を守ろうとしたのだろうと思う。喧嘩慣れした悪党の群れ相手には悪手でしかなかったが。

ギスギスした空気に居心地が悪くなったのか、その人がそそくさとゲーム会場から退出していく。

いやしかし、凄いな学園長。空気を悪くさせることに関しては間違いなく一流だ。超黒幕級のムードブレイカーと呼ぶべきか。流石である。

さつきも子供達の奮闘ぶりを応援してただけだったのに、その結果こうなるとかどうなってるの。

……それはともかくとして。

「何処にいるんだよう……」

目下の問題は彼である。いい加減にそろそろ捕まえないとミウちゃんに何と言われるか。あの機能を使われるまでは、視界から外れていようが様子を把握できていたというのに……恐るべし、アンチメリーシステム。

けどそもそもその話、本当に、彼に護衛なんて必要なんだろうか？ 確かにあの能力は素晴らしいけど、だからこそ心配しなくても良いはずである。

このまま私は彼に翻弄され続けて終わるのか。先が見えない作業を考えただけで泣けてくる。壁に凭れ掛かり、ズルズルと座り込む。

「どうかしましたか？ お嬢さん」

こんな時に優しく話しかけないでほしい。涙腺が緩んでしまうではないか。

『……フクロウ、今いいか』

「ゼロか？　こんな時間にどうしたんだ」

『いや、実は……ついさつき、警察関係者から緊急の連絡があったんだ。ダンガンロンパ事件の生き残りが……DICEが我々に対して重大なテロを起こしているからとつとと捕まえろと、俺達公安部に……』

「は？　何があった？」

『それがどうも、米花シティホールのゲームイベントを乗っ取って、自分達の子供にデスゲームをさせて復讐しているらしいと……』

「はあ……」

『……その様子だと、やはり違うか』

「いくらなんでも、あいつらに限ってガチのデスゲーム運営はあり得ないだろ……：…するとしても、そう見せかけた何かのパフォーマンスとしか……」

『だよなあ……不知火さんは今どうしてる？』

「彼女なら確かに今そのイベントに参加しているが、そんなキナ臭い話はチラとも出な

かったぞ。誘った友人の方は何か企んでいそうだったか」

『彼らが関わっている可能性はあるんだな?』

「おそらくな。俺も詳しくは知らないが、これだけはとりあえず言っておく」

『何だ』

「彼ら相手に変な深読みはするな」

『……全くもってその通りだよ』

ヒロキ君は生きている。おそらくは、現在DICEと呼ばれる愉快な犯罪組織の元で。

樫村からの依頼でヒロキ君の自殺の調査をしていたところ、一時アメリカの州警察に収容されていた彼の遺体が、その間に消失していたという事実を知った。

アメリカ中が知っている有名な遺体を紛失したとあつては威厳に関わると恐れた警察によって隠蔽されていたその事実を知っていたのは、彼の葬儀を執り行ったシンドラー社長ののみ。

そのことを明かした警察の見解は、ヒロキ君の優れた能力を狙っていたライバル企業

などに、彼のDNAや脳などを貴重な資料として盗まれたのだらうという、想像するだけでも気分が悪くなるものであった。

しかし、此度のノアズ・アークとモノクマの共謀事件を含めて考えると、その背景にあるものが大きく変わってくる。

今でこそDICEは悪の秘密結社を騙る人助け集団として有名だが、その活動自体は、彼らがDICEを名乗る前からも行われていたのではないか？

その可能性は十分あり得る。彼らほど殺人を厭う者達もない。それを防げるだけの、素晴らしい才能の持ち主達でもあるのだから。

高性能な人工知能であるモノクマと、そんな彼らが共犯関係にあるのなら、一般回線に逃がされたノアズ・アークからモノクマが何らかの信号を受け、自殺しようとする彼の救出に即座に動いたとしても何ら不思議ではない。幼い子供からの命懸けのSOSを、彼らがむぎむぎ見逃すはずがない。

そして、ヒロキ君本人に死んだフリをさせたか、もしくは彼らが死体のフェイクを用意し、表向きには死人となったヒロキ君を、それ以降彼らが保護していた……。

つまり、遺体が消失したのではなく、ヒロキ君が今も生きている可能性が浮上してくる。

そうであれば、現在ここでノアズ・アークとモノクマが共謀していることにも十分納得。

得がいく。お互いに周囲の勝手な都合に振り回され、死にまで追い込まれかけた者同士、共感できる部分も多いのだろう。いつか絶対自分達をこんな目に遭わせた奴らに一泡吹かせてやると、意気投合したに違いない。

日本の各界の要人が集まる今夜のゲーム発表会は、まさにその復讐を執行するのに絶好の場だ。そこで彼らは一計を講じた。DICEの活動の絶対的な主軸である、人を殺させず、人を笑わせる犯行で、奴らに一泡吹かせる作戦を。それがこのコクーンの乗り取りであった。

コクーンに搭乗した子供達が行なっているのは、決して彼らの命を弄ぶような残酷なデスゲームではない。それを示す証拠なら勿論ある。他でもない、ノアズ・アークを名乗っているモノクマ達の発言そのものだ。

もしその仮説が正しければ、ヒロキ君はこの会場のどこかにいるはず。DICEに保護されている間、彼らの助けを借りて、父親である樫村の動向を見ていた可能性は大いにあり得る。それもあつて、父親が携わるこのイベントを狙ったのだとしたら。

既に彼と思しき少年の姿は、樫村が危うく殺害されかけたその現場で目撃されていた。この場には殺人を防ぐプロのDICEの構成員もいる。警察ではなく救急車を呼んだのも、彼らであると見ても良いだろう。

もし今もヒロキ君がこの会場にいれば、警察関係者や我々が保護せねばなら

ない。DICEが彼をここに連れてきたのは、そのつもりでもあるからであろう。彼のたった一人の肉親である父親に会わせてやるつもりで。

そんな健気な思いすら無残に踏み躪ったあの事件の犯人は、決して、許してはならない。

「見つからないんです……」

ヒロキ君の捜索中に会った、今にも泣き出しそうなその女性。私の記憶が正しければ、彼女はかつての「超高校級のサイキッカー」不知火霊であるはず。今や幻にも等しい、ダンガンロンパの53作目の一回目にしか出演していない生徒役だ。

先程シティホールの入り口で、預けていた携帯電話を捜査のために返してもらう際、招待客の名簿も確認させてもらった。その中には、あの入間美兔と、パーティが始まる何時間も前に金属探知機を避けてホールに搬入されていたキーボの他にもう一名、ダンガンロンパ事件の生き残りの名前があった。それが彼女である。

彼女の顔は初めて見るが、見事なまでに当時のままの背格好。その見た目の幼さに、つい口調が子供に向けるようなものになってしまっただけだ。壁際に座り込んで泣きじゃくると言うどう見てもただならぬ状態でもあり、つい声をかけてしまった。

しかし、入間美兔といい、まさか役名をそのまま実名としているとは。しかもそれを

隠さず普段から使っているとは……。もしかしたら、他のメンバーもそうなのかもしれない。機会があれば調べてみよう。

「何が見つかからないのかな？」

「う、うとう……。友達から、見守るように、頼まれた……。こ、こど、も……」

もしやヒロキ君のことか？

そうか、コクーンの開発発チームとしての挨拶などで忙しい入間さんに代わり、不知火さんが彼を見ていたのか。

しかし、見つからないとは？

「子供を探しているのかい？ 良ければ、私達も協力しよう」

「本当ですかあ！」

涙で濡れた顔を分かりやすく明るくさせる不知火さん。が、すぐにそれを曇らせた。
「で、でも……。凄く難しいと思うんです……」

「難しい？ 何故かな」

「彼は、その、見つけたとしても、あつという間に……。消えちゃうんです……」

「消える？」

それはまた、興味深い。

不知火は、あの嘘だらけの劇中において、一度も嘘を言わなかった根っからの正直

者でもある。名前と同様にその設定もそのまま反映されているのであれば、その消えるという言葉にも嘘は無いはずだ。

「あつ、ほら、あの子です!!」

「!」

突然顔をこちらから背けたかと思えば、不知火さんは指をある方向へ向けた。

薄暗いゲーム会場。その客席の脇を歩く、パーカーのフードを深く被つ一人の少年の姿。

こちらを向いた彼が、ゆっくりとそのフードを外した。

その顔は、樫村が大事にしている写真の少年とそっくりで。

「ヒロキ……!!」

私達の背後からそんな驚愕の声が聞こえてきた。振り向けば、顔面蒼白のシンドライバー社長が数人の黒服の男を連れて立っていた。

しまった、彼に見つかってしまった……!

「……あの子は私が保護する!」

「ま、待つてください……っ!」

私の一瞬の動揺の隙に、黒服の男達にヒロキ君を捕らえろと命令したシンドライバー社長。迫り来る彼らの手にヒロキ君が捕まる、その瞬間であった。

そこに佇んでいたヒロキ君の姿が、空気に溶けるようにして、消えてしまった。

「守れって、言われたのに……私が目を離したばっかりに……!」

悲壮な声を上げて再び泣きじやくる不知火さん。その声に、顔を真っ青にしてガタガタと震え出すシンドラー社長。

何が起こっているかは、正直分らないが。

とりあえず私は、頭を抱えてよろめいたシンドラー社長の様子を横目に、
警察仕事しろと心の中で叫んだ。

作戦名「米花シティーホールの亡霊」は、見事に成功したらしい。共犯者からの報告をインカムで聞いた彼女は、安堵しつつも表情を変えぬまま、目の前の作業を完了させた。

「よし、これで良いはずじゃ!」

その隣では、一心不乱にキーボードを打ち、新たなプログラムの構築をしていた彼女

の発明家仲間である阿笠博士も、達成感に溢れる声を上げた。

「本当に大丈夫なのか!？」

『さつきよりビジョンがはつきりしてきたわ!』

『安定しとるでー』

私立探偵の男、毛利小五郎は、パソコン越しに聞こえてきたその声に、ホツとしたように肩の力を抜いた。

コクーンは、生きてクリアできるように設計されていない。

入間が言った通り、脱落者のコクーンから生き残りのコクーンへエネルギーが回されるという現象にはハツキリとした意味があった。

ゲーム中のあるステージをクリアされ、その内容を世の中に広められると、非常に大きな不都合を被る人物がいるからである。

そもそもゲーム自体が、今回集められたプレイヤーの年齢層にはクリアが困難な難易度ではあった。もしそれでも、クリアする者が現れたらどうなるか？

ゲームの生き残り、つまりクリアに近づいている者のコクーンにエネルギーを過剰に集中させても、ゲーム中はプレイヤーの意識の同期や保持などでエネルギーが消費されることで、ギリギリ人体に影響が出ない閾値内に抑えられている。

だが、その状態のコクーンが停止しないまま、真つ先に目覚めるゲーム制覇プレイ

ヤーの意識を復活させてしまおうとどうなるか。

脱落者のコクーンから送られてくるエネルギーに、それまでゲーム中のプレイヤーの催眠状態を維持するために消費されていた分のエネルギーが加わり、その安全な閾値を突破してしまう。

そうなれば……そのプレイヤーの命は、保証されなくなる。

誰もクリアできず全員が脱落した場合は全員のコクーンが停止するため、そのような状態にはならない。つまり、その仕様はゲームをクリアする者をピンポイントで狙っていた。

「……つんとにもう！ 紛らわしいんですよ入間さん！ アイツらと協力して子供達を助けていたなら最初からそうと云ってくださいよ！」

「そんなのつまんねーだろ」

「い、入間君……」

入間がモノクマ達をコクーンに仕込んでいたのは、刑事達の見解通り、確かに事実であった。しかし、デスゲームを強いていたように見えたモノクマ達は、実はその逆で、そんなコクーンの仕組みから子供達の命を守るように奔走していたことも、同時に彼女の口から明かされた。

わざとエネルギー消費の激しい膨大な容量を持つAIを七体分も紛れ込ませ、更に脱

落者達の意識をある一体のAIのプログラム内に作った仮想空間へ移してVR状態を継続させることで、過剰に供給されるエネルギーを軽減させていたのである。

『おーっと、今近づくと危ないよ！ 作動中のコクーンには、くれぐれもお手を触れぬようにお願いたします！ 心配ご無用！ 皆様の大事な大事なお子さんは、ボク達が責任をもって、大切にお預かりいたします！』

毛利を激昂させたその言葉は、紛れもないただの事実だったのだ。全機体に巡るエネルギー量が最大であった初期状態は、外部からの物理的な衝撃でも、事故が起きかねないほど危険な状況であった。

しかし、今はもうその危険は過ぎ去った。

二人の技術者の尽力により、脱落者達のコクーンを正常に再起動させ、全機体に行き渡るエネルギー量を均等にしたのである。

相変わらずエネルギーの供給量は常軌を逸しているが、システム上の脱落者さえ無くせば、エネルギーが偏る仕組み自体も無効化できる。更に元脱落者達が移された別の仮想空間も、本格的なゲームとして構築し直せば、更にエネルギーの消費を多くできる。元脱落者のコクーンは未だに床下に収納されたままではあるが、彼ら全員の意識は現在仮想空間内にある状態だ。

「しかしまあ人間君、よくこんなカラクリに気付けたのう」

「ああ、あいつが教えてくれたんだ」

「あいつ、とは？」

「榎村だよ」

「か、榎村さんですか!？」

榎村忠彬。コクーンの開発者にして、先程の殺人未遂事件の被害者となつてしまった人物である。思わぬ人物名が出てきたことに驚いた毛利は目を丸くした。

「コクーンが完成して、あとは発表会を待つばかりって時に、この会場にコクーンを設置した後の榎村から連絡があつたんだ。複数機で試運転してみたら、そういう不自然な仕様が見つかったってな」

「そんなギリギリで分かつたのか!？」

「しかし、何故彼は人間さんに連絡を……?？」

「それがまあ、本当に胸糞の悪い話でな! ゲームをクリアされたら困るお偉いさんが秘密裏にそういう仕組みを仕掛けて、もし犠牲者が出た時にはオレ様に全ての罪を被せようとしているかもしれねーってよ!」

「何じゃと!？」

阿笠が憤慨したように声を荒げた。それ以上に腹を立てている人間は続けた。

「オレ様は意識を同期させるシステムの担当だ。脳に障害が起きる事故が発生した場

合、真つ先に疑われても仕方ねえ。しかもほぼ無名の企業の経営者だ。大企業サマの権力があれば簡単に真実を隠蔽して、罪の一つや二つを擦りつけるくらいは余裕だろうよ。その後適当な口実でオレ様の技術を接収できれば、言うことなしの万々歳ってこつた」

「大企業……つて、まさか！」

毛利がギョツとしたように言うと、阿笠は神妙な顔で言った。

「……工藤先生やワシはストーリーの考案とそのプログラミングの担当。入間君はVR技術の担当をしておった。じゃが、コクーンを機体を設計し、組み立てを行い、更にこの発表会の指揮を執っていたのは……シンドラー社じゃ」

「とすれば、実際に電気の回路に細工を仕掛けられるのも、シンドラー社しかあり得ない。樫村さんが殺害されかけたのは、彼がそれらの事実を知ったから！」

「その可能性は十分あり得るのう」

「つまり、この一連の事件の真犯人は……！」

企業ぐるみで行われた重大な犯罪の数々に戦慄する二人。入間がここまで策を講じたのにも頷ける。下手をすれば、本当に大勢の子供の命が失われかねなかったのだ。更にその全ての罪を被せられるとあれば、黙っていられるはずが無かった。

「やれやれ……」ここまで気付いてくれりゃ、もう一安心だな」

「そこまで知っていないながら、どうして誰にも言わなかったんじや?」

「いや? 一応これでも、樫村やオレ様はシンドララー社の本社がある州の警察や、発表会が行われる日本の警察には真つ先に通報したんだぜ? でも、決定的な証拠となるコクーンの設計図は権利の関係上、勝手に持ち出すわけにはいかなかったもんだから、情報に信憑性が無かった」

「うぐ、それは確かに厳しいのう……」

「それもあつて、アメリカのポリ公にはシンドララー社を妬む奴のイタズラ電話と決めつけられたし、日本は日本でアメリカの企業のことには口出しできないつつつて相手にしてくれなかった。よっぽど忙しかったんだらうな!」

「申し訳ない……!!」

「あんたは悪かねえだろ」

元警察官であつた毛利がガツクリと項垂れた。大企業による無差別殺人などそんな突拍子もない話、確かにそう簡単には信じられるものでもない。

「誰もが待望しているゲームの発表を、その直前で止めろと無名のオレ様や一個人の樫村が声を上げたところで、世に名だたる大企業サマの鶴の一声で簡単に強行されてたどろ。何より火急の事案だ……犠牲者が出てからじゃおせーんだよ」

だから、彼女自身が動くしかなかった。

「では、私達がそこに気付くまでもが計算内だったと……う？」

「んなわけねーだろ。おたくらがイベントに来ることは計算できても、こんな形で関わることまでは予想できなかった。だからこそモノクマを使ったんだよ」

「あー……なるほどー……」

あの事件の象徴であるモノクマが再びデスゲームもどきを始めたのであれば、世間は決して無視できない。本来の計画では、その最後にデスゲームは単なる演技であることを明かし、その証拠として子供達を全員元気に帰還させ、更にそれを行った動機として、特定の名前やコクーンの疑惑を世間に投じる予定であった。そうなれば、いくら大企業相手であろうと、遅かれ早かれ必ず捜査の手は伸びたであろう。

だが、知名度が高く警察からも一目置かれている立場の毛利小五郎がその事実を理解した今、無理に悪役を演じ続ける理由は無くなった。

「もうオレ様ができることは終わった、あとは頼んだぜ」

「ええ、勿論です！ 必ずやこの真実、世の中に暴き出してやりますとも!!」

「任せてくれ！ 我々技術屋の底意地、見せてくれるわ！」

こうして、裏方達の戦いも、無事に勝利を収められたのであった。

ベイカー街の亡霊
with V3
END

一度真っ黒になった視界が再び開けて、目に飛び込んだできたその光景に、もしかしてこれが彼らの言うおしおきなのかしら、と思つてしまった。

巨大な鳥かごのような鉄柵。近未来的なデザインでありながら、そこかしこに生える雑草のせいで何処か廃墟のような印象を受ける建物。そして、閑静な公園を彷彿とさせるシンプルな中庭。

53作に渡るダンガンロンパが終結した、才囚学園。

そこにあつたのは、当ても組織に囚われていた私ですら未だに覚えているほど、散々メディアで流れた光景だった。

いよいよ本当にデスゲームでもさせられるのかしらと一瞬身構えてしまつたけど、実際はそんな雰囲気は全く無くて、あちこちで小さな子供達が無邪気に遊び回るそこは、ただの風変わりな学校のようにしか見えなかつた。

すると不意に、目の前の空間が揺らぎ、一人の少年の姿が現れる。

「初めまして、灰原哀さん」

ニツコリと笑って挨拶する少年。会うのは初めてであれど、これまた見覚えのある人物だった。

かつてアメリカで知らない人はいないと言われた天才少年、ヒロキ・サワダ。組織の連中もその頭脳や才能に目をつけていたので、私も覚えていた。

向こうもきつと、私の正体を知っている。おそらくはこのゲームに参加した瞬間から。

DNA探査プログラムの他、人類史に残る発明と言われる人工知能ノアズ・アークの開発者でありながら、その開発直後に自ら命を絶ったはずの彼が、今ここにいるわけとは。

「ああ……あなたが本物のノアズ・アークね」

今現在、ノアズ・アークの名を騙ってゲームを支配しているのは、かの悪名高いダンガンロンパ事件の象徴とも言えるマスコットであるモノクマ。そのダンガンロンパ事件の舞台となったのがこの才囚学園。

モノクマがノアズ・アークと名乗っている時点でその二つの人工知能が結託していることは察していたけど、お互いの持ち場を交換しているとは思わなかった。

でも、目の前の彼は微笑んで首を横に振った。

「残念、惜しい。ノアズ・アークは僕じゃない。この空間、そのものだよ」

「え？」

このやけに長閑な才囚学園が？

「この空間は見ての通り、ゲームに脱落したプレイヤーの休憩場なんだ。全員がここに来てしまった場合は、ゲームを最初からやり直すことになる。それまでの間、ここで好きに過ごすといいよ」

「最初からやり直す？ どういうこと？ 全員がゲームオーバーになったら、私達は殺されるんじゃないの？」

「あれ？ そんなこと、彼らは言ってた？」

わざとらしくキョトンとして返した彼に、大急ぎで記憶を掘り起こす。

『もし全員がゲームオーバーになったら、キミ達の頭に嵌めたヘッドギアから特殊な電磁波が出て、とっておきのおしおきが……うぷぷ、その時のお楽しみってやつだねえ！』

言つて、ない。

言われたのは、「おしおき」という言葉だけ。

「全員がゲームオーバーになったら、最初からやり直しをさせられる。それが彼らの決めた『おしおき』なんだよ」

ニコニコしてそう言う彼に、思わず額を押さえた。

やられた。そうだった。ダンガンロンパの数あるおしおきの中には、そういうものもあつたじゃない。最後の学級裁判で生き残つても、記憶を消されて次のシリーズに参加させられるという「おしおき」が……。

「……もしかして、最初の脱落者からここに来るようになっていたの?」

「そうだよ。こちらにも色々と事情があつてね。脱落者が出た場合は、ノアに作ったこの空間に転送するようにプログラムを書き換えていたんだ」

「あ、そう……」

つまり、最初から彼らはデスゲームなんかさせる気はサラサラ無かつたのだ。大勢の子供の命がかかっている状況なのに、工藤君だけはやけに大きく構えていると思つたら……そういうことだったのね……。

「先に脱落した君の友達もここにいるよ。どう過ごすかは、君の好きなようにしたら良い」

「待って、一つだけ聞かせて」

立ち去ろうとした彼を引き止めた。

「……つてももしかしなくても……あの学園よね? どうしてこんな場所を私達の避難場所にしたの?」

コロシアイをさせる気が無い割には、場所が場所過ぎる。どんな意図があるのか知らなかった。

私の問いに振り返った彼は、やっぱり笑顔のままだった。

「だってここは、ゴフエル号希望の船じゃないか」

ああ、それもそうだった。

今度こそ納得できた私は、彼が再び姿を消すのを見送った。

その名前を持つ木から作られた船こそが、ノアの方舟だものね。

私達才卒生の共通の副業活動には、ちよつとしたルールがある。

副業の出番が必要だと思われる出来事を事前に知り、それをどうおちよくるかの作戦会議で、「黒幕」を一人決めておくのだ。その「黒幕」が中心となつて大筋の計画を発案し、実行を指揮する。そうすれば、各自の個性的な才能がぶつかり合わず、全員の力を遺憾無く発揮できるからだ。

船頭多くして船山に登るといふ言葉がある通り、例えば武闘派のチャコちゃんやハルちゃんが好き好きに暴れたら、犯人もただじゃ済まなくなる。副業では犯人も含め、誰

一人として怪我人を出さないのも目標の一つなのだ。

そして同時に、出動するメンバーも決めておく。あまり大人数で実行することはない。多くてもせいぜい一件につき四、五人程度。今回の場合は、私を含めて四人が出動した。残りの人は何か不測の事態が起きたときのために状況を見守り、待機する。まあ、大体がリーダーであるオウマくんがやってるけど。

ちなみに私は、これまで一度も「黒幕」をやったことはない。その代わり、出動する回数はダントツで多い。理由は言わずもがな。最も小回りが利く立場だからである。

その割には、その時の「黒幕」が誰なのか、作戦の内容などもあまり詳しく教えられず、実働隊に加わることも滅多に無い。それどころか作戦中はスコップ持ってそこら辺を適当にほつつき歩いていれば良いとすら言われる。今回もそんな感じであった。なのに毎度のように良くやったと絶賛される。

……役に立ってるならそれで良いんだけど……まあいつか。

勿論今回もスコップは持ってきているのだが……恐ろしいことに、金属探知機をすり抜けてるんだよなあ。何で出来てるのか聞いても、ミウちゃんは適当にはぐらかすばかりで何も分からない。探知機妨害システムでも搭載しているのか、未知の物質を開発したのか。キーボくんも含め、とにかくうちの技術班はマジばない。

そしてつい先程。モノクマからインカム越しに作戦完了の目処がついたことを知ら

された。結局ミウちゃん達が何をしたかったのかは分からずじまいであった。私が仕事したと思えることと言えば、119番通報ぐらいである。

とにかく、ようやくこの果てが見えない鬼ごっこから解放されるわけだ。やれやれ。とりあえず入り口で預けた携帯電話を返してもらおうとゲーム会場から出ると、向こうからスーツ姿の集団が歩いて来るのが見えた。もしかして警察の人かな？

……あつ。

「お久しぶりです！」

「っ!？」

その一団の中に知り合いの姿を見つけた私は、意気揚々として手を振って呼びかけた。向こうもすぐにこちらに気付いたようだった。風見さんである。

「お仕事ですか？ 頑張ってください！」

「あ、ああ。勿論だ」

公安警察の人間は、迂闊に身分を明かせないとスコさんから聞いた。だから敢えて名前は口にしない。

「君は……ここで、何を？」

「鬼ごっこしてました！」

「鬼(ゴ)っ(ィ)っ!」

私の言葉を復唱する彼の顔が妙に間抜けたように見えて少し面白かった。

すると今度は別の人が進み出て、私に話しかけてきた。一応見知った人間だ。

「本当に、それだけなのか？」

どういわけか誇らしげな顔である。しかし、風見さんと一緒にいるということは……なるほど、そういうことか。

「ドンペリついに逮捕されたんか」

「どうしてそうなるんだ！」

いつものことながら喧しい人だ。そこまで大声出さなくても聞こえるって。

「見てわかるだろ!? 俺も仕事だよ!!」

「ああ……でも、いくらお金持ちでも、人妻をお得意様にするのはやめた方が……」

「そんなんじゃないって何度言えば!!」

だから何が違うんだ。違うなら身分証明できるものを出せよと毎回言ってるのに渋るんだもの、やっぱりこいつはドンペリに違いない。

「お疲れ様ー!!」

コナン君達に全てを託すつもりで、ジャック・ザ・リッパーを道連れにして崖へ身を投げた私が見たのは、先に脱落していた歩美ちゃん達に囲まれて労われるという光景だった。

我ながら都合の良い夢だなあ、なんて思っていたけど、どうやらそんなことは無いみたいで。

「ええっ!?」じゃあ、私達は死なないんで済むの!?

この休憩場の管理者だと名乗ったその少年から聞かされたこのゲームの真実に、酷い肩透かしをくらった気分になってしまった。

全員がゲームオーバーになったら、全員でまたゲームを最初からやり直しになる。現実世界に戻れないと言うのは、誰か一人でもクリアができるまでの話だったみたい。

「実はそうなんだ。でも、全力でゲームに取り組めたでしょ?」

「大健闘だったぜ姉ちゃん!」

その証拠のように、ゲーム開始時に現れたカラフルなクマ達まで私達の活躍を口々に褒めてくる。

「……あの場合では、あなたの行動は最適でした」

管理者の少年が、苦笑しながらそう言った。

「ですが、それはゲーム内であつたからこそ言える話です。現実の世界では、ご自身の命

を投げ出すような真似は、どんな理由があれ、決してしないように。残される方の気持ちも、どうか考えてください」

「……そう、だね」

近くの空中に浮かぶ大きな画面には、まだゲーム内にいるコナン君達の姿が映し出されている。私が脱落したことで絶望しているコナン君に向け、先に脱落していた他の参加者の子供達が一生懸命に声を張り上げて応援していた。

「……なんて、僕が偉そうに言えることじゃないんですけど」
「？」

茶目つ気たっぷりな口調で付け足した少年に首を傾げたところで、あの白と黒のクマが子供達に向けてこんなことを言っていた。

「さて、良い子の皆、大変だよ！　ここまで頑張った江戸川くんが絶望しちやってます！　皆はどうしたいかな？」

すると、子供達は口々に、コナン君を助けたいと言い出した。

あの画面が現れるまでは、今度こそはゲームで活躍したいと、やり直した場合に自分がやることをお互いに熱っぽく話していた彼らが、やり直しを望まず、コナン君を助けることを迷うことなく選んだ。最初はあれだけ自分のことしか考えなかつたあの子達が。

「参ったなあ、そこまで言われちゃ仕方ありませんね！ それでは満を持しての登場です！ スペシャルゲストの、シャーロック・ホームズさん!!」

現場に到着すれば、帰る気満々の不知火さんと遭遇した。限りなくシロに近いが被疑者であることは間違いないので、ひとまず逃がさぬよう、このホールで起きていることを教えてほしいと適当な理由をつけて風見にその手を掴ませておいた。俺が触れようとしたら物凄く嫌そうな顔をされて心が折れかけた訳ではない。決して。

「テロ？ 何のこと？ また爆弾でも仕掛けられてんの？ こわ」

直接テロの存在を聞いたところ、そんな反応が返ってきた。少なくとも不知火さんにはこの件がテロであるとは認識されていない。

実際、テロが行われていると聞いたゲーム会場では、確かにあのデスゲームのマスコットのハイテンションな声が響き渡っていたが、行われていたのは単なるゲーム実況だった。言葉の端々に親御さんに対する軽い嫌味は含まれていたものの、プレイヤーに對してはその奮闘を純粹に応援していた。

と言うかコナン君、こんなところでも活躍しているんだね。あんな猛スピードで走る

列車からどうやって生還するか是非見届けたいところだが、今は残念ながらそれどころでない。

「ねえテロなの？ やっぱりのゲーム機爆発するの？ 知り合いの子供達が乗ってるんだよお、助けたげてお巡りさあん！」

ただひたすら困惑するだけの風見に縋り付く不知火さん。どう見てもテロの実行犯とは思えなかった。その光景を見ている同僚や部下達が皆似たような顔をしている。恐らく俺も同じ表情をしていると思う。

これ、奴らのいつものアレじゃね、と。

するとその時、一人の携帯電話にメールの着信があった。俺達とは別に動き回って情報を収集していた者からの連絡のようだ。

それには、俄かには信じがたい事実の数々が記されていた。

ここで起きたある殺人未遂事件に始まり、AIによるコクーンの乗っ取り、デスゲームの真相、ゲームに参加している子供達の命を真に脅かしていた危機、自殺したはずの天才少年が生存しているという可能性。

それら全てを繋げる、とある人物の秘密。

「不知火さん！ 君が守るように言われていた子供は、今どこに!?!」

「えー、知らない。もうほつといっても良いって言われたあ」

「このタイミングでだと……!?!」

その人物は、己の秘密を守ろうと、尋常ではない気迫で今もその少年を探し回っていると、メールの最後に書かれていた。

もし少年がその人物に見つかれば、どうなるかは想像に難くない。何せ、秘密を守るために既に人一人を自らの手で殺しかけ、更には罪の無い子供まで犠牲にしようとしていた、危険な覚悟を持った人間なのだから。

「……まさか今度は、ドンペリが私に探せって言うの?」

「ドンペリじゃない。が、その通りだ。頼む、すぐに探してくれ」

「嫌だよお! もう散々鬼ごっこした後なんだってば! どーせアイツならほつといたところで滅多なことじゃ死なないしさー!」

「ば、馬鹿なことを言うんじゃない!」

鬼ごっこって、護衛を撒かれていたことを言っていたのか!

にしても、不知火さんの追跡を撒いただと? どうやったのか是非知りたいところである。

しかし、それもまた今優先するべきことではない。事態は一刻を争う。

「不知火さん、私からもお願いします」

「分かった!」

同じことを言うにしても、俺と風見で全く反応が違うのが解せない。

「今パーティ会場にいるってさ」

この子テレパシーも使えるのか？

携帯電話も使わずにどうやって知ったんだ。もう何でもアリだな。今に始まったことじゃないが。

一瞬で居場所の特定という問題は解決し、あとはその場へ向かい……必要とあれば、その人物を取り押さえる。

だが、俺達が会場に入った時には既に、危惧されていた状況になっていた。

「すまない……お前だけは、この世にはならないんだ」

目に飛び込んできたのは、人目を憚るように照明を落とした会場内のブロンズ像群の前で拳銃を突きつける男と、その先で立ち竦んだように動かない少年の姿。

「止めろ!!」

もう一瞬の躊躇もできないと判断し、咄嗟に大声を上げて自分達の存在を示す。

ハツとした男がこちらに気付くも、既に覚悟を固めていた男は、躊躇う様子を見せたものの、拳銃の引き金にかけた指に力を込めた。

殺人事件の犯人となつてまで！ そこまでして秘密を守りたいのか……!?

こうなつてはやむを得まい。こちらも銃で応戦するしかない、スーツの内ポケット

に忍ばせたそれを取り出す。

だが、奴の方がそれより早かった。

パシュツと、サイレンサーによって軽くなった発砲音が響く。

放たれた弾丸は、目の前の少年の頭を貫こうとする。

そして弾丸は、少年に届く少し手前で硬い金属音を鳴らし、何も無い虚空で停止した。

……………。

……え？ 止まった？

最悪の事態を覚悟した俺達の前で、発射された弾丸が空中で止まるというその怪奇現象は、確かに存在していた。

ちよつと待て。どう反応したら良いんだ。

「かかりましたね」

男も俺達も呆気にとられる中、少年がしてやったりと言わんばかりの口調でそう言った。

次の瞬間、少年の姿の輪郭がぶれたかと思えば、その場に全く別の人物の……いや、別物の存在が姿を現した。

「あなたの犯行も、証拠も、自白も、全てボクの目と耳で記録しました。もう逃げ場はあ

りません！ 観念してください！」

先程までの華奢な少年の姿とは打って変わり、背の高い、硬質的な光沢を放つ機械仕掛けの身体を持つ彼。

その右手にしつかり掴んだ弾丸を床に落としながら、少年の立体映像を纏い、本来の姿を隠していたそのロボットは、力強くそう言った。

「言ったじゃん、ほつといても死にやしないって。彼ならマシンガンに銃撃されようが表面のパーツが多少傷付く程度だよ」

いや。うん。そうだね。

「いやあー！ 実にお見事、御二方！ よくぞ生還できました！ 素ん晴らしい!!」
そんなハイテンションな声で気が付いた。どうやらオレ達は、あの列車の事故の衝撃から何とか助かったらしい。

オレの隣に横たわっていた諸星も気が付き、小さく呻きながら体を起こした。

オレ達が今いるのは、あの赤ワインの海となった貨物車ではなく、ゲーム開始時に全

プレイヤーが集まっていたスタート地点であった。

そこには、あの時と同じく壇上に座った白黒のクマの姿もあった。

「……おい、クマ野郎。オレ達、クリアしたんだよな。全員元に戻るんだよな？ 菊川も、滝沢も、江守も、他の奴ら、全員……！」

「勿論さ！ みーんな元通りだよ！ それにしてもあの難易度で二人もクリアしちゃうなんて凄いや！ ボクの完敗だよ！」

「……よく言うよ、最初から誰も殺す気なんて無かった癖に」

「は!? 何だと!？」

仰天したような諸星とは逆に、その白黒のクマことモノクマは、予想通りと言わんばかりのニヤニヤ顔だった。

「うーん、やっぱり良い子のキミにはバレちゃってたか、ゲーム中もラストの他は至って冷静だったし」

「あれだけ露骨にアピールされたら流石に分かるだろ」

「だろうね！ キミは他の子達よりボク達についてよく知っているもの！」

「何の話をしてるんだ??？」

「気にすんなって」

肉体の全てを把握され、意識を支配されるようなゲームである。オレの正体もとつく

に知られているんだろう。あの事件のことを覚えていて人間として見ていたに違いない。

そして、良い子という不知火さんがオレに対してよく使う単語をわざわざここで出してきたことが示すのは、モノクマとあの「17人」は今も繋がっている、ということである。

「そ、それならアレは何だったんだよ、日本のリセットとか言うのは!」

「ああ、そりゃあ……日本の未来を担うオレ達に命懸けと見せかけたゲームをさせて、助け合いや思いやりの精神を教え込むことだったんだろ」

「……ええ?」

「お前、最初は非協力的だったのに、最後は諦めきったオレを叱って鼓舞してくれたら?」

「そ、それ、は……あの時はまだ、オレ達が頑張らなきゃ、全員死ぬと思ってたから……」

「ほら、自分のことしか考えてなかった最初に比べたら、随分と進歩してるじゃねえか」
「ううう、うるせえよメガネ!」

顔を赤くして叫ぶ諸星。生意気ぶってただけに、今更助け合いなど小っ恥ずかしいの
だろうが、少なくとも悪い変化ではないよな。

「その通り、大正解だよ江戸川くん！　ちなみに脱落しちゃった子供達にも、別の場所で共同生活してもらって、ボク達なりに道徳観念を教育して差し上げましたー！」

「うわあ、胡散臭え」

「酷いなー！　国営放送局の由緒正しい教育番組を参考にした、真つ当なプログラムなんだぞー！」

こいつらにああい類のマスコットが務まるのかよ。いや、本性を知らなければ見た目だけはギリギリセーフか。

順番は守ろうねとか、困った時はお互い様とか、そういう人形劇的な教育をしていたのか？　ゲーム中に見たあいつらのコスプレって、まさかその派生？　……そのプログラム、ちよつと見てみたかった気がする。

すると、壇上のモノクマは両腕を広げ、嬉々とした声でこう言った。

「それでは改めましてえー！　ゲームを見事クリアしたキミ達に、スペシャルなご褒美を用意しました！　今回の真の『黒幕』さんの登場でーす！」

途端、モノクマがいる壇上の下の空間が揺らぎ、一人の少年の姿が現れた。あの子は確か、不知火さんが連れていた……？

「ゲームクリアおめでとう！　君達がジャック・ザ・リッパーを追い詰めてくれたお陰で、ボクのお父さんの仇も追い詰めることができました。本当にありがとう！」

「誰だお前？ どういうことなんだ？」

「現実世界の方で、彼のお父さんと、君のお父さんが呼んでくれた警察の人が、ボクのお父さんに悪いことをした人をやっつけてくれたんだよ」

「そ……う、なのか？ よく分からないけど、良かったな！」

「うん！」

嬉しそうに笑い合う諸星とその少年。

オレの父さんが、彼の父親に悪いことをした人をやっつけたって……ああ、樫村さんが、この少年の……。

なんだ、そういうことだったのか！

オレは、嬉しそうに破顔する少年が誰なのかを思い出した。

「……君が、本物のノアズ・アークを作ったヒロキ君だよね？ そっか、生きていたんだね」

「うん、あの人達に助けてもらったんだ」

やっぱり。そうでもなきや、モノクマがノアズ・アークなんて名乗るわけねーもんな。

「君達の活躍はとても素晴らしかった。とても貴重なものを見せてくれて、本当にありがとう」

「そんなに褒めるなよ、照れるだろ！」

「君達のような子供がこの国の未来を担ってくれるなら……ボクも安心だな」

「ああ！ オレも将来は爺さんより凄い警察になるから安心しろ！」

「良かった。これでボクも、やっとお父さんのところに戻れるよ」

それは本当に何よりだ。

……つーかあの人達、仕事し過ぎだろ。サイコロ名乗る前から暗躍してたのかよ。この分じゃ、俺の知らないところであの人達に助けられた人も大勢いそうだな。

「さあ、そろそろ現実世界に戻らなくちゃね」

「……ん？ ヒロキだったっけ。お前、コクーンに乗ってたか？」

「いや、ボクは違うところからログインしているんだ」

「はあ!? そんなことできるのかよ！」

「ボクを預かってくれている人が、無線通信でゲームにログインできるVRヘッドギアを作ってくれたんだ。コクーンのように大きくないから、どこにでも持ち運べて遊べるんだ。現実のボクは、ベッドに寝ている状態なんだよ」

もう開発済みだったんだ！ 今度お宅にお邪魔しても良いですか入間さん!!

「誰だよソイツ！ お前どんなスゲー奴に預かれてんだ！」

「えーつと……今は、ボクを助けてくれたDICEの人のところにいるんだ」

新一ともう一人の子供がゲームをクリアしたことで、子供達が次々にクーンから解放され、親達に抱擁されている。

樫村殺害未遂事件の方も無事に解決した。金属探知機が設置された会場内に凶器を持ち込んだトリックの他、ゲーム中で新一達が暴いたジャック・ザ・リッパの真実から、犯人はシンドラー社長であることを突き止めた。

そして、コントロールルームで事件解決に向けて動いていた阿笠博士達からも、クーンに仕掛けられた恐ろしい罠の存在を知らされた。

どうやらシンドラー社長は、私が手がけたゲームのストーリーを聞かされた時から、この一連の計画を思い立っただけらしい。ストーリー変更を申し出てしまえば、変に疑われると思い、そうせざるを得なかったそうだ。

……いやしかし、図らずも私が全てのキツカケであったとは。無事に解決した今でこそ笑い話にできるが……いや、余計なことは考えないでおこう。人間さんや阿笠博士達からも気にすることは無いと言われたのだから。

シンドラー社長は、それらの罪をなすりつける予定であった人間さんがダンガンロンパ事件の関係者であることも、事前に知っていた。私が事件の裏に彼らの存在があるこ

とを匂わせた時、異様に早く反応したのはそのためであった。

それについては、もう既に察しがついていた。と言うのも、人間さんがコントロールルームに連れてこられたとき、彼はこう言ったのだ。

『いやしかし、他でもないあなたが出たのでしよう!? コクーン開発チームの中に、あの事件の生き残りの発明家と同名同姓の人物がいると!』

私はその時、ダンガンロンパの生き残りとしか言っていなかった。だが彼は、その中の「発明家」と才能を特定していたのだ。その時には、私の中で彼への疑いはほぼ確信になっていた。

シンドラー社長が人間さんのことを知ったキツカケは、あのアメリカで起きた銀行立て籠もり事件。DICEが人質を死体に変けさせて、犯人達を驚かした事件だ。

彼は、それについて夢中になって調べているうちに当時のことを思い出し、現在のコクーンの開発チームの中にダンガンロンパ事件関係者の名前があることに気付いたのである。

そう、DICEとダンガンロンパ事件を結びつけて考えられたシンドラー社長もまた、私と同じくかつてのダンガンロンパ愛好家であり、隠れDICEファンでもあった。堂々と悪を名乗りながらも世間からはヒーローのように扱われる彼らに、歪んだ憧れがあったのだと……シンドラー社長は、懐から古い手帳を取り出しながら力無く心中を

吐露した。

その手帳には、ダンガンロンパ事件についての手書きのメモが書かれていた。私と同じだ。

彼らが一度世間から姿をくらました時、彼らに関するあらゆる電子データが削除された。唯一削除を免れたのは、数少ないアナログな情報媒体のみ。役名と才能名だけを走り書きしたメモは、私のそれとよく似ていた。

入間さんを含めた彼らが目立ちたがらないことを悪用しようとしたのも事実。

しかし、彼らであれば、己に流れる凶悪な血を恐れるばかりで凶行に走ることにしか考えられない自分を止めてくれるのではないか。そんな微かな希望を持ち、自ら彼らに嘘嘩を売る真似をしたのだと。

「まあ、本物の殺人鬼にならずに済んで良かったんじゃないか？」

目暮警部達に付き添われて会場を後にする時、偶々その場において毛利さんから全ての事情を聞いた不知火さんからそんなアツサリとした一言をかけられた彼は、確かに、憑き物が落ちたような、救われたような顔をしていた。

……さて、折角ここまでできたら、綺麗なハッピーエンドで締めたいところではあるが……。

「何をグズグズしているんだ……!! さっさと奴らを連行しろ!」

あの融通の利かない大人達を、どうしたものか。

警視副総監、諸星登志夫。彼を始めとする頭の固い大人達は、相変わず周りが見えていなかった。子供達が全員満足そうな笑みを浮かべていることにすら気が付いていない。

「ただ今事実関係を調査中です。今しばらくお待ちください」

「そんなことはどうでも良い! 奴らが子供達を巻き込んだのは事実だろう!!」

諸星副総監を宥めている金髪の彼には、見覚えがあつた。彼も大変な立場である。

するとそこへ、新一が駆け寄っていったのが見えた。

「ねえねえ、どうしておじさんはそんなに怒ってるの?」

「んん? 君は……ゲームをクリアしてくれた子の……」

「ゲーム、とーつても楽しかったなあ! そうだよね、皆!」

無邪気な子供を演じる新一が誰にともなくそう呼びかければ、親に強引に引つ張られて帰ろうとする子も含め、全員が同意の声を上げた。その光景に目を白黒させる諸星副総監。

「あのねママ、変なクマさん達が遊んでくれたんだよ!」

「おーつきな建物を探検したんだ!」

「チームを作つて鬼ごっこもしたの！」

それとね、あとね、と次々に自分達がしたことを興奮気味に親に話し出す子供達。どうやら早々にゲームから脱落したあの子達は、私達の知らないところで、協調性を求める遊びを促されていたらしい。

なるほど、これが日本のリセットか。

「そ、そんな、馬鹿な……。デスゲームでは、なかつたのか……？」

諸星副総監が狼狽えたようにそう言った、その時である。

「『あれれ〜？ おかしいぞ〜？』」

何と、突然発されたモノクマと新一の声が見事に被るといふ珍事が発生。

新一の方はギョツとして口を噤むが、モノクマはそのまま続けた。

『デスゲームだなんて、誰がそんな怖いことを言ったのかなあ？ オトナつて恐ろしいことしか考えられないんだねえ、怖いなあ〜』

「な、な……」

『ボク達は、ただの一言も、そんな怖いことは言つてないよー？』

そう。実は、その通りなのだ。

するとそこへ、金髪の彼の元に、生真面目そうな眼鏡をかけた男性が走つてきた。

「例の記録映像を、確認してきました！」

「どうだった」

「はい。案の定……と言いますか、あの人工知能は、『殺す』、『死ぬ』と言った直接的な言葉は、全く発言していませんでした」

「」

大人達がもの見事に固まった。

つまりこの騒動は、モノクマというコロシアイの象徴がそこにいるというだけで、事件を覚えている大人達が勝手にデスゲームだと勘違いし、騒いでいただけなのである。

一方でモノクマを知らない幼い子供達は、彼らの発言をそのまま純粹に解釈しているため、全く命の危機を感じることなく、普通にゲームを楽しめた。

その温度差たるや如何に。結果は見ての通りである。いやはや、凝り固まった先入観とは何と恐ろしいものか。

毎度のことだが、今回もお見事の一言に尽きる仕事っぷりだ。これだから彼らは面白い。

「ついでに言いますが、彼らはシンドラージャー社長によって仕掛けられたコクーンの罠から、子供達を守っていたそうです。既に証言も裏付けも取れています」

「」

「言つてしまえばいつものアレですよ諸星副総監。いつも通りの、DICEによる^{人助け}犯行

です」

「

金髪の彼からニツコリとそう言われた諸星副総監は、完全に言葉を失っていた。そんな彼に駆け寄り一人の少年。諸星副総監のお孫さんである秀樹君だ。

「爺さん！ オレ、将来は警察じゃなくて、DICEに入りたい!!」

素晴らしいトドメであった。

「ようガキども、ゲームはどうだったよ」

すっかり消沈した親達の後について歩く彼らは、すれ違いざまにそう話しかけてきた彼女に一瞬だけ体を強張らせた。ゲームが始まる前、彼女にきつく叱られたことを覚えていたのだ。

しかし、すぐにゲームで体験したことの数々を思い出すと、声を揃えて元気よく、楽しかったと満面の笑みで答えた。

彼女はその答えに満足したようにニヤリと笑って頷き返し、そのまま歩みを進めた。

「待って入間さん！」

彼女を引き止める幼い声が、ホールの廊下に響いた。

「あ？ 江戸川くんに作家先生じゃねえか、予想外の組み合わせだな。知り合いか？」

「うん、ちよつとね！ それでね、入間さん。工藤先生が、入間さんに聞きたいことがあるんだって」

江戸川少年に押され、作家先生こと工藤優作が緊張した面持ちで前に進み出る。

「……どうも入間さん。お疲れ様でした」

「いやいや、先生も事件解決に大活躍したって聞いたぜ。先生ほど優秀な推理作家だと、探偵もできるんだな」

「ご謙遜を。本来なら我々が動かずとも、あなた達二人だけで全てカタがついたはずでした」

「……」

「あなたが表立って行動する裏で、キーボさんが全ての証拠を集めていた。コクーンに過剰に供給されるエネルギーの計測に始まり、ブロンズ像に隠されたナイフや拳銃の発見、更にシンドラー社長を精神的に追い詰め、犯行を焦らせ、自白まで撮影したと聞いています。それらの証拠を提出したお陰で、騒動の検証が非常にスムーズに行われたとも」

「なーんだ、知ってたのかよ」

イタズラが成功したかのような笑みでアツサリ事実を認めた入間に、工藤優作は溜息をついた。それにつられて呆れ顔になった江戸川少年が、ハツと何かを思い出し、入間にこう訊ねた。

「あつそうだ。ボクね、ゲームの中でヒロキ君つて子に会ったんだ。入間さんの友達のところからゲームに参加したって聞いたんだけど……」

「ああ、ヒロキか。アイツは今、不知火の泊まつてるホテルにいるぜ。ちようど電波が届く範囲だったからな」

それを聞いた工藤優作がカクリと肩と首を落とすのを、江戸川少年が何とも言えない目で見上げた。

「……では、ヒロキ君は最初からこのホールには来ていなかったのですね」

「つたりめーだ！ アイツを自殺させようとした人間がいるようなところに連れてくるわけねーだろ！ あんたら親子ほど肝が据わったやつじゃねーんだからよ！」

その途端、工藤優作と江戸川少年は二人して目を剥いた。

「ええ!?! し、知ってたの!?!」

「ひゃーっはっは！ オレ様を誰だと思つてやがる？ 美人すぎる天才発明家の入間美兎サマだぜ？ 変に鈍感極めた不知火じゃあるまいし、それくらいとつくに調べがつい

てるっつーのー!」

「さ、流石は情報戦最強のDICE……御見逸れ致しました……」

「……いやオメーらさあ。アレだけメディアに露出しといてバレねーと思つてたのか？」

「正体隠してんなら、もつと慎重に行動しろよ……」

「こ、今後は気を付けます……」

江戸川少年と工藤優作改め工藤親子に向け、力の抜けたツツコミが入る。入間達が特別鈍いのか、はたまた世間の方が特別鈍いのか。いずれにせよ、彼らの秘密は秘密のままでいられるようである。

お互いに正体がバレてると分かれば、余計な気遣いは要らなかつた。江戸川少年はラフな口調で答え合わせを求めた。

「なあ、いつ分かつたんだ？」

「コンサートホールで最原に会つたら、その時に違和感を覚えて調べてみたんだとさ」

「あーっ、あの人かあ……!」

「何っ、新一、探偵の彼と会つていたのか!？」

「何でそこに食いつくんだよ父さん」

息子は父親の密かな趣味を知らなかつた。

「オメーらの事情を知らないのは、不知火を含めた一部のド天然な奴らだけだ。オレ様

達は特定の人間に肩入れしないって決めてるから直接手助けしてやれねーが、何かあったら不知火に言っとけ。ぶっお人好しのアイツなら、オメーでも簡単に転がせるだろ」
「うわ、不知火さんの扱い雑過ぎ……」

「それだけ信頼してると思ってくれよ」

ケラケラ笑う人間には、確かに悪意は無かった。そんな彼女に父親の方が訊ねる。

「最後に一つだけ、良いですか？」

「おう、何だよ」

「……あなた達ダンガンロンパ事件の生き残りは、この世の中を恨んでいるのでしょ
うか……？」

それは、ダンガンロンパを好んで視聴していた工藤優作が、ずっと彼らに聞きたかったことであつた。

彼らは事件の最中は勿論のこと、事件が終わつた後も一年以上法のもとに軟禁され、あらゆる自由を不当に踏み躪られてきた。だからこそ今回のテロもどきも、一時は本当に彼らの復讐だと思つてしまった。

そして、自分からスゲー地雷を踏むなあと聞いたげな息子の視線は、敢えて見なかつたことにした。

数秒の沈黙後、入間は呆れた口調で答える。

「そりや当然だろ。あんな真似されて全て許せるほど、オレ様達は出来た人間じゃねーよ」

ああ、やはり。綺麗事で飾らぬその答えに納得する工藤優作。

しかし、入間は続けた。

「だからこんなことしてんだよ。不満があるなら、自分で何とかするしかねーだろ」

「！」

このしよーもない世の中をどうにかするため、サイコロは今日も元気に世界へ喧嘩を売る。

現についさつきもその現場を目の当たりにしたではないか。沈みかけていた工藤優作の気分は急浮上した。

「っ!!」

「父さん……?」

入間が去った後、力強くガッツポーズを決め、心の中で再び警察^{サイコロサイコロ}仕事しろと雄叫びを上げた父親に、息子が怪訝そうな視線を送る。

そしてふと、息子は思った。

あの少年が、最初からあのロボットによる変装であったのなら。あの時彼女と一緒にいた彼は、一体誰だったのだろう、と。

「やつと……やつと……解放、された……」

「お疲れ様あ……」

「ホント、凄く、疲れた……何もしてないはずなのに……」

「か、完璧だったよ、黒いスーツ、メツチャ似合うよ……」

「フオロー苦手だよね、不知火さん……」

「うん……よく分かったね……」

「パーティでクラツカー勧められた時は流石に殺意湧いたよ……」

「その節は誠に申し訳ありませんでした……」

「キーボくんの搬入に合わせて一般客より何時間も前からスタンバってたから、その時からずつと飲まず食わずでさ……」

「うわあキツツ……徹底してらう……」

「フツ、それくらい、プロのコスプレイヤーであれば当然のことよ」

「ツムちゃんかっけえ」

「でも口ポット役はもうやりたくないかな……」

「飲まず食わずはなあ……」

「いや、そつちも大変だったでしょ、あの機能を搭載したキーボくんを追うのは」

「マジヤバかった。光学迷彩もさることながら音響調整機能がとんでもなくヤバかった。消音どころかリアルな衣摺れや足音まで発生できるんだよアレ。触られない限りは完全に別人になりすませるぞアレ」

「ウチの技術班マジばねえ」

「それな」

「惜しむらくはキーボくん専用機能になりそうなことだよ。全身に装置を仕込めない
と意味無いから」

「それな」

「ツムちゃんって、人型であれば本当にどんな姿にでもなれるんだよね、凄いやね」

「不知火さんこそ、好きな時に好きな場所にいられるんだよね、凄いやね」

「うん、凄いやね、私達」

「だって私達、仮にも黒幕だったんだし」

「ねー」

「……………本当に凄いやねなのに、今回の仕事は何だったんだらうねー」

「ねー…………」

「こんだけワリを食う元黒幕もないよ……」

「でも学園長、楽しそうだったなあ……」

「……」

「……」

「……お腹空きすぎて空腹感がおかしなことになってるんだけど……」

「……深夜営業してる美味しいガテン系ラーメン屋知ってるけど、行く？」

「行こう!!!」

名探偵コナン

ベイカー街の亡霊 with V3

DICE事件簿傑作集より抜粋

ベアズ・アーク
クマの方舟事件

THE END

漆黒の特急（ミステリートレイン）編 with V3

①

私は俗に言う超能力者という奴だ。と言っても何かをフワフワ宙に浮かせたり、物体を透かして見るようなのではなく、いわゆるテレポートが専門……というかソレしかできない系の超能力者である。

一言で言い表せば、自分を含めたあらゆるものを、任意の場所へ一瞬で移動させる。便利で凄い力なのだが、実際の見た目はかなり地味だ。パツと消えてパツと現れるだけである。だから専ら隠密向けの力だと思う。

そんな力があるもんだから、私はろくに公共の交通機関を利用したことがない。何せ地球の裏側に行くのですら一瞬で終わるのだ。放浪生活をしていながら、風景や人との出会いを楽しむと言った旅の醍醐味は、一切味わっていない。

今までそんなことは気にしたことも無かったのだが、今目の前の彼の様子を見ていたら、結構な損をしていたんだなあと、自覚せざるを得なかった。

「いいなあ……ミステリートレインなんて、いいなあ、俺も乗りたい……いいなあ……」
「ス、スコにやん……」

「一般人でもあれに乗れる機会なんて滅多に無いのに……いいなあ……」
「スコにやん……!!」

迂闊に世間に顔を晒せないため、自ら私に軟禁される形の生活を送っているスコさん。彼自身がこの生活を望んでいるのは確かだが、決して好き好んでやっている訳ではない。

気兼ねなく会話ができる相手は私達ぐらいだけだし、遊びに行ける場所もかなり限定される。近所のスーパーやコンビニに行くのですら変装が欠かせない。たまーの外食だつて変装用のマスクを付けたまま。さぞ鬱陶しいだろう。ストレスが溜まるのも当然だ。

だからか。私がこの仕事の話をした途端、今のように思い切り拗ねている。要は参加させろと言いたいらしい。

そもそも始まりは、私が仕事でそこそこ懇意にしている相手から、ある相談を受けたことである。

その内容とは、自分がこれから変装しようとしている相手を調査していたら、その周辺に まるで誰かをプレス機にかけようとしている気配を醸す人物まで見つけちゃつ

ただだけコレ放置しちやマズイよね、的なものだった。

つまりあんたらの嫌いなコロナイが発生しそうな雰囲気だから止めに来てくれな
いか、という話であつた。

気付いたならそつちで対処してくれよと思つたが、彼には彼でやらなくちゃいけない
ことがあるらしく、こちらに相談を持ちかけた次第であると。

で、彼がそのコロナイが発生する確率が高いと分析したその場が、ミステリートレ
インとして名高いベルツリー急行であつた。

『うーん……だよねー、スコにゃんも偶には息抜きしたいよねー』

「偶にと言わずに毎日でも良いから」

「立場的に無理では……？」

『……分かつた！　じゃあスコにゃんの席も取つておくように都合してもらおうか！』

「!!」

コロナイ阻止のためにベルツリー急行の予約取りたいんだけど、その時の作戦はど
うしたら良いかと相談した友人との電話すると、なんとスコさんの予約までしてくれ
る
と言う。

「久しぶりの列車旅だ。いつも以上にしっかりと変装していかなきゃ……!」

さつきまでめちゃくちゃ拗ねてめんどくせーと思つたが、私を抱え上げて心底嬉しそ

うに頬を紅潮させて笑うスコさんを見てたら、どうでも良くなった。

「……じゃあ、私らが仕事する分、スコにゃんは、めいっばい列車楽しんでね」

「ああ、そうさせてもらおう！」

守りたい、この笑顔。

コロシアイ阻止の他、スコさんの気分転換という超重要な目的も加わったそのミス터리ートレインの旅で、まさかあんなことが起きるだなんて。この時の私には、知る由も無かったのである。

今までそんなに気にしたことは無かったが、世界有数の財閥のご令嬢を幼馴染に持っているなんて、実は結構凄いことなんじゃないか？

オレと同じくそのご令嬢の幼馴染の、その家に居候する小さくなったオレの、そのまた友人というだけで年に1度しか運行しないミス터리ートレインに乗れて喜ぶ少年探偵団を見ていたら、唐突にそう感じた。

東京駅に到着したSLを模した列車の前で、キッドがここに来る予告を出した裏事情を知ったり、俺達とは別口で参加している世良と会ったり、調子に乗ってポア郎なんて

名乗っちゃってるとオツチャンを諫めたり。その時であった。ホームの向こうが急に騒めきだしたのだ。

「うわっ、何だアレ!？」

元太の身も蓋もない感想通りの光景がそこにあった。直感的に、ヤベー奴らが来たと肌で感じた。

「ねえ……やっぱり止めよう？　ワガママ言ったオレが悪かったから……」

「なーに言ってるんの猫さん！　せつかくこの格好で乗車する許可も貰ったんだし、うんと楽しまなくっちゃ！　ねー、鹿ちゃん！」

「そうだよ、お馬くんのこの発想はどっか狂ってるけど、こんな機会そうそうあるもんじゃないよ！」

「今狂ってるって言った？　鹿ちゃん？　ねえ？」

耳が折れた丸顔な猫。真っ白な馬。角が無い鹿。

やたらリアルな動物の被り物をした3人組が、そこにいた。

「え、えーっと、ご予約された……ば、ばかにやんトリオ様でお間違い、ないでしょうか……?？」

「間違いありません！」

ばかにやん
馬鹿猫ってまんまじゃねーか!!!

あろうことかオレ達が今乗ろうとしているベルツリー急行に乗るらしいそいつらを、笑いを必死に堪えて口元を歪める乗務員が応対した。

「オレ達の部屋は6号車だよ。一等車は流石に予約できなかった」

「い、いいっていいって、十分だつて。車体見られただけでも満足したから」

「はいはい逃げないでねえ猫さん、思う存分列車の旅を満喫しようねえ」

「勘弁して！」

ちよつと待て6号車つてオレ達の部屋もある車両じゃねーか。期待していたのとはまるで違う方向性のミステリーの塊みたいな奴らが御近所さんとかどんなテロだよ。

「ね、ねえねえ、お姉さん達！ 面白い格好しているね！」

だと言うのに、何故オレはその人達に自ら話しかけに行ってしまったのだろうか。オレの探偵としてのプライドが、このまま彼らを見捨てることを許してくれなかつたとも言おうのだろうか。

猫の被り物をした大人の男性と思われる人物を豪快にズルズルと引きずる、鹿の被り物をした蘭と同じかやや小さい背格好の人物に話しかけると、その人は驚いたように言った。

「何とまあ、お姉さんだつて！ よく私の性別が分かつたね少年！」

え、驚いたのそこ？

確かにその人の首から下は真っ黒なコートに覆われ、体の起伏が殆ど見えない。被り物に変声機が仕込んであるのか、声も不自然に変えられている。

「だって、その被り物の鹿には角が無いから、女性かなーって」

「うわー凄いい、この子天才だよお」

「いや天才って……こんな列車乗るような子供なんだから、それくらいの推理はできて当たり前なんじゃ……」

「つーかソレ、元々そういうつもりで作ってもらった物だし」

「ほほう、なるほど！ アホは私だけだったというワケだな！」

その被り物オーダーメイドかよ!!!

もう何なんだ、何なんだこの人達。流行りの芸人かと思っただが、テレビで見かけていたら絶対に忘れられないレベルのインパクトだ。しかしその他の一般人と言われて納得できるような人達でもない。

「鹿ちゃんのアホと言うよりズレてる感じだよ！」

明るい口調だが何処かトゲのある馬。

「大丈夫、ズレてない」

マスクの位置を気にする立派にズレた鹿。

「2人揃ってズレてるよお前ら。こんな格好で外を出歩けるあたりから既に……」

そして常識人の猫。

このメンツで芸人じゃないだつて？ 信じられない。多分名古屋に何かの営業に行く人達だと思う。

「そもそもどうしてそんなカツコしてるのー？」

ああ、オレが話しかけちゃったから近付いても問題無しだと思っちゃったんだな。

歩美のそんな興味津々の声が聞こえてきたかと思えば、オレの後ろには灰原を除いた探偵団の奴らが勢揃いしていた。敢えてオレが避けていた話題に踏み込めるあたり、やっぱこいつらスゲーわ。

「それがなー、本当は猫さんだけを変装させてあげれば良かったんだ」

触れちゃいけないであろうその話題に、ズレている鹿さんが快く答えてくれた。

つて、猫さんが最も変装すべき人？ 一番の常識人である猫さんがか？ それは意外だ。

「だけど、猫さんだけにそれを強いるのは気の毒だと思つてね！ それでオレ達も一緒にやることにしたんだ！」

確かに狂つてんなこの馬。どうしてそこからそんな発想になったんだよ。どう考えてもただの悪ノリじゃねーか。

「猫さんはネコだし、お馬くんはウマだし、だったら私はシカだよなつて……！」

鹿さんは空気を読むべきところがズレていた。

「そもそもこれを変装だと言いつらも、俺は理解できない……」

猫さんのその嘆きに全てが集約されていた。

「つーかよ、何で猫さんは変装しなくちゃいけないんだ？」

「それは愚問つてやつだね！ 正体をバラしたくないからさ！ 変装つてそういう人間が使う手段だろ？」

「猫さんはな……本当に複雑な事情持ちで、普段から家に籠らなくちゃいけない人なんだ。でも、ずっとそんなんじや息がつまるだろう？ 外でパーツと羽目を外させてあげられる機会を窺つてたら、運良くこのベルツリー急行の席が取れたんだあ」

「あつ、もしかして、お忍びつてやつですね？」

「そーそー！ そんな感じー！」

猫さんの素性はともかく、動機は至つて良心に溢れるものだった。その結果こうなるつてホントこの世はどうかしてる。

とにかく、見た目のインパクトが物凄いで、この人達に関しては余計な警戒はしなくても良さそうだ。奴らがこんなアホな真似をするとは到底思えなかつた。

例え警戒するべきだとしても、馬の人だけだな。彼の言動からは何故か胡散臭さしか感じられない。事情持ちの猫さんはそこそこに。ズレてる天然の鹿さんは……完全放

置でも良いか。

そう結論付け、彼らとの話を切り上げて、さあそろそろ列車に乗り込もうか、と言う時。猫さんの苦笑するこんな声が聞こえてきた。

「……確かにいつものマスクより息苦しくないけどな、これは変装じゃなくて、もう仮装の部類じゃないか」

「だよねー！ オレも薄々そんな気はしてたよ！」

「嘘つけ。最初からそのつもりだったろ。こんな格好、場違いにも程がある」

うーん、やっぱり馬の人は悪意があるな。

「えっ？ 場違いなの？」

そしてやっぱり鹿さんはズレていた。

「コレ仮装パーティーも兼ねてるんじゃないの？」

時が、止まった気がした。

鹿さん。

それ、どういう意味で言ってるの。

猫さんも馬さんも固まっている。

「……アレ？ 違ってた？ 他にも結構な人が仮装してない？」

某FBIや某母さんが咳をし損ねたような声を出したのが聞こえてしまった。

待つて待つて待つて!!!

一番ヤバイの鹿さんだったあああ!!!

「ふっ、ふふふふふっ」

「しっ、し、鹿ちゃん、その人達、多分、仮装じゃなくて、変装の方……」

「え？ 仮装と変装ってどう違うの？ 姿と声変える点では私らと大して変わらな

？」

「や、やってることは同じでも、仮装と変装では目的が違うんだよ……」

「~~~~~」

「いやでも、人間が人間に仮装するのは意外性に欠けてつまないねえ」

「鹿ちゃん!!」

意外にも馬さんの方がフォローに回っているその一方で、猫さんは腹を抱えてその場に蹲り肩を震わせ、鹿さんに至っては優勝はもらったと謎の勝利宣言までしている。ア
ンタは誰と何を競ってるんだ。

自分の変装をあのかかにゃんトリオと同レベルだと暗に言われ、動揺と絶望が隠せていない気配がチラホラ。始まってないのに終わったぞオイ。

……いや待て、逆に考えろ。天然な鹿さんが天然で発言しているんだ。きつとそこに嘘は無いはず。だとすれば、これは千載一遇のチャンスではないか……!? オレはひそめた声で彼女に訊ねた。

「鹿さん鹿さん……!」

「おー、どうしたの天才少年」

「鹿さん達を含めて、どれだけの人が仮装パーティーしてるのか教えてほしいんだ……!」

「うーん、ネタバレしちゃ悪いから詳しく言わないけど……片手じや全然足りないかな!」
テレビで見たことある有名人が何人もいるから、とつても豪華だね!」

ばかにゃん
馬鹿猫トリオ3人に、母さんと昴さんで5人。

片手で足りない上に、複数の有名人。と言うことは……。

「ありがとう鹿さん! 物凄く参考になったよ!」

「いえいえー、どういたしまして」

はいベルモット来てまーす! 鹿さんに身バレしてまーす! 元女優の母さんのことも多分バレてまーす! マジやべえわ。

だが、母さんと昴さんのプライドを犠牲にしてもお釣りがくる情報だ! これは本当に大きいぞ! ありがとう鹿さん!

こうして波乱の予感しかないミステリートレインの旅は、ついに幕を開けた。

今オレ達が被ってる動物マスクは、実はそのふざけた見た目に反してかなりハイテクだ。暇つぶしにとは言え、入間ちゃんが作ったものだから、まあ当然だよな！

マスク表面には、かつての学園生活でオレ達を監視していたようなマイクロカメラが複数仕込まれ、内側から見るとまるでマスクが透けているかのようにカメラが写す光景が裏側に投影されている。

そして着用者の視線で操作でき、どこを向いていようが常に任意の範囲を注視できるようなっている。更に通信機能付き。通気性が抜群で着け心地が良いことは勿論、それでいて内側からの声が漏れない防音仕様によって、通信内容が外部に漏れる心配も無し。外部に出す声は自在に選択及び編集が可能。

ここまで来ると最早被る秘密基地だよな。

ゆくゆくは更に隠密性の高い通信機器を開発する予定で、このマスクはその繋ぎに過ぎないらしいのだが、それにしても力が入り過ぎだと思う。被ってるだけでまるでコッ

クピットに座ってるような気分になる。これ楽しいわ。

『じゃあ早速コロシアイ妨害作戦会議を』

『あ、もう手は打つといた』

『はーやーいー』

予約した6号車の一室にて。この被り物を嫌がっていた猫さんは、あの大笑いで何か
が吹っ切れたらしく、早速ウキウキしながら列車内を探索しに行った。残されたオレと
鹿ちやんで今回の仕事について通信内で話す。

『動機は怨恨。5年前、窃盗の証拠を隠滅するために起こされた火事で亡くなった奥さ
んの敵討ちつてところかな。クロ候補が狙ってるのは、その窃盗と放火をやらかした人
間』

『その2人が年に1度しか走らない同じ列車に乗ってるなんてどんな確率なのさ』

『いやいや、だからこそだよ。この前鹿ちやんにも調べてもらったでしょ、運行開始時か
らこの列車に乗り続けている客の顔と名前』

『…なるほどー、どっちもこの列車と火事の関係者つてことなのかあ』

コロシを防ぐにあたり、こつちが最低限把握するべきは、クロそのものとクロがそれ
を行うに至った動機と、それを実行する相手の計3点。

誰が、何故、誰を、コロすのか。犯行がバレないようにする面倒なトリックの解明は、

その後のことなので二の次三の次。クロとそのターゲットの特定は勿論のこと、オレ達は何より重視しているのは動機だ。ここを対処しなくては何の意味も無い。人によっては何度阻止しようがいくらでも繰り返す。

……オレ達からすれば動機を探るのは当然の感覚だが、世間では何故か軽視されがちだ。ワケわかんないよね。

事前に怪盗くんによる情報提供があつたのは大きかった。おかげでこの動機について深く調べられた。うん、やっぱこういうのは人脈がモノを言うね！

『今のところ、まだ本当に実行するか迷っていたから、ちよーつと後押ししてあげただい』

『お前なんてことを』

『いいのいいの、ああいう感情は半端に燻らせておく方がマズいから。パーっと気持ち良く清算できるキツカケを作ってあげなきゃ。幸いにして凶器は拳銃だったから……』

『そっか、死んだフリの弾だね』

『当ったりー！』

復讐相手を確実に（社会的に）ぶつ殺せる弾だと言ってターゲットに手渡したのは、俺達御達の死んだフリ薬を撃ち込む弾丸だ。実際に銃口から飛び出すのは体内で吸収される極細の針だから、殺傷力は極めて低い。だが効果は抜群だ。

しかし、傷口も目立たないため、それだけでは銃殺されたように見せかけることができな。主に他人を咄嗟に死んだフリさせるときに使う物だね。

『あの人がオレの言葉を信じてあの弾を使うか、それとも普通の弾丸を使うか。いずれにせよ、あの弾が発射された場合は内蔵チップが壊れた通知が来るから、その時は鹿ちゃんの出番だよ。傷口のメイクの用意は怪盗くん頼みであるから』

『分かった……あ』

噂をすれば。マスク内の画面に弾丸使用のマークが表示された。その瞬間、鹿ちゃんの姿はこの個室から消える。

全く。こういう推理物における反則を使わなきゃ何も救えないこの世の中って、ホントどうかしてるよね！

「……コイツ、本当に生きてるのか？」

「大丈夫ダイジョーブ、ギリギリの回数で心臓は動いてるよ。効果だって自分達の体で実証済み」

「そういうことをサラツと言えるのホントやべえと思う……」

「こんな薬他人で試せるわけないでしょ！」

「いや、そつちじゃなくて、実際に試すところがだよ」

音も無く俺達の部屋に突然現れたそいつにビビる暇もなく、腕を掴まれたと思つた次の瞬間にはまた別の部屋に移動させられていた俺。そこには死体同然に目を見開いたままグツタリしている小太りの男がいた。事前に打ち合わせしてなかつたらどれだけ混乱していたことやら。

「……ところでお前、さつきもよくも言つてくれたな」

「何を？」

「オレの変装を仮装呼ばわりしやがったことだよ」

「え？ 違うの？」

「違うわ!!」

他は基本的にボンヤリしている癖に、何でそこだけ異様にズバ抜けて感覚が鋭いんだよ!!

息をするように人間を正確かつ瞬時に判別できるこいつの前では、どれだけ変装に巧妙な細工をしようが何の意味もない。下見のための潜伏中、虹彩のシワの数と形がテレビで見た通りだという理由で正体を見破られた挙句、サインを求められた時のオレの気持ちに分かるだろうか。とりあえずオレは近年の目覚ましい映像技術の進歩を恨んだ。

「……協力してやるんだから、ついでに教えてくれ。他に誰が“仮装”してるんだ？」
「それがね、凄い大物さんなんだよ！ハリウッドの超有名な現役の女優さんに、日本の伝説的な元女優さんとか！でも元女優さんは仮装と言うより、軽いお忍びコーデ的なものだったなあ……」

「結局あんたらと俺達を除いて何人だよ」

「えーつと……女優さん2人ともう1人、全然知らない人」

「3人か」

馬鹿猫3人に、俺とジイちゃんで2人。更に別口で3人。合計8人か。そりゃコイツからすりゃ立派な仮装。パーティーだわ。

なんて若干現実逃避気味になりながらも、小太りの男のこめかみに生々しい銃創のメイクを施していく。向こうが提供した本物っぽい匂いや粘性を持つ血糊を使い、弾が頭を貫通して飛び散った血液という演出も忘れない。

「俺のことと言い、女優に詳しくったり……変なところでミーハーだよな、あんた」
「テレビとかで輝いてる人を見るのが好きなんだ。アナウンサーさんもカッコいいよねえ」

「その割には忘れっぽいけど……」

「興味ないことはとっとと忘れる主義でして！」

「主義っつーかそういう体質なんじゃねえの、別のことに頭を酷使してんだから」

超能力者ってやっぱり脳みその構造が普通とは変わってるんだろうか。それともこいつに限ったことなんだろうか。人を判別するために、顔ではなく虹彩のシワや手首に浮き出る血管の模様を覚えるあたりとか。ホントこいつ何処見てんだよ。

「……よしつ、こんなもんでどうだ」

「うわあ、完璧な死体だあ。ありがとう！」

「何の何の。こんなことで殺人を防げるならお安い御用だ」

こいつにアツサリ正体を見破られたことで生まれた対抗意識と好奇心。それらに駆られた先で知ったのは、あの世界中を驚愕させた大事件であった。

あの事件の生き残り達は皆、無用な殺人を心から忌み嫌う。この何処かトチ狂った超能力者もその例に漏れない。

「じゃ、早いところ元の部屋に戻してくれ」

「分かってますとも！」

あいつの手が俺の背に触れたその瞬間には、俺はジイちゃんを待たせている8号車の部屋に戻っていた。つくづく便利な力だが、それも含めてあの天才集団を頼るのは……
何かに負けた気がして、悔しいんだよな。

そして、それからしばらくして。

かの伝説的な劇団プロデューサーによる殺人劇（偽）は、その幕を開けた。

漆黒の特急（ミステリートレイン）編 with V3

②

少し歩いてみて分かったことが1つ。

この列車、やたらアルコール臭い。

クシビが駅のホームを歩くだけで察知した“仮装中”の人間は、俺達を含めて8人。そのうち俺達と協力関係にない人物が3名。

クシビによれば、名前まで分かったのはどちらも有名な女優である工藤有希子とシャロン・ヴィンヤード……いやもうこの時点でツツコミどころしかない。特に後者。

あのベルモットの変装までアツサリ見破っているだけでなく、現在彼女が表向きの仕事で使っているクリスではなく、死亡したとされるその母親のシャロンであると名指しているのだ。

おいまさか、あの親子はダブルキャストだったのか。そう訊ねると、双子やクローンであろうと血管の走り方まで全く同じ生き物は存在しないでしょと言う、さも当然と言

いたげな言葉が返ってきた。どう返せば良いのか色んな意味で分からなかった。

そして残る一人。テレビに出るような人物ではないため、変装をしていることしか分からないソイツの正体も、クシビからの証言で分かった。

現在のベルモットが似せている体型が、ソイツの中身とよく似ているようだ。

『ミャーン』

「っー」

被り物におふぎけ機能として内蔵されている猫の鳴き声を発せば、ギョツとしたように肩を跳ねさせ、俺が廊下の角から顔だけ覗かして見ていることに気付くと、即座に踵を返してそそくさと去っていくその姿。

うん、ライだな。この目元は間違いない。録画した映像を拡大して確認する。FBIの赤井秀一……と名乗っていたよな。何でベルモットはあいつに化けているんだ？

「ぼ、僕に何か用でも……？」

そしてゼロはゼロで、元気にバーボンしているようだった。久しぶりの再会だと言うのに言葉を一切交わせないのが本当に歯痒い。そして俺を見る目があからさまに引き攣っていた。

ふと、側面のカメラが扉の動きを感知した。薄く開いていたのが素早く閉じたのだと、映像を巻き戻して確認する。閉じる直前のその隙間に見える人物の画像をクシビに

送信すれば、『仮装中』の3人目だと返事が来た。こいつがライこと赤井のようである。

つまり、この列車には俺こと猫頭のスコッチ、ライに扮したベルモット、姿を変えたライ本人、そして唯一素顔で勝負するバーボンが乗っている。悪酔いしそうな字面だ。と言うかこの動物マスク、めちやくちや目立つ外見だが、機能は物凄く諜報活動に向いている。恥や外聞を犠牲にする覚悟さえすればいくらでも情報を集め放題じゃないか。その上顔も声もバレない。

見た目さえ、見た目さえコレでなければ……。

『ミイ』

そして今、不運にも俺と正面で鉢合わせて固まるバーボンに向け、返事の代わりに適当に鳴くと、あいつの口元も引き攣った。

どうやら仮装パーティーショックは発言者のクシビのみならず、被り物をしている俺達全員に効果をもたらしたようだ。ベルモットもバーボンも完全に俺に対して尻込みしている。

そう、警戒ではなく尻込み。端的に言えば俺達のが物凄く怖い。どんな形であれ関わり合いたくない。その気持ちは良く分かる。何せかつては俺も同じ立場だったのだから。

考えてみる。命懸けで身分や姿を偽っているのに、それをただ一瞥するだけで看破する得体の知れない仮装集団がいるんだぞ。任務放り出して帰りたくなくてもおかしくない。

よく人間は未知に恐怖すると言われるがまさにそれだ。恐ろしく疑り深い某銀髪野郎の勘の良さも恐ろしかったが、次に何してくるか全く予測がつかない奴の方がよっぽど怖いに決まってる。対策の立てようも無いのだから。

そして実際、クシビはそんな人間の典型例でもあった。あの変装看破だってほんのジャブ……のつもりですらない。手を出される前に無自覚のまま相手を爆散させるまでがいつものパターンだ。悪の組織の総統たる彼が護衛に選ぶのも分からなくはない。そんな危険極まりない連中に一方的に正体を掴まれたとなれば。あのベルモットの慌てようも、目の前のゼロの狼狽えようも、当たり前と言えば当たり前前の反応である。

しかし……どうしようこの状況、意外に面白い。向こうは必死だつてことは十分承知しているはずなんだが……。

「あつ、猫のお兄さんだ！」

「猫きーんー！」

被り物の中で堪えきれずにニヤニヤしていたら、不意に声をかけられた。見ればそこには、列車に乗る前に話しかけてきた子供の一団が、保護者と思しき女子高生2人に付

き添われて廊下を歩いてくるのが見えた。

すると、ゼロがこれ幸いと声を上げる。

「おや蘭さんっ！ あなたも乗っていらしたんですねっ！」

「まあ、安室さんじゃないですか」

そんなにムキになつて俺から視線を外さなくても良いじゃないかゼロ。ちよつと寂しいぞ。こんな猫頭の相手はそんなに嫌か。そりやそうだよな。

俺は俺で、子供達に話しかけられたので、彼らの目線に合わせるべく屈む。

「猫兄ちゃんは何が起きたか知らねーのか？」

「何がって、さっきのアナウンスで言つた事故のことか？」

「うん、本当に殺人事件が起きちゃつたの」

ああ……本当に起きたのか。

彼らがいる以上はきつと死んだフリだろうが。阻止するとは言つていたが、殺人の決行自体は止めなかつたらしい。

「すまない。俺は何も知らないんだ。列車に乗つてからは、ずっとあちこちを歩き回つていたんだ」

「探検してたんですわね！」

「そうだ、探検だ。……久しぶりの旅行で、高揚してるんだ」

旅行ではしゃぐなんて、我ながら子供っぽい。その上、正体こそ明かせないが友人にもこうして再会できた。俺は自分の思っている以上に浮かれているらしい。

今日ここに来て、本当に良かった。

ふと、プリーツ型のマスクをした少女がジッとこちらを見つめているのに気付く。

「風邪かい？」

「え、ええ……」

病を押してでも来たかったのか。

「無理はするなよ。せつかくの旅行で体調を悪くするなんて、悲しいもんな」

「……」

おずおずと頷き返す少女。

……でもこの子、何処かで見えた気がするんだよな。何処でだっけ？ クシビが関わっ

ていたような……ダメだ、今ここでは思い出せない。とりあえず写真撮っておくか。

「喉が痛かったら鹿に言えばいい、フルーツ味のノド飴くれるぞ」

「あり、ありがとう……？」

「あはは、本当は知らない人から物をもらっちゃダメって言うべきなんだけどなあ」

今日の俺はトコトン浮かれているようだ。今日一日ぐらいは、許してほしい。

彼は狐につままれたような気分であった。いや、実際には馬につままれたのだが。

『ねえおじさん！ オレ達が手伝ってあげるよ！』

列車の乗車直後、突然彼の部屋を訪ねてきたのは、白いスーツを着て白馬の被り物をした男であった。成人男性にしてはやや低めの身長。声は変声機で変えられ、怪しいという単語がそのまま愉快な方向で人の形になったかのような風貌であった。

しかし、口にするのは殺人や復讐といった物騒な単語ばかり。彼本人にも全くその気が無かったワケではなかったが、実際にそれを口にされると、覚悟よりも恐怖の方が勝ってくる。

『オレ、ゼーンぶ知ってるよ。奥さんの敵討ちがしたいんでしょ』

そんなことはない。自分はただ、奴が何を思っただけにこのかを確認したいだけだ。

咄嗟にそう言いかけた口は、言葉を発することなく閉じた。それを言っただけで、奴と少なからぬ因縁があることを認めてしまうのも同然だからだ。

いや、そもそもこの馬は何故そんなことまで知っているのだろうか。誰にも悟られぬよう、慎重に準備をし続けていたのに。

そう思案したところで彼は自覚した。

誰にも悟られぬように行動した時点で、やはりその気が……奴を手にかけてようとする気があったのだと。

『大丈夫、オレ達はあるの味方だ。その感情は、間違つてないよ』

胡散臭い。そうとしか言いようがない。

だが不思議と、その言葉が嘘であるとも思えなかった。

『もしおじさんがソイツをぶつ殺したかったらこの弾を使って。確実に息の根を止められる魔法の弾丸だよ！』

手渡されたのは、一見彼が用意したそれと殆ど変わらない一発の弾だった。

『それを使ったら、オレ達はすっかりあなたのことサポートしてやるからさ！』

それだけ言つて、馬マスクの男は部屋から去つていった。言うだけ言つて行つてしまった。まるで嵐のような男であつた。

これは、自分への牽制なのだろうか。自分の計画を止めに来たのだろうか。そう考える方が自然なような気がする。

しかし、あの男が言つた言葉。『その感情は間違つていない』の一言は、彼の中に強く響いた。ずっと己を苛み続けた、この後ろ暗くも苛烈な感情。それを赤の他人に認めてもらえるなんてことは予想もしていなかったし、期待もしていなかった。

彼は手のひらに乗せた銃弾を見て悩む。

本当にこんなことが許されるのだろうか。これを使うだけで、彼らは本当に自分の味方となってくれるのだろうか、と。

結局彼は、悩み抜いた末にその弾丸を使った。殆ど衝動的であった。

人を殺めておきながらもあんな反省のカケラもない態度を見せられて、冷静でいられるわけが無かった。

半信半疑で拳銃に仕込んでおいたあの弾丸。確かにそれは特殊なものだったようで、何故か撃ち抜いた頭に穴は開かなかつたが、復讐相手はグツタリと体を弛緩させた。

そうか、血を流させず余計な証拠を減らせる仕様になつていたのか。ついに取り返しのつかぬことをしたとボンヤリと霞みがかつた頭で、そう推測する。

『お疲れ様。 やっちゃったねえ』

自分と事きれた復讐相手しかいなかったはずの密室に突然現れたのは、鹿頭だった。悲鳴もあげられぬほど憔悴していた彼は、本当にサポートを寄越してきたと少し場違いな感動を覚えていた。

『この後もおじさんの計画通りに動けば良いよ、こっちはそれっぽく仕上げておくからさ』

鹿頭は腰が抜けた彼を立ち上がらせ、叱咤する。そうだ、まだやらなくてはならない

ことがある。アレを、回収しなくては。

『……本当に、君達は、私の味方をしてくれるのかね……?』

部屋を出るタイミングを見計らいながらそう訊ねれば、鹿頭は勿論だと力強く頷いた。

『私達は被害者の味方だよ!』

……確かに、そう言ったはずなのだが。

隠蔽してくれるのかと思いきや、事件はそのまま発覚し、名うての探偵による捜査が始まった。列車は終着駅まで止まらない。逃げ場は何処にも無い。

酷い詐欺にあった。いや、自分にはそもそも彼らを恨む資格もない。こんなことを考えた罰なのだろうと、証言を聞きにきた探偵達を見送った後、彼は自嘲の笑みをこぼした。

『クシビ、この子知らないか?』

部屋から出ようとしたタイミングで、スコさんから通信が来た。マスクはマスクでも、自分達のしているのとは違う、病氣用のマスクをした女の子の画像が同時に送られ

てくる。

『うーん？ 知らない。スコさんの知り合い？』

『いや……ただ、何処かで見た気がして』

『外に出られないスコさんが見たことあるって、だいぶ限定されない？ テレビとか？』

『少なくともその類のメディアではなかったはずなんだが……』

『今度は鹿さんだ！』

幼い声がスコさんとの会話を遮った。マイクが拾ったその声に、気を利かしたスコさんが黙る。通信は繋がたままだ。こちらに手を振ってくるのは、東京駅のホームで見た子供達と女子高生達だ。

『あの子？』

『そう』

女子高生の後ろに隠れる少女が、ついさつきスコさんから送られた画像の女の子であることが分かり、とりあえず自分が見ている映像も生中継する。

「鹿さん！ 猫さんから聞いたんだけど、ノド飴くれるって本当？」

『……すまない、俺が勝手にそう言った』

いや、別にそれくらい何ともないんだけどね。よっぽどテンション上がってるのね。

コートの内ポケットから列車に乗る前にコンビニで買った飴を取り出す。この際だ、

全員に配つたろ。

「ホントだよお、安っぽい市販のノド飴で良いなら貰っちゃってー」

未開封であつたその袋をバリツと開け、その開け口を彼らに向ける。子供達はそれぞれお札を言いながら、個包装された好きな味の飴を一つずつ取り出していった。戸惑う2人の女子高生達にも向けられ、お互いに顔を見合わせた後、ありがとうございますとお札を言いながら遠慮気味に手を入れた。

「ほら、おじよーさんもどうぞ」

「……」

残るはマスクの女の子のみ。一番ノド飴が必要な立場だろうに、警戒心も一番強い子のようにあつた。まあこんな鹿頭相手じゃ当然の反応だろう。

彼女はしばらくノド飴の袋を睨んでいたが、私がそれを引つ込める気配が無いのを悟ると、諦めたように手を突っ込んでくれた。すぐに引っこ抜かれた彼女の手に摘ままれていたのはメロン味だつた。好きな味選んでつて言ったのに無作為に取っちゃつて！でも小さくお札は言われた。ただの良い子だ。

「あつ、そうだ鹿さん。この女の子の人を見ませんでしたか？」

その場で飴を口にした子供のうち、最も丁寧な口調の男の子が、自分の携帯電話を弄りながらそう訊ねてきた。すっかり警戒を解いているようだ。甘味は偉大である。

スコさんにも人を訊かれたし、今日はそういう日なのかな。そう思いながら画面を覗き込めば、そこには目の前にいるヘアバンドをした女の子を横抱きにする女性が映ったムービーが再生されていた。

誰やねん。その前にどういうシチュエーションなんだ。これ背景燃えてね？

『思い出した。助かったぞクシビ』

お役に立てたようでも何よりです。特に何かした覚えも無いけど。スコさんとの通信は向こうから切られた。

「ほら、この人もベルツリー急行のパスリングをしているので、きつとここにいるんじゃないかと思ってるんです」

「歩美達の命の恩人なの！」

「会ってお礼が言いたいんだけど、なかなか見つからねーんだ」

「んー……悪いけど見てないなあ……」

強いて言うならそこにいるマスクの女の子と声がよく似てるよね。あと髪色や髪型も。その子を高校生くらいにしたらそんな感じじゃないかな。

「ここまで探しても見つからねーなんて……」

「もしかしたら、ここにいないのかも」

「こうなったらネットで探すしかありませんね」

私の答えにガツカリした子供達その言葉は、流石に聞き捨てならなかった。

「ちよつ、ちよちよ、待った待った。ダメダメダメダメ、それだけは止めとけ！」

「え？ 何でですか？」

何でじゃないのよ！

「世の中はキミ達みたいな良い子ばかりじゃないんだ。悪い大人も使うネットにそんな個人情報勝手に流しちゃイケマセン！」

「でも……」

「キミ達がその人にお礼を言いたいのなら、尚更やっちゃいけないことだよ。世の中にはキミ達の想像もつかないような悪いことを平気でやらかす人間がワンサといるんだ。命の恩人がそんなアホンダラに迷惑をかけられたら、キミ達も不本意だろう？」

「そ……そうですね！ 止めます！」

よし、素直な良い子達で私は嬉しい。何だか大きなブーメランが脳天に突き刺さった気がするがこれくらい平気だ。……ネットやテレビのような不特定多数の部外者に漏らさないだけマシだと思う。

「……ノド飴、もう1個要らない？」

「えっ」

マスクの女の子にもう1つノド飴をあげた私は、お馬くんの言う通り分かりやすい奴

だと思う。

ここまで盛大に計画が破綻するとは全く想定していなかった。

「あら、沖矢さん！」

「昴お兄さんも来ていたんだ！」

『キョンツ!!』

どうしてあの一団に例の鹿まで混じっているのだろうか。

子供達に手を引かれているその鹿は、俺を見るなり鋭い鳴き声を発した。ご丁寧にも周囲に注意を促す警戒音である。その鹿の真後ろにピツタリくつつき、こちらの様子を警戒心剥き出しで窺う保護対象の姿まであり、目眩がしそうになる。

確かに変装こそしているが、決して敵ではない。いや、変装している時点で怪しきしかないのは分かる。分かるのだが……何故よりもよって、その鹿の方を信頼しているんだ……!?!

「あなた達も来ていたんですね」

「本当、偶然ですね！ こんな場所でこんなに知り合いに出会えるなんて……」

「ほーんと、凄い偶然よね？」

「おや、他にも知り合いが？」

「ええ、そうなんですよ」

知ってる。安室君のことだろう。俺も猫頭に絡まれている気の毒な彼を見かけた。そして今度は俺が鹿頭に絡まれそうになっているわけである。状況を探るため部屋から出たばかりに。最悪だ。

「……それで、こちらの方は？」

「鹿さんですよ！」

「凄い格好してるけど、中の人はとっても良い人なんだぜ！」

『キョソツ!!』

少なくとも俺に対しては友好的ではないのは確かだな。ここまで面と向かって堂々と警戒されたのは初めてだ。俺を例の組織絡みの人間と疑う彼女が信用するのも分かんなくはない。納得はできないが。

「鹿さん、もう一回さっきの手品見せてくれよ！ 昴の兄ちゃんならタネが見破れるかもしれないねーしきー！」

「手品、ですか？」

「十円玉を使ったマジックなの」

もしかして、コインの移動マジックのことだろうか。サムパーム……親指と人差し指の付け根隠し持つテクニクを使い、コインを自在に消したり現したりするように見せかける、あの。

「ホー……それは興味深いですね」

「鹿さんったら凄いですよ！ 十円玉を握った手を開いたり閉じたりする度に、製造年が1年ずつ増えていくんです！」

「……??」

待ってくれ。そんなパターンは初耳だぞ。

「凄かったよねー！ 十円玉が五十円玉になって、百円玉になって、五百円玉になって！」

「最後は両手で包んだ五百円玉が、50枚の十円玉を集めた棒に両替されてたんだ！」
「!?!」

ちよつと待ってくれ。十円玉に戻るならまだしも、重量も体積もある十円玉の棒金を手首付近に隠せるトリックは流石に想像がつかない。どうなっているんだ。

「是非見せていただけますか？」

『グ、グ、グ……!』

純粹にトリックが気になって直接声をかけたら、ついに威嚇されてしまった。そんな

に俺は怪しく見えるのか。誠に遺憾である。しかし手品は気になる。俺は一体どうすれば。

と、その時。

『ブアーヒヒヒヒヒイン!!!』

聞く側の心境によつては、含み笑いだらけにも聞こえる馬の嘶きが響いた。

「鹿ちゃーん！ 探したよー！」

何たる事だ、馬頭まで合流してしまった。今日は厄日か。

「あつ、誰だよソイツ！ オレというものがありませんながら浮気だなんて、酷いやあ!!」

『キョンツ!!』

『バルルルルウ!!』

『ピヤツ!!』

『ヒヒイン!!』

頼むから人間にも分かる言葉で会話してくれ。こんな馬鹿コンビの理不尽コントに付き合えるほどの余裕は俺には無いぞ。

「……まあそれはさておきましてと。そろそろ仕上げに取り掛かるから、準備しに行こうー！」

「あいさー」

おふぎけに満足した馬頭に連れて行かれそうになる鹿頭に向け、あろうことかその後ろにいた彼女が名残惜しそうに手を伸ばしかけたのが見えてしまった。だから何故そこまで心を許しているのか。

ボウヤの友人3人組のうちの少女が首を傾げ、馬頭に問うた。

「仕上げって……何の？」

「そりゃあ決まってるじゃないか！ このミステリートツアーを盛り上げるサイコーにリアルなショーの、クライマックスだよ！」

気分としては列車に乗る前からクライマックスを迎えたつもりであったが、まだコイツらは何か起こす気らしい。そろそろ許されたい。

漆黒の特急(ミステリートレイン)編

With V3

END

『おい運び屋、ちよつと』

「どうしたの怪盗くん、何か焦ってない？」

『大至急最後尾の貨物車に来てくれ』

「はいよー？」

**

*

「おらドンペリイ！ 迎えに来てやったぞ感謝しろやあ！」

約束した時間のキツチリ5分前。住所を教えただけで施錠をした玄関扉を無視し、室

内と外界を隔てるそのすぐ内側の三和土の上に前触れも無く突然現れ。

「はい到着ー」

出迎えた俺も玄関を通ることなく、一瞬であるビジネスホテルの一室まで攫われた。突然目の前に現れた俺に、そこにいた旧友は全く驚く素ぶりを見せなかつた。慣れ過ぎだろう。

「それじゃあ、私はカエデちゃんの家泊まつてくから、何かあつたら連絡してねえ」
誘拐犯の彼女が旧友に向けてそう言い、クルリとこちらに背を向けた瞬間には、その姿はもうどこにも無かつた。

あまりにも鮮やかで突拍子の無い現象の連続。実際にこの目にして体験までしても、それが現実起きたことであるとはなかなか受け入れられない。

「……靴持つてくるの、忘れた」

「あるある」

あるある、じゃない。普通は靴も履かずに外出なんかしない。事件性疑うわ。いやもうコレ立派な誘拐事件だった。

そんな数々のツツコミを飲み込み、とりあえず備え付けのスリッパを履き、手に持ってきた荷物を床に降ろす。久しぶりにこいつと飲めることに浮かれた俺が、あちこちの店で買い集めた酒類。缶ビールから瓶のワインまで……買い過ぎた。

「不知火さんって、体内のアルコールやアセトアルデヒドだけを飛ばすことはできる？」
「どれだけ飲むつもりだよ、自制しろ自制。そもそも彼女は生体内には干渉しないと決めているぞ、事故が怖いからって」

「じ、事故……」

想像した直後に後悔した。そこまで都合の良い才能というわけじゃないのか。

「気軽そうに見えるが、その実かなりの神経を使う作業らしい。生き物を運ぶ場合は特に正確にその輪郭を把握しなくちゃいけないようだな」

「ああ、それで変装を簡単に見抜けるわけだ」

「いや、アレは素だ」

「素かあ……」

まあそんな気はしてた。

……変装か。いつかは沖矢昴のそれを一瞬で見破っていたな。だが俺は、それよりとんでもない奴を見たことがある。あのベルモットの変装すら看破した、あの……
そこまで考えた俺は、その部屋の中である光景を発見し、その場で崩れ落ちた。

ベッド脇。無造作に置かれたキャリーケースの上に、スコティッシュフオールドの頭を模したマスクが鎮座していた。

「お前らだったのかよ!!!」

「お前にしては気付くのが遅かったな」

*

**

シエリーまでがこの列車に乗っていると知った俺は大急ぎで方々へ連絡を取った。真つ先に通信を交わしたのは、クシビが最近捕まえたという、今は発明家の会社で保護されている彼女の姉こと宮野明美。

何故シエリーがここにいるのか、そして小さな子供の姿になっているかは宮野明美にも分からなかったが、彼女が両親の仕事を継いだことを考えれば、何らかの薬剤による影響かもしれない可能性があると言う。

人を若返らせるなんて荒唐無稽にも程があるが、人を死の淵ギリギリで生き永らえさせる薬物もあるくらいだ。全く有り得ないとも言いきれない。

だとすれば、ベルモットやバーボンの顔をしているゼロがここにいる理由も察せる。

恐らくは組織から逃げたシエリーの始末。ゼロの場合、その上で保護の算段をつけていることも考えられる。

赤井もゼロと同じく、彼女を保護するべく動いていると見て良いだろう。あいつが組織に近寄る際に利用したのは、他でもないシエリーの姉だ。公私共に動機がある。

……いや、でもな？

いくら最終的な目的が同じだろうと、表向きに対立している以上は、お互いがお互いを邪魔し合って上手くいかないのではなからうか。

現に今、シエリー本人は全くの部外者であるクシビを頼っているらしい。確かに彼女であれば何が起ころうと守ってくれるだろう。

このままクシビに彼女の護衛を任せようか。いや、流石に何も事情を知らないクシビに任せきりにするのは不安だ。

何と言っても、俺が一番怖いのはクシビがゼロを敵視してしまうことだ。組織のバーボンとしてシエリーに近づくとあいつを見れば、ほぼ確実に自分への脅威とも見なす。そうなれば……。

「……すまない王馬、頼みたいことがある」

『へえ、珍しいね！ 猫さんがオレを頼るなんて！』

「ねえねえ、おばあさん達！ 小五郎おじさんが呼んでるよ！」

「ああ……そうかい。だそうですよ、住友さん」

「はい、奥様」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ねえ、おばあさん達ってさ、怪盗キッドとその手下でしょ？」

「知ってた！ ああ分かってたよこうなることは！ 乗る前から覚悟してたわ！ どう

せあの鹿頭だろ!?! あいつが何か余計なこと言っただろ!?!」

「うん、テレビで見える人がたくさん『仮装』してるって教えてくれたから、大体の目星が

つけられたんだ」

「だから仮装じゃねえっつーの!!」

「もしかして、あの人達と知り合いなの？」

「知り合いつつやあ、知り合いだな。ある意味今回の協力者でもある。つっても、どちら

かと言えばオレの仕事の方じゃなくて、むしろお前らの方なの」

「へ？ ボク達の方？」

「あの馬鹿猫……特に馬鹿の2人は殺人が大っ嫌いだな。オレが今回この姿になるための調査でそういう不穏な気配を察したと教えたら、わざわざあんな仮装してまで阻止しに来たんだよ」

「ええええっ!? ……でも、殺人は結局起きちゃったよ？」

「どうだかなあ？ あの天才バカのやることだから……まあ、楽しみにしてろよ」

「ふーん……？」

「で、お前はオレに何の用だ」

「あつ、そうだ。人助けついでにボクも頼みたいことがあつて」

「頼みごと？ オレ達のことを黙っておく代わりにって脅したろ？」

「分かつてるなら話が早いや！ 後で良いんだけどさ、この映像の女の人に“仮装”してくれない？」

「おう喧嘩なら買うぜクソガキ」

**

*

体内に摂取されたものはダメだが、喉に詰まったり誤飲したものでなら飛ばせたはず。だったらこいつの胃袋に入ってる液体全部飛ばしてくれないだろうか。血管に入る前なら間に合いそうな気もする。

なんてことを考えながら、俺は目の前で繰り広げられる親友の惨状を眺めた。

「俺が！ あの時の俺が！ どれだけ切羽詰まっていたか！ 猫被ってたお前に分かるのか！！ いいや分かってたまるかあ！！」

いや、今更間に合わないか。もう既にすっかり酒は回ってた。

「お前に分かるのか!? やつとの思いで化け猫頭を振り切って、やつとの思いで仕掛けた発煙筒を、片っ端から回収されていくあの光景を眺める気持ちがあ!!」

「すまない。そう仕向けたのはオレなんだ」

「神は死んだ!!!」

悪かった、悪かったってゼロ。

だからそんなに叫ぶなって。一応近くの部屋に他の宿泊客がいないのは把握してるが、そこまで叫ばれると居心地が悪い。

「バーボンを虐めるのはそんなに楽しかったか!? ええ!?!」

「ちよ、声が大きい」

「チクシヨウウこうなつたら俺もお前をスコにゃん呼びしてやる!!」

「お前今何徹目？」

「3徹だがそれがどうした!!」

予定変更。酒で潰してやった方が良いかもしれない。念のため、こいつの部下に連絡しておいた方がいいかもしれない。今夜はバーボンの方は非番らしいし。

ゼロは一頻り叫んだ後、スンスン鼻を鳴らしながらベッドに突っ伏した。お酒って怖い。疲れ過ぎていているゼロも怖い。

「悪かったよ。でも、クシビにお前を悪者だと認識させるわけにはいかなかったんだ」

「……分かってる。そうでなきや、俺はとづくに五体満足でいられなかった」

「そこだけ妙に理解が早いな」

「彼女の悪意の才能は、俺の方が詳しいと思う」

本当にそうかもしれない。ゼロが言うと言得力があり過ぎた。

「……俺に手を汚させないため、守るため、つてのも、分からなくはないけどな」

「うん」

「俺があいつらに、何て、言われたのか、知ってるのか……？」

その震える声に、俺は首を横に振った。

「湯葉野郎って、言われたんだよ……！」

それはまた反応に困るあだ名を付けられたな。

*

**

馬の人にとびつきりのシヨールを見せてやると言われ、いつも通り工藤君が毛利探偵を使つて事件の真相を解き明かす、その現場である7号車へと誘導された後。

「室橋さんは屋敷から絵を盗み……盗まれたことを隠すために、屋敷に火を放つたんですね？ 大勢の被害者を巻き込んで……」

「ええ……室橋は殺される前に言つてました。あんなに死人が出るとは思わなかつたてね……」

推理シヨールもいよいよ終盤。工藤君によつて特定された犯人は、その犯行の動機を語り始めた。

「あの火事で私の妻が……煙に巻かれて死んだつていうのに……」

彼が涙声でそう言つた、瞬間だった。

大きな音を立てて、この7号車と6号車を繋ぐ出入り口の扉が、勢いよく開かれた。「話は聞かせてもらった!」

「それではまいりましょう、ドキドキのおしおきタイム!」

そこに現れたのは馬のひと、鹿……ではなく、何故か黒牛に変わったマスクをしたあの人。何故変えた。変わるにしても何故鹿から牛に。

何事かと呆気にとられる私達の前で、動物マスクをした彼らは被害者の死体がまだある7号車のB室に突入した。おしおきなんて言うから、てつきり犯人の彼に何かすると思っただのに。

「よく眠れたかこのクソヤロー!」

「この世でやることあんだろゲスヤロー!」

開け放たれたその部屋からそんな罵声と、スパーンと何かを引っ叩く音、続いてガタガタと激しい物音が響いてくる。

そして……

「ケホッ……な、何だあ……?!? 何が起きたんだ? あいつは、俺は……?」

「おら立てやあ! 宇宙旅行の時間だ!」

「ヒイイ! なんだよお前らあ!」

なんと。

あろうことか。

殺害されたはずの被害者が、フラつきながらも、自分の足で立って部屋から追い出されてきたではないか。

これには工藤君も仰天し、隠れている場所から身を乗り出した。

「テメーの居場所が地獄にもねーってよ！」

「窃盗隠滅の放火で十何人も殺してたら、実刑判決出そうだねえ」

「な……は？ え……？」

乗客達から険しい目で睨まれていることに気付いた元被害者が、みるみるうちに顔色を悪くしていく。

ふと、あの人々がマスクを牛の頭に変えた意味を悟った。あの方は牛の頭。相方は馬の頭。何だ、そのままじゃないの。

「牛頭と、馬頭……？」

「おお、さつすが天才少年！ 大正解！」

工藤君が呆然として呟いたその言葉に、牛の人が楽しそうに返した。

牛頭馬頭。仏教における地獄の獄卒で、その名の通り、牛や馬の頭に人の体を持つ姿をしているとされている。

「二応鹿の頭でも通じるっちゃ通じるんだけどね、マイナー過ぎて分かりづらいかな

あつて」

手元の携帯電話で調べてみたところ、牛や馬の他、鹿、虎、獅子、猪の頭を持つ者もいるとか。だからつて、変なところに力を入れるのね……。

どういふ理屈でかは知らないけど、地獄から突つ返されたあの人は、この世でしつかり裁きを受けることになるみたい。

「と言うワケで皆様、お楽しみいただけましたでしょうかあ！」

「我らウマシカ改め、ウマウシプロデュースによるリアルサスペンスショー、これにて閉幕いたしますー！」

「ご協力いただいた乗客、観客、探偵の皆様、誠にありがとうございましたあ！」

「この後は終着駅までノンストップ！ 各々ごゆっくりお寛ぎくださいませ！」

まるで舞台閉幕の挨拶のような口上。いや、実際そのつもりなんだろうけど。素直にそれを信じた子供達が拍手をすれば、それにつられて他の乗客達も控えめに拍手をした。呆然とする元犯人と元被害者を除く全員が、複雑そうに笑って拍手をしていた。

「とりあえずソイツ、縛っておくか？」

そのタイミングでビニールテープを手にとってヒョコリと現れたのは、猫から虎に変わったマスクをした残りの人だった。

この人達、演出に気合い入れ過ぎじゃないかしら。悪くはなかったけどね。

何故か俺を執拗に付け回したあいつは、何故か猫頭から虎頭になっていた。虎と馬でトラウマってか、ふざけんな。

俺に喧嘩を売っているのかと思つたが、それを本人に問い質す勇氣は無かつた。後でそのしようもない意味を察したが。

そして、その虎頭が窃盗及び放火の容疑者を縛り上げ、別の部屋へ連れて行つた後のこと。

……おかしい。ベルモットとの打ち合わせでは、この後俺の仕掛けた発煙筒から煙を出して、火事恐怖症の乗客達を列車の前方に追いやる予定では……。

一向にそんな心配が無いことに内心焦燥する俺の視界の端で、自分の部屋へ戻つていく乗客達の流れの中、牛頭から鹿頭に戻つたソイツがまるでアルミ缶を潰すような感覚で俺の仕掛けた発煙筒を片手でメシヤリと握り潰しているのが見え、全てに納得した。

「鹿ちゃん、こつちにもあつたよー！」

「うーっす」

ああー、それさつき仕掛けたばかりのヤツ。推理ショーの最中、他の人間の目を盗ん

で仕掛けた事件現場のB室の発煙筒まで馬頭に見つかり、一応煙を出しているそれが鹿頭の方に投げ渡される。途端、グシヤリと握り潰され、機能を停止する。

他から煙が立ち込める気配が全く無いってことは多分それで最後なんじゃないかな。これは俺達の計画も握り潰されちゃった感じかな？ 酷い光景を目にした俺の頭が現実逃避の方向に働き始めた。

「うわ、あの人物凄い握力だな！ これ結構しつかりした金属製だぞ？」
「鹿ちゃんは握力計もぶっ壊す馬鹿力だからね！」

世良真純がへしやげた発煙筒を手にし、馬頭に話しかけているのが聞こえてくる。彼女は必要なことを聞き出した後は気絶させる予定じゃなかったか？

ああ、ベルモットの方も動物頭のせいでマトモに動けなかったのか。それなら仕方ないな。

「しかしまあ、誰が何のためにこんな玩具を？」

「鈍いなあ鹿ちゃん！ 列車強盗に決まってるじゃん！」

ベルモット、僕達は列車強盗だそうです。気が遠くなりそうです。

「は？ 列車強盗？ 何で？」

「ああそうか！ 一等車の乗客は揃って火事恐怖症だから、煙で恐怖を煽ってここから追い出す算段だったんだ！ それで誰も居なくなるところを漁るつもりで……！」

「はああああん!? 年に1度のお楽しみを自分が死にかけた時のトラウマを利用して台無しにしようってか!? 何処のどいつだそのクソゲスは!! 吊るし上げてやるあ!!」

「鹿ちゃん落ち着いて怖い」

「ごめんなさい。ごめんなさい。言われてみれば確かにその通りですがそんなつもりじゃなかったんです。本当にごめんなさい。」

良心がギツチギチに締め上げられ、油断すると涙が出てきそうになる。俺、本当に何やってんだろう……。

「焦ることないよ! どうせこの列車、名古屋駅まで止まらないんだし、そこで警察の人がたくさん待ち構えているんだから、あの放火犯とセットにして突き出してやれば良いんだよ!」

「あ、そっかあ」

「おーっと泣きそうになってる場合じゃなかった。良い笑顔で何てこと提案してくれやがるんだ世良真純。流石は赤井の妹、情け容赦ない。いや当たり前の判断か。」

よし、とりあえず風見に連絡入れとこう。愛知県警に都合してもらおう。つて、もう今の自分が何なのかいよいよワケ分かんなくなってきたぞ。公安警察の降谷? 組織のバーボン?

「安室さん? 何だか顔色悪いよ? 大丈夫?」

「えっ、ああ、大丈夫だよ。ちよつと寝不足気味でね……」

「いや寝不足って感じの顔色じゃないよ、本当に大丈夫なの」

コナン君達の前では安室透でもあったんだ。この混迷を極めた状況で3つの立場を使い分けろって？ 無理だろ、そろそろ混じってきてキメラになつてる気がする。もうやだ疲れた全部辞めたい。

「そうと決まれば列車強盗狩りじゃあー！」

「ボクも行くよー！」

血の気が多い鹿と赤井の妹が結託し、恐ろしいハンティングに繰り出して行った。ベルモット逃げて、超逃げて。まあ逃げ場なんて無いんだけどな。

そう、これが絶望だ。

「……それにしても、ビックリしたなー」

ふと、コナン君がその場に残っている馬頭に対してそう話しかけた。

「お馬さん達の仕業だよな？ あの被害者が殺されたように見せかけたのってさ」

「さあ、知らないなあ？ 運良く弾が急所を外れたんじゃない？」

うわ、白白い。

……いや、しかしだ。確かに状況から見ればどう考えても奴らの仕業としか思えないが、それを示す証拠が一切見つからないのも事実。現に俺やコナン君の捜査では、あの

被害者が生かされている可能性は全く窺えなかった。

本当に奴らの仕業だとすれば、奴らはこの列車に乗る全員を見事に騙してみせたことになる。あの底抜けにふざけた見た目に反して、とんでもない連中なのだ。

それを加味すれば、こうしてコナン君が探りを入れるのも分かる。しかし、警戒はしていない。自分達を騙したとは言え、人を害さぬ方向で動いていたのだから。

……コナン君から純粋な好奇心のみを向けられる彼が、何故だか、無性に羨ましく感じました。

「お馬さん達って、ひよつとして正義の味方だったりとか？」

「は？ 正義い？ そんなつまらないものの味方したって何になるのさー！」

「えっ」

「正義なんかですくえるのは、都合の良い法律か表面だけの綺麗事ぐらいだけだよ！」

「あんな薄っぺらいもんじゃ金魚の1匹もすくえやしないね！」

「す、凄いいこと言うねお馬さん……」

自分の信条がポイ以下だと言われた。

「あのクソゲスヤローが本当に死んでたら、法の裁きを受けてたのは、奥さんをソイツの放火で亡くしたおっさんだったじゃねーか！ 正義なんかで人の心は守れねーんだよ！」

「……………」

コナン君が神妙にして彼の言葉を聴いているその横で、自分がシェリーを保護するために火事もどきを起こそうとしていたことを思い出し、更に死にそうになる。何だこの馬、実は俺への刺客か何かか？

「…………でもやつぱり、法律も、それを守る建前も、大事だよ」

「だったらもつと分厚くしてくれなきゃダメだね！　いつそ血が通うくらいになれば多少はマシになるんだろうけど、それまでに一体どれだけの時間がかかるんだろうねー！」

それとも永遠に来ないかも！

なんて楽しそうに嘲笑う馬頭。こいつ、まさか俺の正体まで？　…………鹿頭のことを考

えたら強ち的外れでもなさそうだから怖い。

もしかしなくても、俺達の掲げる正義には血も涙も無いって言いたいのか？　是非と

も声を大にして反論させてほしかったが、どうしよう、今回の俺の行動を考えると口々に反論できないんだけど。シェリー保護を名目に、善良な市民の楽しみを台無しにしようとしていた俺は確かに血も涙も無かった。

うわ…………本当に俺何やってんだろう…………いやでもそれは必要悪と言うか…………うう

…………胃が痛い…………。

「もしボクが将来正義の味方になりたいのなら、それが何を助けるつもりの正義なのか、ちやーんと考えなきやダメだよ？ 表面だけすくただけじゃ何の意味も無いからね！」

「うん……分かった。忘れないよ」

コナン君が真面目な顔で頷き返したところで、再びこの7号車にあの鹿頭がやつてきた。破損の少ない発煙筒を手にしている。

「ねえこれ、壊した箇所は受信機部分だけなんだけど、きつと強盗犯の指紋残ってるよね？ 警察に渡せば証拠になるよね？」

「おつ、そうだよ！ スゲーじゃん！」

こっちはこっちで確実に俺達を追い込みにかかっていた。俺には感傷に浸る暇すら与えられないというわけだ。第三者に回収されることなんか想定してなかったから、指紋云々は完全に失念していた。これは本格的に裏で手を回してもらわねばマズイ。すまん風見、作戦は完璧に崩壊した。ヘリも撤収させてくれ。

「ところでさつき何の話してたの？ お昼ご飯？ 表面を掬うって湯葉か？」

本当にこの鹿は何を言ってくるか分からんな。ポイの次は湯葉か。

「良いね湯葉！ ボクは湯葉野郎なんかになるんじゃないぞ！」

「う、うん？」

「鹿ちゃん、名古屋駅周辺で湯葉食える場所探しといて。食べたくなってきた」
「ヤッター！ 湯葉だー！」

俺も湯葉欲しくなってきた。胃に優しいそうだし。日本料理って最高だよな。日本のそれは中国から伝来したらしいけど。

列車も現実逃避も止まらない。

**

*

「で、本当にベルモットと湯葉食いに行った」

「仲良いな」

「あの時に限っては、お互いに色々とすり減ってたから……なんか……妙に気が合つて……」

「傷心旅行か」

「あのツアーで傷心したんだよ!!」

「すまなかった」

「お前だったのかよ！　よりもよってお前が王馬小吉に俺の所属バラしたのかよ!!」

「アイツなら言いふらしたりしないし……」

「言いふらしはしなかったがこれでもかと傷を抉りにきたぞ!!」

「本当にすまなかった」

「あの時の俺は相当精神が参ってたんだろうなあ、コナン君の目の前で変装したキッドに向かつてシエリーと呼んだんだからなあ、あり得ない凡ミスだよなあ……」

「へえ、アレがキッドだってよく分かったな？」

「湯葉食ってる最中にベルモットが愚痴った」

「アイツもか……」

「命懸けの潜入中にあんな目に遭わされて正気保てる奴がいるとでも……??？」

「それで結局、シエリー抹殺についてはどうなったんだ」

「有耶無耶になった」

「えっ、何で」

「俺もよく知らないが……組織の主要な武器庫が何者かに爆破されたらしくて、シエリーを追うどころじゃなくなっただ」

*

＊ ＊ ＊
＊ ＊ ＊

「げ、元気出してシャロン！ 計画が頓挫したのは私も一緒よ！」

「やめて有希子……ますます自分が惨めになるだけだわ……」

「ごめんなさい……」

「ふふっ、お互いとんだ災難に遭ったわね」

「本当、そうね……これを機に、悪いことはもうやめたら？」

「……今更引き下がることなんてできないわ」

「シャロン……」

「……せめてもの足掻きに、貨物車の爆弾は起爆させてもらうわ」

「爆弾!? あ、でも、確かにこのまま警察に包囲された名古屋に着いちやうのは……」

「流石にマズイの……」

「でも、爆弾は、やっぱり……」

「心配しないで。怪我人は出さないようにするわ。列車が脱線しないよう、貨物車の連結を壊す手筈なの。まさか自分が逃げる目的で実行することになるとは思わなかったけど」

「うーん……でも、爆発を見逃すのは、ちよつとねえ……」

「私の都合でやることよ。あなたが気に病むことはないわ」

「……………」

「……………」

「……本当に爆弾なんて仕掛けたの？」

「やだ、配線間違えたかしら……？」

「待ってくれ！」

様々な思惑を乗せたベルツリー急行が無事に名古屋駅に到着し、次々に乗客が降りてくるホームで、そんな声が上がった。

追い継つたのは眼鏡をかけた男性。追い継られたのは、周りから遠巻きにされる動物のマスクをした3人組であった。

「あれ？ どうしたのおっさん。まだ何か用？」

「ああ、待ってくれ。君達には、何とお礼を言ったら良いのか……！」

己が感情的に犯した罪を、ただの劇の演出に変え。そして、裁かれるべき人間が裁か

れるよう、周りの人間を誘導し、騙しきった動物マスク達。ずっと苦しみ続けていた男性を救ったのは、紛れもなく彼らであった。

オロオロと迷わせていた手でとりあえず財布を取り出そうとする男性を、馬頭達がストップをかけた。

「あ、ダメダメ、オレ達カタギの人間からは一銭も取らないって決めてんの」

「お金が欲しくてやってるわけじゃないんだあ」

「いや、しかし……」

どうしても礼がしたいと渋る男性に、馬頭と鹿頭は顔を見合わせ、またも大仰な身振り手振りで寸劇を繰り広げた。

「お礼は要らない、何故ならば！」

「あなたの笑顔が見たいから！」

「今日も明日もバカをやる！」

「これは単なる自己満足！」

「今後おっさんが平穩に暮らすことが、オレらにとっての一番の喜びです」

「コロシアイダメ。ゼツタイ」

仕上げにウエーイとテンション高くハイタッチを交わす馬頭と鹿頭。それをマスクの下から何とも言えない表情で見守る虎頭。いつもの流れのようである。

虎頭の他、体が小さくなった探偵もその光景を遠くから見ていた。法や正義を露骨に目の敵にするという反社会的な思想の持ち主でありながら、手段はどうあれ最終的には人を助けるという目的は共通する、独特な信念を持つ人間。そんな人間に出会った彼もまた、何かを学んだようであった。

名古屋駅で待ち構えていた愛知県警が、5年前に起きた火事で救出された乗客達に事情を聞き出し、その真犯人と思われる容疑者を連れて去って行く。

その隙に、動物マスク達もその場から姿を消していた。

「怪盗くんも一緒に湯葉食べに行こう！ 打ち上げつてやつだねえ！」

「別に良いけど何で湯葉なんだ……？」

「……あ、鹿ちゃん。ベンチの下見て。ヤバイよ」

「これはC—4か！」

「おいおいおいおい……何で今日は爆弾ばかり見かけんだよ……あのクソガキ一体何に巻き込まれてんだよ……」

「うへえ、どうするこれ」

「適当に『返品』しとけば……」

「ほいさー」

その日、とある犯罪組織の重要な武器保管庫は念入りに2度も爆破され、中にあった物品は跡形もなく吹き飛んだそうだ。

**

*

「ううう………チクシヨウ………国のために、一生懸命やつてるのに、俺、一生懸命にやつてるのに………」

「うんうん」

「世の中はあのクソサイコロばかり持て囃して！　チクシヨウ！」

「うんうん、悔しいよな」

「やりたくないこともやらなくちやいけないのに！　俺が、俺が何度、この手を汚したと

思っ………」

「あ………そのことだけどな、ゼロ」

「何だよ！」

「王馬小吉やクシビの主な収入源は、そういう、裏で消されるような人間なんだ」

「……は？ どういう意味だ？」

「いや、その。自分が消されると察した人間から、現金をふんだくれるだけふんだくつて、その見返りとして死んだフリをさせて全く別の場所に逃してるんだよ」

「は？」

「オレがバーボンの動きに注視していたこともあつて……お前が組織から消すように言われた人間は、ほぼそういう奴なんだ」

「は??」

「つまり、お前が殺したと思ってる奴は、今も何処かで生きている」

「は???!」

「すまない、要はお前を利用して稼いでいたんだ」

「……」

「……」

スコさんから緊急の連絡は無いまま無事に一夜明け、泊めてくれたカエデちゃんとサ

イハラくんにお礼を言つて戻ると、そこは地獄絵図と化していた。

「おかえりクシビ……」

「ひええ……一体何があつたの……」

そこら中にホテルの備品や酒の缶や瓶が散乱し、野郎2人がグツタリとして倒れ伏すその光景。まるで乱闘でもあつたかのような惨状に戦慄する。

「ドンペリと喧嘩でもしたの……？ 仲良かったんじゃないの……？」

「いや、喧嘩じゃなくて、オレがあいつを混乱させたと言うか……癩癩を起こさせたと言うか……」

そのドンペリと思しき野郎は、何故かスコさんのネコ科マスクを被つて床にぶつ倒れていた。何が起きたらこんなことになるのだろうか。

それとも男友達のじゃれ合いってこういうもんならだろうか。オウマくとモモタくんの場合は、オウマくんにモモタくんが一方的にいじられる感じだけだ。

「ドンペリ？ 生きてるよね？」

「……勝手に殺すな」

「ひええ」

何故かバーマン（ミャンマー原産のネコ）形態になつているマスクの下から、ひつくい声で返事をするドンペリ。可愛いにゃんこ頭という見た目のギャップが酷い。の

そりと床から体を起こし、カーテンの隙間から漏れる光を見ながら、もう朝かと呟いた。

「帰る？ 送る？」

「ああ、帰る。帰るが、その前に……」

スポーツとマスクを外したドンペリの顔は、一見、素面に見えた。

「これのイヌ科バージョン、作ってもらえないか」

「何言ってるの??？」

酔いは覚めてないようだった。

ミステリートレイン
漆黒の特急編 with V3

くバカとトラウマを添えてく

THE END

たま風攫うは桂男の憂い ①

その日、私が仕事で訪れたのは、ミウちゃんの数少ない趣味の友人である阿笠さんの家であった。

「つい最近知ったんだけど、冬は海で泳いじゃいけないんだねえ。同居人にバレてめちやくそ叱られたよ……」

「急に何言い出すのあなた」

ミウちゃんから届けられた品を早速試運転する阿笠さん。その様子を少し離れた場所で見守っている灰原ちゃんに、私はボンヤリと愚痴を零した。

灰原ちゃんはいつもクールだ。こちらに向けてくる視線も程よく冷えている。

「夏ならともかく、冷たい真冬の海で泳いで何が楽しいって言うの。何より危険でしょう……」

「ガチの狩猟採集生活をしていた頃があつてね。カニやエビが美味しくつて、こないだもついそのノリで泳いじゃった……」

「冬に素潜りでカニ漁……」

「ヨモギの若葉と間違えてトリカブト食って死にかけたこともあつたなあ」

「随分と悪運が強いようで羨ましいわ……」

「物理面では後頭部を砲丸でカチ割られるぐらいまではセーフ」

「ああ、運より耐久面がどうかしてるのね」

灰原ちゃんのこの反応を見る限り、やはり私はどこかおかしいようだ。知ってた。

ちなみに素潜り漁自体については、細かい法規制が無かった頃の話なので密猟ではない。

「それより、今回の人間さんはアレにどんな改良を施したの？」

「ホログラムによる光学迷彩」

「ついに来るところまで来たわね」

アレとは、私がミウちゃんに依頼されて届けたものであり、現在阿笠さんが操縦に熱中しているドローンである。

あの高機動なドローン本体は阿笠さん作だが、それにミウちゃんが作ったゴーグル型コントローラーを加えた合作だ。阿笠さんのリアルな飛行体験がしたいという完全に趣味の範囲内の要望で作られたもので、これまでに何回も試行錯誤を繰り返してきた。ドローンに取り付けたカメラの映像を立体視加工し、それを操縦者のゴーグル内に投影、まるで自分が飛んでいるような気分になれるという。ゴーグル内に表示されるコマンドを視線で操作してドローンを操縦する技術は、おそらく例の動物マスクからの流用

だ。

アレをこうした方が良いなどの意見交換はメールや電話でもできるが、試運転は実物が無ければできない。その実物を運ぶのが私というわけだ。今回はミウちゃんが改良したソレを阿笠さんの方に持ってきたのである。

「前回の時も操縦させてもらったけど、もう修正するところなんて無いんじゃない？あれだけのクオリティならスポンサーも簡単につくだろうし、商品化も夢じゃないわよ」

「望むがままに物を作りたいというだけの趣味だからね、あの人達にそんな大した目標なんて無いよ」

だって現に、ドローンのクオリティを上げきった今の段階で彼らの間で交わされる意見の殆どは、ダメ出しや実用性の話ではなく、お互いの趣味や嗜好の話ばかり。実際、ほんの一時期あのドローンは本物のお弁当を搭載していたことがあった。何だったんだ、あの発想の迷走。

ちなみにミウちゃんの性癖がモロに表れるパターンの改造は、灰原ちゃんの情操教育に悪影響を及ぼすと判断した私が発送を拒否するため、構想段階で却下されて実現したことはない。

「2人の間を行き来してたら嫌でも分かるよ。共通のマニアックな趣味を持つ友人を見

つけて大盛り上がりしてる感じだから」

「……そういうの、なんだか羨ましいわ」

灰原ちゃんって本当に小学1年生とは思えないほど大人びてるよね。ほんのりと哀愁を漂わせて呟いた彼女に思わず目を剥く。

発明家達の交換日記ならぬ交換ドロンの仲介をするようになってから、阿笠邸に住む灰原ちゃんともそれなりに交流するようになったが、こうやってラフな会話ができる関係になっても彼女は相変わらず謎の多い美少女であった。

「灰原ちゃんにはそういう友達はいないの？ 吉田ちゃんとは仲良いよね」

「吉田さんとは仲が良いだけで、趣味が合うわけじゃないわ」

「ああ、確かに。灰原ちゃんが仮面ヤイバーとかの話で盛り上がるところは想像できないや」

「あなたは私にどんなイメージを持っているの？」

「私の全知り合いの中でもトップクラスに位置するクールビューティ」

「ありがとうと言うべきなのかしら……」

勿論褒めてるつもりですとも。

「じゃあ、灰原ちゃんは何が好きなの？ 今欲しいものとかは？」

「強いて言うなら……フサエブランドの……」

「ヴァッ!?」

小学生がブランド物だと……!? いや、キラキラ光る魔法のステツキを欲しがる灰原ちゃんなんてそれこそ想像できないけど。いやでも、ヒューウ、マジかあー、流石クルビューティ次元が違うぜ。見た目と中身のギャップが10才くらいあるんじゃないか?

「その様子だと、あなたとも趣味が合わないみたいね」

「いやー、そもそも私自身、服飾関係に縁が無いからなあ。どんなに服に拘ろうが、この真つ黒コート羽織らなくちゃ外も出歩けないし」

「それもそれで、何と言ったら……」

「着るものに困らなくて済むのはありがたいよ」

結局何を着ようが見た目はコートの黒一色。おかげでオシャレというものを気にしたことが無い。コートの下にどんな服を着ようが誰も気付かないのだ。だからうっかりネタに走りがちになる。今着ているTシャツにどんな文字が入っているかはご想像にお任せしよう。

それより。薄々感じていたことだけど、探偵キッズの中でもヤケに精神年齢が高い灰原ちゃんや江戸川くんには、本当の意味で気の置けない付き合いができる友人はいるのだろうか。その2人で一緒にいる光景をよく見るのはそのせいなんだろう。小学1年生にしてブランド物を欲しがる灰原ちゃんを見てるとちよつと心配になってくる。余

計なお世話なんだろうけどね。

「あ、そう言えば江戸川くんはどしたの？ 学校行かない日に吉田ちゃんや円谷くん達もいないなんて珍しいね」

「学校行かない日ってあなた、今の時期、世間は冬休みよ。皆それぞれ家族との用事があつて、ここには来ていないわ」

「いつもあの子達と一緒にいるってところは否定しないんだあ」

「……………」

ニヤニヤ笑いながらそう言えば、灰原ちゃんは口元をほんの少しだけ引き締めてフイと顔を背けた。照れてるクールビューティマジ可愛い。なんだ、友人関係はそんなに心配しなくても良いみたいだ。

「家族との用事って、江戸川くんも？ あの子の親御さんってどんな人なのかもよく知らんのだけど」

「彼なら毛利探偵の仕事について行ったらしいわ」

「おうふ」

だからね、そんなサラッと軽く言えるほどの事件の発生率とかね、もうね。せめて殺人ではないことを祈るが、果たしてそれが通じるか。

「てことは、灰原ちゃんだけが暇なんだ」

「まあ、暇と言えば暇かもね」

「じゃあ、もし良かったら、私の趣味に付き合ってくれない？」

「……………え？」

灰原ちゃんが私を見上げるその目を真ん丸にしてから一分も経たないうちに、お隣の豪邸から沖矢さんが訪問してきた。毎度のことながら何なんだ、そのタイミングの良さは。

特異な経歴を持つDICE構成員ことダンガンロンパ事件生存者、”53期の17人”の中でも、不知火霊は最も掴み所が無い人物だ。

掴み所が無いと言うのは、ただの考え無しなのか相当な切れ者なのかの判別がつかない支離滅裂な言動もそうだが、何よりもその足取りのことである。文字通り足がつかない手段で移動し、他のメンバーと違って決まった住居も持たない彼女と意図して接触するには、運を天に任せる他にない。彼女が米花町に用事があつて現れるようになった時期に居合わせたことは、彼らの協力が欲しい我々としては本当に幸運なことであつた。更には、彼女は現在自分が個人的に交流している人物達とも親しくなり、更に接触でき

る機会が増えた。

不知火君が入間美兔からの依頼によって頻繁に訪ねてくる今の状況は、願ってもいい喜ばしいものだ。FBIとしても、俺個人としても、入間君との繋がりはどうしても手に入れなくてはならない。彼女が阿笠さんにも引けを取らぬ発明家であること、他、組織に殺害されていたはずの宮野明美を秘密裏に保護していることも大きな理由である。俺からすれば、後者の理由があれば十分だ。

しかし、やはり相手はかのDICE。一筋縄どころか二筋縄でも上手くないかない。

入間君と直接コンタクトをとろうとしたが、彼女は他の”17人”以上に、見知らぬ人間との関わりを徹底して断とうとする傾向が強い。危うく濡れ衣を着せられかけた先日のコクーン発表会での騒動も原因だと思われる。関連企業伝いによく連絡先を得ても、独特なセキュリティによって電話を繋げることもままならない。

と言うのも、彼女の連絡先に電話をかけると、電子音声のガイダンスで10秒以内に合言葉を言えと唐突に要求されるのである。しかも3回続けて無回答や不正解だと、同じ端末からでは繋がらなくなるという理不尽仕様。ATMの暗証番号じやあるまいし。おかげで真つ先に俺の携帯電話は使えなくなり、何枚ものSIMカードを浪費するハメになった。明美がそこまで嚴重に守られていることは喜ぶべきなのだが、自分もそれに弾かれてしまうのは何とも複雑である。

しかも、不知火君曰く、電話だけでなく入間君が引きこもっている自宅の戸締りも似たり寄つたりのセキュリティらしい。つまり、入間君もある意味、不知火君と同等に出会うことが難しい人物なのだ。

暗号なら推理、パスワード制であればハッキングという手があるが、音声認証の合言葉方式という絶妙なところでローテク要素が含まれているそれには正直打つ手が無い。そもそも合言葉とは、本来それを教えるに値するほど信頼できる人物を見分けるためのもの。ならば、自分も信頼できる人物だと認めてもらうしかない。つまるところ真つ当な正攻法しか道は残されていなかった。

今は幸いにして入間君と親しい不知火君が近くにいることが多い状況。彼女に仲を取り持つてもらえれば話は早い。その不知火君もとんでもない曲者であることは重々承知しているが、少なくとも敵意は持たれていないはずだ。

個人的に警護している対象の宮野志保こと灰原哀と、親交を深めるべき対象の不知火霊。彼女達が最近距離を縮めていると知り、内心注意する対象が一纏めになつて都合が良いとほくそ笑んでいた。

だが、俺の想像以上に志保は不知火君を信頼していた。まさかその2人だけの旅行の誘いに頷くだなんて。

「じゃあ、当日は阿笠さんの家の前で待ち合わせで、そつちの旅費諸々は自腹ね」

「ええ、分かりました」

「……もう一度聞くけど、ホントに来るの？ 色々と大丈夫？ その、色々と……」

「大丈夫ですよ」

否。正直なところ、全く大丈夫ではない。

いつも不知火君が来る時は阿笠さんから事前に連絡があり、その都度彼の家に仕掛けた盗聴器を回収していた。発信機の類に異様なまでに鋭い不知火君に察知されないために。そして、彼女の訪問を確認してから暫く経った後で、直接様子を見に行くようにしていた。その努力の甲斐あって、今まで彼女に不審がられたことは無い。

だから今回の旅行の件は盗聴器越しではなく、顔を合わせた時に初めて知ったことなのである。

想定外のことには焦ったとは言え、女性の二人旅に強引に割り込むような野暮な真似をしてしまった。不知火君を盾にしている志保からの視線で凍傷になりそうである。何なんだ、このタイミングの悪さは。これも彼女の才能悪意か。

冷静になった今によくよく考えてみれば、後で阿笠さんから彼女達の行き先を聞き出し、現地で彼女達を影から見守れば……いや、ダメだ。尾行は不知火君に一発でバレる。非常に気まづくなること請け合いだ。それだけは避けたい。

しかしだからと言って、それぞれ違う意味での要注意人物2人を、我々の関知してい

ない地域で完全にノーマークにしておくわけにもいかないし、阿笠さんに協力してもらってまで保護者役を申し出た以上は今更引き下がれない。

俺が身分を偽っていることは知っていても、宮野姉妹との関係までは知らない不知火君の心配そうな表情に物凄く複雑な気分になる。同行を申し出た立場で言うのも何だが、何故それを許してくれたんだ君は。懐深過ぎか。バツサリ断られた方がまだマシだった。志保からの好感度が目に見えて急降下している。

全て都合が良いはずなのにこの異様な息苦しさ。訳が分からない。良いことの掛け合わせが必ずしも良いことになるとは限らないと、この度不本意にも思い知らされた。やはり彼女の才能^{悪意}か。

そして、俺にとつての災禍はこれだけではなく。

「北陸ですか、わあ、楽しそう！ 今度行く時は私も一緒にしても良いですか？」

「勿論だよー」

「予定の殆どが食べ歩きらしいけどね」

「私の生きていく上での楽しみが食べ物しかないだけさ灰原ちゃん！」

「サラッと切ないこと言わないでください……」

「こんな不審者スタイルが昼間でも許されるレジャースポットがあったら教えてほしいくらいなの」

「それも難しいわね」

現在地、喫茶ポアロ。

どうしても女子の旅行について来たいなら相応の誠意を見せなさいという志保の無茶振りが、それを宥めた不知火君による妥協により、よりにもよってここで甘味を奢れという話になってしまった。他にも店はたくさんあるのに、何も知り合いが多いこの店にならなくても良かっただろう。恐るべし不知火君の才能^悪。

そしてポアロと言えば、この男もいるわけだ。

「数少ない楽しみをこんな男に邪魔されるとは、とんだ災難ですね」

爽やかな笑顔でこちらに全力で敵意をぶん投げてくる安室君。俺の思惑が彼に知られた上に皮肉までもらうとは、かの悪意は仕事をし過ぎである。

「断つても良かったんじゃないですか？」

「お前に話は振ってねえ」

「ねえ不知火さん、僕達もうちよつと仲良くなれると思うんですよ。ねえ」

しかし彼も彼で、相変わらず不知火君の理不尽な塩対応に真正面から集中砲火を浴びせられていた。まるで感情のドッジボール大会である。

「それにしても、不知火さんと哀ちゃんの組み合わせなんて珍しいですね」

「あら、こう見えて結構仲良いのよ私達」

「そうじゃなくって、2人きりってところが。いつもは他の子達とも一緒でしょう?」

「灰原ちゃんだけ予定が無かったんだよお」

「そう言うあなたは年中暇よね」

「それ言っちゃおう?」

不知火君と志保と梓さんの女性3人でキャツキャツと話が盛り上がる。すぐ隣での出来事なのに遙か遠い場所に思えてしまう。いつそのまま本当に遠ざかりたかった。数十分前の俺はよくあの中に割り込もうとしたものだ。

こうなったらもう、当日に無茶を言っただタキャンを狙うか。それとも別行動ができる言い訳を思いつくか。そんなことを考えていると、フードの影から不知火君の目がこちらに向く。

「あのね沖矢さん。気休めになるかは分からないけど、途中で友達がいるところに寄る予定があるんだ。男友達だから、延々とこんな空気が続くわけじゃないよ」

「!」

この場にいる数名に衝撃が走る。

色んな意味で驚いた。俺のことなど御構いなしかと思いきや、居心地の悪さを察して気を遣ってくれた。少し感動した。軽薄そうな言動に反して、スコツチや俺の本名は決して部外者の前では呼ばないなど、意外と情報管理を徹底しているところは知っていた

が……どうやら彼女の氣遣いは、分かりにくいところにあるだけのようだ。

勿論それだけではない。彼女の友人に会うという話だ。そこには安室君も僅かに反応していた。不知火君の友人ということは、つまり、他のDICEメンバーである可能性が高い。話を通じる相手であれば、是非とも接触しておきたい。

「ホォー……ご友人、ですか。どのような方なんです？」

「うーん……私は芝刈り機コンビって呼んでる」

「芝刈り機」

残念ながらまるでイメージができない。スコッチがネコからフクロウになったりと、彼女のネーミングセンスも掴み所が無い。しかし、コンビということは2人か。あのダングァンロンパ生存者に、コンビと言えるような2人の男子生徒役はいただろうか。

「男友達って……？」

「だいじよぶダイジヨブ。変な奴だけど悪い奴じゃないよ。多分」

「多分」

「ちよつと顔合わせてチマチマ話す程度かな。時間があれば一緒に食事もしたいところだけど、灰原ちゃんを無理に付き合わせる気は無いよ」

「ううん、あなたの友人なら、きつと大丈夫なんだと思うわ」

「灰原ちゃんて、よく分からなくて私のことを信頼してくれてるよねえ」

「そうね……何でかしら」

ボウヤ曰く、DICEは何とボウヤと組織の因縁を知っているそうだ。しかし、彼らがボウヤを邪魔することは無く、場合によっては支援する気すらあることを仄めかしたらしい。いつの間にそんなとんでもないコネを。

ボウヤと敵対しないという話は信じてても良いだろう。何せDICE自体が人助けの集団である。おそらく志保の勤もそれを感じ取っているのかもしれない。

不遇な目に遭うのは俺だけか、自嘲の笑みをこぼしたその時。

店内に来客を知らせるドアベルの音が響いた。

おっちゃんの依頼について行っていたオレを訪ねてきて、人魚を探しに行こうと言い出した服部。いきなり何事だよ。

蘭と和葉さんが2人で買い物に行っている間に、とりあえず詳しい話を聞こうと、おっちゃんの事務所に行こうとしたその途中。服部は事務所の階下にある喫茶ポアロの前でギョツとしたように立ち止まった。覗き込めば、そこにはオレの知り合い達が珍しい組み合わせで同じテーブル席に座っていた。沖矢さんに灰原に不知火さん？ ど

うしてそんな組み合わせに？ 服部の視線は、真つ黒な人と灰原の間を忙しく行き交っていた。

いや、まさか。

オレの妙な予感通り、服部はポアロに入ろうと言い出した。

おい、ちよつと待て。この展開、物凄く身に覚えがあるんだけど。

その数分後。

オレから事情を聞かされた服部はテーブルに突つ伏していた。

「……日を遮るんやったら、もっと別の方法もあるやろ、日傘とか」

オレと同じく黒の組織を知る服部。灰原の正体や事情も知っている服部は、如何にもな格好をしている不知火さんが灰原と話し込んでいる現場に強い危機感を覚えたらしい。何たるデジャヴ。心なしか安室さんの目が微笑ましい何かを見るような生暖かいものになっている。

確かにあの人は怪しく見えるけどな……実際怪しいところもあるけどな……そつち方面での怪しさじゃねえんだよな……。

「とにかく、そんな真つ黒は紛らわしいわ！」

「そもそも私は一体何に間違われているんだ……」

その辺は知らないままで良いです。この場にいる数人と心の声が被った気がする。

ボンヤリとそう呟く不知火さんが、オレが利き手ではない方の手で物を拾い上げただけでそいつを怪しむ人間だと知ったら、果たしてどう思うのか……。

「くど……やない、コナンの知り合いなら話はちやうわな。不知火さんやったつ。変に疑つてすまん」

「いつものことだから平気だよお」

「お、おう、そうか。オレは西の高校生探偵、服部平次や！ 名前くらい聞いたことあるやろ？」

「ごめん、うち新聞とってなくて」

「今のご時世新聞だけがメディアちゃうわ！ ネットも見イひんのか！」

「ごめん、そういうの興味無くて」

「はつきり言うなや！ 地味に傷付くやろ！」

「うええ、どう言えってんだよお」

キレッキレだ。流石は本場出身。案外この2人、一周回って噛み合っている気がする。一応初対面であるはずなのに。

にしても、あの警戒心が強い灰原が不知火さんと旅行か。確かにあの人達なら安全と言いつつても良い。それに不知火さんなら、何も事情が分からなくても、例え組織の連中に出くわそうが何とかしてくれそうな気さえする。灰原もたまにはそういう息抜き

をするべきだ。

とにかく不知火さんは良いとして、問題は……

「……沖矢さんも、一緒なの？」

「君にまでそう言われると、流石にクくるものがありますね……」

オレがいない間に何があったのか。沖矢さんこと赤井さんは見事に事故っていた。とりあえずこの人、不知火さん関連についてはオレを介さない限りはどう足掻いてもエライことになるみたいだ。いつものキレの良さはどこ行つた。

でも、赤井さんが不知火さんに対してテンパリやすいのは仕方ないことだと思う。DICEにちよつかいを出した結果、何の成果も得られないどころか新たに盗聴の証拠までおさえられてしまったらしい。警察の対応に辟易して姿をくらました彼らのプライバシーを再び侵害したと公表されれば、あらゆる意味での大ダメージは免れない。それは安室さん達も同じだけど、赤井さん達FBIの場合はそれに加えて数々の違法捜査のこともある。結構な崖っぷちだ。

ギリギリのところまで彼がFBIの人間であることは不知火さんに知られていないけど、もしバレたらそれこそ大惨事になる。きつと赤井さんは不知火さんと世間話をする程度でもかなりのプレッシャーを感じているはず。何も分かつてなさそうな呑気な顔でシレッと全て知ってたりする不知火さんの思考を推し量るのは至難の業だ。ただで

さえフードで顔が隠れてるつてのに。だからあんな、いつもであれば考えられないようなミスをしてしまう。

それは他でもない赤井さん本人も自覚しているはずなのに、どうして彼は苦手な彼女にアプローチを仕掛けるのか。そんな自ら死地に突っ込んで行くような真似をしなくちゃいけない理由って何なんだ？

「それがねえ、阿笠さんからもおススメされたんだよ。私と灰原ちゃんだけじゃ未成年の女の子にしか見えなくて危ないから、男性の保護者役もいた方が良いんじゃないかって」

「ああー……」

確かにそれらしい理由だ。おそらく赤井さん本人が考え、博士に言わせたんだろう。

しかし、そもそも女性の二人旅にそれほど親しいわけでもない成人男性が割り込むこと自体がマズいというのに、その口実にいつものキレの良さを発揮してどうすんだ。やっぱり根本的に事故つてた。赤井さんだつて不知火さんの安全性は知ってるだろうに。灰原は不知火さんの陰に隠れ、沖矢さんを完全に視界から外していた。

「お土産楽しみにしててねえ、江戸川くん」

「わ、わあ、嬉しいなあ」

しかしこの数日後、思わぬところで不知火さん達と鉢合わせ、お互いにお土産が要ら

ないことが判明する。

たま風攫うは桂男の憂い ②

実に平和な道中だった。

甲高い誰かの悲鳴が聞こえることも、血腥い現場を見ることも無ければ、嫌な匂いを感じて心臓が跳ね上がることも全く無かった。本当に何も起きなかった。

その代わりに、と言ったら変だけど、奇妙な音が聞こえるようになった。

「沖矢さん沖矢さん、今日は11時までにごこへ向かってください」

「フェリーターミナルですか？」

「うん。車に乗せられる規模の船が発着するところがそこぐらいしか無くて」

「ホー……僕が車を出すと言ったのは出発間際の土壇場だったのに、随分と準備が良んですね」

「まあ現場行けば全部分かることだし」

「……ああ、あなたはそういう人でした」

バキツ

旅先の旅館で一夜明かした翌朝。朝食後にそんな会話をしている不知火さんと沖矢さんを眺めていたら、またあの音が聞こえてきた。何かが壊れるような音だけど、聞こ

える気がするだけで、辺りを見回しても実際に何かが壊れている様子はない。嫌な感じはしないけど、昨日の出発時からしよつちゆう聞こえてくる気がするこの音は一体何なのか。

不知火さんは行き当たりばったりな性格だと思っていたけど、臨機応変を良い意味で極めたような人だった。昨日ずっと一緒に過ごしてみても、そう感じた。

昨日の出発時もそう。当初は公共の交通機関を利用する予定だったらしいけど、飛び入り参加してきた沖矢さんが自分の車を使いたいと急に我儘を言い出しても、彼女は慌てることなくすぐに高速道路の経路を割り出し、その要求を受け入れた。自分の意見を通したはずの沖矢さんは何故か渋い顔をしていたけど。

そして渋滞に出くわせば一般道での最短経路も調べてくれたりと、移動は実にストレスフリー。目的地へは何度か行ったことがあるというのも本当のようで、滞りなくお店を案内してくれた。部屋が借りられないとか、定休日でした、なんて事態にもならない。ただひたすら快適な旅で、いつも出かけ先でトラブルに巻き込まれるのが嘘のよう。

私達に遠慮して距離を取ろうとする沖矢さんの手を掴んで物理的に強制参加させたりと、案外不知火さんには幹事の才能があるんじゃないかと思ったり。聞けば彼女、普段友人と遊ぶ時も、現地の下調べをすることが多いらしい。妙に納得した。

「フェリーに乗るの?」

「そうだよー。本当はもう少し後に行く予定だったんだけど、その頃には海が荒れるみたいだから早めに行くことにしたんだ。港で足止め食らうのは嫌だもんねえ」

先見の明がある、なんて言うの大袈裟かもしれないけど、こうして障害になり得そうなことを素早く察知して逐一対策してくれるおかげ。常にドタバタのいつもとは大違いだわ。

「出航までは時間があるし、それまでは各々自由時間……と言つても、この時間じゃまだお店も開いてないだろうし、部屋でゴロゴロするしかないかなあ」

いつものパターンであれば、こういう自由時間に近場の観光名所に行つて余計なトラブルに巻き込まれたりするところだけど、今回はそういうことにはならないみたい。

グシャツ

そんなことを考えているうちに、またあの音がした。

どんな時に鳴るのかもいまいち分かっていない。昨晩もそうだった。初めての場所でなかなか寝付けずにいたら、普段から夜型生活をしていて眠らずにいる不知火さんに提案され、一緒に旅館内に設置された自販機へ飲み物を買に行った時のこと。やたら夜目が利く不知火さんが、真っ暗な廊下の向こうで鍵のかかった客室前でウロウロしている不審な宿泊客を見つけて呑気に挨拶した瞬間にも、あの破壊音が鳴った。結局あの客が何をしたかったのかは分からないけど、重大な何かを未然に防げたような気はす

る。

「灰原ちゃんは何かしてみたことってある？」

「いいえ、特に無いわ。あなたが望むように案内してくれたら、それで満足できると思うの」

「あらあ、随分と謙虚だね。他のキッズに聞いてみたら鰻重食べに行きたいとか言ってくるだろうに」

「それは小嶋君限定よ」

自由と言うよりは各自好き好きにコンディションを整える時間になり、沖矢さんはこれ幸いと言わんばかりの勢いで部屋に戻っていった。勿論、彼と私達の部屋は別々にとつてある。元々一部屋しか予約していなかったところを、急遽不知火さんが手配してくれたから。

「私、もう少し寝ているわ。あまりよく寝られなかったから……」

「オツケイオツケイ、ゆっくりお休みよ」

せつかくの旅行で寝て過ごすなんて勿体無い、なんて言う熱意に溢れる人もいない。あの賑やかな子供達と一緒にいるのも嫌いではないけど、肩の力を抜いていられる不知火さんと一緒にいるのも悪くない。

唯一の欠点と言えば……ファッションセンスが致命的にバグっているところね。

その不知火さんも、今は旅館の備品である浴衣を着ている。これって結構珍しい光景じゃないかしら。こうして見ると至って普通の人の。日に当たらない生活をして
いるせいかな、肌も病的なまでに白い。

持ち物の整理をしている不知火さんを眺めてそんなことを考えながら目を閉じれば、
今度は簡単に寝入ることができた。

psyc:まもなく船が島に着くよー!

dete:まもなく?

magi:船が?

astr:おおー

psyc:何その反応

maid:あなたが言うには新鮮な言葉だから

inve:毎度背後に突然現れるじゃねーか

psyc:今回は食べ歩きのついで

psyc:無関係の同伴者が2人もいるの

a s t r : 流石にそいつらまで直送するのは憚られたか

m a g i : 食べ歩き旅行羨ましい……

p s y c : 次のお休みに一緒に行こう!

s u p r : いくつかの列車旅が気に入ったっぽいね

d e t e : これで役者は揃うのかな

p s y c : 先生はどうしてる?

a n t h : 僕の隣の部屋で待機してるよ

p s y c : 血が足りないのでそちらへ直行します

a s t r : 字面だけ見るとヤバイ

s u p r : 先生逃げてえー!!

p s y c : あの人にやってもらった方が痛くなくて

i n v e : そりゃ本業だし

m a i d : でも流石に用意はしていないんじや?

p s y c : さつき先生の職場から持ってきた

d e t e : いても容易く行われる窃盗

p s y c : 位置を変えただけです

a s t r : 言い訳が斬新

s u p r : さて実働班、準備はいい？

p s y c : 問題なし

a n t h : OK

m a g i : 作戦名はあるのか？

s u p r : そうだなあ

s u p r : 名付けるとしたら

s u p r : リアル・マーメイド

d e t e : 際どい

服部の元に届いたオレ宛の手紙の送り主であり、今回の依頼人である門脇沙織さん。オツチャンや蘭達と共に彼女がいるという福井県の美園島に向かい、早速話を聞きに行つたのだが、『このままじゃ人魚に殺される、助けて』という依頼の手紙の内容からしてどこか胡散臭く、依頼人本人の話も同じような話の繰り返しであった。

曰く、この島で年に一度行われる儒艮祭りでしか手に入らない儒艮の矢という不老長寿のお守りを紛失してしまい、そのせいで人魚に崇られる、とひたすら怯えているのだ。

たまたまオレ達が島に着いた今日がその祭りが行われる日だそうで、結局沙織さんは、今日の祭りで何があるんでも儒艮の矢を手に入れ、今度こそは大事に守り抜くと、話を自己完結させてしまった。

せっかく福井まで来て、ただの軽いお悩み相談で終わらせるのも気がおさまらない。とりあえず情報を集めてみよう、観光がてら島を見て回るようになった。

「まあ見事に人魚一色の島だな」

「こんなに観光客も来ているし、相当だぜ」

役所やみやげ物店を回り、住民に話を聞いて分かったのは、とにかくこの島における人魚の伝説は想像以上に重く見られているということ。特に沙織さんや彼女の幼馴染は強く信じ込んでいるようだ。

ただ、儒艮祭りの会場である美國神社の巫女であり、沙織さんの幼馴染の1人でもある島袋君恵さんは違った。彼女の曾祖母が人魚の肉を食べて不老不死になったと噂されているらしいが、君恵さんはただの噂話だと笑い飛ばした。

ところが。

「死体だけじゃないわ。つい最近まで目撃されていたのはあんたも知ってるでしょ？」

「は？ 目撃やって？」

君恵さんから話を聞いている途中でやってきた海老原寿美さんによれば、3年前にこの島で人魚のそれと思しき奇妙な遺体が見つかった他、つい最近まで実際に島の周りの海で人魚が目撃されていたという。

「嘘じゃないわよ？　沙織も見たー人なんだから」

「えっ、沙織さんも？」

「だからあんなに怯えるのも無理は無いのよー。海面から顔を覗かせる女に、ジツと睨まれたって言うてるんだから……」

おいおいマジか。思わず服部と顔を見合わせる。

写真のような証拠は無いが、どうやら複数人に目撃されているのは確かなようだ。その証言のどれもが、海中を泳ぐ女性を見た、というものであった。

それは流石に聞き捨てならない。この真冬の日本海で泳ぐなんてただの自殺行為だ。尋常ではない。

「……そういうイタズラをする人のせいで、ますます噂に拍車がかかっちゃって。おかげで今年のお祭りの参加希望者数は過去最高ですよ」

「まーだそんなこと言っちゃって。他でもない命様の曾孫が信じなくてどうするのよー」

君恵さんが苦笑気味に言えば、寿美さんが呆れたように言う。

すると、そこで思い出したように君恵さんが提案してくれた。

「そう言えば本土から人魚の伝説を調べに来ている学生さんがいるの。良かったら話を聞きに行けばどうかしら。変わった人だけど、こういう話にはとても詳しいみたい」

教えられたのは、この島の宿泊施設と、その学生の名前だった。

島に着いてからの灰原ちゃんの様子が少し変だ。ソワソワとして落ち着かない。

「灰原ちゃん、どうしたの？ 船酔いした？」

「そ、そういうのじゃ、なくて……」

「初めての場所で緊張してるとか？ 昨日の晩もそのせいでよく眠れなかったんだっけ。無理しないでね、気分が悪くなったらすぐ言っただけ」

「……あなたが守ってくれるんですよ？ それならきつと、大丈夫よ」

はうああああ灰原ちゃんのデレた微笑みいただきましたぁん!! これは何が何でも守らねばなるまい。何から守ってほしいのかは全く分からんが守らねばなるまい。

お互いに荷物を持つ方とは逆の手をギュッと繋ぎ直した私達を、数メートル後ろを歩く沖矢さんが複雑そうに見ていた。どうだ羨しかろう。

小さなこの島では自動車を自由に走らせることが難しく、せつかく本土からフェリーに乗せてきた彼の愛車は止むを得ず港近くの駐車場に置かざるを得なかった。車は速くて空調も効くし荷物も多く持てるが、反面そういう小回りが利かない。ちよつとした用事で停車する時にも、駐車場所に困る。一長一短つてやつだね。

「ねえ、どこへ向かつてるの？」

「友達が泊まつてる旅館だよ。お昼は先にそっち行つてからで良いかな？」

「構わないわ」

灰原ちゃんてば聞き分けが良過ぎる。この旅行では私に全てお任せすると言われてるから責任重大だ。最低限は楽しんでもらわねば。人混みで逸れないようにしっかりと灰原ちゃんの手を握る。

すると、後ろからスルリと雑踏をすり抜けてきた沖矢さんが訊ねてきた。

「随分賑わつていますね。この島はいつもこうなんですか？」

「いや、こんなに観光客が来るのも1年の中でも今日だけじゃないかなあ」

「今日だけ、とは？」

「なんか有名なお祭りをやるらしくつてね。それに参加したい人があちこちから集まつてるんだよ」

「ホォー……」

心なしか、灰原ちゃんが握ってくる手の力がほんの少しだけ強まった気がした。何か知っているみたいだ。でも本人は何も言っていないし、変につつかない方が良いのかも。興味を示す沖矢さんには、通りすがりにパンフレットスタンドから抜き取ったお祭りのチラシを渡しておいた。

そうこうしているうちに、目的地へ着く。旅館と呼ぶには少々草臥れた宿屋だけど、贅沢を望まなければ申し分ない場所だ。

スタツフさんに変に怪しまれぬよう、建物の日陰に素早く入ってさっさとフードを外す。

「すみません、電話した不知火です」

「ああ、103号室のお客さんの」

事前に宿泊客と待ち合わせしている者だと知らせると、スタツフさんは一度この場を離れ、しばらくして1人の人物を連れて受付前に戻ってきた。

こないだぶりと声を上げた私に、それを言わせぬ勢いでツカツカと足早に近づいてきたその人は、切羽詰まったような小声で私に囁いてきた。

「ねえちよつと、オレ聞いてないよ、あの人達が来るだなんて……!」

「へ? あの人達?」

あの人達ってどの人達だ。沖矢さんと灰原ちゃんのこととは伝えているし、そもそも

あの”は近くにはいないものを示す連体詞であつて……

私がポカンとしていて、彼は続けた。

「確かにオレの時と同じようなキャストを揃えるつて言つたけど、何もまるつきり同じにしくたつて良いだろ……!」

「うん?」

彼の時と同じキャストつて、もしや表向きに事の真相を暴いて公にしてくれる探偵役のことだろうか。確かにいることにはいるらしいが、彼の時の探偵役は完全に予定外のアドリブだった。本ならひっそりと匿名で通報するはずだったのだ。だが、結果的には彼らのおかげで想像以上に丸く収まったので、探偵役の出演はその後の活動にも検討されるようになったのである。

それはともかく、今回のその役についてはオウマくんが手配すると言つていた。しかしそれが誰なのかは私も知らされていない。

……いや、待てよ。彼の時とまるつきり同じキャストつて、まさか。

「不知火さん……!?!」

私の思考を遮つたのは、私もよく知る少年の声だった。

『趣味ですか?』

オレに対する第一声からしてカツ飛ばしていた彼女の人体スキャナーっぷりは、オレと会うよりずっと前から猛威を振るっていたらしい。

今から丁度1年前、変装を変装と思わぬ独特な感性を持つ不知火さんは、彼女の命懸けの変装を、コスプレと呼んだそうだ。

……その時の彼女の胸中を想像すると泣けてくるが、それがきっかけで彼らの協力を得られたのは良かったと思う。

「へえー、じゃあ不知火さんも今日のお祭りのことを知ってたんだねー!」

「そうだよ。その時に良さげな定食屋さんも見つけたんだ」

1年前、不知火さんが友人の研究に付き合つてこの島に来ていたことを知った少年が自棄っぱちで無邪気な声を上げながら、それとなくオレの方に突き刺さるような視線を寄越してきた。

うん、言いたいことは分かる。多分君が想像している展開で間違つてない。君が空気が読める子で助かったよ、小さな探偵さん。

と思つていたら、大きな探偵さんが挨拶してくれた。

「お久しぶりです浅井先生。その後、お変わりありませんか?」

「いえ、おかげさまで。オレの方こそ、その節は大変お世話になりました」

前回とは違い、名前ではなく苗字で呼んでくる毛利探偵。あの時のオレは姿を偽っていた。対応が変わるのは当たり前前だ。

「まさかこんなところで出会えるなんて、本当に奇遇ですね！」

「そ、そうですね……」

蘭さんのその言葉に冷や汗が出る。オレが意図したものではないが、作為的な出会いであるのは間違いない。ますます小さな探偵さんからの視線が鋭くなった気がした。

「なんやなんや、オレらは蚊帳の外かいな」

色黒の少年が不満げに言う通り。小さな探偵さんこと江戸川コナン君、毛利探偵、毛利蘭さん。そして、不知火さんとオレの5人は、かつて1つの事件で知り合った者同士だ。

オレが起こしかけた殺人を茶番劇に変えた共犯者同士……とも言おう。

あの日のことは忘れられるわけがない。色んな意味で。

顔見知りであるオレ達の他の、それぞれ初対面になる人同士が自己紹介をしている間、オレの足元にコナン君が寄ってきた。

「……ボク、どうして浅井先生が不知火さんと一緒にこの島にいるのか、詳しく教えてほしいなあ」

逃がさねえぞコラという小学生にあるまじきドスの効いた副音が聞こえた気がした。

DICEの活動には主に3つのパターンがある。

1つ目は、警察機関へ大々的に喧嘩や皮肉を吹っかけるパターン。怪盗キッドの犯行のようにパフォーマンス性が強い活動だ。かの有名な“フラワーウォー”が代表的だろう。

2つ目は、社会の影で蔓延る犯罪者達への嫌がらせパターン。あの取引を台無しにする経済面への攻撃がそうだ。最近はそのだけに飽き足らず、奴らの行動を事前にいちいち通報したり、嘘の情報を流して混乱させたりと、バラエティ豊かな嫌がらせを行なっているらしい。

そして3つ目は、完全なボランティア。偶々見かけただけの困っている人に、それを解決するための協力を申し出るパターンだ。報酬は貰わず、メディアにも警察にも関知されない、真の意味で純粋な人助けである。

これら3つのパターンが混ざった活動もある。ボウヤが小声で語ってくれたその騒

動は、2つ目と3つ目の混合パターンであった。

「なるほど……おそらく、家族を殺した奴らに復讐したいあのドクターが君達を呼んだタイミングで、彼らが復讐相手が行なっている麻薬取引の存在を察知して調査に来た、というところか」

「え？ DICEってそんなことしてるの？」

「報道されていないところでも彼らは日々活動している。あのコンサートホールでの一件もそうだったんだろう」

「へー……」

例の組織もサイコロのせいで馬鹿にできない被害を被っているのだが、ボウヤはそれを知らないようだ。

……にしても、ボウヤも面白い現場に立ち会ったようだな。その騒動では現場の下調査をした不知火君の他、ピアニストの赤松君と探偵の最原君もいたらしい。ドクターの殺人を彼らがその寸前で気付いて阻止し、偶々その場にいたボウヤ達も巻き込んで一芝居を打つことになったそうだ。

DICE側はドクターを殺された父親に変装させ、復讐相手の視界の端に度々チラつかせて奴らの精神に揺さぶりをかけ。そしてボウヤ達は、亡霊に怯える演技で周囲の間もその気にさせる他、神経が衰弱していく復讐相手達がウツカリこぼす証言や証拠を

集め、最後には奴らが行なつてきた悪事を全て民衆の前で暴きだした……と。

単純に殺人を止めて悪人達に正当な裁きを受けさせるだけでなく、被害者本人に復讐相手を恐怖のドン底に突き落とす手段を与え、恨みつらみを当事者に向けて吐き出させて少しでも溜飲を下げさせる。うむ、実にサイコロらしい。

「で、その時のドクターが再びサイコロの不知火君と一緒にいるから、彼らがまた何かを企んでいると……ボウヤはそう言いたいんだな？」

「だつてそうとしか思えないよ」

そう答えるボウヤの目は遠くを見ていた。殺人の予告を受けて緊張して向かった現場でDICEの茶番劇に巻き込まれては、そうなるのも仕方ないのだろう。

「だとすれば面白いな。かつて助けられた人間がDICEと協力し合うとなれば、彼らは世界中に協力者を持つていることになるぞ」

「協力者つて、そんな大袈裟な」

「DICEの首領とされる王馬小吉の人脈は底が知れない。世界中の協力者達によるものだと考えたら納得できる」

勿論、DICEが助けてやった見返りとして協力を要求したわけでない。助けられた側が自ら申し出た結果のものだろう。報酬のやり取りがない純粹な厚意による協力関係であれば、物的な証拠は残りにくい。何より、単純な利害関係よりも絆が強い。

「どうせあの人達のことだから、絶対悪いことじゃないとは思う。邪魔しようとも思わないけど、してやられればなしも嫌なんだ。だから……」

今度はこつちが先に、彼らのやろうとしていることを突き止めてやりたい。

挑戦的な光を湛えた目でそう言ったボウヤに、自然とこちらの口角も上がった。

サイコロに対抗意識を燃やすボウヤと、彼らに少しでも接近しておきたい俺。目的は違えど、おそらく考えていることは同じ。どちらからともなく頷き合う。

「DICEは他者の犯罪にに応じて活動する。彼らの行動を推察するには、その元となる犯罪から調べるべきだろう」

「この島で起きた犯罪……もしかして、人魚騒ぎはそれに関係しているのかな」

「人魚騒ぎ？」

「あれ、沖矢さん知らないの？ 最近人魚を見たって人が続出してるとって話なんだけど。結構大きな騒ぎになってるらしいから、もう知ってるかと思ってた」

「……すまない。情報収集できるような余裕が無くてな」

「あー……やっぱり苦労してるんだね……」

大阪の知人達と話している不知火君を一瞥したボウヤが、俺を生温い目で見上げてきた。言いたいことは分かるがやめてくれ、後悔しそうになる。

と、その時。スタッフに連れられてやってきた人影があった。

元 超高校級の民俗学者、真宮寺是清。

かつて画面越しに見たその姿より青年らしく成長しているが、男性にしては丁寧過ぎるほど手入れが施された黒い長髪と、マスクで口元を隠すという怪しげな特徴は変わらず。見た目だけでなく、どこことなく緊張感のある独特な空気を纏った彼は、この古びた建物の空気に妙に馴染んでいるように思えた。

不知火君とは違った意味で掴み所が無さそうだと思っていると、こちらに向けられた彼の目がほんの僅かに細められた。もしかして、いや、もしかしなくても、向こうは俺達のことを知っているのでは。

その可能性は高い。不知火君に知られた時点でD I C Eにも筒抜けだと思っただか
るべきだろう。ボウヤが良い例だ。

「やあ、待たせたネ。僕の話が聞きたいというのは君達のことかな？」
おそらくこれは、世界初となるD I C Eとの直接対決になるだろう。

たま風攫うは桂男の憂い ③

さて、僕の知り得る限りの八尾比丘尼や世界各地に伝わる人魚関連の話を語ったけど、ここからは僕の持論だヨ。

君達は真つ先に訊ねてきたよね、人魚は存在するのかと。僕なら存在すると答える。ただし、飽くまで存在するというだけで、生物学的に生息しているという意味じゃない。僕達が今認識している世界とは、己の目や耳などの感覚器官で得た情報を脳内で都合良く構成し直したものだ。つまり自分の頭の中で完結してしまっているんだ。本人が存在すると思ひ込めば、人魚だろうが神さまだろうか何だつて存在することになるのさ。その人の世界の中ではネ。

「人はそれを妄想と呼ムグ」

今はちよつと黙つてようか不知火さん。

まあ確かに、身も蓋もない言い方をしてしまえば単なる妄想に過ぎない。

……だけど、その同じ妄想をする人間同士が数多く集まればどうなるかな？

1人の頭の中で完結していた事象は、同じ考えを持つ者同士の中で存在するようになる。それを信じる者が多ければ多いほど、それが存在する世界も大きくなっていく。村

単位、国単位……やがては現実の世界で存在するとされるようになるんだ。

ただの妄想が現実になるなんてあり得ないと思うだろう？ でも実際にそれは世界各地で実現しているんだよ。宗教や伝承といった形でだ。今この場で証明できなくても、過去にそれが起きた、とネ。

ご存知悪魔の証明というやつさ。有ることを証明するより、無いことを証明する方が遙かに困難だ。たった1つの証拠があるだけで、それが存在しないことは証明できなくなる。だから大勢の人間が信じ込んでいる存在を完全に否定するのは不可能に近いんだよ。こうして形成された文化も決して少なくない。

……人の思い込みとは、面白くも恐ろしい。架空の家族や恋人や神さまを作り出したり……そうそう、不知火さんも呪いを使えるんだっけ？

「ええつ、呪い!？」

「あー、アレかあ。私の忌まれし右拳で顔をぶん殴られると全治3週間の呪いを受けるってヤツ」

「不知火さん、それ呪いちやう、傷害や」

全くもってその通り。

だけど世の中には、傷害ではなく本当に呪いだと思えるような人間もいるんだヨ、困ったことに。

君達は探偵を名乗っているんだつたネ。それなら、ありもしない存在に託けた犯罪の1つくらいは覚えがあるんじゃないかナ。

どれだけ確たる証拠や筋道が通つた論理があるかと、暫な人間達はそれを無視して新たな真実を作り上げてしまう。一步引いて観察すれば簡単に正体が分かるのに。

でも逆を言えば、少なくともそれだけの人間が信じるようなキツカケがあつたんだヨ。火のないところに煙は立たず。嘘や虚構も理由が無ければ生まれない。

そのキツカケがどれだけ皆が信じている話の通りなのか、はたまた真つ赤な嘘なのか。嘘だとしたら、何故話が歪められたのか。

……それならこの島の人魚伝説の真実は、果たしてどうなっているんだろウネ？

「不知火さんは、人魚はいると思う？」

何故か焦つた様子の先生に半ば強引に引つ張られた先の彼の宿泊部屋で、一緒についできた灰原ちゃんがあることを聞いてきた。ついさつきまで聴いていたシングウジくんの話の続きだろうか。

「私？ いや、いないと思うなあ」

「どうして?」

「日本海には、個体数を維持できるほどの数の大型哺乳類のような食物連鎖の上位に位置する生物が、人に見つからずに住めるだけの場所や資源が無いって、別の友達が言っていた」

「想像以上のマジレス」

灰原ちゃんはカクリと肩を落として脱力した。

「……意外とリアリストなのね、あなた」

「私そんなに夢見がちに見えるの?」

「そうじゃなくて。あなた自身がどこか現実味の無い人だから」

「げんじつみがないとな」

同級生達にも偶に言われる。こないだも寒中水泳任務完了の報告したらマジでやったのかよ的な顔で見られたわ。しかしまさか灰原ちゃんにも似たようなことを言われるなんて。

「分かる分かる、オレも不知火さん達見てたらそんな気がする。天才過ぎて現実味が無い」

先生からすれば同級生も纏めて皆同じような評価らしい。望んで得た才能じゃないけど、使えるものは使う精神で伸ばしたら色々と凄いことになっただけである。特にオ

ウマくんとか。私もそんな皆に負けじと訓練した。

「不知火さん達が天才……ピアノリストの赤松さんなら分かるけど、不知火さんもなの？」

「あ、っ」

自分で言うのもなんだけど、世間ではダンガンロンパで生き残った私達を纏めて天才集団と呼ぶんだよなあ。あの事件のことはあまり公にしないようにと約束したのに、先生たらうっかり口を滑らせちゃって。

「えっと、そう、アレだよ。不知火さんは隠密の、うん、天才だから」

「……隠密。まあ、分からなくはないわ。博士の家から帰るときはあつという間に姿がなくなっちゃうもの」

今度は先生からギョツとしたような目を向けられた。そっちこそ部外者の前で露骨過ぎやしないかと言いたげな目である。良いんだよ、目の前でやらなきや普通誰も信じやしないんだし。君だってそうだったじゃないか。

「それより私が気になるのは」

灰原ちゃんが畳の上で足を投げ出し壁にもたれて座る私の隣まで来ながら、言葉を続けた。

「あなたが何故こんなことをしなくちゃいけないか、よ」

「こんなこと、と指差したのは、柄の部分だけ伸ばして壁に立てかけたスコップの持ち

手に引つ掛けた血液の袋。そこから伸びるチューブの針は、安静にしている私の左腕に刺さっている。有り体に言えば輸血中の状態。

「あのね、私病気なんだ」

「それは見れば分かるわ。何の病気なのかを聞きたいの」

「私もよく分からない」

「よく分からないって……」

呆れた灰原ちゃんに視線を向けられた先生は、苦笑いをしながら答えた。

「不知火さんは自力で血液が作れない病気なんだ。だからこうして定期的に輸血しないと体調を崩してしまうんだよ」

「……………」

先生は分かりやすく言葉を砕いて説明してくれたものの、灰原ちゃんは納得しきっていない顔だった。

「造血……骨髄に関するとしたらかなりの難病のはずだけど、それにしても随分元気よね」

「わあ、骨髄だなんて灰原ちゃんてば物知り」

「本当なら酸素欠乏で普通の人より運動が苦手なはずなんだけど……不知火さんに限っては事情が全く違うみたいで」

自力でマトモな血液が作れない症状からして、再生不良性貧血だのたまたま白血病だの大仰な病名がつきそうだったが、どうやらそのどれとも違うらしい。まあ輸血の現場見られない限り誰にも病人と分らない時点でお察しである。私もそんな自覚は殆ど無い。ついでに言えば長期間輸血しないままでも最悪死にはしない。極端に体が怠くなつて活動が鈍くなるだけだ。

「とにかく私のことは大丈夫だよ。主治医の先生も輸血は私以上に気にかけてくれるし、見ての通り生活にも支障は無いし」

「信じてても、良いのね？」

「良いんだよ！　都合が悪いことは適当に誤魔化したりはぐらかしたり黙秘するし、誰かにデマを吹き込まれたという名目でなら嘘を言うことはあるけど、自分からは絶対に嘘は言わないんだあ」

「……私、あなたのそういう大っぴらに怪しいところ、嫌いじゃないわ」
「大っぴらに怪しいとは」

そんな話をしていくうちに時間は過ぎていく。たまに先生が様子を見るだけで、輸血も問題無く完了しようとする。ふとコートの内ポケットから携帯電話を出すと、新しいメールが何通か来ていることに気付いた。

「あららら」

その内容に上体を起こして反応する私に灰原ちゃんは首を傾げた。

「灰原ちゃん、機会があったらまたこんな感じの旅行に行きたいと思う？」

「え？」

「昨日撮った写真を友達に送ったらね、灰原ちゃんと一緒に行きたいって言ってるの」

「不知火さんの友達が、私と？」

「正しくは友達のところまで働いてるお手伝いさんなんだけど。悪い人じゃないよ、いつも妹さんを気にかけてる優しいお姉さんなんだ。なかなか会えなくて大変みたい」

「お姉、さん……」

「灰原ちゃんが小さい頃の妹さんソックリらしくてマジかわヤバたんってなんかもうメロメロに……この方向性もある意味怖いな。断つところか」

「いいえ、いつか一緒に行きましようって返事しといて」

「ヒューツ、ソークール……」

灰原ちゃんの言う通りに返信したら、文字が狂喜乱舞している文面のメールが即届いた。こわ、一体どうしちやっただの宮野ちゃん。

その後、先生と部屋で別れて、この宿屋の受付前で待たせている沖矢さんに会いに行けば、とつくに解散していると思われた江戸川くんと一緒にいるのが見えた。なんだなんだ、仲良いな君達。

話し込んでいた彼らも私達の方に気がつくつと、江戸川くんはパツと表情を明るくして立ち上がった。

「おかえり不知火さん！ 浅井先生に用事つて何だったの？」

「あなたは気にしなくても良いことよ」

「灰原ちゃん？」

私が口を開くよりも前に灰原ちゃんがサツとそう言った。別に輸血なんて隠すことでもないんだけど。もしかして彼らを心配させまいと気を遣つてくれているのだろうか。

まるで私を庇うような彼女の言い方に、江戸川くんが出鼻を挫かれたように目を丸くして言葉を淀ませた。

「そ、そう……？ あつ、それよりさ不知火さん！ ボク達と一緒に祭り見に行こうよ！」

「祭りつて、儒艮祭り？ 御守りの矢が当たるかもつてやつなの」

「蘭さんと遠山さんが、偶然余つた番号札をいただいたそうなんです」

おお、それは何ともラッキーな。まあ当たるかどうかは彼女次第だけだな。

しかし、今回この島に来たのはそれに参加するためじゃない。ある意味そうだけどそうじゃない。飽くまでメインは……

その時、私の右腕に細い両腕が絡みついてきた。

「悪いけど、この後私達デートだから」

「?!?!」

江戸川くんの目はこれでもかと思開かれ、沖矢さんは小さく息を呑み、私はいろんな意味で肝をペシャンコに潰した。私の腕にしがみ付く灰原ちゃんのその一言は、この場に絶大な影響をもたらした。

でーと。デートと言ったかこの子は。

ビックリ仰天して彼女をマジマジと見下ろすと、不敵な笑みが返ってきた。

「そうでしょ？　ちゃんとエスコートしてくれなきゃイヤよ、王子様」

脳内でスパークが弾けたのを最後に、しばらく頭の中が真っ白になっていた。

床を転げ回らなかつた私を誰か褒める。宮野ちゃんの気持ち超分かる。ぎゃわいい。

「ん勿論ですともお姫様あん!!　誠心誠意エスコートさせていただきます!!!」

王子様、王子様である。浮浪児がとんだ出世をしたもんだ。これは何が何でも完遂させねばなるまい。何をつて何もかもだよ。

「沖矢さんは江戸川くんとデートするみたいだし、ほつといてあげましょう」

「そうだねえ！」

「えっ」

「おい待て灰原」

輸血直後ということもあって超絶好調だ。いつそお姫様抱つこで連れ回したいところを我慢し、「灰原ちゃんの紅葉みたいなおてを優しく引いて早速お昼ご飯を食べに行く。いきなりがつりしたお魚の刺身や天ぷらは避けておこう。この島にはそんなに食べない灰原ちゃんでも食べられそうなお蕎麦屋さんもあったはずだ。

「……………どうしよう赤井さん。この展開は予想してなかったね。不知火さんがダメだとすれば、浅井先生か真宮寺さんに近づくしかないんだけど」

「……………」

「赤井さん？」

「……………姫を盗られた……………」

「赤井さん、ちよつと休もうか」

「……………？」

「どしたの灰原ちゃん」

「いえ……トラツクがクラツシユしたような音が聞こえた気がして……」
「そんな物騒なことは起きてないよ！」

「君恵！ どういうことよ、話が違うじゃない！」

そんなヒステリックな声が上がったのは、儒艮祭りも終わりに近づいてきた時だった。

運が良いんだか悪いんだか、和葉が不老長寿の御守りである儒艮の矢の抽選に当選し、それを人魚の滝と呼ばれる場所で受け取った後のこと。

ただならぬ剣幕のその声に振り返れば、祭りの参加者達が徐々に解散していく中、オレ達がこの島に来るキツカケを作った元依頼人の沙織さんが、さっきまで祭りの進行を務めていた君恵さんに詰め寄る光景があった。

「私言ったわよね？ 命様に私の番号が当たるように都合してほしいって……！」
「そ、そんなのできるわけじゃないじゃない！」

矢の抽選に当たった3人は、和葉に寿美さんと奈緒子さん。和葉の他は、何の因果か沙織さんと親しい幼馴染だ。そんな彼女達の中で唯一矢が当たらなかった沙織さんが、

君恵さんに八つ当たりをしているようだった。

「不公平だからって？ でも寿美達には当たってるじゃないの！」

「だからそれは、」

「私だけ友達じゃないって言うの!?!」

君恵さんが宥めようとしても沙織さんは聞かず、ヒートアップしていくばかり。その勢いは見ているこちらがヒヤリとするほど。どれだけあの矢に執着しているんだ。

「まあまあ、落ち着いてください。それ以上はいけませんよ」

あのままでは暴力沙汰になってもおかしくないと、見かねた毛利のおっちゃんが入った。言葉を交わしたことがある第三者の介入に、流石の沙織さんも頭が冷めたのか、気まずそうに君恵さんから一步下がりに、我に返っておっちゃんの他にもオレ達が見ていることに気付くと、逃げるようにこの場から立ち去って行った。……その直前、和葉の方を鋭く見やうて。

「君恵さん、大丈夫ですか！」

「見苦しいところを見せちゃったわね……」

蘭ちゃんや和葉が真つ先に君恵さんに駆け寄る。沙織さんに掴みかかられていた君恵さんは、どこか落胆しているように見えた。矢が目で友達でいるような沙織さんに失望したかのようだ。すると、さっきのやり取りを見ていた和葉が言う。

「あの……アタシ、儒艮の矢をもらたばかりやけど、これって誰かにあげても問題無いかな」

「和葉？」

「沙織さんにあげれば、君恵さんも責められんし、丸く収まるんちゃうか……なんて」

なんと、さつきまで矢が当たって大喜びしていた和葉が、それをもう手放そうとしている。君恵さんはビックリしたように目を丸くすると、微笑んで首を横に振った。

「そんなことしなくてもいいわ。それはあなたが手に入れたものなんだから」

「で、でも……」

「私のことは気にしないで。沙織の人魚狂いだって今に始まったことじゃないんだし。どうしても手放したいのなら、私に返してくればいいわ」

そう言つて笑う君恵さんに、食い下がっていた和葉も引き下がった。

「どうしたの和葉ちゃん、せっかく当たったのに」

「んー……特に大した意味は無いんやけど、さつきの君恵さん達を見てたら、ちよつと怖くなってな……」

「怖い？」

「ほら、あの真宮寺さんが言うてたやん。人魚は災いの象徴でもある、って」

「あぁー」

真宮寺さんって、今日の昼間に会ったあの胡散臭い大学生のことか。見た目も雰囲気も何処をとつても怪しい奴。ただ、民俗学を専攻しているとだけあって、そういう分野において自分よりも造詣が深いところは素直に感心した。

和葉が言っているのは、真宮寺さんが日本を含めた世界中の人魚に纏わる話に共通しているものとして、バッドエンドが圧倒的に多いと挙げたことだろう。曰く、人魚の出現は災害の前触れであるとか、人魚そのものが人間に害を及ぼしたりとか。

「……それにしても、あの沙織さんの様子は流石に異様やないか？ 御守りなくしただけであないに焦るもんやろか」

「……………」

「それにさっきの言い争いも、島の皆気まずそーに見て見ぬフリしよつて。部外者のおっちゃんか止めるくらいに騒ぎやったのに。何か変やでこの島」

「……………」

「……………おい工藤?」

「えっ、あつ、何か言つたか?」

変なのはこの縮んだ高校生探偵もだった。昼間に不知火さんや真宮寺さんと出会つてから、暇さえあればこうして物思いに耽つていた。偶々知人と鉢合わせただけの反応ではないことは分かるが、それ以上のことは分からない。

「確かにあの儒艸の矢への盲信っぷりは気になりますね。他の島民達はそれほどでもないのに、何故彼女達だけがあのように命様を信じているのでしょうか」

「……………」

気になるのは工藤だけでなかった。シレッとオレ達に付いて来ているこの沖矢昴とか言う大学院生の男もツツコミどころだった。あんたは不知火さんや灰原と一緒に来たんじゃないのか。

するとそこで、ハッと何かを思い出した工藤が慌てたように言い出した。

「あつ、ヤベエ忘れてた！」

「急に何や」

「オレ、変声機使えねえんだ……………！」

「はあ？」

「不知火さんって、昼間に会っただろ」

「ああ、会うたな。その人がどないしたん」

「あの人にはオレの正体は隠しているんだけど」

「確かにそんな感じやったな」

「……………あの人、めちやくちや耳が良くて、変声機で声を変えても地声を聞き取れちゃうんだよ」

「えっ」

何故か沖矢さんまでピクリと反応したのが視界の端に見えた。

「てなわけで、いざという時にはフォローよろしくな」

「いやいやいや、まず使うような事態にはなつてないやろ」

「とにかく！ 不知火さんには色々と知られちゃマズイんだよ！ 信用できる人だけだよ！」

信用できるのに色々と知られたらマズイ人って、一体何なんだ不知火さん。見た目小生についてくる大学院生と言ひ、オレの交友関係は思つていた以上に複雑怪奇なのかもしれない。

「ねえ灰原ちゃん、食べたら皮膚が痒くなったり息苦しくなるようなものつてある？ お昼の蕎麦は平気だったね」

「食物アレルギーのことかしら。無いわよ」

「それは良かった！ 毒や銃弾なら防げるけど、流石にアレルギーばかりはどうしようもないからねえ」

「むしろ毒まで防げる方が凄いとと思うけど……」

「そんな大したトリックとかは無いよ。毒味するだけ」

「そう言えばあなたトリカブト食べてたわね」

「好きで食べたんじゃないよお！」

「でも、毒味だなんて穏やかじゃないわね」

「昔は特にそうせざるを得なかったんだ……」

「あなた本当に普段は何をしてる人なの？」

「うーん……運送業の他には、友人の警護とかが多いかなあ」

「要人ではなく」

「友人だよ。特にミウちゃんには面倒くさい奴らに目をつけられやすくねえ。まあ彼女の場合は玄関前でシャットアウトできるセキュリティがあるから毒味の出番なんて無いんだけど。あまりに粘着がしつこい場合は、私がそのつのストーカーになってやるんだ」

「どうしてストーカー……」

「そいつの自宅や職場とか家族の写真をミウちゃん宅の玄関扉に貼っつけておくと、もう二度と来なくなるの」

「なるほど」

「他人のプライバシーを脅かす職業の人間って、逆に自分のプライバシーが暴かれることを極端に怖がる奴が多いんだよねえ」

「それはそうでしょ。諜報員は自分の身分を隠しているからこそ成り立つんだから」

「相手がやってる同じことをやり返して恐怖のズンドコに叩き落としてやるの、めっちゃ楽しい」

「やだ、不知火さんったら性格悪い」

「灰原ちゃんはそのような奴に付き纏われてたりしない？」

「……………」

「えっ、マジで」

「ストーカー……ではないけど、監視されているような気はするわ」

「それダメなやつじゃね？ どうする、そいつの家族構成から血液型まで何だっけ調べちゃうよ」

「そこまでしなくても良いけど……じゃあ、個人的に私の警護をお願いできるかしら」「是非とも喜んでえ!!」

たま風攫うは桂男の憂い ④

「おかえり、お疲れ」

その日、バーボンとしての仕事を終え、ほぼ丸一日ぶりにようやく帰宅したら、リビングで幼馴染が愛犬と戯れている光景に出くわした。玄関を二度見したが、やはり靴は無かった。

俺の表情を見た途端に愛犬をおいて逃げる家宅侵入の現行犯を制圧し、マルフタサンハチと時計で確認してから事情を問い質せば、不知火さんが数日不在になるので代わりにここへ身を寄せたのだと釈明してきた。一応彼女達の旅行のことは知っているが……

「頼むからせめて連絡の1つくらい入れてからにしてくれ、心臓が悪い」

「忙しいと思って……」

「そもそもいつ来たんだ」

「昨日……いや、一昨日だ」

「旅先にいる不知火さんをわざわざ呼びつけたのかお前は……」

確かに彼女に限って物理的な距離は無いに等しいが、色々と感覚がおかしいこの幼馴染

染に思わず溜息が出る。4年に渡る超高校級な逃亡生活は、幼馴染の常識を少し狂わせてしまったようだった。

「夕飯は冷蔵庫にあったもので作った」

「ああ、うん、ありがとう……」

不知火さんの助けによってほぼ自由にこの家に来るようになった幼馴染は、勝手知ったる他人の家と言わんばかりに大変図太く振る舞うようになってきた。ヘトヘトになつて帰宅したら食事ができているこの状況は有難いが、最初は礼を言うべきか叱るべきか大いに迷った。互いの立場を考えれば当然叱るべきだったんだろうが、あいつが俺をどうこうするとも思えないし、なし崩し的に受け入れてしまっている。

……死んだと思っていたこいつが不知火さんに匿われていると知った時は、俺の幼馴染を勝手に振り回してくれるなという憤りの気持ちも少なからずあった。

だが、最近の様子を見るに、それは誤解なのではと思うようになってきた。不知火さんの方こそ、この男に振り回されているのではないだろうか。

「これ、クシビから送られてきたんだ」

幼馴染が見せてきた携帯電話の画面には、浴衣を着た笑顔の不知火さんが気恥ずかしそうに微笑む哀ちゃんの肩を抱いて自撮りした写真があった。うわ、真つ黒じゃない不知火さんなんて初めて見た。

そして彼女達の遙か背後には沖矢昴の姿も控えめに小さく写っていた。おい本当に一緒に行ってるぞあの男。

「この子はともかく、オレというものがありませんながら何故赤井を連れて行ったんだ」

「ただの成り行きらしいぞ。それにお前が行く方が尚更おかしいだろ」

「それもそうだけど」

哀ちゃんが行かなければ当然のように自分も行くつもりであつたらしい幼馴染に軽い目眩を覚えた。俺も越前ガニ食べたかったという贅沢な眩きが聞こえてきて更に頭痛まで加わった。

こいつ、潜伏中の身でありながら舌が肥えてるぞ。あんまり甘やかさないでくれ不知火さん。

やがて再び愛犬と戯れ始めた幼馴染は、食事に手をつけようとしていた俺にサラッとこんなことを言ってきた。

「そう言えばクシビがお前に10万円よこせと言っていたぞ」

「はああ!?! 何でそんな大金を要求されなくちやいけないんだ? 慰謝料のつもりか?」

俺の存在自体が不快だと言いたいのか!?! だとすれば流石に黙っていないぞ、名誉毀損や恐喝罪も視野に入れて」

「5往復分の送迎代だって」

「今後とも何卒よろしくお願い致しますとお伝えください」
「手首柔らかいな」

うるさいやかましいわ。あの機密性と速さで片道一万円は信じられないほどの破格だ。新幹線で東京から何の警備の手配も無しに一時間半かけて行く名古屋までがほぼ同じ値段だと考えたら払わない方がおかしい。むしろ料金を請求されて安心した。アレがタダであつて良いはずが無い。

「確かに受け取った」

「ちゃんと渡してくれよ、後で彼女本人に確認するからな」

きつちり一〇万円を入れた封筒を幼馴染に渡し、食事を再開する。いつものことだがとても美味しい。今夜の献立は焼き鮭とほうれん草のお浸しに、豆腐とわかめの味噌汁とご飯だった。

元から料理ができるやつだったがその腕は衰えていない。潜伏中も練習できる暇はあつたのかと訊ねてみると。

「ああ、彼女だよ、超高校級のメイドさん。寮にいた時や家にお邪魔した時に、新しく習ったりしたんだ」

「メイドの……東条斬美か」

「それと、クシビにも」

「彼女料理作れたのか!？」

「失礼だなお前、生活力ならオレよりあいつの方がずっと上だぞ」

意外だ。風見に彼らの調査をさせていた頃、コンビニやスーパーで惣菜を買っていく姿が何度も見られたと言っていた。てつきり料理は苦手なのかと思っていたが……いや、考えてみたら彼女は事件前から一人で暮らしていたんだ。できても何らおかしくない。

すると、幼馴染は目つきを険しくさせて語り始める。

「料理ができないどころか、彼女は食べ物に関してはガチ勢だぞ」

「食べ物のガチ勢」

「オレが寮で匿われた当初、自分は公安の人間で由来の分からない物を口にできないと言ったら、電波も通じない森と一緒にイノシシ狩りをする羽目になった」

「どうしてそうなった」

「食べるものが生きてるところから経過を見ておけば安心できるよね、と」

「考え方は間違っていないが実行するレベルがおかしくないか」

「解体の手際も無駄が無かった……」

アレが人生初のジビエだったな、と幼馴染が感慨深げに呟いたのが聞こえた。そこは一緒に台所に立てば良いだけの話だろ。鳥獣保護法とかツツコミどころはあったが、猟

銃を持った専門家でもない当時未成年が野生のイノシシと対峙して仕留めた事実には薄ら寒くなる。高いのは生活力ではなく戦鬪力の間違いなのでは。

……まあ世の中素手でコンクリの柱を折るような高校生空手家もいるらしいし、そんなに珍しいことではないのかもしれない。

「そこまで徹底しなくていいと言ったんだが、あの寮ではクシビが外で獲ってきた動植物が食卓に並ぶのが通例だったらしい」

「おい……ちゃんと寮には食料は供給されてたんだよな？　まさか、不当に少なくされていたわけじゃないよな？」

「足りてるには足りていたが……オレが寮に匿われる以前に、供給される食べ物の中に薬物を混入されたことが何度かあったようだな」

「」

「どうやら無断で彼らの治験データを取ろうとした連中がいたらしい。元から食べ物にはオレ以上に警戒していた。だから自由に外へ出られるクシビに調達を任せようになつたんだ」

俺は無言で顔面を手で覆った。あの寮で起きたことが今のDICEの態度を作ったことは知っていたが、まさかそんな馬鹿なことまで行われていたなんて。社会に役立つという名目でそんなことをされていたなら、彼らが法や正義を忌み嫌うようになるの

は当然だ。

「あそこから出た後も散々荒れていた。あの寮での軟禁生活を裏で”1年戦争”と呼んでいるくらいだから、相当な目に遭ったんだろう」

「せ、せんそう……」

「当時のあいつらにとつて寮の外にいる全人類が敵だったんだ。皮肉なことに、当時のあいつらは確かに無国籍だったしな。そこに転がり込んだオレは、差し詰め捕虜か亡命者つてところかな」

「……でも今は、日本人だろ？」

「法律上ではそうなっているが、気分的には日本国籍を取得して潜伏している工作員らしいぞ」

「」

彼らの中で戦争^{事件}はまだ終わっていないなかった。その結果がああサイコロだと思えば大いに納得できた。むしろそうとしか思えなくなってきた。随分平和な攻撃だなチクシヨウ!!

頭を抱える俺に、未だに従順な捕虜を自らの意志で続ける幼馴染は静かな声で言う。

「これ以上お前を追い詰めるのも不本意だし、この話題はクシビの迷言で締めよう」

「オイどうしてそうなるんだ。止める、嫌な予感がする。聞きたくない」

『セイギって少しズレるとギセイじゃね?』

「止めてって!! 言ったのに!!!」

的確に胸を抉られて床に沈んだ俺の顔を、何かの遊びだと思っただけらしいハロが無邪気で無垢な表情で覗き込んでくる。やはりお前だけが俺の癒しだ。景光はサイコロに亡命したまま日本に戻ってこない裏切り者だった。もう誰も信じられない。

「ところで話は変わるが、これまでお前や組織が殺し損ねてオレ達が処理した連中の逃し先のリストについて……取引する気はあるか」

跳ね起きた俺は即座に2枚目の封筒を用意した。

「昨日、探偵さん達に語っていて思ったんだけど、自分でも改めて不思議に思ったヨ。人魚やセイレーン、場所によって微妙な差異こそあれど、魚と人間を混ぜた特徴を持つ生き物の伝承は世界中に散見される。似た特徴を持つ伝承がこれほど広範囲に、異なる文化圏で存在するなんて、そうそうあるものじゃない。もしかしたら元になった生き物は本当に存在するのかもしれないネ……」

「いや、想像できる範囲が狭いだけじゃないかな。鶴やキメラと違って混ざっているのが人間と魚の２種類だけだから、互いの身体的特徴を合わせた時に考えつく姿は自然と限られるよ」

「なるほど、それもそうか」

「人と魚のハイブリッド……じゃあ人魚って赤身なの？ それとも白身？」

「流石にそこまで設定は作り込まれていないんじゃないかな」

何この会話、面白い。

2回目となる美國島を訪れ、儒艮祭りから一夜明けた翌日の昼。不知火さんが私や友人を誘ってやって来た浜焼きのお店で繰り広げられる会話は、人魚の話題だった。昨晚のお祭りに来ていた観光客や島民で溢れるこの店は、とても活気に満ちている。

そういう話の専門家である真宮寺さん。最も現実的な価値観を持つであろう医者の方、浅井さん。そして独特な感性を持つ不知火さんの3人が行う、人魚という非現実的な話題についての大真面目な討論は、さほど興味が無い私でも思わず引き込まれそうになる妙な面白さがあった。

それにしても真宮寺さん、マスクしたまま食事するのね。口元のジッパーは開けているけど。不知火さんも屋内だから今はフードを外しているけど、顔を隠すのが好きなのかしら。

「あの水の抵抗をモロに受ける体型で泳ぐとしたら相当なエネルギーが必要だろうか、酸素効率の良い赤身である可能性が高い」

「人魚は赤身だった」

「人魚の刺身……タタキ……カルパッチョ……」

「経緯は諸説あるけど、八百比丘尼が食べた人魚は家族がお土産として持ち帰った料理らしいから、日持ちするようにしっかりと火が通してあったものかもしれないネ」

「唐揚げ……ムニエル……ソテー……」

「不知火さん、私のはもう大丈夫だから、そろそろ自分のを食べてちょうだい？」

不知火さんの意見が食べることに染まっている原因が、自分の食事を我慢した上で、焼いたカニの身を殻から綺麗に取り出しては私の取り皿に盛っていく作業を献身的に続けていることだと悟った私は、彼女の口元に剥いてもらったばかりのカニを持っていく。不知火さんは奇妙な呻き声を上げて座席にうずくまった。「トートイ、トートイ」という謎の鳴き声が聞こえる。

……この旅行で分かったけど、不知火さんは一度尽くすと決めたらトコトン尽くす人だ。自分本位ではなく、飽くまでも相手が快適でいられるように世話を焼いてくれる。

「……不知火さんが悪い男に引つかからないか不安だわ」

「ああ、心配無いヨ。本当にろくでもない連中は近づく前に自然と排除されるサ」

「それに彼女は嘘つきを簡単に見抜けるんだ。彼女からもそういう人に近づいたりはしな」

「嘘が分かるの？」

「と言つても、自分に嘘をつかれたことが分かるだけで、本当のことまでは分からないつて。どういう意図での嘘かは彼女が勝手に想像しちゃうから……知らないうちに物凄しい誤解が生まれることもあるんだ」

そう語る浅井先生の目は、ここではない遠くを眺めていた。

嘘つきが分かるなんて、便利なような厄介なような。だから安室さんに冷たいのね。彼は普段から嘘で身を固めているようなものだから。立場上仕方がないとは言え、不知火さんからしてみれば胡散臭いことこの上無いのでしよう。

「そう言えば、不知火さんと真宮寺さんは同じ学校の出身って聞いたんだけど、浅井先生とはどういう関係？」

ふと気になっていたことを訊ねると、彼らは顔を見合わせた。どう答えようか迷っているような困り顔。

「先生とはねえ、人生相談から関係が始まったんだよ」

いつの間にか体を起こしていた不知火さんがそう答えた。

「友達を警護している最中に、家族を殺した相手に復讐しようとしてた先生と会ったんだあ」

重い。

想像をいろんな意味で軽く超えてきた。恐る恐る張本人の様子を伺うも、浅井さんはテーブルに突っ伏したきり顔を上げようとしない。真宮寺さんは網の上で焦げていく貝殻の破片をひたすら無言で見つめていた。

それでも否定の言葉が誰からも上がらないということとは、つまりそういうことなんだと思う。心なしか、このテーブル席の周辺だけでなく、店内丸ごとの空気が一気に沈んだ気がした。

「どうやってその憎つくきクソツタレ共をギャフンと言わせてやろうかって時に、偶々その場に居合わせた毛利のおじさまや江戸川くん達が、奴らの仕出かした悪事を事細かに暴いてくれたんだ」

「……彼らもその現場にいたの？」

「そうだよ」

道理で浅井さんと面識があつたわけね。工藤君らしい経緯と言えぱそうかもしれない。

「で、浅井さんの気はそれで済んだの？」

「……………おかげさまで。合法的に思う存分鬱憤を晴らす機会をもらえました」

彼の顔は突つ伏したままだけど、力なく上げられたその右手はサムズアップしていた。

「一緒に雰囲気盛り上げてくれた江戸川くん達の怪演っぷりは灰原ちゃんにも見せたかったなあ。ギリギリで幽霊や呪いの仕業とまでは断言してなかったけど、彼らがそれっぽく何か言うたびに心当たりがありまくるせいつらがヒイヒイ恐慌していくのを、影から見てお腹が痛くなるほど笑ったよ」

浅井さんの復讐相手を陥れた話を語る不知火さんは、とてもイイ笑顔をしていた。すると、ようやく顔を上げた浅井さんが苦笑いで言う。

「本当は自分の手で殺したいほどあいつらを憎んでいたんだけど、自分達が殺した父の亡霊の影に怯えるあいつらを冷静に見ていたら考えが変わったんだ。あんなくだらない奴らのために手を汚そうとしていたのが、急にバカらしくなってきた」

「……………それで、復讐は止めたのね」

「いや、復讐そのものは止めてないよ」

「え?」

「方法を変えただけ。オレ自身が父に扮して、奴らの視界を掠めるようにウロつきまくった」

おっとそれは。

急にコメディ感が出てきたことで、店内の重くなつた空気も徐々に浮上してきた。どうやらこの会話は周り中から聞き耳を立てられていているみたい。

「脚本は僕だヨ」

「脚本」

いつの間にか真つ黒になつた貝殻から視線を外した真宮寺さんがノリノリでそう言った。

「僕はその現場にはいなかったけど、そこにいた最原君や赤松さんから頼まれて、人を効果的に恐怖させる演出を考えたのサ」

「それをオレが実行した」

「そのアシスタントが私」

「毛利探偵や江戸川君達は狂言回し役だネ」

「そして奴らが主演！」

「あなた達何の劇団？」

これが所謂劇場型犯罪……いや、何か違う気がする。犯罪でもないんだけど。

とにかく、主演の逮捕という形で終幕したその1件で、浅井さんと不知火さん達の交流は始まったそうで。

「ふーん……復讐を手伝うなんて、何だか必殺の仕事人みたいね」

「いやいや、甘いね灰原ちゃん！ 本気で復讐したいなら必殺しちやダメなのさー！」

「えっ」

「そりゃ殺される時にはそれこそ死ぬほど苦しいけどね、死んだらそれ以上は感じなくなるんだよ」

「それはそうかもしれないけど……」

「自分はそのいつのせいで延々と苦しんでいるのに、殺人を犯すリスクを背負ってまで実行したところで実際はほんの一時の苦しみだけしか与えられないって、とんでもなく割りに合わないと思わない？」

「お、思う……」

「だからね、相手を本気で苦しめたいなら、まず生かしておかなきゃいけないんだよ。生きてこそその苦しみだもの。その時の激情に駆られてサクツとヤツちやうと、他でもない自分も困ることになるんだよ。色んな意味でねえ」

相変わらずイイ笑顔のままドス黒いことを論じる不知火さん。思わぬところで再び彼女の闇を覗き込んでしまった。

確かに、不知火さんが完全な善人ではないことは薄々察していた。むしろ無害な悪人と表現した方がしっくりくる。銃や毒に対応できる時点で一般人ではないもの。

「生きてこそその苦しみ、か……」

浅井さんがふと、そう呟いた。

「そうだね。生きているからその分の喜びもあるし、苦しみもあるんだ」

元復讐者の彼が言うのと、物凄く説得力のある言葉だった。思わず頷く。

それに反応したのが、不知火さんだった。

「あー、そつかあ。それなら人魚を食べて不老不死になるのって、食い物にされた人魚の復讐なのかもしれないね！」

だって永遠に苦しむことになるんだからね！

ケタケタと無邪気に言い放たれたその言葉に、元通りの喧騒が満ち始めた店内の空気がまたも見事に凍りついた。何事。

見れば浅井さんは唾然としたように口元を手で覆って不知火さんを凝視し、真宮寺さんに至っては何故か感動に打ち震えた様子で自分の体を抱き締めていた。

「僕は今、君の悪意の真髄を見たヨ……！」

「……呪いって、こういうことかあ……」

彼らのそんな呟きは、地元の人も集まるこの店の静まり返った空気によく響いた。

去年のお祭りで起きた出来事は、今も鮮明に思い出せる。

かつて私のおばーちゃんや母さんがやっていたように、大おばーちゃんの姿で矢の当選番号をお祭りで示して、変装を解いて、大喜びする当選者達に矢を渡して。

お祭りの後で大おばーちゃんについて島の外の人に取材されることはよくあつたけど、いつもと違ったのは、こんな感想を言われたこと。

『とつてもリアルなコスプレでしたね！ 魂のこもった演技、凄く感動しました……！』
身を乗り出して私の手を握り、フードの奥の目を輝かせてそう言ってきた相手は、私
がしばらく硬直している間に取材を申し出た本人に勢いよく後頭部を叩かれていた。

「これがその名簿やな」

「では、拝見させていただきます」

「ええどうぞ」

今年のお祭りも無事に終えたその翌日。私の家に本土から来た探偵さん達が訪れてきた。

過去のお祭りで配布された矢の番号札と、その持ち主を照らし合わせる名簿が見た
いらしい。儒艮祭りには有名人も多く参加したことがあると聞いて、どんな人達が来た

のかを調べたくなつたと、そう言っていた。

「そんなのを調べて、何が分かるんですか？」

「んー……特にこれといったもんを探しとるんやないけど、この島の人魚信仰の根拠を知りとうて」

「過去にどのような人が矢を手に入れて、その恩恵にあやかつたのか。それを調べたら何かが掴めそうだと思つたんです」

色黒の少年と眼鏡をかけた男性が、名簿に目を通しながらそう答えた。

命様の不老長寿の秘密ではなく、島が人魚に染まつている理由を知りにきた。これもいつもとは違うパターンだった。

「あ、去年の名簿に沙織さんの名前が載ってるよ」

「いやいや、去年のだけとちやうで。どうやら毎年参加しとるようや」

「寿美さんや奈緒子さんの名前もありますね」

そりやそうよ、あの3人のことだもの。去年は沙織に矢を当てさせて、今年は寿美と奈緒子に当てさせた。

来年は、どうなるのかな。

……1週間前。矢を無くした沙織から思わぬ言葉を聞いて3年前の火事の真相を

知った私は、半狂乱に陥った。悲しくて苦しくて、どうしようもなかった。だけど命様を信じる島の人達には打ち明けられない。

そこで思い出したのが、去年のお祭りで連絡先を知った学生さん達のこと。閉鎖空間における信仰の形成について興味があるというだけで、連絡先を教えられただけの関係だった。

不慮の事故のような形でだけど、命様の仕組みを知ったあの人達なら、と。縋る思いで電話をして、堰を切ったように全て訴えてしまった。親子で島のためにずっと命様を守り続けてきたのに、そのせいで母を喪ったこと。身勝手な理由で母を殺した幼馴染達に復讐したいと、正直に言ってしまった。

部外者に対してウツカリ言い過ぎてしまったと、そんな後悔をする間もなく、向こうは期待を超える反応を返してくれた。なんと、私の復讐に賛同するどころか、手まで貸してくれることになったのだ。

ただの研究熱心な学生さんかと思いきや、その正体はとんでもない過去を持った人達だと知ったのはその翌日。犯罪で苦しむ人の気持ちがかかると言うのも納得できた。

彼らに根気良く説得されたことで復讐心は抑えられ、私も彼らの計画に賛同した。と言っても、私がやったのは命様として矢の当選番号を示すことだけ。それでも状況は確実に変わっている。現に今、外部の人が人魚の謎に迫ろうとしている。

「……ん？ 2年前の名簿から著名人の名前が減つとるな」

「一般の方が増えたとも言えますね」

ふと、名簿を読んでいた2人からそんな声が上がった。すると、私が淹れたお茶を飲んで雑談していた女子高生さん達が言う。

「それって人魚の死体騒ぎのせいじゃない？」

「ネットでも大騒ぎしとつたもんなあ」

「ホオー、3年前の騒動にはそこまで大きな影響力があつたのですね」

思わず心臓が大きく跳ねた。

やつぱりあの人達に相談して良かった。彼らがこの島に呼んでくれたこの人達は、こんなにも早々と真相に近づいてくれた。島の人たちは、見向きもしなかったのに。

「ねえねえ君恵さん。神社の倉が焼けたときのことを教えてほしいんだけど、良いかな？」

「ええ、私が教えられる限りで良いなら」

どうか一刻も早く、私をこの呪縛から解き放つてほしい。

たま風攫うは桂男の憂い ⑤

「おはようございます」

「……………んあようございあす……………」

美國島滞在3日目。予定では今日が最終日だったはずだ。せめて今日ぐらいは行動を共にできればと、志保と不知火君が泊まる部屋を訪れると、皺の寄ったTシャツとスウェットのパンツを着て、正に今しがた起きたばかりですといった風貌の不知火君が出迎えてくれた。もう朝の10時を回っているはずだが。

「……………眠そうですね」

「遅寝遅起きが常でして……………」

「もしま、哀ちゃんもですか？」

「うん、熟睡中」

彼女達が朝に弱いことは知っていたが、2人だけになると途端に自堕落になってしまふようだ。

「起こしてこようか？」

「いえ、無理には言いません」

「ごめんねえ、夜型同士でちよつと意気投合し過ぎたんだ」

「そんな夜遅くまで何を……?」

「パズルゲームで対戦」

いつでも自由に何処へでも行けるからって持ち物も自由だな。そんな物まで持ってきていたのか。リュックサクサクしか持つてきていかなかっただろう。

「灰原ちゃんがバカみたいに強いんだ……ダミーの連鎖組むとか絶対に只者じゃないよ……全然勝てない……」

「そうですか……」

「チーム戦できるから組んでくれない……?」

「折角ですが、遠慮します」

ゲームとは言え、志保を守る立場なのに何故よりもよって不知火君と組んで彼女と戦わねばならないのだ。

「じゃあ灰原ちゃんとガチ対戦は?」

「……今は、いいです」

不知火君が関わらない志保との真剣勝負には少し興味が湧いてしまった。不覚。

「それじゃあ、帰りのフェリーの中で3人で対戦やろうよ」

遠回しに散々な目に遭わされるが、直接敵意を向けてくるわけでもない。本人は純粹

な好意を向けてきて、偶にこういう無邪気な発言をしてきては不意を突かれる。思わず頷き返してしまった。

「今日は何時頃島を出る予定ですか？」

「今夜から翌朝にかけてまた海が荒れるらしいから……あまり遅くならないように夕方の便でかな。海の状態によっては明日の昼まで延長するかも？」

「分かりました」

と言うことは、まだ猶予はあるな。DICEが動いた気配も無い。目の前の不知火君や彼が何をする気でこの島に来たのか、せめて目的は突き止めたい。

一か八か、試してみるか。

昨晩、ボウヤと電話で今後の方針を話し合い、俺が不知火君を引きつけて情報を聞き出すことになった。不知火君が俺に対して好意的であれば、可能性はある。思っていた以上に早く機会が巡ってきた。

「ところで不知火さん」

「はい？」

「昨日までは哀ちゃんデートしたのですから、今日は僕としませんか？」

「いっよ」

いや、待ってくれ。まさかの即答。何の逡巡も無かった。さてはまだ寝惚けている

な。

悪い展開になるとしても、信用ならない人間として警戒される方向を予想していた。しかし快諾されただと？ 果たしてこれは良い展開なのか……？

「じゃあ哀ちゃん起こしてくるねえ」

「!？」

案の定ダメな展開だった。どうやら不知火君が思うデートとは、性別や人数に関係無く、他人と待ち合わせして遊ぶという広義のデートのことを指すらしい。確かに間違っ
てはいない。だが志保に知られるのは最もマズい。計画では不知火君の守る彼女のこ
とはボウヤに頼むことになっている。

しかし、ここまではまだ想定内。流石に俺もパターンを学習した。落ち着いて大惨事
を阻止すべく、事前にボウヤと話し合つて用意していた無難な中止の言葉を口にしよう
とする。

が、ここまでしても尚、向こうの方が一枚上手であつた。

部屋に戻ろうと踵を返し、クルリとこちらに向けられた彼女の背中。

そのTシャツの背面に堂々とした筆書きフォントでプリントされた『合法ロリ』の4
文字が、何の構えもしていなかった無防備な俺を襲つた。

「灰原ちゃん、沖矢さんが一緒にデートしようつて誘つてくれてるよ」

「……………は…………？」

その文字に気を取られて息を詰まらせてしまったのが運の尽き。

静止の声は間に合わず、部屋の奥から聞こえてくる寝起きの志保の氷点下を突き抜けた声に、俺はまたしても敗北感と絶望に打ちひしがれた。

なるほど。

これが、Cool Japanか。

「あんた……………不知火さんを傷付けたら絶つつ対に許さないわよ…………」

「……………勿論ですとも」

こうして俺達は、地獄のようなお土産選びデートへ繰り出すことになった。

DICEはおそらく、この島に隠された謎をオレ達に解かせようとしている。浅井先生の時とパターンが似ているのだ。そして今回は、その上で何かを遂げようとしている。その何かが未だに分からなかった。

何分にも情報が集められない。事情を知らない蘭や服部達がいる以上、用も無いのに

真宮寺さんや浅井先生のところに行くことは不自然過ぎてできない。なら、近づき放題で訊けば何でも教えてくれる不知火さんはどうかと言えば、まさかの灰原による堅固なガードで阻まれる始末。

いや何だこの状況。直接向こうから何かされたわけでもなければ、何かを仕掛られた様子も無い。妙な巡り合わせだけで物事が上手くいかない。不知火さんの才能の悪意ってこのこと？ 確かにこれはヤバイ。何の対策もしようがない。現役捜査官達がめげるのも頷ける。

そんなわけで昨日の晩、赤井さんと電話して不知火さんと灰原を離す計画を立てたのだが……さつき赤井さんから『やはり俺の手に負える相手ではなかった』というメールが送られてきた。あらゆるシチュエーションを想定したのにそれでもダメだったとは。下手しなくても例の組織より手強いんじゃないのか。

「多分、いや絶対。3年前の火事で出てきた焼死体は人魚なんかやない。それが誰か分かっとなるから、島の人間は人魚や言い張ってんねや」

「問題は、誰かなのが分からねーことだ」

蘭達がお土産を選ぶのを店の外で待ちながらそんな会話を交わす。うーん、と唸る声
が服部と被った。

昨日、神社の君恵さんから3年前に起きた倉の火事について教えてもらい、そのこと

についての話を島のあちこちで手分けして聞いたのだ。結果、あの火事で見つかった死体については、誰もが口を揃えて人魚の死体だと言っていることが分かった。警察の調べで中年女性の遺体だと公表されたはずなのにだ。そして、つい最近の目撃騒ぎの影響もあるのか、皆少し怯えているようにも見えた。

その時引つかかったのが、殆どの島民が人魚の死体かもしれない、またはそう聞いたと曖昧にぼかすだけなのに対し、一部の人間が強く本物だと信じ込んでいること。その一部の人間こそが、儒艮の矢に執着する沙織さんと、彼女の幼馴染である寿美さんや奈緒子さん達であった。

「絶対あの3人には何かあるはずだよな」

「オレも同感や。でもおかしいと思わへんか？ あの3人は嘘をついてたり誤魔化してやるようには見えんねや」

「ああ。他の人達が人魚の正体を知っていきそうな雰囲気だったのに、何かありそうなあの3人は本気で人魚だと信じている」

「普通は逆やろ」

もしも仮にあの3人が火事に関わり、死者を出したとしたら、それを誤魔化すために人魚の死体だと言い張るのは理屈が通る。しかし、実際はまるで逆。

「まるで人魚の正体を誤魔化しているのが周りの人間で、あの3人はそれを信じ込んで

いるような感じや」

「いやいやまさか、流石にそれは……」

ない、と言いかけて口を噤んだ。

服部も自分が言った言葉に驚いたように目を見開いて固まった。

まさか。そのまさかだとしたら。

「……真宮寺さん、言うてたよな。嘘も理由が無ければ生まれえない、つて。あの人もしかして全部知っててあんなこと言うたんか」

「た、多分？」

まあ最初からそのつもりだっただろうな。下手したらオレ達がここに来たのも計算した上でのことだったのかもな。あの人達はそういう人達だから。

嘘や虚構も理由が無ければ生まれえない。確かにその通り。

3年前に焼けた倉から発見された焼死体を、島ぐるみで人魚のものだと嘘をつかなくてはならないその理由。そして、唯一島の伝説をただの噂話だと笑ったあの人。

「……まだ確証はあらへんけど、もし当たつとつたら、オレらはどうするべきなんやろな」

「……」

もし今のオレ達の中で薄つすらと姿形が見えてきたその真相が本当だったとして、そ

れを公表するか否か。多くの人を傷付けるであろうそれを、果たして世に知らしめても良いのか。

そう悩んだところで、ふと思ひ出した。ここには殺人を嫌うあの人達もいることを。「3年前の火事で亡くなつたのが人魚じゃないなら、やつぱりその真実を世間に知らせるべきだ」

「せやけど……」

「公表されて不都合な奴は多いだろうけど、その影で苦しんでいる人をほつとく理由にはならねーだろ」

「ー」

それもそうや、と帽子を被りなおして覚悟を決める服部には悪いが、正直この判断でどう転がるかオレにも分からない。と言うかもう、あの計算高い面白テロリストのことだから、オレ達がどう動こうが結果は変わらないのかもしれない。悔しいけど。

犯罪で苦しむ人を助けるDICEがいる以上、悪い方向にはいかないだろうが……どうも変な予感がする。彼らが関わっているにしては妙に静かな気がするのだ。まるで嵐の前の……

「よっしゃ。そうと決まれば裏付け調査やー！」

オレが言い知れぬ予感に悶々としているうちに、服部は次の行動を決めていた。彼女

の周りの人間関係をもう一度確認し直すらしい。

それならオレは……と思ったところで、店の方からこんな声が聞こえてきた。

「あら不知火さん！」

「やあ毛利ちゃんだ。一昨日ぶりだね、おはよう」

「おはようて、もうー時やん」

「遠山ちゃんつたら厳しい」

ちようど脳裏に浮かんだ人物がやってきた。蘭達と気の抜ける会話をしている。

しかし、タイミングが良いのに怖いと思うのは何故か。灰原にキツく睨み上げられている沖矢さんが、マスクの下で死にそうな顔をしていそうに思えたからだと思う。

何があつたのかは知らないが、本当に不知火さんと相性悪いな。安室さんみたいに嫌われているわけでもないのにどういうことだよ……。

「そう言えば、不知火さんと哀ちゃんはお祭りに参加しなかつたんですね。姿が見えなかつたから……」

「ああ、一昨日の晩は灰原ちゃんとデートしてたんだ。一緒にお寿司食へに行つたの、

ねー」

「ねー」

珍しくノリの良い灰原。冷めた顔してなかなか楽しんでいるようだ。

「見事に食べ物ばかりのツアーだったけど、ハズレは無かったわ。デートはやっぱりリサーチ力がモノを言うわね」

「やだ……小学生とは思えんマジな意見やわ……」

「もうちよつと参考に聞かせてくれない？」

女子高生達はデートの話題にすぐ食い付いた。おい止めてくれ、蘭からD I C Eレベルのプランニングを求められるようになったらどうすんだ。いや、オレならきつと応えてみせる。後で不知火さんに押さえるべき要点とか聞いてみよう。隣を見たら服部が真剣に耳をそばだてていた。お前もか。

その時。店の表でワイワイと話し込む女性陣を、遠目に見ている人影が見えた。その人物はしばらくその場にいたが、やがて諦めたように立ち去って行った。あの眼鏡をかけた短髪の女性は……

「あれって……」

「沙織さん、だよな……？」

フラフラと何処かへ歩いていった彼女を見ていたオレ達は、その時灰原が何かの壊れる幻聴を聞いていたことなど知る由も無かった。

規律は大切なものだ。多種多様な考え方を持つ人間が集まって形作る社会の秩序を守るためには必要不可欠だと思う。

ただ、大多数の人間を守れるのは事実だけど、全ての人を幸せにできるものではない。そもそもそんな万能な法があれば、人類はここまで苦労しない。

なら、不運にも法の加護からこぼれ落ちた人を助けようとするならどうするか。例えどれだけ素晴らしい才能を持っていようとも、何も犠牲にせずにしてそんな欲張ったことはできない。

僕達の場合、犠牲にするものとして選んだのは人でも物でもなく、他でもない規律そのものだった。それに縛られているせいでロクに動けないなら、一旦取っ払ってから問題を処理すれば良い。要は法を無視した手段を使うというわけで。人を守るための規律を守るために人が犠牲になるなんて本末転倒だろ、とは口が回る総統の言葉だ。

まあつまり、世間では僕達のことを人助け集団と呼んで賞賛しているみたいだけど、法律を破って好き勝手してる点はそこらの犯罪者と何ら変わらないってことなんだよね。

だけど、そこまでしても完璧な形で誰かを助けられることは滅多にない。勿論全ての困っている人を助けられるわけでもない。飽くまで手の届く範囲だけ。素晴らしい慈

善事業として持て囃されているけど、僕達は誰もこの活動を誇ったりしない。単なる自己満足だと分かっていているからだ。

「本当に、このまま進めても良いんですね？」

『今までのことを考えたら、それくらいの覚悟は簡単よ。私に遠慮せず景気良くやっちゃって！』

今回の依頼人である君恵さんだって、例え彼女が望むような結末を得られようとも、いくつかの罰則を受けることになる。

島のためとは言え、とつくに亡くなった曾祖母を生きているように見せかけ、祖母や母の死亡届を出さずにおいたことは、文書偽造の罪になる。年金の不正受給で詐欺罪も加わるかもしれない。複数人で行ってきたから、君恵さん本人には時効が適用されるかどうか分からないけど。

……日本で探偵業を営むには何の資格も要らないから、法律はそこまでしつかり勉強していない。何せ収入を得るために慌てて開業したからね。だからそんなはつきりしたことは言えないけど、少なくともその辺りの刑法に引つかかることは確かだ。

『私は、あなた達に感謝してるわ』

「……僕達は誰かに感謝されたくてこんなことをしているんじゃないやありません。僕達がやりたいようにやってるだけなんです」

『それでも、あのままじゃ私、絶対に良くないことを考えてた。もしそれを我慢できたとしても、母さんのこととずつと苦しみ続けていたと思う』

「……………」

『今更前科者になることなんて全然怖くないわ。それに、彼女達の方がもつと重い罰を受けるんでしょ？ そう考えたら平気平気！』

「それはそれで何か違う気が……………」

でもやっぱり、島のために1人で心身を削ってきた彼女が罰を受けるなんて理不尽だ。そう思うけど、世の中そんな感情論が通せるほど甘くはない。分かっているんだけど、遣る瀬無いなあ……………」

『情状酌量の余地もあるからいきなり実刑判決は出ないでしょうし、悪くても数十万の罰金なら何ともないわ』

「うわ遅し〜」

『それに！ あなた達は私に黙っていた皆にも仕返ししてくれるんでしょ？ それだけで随分心持ちが違うわよ』

「いやあはは、真宮寺くんの趣味と言うか、研究の一環と言うか……………」

『何だつていいの、皆がちよつとでも反省してくれるなら。そもそも復讐なんて、敵討ちの他にも、自分が受けた仕打ちを1人でも多くの人間に知ってもらいたい気持ちで起こ

るものなんだから』

「それは、分かる気がします」

『だから、私に気兼ねなく好きなようにしちやってください。お願いします』

「……はい、分かりました」

通話を切り、溜息を一つ。

本人が望んでいるなら、迷う必要もない。気持ちを切り替え、既に通信中のパソコンに向き直る。

「皆、聴いてた？ 本人の意志も改めて確認した。このまま続行しよう！」

ダンガンロンパで生き残った私達には、才能の他にも期せずして得たものがある。人格だ。

記憶の方は戻らない……と言うか諸事情により、むしろ戻らなくてもいいとか戻らない方がいいとか、いつそ思い出しても無視するという方針で決まったので全く触れずにいる。

皆が人格に変化を感じるようになったのは、警察が管理していた寮から出てしばらく

した頃。それぞれ個人差はあれど、本来の人格と思しき思考や振る舞いが表に出始めた。

どうやら私達に植え付けられた才能は、ダンガンロンパの劇中における人格とセットになっていたらしい。周囲の人間から才能ばかりを注目されていた寮の生活では、本来の人格は抑制されざるを得なかつたみたいだ。そんな生活から脱したことで、ようやく素が出てこれたようだった。

あの頃はもう大変だった。覚悟を決めて記憶と一緒に決別したはずの過去の一部が今更になって蘇ってきたのだから、荒れに荒れた。一緒に皆のフォローに奔走してくれたアスコさんには本当に頭が上がらない。

で、結局その人格はどうなったかと言えば、皆それぞれの方法で無事に折り合いをつけることができた。大半は劇中の性格と本来の性格がところどころ混ざつたような感じである。カエデちゃんが良い例だ。元氣澆刺とした友好的な態度でありながら、ちよつと悪賢い一面があつたり。サイハラくんも生真面目な性格の中に根暗でマニアックな部分があつたりする。

もしくは、意識的に別物として使い分けている奴もいる。オウマくんがその代表だね。大胆不敵な総統である時と、気弱な一般人として生活している時ではまるで別人だ。どちらも演技ではない本物の人格なので、周りの目を欺くには都合が良いらしい。

嘘つきな彼にしては珍しく本物と断言できる部分でもある。

ならば、最初から自前の記憶や人格を保っていた私はどうなのかと言え。我ながら意外だけど、あの事件の前後で自分でも分かるほどの変化があった。考え方が物凄く悪どくなつたのだ。流石”超高校級の悪意”と呼ばれるだけはある。

その悪どさはこの身をはみ出すほどで、サイキックなアレコレが作用し生き霊的な何かになつてあちこちで悪さしていると揶揄されるほど……いや、それは流石に言い過ぎだと思ふんだサイハラくん。

しかし確かに、それ以前の私は清廉潔白とまではいかずとも、それなりに慎ましかつたと思う。法律だつてそこそこ気にしていた。決まりが出来てからは無闇に海で食料を採らないように心掛けるとかね。まあ、見つからないようにやったことが全く無いわけでもないけど……。

そんなバレなきや犯罪にならない根性が今ほどに増長したのは、やはりあの事件の後からだ。友人達のためという名目もあったが、以前の私ならあんな堂々と獣を狩つたりはしなかつた。だつてバレたら面倒じゃゲブンゲブン。

……チームダンガンロンパによれば、私達に植え付けた才能は、元々その本人が持っていた素質を増強させまくつたものらしい。

と言うことは、あれ？ 元々私には”悪意”の才能の片鱗はあつたつてこと？ バレ

なきや犯罪にならない根性がそれだった？ よし、分からなかったことにしよう。まあとにかく、かつての私達にはそういうめんどくさい事情があったわけだ。

「……何これえ」

灰原ちゃん達とお土産を選んでいる最中に送られてきた無題のメール。見慣れぬアドレスだったので警戒したが、回線を管理している学園長からの警告は無かったので開けてみれば、本文がない代わりに写真が一枚だけ添付されていた。

スコテイツシユフオールドのマスクとネコの手グローブを装着した何者かが、つい最近ミウちゃんが誰かさんに依頼されて完成させたばかりのイヌ科マスクとイヌの手グローブを装着した何者かと肩を組み、至近距離で自撮りした写真だった。

背景の壁には何も無く、顔や素肌も隠していたりと色々徹底して情報を制限しているけど、何処で誰なのかは簡単に想像がつく。何してんだあの人達、仲良いな。

そして続けて送られてくるメッセージ。今度はお馴染みの人物から。

『お前の連絡先教えただけど別に良いよな』

全く良かねえわ!! さっきの写真の送り主ってあいつかよ!

すぐに返信を送る。

『消して。却下』

『そんな冷たいこと言うなよ。信用できる奴だ』

『私はできない』

『だからそれは誤解です!』

根拠のない釈明をしてくるメールは即削除した。

『個人的にお前の力を借りることがあるかもしれないからって』

『ふざけろ』

『バイト入ってる時にポアロ来たら好きなデザート奢るって言ってるけど』

『今回だけな』

『いつそ不安になるほどチョロい』

仕方ないので新しくアドレス帳に追加した。登録名は『ドンペリ』である。

土産は小鯛の笹漬けが欲しいという、どう考えても酒の肴にする気満々のリクエストに適当な返事を送り、携帯端末をポケットにしまう。

灰原ちゃんはまだお土産選びに悩んでいた。

「吉田さん達には良いとしても、博士にはお饅頭はダメね」

「あー、ダイエツト中だからかあ」

「それなの。何が良いかしら」

「だったら魚の干物をおススメするよ。ちゃんと地元感もあるものだし、焼くだけで食

べられるし、冷凍しとけば日持ちもするし、それに魚の脂肪分は肉と違って身体に良いって言うもの」

「不飽和脂肪酸のことかしら」

「あと、この店には宅配サービスもあってね、手荷物にすると煩わしいなら直接自宅に送るという手段も使えるんだ。干物の匂いもうつりも気にしなくて済むよ」

「言うこと無しよ、完璧だわ」

満足気にお菓子売場から食品コーナーに移動していく灰原ちゃんを見ながら、自分も笹漬を探さねばと思い出した。この店には無いようだから帰りの道の駅で探そうか。後で沖矢さんに頼もう。

ああ、スコさんのことで思い出した。

スコさんのような立場の人は、本来の自分を隠すために、性格のみならず住居や経歴まで丸々異なる別人格を作り出すらしい。使命のために必死で別人格を作り上げた彼は、不本意で殺人劇を演じるための別人格を捻じ込まれた私達に対して、物凄く複雑な気持ちを抱いているようだ。自分をもう1人持つと言うのはそれだけ大変なことなのである。

そしてスコさんが言うには、あのドンペリ野郎は3人分の人格を持っていて、彼よりも更に苦労しているらしい。あいつそんな苦労人なのか。いずれにせよ胡散臭い。ス

コさんによれば私はその3人全員を見たことがあるらしいが、残念ながらドンペリー人しか覚えが無い。

「お待たせ」

「ちゃんと満足のいくものを買えた？」

「おかげさまで。明日の昼には届くそうよ」

「おお、そうかあ。だったらそこそこの時間にここを発たなきゃね」

灰原ちゃんが会計から戻ってきた。

携帯電話で船の発着時間を確認すれば、良いタイミングで出る船があることを知る。よし、この船で本土に戻ろう。

そう予定を決めていると、店の奥からこんな声が聞こえてきた。

「ええつ、沙織が!？」

店内にいる知り合い数人が振り返ったその声に、面倒ごとの気配を薄っすら感じた。

たま風攫うは桂男の憂い END

あんた達探偵つて聞いたわよ！

憤然とした様子でオレ達に詰め寄り、半ば強引にその現場へ連れてきたのは、事件の被害者だと言う海老原寿美さんだった。

「家宅侵入と……」

「窃盗未遂、か」

しかし、現場にはオレ達が推理するものなんて一つも無かった。見たままが全てだった。

「沙織さんが寿美さんの儒艸の矢を盗み出そうとした、つてこと……？」
「おう、だろいな」

状況を一目見て呟いた蘭ちゃんと言葉に、毛利のおつちゃんが白けきった目でそう答えた。多分オレや工藤も同じような目をしていていると思う。

現場となった寿美さんの立派な自宅。割られた窓ガラス。荒らされた室内。そして騒ぎを聞いて駆けつけた島民達に囲まれ、気まずそうに正座させられている沙織さん。

犯行をあつさり白状した犯人の沙織さんと被害者の寿美さんの証言は、現場の状況と

もピッタリ一致。既に通報済みで、本土から警察がやって来るのを待つばかり。オレ達の出番なんて何処にも見当たらない。

こんなお粗末にも程がある事件だが、それにしては気になる点が多かった。

「……何か、大袈裟過ぎひん？」

寿美さんがあちこちで言いふらしたのか、まだ続々と集まってくる島民。その誰もが深刻そうな顔をして、ヒソヒソと話をしている。

それに、寿美さんの沙織さんに対する怒りつぶりも凄い。通報もして、彼女の許婚だという碌郎さんに宥められてもまだその怒りは収まらず、憎々しげに沙織さんを睨みつけている。

矢を盗まれそうになったのがそれだけ大変なことだったのか？

「沙織さんも沙織さんや。何でこないな白昼に堂々と……」

「……それだけ人魚の祟りが怖かったとか」

「いやもうここまでくれば立派に祟りやろ」

最早乾いた笑いしか出てこない。

「仕方がなかったのよ！ 私が助かるには矢が必要なんだもの！」

「だからって私の矢を盗ろうだなんて！」

向こうでは沙織さんと寿美さんが口論を始めていた。2人とも本気で人魚を信じて、

そして恐れているようだった。

そんな許婚の異様な剣幕に呆れたように、その場からそつと距離を置いた祿郎さんに向けて、何の気なしに訊ねる。

「なあ、何であの2人はあないに人魚や不老長寿にこだわつとるんや」

「ああ……沙織の方は多分、5年前のことがキツカケだと思う」

「5年前？」

「オレの両親と、沙織や君恵のお袋が乗った船が、海で嵐にあつて行方知れずになつたんだ。それ以来、沙織は海や死をやたら恐れるようになってな……」

「そんなことが……」

海での事故で親を失ってしまったのか。それで人魚を信じるように……。

「でもやっぱり、決定的なキツカケは3年前の火事だろうな」

「人魚の死体が出てきたって話か」

「あの時の寿美達はやけに興奮していたのを覚えているよ。祭りの直後で、矢の抽選に外れて気を悪くしていたところでの騒ぎだったしな。やっぱり命様は本物だったって、大はしやぎしていたぜ」

はた、と工藤の動きが止まった。ここにきて非常に重大な話を聞いてしまった気がする。こちらを見上げる工藤の目が、これは決まりだろと雄弁に語っていた。

5年前、祿郎さんの両親や沙織さんの母親と共に、君恵さんの母親も行方知れずになつていたこと。

3年前の火事で見つかった人魚の死体と、その騒動を契機に命様の力や儒良の矢に強く執着するようになった3人。

オレ達の考えが間違つていなければ、島民達が彼女達のいがみ合いを気にする理由も分かる。

「……ええ加減、ここで決着をつけるべきやと思わんか、工藤」

「ああ、当然……いや、もし不知火さんが来たら困るからお前に任せるな」

「今回のお前ホンマ締まらへんな！」

不知火さんって何なんや！

やがて、福井県警の警察官が島に到着したという連絡が入る。島ぐるみで隠されていく真実を暴くのは、それからだ。

「いやー、毎度のことだけど、不知火の意味不明なカバー性能にはマジで恐れ入るわ」

ステルス機能を待たせたドローンを現場の上空に飛ばし、それに搭載したカメラから

の映像で、実働班も含めた複数人で常に状況を見守るといふ新体制の先駆けとなった今回の作戦。ドローンから生中継で送られてくる映像を見ていると、改めて不知火の訳の分からなさが際立つ。特にあの浜焼きの店での出来事。あのタイミングで人魚と復讐を結びつけるとはお見事。無意識でアレかよ……。

確かに立派な才能だ。ただし、”ピアニスト”のように鍵盤を押したら音が出るといった物理的な因果関係は全く見えないから、ある種の呪いと言つても差し支えない。いや、”サイキッカー”の方も似たようなもんか。

「あいつ本当に好き勝手にウロウロしてるだけで仕事してたわ、すげえ」

「彼女には詳しい目的は教えていないのよね？」

「美國島が現場だからそこでウロウロしてくれとしか言つてねえよ」

今回の依頼人である君恵に頼んだのは、復讐相手である3人の幼馴染のうち、矢を紛失した門脇沙織を除いた2人に矢を与えること。残る1本の矢は好きな相手に渡せば良いと言つたが、まさか不知火の友人関係に当たるところまでは予測していなかった。息子の身を案じる夫婦に渡そうとしていた君恵の優しさが、奇妙な巡り合わせに巻き込まれてしまったようだった。

全ての始まりである門脇沙織の矢の紛失はその親による盗難が原因で。さらにその矢の売り払い先が、君恵が矢を渡そうとしていた夫婦だった。

……真宮寺じゃねーけど、あの島めちやくちや業が深くねーか……？

「もしあのタイミングで不知火さん達があの店に来なかったら……」

「高確率でポニテっ娘は面倒ごとで巻き込まれていたな」

遠山和葉、と言ったか。運が良いんだか悪いんだか、矢を手に入れたそのポニテっ娘は、未だ矢を失ったままで焦る門脇沙織に目をつけられていた。気付かれないよう離れたところで上手く隠れていたようだが、上空からは丸わかりだ。それが、みやげ物店で不知火達と合流したことでアツサリ解消された。

どういふ目的で門脇沙織がポニテっ娘に近づいたのか。周りにいる人間が増えて諦めたつてことは、ろくでもないことを企んでいたようだ。あぶねえ。

「よく考えたら、沙織さんは自分と同じように矢の力を信じる幼馴染から矢を手に入れようとは思わないわよね。最初に狙うとしたら、やっぱりその2人以外の……」

「3本目の矢が不知火の知り合いに当たるところから仕込み済みだったつて？」

「全くの他人だったら流石に彼女もカバーできないんじゃないかな、と……」

「……………」

ありえない、と言いつ切れなのが怖かった。

……いや、矢が当たったらとつとと地元に戻つちまうような無関係の観光客でもセーフだ。流石に全部が全部不知火が仕事してるわけじゃねーな。うん。

「それにしても、本当に友達の家に盗みに入っちゃうなんて……」

「むしろ秘密を共有している友達だからこそ、なんじゃねえの？」

「事情を知ってる相手だから許されるかも……なんて甘えがあったってこと？」

「いずれにしたってそこに至るまでの思考は常軌を逸してるけどな」

思い込みの恐ろしさが改めて分かる。「世界」がその頭のの中で処理された情報で構成されているなら、そいつの思い込み一つで簡単に「世界」は様変わりする。価値観も、善悪の観念も。かつて頭の中を好き放題に弄られたオレ様達がそうだったように。

あの門脇沙織達も、不老不死に目が眩んで恐ろしいことをしでかした。人は死ぬ、という基本的なことを忘れて。

『それだけ真宮寺ちゃん達の“仕込み”が効いてたってことでもあるんじゃない？』

『効き過ぎだろうが！ つたく、見ててヒヤヒヤしたぜ。矢の奪い合いでコロシアイになるんじゃないかと……』

『まあ確かにそうなってもおかしくなかったが、その辺りは君恵の思わせぶりが良い仕事をしておったな。あの慌てっぷりは抽選が終わるまで矢が当たると確信しておったからじゃとウチは見た』

『その上自分で凄腕の探偵さんと呼んでいたんだから、すぐに犯人がバレそうな急拵え

の殺人計画なんて立てられるわけが無かったのよ』

パソコンで通信中の待機班達が考察し始める。モニタリングしている明美もそれに聞き入った。

『はー……それで急遽盗みにつてか？ それだつて探偵達が帰つてからのの方が良いじゃねえか。しかもこんな真つ昼間に？ バレねえと思う方がおかしいだろ』

『多分、だけど……あのお店にいた不知火さん達の会話が聞こえたんじゃない？ 彼女が盗みを決行したのはその直後だし』

『会話じゃと？』

『今夜から海が荒れるらしいから、その前に島を出る予定なんだつて、毛利さん達に話していたじゃないか』

『あつ』

最原が言いたいことを察したのか、短いながらも全員の声が重なった。明美が半笑いと言う。

「……人魚に崇られないうちに帰るね、つて冗談っぽく笑ってましたね」

『それだ……』

不知火にとつては取るに足らない冗談が、恐慌する門脇沙織から正常な思考を奪った決定打になっていた。

かつては嵐で荒れる海で母を失い、更に現在進行形で人魚の祟りを恐れる門脇沙織にとつて、その何気ない会話の流れは強烈に響いた筈だ。時化と共に人魚が祟りにやつて来ると想像を膨らませ、夜になる前にどうにかせねばと焦ったんだろう。流石にそれには同情する。不知火、お前つて奴は。

『ま、あとは探偵くん達が上手いこと纏めてくれるはずだから、それが終わるまでの辛抱だよ』

『ドローンでその現場は見られんのか？』
「待ってろ、近づけるところまで近づけてみる」

本人達は単なる犯罪組織と名乗り、世間からは人助け集団と呼ばれている秘密結社 DICE。

少なくとも他の一般人より彼らを知っているオレからすれば、そのどれとも違うように思える。彼らはただ、全力でやりたいことをやっているだけなんだ。

殺人を止める理由も単純、殺人が嫌いだから。警察のようにその場で犯行を止めるだけでは足りないということも彼らは分かっている。動機を解決しない限り、殺意はずつ

とその人の中で燻り続ける。動機から解消しようとするから、こうしてやるのが大掛かりになってしまふ。

その中でたまたまメディアの目にとまり、大衆ウケしそうな犯行ばかりが囃し立てられた結果、面白テロリストというあだ名が生まれた。まあ、強ちそれが間違っているとは思わないけれど、慈善活動や正義のヒーロー扱いされるのは不本意だろうな。彼らはやりたくてやってるだけだから。今回の仕事だって、その典型的なパターンじゃないかな？

「ねえ誰だよダイヤの5を止めてるの」

「誰だろう、分からないネ」

「見当もつかないわ」

「僕ではありませんよ」

「沖矢また貴様かああ!!」

「おや、バレましたか」

待ち合わせ場所に着けば、既にそこに到着していた皆は七並べをして遊んでいた。正確に言えば、全員で結託して不知火さんを困らせて遊んでいた。特に沖矢さんがイキイキとしている。嘘が分かる不知火さんに対してワザとピンポイントな嘘については彼

女を擲擧つていた。

「あ、あー!! また負けたあ！」

「実力にムラがあり過ぎるヨ」

「あなた、顔に出やすくて分かりやすいわ」

「心理戦や駆け引きの遊びには弱いんですね」

「づあー!! よく言われるう！」

見事にダイヤの1から4までを持つていたせいでストレートに負けた不知火さんが盛大に嘆いた。対する沖矢さんはニッコニコである。

うん、分かる気がする。不知火さん本人は良くも悪くも正直だ。彼女が純粹に楽しみたいことに対しては悪意も仕事をしない。悪意が作用しなければ、不知火さんはちよつとクセがあるだけの正直者だ。さぞ良いカモになるだろう。特にフードを外している今なんかは。

……ただし、決して忘れてはならないのは、彼女も他の同級生達と同様に「知らないフリ」のプロであること。思わず気が抜けるとぼけた顔の裏で、果てしなくえげつないことを考えていることもある。

不知火さんを含めたDICEの何が怖いって、あの才能もそうだけど、知らないフリをしている時とそうでない素の時の違いが、外からじゃまるで分からないところだと

思う。流石は命懸けで世界を欺いただけはあるよ。

「ぜんぜえー！ 一緒に組もう！ ぞんで沖矢ぎんをコテンパンにずるんだあ！」

「うーん、トランプでチーム戦は難しいんじゃないかな」

「んぐう」

「時間、まだ大丈夫だよ。オレも交ぜてよ、ポーカーとかどう？」

「それ絶対私がダメなやつう!!」

「あら、どうかしら。神経衰弱では完全運任せの初手で一気に半数近く取っていく勘の良さがあるし、案外良い役が揃えられそうじゃない」

「何そのとんでもエピソード」

結果から言えば、不知火さんはロイヤルストレートフラッシュをたまに出すという形でしか勝てず、何やかんやで最終的に最下位に収まった。不知火さんは悪意が絡まない平常時も色々とおかしいようだった。

やがてジャンルを変え、今度は某吹っ飛ばし合いのゲーム。チーム戦でもないのに袋叩きにされた不知火さんはあつという間に脱落。話を合わせたわけでもないのに全員が一斉に彼女の操作キャラへ突進していったのには思わず笑ってしまった。

「私をいじめるのってそんなに楽しいかな!？」

「楽しい、と言うより……いつも余裕そうなたの普段見られない表情が見たくって、

つい意地悪したくなるの」

「哀ちゃんの言い分が全てだ。いつも自覚無しで周りを振り回す彼女をやり込める機会なんて滅多にない。」

そう悪戯つぽく哀ちゃんに笑いかけられた不知火さんは、「み、やああああ」と万感の思いを込めた奇声を上げて床を転がった。

「と言うか不知火さん、全員が遊べるだけのゲーム機なんてよく持ってたわね」

「ああ、元同級生達や同居人と大人数でよく遊ぶんだ。だからソフトもハードもたくさん持ってるよ」

「へえ意外、こういう俗っぽいものには興味無いと思っていたわ」

「そこまで浮世離れしてないって」

涼しげな顔で沖矢さんの操作キャラと熾烈な一騎打ちを繰り広げる哀ちゃん。そっちの方が意外だよ。少し操作しただけで扱いを覚えちゃってるし。

こうして面白おかしく過ごしているうちに、その時はやってきた。

「オラア続きは船の上でやんぞドチクシヨウ！」

パズルゲームでも連敗記録を更新し続ける不知火さんが、涙目でそう吼えた。

ひとまず家宅侵入や窃盗の容疑で沙織さんを連行しようとした福井県警の警察官達を呼び止め、沙織さんに何故そこまでして矢が欲しいのかと問いかけた服部。警察を呼ばれて冷静になった彼女が口籠ったのをキツカケに、それは何故かと今までオレ達が推理したことを披露しようとするれば、案の定、慌てたように島民達がストツプをかけた。

今はその話は関係無いだろうと騒めく彼らを制したのが、杖についてこの場に現れた命様だった。

何故盗みを働いてまで己の力を求めるのかと沙織さんに問うその姿に、改めてオレ達は確信する。この件は、他でもない本人が明かしたがっていたことだ、と。

DICEの目的は、オレ達はこの島の謎を解かせることだった。オレが不知火さんの関係者をDICEと見なしていることを利用して、わざと自分達を囮にしたのでは？今考えれば真宮寺さんの意味深な語りなんて思いつきり誘導だったし、浅井先生を呼んだのも、かつてオレが巻き込まれたパターンを想起させるため、とか。

全ては、島の呪いに囚われた彼女を解放すべく。

服部が推理を元に真実を明かしていくにつれて、警察官達の表情は険しくなってきた。島民達はバツが悪そうに口数を減らしていく。

そして……

「ごめんなさい、皆。今まで騙していて」

「そ、そんな……!?!」

服部が全ての推理を語り終えると、ついに命様の正体が明かされた。

皺くちやの老婆の顔を模したマスクを脱ぎ去り、ベルトで正座の形で固定していた足を伸ばし、スツクと立ち上がったその人。

美國神社の巫女にして命様の曾孫でもある、島袋君恵さん。

島の伝説を守るため、人魚の肉を食べて不老不死となったとされる曾祖母を演じる役目を母から受け継いだ彼女は、愕然とした様子の幼馴染達にそう謝罪した。

君恵さんの母は5年前に海で亡くなったのではなく、命様に扮装し、命様として暮らしていた。

ところが、3年前の儒艮祭りで矢の抽選に外れて酒に酔った君恵さんの幼馴染達は、あろうことかその腹癒せに、命様に扮した君恵さんの母が入っていった神社の倉に放火してしまった。つまり人魚の死体とされていたのは、君恵さんの母だったのである。

こうして母を亡くした君恵さんに、命様の役目が回ってきて、今に至るわけだ。

沙織さん、寿美さん、奈緒子さんの3人が異様なまでに命様の力を信じたのは、自分達が燃やした倉から命様が無傷で生還したと思ひ込んでいたからだった。

その裏には、命様を演じていた君恵さんのお母さんが焼死し、君恵さんが代役を務めるようになったという真実があった。

「……私が命様を続けてきたのは、他でもない母さんの頼みだったからよ。燃える倉の中から、母さんが電話してきたの。母さんこの島が好きだから、命様を殺さないで、つて……」

痛々しく震えるか細い声だったが、君恵さんのその声は静まり返ったこの場では大きいほどだった。

「それなのに……沙織、あなた矢を無くしてから、私にこう言つたわよね？」
「っ！」

「矢をくれないなら、人魚の墓の場所を教えろつて。私も命様のようになりたいて」

あれは、あなた達が殺した母さんの墓よ!!

今まで我慢してきたものを吐き出すようそう叫んだ君恵さんは、声を押し殺して泣きじやくりながら床に座り込んだ。

沙織さんや寿美さんも、そして奈緒子さんも、自らが犯したことの重大さを突きつけられ、蒼白な顔でその場に崩れ落ちた。

黙って聞いていた人々の間からも鼻をすする音が聞こえてくるが、誰一人として驚きの声すらあげない。やはり、命様の正体については全員が知っていたようだ。それでも

今まで誰も指摘しなかったということは、島のためなのか、それとも命様を続けようとしていた君恵さんの意志を尊重していたからなのか。

……いずれにせよ、君恵さん一人にここまでの重責を背負わせたのは褒められたことではないと、オレは思う。

やがて、誰もが気まずさで動けないこの状況は、事を理解した警察官達が話を進めたことで進展する。

沙織さんには今回の窃盗の他、寿美さんや奈緒子さんと共に放火及び殺人の容疑がかり、任意で聴取されることになった。

そして、君恵さんにも。

曾祖母の代から続く死亡届などの虚偽申告云々について、彼女も一度この島を離れることに。

これで本当に良かったのかと複雑そうな服部に目を向け、彼女は晴れやかな笑みでこう言う。

「本当にありがとう。あれだけの人の前で大々的に暴いてくれて、私も気分がスッキリしたわ」

「……せやけど、ホンマにええんか。あんたのお母さんが守りたかったもんを壊してし

もたんやぞ」

「その辺りは……まあ、きつと大丈夫よ」

曖昧に言葉を濁したものの、その表情は本当に晴れやかなもので。不安だったが、こつちも多少は安心できた。

やがて君恵さんは、警察に自分が命様を演じていたことの証拠を提出するために自宅へと戻っていった。

こうして、美國島の伝説の真実は暴かれ、人魚はいなくなつた。

……と、思っていた時期がオレにもあつた。

「君恵さんがいなくなつたら、誰が人魚の崇りを鎮めるんだ!？」

事件の当事者達がこの場から去つた後、島民達が異様な気迫でこう言うまでは。

「それって大阪くんの推理ショー？」

「やはり人間は面白いネ！ 最高だヨ！」

「うわ、塩分濃いね」

「何そのテンション高いねみたいな」

「シングウジくんが塩ってる時の表現だよ」

「余計分らない」

「念入りに準備した甲斐があった。心からご協力感謝するヨ、浅井先生」

「いや、楽しんでもらえたようで何よりです」

「そんなに効果あったの、あの芝刈り運動」

「勿論だヨ！ 君恵さんから写真を見せてもらっただろう？ 僕達が借りた君恵さんの

お母さんの姿は、彼らの罪悪感を増すには最適だったんだ」

「アレ趣味じゃなかったんだ。念入りに島中を歩き回るからてつきり気に入ったのかと」

「特技ではあるけど趣味ではないネ。程良く島の住民に目撃されるのが狙いだったのサ。上空からのサポートはとても的確だった」

「不知火さんもウィッグと足ヒレ着けて寒中水泳したじゃないか」

「あー……そういうことだったんだ？」

「本当に何も知らされてないんだ……」

「不義密通からの夢魔、口減らしからの座敷童子。そして……使命に殉じた彼女は、今や本物の人魚に！ 人の罪への意識が悪魔や妖怪を生むという僕の仮説は、正しかった！」

「塩つてるでしょ」

「塩つてるね」

「例えどれだけ都合が悪い事実でも、形を変えてでも後世に伝えようとする意志！ やはり人間は美しいヨ……！」

「果たして美しいのかそれは」

「さあ……」

「今回はとつても有意義な時間だったヨ！ また実証実験に付き合ってくれれば嬉しいナ」

「……人の思い込みって、怖いんだね」

「彼が関わっているとマジでシャレにならないよ」

『もしもし、沖矢さん!? 今どこ!?』

「もうすぐ敦賀に着くところです」

『もう帰ってんの!? 予定より早くない!?』

「哀ちゃんのお土産が到着する前に帰ろうという話になりました」

『あ、ああー……』

「真宮寺さんも浅井さんも一緒ですよ」

『サイコロ全員帰ってただと……!!?』

「どうかしましたか?」

『どうかしましたかじゃないよ!! あの人間何したの!? また新しい人魚信仰が始まり

そうなんだけどー!』

「ホー、それは……エツ、何が起きた?」

『オレもよく分からないけど……君恵さんのお母さんの亡霊が人魚になって崇られるだ

のどうのこうのって……』

「君恵さんの、母親? 火事で亡くなったという彼女のことか?」

『うん。オレ達が島に来る前から幽霊が出てたって話が……』

「……我々がその島に来た時には、不知火君は勿論いなかったはずだ」

『……いたのは、真宮寺さんと浅井先生……』

「……聞くがボウヤ、あのドクターはもしや」

『……ねえ赤井さん、まさか真宮寺さんって』

「中性的な顔立ちを利用した女装が得意では？」

『お姉さんに女装する役だった？』

「(痛恨の極みという表情)」

『(何で忘れてたんだという表情)』

「芝刈り機コンビ……そういうことか……」

『女装……除草……ハハ……』

『そりゃ島の人達、彼女の母親の幽霊が出るだなんて部外者のオレ達に言えるわけねえ

よな……』

「そうだな」

『じゃあ不知火さん、本当に灰原とデートしてただけかよ……』

「そうだな」

『そもそもオレ達が来た時には全部仕込みが終わってたのかよ……』

「そうだな」

『……あんまり残念がついていないね？』

「いや、今志保とゲームで対戦していてな。お互いに柄にもなく白熱して……」

『小学1年生に構われてはしゃいでんじゃねえよ赤井さん……!!』

「クシビ、明日までには帰ってくるってさ」

「ふうん、そうか。今すぐ迎えに来てもらえ」

「ゼロ、もしかして怒ってる？ 俺がハロにおすわりを教えたのがそんなに嫌だった？」

「俺が！ やるはずだったのに……!!」

「いや本当にすまなかった」

「お手とおかわりと伏せと待ては譲らんからな！」

「だからもうしないってば」

この数日、ハロと過ごした時間は最高だった。飼い主のゼロを差し置いて好きにしたのは悪かったと反省している。

「……イヌってやつぱり可愛いな、クシビに飼えないか打診してみるよ」

「環境がコロコロ変わるお前達の生活パターンじゃできないだろ」

「イヌじゃないけど、クシビはよく生き物を拾ってくるんだ。ツノが生えたトカゲとか、やたら野太いヘビとか、変なのばかりだけど」

「おい待て」

「大抵いつの間にかいなくなるんだ」

「そっちのダークサイドは専門じゃない……!」

今朝方も人間社会のダークサイドの仕事を終え、更に喫茶店での仕事も終えて帰ってきた多忙な幼馴染。一寝入りした後、俺が作っておいた夕食を食べる手を止めて目元を押さえた。物騒なあいつらと渡り合えるなら何も怖くないと思うんだが。

「今更何言ってるんだ。それを言うならクシビも十分変な奴だぞ。俺はもう都市伝説か妖怪の一種だと割り切ってる」

「それは……いや、気持ちに分かるけど、でも彼女はそういう力がある人間ってだけだろう。俺やお前だけでなく、他の同級生とも、コナン君達とも交流がある。存在が曖昧なもの扱いするのは失礼じゃないか?」

再び箸を動かし始めながら、ゼロが続ける。

「それに、彼女は唯一事件前の記憶を持っている被害者だ。もつとよく調べたら身元の情報も出てくるはずだ」

「ところがあいつ、自分の名前も覚えていないぞ。不知火霊という名前だって劇中の名前をそのまま使っているんだし」

「年齢も分からないのか?」

「自称で23歳。5年前に18歳で高校を卒業したことで適当にそう言ってる。ま

あ、年齢に関しては他の奴らも同じだけだな。学校もろくに通ったことが無くて、自力では両手の指で数えられるまでしかカウントしてないそうだ」

「そもそもアレは色んな意味で高校卒業とは言えないだろう……」

常人とは違う脳の使い方をしているせいかな、覚えられることが極端なクシビは、自分のことすらはつきり覚えていない。名前も年齢も、出身地も、誕生日も……家族のことさえも。

ただけど今を生きる本人は幸せそうだから、俺は何も言うことはない。

話すたびにクシビの実態がぐらついていき、ゼロの眉間にますますシワが寄った。

「つい最近だつてゾツとすることがあった」

「……どんな？」

お前の悪いところは、そうやって気になるところをすぐ追及してしまうところだ、ゼロ。職業病なのか怖いもの見たさなのかは分からないが、いつその際巻き込んでやれ。我ながら意地が悪いと思うが、一人で抱えるには重過ぎた。

「……その昔、クシビは真冬に素潜りでカニやエビを獲つてたらしい。ついこないだも若狭湾で泳いだそうだ」

「どこからツツコめば良いんだ???'」

今度は呆れたように額を押さえて呻く幼馴染。

「まあ、寒中水泳は自己責任だとして……遅しいな彼女は」

「頭を割られて生きてるくらいだから」

「それもそうだった。しかし今度は密漁か……」

「……いや、密漁にならない時期の話らしい」

「なんだ、そうなのか」

それのどこが怖いんだと言いたげにこちらを見返してくる幼馴染。もう十分怖い。

「あのな、俺が言いたいのは、クシビの体の頑丈さじゃなくなつて」

「うん」

「密漁が密漁にならない時期の海で泳いだと主張しているところなんだ」

その数秒後。

意味を理解したらしいゼロの手から、箸がポロリと滑り落ちた。

「なんて話を聞かせてくれたんだ!!」

「聞かなきゃ良かったのに」

クシビは、漁業法がいつ施行されたのか知ってるのかな。

たま風攫うは桂男の憂い
真宮寺くんの自由研究

—冬休み編—

T H E E N D

瞳の中の暗殺者 with V3 ①

天才バカ集団、または面白テロリストとも呼ばれる秘密結社DICE。彼らの愉快犯的な人助け活動に魅了され、ファンとなる者は少なくない。メディアを利用したり警察を挑発するところは怪盗キツドの犯行にも似たパフォーマンス性を感じるが、キツドや他のテロリストと決定的に異なるのは、DICEのメンバーは決して人前に出てこないという点である。

DICEの名や活動が世に知れ始めた当初、彼らに憧れてDICEを名乗る模倣犯が数多く発生したが、偽物だとすぐにバレた。当然である。本物は徹底して姿を見せず正体を秘匿しているのだから、自らそう名乗る奴が本物であるわけがない。そういう理由もあり、DICEの模倣ブームはあつという間に過ぎ去った。本物のDICEが行う誰にもバレないような完全犯罪は模倣のしようが無かったのだ。流星は天才バカと呼ばれるだけはある。

……いや、まあ、人助けを目的としているとは言え犯罪者であることは変わらないので、正体を隠すのは当然のことだ。むしろキツドのように派手派手しい演出にこだわる方がおかしいのだろう。

それはさておき。

ネット上には、そんな彼らの活動のまとめサイトやファンサイトも数多く存在しているようだ。しかしそこは匿名性の高いインターネット。そういうサイトで彼らの名を騙り、彼らに助けてほしい人間から、依頼料と称してクレジットカードのカード番号やらを入力させるような詐欺も多発しているという。

DICEも単なるお人好し集団というわけでもないようで、そういった自分達の名前を悪用する詐欺が発生しようと、それに引っかけた人間が泣き言を言おうと、それらに関わる気は一切無いらしい。その件に限らず、彼らからの声明は「警察仕事しろ」の他には皆無。活動内容の割には結構ドライな連中である。

そんな怪しげなサイトが蔓延る中。本物のDICEが関わっているらしいサイトがある、という噂を聞いた。

そのサイトは、一見他のファンサイトと似たり寄ったりのホームページだそう。DICEへの相談募集メールアドレスがあるのは詐欺サイトと同じだが、違うのはその後。

個人情報やクレジットカードの番号を要求してくるのではなく、その相談が本気のものかどうかを問うてくる。肯定すれば、その信憑性を確かめるべく、今度は依頼人の身辺調査を勝手に行うことへの理解を求めてくるという。更にそれにも了承すれば、相談

の依頼は完了。助力すべきと判断されれば、後日、DICEの構成員が直接話を聞きにくる、と。

ネット上でメールを送ってきただけの相手の居場所を突き止め、身辺調査などできるものか。どうせそれらしく見せかけたイタズラだろう。金や個人情報を要求されなかっただけマシか。

そう高を括っていた時期が僕にもあった。

「じゃあひとまず、こないだコンビニで買ったカップアイスを相談料としてもらおうか」
僕のことを出生地から最近寄った店まで何もかもを調べ上げた真っ黒な不審者が、突然我が家を訪ねてきて、凶々しくもオヤツを要求してくるまでのことだ。

単なる民間人にしては、あらゆる業界の裏事情に通じ、知識や技術も飛び抜けており。しかし、ただの犯罪者にしては、その性質はいたって善良。……表向きには。

そんな彼らの立場は、他に類を見ない非常に特殊なものとなっていた。

「その協力者って……所謂作業玉のこと？」

「前向きに検討してもらえませんか？」

「やあだ」

取りつく島も無いとはこのことである。いつものポヤポヤした笑顔で即答された。

はつきり口には出さないが、自分は公安の人間であり、彼女は5年前の事件の関係者だと、お互いの正体を知っているという前提で話している。決してこんな一般客のごつた返すフアミレスで話して良い話題ではない。

ついでに”53期の17人”とDICEとの関連性も口を滑らせてくれれば幸いだと降谷さんは言っていたが、そういうことを企んでいるから嫌われるのではないかと自分では思っている。本人には言えないが。

「……ですが、こんな曖昧な関係もどうかと思うんです」

「ああ、下手すればお金のやり取りがありそうな関係に見えちゃうもんね」

「それはどういう意味で言っているんですか」

ぼけつと間抜けた顔で何ということを使うんだこの人は。いくつかの意味で捉えられるその発言に思わず頭が痛くなる。確かに彼女の素顔は年の割に幼過ぎる。己の立場でそつちの疑惑は本当にまずい。

「良いカモフラージュになるんじゃない？」

「それは寝タバコという出火原因を空爆で隠すような暴挙です」

「何も残らないね」

見渡す限り焦土になる。

「せめて……せめて店を変えませんか……？」

「大丈夫大丈夫、このテーブル席は不自然にならない程度の動きで死角が多く作れるし、音声も拾ってないよ」

「カメラのことを心配しているのではなく」

相変わらず尋常ではないこのリサーチ力が怖い。

「そもそも風見さんが望むようなお店はね、こんな見目の私は店先で入店を断られるパターンだと思うのね」

「配慮が足りず申し訳ありませんでした」

仮定の話であったが、経験したことを語るような目であった。彼女の虚ろな笑顔も怖かったとだけ言っておこう。彼女の闇には迂闊に触れるなど、降谷さんにもキツク言われている。

「ここまでの情報を提供してくれるのであれば、いつそ正式に登録した方が連絡も楽ですし……」

「警察好きじゃない」

「はつきり言ってくれますね」

ストレートな物言いに思わず苦笑が漏れる。

こんな逢引じみた会合も何度目になるか。いつも連絡は向こうから。初対面時に知られたこちらの電話番号にかけてきて、適当なファミレスで待ち合わせをする。自分はそれなりに信用されているようだが、毎回ランダムな公衆電話を使ってくるあたりに彼女の用心深さを感じる。

……しかし、国外の公衆電話から東京のファミレスでの待ち合わせの連絡をしてきて、数時間後に約束通りその場所に現れたあのトリックが未だに分からない。流石はサイコロ、奴らは電話の逆探知も翻弄できるようだ。

一方、どういう経緯か知らないが、せっかく不知火霊の連絡先を奇跡的に手に入れた降谷さんは、彼女に嫌われているという致命的な欠点故にろくな返事をもらえず、連絡が連絡としてほぼ機能していない。そのせいで立場代われと恨みがましい目で無茶振りされることが度々……気が付いたら懐かれていただけの自分にどうしろと言うんですか。

「それでもこうして私と会ってくれるのは、君達が疎んでるのは警察という組織であって、それを構成する警察官一人一人を嫌っているわけではない……ということですか」

「そんな感じ。いくら綺麗な金髪や健康的な肌の色には好感は持てても、人間としての
そいつ自身は生理的に受け付けられない感じ」

もしかして：上司

最早理不尽なまでの嫌われっぷりだが、それとは裏腹に最近の降谷さんの調子は目に見えて良くなっている。何でも非常に優秀な協力者を見つけたそうだ。組織の後ろ暗い仕事までサポートできる人間らしい。降谷さんの実質的な休みは増えずとも、精神的な余裕ができていることはそれとなく雰囲気から窺える。

気になるのはその協力者の正体だが……今はまだ明かせないが、絶対に信頼できる人物だから大丈夫だと、楽しそうな口調で降谷さんに言われた。その協力者は目の前にいる不知火霊と通じており、彼女を経由して有用な情報を渡してくれる。この会合はそのためのものだ。

「新しく追加したのはその2人ね」

「ありがとうございます」

不知火霊は思い出したように卓上に備え付けられたナプキンを一枚抜くと、それに人名と住所を簡潔に走り書きしてこちらに差し出してきた。住所はともかく、名前の方は降谷さんから教えられた通りだ。

組織から降谷さんへ人を始末するように任務が下ると、協力者にその旨を連絡し、あ

たかも降谷さんが殺したように見せかける裏で協力者が逃す。先程提示された人名と住所はそうやって逃がされた人間のものです、少し前にはもつと大勢の人間のリストをもらった。おかげで確認作業に追われて仕事が倍増したが、それだけの価値はあった。

堂々と連携するようになってからは死の偽装の精度も上がり、今では他の幹部に下った任務でもほぼ確実に殺人を防げるようになったそうだ。かの協力者はそんな危険な仕事まで引き受けられるという。

それもそのはず。その協力者はあのDICEとも懇意にしているらしい。組織をも騙眩かせる偽装の技術にも納得である。

要は彼女自身も立派に協力者のような存在なのだが……本人達は決してそれを認めようとしない。個人的な都合で手を貸すのは構わないが、正式に警察組織に協力するのは抵抗が強いということだそうだ。

……むしろ、彼らの徹底された人間不信ぶりを考えると、非公式な形であろうがこうやって力を借りられるだけでもありがたいだ。助力を求めることが無条件で黙認される協力者でもない民間人なんて、彼らぐらいだけだろう。上の人間は彼らの名前が出る度にこれでもかと渋い顔をするらしいが。

「……そう言えば、一つ訊きたいことが」

「うん？ なあに？」

「ここ最近の警察官連続銃殺事件についてです」

「あー……」

その話題を出すと、彼女はパンケーキを切り分ける手を止め、分かりやすく響めつ面をした。

「アレ犯人まだ捕まんないの？」

「容疑者は既に何人か……ですが決定的な証拠は未だ何も」

「うへえ」

日本で銃撃事件が発生すること自体がおかしいよお、と嘆く彼女に内心激しく同意する。寝不足気味の降谷さんもその話題から派生し、いつものように未だ日本に居座り続けるFBIへの愚痴をこぼしていた。

「……一部では、あなた方の犯行だと疑っているようです」

「へー」

「否定しないのですか？」

「こつちがどれだけ否定しようが、最終的な判断はおたくらの都合で決まるでしょ」

都合って……自分達は警察という組織をまるで信用していませんと、彼女の無垢な目がそう語っていた。酷い偏見だが、彼女達に関しては仕方ない部分もある。

「で、何でそんな話題を？」

「いえ、ただの確認です。嘘をつかないあなたに聞けば確実だろうと」

「毎度毎度警察仕事しろつつつてんのに、わざわざ邪魔するような真似なんかしないよ」

「……」

こう言われることは分かっていた。

例のあの言葉通り、DICEは我々をこれでもかとおちよくり倒しはするが、妨害行為などは全くしてこない。その妙に律儀なところも彼らを憎みきれない理由でもある。警察の領分を侵すのも被害者になりかけた人々を守ることのみ。一般人の安全を確保すれば、犯人の捕縛云々は全てこちらに丸投げしてくる。……最低限の手柄は立てさせてやるから黙ってろ、という拒絶の意思表示とも捉えられるが。

楽と言えば楽だが非常に複雑だ。犯罪組織を名乗っているが、その正体が重大な犯罪の被害者の民間人であることも分かりきっている。そんな集団にぐうの音も出ない手腕で役目を搔っ攫われてはこちらの面目が立たないのだ。その上で仕事しろと言ってくるのだから胃薬が手放せない。

じゃあもうオメーらが警察に来いよ、と自棄気味に叫んだあの時の上司は、果たして何徹目であつただろうか。

当初は彼らの人助け行為をどう報告すれば良いのかと頭を悩ませたが、今では「サイコロがやりました」の一言で済む。慣れとは恐ろしい。

「あれ、もうこんな時間？ そろそろお暇します。御馳走さまでした」

「いえ、毎回こちらの都合に合わせてくれるのですし、これくらいのお礼は……にして
も、パンケーキ一枚で良いんです？ いつもはもう一品頼むじやないですか」

「ううーん……今日は要らないや」

報酬として安い甘味を数品奢るだけで満足してくれるだけあって、気まぐれな彼女の扱いは非常に難しい。

基本的に普段の私は、キッズ達にまで収入の心配をされるほど暇を持て余しているが、忙しい時はとことん忙しくなる。特に複数の仕事が舞い込んできた今のよう。そういうときは、できる限り出向く場所を纏めて作業量を少なくする。

「お前ドレスコードって知ってるか？」

開口一番そのセリフ。人が気にしてることをつつつかないでほしい。

本日このホテルで開かれる昆虫研究会総会。今局所的に流行りの昆活ってやつだろう。それに参加する友人と、今日このホテルに来たかったお巡りさんがいたため、

だったらそれに全員で参加しようと友人に頼み込み、招待状をもらった。さっきのセリフは、待ち合わせしていたその知り合いのお巡りさんのものである。

「真冬でもねえのに室内でそんなコート着るなよ、フードまでかぶつちまつて」

「だって！ 窓からの！ 日光が！」

「会場には窓は無えだろ、ほら脱いだ脱いだ」

幸いにして、今コートの下に着ているのは白い無地のブラウスである。ネタ物着てこなくて良かったと内心で安堵しながら、渋々コートを脱いで腕にかける。そっちだって室内でもサングラスかけてるクセにな。

「しかしまあ……確かに俺は、ここに来る口実をお前に頼んだが……虫か……」

「なんならもう出てつても良いんだよ」

「まだ早えよ」

私は生物系の学問にはそれなりに興味があるので楽しみだが、このお巡りさんはそうでもないらしい。会場の入口で渡された資料の内容を見て、何とも言えない表情を顔に浮かべた。スズメバチのドアップ写真を見てこれでもかと顔を顰めている。自分も見ているその要旨集に載っているのは、頭と胸と腹の3つの部位に別れた体と6本足という特徴が共通している、節足動物門汎甲殻類六脚亜門昆虫綱……つまるところ世間では昆虫と呼ばれる生物群についての様々な研究が纏められていた。

「こんなので和めるかつつの……」

「それ本人の前で言っちゃダメだよ。傷ついちゃうよ。流石に宇宙最強の戦闘民族ばりの気迫で吹っ飛ばされることは無くなったけど」

「あの野生児っぷりは改善したのか？」

「靴を履く習慣は身についた」

「……おー、そりゃえらい進歩なこった」

そして少なくともこのお巡りさんより遥かにジエントルマンである。ぶっちゃけこの人は見た目も態度もカタギではない。

「お前は虫、平気なのか」

「イナゴとかハチノコとかはむしろ好きだよ」

「そういう意味で聞いたんじゃねえ」

「他にはタガメとか、サソリとか、ゴ」

「それ以上はアウトだ」

見た目がアレなだけで、虫を食用とする文化は世界的に見れば割とメジャーなものである。字面からして高級感のあるフランス料理ではカタツムリを堂々と使ってるんだぞ。

「エビとダンゴムシはヒトとウシぐらいの近縁関係だつて聞いたことがある」

「コメントに困る近きだな」

そんなどうでもいいムダ話をしながら会場に入っていく。小難しい内容は正直サツパリだが、要旨集の写真やグラフなどは見ていて楽しい。

やがて私達をここに招いてくれた友人と合流し、専門家達による討論が始まるうかと
言うその時。

「悪いが俺はここで抜ける。入らせてくれてありがとうよ」

「ええー！ もう行っちゃうんですか！ もっと和んでからにしません？」

「もう十分和んだから大丈夫だ」

嘘つけ。

残念がる友人に適当なことを言い、この場を後にするお巡りさん。彼の本当の目的は、この会場がある階の1つ上で行われる結婚のお祝いパーティーに近づくことらしい。あの人招かれてないパーティーに行きたかったのか、切ない。

しかし、乗り気で総会に参加した私も専門用語のラッシュには勝てず、討論会の途中から酷い眠気に襲われた。顔でも洗って眠気を覚まそうかとお手洗いに行くと、そこで私の前に立ち塞がったのは「清掃中」のサインボード。

「……………」

数秒逡巡し、くるりと踵を返す。清掃業者がいますよと周知してるだけで、入るなど

いう意思表示ではないことは分かるが、何となく気まずい。向こうも客がない方が集中できるだろう、なんて勝手な言い訳をして別の階へ向かった。顔を冷たい水で洗った。ただで急ぎの用でもないし。

そんな些細な決断の僅か数分後、私はとんでもないことに巻き込まれる。

瞳の中の暗殺者 w i t h V 3 ②

警察官が連続して射殺されるという衝撃的な事件が起きる中、米花サンプラザホテルにて白鳥警部の妹の結婚を祝う会が開かれた。元警察官としてこの一連の事件が気になるのか、事件の手がかりを得るためにもその会に出席した毛利のオツチャンに、オレや蘭もついて行くことに。

オツチャンの弟子という名目で安室さんがついてくることは簡単に予想できたが……。

「コナン君も来てるんだね！」

「……世良の姉ちゃんも来てたんだ？」

「そうよ、私と呼んだの！」

蘭の母さんとも合流し、名前を記帳して会場に入ると、オレ達より先に世良が到着していた。ボーイッシュな服装を好む世良らしいフォーマルなパンツドレス姿だ。

事件解決のためには優秀な探偵は多い方が良いでしょ、としたり顔で言う園子に何とも言えない気持ちになる。既に警察関係者で溢れているこの場で言うには、何とも挑戦的と言うか、大胆と言うか……。しかし、そんな発言も耳に入らないほど、彼らは既に

ピリピリとした雰囲気だ。お祝いつて空気じゃねえ。

やがて会場の照明が落ち、主役である新郎新婦がスポットライトに照らされながら入場してくる。その時、大勢の人がおめでたそうに拍手する中で、1人だけ不機嫌そうな態度で会場を後にする男性を見かけた。誰だ？ だが、特に何かが起きることもなく。会は無事に進行していく。

状況が少し変わったのは、白鳥警部から主治医の心療科の先生を紹介された後のこと。オッチャンが偶々その近くを通りかかった目暮警部に例の事件について訊ねようとすると、いつもとは違い素気無い態度でかわされてしまった。ならば、と、半ば脅すような形で高木刑事から話を聞き出せば。

「Need not to know……そう言えば、お分かりでしょう」
「っ！」

2人目の被害者が警察手帳を握って亡くなっていたことまでを聞き出したところで、話を遮るように現れた白鳥警部にそう警告されたオッチャンは、顔色を無くしてそれ以上の追及をやめた。

Need not to know、警察関係者の中に犯人がいる可能性があることを暗喩する隠語だ。この事件には、警察組織全体が関与しているかもしれない……？ 考え込んでいると、オッチャンの後ろで安室さんがこちらをじつと見つめていること

に気がつく。パーティの場に合うようにスーツを着ているが、もしや本職の方で関わるつもりだったのだろうか。いや、身分を隠しているから、まさかな。

と思っていたら、小さく手招きされた。

「どうしたの安室さん？」

「……コナン君、最近不知火さんを見かけなかったかい？」

「不知火さん？」

蘭や園子達がプロポーズの話で盛り上がっているところから離れ、会場の端でひそめた声でそう訊ねてきた。

「……このところ会ってないよ」

「そうか……君なら会っていそうだと思っただけど……」

「いや、ボクも狙ってあの人と会えるわけじゃないって。もうこの辺りでの物件探しは止めたみたいだし、誰かにポアロに連れて行かれない限り会うのは難しいんじゃないかな。基本的に日中は外に出たくない人でしょ」

「……」

それもそうか、と難しい顔で黙り込む安室さん。

「僕も彼女の連絡先を知っているんだが、」

「うっわどんな手段使ったの」

「止めて正当な手段でもらってるし彼女も了承してるからそんな目で見ないで。それで、ろくに返事をもらえなくて、彼女が何をしているか全く分からないんだ」

お互いに連絡先知ってるのに返事をもらえないって……。

「……何で不知火さんのことが気になるの？」

「取引しよう、コナン君。その理由も含めて僕の知っていることを教えてあげるから、君から彼女に連絡を入れてくれないか」

やはり安室さんの立場であればわざわざこんなところに出向かずとも事件の情報が手に入るかと納得すると同時に、オレに助けを求めるほど不知火さんに無視されている彼の状況に色んな意味で泣けてきた。本当、どんだけ嫌われてるんだこの人。

「べ、別にメールや電話くらい良いけど……そんなに切羽詰まってるの……？」

「……こんな話ができるのも、彼女達の素性を知っている君だからこそだよ。本当はこれもトップシークレットなんだけど、ダンガンロンパ事件とは無関係のところ君ほど彼女に信頼されている人間はいないからね……」

……思えばオレも、とんでもない案件に首を突っ込んでしまったもんだ。最初は服装が真っ黒だっただけで近づいたのに、まさかあんな世界的大事件の関係者だったとは。

でもまあ、少なくとも悪い人達じゃないし、後悔はしていない。ひよんなキツカケで貰っただけの不知火さんの連絡先が、ここまで公安やFBIに対する強力なカードにな

るとは思わなかった。同じものを持つてゐるはずの安室さんは全く活用できてないみたいだし、信頼関係つて大切なんだな……。

安室さんは溜息を一つつくと、更にひそめた声で言った。

「単刀直入に言おう。例の事件の容疑者として、彼女達が疑われている」

「は?」

突拍子も無い話に思わず上ずった声を出してしまった口を慌てて塞ぐ。いやいや、そんな馬鹿な。

「あ、安室さんは、不知火さん達を疑つてるの?」

「まさか。警察に対して積極的に喧嘩を売つてくるだけで、彼らが殺人に手を出さないことなんて分かりきっている。そんな暇があつたら、NOCバレした捜査官を殺されたように見せかける裏で保護しておいて、その数年後に心身共に超健康体なそいつにドッキリ大成功のプラカードを持たせて帰還させるぐらいのことはやるさ」

「……………」

やけに具体的な例えなので体験談なのかとツッコもうとしたが、そう語る安室さんの目が死んでいたので止めておいた。基本的に知りたいことは探るオレだが、不知火さん絡みのアレコレを迂闊に触れるとしょーもないキツカケで果てしなくめんどくさいことになるといふのは、周りの大人達による尊い犠牲によって十分学んだ。

「それなら、不知火さん達の疑いを晴らそうとしているの?」

「勿論、それもある」

「それ”も”?」

「僕が最も懸念しているのは、」

会場の煌びやかな照明がフツと落ちたのは、その時であった。

パーティの演出かと思つてしばらく様子を窺つたが、司会のアナウンスなどは流れない。徐々に困惑の声が上がりに始める。

……そうだ、蘭は!?

異常事態が起きていると察知したオレは咄嗟に蘭の気配を探るが、真つ暗で何も見えないし、大きくなつていく喧騒の中では蘭の声も上手く拾えない。

「コナン君、危ないから無闇に動いちやダメだよ」

いち早く状況を判断した安室さんがその場を離れていく気配を感じた。常に周りの位置関係を把握していたんだらうか。まだ何も見えない自分がもどかしい。流星に博士も透明な眼鏡に暗視機能は付けられないだらうしな……。

幸いにして今オレが立っているのは会場の端。壁伝いに手探りで移動し始めたその矢先、少し遠くから劈くような破碎音が響いてきた。ガラスが派手に割れるような音

だ。少なくとも会場内ではない。何処で何が起きているんだ!?

それからもうしばらくして、ようやく明かりが復旧する。さっきの音で他の招待客にもただならぬことが起きたと分かったのか、不安そうに顔を見合わせていた。

会場を飛び出せば、そこで慎重に気配を窺っている安室さんに追いつく。

「安室さん! さっきの何だったの!?

「まだ分からない。トイレの方向からか……?」

いやああ!!

聞こえてきたのは蘭の悲鳴だった。間違いない。弾かれたように走り出す。

やがて、着いた先の女子トイレで、オレ達は思わぬ光景を目にすることになる。

「しっ、不知火さん……!?!」

「うおおお江戸川くん!?! 奇遇だね!?!」

ついさっき話題に上ったばかりの不知火さんが、水浸しになった室内で、倒れた蘭と、そして銃に撃たれて意識の無い佐藤刑事の出血を必死に止めようとしている現場に出くわしたのであった。

状況は最悪の一言に尽きた。想定していた悪い展開を全て詰め込んだような状況だった。いや、それ以上に酷かった。

まず、最優先で阻止すべき連続銃撃を防げなかったこと。大勢の警察関係者が警戒している中で、しかも自分の目と鼻の先で起きてしまった。しかも一般人の蘭さんまで巻き込むという事態。これだけで十分大きな失態だと言うのに。

現場はまさに惨状であつた。破損した蛇口からは水が溢れ放題になり、同じく銃弾が当たつた洗面台の鏡は設置面から落ちて粉々に砕けていた。どうやら停電中に聞こえた音は鏡が割れる音だつたようだ。

そんな鏡の破片だらけの浸水した床に倒れていたのは、肩と脇腹の2箇所を撃たれて意識を失つた佐藤刑事と、外傷は無いものの気絶した蘭さん。唯一意識がある不知火さんは、割れた鏡で両手を負傷しながらも佐藤刑事の止血に専念していた。

彼女達が搬送された米花薬師野病院に毛利さん達と到着し、先に佐藤刑事に付き添つて病院に来ていた目暮警部と合流する。更にそこへ現場検証を終えた白鳥警部や千葉刑事達が加わり、現場検証の結果をまとめる。

犯人はホテルの配電盤に携帯電話の着信で起爆する爆弾を仕掛け、ターゲットである佐藤刑事がお手洗いにいったタイミングで起動させた。そして停電を起こし、予め用意

していた懐中電灯のトラップに彼女が引っかかるのを息を潜めて待っていたのだ。

蘭さんは不運にもその現場に居合わせてしまった。無関係の一般人を巻き込んでしまったことが腹立たしくてならない。

そして、事件とは関係ないところでもう一つ。鏡の破片で傷ついた手の処置を終えた不知火さんに近づいていく、一人の男のことである。

こんな立場である以上、かつての己を知る人間との接触は極力避けねばならない。しかし、事件の発生率が高いこの街では、それに伴って仕事中の捜査一課の人間と出会う確率も高い。そんな一課に警察学校での同期が所属していると知り、徹底的にそいつと遭遇することを避けていた。

まあ結局は、そいつがアルバイト先の喫茶店の常連であることが判明し、早々に事情を説明して口裏を合わせてもらうことになった。察しの良い奴で助かる。

今回の結婚を祝う会も、その同期が参加するどうかは事前に調べていた。幸いにしてあいつは別件に回されていたことが分かり……言ってしまうえば知り合い方面に関しては油断していたわけだ。

「怪我したってマジか」

「手の甲を、サクツと」

「鈍臭え」

だからって、予想していた奴とは全く所属が異なる別の同期が来るとは思わないだろ！ どうして捜査一課の身内のパーティに機動隊員が来てるんだよ、松田あ……!!

「松田君、何故君があの場合にいたんだね？」

目暮警部が今まさに俺が聞いたかったことを聞いてくれた。

あの事件直後、シレッとした顔で捜査の場に紛れ込んでいたあいつと視線が合った時の衝撃はしばらく忘れられそうにない。肝が潰れるとはあのことか。

「もしかして、佐藤さんを心配して……？」

「こいつの友人が出る虫の研究会に付き合っただけに過ぎませんよ」

松田呼んだの不知火さんかあ。そつかあ。そりや予測つくわけないよなあ。そもそも知り合い同士だったことも把握できてなかったんだからなあ。

すると早速、好奇心の塊であるコナン君が食いつく。

「ねえ、刑事さんは松田さんって言うの？」

「あ？ 誰だポーズ」

「ボク、江戸川コナンって言うんだ。松田刑事は不知火さんの友達なの？」

「友達ってほど親しくねえよ。同期の伝手で知り合っただけだ」

ヒロのことだな分かります。あいつ死んだフリの間は何してんだ。向こうが口を開く前に強引に安室だと自己紹介したらすんなり納得されたのは、こちらの事情をヒロか

ら聞かされていたからか？ それとも一課のあいつからか？ いずれにせよ都合が良
いのか悪いのか分からない。

基本的に知人以外の人間とはつるまない不知火さんと普通に会話しているからか、コ
ナン君の興味を大いに引いたようだ。しかし残念、そいつは俺の同期です。あの17人
とは何の関係も無い……筈だったんだが、それでもないらしい。

「へえー……じゃあ、佐藤刑事の友達？」

そのコナン君の言葉にギクリと反応した約1名の警察官に生暖かい視線が集まる。
分かりやすい。

一瞬、サングラス越しに見える目を虚を突かれたように丸くした松田が、苦笑を浮か
べてその質問に答えようと口を開きかけた。

が、言葉が発されるその前に不知火さんが仰々しい声でこう言った。

「そう！ 元カノに近づく口実にされた都合の良い女、不知火霊とは私のことです」
「そんなんじゃないやねお前は黙ってる」

不知火さんのフードの裾を強制的に顎下まで引き下げて黙らせた松田に、コナン君や
一課の面々は納得したように頷いた。

そう言えばあいつ、3年前にほんの一時期、警備部の機動隊を離れて捜査一課に配属
されていたことがあったらしい。佐藤刑事とはそこで会ったのか。

すると今度は目暮警部が気を取り直すように咳払いをし、不知火さんに向かって慎重に口を開いた。

「えー……ところで不知火さん、改めて事件についてお話を伺いたいのですが……」

「ヤダ。何も見てない。以上おしまい。私は帰る」

松田に引き下げられたフードを包帯を巻かれた手で更に引き下げて顔を隠したまま、不知火さんがぶつきらぼうにそう答えた。グツと言葉に詰まる警部達。

そして彼女は、本当にその言葉通り病院から出て行ってしまった。

彼女はあの事件以降、警察関係者に対してずっとこんな調子だった。

「……もしかして、安室さんの目的って……」

「……………」

彼女達と警察の関係をこれ以上悪化させないこと。それこそが最大の目的であったが、その計画は見事に破綻した。

聡いコナン君は、事件後にホテルで起きた一悶着を見て色々と察したのだろう。小声でそう言いかけながらこちらを見上げる彼の目は、可哀想なものを見るそれになっていった。止めて。

……キツカケは、小田切警視長の指揮によって事件直後にホテルを封鎖し、子供を除くホテル内にいた全員に、凶器となった拳銃からの硝煙反応検査を行おうとした時のこ

と。

『そいつが犯人に決まってるだろ』

不知火さんに向けて言い放たれたその言葉に空気が凍りついた。主に警察関係者の間で。

発言者は小田切敏也。小田切敏郎警視長のご子息である。厳格な父親とは真逆で、ロックバンドをやっている彼の見た目は大変派手派手しく、パーティ会場に現れた時などは父親に厳しく叱責されていた。

『現場に残って被害者のフリをしとけば、変に疑われねえもんなあ?』

続けて発されたその言葉に、不知火さんの正体を知る俺を含めた関係者達は分かりやすく戦々恐々としたが、そこまでは彼女も特に気にしていなさそうに流していた。

問題はその後。

『……確かに、動機は十分過ぎる』

小田切警視長が息子を諫めようと声を上げかけたその時。あろうことか、その場にいた刑事の1人が敏也君の言うことに同調してしまった。それがキツカケで、堰を切ったように他の警察官達もその疑惑を信じ始めてしまったのだ。

今回のパーティに自分も含めたあれだけの警察関係者が集まったのは、何を隠そう、その下の階で行われる昆虫研究会総会に”53期の17人”のうちの1人が参加する

という情報があったからだ。ダンガンロンパ事件の被害者である彼らが警察に対して並々ならぬ恨みを抱いていることは、5年前から警察に在籍している者であれば嫌と言うほど思い知っている。現在進行形で自分達の胃を直撃する犯行を繰り返す彼らに警戒しないわけがない。例えば彼らは何よりも殺人を厭うと知っていても。

一応、不知火さんが疑わしい根拠はあった。彼女が着ていたコートは表側に細かい鏡の破片が、そして裏側には佐藤刑事の血痕がべつたりと付着していた。ただし、現場が水浸しだったせいで血痕の形は滲み、どういう状況下だったのかまでは推測できない。

もしも蘭さんと知り合いの不知火さんが犯人だとすれば、返り血がつく至近距離から撃てたとしても不思議ではない。その後で蛇口を壊して洗い流し、裏表を逆にして着たのではないかと。

……確かに暗闇に強い不知火さんなら停電を起こせば圧倒的に有利になるだろうが、そこまでするなら懐中電灯のトラップは必要無いはずだ。彼女のエコーロケーションの精度なら、光源が無くとも余裕でターゲットの位置や動きは捕捉できるだろう。

このように己を疑う警察官達に、警察に対して不信感を持つ彼女の方も激怒した。

『私らを疑ってるの？ だからこんな集まってるの？ それなら言わせてもらおうけどね?? こんだけ雁首揃えてる癖におたくら何やってんの??』 善良な一般市民の毛利ちゃんまで巻き込んでるぞ?? 警戒するだけならアリにだってできるよ?? 防げなく

てどうすんの??? むしろアリの方が遥かに優秀だよ??? ご存知??? 世の中には自らの頭を盾にして巢を守るアリさんがいるんですって??? おたくらの頭は何のためにあるの??? 警察仕事しろ???』

……と、胃だけでなく心も細切れにするような勢いで、サイコロの代名詞とも呼べるあの有名な文句を直にいただく羽目になった。今回ばかりは反論の余地も無いから耳まで痛い。

結果、それ以降の不知火さんは捜査に協力してくれなくなつた。脅されようが頭を下げられようが、死んでもイヤだと真顔で拒否するばかり。外面上は穏やかだったが、誰がどう見てもアレは怒っていた。

そもそも、どうして下の階で友人や松田と一緒にいた不知火さんがあの現場にいたのかと言えば、偶々その階のトイレが清掃中だったから……というミラクルのせいだった。そんな奇跡は切実に要らない。

ちなみに警戒されていたのは会で発表する予定があつた友人の方で、不知火さんの方は全くのノーマークである。本当に彼女は何をしかしてしてくれるか予想がつかない。

「目暮警部……やはり、あの事件を調べ直すしかないようですね……」

不知火さんの態度に肩を竦めた白鳥警部のその言葉に、毛利さんが鋭く反応する。

「あの事件って、なんすか」

「ああ、いや……」

「何故話してくれないんです！ 一歩間違えれば、蘭が撃たれていたかもしれないんですよ、警部殿！」

自分の無二の娘が危うく殺されかけたというのに、それでも原因を話そうとしない警部達に毛利さんが声を荒げる。どちらの事情も理解できるだけに歯痒い。

その気まずいやり取りは、蘭さんの病室に行っていたはずの園子さんや世良さんが顔色を変えて戻ってきたことで、一旦中断される。

急行した蘭さんの病室で待っていたのは、彼女が事件のショックで記憶喪失になったという凶報であった。

瞳の中の暗殺者 With V3 ③

俺には変わった知り合い達がいる。少なくともマトモな友人とは言えないが、赤の他人とも言えないくらい頻度で関わっている。そいつらは複雑な諸事情があつて萩原によく懐いており、俺が知り合ったのも萩原経由。同じように伊達とも親交がある。

初対面でのインパクトは今でも忘れられない。ある日の深夜、来客を知らせる自宅のインターホンに渋々応答すれば、玄関前にいたのは長らく音信不通だった同期の男と、当時のニュースを総ナメしていた失踪騒動の当事者達だった。あんな長時間思考停止して立ち尽くしていたのはこれから先の人生でも無いと思う。

萩原さんから紹介されたので頼りに来ました、と恐る恐るとした声音で言われ、ハツと我に返った俺は即刻萩原に電話をかけて事実関係を確認した。マジだった。頭を抱えた。

警察に対して反抗的だと聞いていたそいつらが、萩原や俺に対して比較的慣れたように接触してきた理由は、音信不通だった同期の申し訳なさそうな顔を見れば何となく理解できた。問題は、そもそも何故その同期があいつらと一緒に行ったかだ。急に連絡が取れなくなった同期達がどこに配属されたかは薄々察していたが、尚更訳が分からない。

どこをどう見ても面倒ごとの予感しかないそれに俺を巻き込むのなら、当然全ての事情を教えてくださいよな？ 脅し半分で同期から聞き出した経緯は、なかなかにつっ飛んでいた。

なるほど。何年も連絡を絶っていた同期宅にアポ無しで深夜に突撃かましてきたり、警察官の身でありながらつい最近まで警視庁を散々躍らせた相手と共に逃避行をきめるような、そんなクソ度胸が無ければあの部署ではやっていけないのだろう。納得して頷いた俺の目はきつと死んでいたに違いない。

そんなこんなで早4年、そいつらとの交流は今も続いている。

と言うか、意外なことにあいつらは思いの外律儀な連中で、俺達に匿われた恩を今でも忘れず、毎年欠かさずお中元やお歳暮を17人分の連名で送ってくる。伊達の結婚式には「17人の卒業生」という際どい名前で賑やかな祝電を送ってきた。

そう、根は素直で良い奴らなんだ。もたらす影響が色々エゲツないだけで。

「よお、安室サンだったか。喫茶店のアルバイトがこんなところに何の用だ？」

「蘭さんのお見舞いですよ。毛利先生の付き添いです」

多分、こいつとの遭遇も、そんなエゲツない影響のうちの1つなんだろうなあ。

ただし、俺じゃなくて向こうにとっての。

至って平静な語調と表情だが、俺と曲がり角でばったり鉢合わせた瞬間、強い緊張の気配を感じた。昨日ほどではないが、今日も朝から俺と出くわすのは想定外だったらしい。しつかりしろよ。

「刑事さんもお見舞いですか？」

「それもあるが、知り合いのクソガキがここでヤンチャしてるって報告を受けてな。どうにか鎮めてくれと頼まれた」

襲撃にあつた佐藤や毛利蘭の入院しているこの病院で、クソガキが昨晩から警備にあつている警察官をおちよくつて鬼ごっこを開催しているらしい。帰つたと見せかけて何やってんだあいつは。自分が疑われていると知っててやってるだろうから本当にタチが悪い。連絡してきた伊達は、5年前の悪夢再来だと苦笑いしていた。

「……そのクソガキって、もしかしなくても、不知火さんのことですか」

「どうしてそう思う」

「目暮警部と先程会いました。真っ黒なコートを着た女性が、小児科のプレイルームから持ち出した玩具のタンバリンを鳴らしながら警察官を挑発していると聞きました」

あいつ喧嘩売る気しないぞ。

……それにしても、元の人柄を知っている俺からすれば、この人好きしそうな穏やかな口調と優男の微笑みには、違和感があり過ぎて寒気がする。

「松田刑事は彼女と親しいんですね」

「それでもねえよ。向こうから都合の良い時だけ気まぐれに懐いてくるだけだ」

「普通に会話できるだけでも十分だと思います」

「お前は会話もマトモにできねえのか……」

安室サンは一瞬しまったという顔をした。さっきの一言だけで、不知火とそこそこの知り合いであることや、ついでに仲も良くないこともバラしてしまった。人間関係の情報管理に厳しい部署だろ。同期一頭の切れる男とは思えないほどの凡ミスだ。一体どうした。

「やあ、松田さんだあ、おはよう」

噂をすれば何とやらで、背後から聞こえてきたそんな間抜けた声に振り向けば、本当にタンバリンを持ったそいつが立っていた。安室サンがギクリと身を強張らせる。

タンバリンをシャンシャン鳴らしながらこちらに近づいてきたそいつは、俺の前にいる安室サンの存在に気付くと、俺の顔と交互に見比べてしばらく思索した後にかう発言した。

「……ドンペリ今度は何して捕まったん？」

「だからどうしてそうなるんですか!!!」

何でドンペリ。またってどういふことだ。

俺の怪訝な視線に気付いた安室サンは、鬼気迫った表情で「違います!!!」と否定してきた。何が違うんだ。必死過ぎて逆に疑わしい。

「不知火、お前いい加減にしとけよ。伊達が嘆いてたぞ。お巡りさんを困らせて何がしたいんだ」

「何がしたいって、私はただお巡りさんを困らせたいだけなんだ」

「そうか、それ自体が目的か」

「タンバリンダンスで公務執行妨害で逮捕、からの殺人容疑で起訴されて冤罪発覚エント、目指せフルボッコだドン」

「そのテンション、さては寝てないな」

徹夜までして嫌がらせに心血を注ぐこいつマジで手に負えねえ。

「つーかお前ら、世間に迷惑かけるなってあれだけ言い聞かせたのに、最近のあの馬鹿騒ぎは何なんだ？ お巡りさん大好きって言ってくれたお前らはどこに行った？」

例の愉快的サイコロ活動について苦言を呈すと、途端に安室サンがギョツと目を剥いてこちらを凝視してきた。警察に対して友好的だったなんて、奴らの今の態度からじゃ想像つかないのは分かるが、そこまで驚くことか？

「あー……それがね、割と最近のことなんだけど、日本の公安とアメリカのFBIの人達に盗聴器仕掛けられて……ついに皆の堪忍袋の緒がキレちゃった的なの？」

「ほお、そうか、よりにもよって盗聴器か。俺や萩原が必死に解体した爆弾にガソリンをブチまけて打ち上げ花火みたいに景気良く吹っ飛ばしてくれたアホがいるなら仕方ねえな」

「人を爆弾扱いするの良くないと思うの」

安室サンが一瞬でこちらから目を逸らした。そして俺は全てを察した。お前こいつらに盗聴器仕掛けたせいで無意識に嫌われてんのか。プライバシーの侵害はこいつらにとつて最大の地雷だと知らなかったのか……。

「松田さんは何でここに？ あ、元カノさん佐藤さんのお見舞いかあ」

「そこまで進んだ仲になったことはねえよ。それと……お前の暴挙を止めるためにな」

「面白い、私とやり合うつもりか」

「残念ながら暴走車に突っ込んでいくほど俺は無謀じゃねえんだ」

「人を暴走車扱いするのも良くないと思うの」

すると不知火は、俺の前で冷や汗をかいて固まったまま動かない男を見やった。

「松田さんはドンペリと知り合い？」

「ドンペリかどうかはともかく……まあ、知り合いだ」

「ええ、先程佐藤さんの病室で会いました」

咄嗟に繕った笑顔で並べられる嘘八百。本当はこの場で偶々鉢合わせただけだが、こ

おそらく逃げ回る不知火を追いかけてきたのだろう、息を切らせた高木がそこに立っていた。

ところで、なあ、そろそろ笑っても良いか。

蘭が記憶を失うという事件から一夜明け、オレは蘭の両親と共にあいつの入院している病院へ朝一で向かった。ずっと考え事をしていて、ろくに眠れなかった気がする。

昨晚、目暮警部と白鳥警部が苦渋の思いで事件のあらましを教えてくれた。この連続警察官銃殺事件の被害者である奈良沢刑事、芝刑事、そして佐藤刑事の3人は、友成という警部の部下として、ある事件を担当していたという共通点があった。その事件というのが、以下の通り。

今から1年前、仁野保という医師が自宅で右の頸動脈を切って死亡していたのが発見された。亡くなる何日か前、彼は手術ミスを責められており、当初の警察はそれによる自殺だと考えた。

これを否定したのが、遺体の第一発見者であり、彼の妹である仁野環。あのパーティー会場にもいた女性だ。彼女曰く、「患者を全く顧みない兄が、手術ミスを死んで詫びるな

んで事はありえない」と。

やがて調査を進めるうちに、仁野保が死ぬ一週間前、彼が紫の髪色の男と口論していたという目撃証言が出てきたそうだと。ところが、その男を張り込んでいる最中に、友成警部が心臓の発作を起こしてしまった。張り込みの現場に救急車を呼ぶわけにはいかないと、119番をかけようとする佐藤刑事に友成警部本人が強くそれを拒み、結局亡くなってしまう……。

一方、彼らが張り込んでいた紫髪の男が警視長の息子である小田切敏也だと分かる、及び腰になった奈良沢刑事と芝刑事は事情聴取もせず、仁野環へ紫髪の男は無関係だったと報告し、仁野保の死は自殺として処理されることになった。

張り込み中に亡くなった友成警部の葬儀では、彼の息子の友成誠が救急車を呼ばなかったことについて激昂し、焼香に訪れた佐藤刑事達3人に対して一生許さないと語気強く批判した。この人もあのパーティ会場で見かけたな。すぐに出て行つたみたいだが。

奈良沢刑事、芝刑事、佐藤刑事の3人は、この仁野保の事件について調べ直していたらしい。白鳥警部がそれを知った直後に、奈良沢刑事と芝刑事が射殺されてしまった。目暮警部達は彼らが調べていた仁野保の事件が関わっているとみて、念のため佐藤刑事に警護をつけようとしていたのだが……結果はこの通り、一足遅かった。

不幸中の幸いか、佐藤刑事を襲った弾丸は命に関わる部位に当たらず、後遺症も残らないとのこと。早ければ今日にも目が覚めるそうだ。

……複雑な事情が絡み合っているこの事件。現時点で怪しいのは、小田切敏也と友成誠だ。白鳥警部が”Need not to know”と警告したのは、どちらも警察官の身内だったからだろう。特に警視長の息子である小田切敏也の影響力は大きい。両者とも犯人の特徴である左利きでもある。

ただでさえ面倒なことになっているのに、そこへ不意打ちで突っ込んできたのが不知火さんとくれば、安室さんが泣くのも仕方がない。

まあ、彼女についてはさておいて。当面の問題は蘭の方だ。一刻も早く記憶を戻してやらなければ。

この日は天気も良く、気晴らしになればと蘭を病院の中庭に連れていけば、昨晚のうちにオレから事件のことを報告された阿笠博士が少年探偵団のメンバーを連れて蘭の見舞いに訪れてきてくれた。

子供達が記憶を失った蘭に改めて自己紹介していると、灰原が何かに反応してパツと振り返る。

「どうした灰原」

「今、誰かがじつと見つめていたような……」

「え?」

灰原が気配を感じた場所を見回すが、それらしい人影は無い。気のせいか……?すると、灰原が思案げにこう聞いてきた。

「……ねえ、昨日の事件、不知火さんもその場にいたのよね」

「あ、ああ」

「どういうシチュエーションだったの?」

そう言えば、不知火さんが警察と激しく反目し合っていることは省いて博士に教えたから、あの人が事件にどう関わったまでは知らなかったんだつたな。

不知火さんが佐藤刑事や蘭が襲撃されたまさにその現場にいたことや、諸事情あつて警察に協力したがないことを掻い摘んで話せば、灰原は訝しげに言う。

「どういう事情で不知火さんと警察の仲が悪いかは知らないけど……あの人は人命がかつた状況で私情だけを優先するような人じゃないわ」

「そう、なのか?」

「自慢じゃないけど、不知火さんとはあなたよりも親交が深いと自負しているの」

十分自慢げなドヤ顔だけど、ひとまずここはツツコまないでおこう。目線で話の続きを促す。

「でも、周りだけを優先するお人好しでもないわ」

「え？ さっきの言葉と食い違うぞ」

「自分と他の人の利害が噛み合うように行動するのが上手いのよ」

多分それ、意識的にやってるんじゃないやなくて、やりたい放題やった結果そうなっただけじゃね？ いや、ある意味それも才能か？

しかし、おかげで彼女が黙る理由が掴めてきた。言われてみれば、あの人は最初からそういう人だった。自分が疑われることなんて歯牙にも掛けない。いや、それどころか……。

「へえー、哀ちゃんは不知火さんと仲が良いんだね！」

「ー」

突然会話に割って入ってきた声に思わず肩が跳ねた。

「びっ……くりしたあ！ ちょっと、驚かせないでよ世良さん！」

「ごめんごめん！」

振り返った先には世良が悪戯っぽく笑って立っていた。博士や少年探偵団達と同様に、蘭の見舞いに来てくれたらしい。

世良も改めて蘭に自己紹介し、未だ思い出せない様子に寂しそうな笑顔を一瞬見せたものの、気を取り直すようにこちらに向き直った。正確に言えば、灰原の方に目を向けている。

「それでさっきの続きだけど、哀ちゃんは不知火さんと親しいの?」

「そ、うだけど……それが、どうかしたの?」

「ボクも不知火さんと仲良くなりたくないから、是非ともその秘訣が知りたくってさ!」

身を屈めて目線を近づけてきた世良に気圧された灰原がオレの背後にスッと回った。さりげなく盾にしゃがったな。

って、いや待て。

「不知火さんと仲良くなりたくないって、何で?」

「誰かと仲良くなりたくないのに深い理由なんてないさ!」

ごめん、周りの大人達のせいでも頑張っても裏があるようにしか考えられない。仲良くなりたくないの後に見えないカツコ付きの注釈があるようにしか思えない。仲良くなりたい()。その上相手が相手なもんだから、気にならないわけがない。

オレのそんな複雑な気持ちを知ってか知らずか、世良は意味深な笑顔をこちらに向けよう言った。

「不知火さんとは秘密を教えあえるくらいには打ち解けたいって思ってるんだ!」
待って。いや待って。

あの振る舞いからじゃ想像もできないけど不知火さんの秘密って国家機密レベルだし、世良の秘密も妹や母親のこととか大いに気になるところだらけだし。それを教えあ

える仲になりたいって？ それってまさに周りの大人達が目指している関係じゃないか。ここにきてまさかの新勢力。

……つーか不知火さんに関してここまで際どいことが言えるって、もしかしなくても例の事件や例の17人のことも知ってるんじゃないやねえの？

聞きたいことは山ほどあるが、何も知らない灰原の前で迂闊なことは言えず、世良もオレもただニコニコと笑うしかできない。何なんだこの膠着状態は。

そんな空気を破ったのは、居心地が悪そうな灰原が放った言葉だった。

「……不知火さんと仲良くなりたくないなら、好きなだけそうすれば良いじゃない。さつき駐車場で会ったわよ」

「えっ、不知火さん病院に来てるの!？」

不知火さんってタイミングが良いのか悪いのか分からない。

ただ世間でチャホヤされたいだけのパフォーマンスを繰り返すふざけた連中かと思っただが、どうやらそれは違うらしい。あのDICEとか言う天才バカ集団は。

売名だけが目的なら、あんな世界規模で暗躍する危険極まりない組織にちよつかいを

出すわけがない。

何としてもサイコロとのパイプを作れ。そう言ったママの形相には凄絶な迫力があつた。

つい先日。組織に殺されたと聞いていた従姉妹の明美さんが、身を隠しているはずのママの携帯電話の番号を特定してきて電話をかけてきた。もうこの時点で色々とおかしい。

何故明美さんはこのタイミングで生存を明かしてきたのか。特に深い意味は無い。家族愛をテーマにしたドラマを見て、衝動的に肉親と連絡し合いたくなつたんだって。無理を言つてママの携帯電話の番号を調べてもらつたらしい。突発的な動機の割にやつてることのレベルが半端ないんだけど。

で、誰がそんなことをしたのか。そもそも明美さんは誰に助けられて誰のもとにいるのか。

ママの電話番号を特定しているし、あの組織から明美さんを匿っているのだから、少なくとも単なる一般人ではないことは分かる。自然と思いつくのは、凄腕のエージェントが所属する諜報機関や警察などのそういう類の組織だ。イギリスのMI6？ それともアメリカのCIA？ FBI？ それとも日本の警察？

結果から言えばそのどれもがハズレ。

明美さんはママの電話番号の他にこちらの近況まで知っているようで、ボク達が組織に反撃しようとしていることについて、自分達は無事で必要とあれば力も貸せるから、組織相手に決して無理をしないほしいと頼むつもりで電話をかけてきたそうさ。だけれどママは、明美さん自身が本当に無事かどうか分からない限りはその要求はのめない、せめて現在の所属を教えろと脅すように問い詰めたのだ。命の恩人だからどうしても教えられないと渋っていた明美さんだけど、やがてママに根負けし、向こうから電話を切る直前に困り果てた声で分かりやすいヒントを教えてください。

1から6までの正六面体。

うん、サイコロしか思いつかないよね。予想外にも程があるよね。電話が切られた後、しばらくママと無言で顔を見合わせたよ。

あんなおふざけ集団が組織にちよっかいを？ ボクは俄かには信じられなかったけど、意外なことにママは妙にすんなり納得していた。曰く、DICEなら嚴重に身を隠しているこちらを探ることもできれば、明美さんの安否が組織に漏れる危険性も低い。死んだフリの協力者に彼ら以上の適任者はいない、とも言っていた。

世界各国の警察が今もその対応に手を焼き、ボク達から父さんや秀兄まで奪ったあの組織を一方的に騙せるなんて、一体何者なんだ？

そんな疑問は、ママがこっそり教えてくれたDICEの出自で呆気なく氷解した。マ

マが情報戦最強だと評するのも頷ける。

「ハンッ！ 私に口を割らせたかったら、タカシマヤで売ってるエクレア全種類貢ぐことだなあ!!」

だからこそ、ゲスイ悪役顔で警察官に洋菓子をはかる不知火さんがあのDICEの関係者だなんて、余計に信じられなかった。

コナン君と一緒に蘭ちゃんらの病室から出てからしばらくのところで、そんなセリフが聞こえてきてそちらの廊下を向けば、額に手を当てて天を仰ぐ高木刑事と、腹を抱えて震える松田刑事と、胃のあたりを押さえて蹲る安室さんと、慌てて呼び止める白鳥警部の手を振り払って全力疾走で駆けていく不知火さんを見てしまった。

何事かと刑事さん達に事情を聞けば、彼女に昨日の事件について話を聞こうとしたら、オヤツを要求されるだけされて逃げられたそう。見たまんまだね。

「高木刑事達はなんで不知火さんを捜してたの？もしかして、あの人か犯人だと思ってる……？」

「いや、そうじゃなくってね」

ボク個人としては不知火さんを疑う気なんてサラサラ無いけど……残念ながら、彼女が怪まれる客観的な証拠はいくつかある。

不知火さんのコートの内側に付いていた佐藤刑事の血痕の他、現場に落ちていた壊れた懐中電灯から、蘭ちゃんの指紋だけでなく彼女の指紋も検出されたらしい。そして、頑なに捜査の協力を拒むその態度。警察からすれば疑惑の塊みたいだ。ボクもあの人の事情を知らなければ迷いなく疑っていたと思う。

コナン君の疑わしげな目に焦った高木刑事が言うには、最も犯人の条件が当てはまる人物として名が挙がった友成誠の近況を調べようとしたところ、全く足取りが掴めないらしい。自宅には不在、更に職場にもまるで予測していたかのように直前で長期休暇の申請が出されており、彼が今どこにいるのか全く分からないのだそうだ。

「彼が見つからない限り、事件に直接遭遇した不知火さんが、現時点で一番有力な手掛かりなんだ」

「……で、話しかけようとして失敗しちゃったと」

如何にも困ってますと頭を抱える高木刑事。その一方、白鳥警部や目暮警部はそこまですぐ困ったようには見えない。まるでこうなることが分かっていたような反応だ。いや、むしろこれは、最初から諦めているような……？

その温度差についてはコナン君の目にも留まったようで、彼は素直に疑問を口にした。

「ねえ、他の刑事さん達はそれほど残念がってないよね？ どうして？」

「ああ、コナン君もそう思った？ 僕もよく分からないけど、目暮警部達、ずっとあんな感じで覇気が無いんだよ。どうやら不知火さんとは極力関わりたくないみたいで……」

あつ、と瞬時に察してしまったボクは。

「……もしかして、ダンガンロンパ事件が関係しているとか？」

うっかり発言したその言葉で、この場にいる全員を見事に凍りつかせてしまったのであつた。

瞳の中の暗殺者 with V3 ④

今から約5年前のことである。かの悪名高いダンガンロンパ事件が表面上収束し、その生存者達が日本の警察に保護されるようになって間もなく、彼らの親族の捜索が開始された。

生存者達はチームダンガンロンパによって記憶を改竄され、更には身体的な見た目にも手を加えられている可能性もあり、本人からの手掛かりは皆無に等しかった。よって、特例的に彼らの情報を公開し、心当たりのある家族に申し出るよう呼びかけるという方法がとられた。

やがてすぐ、彼らの家族を名乗る者が続々と現れた。生存者達も、本当の自分に関する全ての記憶を失っていたが、己を心配し、記憶が無くても一からやり直せば良いと暖かく受け入れてくれる人物がいると知り、安堵の表情を浮かべた。

無事に生存者達が本来いるべき場所に戻り、本当の意味で事件が解決しようとするその目前に、状況は一変した。

ある1人の生存者の両親を名乗る男女が現れたことによつて。

不知火さん達と警察が不仲である原因は、ダンガンロンパ事件にあるのでは？

そんなトップシュークレットをドストレートに訊ねてきた世良さんに、既に不知火さん渾身の嫌がらせによってグロッキー気味だった目暮警部は呆気なく折れ、俺すらも知らなかったダンガンロンパ事件の生存者達と警視庁の間で起きた出来事を語ってくれた。

それは、警視庁が才囚学園から保護された彼らの親族を捜したことが、全ての始まりであったと言う。

「不知火さんのご両親が？」

全てが狂ったキツカケが不知火さんの両親だと明かされた俺には早々にオチが分かってしまった。もう嫌な予感しかない。

ふと視線を下に向けると、コナン君もヤツチマツタナーと言いたげな顔をしていた。だって、そうだろう。彼女は事件の前から天涯孤独の身なんだぞ。

「どうして？　せつかく家族が迎えに来てくれたの？」

「……」

一方、世良さんはそこまでの深い事情は知らないようで、感じた疑問を素直に口にし

ていた。警察に入った時期的に事情を知らないらしい高木刑事も、黙って話に耳を傾けている。

「実は、記憶を操作されたダンガンロンパ事件の生存者の中で、唯一不知火さんだけが事件前の記憶を保持したままだったんです」

「と言うことは、不知火さんは本当の家族のことを覚えて……あれ？」

白鳥警部の疲弊しきった声による補足に、彼女も何かを察したようだ。目暮警部は沈んだ声で話を続けた。

「事件前の記憶を持つ彼女は、警察が連れてきた両親を一目見て、自分の家族ではないと言ったんだ」

「……それって」

「ああ……残念ながら、そういうことなんだ」

不知火さんからすれば、赤の他人が己の両親だと名乗って自分を引き取りに来た、ということになる。

「ちよ、ちよと待って、おかしいよ！ 不知火さんの記憶があると知ってたら、偽の両親が来るわけじゃないじゃん！」

「その通りだ。記憶があると知っていたら、こんな馬鹿げた話は有り得ない」

「まさか」

「……………彼女は自分に記憶があることをそれまで敢えて警察に黙っていたんだよ。記憶喪失という弱みにつけ込んでくる人間を警戒してね」

「ひええ……………」

酷い。何が酷いって、何もかもがだ。

身元を明らかにするためには真つ先に伝えておくべき記憶の有無を黙っていた不知火さんも、それにまんまと引つかかったバカがいたことも、そいつを紹介してしまった警察も。いやもう何て言ったらいいのか。

「ダンガンロンパの劇中における彼女の称号には、超高校級の悪意もあつた。しかしどうやらそれは、他人を傷つける悪意ではなく、自分を傷つけようとする他者への悪意のようで……………」

他人の悪意を潰す悪意というやつだろう。その威力は俺もよく知っている。

不知火さんだけが記憶があるということは知っていたが、それを警察が把握したタイミングやキツカケまでは知らなかった。まさかこんな酷い経緯があつたなんて目眩がしそう。耐えきれずにブレた視界の端に、呆れきつた顔のコナン君が見えた気がした。

「……………当然のことながら、その日から彼らは親族の搜索を即刻中止するように求めてきた。不知火さんだけに留まらず、全員がこちらを疑惑の目で見るようになったんだ」

「そりやそうだよ……………偽の家族を斡旋するだなんて、一番やつちやいけないことだよ

……」

「彼らの情報を知って集まった人達の中には、本当の家族もいたかもしれない。だが、記憶を失った彼ら自身には、それを確認する術が無い。頼るべき警察にも裏切られてこの世の全てが信じられなくなった彼らは、あの子達は、かけがえのない家族すら、自ら永遠に放棄せざるを得なくなってしまうんだ……」

彼らが人間不信になるのも当然である。信頼ゼロの警察に対してド敵しいのも納得できる。むしろよくも面白おかしいサイコロ程度で収まったもんだ。世の中にはハンガーを投げつけられたのがキツカケで殺人に走る良い年した大人だっているのに。あれ？ こうして見たらあいっら凄く良い奴らじゃないか？（錯乱）

「……ねえ、不知火さんの両親を名乗った人達は、不知火さん達の才能を狙ってたの？ 警察の指示でそうしたの？」

深刻そうな顔をするコナン君が凄まじい追い討ちを仕掛けてきた。この子本当に小学生なのか。発想がエグい。そもそも5年前の君は大きくてもせいぜい2歳児だろう。どうしてここまで踏み込んでくるんだ。俺も知りたかったけど怖すぎて聞けなかったことを、どうしてこの子はこうもアツサリと。

すると、目暮警部はゆるゆると首を横に振って答えてくれた。

「いや、その2人の詳しい身元は分からずじまいなんだ。事件の生存者に近付こうとし

た理由も分からなかった。上層部が余計な調査をするなど圧力をかけてきたんだ」
「……」

「だが、不知火さんの否定をただの記憶違いだと言い張り続ける官僚の一派がいてな。証拠は無いが、恐らくは、君の言う通り……」

待つて。いや本当に待つて。

コナン君と世良さんの目がみるみるうちに険しくなっていく。

「その口くでもない連中のおかげで、我々も大変な目に遭わされたんだ……」

「……目暮警部達も、大変な目に？」

深い深い溜息をつく目暮警部。その言葉に同調するように、白鳥警部も窓の外を遠目に眺めた。

何だか急に話の雰囲気が変わってきた気がする。

「特に刑事部では伝説的に有名な話だ。尤も、当時のことを思い出したくないもんだから、それ以降に入ってきた奴らは教えられていない方が多いかもしれないがな」

「あつ、伊達さん！」

ああ、そろそろ来ると思っていたよ。もういつそ同窓会のつもりでいた方が気が楽かもしれない。

今から約5年前のことである。かの悪名高いダンガンロンパ事件が表面上収束し、その生存者達が日本の警察に保護されるようになって間もなく、彼らの親族の捜索が開始され、そして何やかんやあつて彼らは警察を敵視するようになった。その頃の出来事である。

事件前の記憶があると言うサイキッカーの抗議に耳を貸さず、本物の家族かどうかも分からぬ人間を押し付け続ける連中に対し、ついに超高校級達がブチギレた。

「あいつらを保護している寮から、不知火が夜毎脱走するようになったのが始まりだった」

事件現場で偶に会う伊達刑事が語り出した話に、あ、オレこの話知つてると、デジャヴを感じた。安室さんが教えてくれたかの有名な回メリューランド転木馬騒動の冒頭じゃねえか。発信機を仕掛けられただけが発端じゃなかったんだ。

「当時の俺達は、あいつらが裏でどういう扱いを受けているかまだ知らされていなくてな。表向きにメディアで報道されている通り、事件の影響で情緒不安定になっている被害者としか見ていなかったんだ。あいつが寮から抜け出した時もそのせいだと思わなかった」

「だけど彼女は……不知火さんは……」

悪夢に魘されるような声で白鳥警部が教えてくれた不知火さんの所業は、想像を遙かに超えていた。伊達さん達正義感に溢れる善良なお巡りさんは、不知火さんから悪魔のような仕打ちをこれでもかと浴びせられたのだ。

不知火さんはただ逃げ回ったのではない。案の定と言うか、散々お巡りさんをおちよくり倒した。

建物の壁のような高さのあるものでもない限り、逃げる彼女の障害となるものは殆ど無く、フェンスや塀は当たり前のように飛び越えていく。走って追いかければそれを超える速度で、しかし付かず離れずの距離を保ちながら延々とマラソン大会。

パトカーで追いかければちよつと目を離れた隙に反対側の歩道に移動され、慌ててUターンすればまた元の場所に戻っていたり……というのを何度でも繰り返す。業を煮やしてパトカーから降りて追跡すれば、さっきまで自分が乗っていたパトカーから不知火さんの声で無線が入れられてくるという突然のホラー展開が。私メリーさん、今あな

たの温もりが残る座席にいるの。

やがて不知火さんの方も車を本格的に使い始めていく。バスや一般車両への無賃乗車（屋根の上）という形で。行動範囲がグンと広がり、お巡りさんを文字通り東奔西走させた。首都高速のインターチェンジに向かう夜行バスの上にしがみついて手を振ってくる姿を目撃した日には泣いてしまう人まで出たそうだ。気の毒に。

そんなことを一晩中繰り返した最後。日が昇ろうとする頃になってようやく現れ、疲れ果てたお巡りさんが運転するパトカーに達成感に溢れる顔で乗り込み、寮まで送ってもらうまでがルーティン。これは酷い。

恐ろしいことに、こんなことが1年近く、しかも毎晩続いたのだと、目暮警部が呻いた。

「今の状況そっくりじゃないですか。道理で覇気が無かったはずですよ……」

「ハハハ、タンバリンなんて可愛いものだよ。彼女の悪意はまだ更に上の段階を秘めていたんだ」

「この上まだ悪くなるの!?!」

ゲンナリした様子の子の高木刑事の言葉に乾ききった笑みで白鳥警部が答えれば、世良が悲鳴を上げた。もういい加減にしてあげてと言いたいが、悲しいかな、この話は既に起きた過去のことなのである。

「そんな救いようのない悪ガキ、いい加減にほっとけば良いものを、上の人間はほっとか
なかつた。重大な事件の被害者だから片時も目を離すな、何が何でも保護せよつてな。
確かにその通り。だが、流石にいつまでもこつちが翻弄され続けるのもメンツに関わる
と思つたのか、捜索に割く人員を大幅に増やして本腰を入れることになつた。俺達一課
も関わるようになったのはその頃だ」

「え？　伊達刑事や白鳥警部達は最初から不知火さんを追いかけてたわけじゃないの
？」

「ああ、始めの頃は生活安全課だけが担当していたが……最終的には警視庁全体が巻き
込まれることになつた」

「そんな大事に!？」

「向こうも17人全員で対抗してきたからな」

「何その全面戦争」

世良の声は震えていた。

「……こちらが人員を増やしたのを知つた彼女は、その悪意の才能をフルに働かせて妨
害してきたのだよ」

「不知火を追う先々で事件や事故に遭遇するようになったんだ」

「不知火さんが起こしたの？」

「いや、違う」

「あいつ、逃げてるように見せかけて、他人の犯罪の現場に誘導するようになったんだよ」

「Oh……」

不知火さんが逃げ込んだビルの中で誘拐事件の被害者を発見したり、不知火さんがお巡りさんに向けて”鬼さんこちら”と囃し立てる近くで放火事件が発生したり、とにかく不知火さんの一挙一動を追っているだけで別の犯罪と遭遇するようになってしまったのだそうだ。その遭遇率の高さたるや、誘導する不知火さんが犯人であつてもおかしくない程だったそうだが、ちゃんとそれぞれの事件や事故に真犯人もおり、彼女は全くの無関係。言い方は変だが、全て天然物の事件である。

他人の悪意を正確に感じ取れる不知火さんも十分ヤバイが、犯罪率の高さもヤバイ。

「目的と違うとは言え、警察官の目の前で起きた事件を看過できるわけもなく……我々刑事部は不知火さんを追うどころか、昼夜問わず仕事に忙殺されることになったんだ……」

「しかも不知火にその現場へ誘導されたタイミングつてのが、被害者が出るギリギリの直前ばかりだな。意図せず助けられた市民やメディアからはえらく賞賛される一方で、報告書は山のように積み重なり、不知火からは相変わらず煽りの嵐。激務とあらゆる方

面からのギャップで頭がどうにかなりそうだった」

「そのうち夜中に不知火を喧嘩腰で追い回すようになった警察官という図が、他の犯罪を抑制する要因になったらしく、その年の治安水準はダントツの過去最高記録を叩き出して、それ以降破られてもいないという皮肉の塊でしかないデータもある」

「ついでに言えば、胃腸科や精神科にかかる警察官の数もな」

使い方次第で事件を未然に防げるという、ある意味この上なく警察官向きな才能を、全力でその警察官への嫌がらせに活用された彼らの心境たるや如何に。悪意の真価ここに極まれり。

「教えてくれる目暮警部と伊達刑事と松田刑事の目がどんどん荒んでいくのが怖かった。安室さんは顔を覆ったままピクリとも動かなくなっていた。」

「まあ、不知火^{クシヒ}霊という人間を前にすると戦慄して身構えるのは、警視庁の人間として当然の条件反射つーわけだ……」

「思い出すのはつい昨日のこと。不知火さんを見た警察官達が一斉に顔色を変えたのは、そういうわけだったのか。」

「つまり不知火さんと刑事さん達は、お互いに天敵同士なんだね」
オレのその発言を、苦勞の多い警察官達は深い溜息で肯定した。

「はー、ダメだ、毛利のおじさまもお嬢さんが事件に巻き込まれたもんだから、ちよつとヒートアップしやすくなつてゐるみたい。今接触するのは危険かも」

「そ、そんなつ」

「家族に何かあつた時どんな気持ちになるのか、お兄さんならよく分かるんじゃない？」
「くつ……分かつた、仕方ない」

「となると、事件が収まるまでこのまま身を隠しているか、もしくは自力で潔白を証明するしかないな」

「僕はただ逃げるだけなんて御免だ」

「尤もだね！ それにお兄さんの父上も、自分が死んだせいで息子が容疑者にされかけてるなんて知つたら浮かばれませんからな！」

「……あんだ、嫌味の無い気遣いも言えるのか。てつきり警察の関係者とみれば見境なく喧嘩を売ることか」と

「失礼な、それくらい分別はつくさ。警察は嫌いだけど、お兄さんの父上個人からは特に何もされてないし」

「それを言つたら、ついさつきまであんだがタンバリンでおちよくつてた警察官もじゃ

……？」

「こいつの警察嫌いの基準は恐ろしく複雑なんだ、あまり深く突っ込まんでやってくれ」

「あ、はい」

「楽しみにとっておいたデザートを勝手に食べる奴も嫌いだなあ!!!」

「ごめん!! その節は本当に申し訳ない! だからこうしてタダ働きしてるんだからそろそろ許して!」

「車の運転だけで償えると思ってんのか」

「たべもののうらみこわい」

「……DICEも大変なんですネ、そんな罰ゲームがあるなんて」

「その猫マスクはただの趣味だから気にしないで」

「えっ」

「趣味じゃなくて変装なんだよなあ……」

「えっ」

「さっき言ったのは不知火だけの話。17人全員でかかってきた時はもつと酷かった」

「ごめんなさい、もうお腹いっぱいです。聞いたボクが悪かったです」

「ついでだ、せっかくだから聞いていけ。こんな機会滅多にないぞ」

嬉しくない。警察の裏事情なんて普段だったら積極的に知りたくなくなるのに、今回ばかりは嬉しくない。DICEが世界中の警察に敬遠される理由が分かった。疲れるんだ、物凄く。一方的に振り回されまくるから。話を聞いているだけでこれだもの。実際に経験したらどうなるかは想像に難くない。目の前の刑事さん達が良い見本だ。

コナン君も心なしかグツタリと疲れているように見える。その年でダンガンロンパ事件をここまで理解できるなんて、やっぱり正体はあの魔法使い君だろうとは思うが、今はそれについて鎌をかける余裕は無かった。

「庁舎中の自販機の中身を全て熱々のおしるこに変えられた時なんか殺意を覚えた」

「6月の蒸し暑くなってくる時期だったからアレは仕方ない」

すっかり思い出を語り合う雰囲気になってきた刑事さん達。しかし話の内容は非常にヘビーである。

彼らが外で大暴れする不知火さんに気を取られている間に、他の生徒役も暗躍するようになっていったらしい。絶妙にお巡りさん達の業務に支障が出ない程度の、それでいて精神的な攻撃力が高いイタズラばかり。

曰く、公用車を痛車仕様にされたりとか、パソコンやテレビの音量をしょっちゅう最

大にされていたりとか……いやいや、警察の本拠地に侵入してまで何してんのあの人は。

「最終的には俺達も流石にキレたさ。いくら嫌われているとはいえ、こんな仕打ちを受ける謂れは無えと」

「あ、やっぱり黙ったままじゃなかったんだね」

「真冬に自販機からキンキンに冷えたコンポタしか出てこなくなったのがトドメになったんじゃねえかな」

全部冷たい清涼飲料水に変えられたのかと思ったけどそれ以上にエグかった。

「俺達の怒りの矛先は、当然イタズラの主犯であるあいつらにも向いたが……何より、それまで無理矢理俺達の不満を抑えつけ、あいつらの面倒を見させてきた当時の責任者達に向いた」

「クソガキどもにここまでさせる理由があるんじゃないやねえかと、ちよつと調べてみたら出てくるわ出てくるわ、黒い証拠がワンサカと」

「……どうやらあいつら、支離滅裂なイタズラで、責任者どもの意識を俺達から逸らすつもりでもあったらしい。記憶障害を疑われている自分達が奴らの不正を騒ぎ立てたところで握り潰されるだけだと分かっていたから、同じ組織内にいる俺達に不信感を抱かせて調べさせようとしていたんだ」

「おかげさまで簡単に不正の証拠は掴めましたさ。想像を超えるイタズラの数々でお偉方も相当テンパってたようで、情報の管理が信じられないほどガバガバだったそうだ」
ああ、その意識の裏を突くような計画性、間違いなくDICEの前身だ。腑に落ちるってこんな感じなんだね。凄く疲れたけど。

「出てきたのは、あいつらを閉じ込めていたあの寮で行われていたこと。明らかに人権を無視した実験やら検査やらが毎日のように続いていた。あいつらに植え付けられた記憶や才能の影響を調べるって名目でな。そりゃ抗議もするわ」

「日本だけじゃなく他の国も絡んでいたってのも頭が痛かった。ダンガンロンパ事件がそれだけ世界中に与えた影響が大きかったってのもあつただろうが、その調査のために被害者本人に負担をかけるような真似をしていたとは……」

真面目なお巡りさんにとっては何だかすら苦痛を感じる事実でしかなかっただろう。しかしお巡りさん側も多大なダメージを受けた。それが被害者本人からの攻撃というものも酷い話である。彼らは色んな意味で頭を悩ませたに違いない。

「しかしまあ、そこまでやった連中のことだから面の皮も厚いもんで。それだけの証拠を突きつけても、必要なことだと言いつ張って非を認めようとしねえんだわ」

「げっ、まだ続けるつもりだったの？」

「だったんだろうなあ。他の国も認めてるようなもんだから強気でいられたんだろ」

これは面倒くさい。正義が何なのか分からなくなってくる。

実験やら検査についてが必要悪として無理矢理合法とされたのなら、そいつらを堂々と非難できる手立ては一つしかない。

「でも、不知火さんに偽の家族に押し付けようとしていたことは、どう見ても悪いことだよね？」

「おう、その通りだポーズ。よく分かったな」

コナン君が松田刑事に頭を乱雑に撫でられた。

警察が彼女達の親族を捜索していることは既に世間にも知れている。不知火さんの記憶が本物だと証明できれば、偽の家族を用意したという不正も世間に知らせることができるのだ。そうなれば悪党も言い逃れはできない。

……しかし、待つてほしい。不知火さん達が全員失踪したという事件の顛末は辛うじて覚えているけど、あの人達に警察が偽の家族を用意したなんてぶっ飛んだ話は聞いたことがないぞ？ ママもそんなことは全く言っていなかった。ただ、彼らと日本の警察には深い確執があるとだけしか。

「問題の要となる不知火の記憶の真偽はすぐに解決したんだ」

「ど、どうやって？」

「警察官の中に事件前の不知火と会ったやつがいたんだよ。しかも警視庁の記録にも

残っている事件中にだ。不知火と思しき子供の話も書かれているし、不知火の方もそのことを薄っすらながら覚えていた。そこで、そいつが偽の両親に向かって訊ねたんだ。こいつが云年前何処にいたのか、本当の両親なら知っているはずだ、ってな」

「答えられなかったんだね……!」

「ああ。元々不知火自身が記憶の有無を黙ってたから、偽親役と口裏を合わせる調査がされていないかったことも大きい。だが何より身内の警察官が、それも自分のところで管理している情報に記載されている記録を基に嘘を暴いたことが決定打になった。ようやく悪党どもをふん縛ることができた」

思わずコナン君と手を取り合った。これぞ正義の勝利だ!　ここまでくるのに、本当に長かった!　これでお巡りさん達は報われるんだ……!!

「で、ようやく元凶どもを引っ立てて、正式にあのクソガキ達に謝罪させようというその目前、あいつらは察から姿を消した」

これは酷いオチである。

コナン君と一緒にズシヤアと崩れ落ちた。視界の端で安室さんが力無く壁に寄りかかったのが見えた。

「だから、奴らとの決着はまだついてねえんだ。むしろ、それからが始まりだったのさ……」

ああ……それがサイコロ……。

謝罪とか、その原因になった偽家族幹旋云々について公表されてないのも……理解しました……。

「……ねえ松田刑事、これだけ聞いておきたいんだけど、不知火さんと面識があつた警察官って、どんな人……？」

「息も絶え絶えなコナン君の問いに、松田刑事はニヤリと笑って答えた。
「俺のダチだ、萩原っつーんだけどよ」

瞳の中の暗殺者 with V3 ⑤

伊達刑事達から、安室さんも知らなかった回^{より}転木馬騒動の真実こと5年前の悪夢、通称“暴霊事変”の詳細を聞かされ、あらゆる方面からすっかり疲弊した直後のこと。千葉刑事から、佐藤刑事が目覚ましたという朗報がもたらされた。

協力する気が無い不知火さんより遥かに確実な証言者が無事に意識を取り戻したと聞き、刑事達は様々な意味で胸を撫で下ろした。ようやく事件解決へ一歩進められるであろうことのほか、被害者が回復したという報せは純粹に喜ばしいものだ。

早速お見舞いに向かおうとすれば、佐藤刑事の方から話さなくてはならないことがあるから来て欲しいと千葉刑事から言付けを受け、蘭の病室にいたおつちゃんも連れて彼女の証言を聞くことになった。

「犯人だなんてそんなまさか！むしろその逆、彼女は私や蘭さんを守ってくれたのよ」目暮警部が真つ先に訊ねたのは、不知火さんへの疑惑について。佐藤刑事はすぐにとんでもないとそれを否定した。

不知火さんが犯人ではないことなんて最初から分かりきっていたが、確固たる証拠を掴んで、そこでようやく初めて心から安心できた。どんだけ疑わしいんだあの人は。例

えしでかすとしてもジャンルが違うのに。

「つて、不知火さんが助けてくれたの!？」

「ええ、私が話しかかったのはそのことなの。彼女と何か起きる前に言っておくべきだったんだけど……その様子だと、既に何かあったみたいね」

残念ながらガツツリありました。誰もそう口には出さずとも、それとなく漂う疲労感を察知した佐藤刑事は苦笑した。

不知火さんと警察の衝突を危惧していた佐藤刑事も、あの暴霊事変を経験したうちの1人のようだった。

「む……やはりそうだったか。前の2人の事件と比べて負傷の度合いが少ないから、もしやとは思ったが……」

「あの人らしいと言えばらしいですね……」

なんと目暮警部達は、不知火さんが佐藤刑事や蘭を助けたということに驚かず、むしろ納得するような素振りを見せた。

……いや、よく考えなくても、不知火さん達の活動は“殺さない殺させない”が絶対的な軸になっている。それは嫌いな警察に対しても例外ではないのだろう。嫌がらせも人助けも全力投球か……。

「佐藤さん、あの時何が起きたのか、教えてくれませんか」

真剣な顔の高木刑事に訊かれ、佐藤刑事は「つ領いてから語り出した。

*

『……あら、もしかして不知火さん？』

『ん？ 毛利ちゃんだ。こんばんは、こんなところで会うなんて』

『ビックリですね！ 不知火さんもどなたかのパーティーに呼ばれたんですか？』

『いや、私は友達の研究会を見学しに来ただけなんだ。毛利ちゃんの方は？』

『私は知り合いの妹さんの、結婚を祝う会に出席しているんです』

『へえー、道理で。お淑やかで華やかな装いも似合うねえ』

『そ、そんな。不知火さんこそ、いつもと違う格好じゃないですか。一瞬誰か分かりませんでした』

『これコート脱いだけだよお』

『随分と印象が変わるんですね……』

『そちらの方は？ もしや毛利ちゃんのお母様？』

『やだ、違うわよ！ こちらは佐藤さん、刑事さんなの』

『へえー！ 刑事さん、刑事さんでしたか！ へえええええ！ それは大変失礼いたし

ましたあ!!』

*

**

「蘭さんと一緒にいただけで彼女のお母さんだと勘違いされたし……その上で私が警察官だと知った途端態度が分かりやすく様変わりしたから、偶然を装ってお手洗いで鉢合わせたという線はまずあり得ないわ」

不知火さんの警察への反応っぷり、過剰にも程があるだろ。アナフィラキシーかよ。

しかし、そのおかげで疑惑の1つは晴れた。仮に不知火さんが佐藤刑事を狙っていたとしたら、最初から警察官だと知っているだろうし、態度もあからさまに変えたりもしないはずだ。不知火さんの良くも悪くも正直なところが幸いしたとも言える。

「不知火さん、事件では何も見てないって言ってたけど、それは流石に無理があるんじゃない? あの人に限ってさ」

世良のそんな疑いの声に賛同して頷く人は多い。かく言うオレもだ。オレがずっと不知火さんについて違和感を持っているところでもある。

不知火さんは目暮警部に何も見てないとぶつきらほうに証言しただけ。転んだら万馬券の束を手に入れてから起き上がるような人が、事件の現場にいなからその犯人につ

いて何も掴んでいないなんて到底信じられない。あの超視力で犯人の顔も知っていないのだ。つまるところ、あの証言は嘘なのではと疑っているのだ。

ところが、佐藤刑事は少し思案してから首を横に振った。

「……いえ、彼女は本当に何も見てないはずよ」

「うえっ、本当に!?!」

「正確に言えば、何も見えなかったと言うべきかしらね」

見てないのではなく、見えなかった?

佐藤刑事は言葉が続けた。

「停電中、蘭さんが化粧台の下から懐中電灯を見つけたというのはもう知ってる?」

「知ってるよ。その懐中電灯から蘭姉ちゃんの指紋が見つかったって、千葉刑事が教えてくれたんだ」

「……ライトを持っていたせいで、蘭ちゃんが犯人を目撃してしまったかも、ってこともね」

入院中の蘭を付け回すような視線を感じるのには、おそらくそのせいではないか。今朝、中庭で灰原が察知したのは犯人の気配かもしれない。

そう考えたオレと世良はすぐにおっちゃんや刑事達を探しに行こうとして……そのついでに、不知火さんの知られざるヤンチャっぷりを知ってしまったわけである。好奇

心って怖い。

「その時のことなんだけど、蘭さんが懐中電灯を持ち上げた時、偶々その光が不知火さんの目を直撃してしまったのよ」

「あ……！」

暗闇の中で突然目に光が当たれば当然眩んでしまう。特に不知火さんの場合、夜目も抜群なだけにそのダメージは大きかったはずだ。今回は視力の良さが裏目に出てしまったのか！

「その直後に犯人が襲撃してきて、去って行くまで30秒もかからなかった。その異様な手際の良さもあって、彼女は犯人を見たくても何も見えなかったはずよ。明かりが復旧しても、犯人を追わずに私や蘭さんを気にかけてくれたから……」

「じゃあ、不知火さんは本当に何も目撃してなかったと……」

あの証言は意地悪でも何でもなかったのかよ。本当のことを教えてもらおうと彼女を追いかけてはおちよくられた高木刑事が気の抜けた声を出した。

でも、と佐藤刑事は続ける。

「見えなかっただけで、ただ突っ立ってたわけじゃないわ」

「不知火さん、何か行動したってこと？」

「そうよ、流星は抜け目ないあの子と言うべきかしら……私が2発目の弾丸を受けて、蘭

さんを巻き込んで倒れた時、その上から彼女のコートを被せられたの」

「コートを？」

どうしてそんなことを？ その意図にいち早く気付いたのは松田刑事だった。

「なるほど、犯人の目を誤魔化したのか。あいつの真つ黒なコートは暗闇によく紛れる。弾数にも時間にも制限がある犯人からすりゃ、ターゲットに狙いを定められないんじゃないや。追撃は難しかっただろうな」

「そ、そうか！」

殺人の容疑どころか思い切り人助けしてんじゃねーか不知火さん。あ、いつものことか。

これで疑惑はもう1つ解決した。不知火さんのコートに佐藤刑事の血痕がついていたのは、負傷した彼女に直接被せたからだ。

「昨日の事件で見つかった弾丸は全部で4つ。その内2発が佐藤君に撃ち込まれ、もう2発は現場に残っていた。現場に捨てられていた凶器の拳銃には残っていない……」

「つーことは、半分は不知火が外させたのか」

不知火さんやっぱりすげえよ。なのにどうしてタンバリンを手にあのような暴挙に出たのだろうか。ひたすら解せぬ。

……いや、待てよ？

「ねえ、現場に残つてた弾丸つてさ、1つは蛇口に当たつて、もう1つは鏡に命中していたよね？」

「ああ、そうだったな」

「不知火さんが佐藤刑事や蘭姉ちゃんを隠すまでは犯人も2人が床へ倒れたところまでは見ていたはずなのに、どうしてそんな高い位置に撃つたんだらう？」

「！」

オレの推測が正しければ、懐中電灯に不知火さんの指紋が残っていたのにも納得できる。

すると、佐藤刑事は言いにくそうに言った。

「……視力が少し回復したらしい彼女が、蘭さんの取り落とした懐中電灯を拾ったのが、コート影から少しだけ見えたの」

「あいつ、囹になつたのか!？」

「多分そう。その頃には私の意識は朦朧としていたけど、真つ暗な中で犯人のいる方向が僅かに明るく照らされたのが見えただわ」

自分が懐中電灯を持って目立つことで、倒れて動けない蘭や佐藤刑事から犯人の気を逸らした？ あの人、陽動や囹になるのに全く躊躇いが無いな。ダンガンロンパの劇中でも無意識でやってなかつたか？

「だとすれば、彼女の狙いは犯人に鏡を撃たせることだったのかもしれないね」

そう言ったのは、ようやく本調子を取り戻しつつある安室さんだった。いつもと違うのは、顎ではなく胃のあたりに手を添えているところだけだ。

「人目を憚り停電まで起こし、凶器の拳銃にはサイレンサーまで付けていました。そんな慎重な犯人にとって、鏡が割れる大きな音は想定外のアクシデントだったはずです」
「確かにあんな派手な音、大勢の人間の気を引くには十分だな。会場にいた我々にも聞こえたぐらいだ」

「鏡が割れることを見越していたのなら、佐藤刑事達にコートをかけたことにも別の意味が見出せませんか？」

「あ……そう言えば、あれだけ現場には鏡の破片が散らばっていたのに、蘭ちゃん達には切り傷の1つも無かった……」

「ええ、そういうことです」

安室さんの推理を要約すれば、不知火さんは拳銃を持った犯人を退散させるため、犯人自らに鏡を撃たせて大きな音を出させ、その破片で被害者の2人が傷つかぬように予めコートを被せていた……ということになる。あの黒いコートに細かい鏡の破片がまぶされたように付着していた理由はそれだ。

え、いや、マジで？ 不知火さんそこまで計算してたの？

と、疑ってみたが、すぐに思い直した。

計算なんかしなくても、あの人ならやりかねないじゃないか。

「彼女の”悪意”が働いたとすれば、何の不自然もありませんよ」

ホントそれな。安室さんの無理をしたような笑顔が痛々しかった。

ある意味最も理想的な才能の発揮の仕方だったんじゃないだろうか。タンバリンは

その余計な延長だったんじゃないかな（適当）。

すると、おっちゃんがポツリと呟いた。

「……それなら、匣に使った懐中電灯が壊れていたのは、まさか……」

こうして不知火さんに全く別の疑惑が勃発したのだった。

ふと心地良い仮眠から目を覚ました私は大事なことを思い出した。

「ヤツベエ忘れてた……!」

すぐに現場へと急行する。一応ブツへのアルコール消毒も忘れない。昨晚お世話になった看護師さん達に会釈しながら向かえば、そこには思わぬ知り合い達がいた。

「ああー……あの時はちよつとテンパつてて、コートの袖から折り畳みスコップ出そうとしたらバサーツと落つことしちやつたの」

「……偶々蘭姉ちゃん達に被さつちやつただけ？」

「そうだねえ」

「……懐中電灯を拾つたのはどうして？」

「自分の方に向いて落つこちて眩しかったから、とりあえず向きを変えようと手に取つたの」

「つまり特に何か計算したわけじゃないんだね？」

「何を計算するつてのさ？」

「だよねー!!」

輝かんばかりの笑顔で声をハモらせるのは江戸川くんと世良ちゃんの2人。何がだよねー”なのかは知らんが、仲良しなのは良いことである。

「じゃあ、囿になつたつもりでもねえんだな」

「流石にスコップも構えていない丸腰で拳銃持つた相手に立ち向かうほど私はバカじゃないよー」

「スコップ持つてもバカだよ」

松田さんのツツコミはいつものことながら斬れ味抜群だ、痛い。

さて、こんな会話をしているこの現場だが、彼らがいるにはちよつと意外な場所である。

「ところで何でこんなところに君達がいるの？ 遊びに来たとか？」

「違うよ!!!」

カラフルなウレタンマットが敷かれた病院内の一角、小児科病棟のプレイルーム。探偵やお巡りさんと一緒に殺人事件関連の話をするにはあまりにも不似合いな場所である。

「ここに戻ってくるであろう不知火さんを待っていたんだよ！ パツタリ姿を見なくなつたからさ」

「ハツ……もしや、犯人は現場に戻ってくる的なアレか。カスタネットを狙っていることがバレたのかと思つたあ」

「ここにきてレパートリー増やすつもりだったの」

「タンバリンばかりだと飽きられると思つて……」

「何処に氣い遣つてんだお前は」

誤つてキツズが口に含まんでも間違いが起こらぬようにアルコール消毒したタンバリンを所定の位置に戻すと、私がこれ以上余計な物をとらないようにするためか、両側から江戸川くんと世良ちゃんに手をホールドされた。両手に友達つていいよね。

そのままどこかに連れて行こうとする彼らに、私も私はハッと気付いた。

「はっはあ、さてはついに私への容疑が固められたんだな！　来いよポリ公！　理屈なんて捨てて疑ってこい！」

「ちっげーよ、逆だよ、お前への容疑は晴れた」

「何でだ、私に適当なイチャモンつけて適当な証拠捏造したって一向に構わないのに」

「どうしてそんなに喧嘩腰なの不知火さん……」

「戦争には理由が必要なんだよ、探偵くん」

「ボク子供だから分かんない!!」

とにかく私は警察からこれ以上追及されたくないそうだ。実に残念である。

松田さん曰く、あの婦警さんが目を覚ましたらしい。彼女の証言で私の無実が証明されたとか。それなら仕方ないか……。

「ボク達が聞きたいのは、この手のことだよ」

「手？」

私の右手を緩く握る世良ちゃんが、その握った手を揺らしてそう言ってきた。昨日、この病院で処置されてから、ずっと包帯を巻きっぱなしの両手。怪我してるということ、彼らが掴んでくる力も逃がしてくれそうにない割には優しい。

しかし、ふむ、ここで手に注目してくるとは。

その話をするためにも、ひとまず私はあの婦警さんの病室へ連れて行かれることになった。彼女が私に言いたいことがあるらしい。文句かな？ 罵倒かな？ 密かにそんな期待をする私を、左手を捕まえている江戸川くんが胡乱げな目で見上げてきた。君のような勘のいいキッズはそれほど嫌いじゃないよ！

そして、案内された先の病室にて。

「本当に、ありがとう」

「ぐうああああ……」

期待を裏切られ婦警さんからお礼を言われてしまった私のライフはガリガリ削られていく。謂れの無いことで礼を言われるのは私の最も苦手とすることである。ただの偶然でそうなっただけじゃん!!

私を見る周りからの目が生暖かい。関係無い医者さんにまでそんな視線を向けられる始末。何だこの公開処刑。

「……松田刑事、どうして不知火さんはあんなに捻くれちゃったの……?」

「普段から疑われ過ぎるせいで、疑われてないと逆に不安になる病気に罹ってんだよ」

「何その闇深さ……」

そう、私は誰かに感謝されるより忌まれる方が気が楽なのだ。特に警察に対してはその傾向が強い。しかし、だからって罪の無い誰かを不幸にしたいわけでもない。加減を

考えて嫌がらせしてるのさ！ そのせいかスコさんから闇やんでるとしよっちゅう称される。

「チクシヨウ……警察にお礼を言われるなんて屈辱の極みだ……」

「これは重症だ……」

「紛れもなく末期だね……」

「……これ以上用事が無いなら私は行くよ」

「あー！ 待つて待つて！」

病室から出ようとすれば、再び世良ちゃんに腕を掴まれて引き留められた。

「不知火さんさ、懐中電灯を持った時、犯人に手を撃たれてない？」

「ヴァツ」

江戸川くんから前置きをすっ飛ばして核心を突くようなことを言われてしまい、動揺して思わず変な声を漏らしてしまった。しまった、その問いを肯定したようなものだ。

すると再び周囲の人間の視線が生温くなる。ヤメロオ、そんな目で私を見るなア！

「不知火さんにそんなつもりは無かったかかもしれないけど、懐中電灯を拾い上げて蘭ちゃん達から犯人の気を引いた時、その明かりを目印に撃たれたんじゃないかな。それも、2発も」

「その内2発目はきつと、不知火さんが持った懐中電灯を掠めて鏡に命中した。犯人が

逃走した理由に、弾切れや鏡が壊れた時の大きな音だけじゃなくて、真つ暗な現場を照らすものが無くなったというのもあったんだ。だとしたら、不知火さんのその手の怪我は鏡のせいじゃなくて、掠めた弾丸そのものか、もしくは壊れて飛び散った懐中電灯の破片のせいなんじゃない？」

ふええ、探偵の推理力怖いよお。何を食べてたらそんなことまで想像できるんだか……。

何も答えられずじつと黙秘していたら、事態を静観していたお医者さんが苦笑しながら口を開いた。

「とりあえず、あなたの怪我をもう一度診させてもらえませんか？　もし銃弾と接触していたら、可能性はごく低いですが、鉛などの影響も考えられますので……」

「うぐう……」

そう言つて、気遣わしげに私の左手へ伸ばしてくるお医者さんの手を振り払うこともできず、何も言わずされるがままになることに。

新しい包帯を巻かれている最中、周りから相変わらず微笑ましい目で見られたのは、大変不本意であつた。

「よくも俺だけ除け者にしてくれたな」

『挨拶も無しにいきなり何言い出すんだ』

「例の17人を松田達の家に入れて行ったんだろう……よりにもよって、死んだばかりのお前も一緒に……!」

『あの頃の話か……』

「あいつらと会う前に俺を頼るといふ選択肢は無かったのか、ああ!」

『落ち着け』

「俺だけ……俺だけお前が生きてたこと知らずに、何年も……!」

『それに関しては本当にすまなかった』

「だったら答えろ。何故あいつらを巻き込んだ」

『あ……萩原が既にクシビと顔見知りで、あいつらからの信用も厚かったからな』

「その話は聞いた……俺の思っていた以上にとんでもない因縁があつたんだな。そもそも、どうして不知火さんは萩原と面識があつたんだ?」

『7年前の爆弾騒ぎがキツカケらしい』

「……3年前のと同じ犯の、あの事件か?」

『その時爆弾が設置されたマンションの空き部屋に無断で寝泊まりしていたクシビが、

現場に向かった爆発物処理班に発見されたんだ』

「その頃から既に家なき子だったのか……」

『避難させようとしても警察に捕まると思ったのか頑として部屋から出てこなくて、仕方なく爆弾の解体を急いだら、その頃にはもう影も形もなくなつてたという……当事者の爆発物処理班には心霊的な未解決事件として印象付けられていたみたいだ』

「警戒中の警察官だらけの中から突然消えたら、そうなるだろうな……」

『その数年後にテレビのニュースでクシビを見た萩原が、あの時の幽霊っ子だと気付いたんだ』

「それまでずっと幽霊だと思われていたあたりが彼女らしい……」

『実際そんな大人しいもんじゃないが』

「それな」

『そんな経緯もあつて、クシビと顔見知りだった萩原があいつに事件前の記憶があることを証明したおかげで、ようやくあの寮から出ることができたんだ』

「いやいや、だからどうしてそうなるんだ。警察の不祥事を証明できたなら、その後の待遇が良くなることも期待できただろう。どうしても出て行つてしまつたんだ」

『……分かつてないなあ、ゼロ』

「んん?」

『当時のあいつらは本当に極限状態だったんだ。あのまま寮に居続けた方が危なかった』

「……………どういうことだ？」

『今の面白おかしいサイコロじゃなくて……………それこそお前達公がガチで対応しなくちゃいけないような連中テロリストになっていたかもしれないんだぞ』

「えっ」

『考えてもみる。連日テレビやインターネットでは自分達の顔と名前が流れ放題。実情を何も知らないコメンテーターやコラムニストが書くのは無責任で一方的に哀れむだけの意見。それでいて、実際に受けているのは実験動物のような扱い。それが1年近くも続いた。お前だったら、正気を保てるか？』

「……………」

『あいつらの中で一番正気だったクシビですら、自由の女神の松明を警視庁に突き立てようとか、トチ狂ったことを言い出し始めたんだ。世間の関心を自分達からそらすためにな』

「……………」

『そんな状況を間近で見ってきたからこそ、いい加減に環境を変えてやらなくちゃまずいと思つて、俺が脱出案を出した。日本の警察は危うく犯罪史上最悪のテロリストを生む

ところだったんだぞ』

「」

『萩原や松田達を頼ったのも、寮を出てから事件前の記憶が蘇りつつあつて精神的に不安定になったあいつらを、説得するためにだ。クシビが事件前から利用していた廃墟や空き家も人目を避けて気持ちを落ち着かせるには良かったが、人との対話も必要だった。根気良く付き合ってくれた萩原達には本当に頭が上がらない』

「……爆弾つて、そういう意味だったのか」

『どういう例え方をしたんだあいつは。確かに、あの3人は世界を滅ぼしかねない爆弾を解体してくれたんだ。お前や赤井が別の方向から起爆したようなもんだけど』

「ングッフ」

『いや、俺はそれで良かったと思ってるぞ。感情の捌け口があった方が、あいつらも溜め込まずに済むからな』

「待って、待ってくれ……まだ続くのかアレ……」

『すまないがゼロ、俺は当分戻れそうにない。まだあいつらから目を離すわけにはいかないんだ。本当に危ういギリギリの一線を越えないよう、クシビ達に口出しできる今の立場は捨てきれない』

「それは事実上のDICE所属宣言か……!?!」

『潜入先がサイコロになっただけだ』

「そんなイージーモードな潜入捜査があつてたまるか!!」

『ところで、今夜はクシビに夕飯を奢ることになってるんだ。クシビと落ち着いて話したいと前々から言っていたし、あいつも食事中なら比較的機嫌が良いし……なんならお前も来るか?』

「ふっざけんなおま……行く!!!」

瞳の中の暗殺者 With V3 ⑥

—臨時学級裁判 開廷—

【モノクマ】

えー、ではでは……。

【オウマ コキチ】

そこもう皆知ってるから巻きで。

【モノクマ】

ですよー！

議長は毎度お馴染み、このボクが務めさせていただきます！

当然のことながらおしおきのルールはありません、思う存分議論してください！

【スコニヤン】

議長、俺の名前欄がバグってます。

【モノクマ】

あつ、そうそう。

天海くんが海外旅行で欠席なので、急遽スペシャルゲストにお越しいただきました！

【スコニヤン】

スルーか。

【シラヌイ クシビ】

ゲストはゲストでもいじられ役なんだねえ。

【スコニヤン】

とつくに本名明かしてるのに……。

そもそも裁判にゲスト制なんて当然無いし……。

【アカマツ カエデ】

裁判と言っても、討論会のようなものだからね。

【スコニヤン】

マスクを被ったら、そこはあの裁判場でしたって……その無駄に高い技術力には脱帽するよ。

【イルマ ミウ】

無駄なんかじゃねーし!?

【モノクマ】

テレビ電話よりも体感範囲をちよつぴり拡張した、言わばVR電話つてところですね

!

景色を投影しているだけなので、ログアウトもマスクやゴーグルを取るだけです。まーす。

【スコニヤン】

ゴーグル型があるならそっちの方がいい。

【ユメノ ヒミコ】

うむ、擬似的ではあるが、皆の顔が見えるように輪になって話し合うのは悪くないのう。

【サイハラ シュウイチ】

話題さえ殺伐としてなければね……。

【ゴクハラ ゴンタ】

皆、こんな真夜中に集まってくれてありがとう！

【ハルカワ マキ】

今回の議題ってやっぱりアレなの？

【ゴクハラ ゴンタ】

うん、警察官の連続銃殺事件の真犯人について皆と話がしたいんだ。

不知火さんが疑われてて大変なんだよ！

【モモタ カイト】

いつものことじゃねえか。

【シングウジ コレキヨ】

いつそ予想通りだね。

【シラヌイ クシビ】

この厚い信頼に感動。

【シロガネ ツムギ】

もう少し焦ろうよ……。

【モノクマ】

はいはい静粛にー。

まずは状況の確認から始めましょう。

忙しくて経緯が掴めてない人もいますので。

【ホシ リヨウマ】

ああ、頼む。

【チャバシラ テンコ】

よろしく願います！

【トウジヨウ キルミ】

新しく依頼が来たという話までは知ってるわ。

【シラヌイ クシビ】

そうそう。警察が信じられないから助けてくれて、友成さんからのね。

至急エクレアを買ってどこその病院に来いという訳の分からないメールが親友から送られてきて、一体何事かと目を疑ったが、そこにいた人物を見てすぐに事情を察した。

「そんなことならもつと良い店で良い物を買ってくれば良かったね」

「いいの。例え4個100円の安物でも萩原さんが買ってくれたつてだけで十分なの」
「クシビちゃんの判断基準が掴めない」

近場のスーパーで偶々安売りしていた4個セットのエクレアを前にして嬉しそうに笑う伝説の問題児こと、クシビちゃん。更には安室と名乗っている数年ぶりに見る懐かしい顔もいたので目を引ん？いてしまった。ちなみに向こうも俺と顔を合わせて白目を剥きそうになっていた。

俺がここに呼ばれた理由はすぐに分かった。何らかの原因で損ねた彼女の機嫌を取り持てと。つまりそういうことだろう。

確かに俺は、他の人間に比べればクシビちゃん達からの当たりはきつくない。その大人しきはまるで借りてきた猫……とまでは流石にいかないが、拾ってきた子猫のようだ。どこまでも純粹に慕ってくれるのだが、思わぬイタズラに手を焼かされることも少なくない。そんな関係だ。

少し離れたところでは、一課の刑事達とそこに交じる松田が真剣な表情で何かを話し合っている。おそらく事件についての今後の方針だろう。そこからまた別の場所では、未成年の自称探偵達がそれぞれ難しい顔で思案していた。

そんな各々が思考を巡らす光景を見て、ふと俺は目の前にいる彼女にこう話しかけた。

「……そう言えば、クシビちゃん達もかつては犯人探しのなのやってたよね」

「私はあるまり推理には参加しなかったけどねえ」

「クシビちゃんは殆ど裏方だったつけ。じゃあ聞いちやうけど、あの事件はどこまでがガチだった？ 演技ってことは、動機までは事前に決めてたんだらうけどさ」

被害者達が自ら世間から姿を眩ましたことで、話題を出すこと自体が暗黙のタブーになりつつあるダンガンロンパ事件。小声での会話にも関わらず、こちらへ一斉に意識が向けられてきたのはある意味流石だと思った。特に自称探偵君達の好奇心。

「話し合いで決められていたのは……萩原さんの言う通り犯行の動機と、クロ役と、被害

者役だけ。元々の黒幕役のツムちゃんが脚本を教えてくれたんだ。でも、どんな事件がどんなトリックで起こされるかは、クロ役と被害者役の間でしか話し合われなかった」

「それじゃあ、裁判での推理や議論は全てガチだったんだ」

「私が半端に関わった第1のコロシアイより後はそうだね。下手にトリックを知っていると演技だとバレる危険性があつたし」

「ダンガンロンパの運営の方もリアルなコロシアイを求めていたから、そこまで込み入った設定は作っていなかったんだろう。あの難解なトリックやそれを解き明かすまでの過程は全部彼らの自力によるものらしい。道理でサイコロが手強いわけだよ。才能や環境が作られたものだとしても、何かを成そうとする意思は彼ら自身のものだから。」

「あれが八百長無しの本気の捜査だったなんて、やっぱり凄いいよ」

「どう凄いのさ?」

「ほら、事件の資料は黒幕の都合が良いように情報を制限されたファイルだけだろ?」

あとは自力で証拠や証言を集めるだけ。指紋や血液の科学捜査もできない。人数や場所に限られていたけど、クロを間違えたら本当に全滅しかねない裁判を良く乗り越えたもんだな、って」

「……………」

改めて考えてみると、クシビちゃん達が潜り抜けたのは本当にドえらい修羅場だった。本物のコロシアイだとは知らなかったとは言え、世界中の人々から自分達の死をワクワクしながら望まれただけでも十分酷い。そうと自覚しながら決死の殺人劇を演じ、運営陣や視聴者を騙しきつた度胸も凄まじい。

で、現在はそれらの経験を警察弄りに全力で活かしているという……どうしてこう……もつとマシな方向に使えなかったのか。彼らにそうさせてしまったのが残念でない。

遣る瀬無さで溜息をついていると、クシビちゃんは俺の買ってきたエクレアのパックを開け、そのうち一つを手にとって一口齧った。

「裁判の話ついでに教えるけど、実はついさっき、投票結果が出たんだ」

「……うん？」

クシビちゃんが神妙な顔で何か言い出した。何の投票結果だった？

「満場一致であのお医者先生だった」

何のことか分からないが、凄いことを言ってるような気がする。

【サイハラ シュウイチ】

……クロは爆弾を使って停電を引き起こした？

【ゴクハラ ゴンタ】

うん、警察の人達がそう言ってたのを聞いたよ。

【シラヌイ クシビ】

婦警さんがお手洗いに行くのを見計らって配電盤を壊したみたい。

そのお手洗いにも点灯済みの懐中電灯が仕掛けてあつてさあ、それを目印に撃つてやろうって魂胆だったらしいね。

【ハルカワ マキ】

随分と手の込んだことをするんだね。

【サイハラ シュウイチ】

獄原くんがいた階は、停電にならなかったの？

【ゴクハラ ゴンタ】

いや、そんなことにはならなかったよ。

僕が事件を知ったのは警察の人達がホテルを封鎖し始めた時だったから、停電になったことすら知らなかったぐらいだし。

【サイハラ シュウイチ】

……。

【アカマツ カエデ】

うーん……。

【スコニャン】

被害者のいる階だけ停電にして、被害者が向かったトイレに罠を張っていた、と……。

【ヨナガ アンジー】

とつてもピンポイントだねー。

【ユメノ ヒミコ】

うむ、その通りじゃ。

計画的の一言に尽きる。

【オウマ コキチ】

まず行きずりの人間には無理な犯行だね。

偶々その日ホテルに來ただけの人間が、配電盤を吹っ飛ばすだけの爆弾や懐中電灯を持ってるわけないでしょ。

事前に被害者が参加するパーティの場所やスケジュールを知ってたとしか思えない。

【サイハラ シュウイチ】

それだけじゃないさ。

被害者がお手洗いに行くタイミングなんて、パーティー会場にいる人間にしか分からないじゃないか。

【シロガネ ツムギ】

てことは、事件直前まで獄原くんの総会に参加していた不知火さんにはやっぱり無理なんだよ。

【シラヌイ クシビ】

くっ……。

【キーボ】

どうして残念そうにするんですか、理解不能です。

【オウマ コキチ】

ロボットじゃなくても理解不能だよ。

【ホシ リョウマ】

じゃあ、クロはパーティーの参加者と見て間違いなさそうだな。

【スコニャン】

だが、ホテルにいた人間から硝煙反応が出なかったことと矛盾する。

【シラヌイ クシビ】

……逆に言えば、その硝煙さえ誤魔化せばどうにでもなるってことだよな。

【スコニヤン】

ん？

【シラヌイ クシビ】

証拠があるからクロなんじゃない、事件が起きたから証拠が残っただけなんだ。

証拠があるが無かるうが、クロが事件を起こしたという事実は無くならないんだよ。

【モモタ カイト】

そりゃそうだ。

【シラヌイ クシビ】

そう……犯行に使われた食器が綺麗さっぱり洗われてても、大事にとっておいたフルーツケーキが誰かさんに食われたという事実は、どう足掻いてたって消えやしないんだ……!!

【スコニヤン】

またその話になるの!?

ほ、本当に悪かったって、これ何度言えば良いんだよ!

【イルマ ミウ】

諦めろ、そいつの食い物への執念は半端ねーぞ。

特に甘味に関してはな。

【サイハラ シュウイチ】

え、えーつと、話を戻すね。

とりあえず、その計画性からして、クロはパーティーの参加者だと考えた方が自然だ。硝煙検査をすり抜けられる可能性はいくつか考えられるけど……判断材料が少ないから一旦保留にしよう。

【モノクマ】

クロはパーティーの参加者！

では、そこから更に絞っていきましよう！

まさか警察やオレ達だけでなく、不知火さん達までが犯人探しをしていたなんて、誰もが予想していなかった。彼女達が事件に関わるとしても、せいぜい警察を揶揄うぐらいだけとしか。だって実際そうだったし……。

「犯人があの場合にいたことは納得できた。しかし、何故風戸先生だと……？」

流星は命懸けのサスペンスドラマを演じきった才人達。彼らが本気で捜査に乗り出

せば、警察にも劣らない。

しかし意地の悪さは相変わらず。不知火さんは一番重要な犯人の名前だけ告げて、何故そんな結論が出たのかという根拠までは教えてくれなかった。どうしても自分の口を割りたいやお高めのエクレア寄越せと、素晴らしい悪役顔をした彼女からの二度目の要求に、刑事達は止むなく屈した。不知火さんの完全勝利である。莫大な金銭を要求されるより遙かに可愛らしいもんだが。

「不知火さんは仁野保さんって人、知ってる?」

「誰だそれ」

「あれ、知らないんだ。一連の事件はその仁野さんの事件が関わってるらしいんだけど、風戸先生はそれに当てはまらないんだよ」

「へえ、そうなのか。私達は飽くまで今その場で読み取れることでしか判断してないんだ。そういう背景は二の次かな。変な先入観があると視野が狭まるからさ」

誰が殺しても殺されてもおかしくないからね。

高木刑事が急遽デパートまで買いに走ったエクレアを口にしながら言った不知火さんのその言葉は、妙に重みがあった。

そうだ。この人達は誰がどんな理由で殺意を抱いてもおかしくない疑心暗鬼の極限状況で生き抜いたんだ。

「最初は私情も含めて警察官全員を疑ってた」

「む……」

目暮警部が唸る。不知火さんがそう言うのは個人的に警察機関を恨んでいる他、警察官があの会場に大勢いたからだろうが、Need not to know^{知る必要のないこと}案件としても間違っていない。

「もし警察の中にクロがいるなら、そいつらに警備されてる毛利ちゃん達が危ない。だから喧嘩売ることにしたんだよ」

「……は!? あ、あのタンバリンって、そういう意味だったんですか!?!」

衝撃走る。あの奇行は蘭達を守るためだった。おいマジか。

既にホテルでの一件で十分怪しまれている不知火さんが意識不明の被害者達に近づけば、警察官は決して無視できない。そうと分かっている、彼女はわざと警察官達を挑発した。

もし仮に真犯人が警備に立っていても、不知火さん本人や、彼女が起こす騒ぎで増員された他の警察官が、ランダムに病院内を歩き回るようになる。誰がいつ現場を通るか分からない状況は、犯人にとって強い抑制力になっただろう。犯人が警察官ではなく、本当に風戸先生だったとしても効果抜群だ。

……そう言えば不知火さん、才囚学園でも似たようなことしてないか。凶器を埋める

という名目で夜間の見廻りしてなかったか。

「でもまさか、それのおかげでクロを特定できるとは流石に思わなかったよ」
話の内容によっては警察の装備品にタンバリンが追加されそうだ（自棄）。

「実はそもそも私、クロに銃を向けられてもいないんだ」

「えええ」

【チャバシラ テンコ】

ど、どういふことですか!?

クロに鏡を撃たせようと考えたのが本当なら、尚更どうやって……?!

【シラヌイ クシビ】

いや、その……割と安直な考えで、鏡の方を照らしたんだよ。

【ホシ リヨウマ】

クロにじゃなくて、鏡に？

それでクロが鏡を撃ったってことは……。

【モモタ カイト】

そうか！

クロは鏡に映った不知火の像を、本物と間違えて咄嗟に撃つたんだ！

【トウジョウ キルミ】

鏡に光を当てたなら、反射して部屋中が薄明るくなるわ。

はつきり不知火さんの鏡像が見えたからこそ撃つてきたのかもしれないわね。

もしかしたら、クロに顔を見られたと思われているんじゃない？

【シラヌイ クシビ】

うーん、どうだろ……。

あの時はまだライトの直撃から立ち直ってなくて、腕で目の前を庇ってたから……。

【オウマ コキチ】

そういう余計なフラグを無意識で回避できるの、素直に羨ましく思うよ。

【アカマツ カエデ】

え、待って。

それじゃあ何で手を怪我したの？

直接撃たれたわけでもないし、鏡の破片を被るような位置にも立っていないんでしょ

？

【シラヌイ クシビ】

毛利ちゃん達に被さったコートを回収する時に、コートに残ってた破片で引っ掻いた。

【アカマツ カエデ】

あらら……。

【ヨナガ アンジー】

じゃあじゃあ、懐中電灯は？

撃たれて壊れたんじゃないんだよねー？

【シラヌイ クシビ】

鏡が割れる音にビビって反射的に光を消したんだ。

で、何故こんなことに巻き込まれたのかと思つたら無性に腹が立って、八つ当たりした。

【ヨナガ アンジー】

短気は損気だよ？

【サイハラ シュウイチ】

……………。

つくづくキミの才能には恐れ入るよ、おかげでクロを特定できるかもしれない。

【シラヌイ クシビ】

ファッ!?

【モモタ カイト】

本当か、終一!

【スコニヤン】

元超高校級怖えよ。

【モノクマ】

もうクロの特定ですか!?

これはスピーディな展開!

【オウマ コキチ】

もしかして、鏡に映った不知火ちゃんを利用してみるとか?

【サイハラ シュウイチ】

うん、そうだよ。

クロは不知火さんの鏡像に発砲するほど反応した。

彼女が懐中電灯を自分に向けてくると勘違いしたから。

その腕を狙ったのだとしたら……。

【ハルカワ マキ】

!

不知火、あんたどっちの手で懐中電灯を持った？

【シラヌイ クシビ】

えっと、右手だったはず。

【ユメノ ヒミコ】

では、鏡越しに見ていた犯人には左手で持ったと思われておるな。

もう片方の腕は顔を庇っておったのだから、違いが分かりやすかつた筈じゃ。

【サイハラ シュウイチ】

これから不知火さんには右手を意識した行動をとってもらいたいんだ。

何でもいいから、周りに右利きだと印象付けるようにしてほしい。

【オウマ コキチ】

で、そういう人達に自分が懐中電灯を持った手を撃たれたかもしれない話をちらほら

仄めかして、左手の方に一瞬でも意識や違和感を向けた唯一の人間がクロってことか。

【シラヌイ クシビ】

うわあ、責任重大だ……了解。

【スコニャン】

元超高校級怖えよ。

【モノクマ】

では、投票タイムはその結果の後ですね！

それまで一旦解散しましょうか！

— 臨時学級裁判 中斷 —

「そしたら、メイインターゲットだった警察官じゃなくて、あのお医者先生がモロに左手を気にしてきたんだ。予想外のタイミングで手の話をされた時は焦ったけど、結果オーライかな」

風戸先生は不知火さんの手が撃たれたと聞いて、自然な流れで彼女の左手の方へ手を伸ばした。あの時点で彼が犯人だと確信していたのか。その時の不知火さんは動揺をおくびにも出さずに不機嫌そうにしていたけど、あれも演技だったのかと思うといつそ寒気がする。本当にDICEヤバイ、真意が読めない。

一方刑事さん達は、確かにタンバリンは右手持ちだったと唸りっぱなしである。ただの嫌がらせかと思つたら真面目な救助と捜査を兼ねた活動だと知らされ、非常に複雑な胸中なのだろう。

「……ねえクシビちゃん。警察官を疑つてたなら、犯人が医師だと知って驚かなかつた

「？ 考え直そうとは思わなかったの？」

さつきから力無い苦笑しかしていない萩原さんがそう訊ねると、不知火さんはクリムで汚れた手をおしぼりで拭いながら答えた。

「最初はビツクリしたけど、よくよく考えてみたら警察官がクロである可能性は低かったんだよね」

「え、そうなの？」

「だってさ、クロは爆弾を持ってたんだぞ。それなのに実際の凶器は爆弾より殺傷力が劣る拳銃だった。あそこまで念入りに計画しといて不自然じゃね？」

言われてみればそうかもしれない。

「無関係な人間を巻き込みたくなかったんじゃないでしょうか？ 命を救う医師という立場でもありますし……」

「毛利ちゃんや私にも殺意を向けてるから、その線は薄いかなあ」

「……それなら、あなたはどう思ったんです？」

「拳銃を持っていると聞いて思い浮かぶ人間、つまり警察の関係者に濡れ衣を着せようとしていたように思えた」

質問した安室さんがヒュツと息を飲む。その一言に怯んだのはボクだけじゃない。

なんか、もう、流石の悪意と言うか、普通とは考え方が違うなあって。

「実際に犯人と対峙してみても分かった。アレは世間で騒がれているような、私のように警察に恨みを持って犯行に及ぶような感情的な人間じゃない。偶々排除すべき対象が警察だったから殺した……そんな冷徹さを感じた。第1にその目的を達成しつつも、自分が疑われないように策を巡らす狡猾な奴。まあ、飽くまで私の主観だけど」

「いや、”悪意”の不知火さんだからこそ説得力がある言葉だ。」

今思えば、些細な犯罪でも無意識で潰す彼女が、連続殺人を起こす凶悪な人間に対して反応しないわけが無かった。目の前で起きたなら尚更だ。

そして、不知火さんはニヤリと底意地の悪い笑顔をこちらに向けてきた。

「でもねえ……この話、客観的な証拠が何一つとして無いんだよ。私が右手で懐中電灯を持ったことは指紋で分かるだろうし、お医者先生が私の左手を気にしたことも知ってるだろうけど、そもそも私が鏡を照らしたことなんて私以外に誰にも証明できないし」

「あつ……」

「証拠が無ければ動けない警察は、この話でクロを突き止めることはできないんだよ。せいぜい自力でクロを探してね。エクレア損のくたびれ儲け、お疲れ様あ！」

悪魔か。

—臨時学級裁判 再開—

【シラヌイ クシビ】

やっべえのちよつと皆聞いて。

撃たれたかもしれない疑惑醸したら、パーティーで会った誼で毛利ちゃんの治療医やつてる人が反応したんだけど。

【モノクマ】

はい投票タイム!!

瞳の中の暗殺者 w i t h V 3 E N D

確かに証拠は無い。しかし、無視するにはあまりにも理屈が通った話だった。しかもロシアイ阻止に尽力する彼らが真剣に話し合った末の結論であるなら、ますます真実である可能性が高い。

だが、警察を公的に動かすために必要な、万人を納得させられる物的な証拠は、どこをどう見ても無い。頭痛が痛い。酷い話だ。

結局不知火さんの胃袋を満足させるだけで終わってしまった。彼女のご機嫌を真つ直ぐにできただけマシってか、チクシヨウめ。

やりたい放題するだけした不知火さんが去った後に残されたのは渋い表情をする面々。信頼すべき蘭さん達の主治医に恐ろしい疑惑が持ち上がったのだから仕方ない。

病院を移すべきか。いや、容疑が固まってもいないのにそれはおかしい。不安定な蘭さんのことを考えれば無闇に環境を変えるべきではない。

毛利さんや刑事達が心底困り果てたように話し合っていると、俯いたコナン君が眼鏡をキラリときらめかせてこう言った。

「……こうなったらプロジェクト・ドクターNしかないよ、おじさん」

「この子は急に何を言い出すの。」

「ドクターN……ああ、そういうことか!」

あの謎の単語で何かを理解した毛利さんに思わず呆気に取られる。えっ、何のことか分からない俺の方がおかしいのか。

「警部殿、証拠が無いなら犯人の方から出させてやればいいんですよ!」

「ど、どういうことだね?」

「皆で知らないフリをするんだ!」

「???」

知らないフリって、それDICEの十八番じゃなかったか。

「毛利先生? 何の話をしているんですか?」

「少し前にも似たようなことがあったんだよ。この上なく怪しい奴に自分から尻尾を出させるために、皆で一芝居打ったんだ。その提案をしてくれたのも不知火さんだったなあ」

「その時一緒に協力したのが成実先生なるみって人だから、作戦名がプロジェクト・ドクターNになったんだよ。知らないフリ作戦だと露骨過ぎるからさ」

俺の知らないところでそんな接点が。後で調べてみよう。

「知らないフリって具体的にどうすんだ、ポーズ」

「それとなく犯人（仮）に揺さぶりをかけるんだよ。成実なるみ先生の時は、犯人が殺した人の幽霊を信じ込むフリで怖がらせたんだ」

「犯人は蘭の記憶が戻ることを恐れている。だったら、入れ替わり立ち替わりで誰かが必ず蘭の側において、犯人に付け入られる隙を徹底的に無くすんだ。記憶が戻るまでに蘭を警察から引き？がしたい犯人は、いずれ強硬手段に出てボロを出す」

「それは先生……蘭さんを囮に使うということですか？」

「囮だと？ 馬鹿言うな。現状で犯人が誰なのかはつきり分かってないんだから、蘭を守ることに専念するだけだ。その警戒の対象に風戸先生も入るっただけでな」

……毛利さんがいつになく真剣マジで本気マジだ。これはお世辞抜きで頼もしい。やはり毛利さんには、推理ではなく、地道に情報を得て確実に犯人を追い詰めていく警察官のやり方が性に合っている。

確かにこちらがやるのは蘭さんを守ることだけ。当然の行動だ。ただし、誰を警戒しているのかを惚けた状態で。犯人が風戸先生であろうとなかろうと、いつになるかわからないタイムリミットがある犯人を炙り出すには有効だろう。

まさにあの言葉通りだな、松田。

「焦りこそ最大のトラップ」だって、不知火さんが警察の人に教えてもらったんだってさー！」

「ッグ」

「ンンツ」

「ブツハ」

正に今脳裏に浮かんでいた文句がコナン君の口から飛び出した。露骨に反応する同期3人。

「……おい待て。確かにそう教えたが、仕掛ける側で言ったつもりじゃねえぞ」

「えっ、教えたの松田刑事だったの？」

萩原は腹を抱え、伊達は膝を叩き、松田は苦々しげに眉をひそめた。俺も明後日の方向を向いて口元がニヤけるのを誤魔化した。

まさか犯人側の思考で捉えられていたとは報われない奴だ。おそらくサイコロ活動で存分に活かされていると思うぞ（白目）。

まあ、何はともあれ、公的には使えないものの、DICE視点の見解という貴重な手がかりを得られた。警察の威信をかけた捜査という大きな課題ばかりに意識が向き、見えてなかった可能性を皮肉交じりにでも指摘されたのは良かったと思う。何だかんだ言いつつ根は良い奴らなんだよ。残念なほど捻くれ過ぎているが。

「……では、蘭君の警護は引き続き千葉君と高木君の他、私服の者も配置しよう」
「部署は関係無いけど、俺達もできる限り注意してみるよ」

「我々は、新たに風戸先生への調査も開始します。仁野保も、風戸先生と同じく医師でした。もしかしたら……彼女達の見立ては、強ち的外れではないのかもしれないかもれません」

「よろしくお願ひします！」

こうして強力な布陣を敷いた上で、コナン君曰くのプロジェクト・ドクターNは始動した。

しかし、まだ俺と不知火さんとの戦いは終わっていない。この後には、残るもう一人の同期兼幼馴染との約束があるのだ。

「へーい到着」

「ありがとう、代金は後で払うよ。ヒ……フクロウも待たせて悪かった。すぐに行く予定だったんだが、急な呼び出しを食らって……誰だお前」

「俺だよ俺」

「出たな妖怪猫頭……！」

「こないだアップデートしてもらって、外側の表面に別人の顔を透過投影できるようになったんだ。触られない限りバレないぜ」

「……そこまで出来たらデザインがネコである必要性は無いんじゃないか？」

「俺もそう思う」

「私に需要がある」

「そろそろ勘弁してくれ」

「……ところで、この店は本当に安全なのか？ 見たところ居酒屋の個室のようだが

……」

「カリコリ」

「大きな声で言えないが……この店員や客層は、クシビ達のような極悪人ではないけど単なる一般市民と呼ぶには難しい……色々と事情が込み入った人間ばかりなんだ。本来であればお前のような立場は敬遠されるが……まあ、黙っておけば平気だろ。目や耳に関してもそこらの店よりしっかり対策されている。俺も何度か来てるぐらいだから」

「なるほど、そっち方面のツテか」

「カリコリ」

「警察沙汰にさえならなければ、誰がこようと何が起きようと詮索はされない。さつきのお前のようにいつの間にか人が増えたり減ったりしても特に気にされないぞ」

「それはそれで不安になる」

「……で、さつきから不知火さんは何を食べてるんだ」

「鶏軟骨の唐揚げ」カリコリ

「それはまた……」

「……俺は今、ちよつと感動している」

「何で？」

「不知火さんと同じ空間にいて、何も嫌味を言われなんて初めてだ。本当に食事中は機嫌良いんだな」

「そりゃ食うことに集中してるから」

「暗に無視されてると言われたように感じたがきつと気のせいだ」

「そうそう気のせい気のせい」

「不知火さんもお酒飲むのか！」

「好き好んで飲むことは滅多に無いけどな」

「あの苦さが好きになれない」

「そこが良いのに、お子ちゃま舌だなあ。だからポア口でもコーヒーを頼んでくれないのか」

「今日のドンペリ押しが強い……」

「ああ、今夜は酒の力を借りて絡むつもりだから覚悟してくれ。君と話したいことが山程ある」

「めんどくせえ」

「だから俺はロリコンでもホストでもないんだ。いい加減に分かってくれ」

「……ホストじゃないの？」

「そうだ！ 俺は決して君の思ってるような不誠実な男じゃない！」

「男……ホストじゃ、ないだと……？」

「ああ、ようやく理解してくれたか！」

「馬鹿な……私としたことが……そんな基本的なことを勘違いしていたとは……」

「全く、どれだけ勘違いを拗らせて……」

「……こういうホステスさんもいるんだねえ……」

「ちがう！！！！！！」

「2人とも酔ってんなあ」

*

*

*

目の据わったクシビが再び黙々とつまみを口に運ぶパターンに突入した頃、新たに男装疑惑を搭載された幼馴染が突つ伏していた顔を上げ、そう言えばと口を開いた。

「……実はここに来る直前に食らった呼び出し、組織の方の用事だったんだ」

「ゴフツ」

まるでコンビニでお茶買ってきたぐらいの気軽さでポロツと機密を口にした幼馴染に、思わず飲みかけの日本酒に噎せかけた。

いや、この場においては誰かに聞かれる危険は無いのだが。

「そし……は？」

「いつも通りベルモットの足にされて集合場所に行けば、そこでジンからシエリーについて調べ直せと言われた」

「フグツ」

おいどうしてシエリーの名前が出てくるんだ。

「シエ、シエリーって、確か……」

「……ああ。エレーナ先生の……」

すまん。沈んでいるところ悪いが、俺は彼女が生きていることを知っている。何らかの原因で体が小さくなった彼女が、割とお前の身近なところに住んでいることも。

組織はミステリートレーンで彼女を爆殺しようとしたが、その策略は変装した赤井や小さな探偵に見抜かれ、別件で居合わせただけのクシビヤ王馬達、そして変幻自在の怪盗キッドにも翻弄され、見事に潰された。

結局、あの件でのシエリーの生死は有耶無耶になったと聞いたが……。

「何故今更彼女を調べろなんて……」

「知るか。いつもの勘だとさ」

あいつの勘の鋭さ本当に怖い。

もしかして、組織の中にシエリーの体が縮んだことを知っている奴がいるのか？ そいつがシエリーの生存をジンにそれとなく仄めかしたという可能性も……いや、それなら曖昧にぼかさず周知しておけば良いはず。ゼロの話によれば、組織の中では一般的にシエリーは死んだとされているらしい。今回の話もジンの独断だと言う。

うーん……判断に困る……。

「それで、改めてシエリーの基本的な情報を整理してみただよ。年齢とか、身体的なデータとか。それを見てたら、もし彼女の周りが真つ当な環境だったなら、ポアロで会うような女子高生達と同じように高校へ通ってるはずだったんだって……もう、無性に遣る瀬無くて……」

今は仲の良い友人達と小学校へ通ってるぞ。

「それで……優れた才能を持つとろくなことにならないんですねと皮肉を言ったら、妙にベルモットが居心地悪そうに反応して」

「うん」

「……その反応が気になって他の幹部に探りを入れてみたら、その昔、シエリーと同じように優れた才能を持つ高校生の集団を引き込もうと手を出そうとしたらとんでもないしっぺ返しをくらって、組織内でも触れてはいけないタブーになっていると、揃って凄いい形相で教えられた。ああ、お前がNOCだとバレた頃の話だそうぞ」

「……………へえー」

凄く身に覚えがある話で返事がしづらい。

ゼロが言うにはその高校生集団、複数人を演じて目ぼしい才能を持つ高校生の身元を引き取りにきたベルモットの変装を悉く看破するどころか、役によって分けていた潜伏先まで全て特定するだけに留まらず、管理の厳しかったそこに痕跡を残さず侵入し、彼女の素顔と同じ金髪碧眼の西洋人形を置いていったらしい。気配無く素性を一方的に暴かれたと思ったベルモットは酷く怯えたとかさうでないとか。

最も優秀な諜報員を呆気なく返り討ちにされた組織は、今後その高校生集団には何があつても近づくなという鉄の掟を作った。まあ、それも当然だろう。問答無用で素顔から実家まであつという間に丸裸にするような奴らなんて、善良な市民の皮を被って人に

は言えない裏稼業をしている人間からすれば天敵の他ならない。

報復して回復できるメンツと、報復のために近づいて更に情報を暴かれることになるリスクを比べた結果、リスクの方が勝り、とにかく絶対に近づくなという話になったの
だろう。

多分、その結論に至るまで、ベルモットの他にもプライバシーが犠牲になった奴が大勢いるに違いない。高校生にメンツを潰されたあいつらが大人しく身を引くなんて、相当痛い目に遭わされたとしか思えない。

例えば……そう、各国に散らした他の構成員までもが纏めて重いPTSDを患い、多くの伝手が使い物にならなくなったとか。

「こちらが覗き込めば、必ずそれ以上に覗き返してくる……ジンからは人の欲望と社会の闇が生んだ深淵^{アビス}とか真顔で呼ばれてて危うく腹筋が死にそうになった」

その深淵^{アビス}(実行犯)は今、俺の隣でたこわさびを一心不乱にその深みへ落としていた。
ひとまず機嫌は直してくれたようだ、良かった。

「……メリーゴーランドで精神科送りになったジャーナリスト達の経歴を洗い直すことになったよ。全く、思わぬ切り口があったもんだ」

「そ、そうか」

世界中にあらゆるコネクションを持つ組織がどのように根を張り巡らせたか。その

過程の一端でも知ることができれば儲け物だと、ほろ酔いの疲れ気味な幼馴染は刺身を口にしながらそう言った。

ちなみにこの話のオチは、組織が血眼で探っているDICEの正体が、奴らが全力で接触を避けている例の17人であるところだ。

あの怒涛の事件翌日から2日後、蘭は退院することになった。記憶はまだ戻っていない。

先入観があると視野が狭まると不知火さんは言ったが、正にその通りだ。証拠も無いのに犯人だと決めつけるべきではないのに、すっかりその気になってしまっている。疑心暗鬼つて辛い、一度疑い始めると何もかも信じられなくなってくる。主治医なんて無条件で信用できる人なのに、その人が怪しいだなんて不知火さんが言ったもんだから。

しかし、蘭が退院してから2日経ったこの日。早くも作戦の効果が現れた。

「……今日の昼、風戸先生の姿が米花駅で確認されたそうだ」

気分転換になればと妃先生に連れられ、銀座でのショッピングで遊び疲れた蘭が眠っ

たのを確認したおっちゃん、声をひそめてオレにそう言ってきた。

「昼の米花駅って……シヨッピングへ向かう蘭がいたところじゃないか！」

「か、風戸先生が？ どうしてそんなところに？」

「どうやら英理が蘭を外へ連れ出しても良いかと電話をしたらしい。おそらく、それを受けてな……」

妃先生には成実先生知らないフリ作戦のことは伝えていない。全員が演技をするのは流石に不自然だからだ。だから、純粹に風戸先生を信用している妃先生が、蘭の容体を思つて主治医に確認するのは当然のことだった。きっとオレやおっちゃんだって、何も知らなければそうしていたかもしれない。

おっちゃんが目暮警部からの電話で聞いた話によると、銀座へ向かう道中の蘭の周りで、人目を気にするような素振りの風戸先生の姿が頻繁に見られたらしい。表立つて蘭の警護に気合を入れていた高木刑事の他、少し離れたところで陰ながら見張っていた伊達刑事や松田刑事も目撃したと言うのだから、間違いない。

「まだ確信するのは早い……今日は風戸先生の通常勤務の日だったそうさ。それを理由をつけて途中で早退しているらしい」

「う、うーん……」

疑心暗鬼中のオレからすれば、もうほぼクロであると決定したようなもんだ。あーい

やいやだから証拠が足りないんだってば、落ち着けオレ。蘭を心配して様子を見にきただけかもしれないだろ（苦し紛れ）。

「疑わしいからこそ、確固たる証拠を見つけなくちゃいけねえんだ。今日暮警部達が仁野保の件も含めて調べてくれている。だから、いいか、絶対に余計なことするんじゃないぞ。絶対にだ」

それはフリかおっちゃん。

なんて冗談はさておき、ここは言われた通り大人しくしておくべきなんだろうと思う。

……こう言うのもアレだが、普段であれば周りの大人達だけに任せきるのがちよっと心許なく感じてしまい、つい先走っては無茶なことをしてしまう。

しかし、今回ばかりは事情が全く違う。散々やりたい放題した不知火さんに焚きつけられたせいも、刑事さん達がとんでもなく頼もしくなっている。なんだこのかつてない安心感。

しかしそれでも何か、蘭のために自分ができることはないか。布団の中で模索しているうちに、オレは眠りに落ちていた。

翌日、嵐は再来した。

「あ、あなたが、友成誠さん!？」

「はい、初めまして毛利先生」

おじさまお元気ー? と、こないだの意地悪さや不機嫌さが嘘のように底抜けに明るく毛利探偵事務所へ突如襲撃してきた不知火さんが連れてきたのは、あろうことか現在の警察がその居場所を捜索している最中の友成誠さんだった。

彼は、1年前の全てのきつかけとなった仁野保の変死事件、その捜査中に亡くなった友成刑事の息子さんだ。友成刑事が発作を起こしたのが張り込みの最中で、発作を起こした本人に救急車を呼ぶことを拒否され、そのまま亡くなってしまったという経緯がある。そのせいで誠さんは救急車を呼ばなかった警察に不信感を抱き、その恨みからこの度の警察官連続銃殺事件に関わっているのではと疑われていた。

そんな彼が、不知火さんと一緒に現れた理由とは……。

「……なるほど、あなたは事件現場に誘導されていただけなんですか」

友成誠さんは、真犯人に利用されていた。

男性の声で彼の元に電話があり、父親の死の真相を教えるから来てほしいと呼び出された先で奈良沢刑事が、そして同じように2つ目の電話でも、呼び出された先で芝刑事が殺害されてしまったのだと。

そして佐藤刑事の事件前には、彼女の名を名乗る女性の声で、あのホテルに来なければ

ば殺人容疑で逮捕すると脅されたらしい。オレが会場で見たのは、その指示に渋々従いやつて来た彼の姿だったようだ。

「……3つ目の電話も罠だと思っただのですが、電話の相手が刑事だと名乗っていたので、仕方なく……」

だから彼は不知火さん達を、DICEに助けを求めたんだ。盛大に警察に喧嘩を売りながらも、DICEは人助けに余念がない。だからきつと彼らなら自分を助けてくれると、藁にもすがる思いで。

……警察が信用できないという状況の苦しさは、不知火さん達にも痛いほど共感できただけだ。DICEが手助けする動機に十分なり得る。

不知火さんがあれだけ大っぴらに警察と反目しつつも真相解明に向けて行動しているのは、真犯人に濡れ衣を着せられそうになっていた友成誠さんを庇うためでもあったのか。意識してか否かはともかく、結果としてそうだった。

ところで……そもそもDICEの活動って、依頼制なの？ 依頼できるもんなの？ 「分かりました！ 真犯人を捕まえるのも、あなたへの疑いを晴らすのも、この名探偵毛利小五郎にお任せください！」

「よ、よろしくお願ひします……！」

警察を頼れないから有名な探偵である自分を頼るしかなかった。そう言われて気を

良くしたおっちゃんが大口を叩く。いやつつても、ここまで重大な証言や証拠が揃ったらもう殆ど決まったようなもんだろ。

その後、友成誠さんはおっちゃんに付き添われて警察署へ向かい、証言を目暮警部達に伝えた。その証言にあった不審な電話や、犯人が友成誠さんの警察不信を知り得る経路を調べた結果……全てが風戸先生に繋がっていたことが判明した。

射殺されてしまった奈良沢刑事はその生前、友成刑事が亡くなったことで精神的なショックを受け、そのカウンセリングを担当していたのが他でもない風戸先生だった。恐らく風戸先生は、自分が受け持つ患者である奈良沢刑事から全ての事情を知ったのだろう。

仁野保の事件が再捜査されると知り、その担当刑事を狙ったのだとしたら、仁野保を殺害したのも風戸先生である可能性が高い。今後はその関連性についても改めて捜査していくそうだ。

僅かな状況証拠から早々に犯人を割り出した不知火さん達も凄いが、彼らに触発された警察の勢いも凄い。

そして、蘭が記憶の手がかりを求めてトロピカルランドに行きたいと言い出したその日。未だ何も知らされていない妃先生からその旨を伝えられた風戸先生が、蘭を襲撃するため数々の凶器を用意しているところへ警部達が偶然を装って訪問し、ひとまず銃

刀法違反の容疑で彼の身柄は拘束されることになったそうだ。本命である連続銃殺事件についても、追いつ追いつ証拠を突きつけて問い詰めるのだと。

知らないフリで犯人を焦らせる作戦は、こうして大成功を収めたのであった。

蘭の記憶は、トロピカルランドを見て回っているうちにいつの間にか戻っていた。オレ（工藤新一）と一緒に見た噴水の思い出を楽しそうに語られて、その懐かしむ顔は見ているこっちがむず痒くなるほど穏やかなもので。

……一刻も早く、元の体に戻らなくちやな。

蘭ちゃんの記憶が戻ったと聞いて、早速彼女に会いに毛利探偵事務所へ行つたボクは、その帰りに階下にある喫茶店で願つても無いチャンスに遭遇した。

なんと、不知火さんと萩原さんが並んで座っているではないか！

不知火さん……延いてはかの超高校級達を味方につけたいボクにとつて、彼女が最も心を許している萩原さんと一緒にいる現場なんてこの上なく都合が良い。ボクは不知火さんからは特別仲が良いとも悪いとも思われていない。機嫌の良い今が距離を縮めるチャンスだ。

「不知火さん、こないだぶり！」

「世良ちゃんだあ。毛利ちゃんに会いに来たの？」

ドアベルを鳴らして注意を引き、彼女に声をかけながら隣のカウンター席に陣取る。梓さんもボクと不知火さんが顔見知りだと知っているの、勝手に席を選んでも特に何も言っていない。

「うん、その帰りなんだ。不知火さんも蘭ちゃんのお見舞い帰り？」

「いや、萩原さんにデートに誘われたの」

結構ドライだなこの人。

と思つたところで、サラツと言われた単語の重大さを一拍遅れて理解する。

「つて、デート!?!」

「ああ、深い意味は無いよ。同僚にこの店を教えてもらったから、ついでにクシビちゃんを誘っただけ。俺がこの店に誘ったと言うより、俺がこの店に来るための口実になつてもらつたと言う方が正しいかな」

「お菓子を積まれればいくらでも都合の良い女を演じる……それが私」

不知火さんがティラミスを食べながらキメ顔で何か言っていた。

ニコニコと笑つてボクの質問に答えてくれた萩原さんは、同じくニコニコと笑う安室さんの方に視線を向けた。そんな2人を不知火さんが無言で交互に見つめている。主

に安室さんの方を。

そんな彼女の視線の動きに気付いた安室さんは、口元を引き攣らせながらこう言った。

「……あの……不知火さん、何を想像しているかは敢えて言いませんが、決してそんなことはあり得ませんからね……?」

「心配するな、邪魔はしない」

「ホントにやめてくださいいホントに」

不知火さんの中で何らかの革命が起きたらしい。安室さんに対する態度が妙に優しくなっていた。あれだけ毛嫌いしていたのが劇的に改善されているが、当の安室さんの方は全く嬉しくなさそうだった。

「……だよねえ、世の中には世良ちゃんのようにカッコいい女の子もいるんだし……」

カッコいいと言われて嬉しいけど、何かが致命的に食い違っている気がする。

まあ、それはさておきまして、だ。

「不知火さんの交友関係って意外と広いよね。好きじゃない警察にも萩原さん達みたいな知り合いがいるみたいだしさ」

「他にもお巡りさんの知り合いはいるよ」

「へえ……どんな人？」

「全体的にカッチリしてる人」

表現が大雑把で全く参考にならない。もしかして口止めされているとか？ ボンヤリしてるように見えて隙が無い人だし、あり得そう……。

「じゃあ、探偵の知り合いはいないの？」

その質問を口にした途端、ほんの少しだけこの場の空気が変わった気がした。

探偵^{同業}だからか、それとも不知火さんの友人を探ったからか、安室さんと萩原さんがこちらに意識を向けてきている。

「ほら、蘭ちゃんの事件を話し合った人の中にいそうだと思つてさ」

「ああー……うーん、いるにはいるけど、極力目立ちたがらない奴だよ」

ママから断片的な話を聞いて、当時のことを思い出した。不知火さん達が参加させられたダンガンロンパでの探偵役は、最原終一。奇しくも秀兄と同じ読みの名前を持つ人だ。実はボクも直に会ったことがあるけど、その時は不知火さん達の事情なんて知らなくて、単なる彼女の友人としか捉えていなかった。惜しいことしたなあ。

思い返してみれば、彼は最初から最後まで探偵だなんて一言も名乗らなかつた。今回の蘭ちゃんの事件を考えてみると、あの時の事件を解決する手助けをしたのは彼だと考えた方が自然かもしれない。目立ちたくないというのは本当のようだ。

「できれば事務所からも出たくない引きこもり気質でね……えっと、何だっけ、座椅子探

偵つてやつ」

「……安楽椅子探偵のことかな」

「それだそれ」

限界まで背凭れを倒してめちやくちや寛いでる彼の姿を想像してしまった。

「へえ……安楽椅子探偵つて現場には行かないから、普通の推理より不利になるんだよ。そんなに頭が良いんだね」

「専門は人探しや素行調査だから、そこまで難解な作業は求められないんだよ」

「あ、そう……」

「本格的な捜査が必要な時は、部屋から出ないあいつに代わって私が手伝うこともある」

「えっ、どんな風に？」

「リアルタイムにオペレートされる感じで」

殺人には関わらないのにやつてゐることはまるつきり秘密組織だった。インカム使つて指示してそう。

その他にも色々と不知火さんの友達について質問し続けたけど……ヤバイね。何がヤバイつて、不知火さんたら訊ねたらその分教えてくれるんだよ。流石に個人を特定できるようなことまでは言わないけど、ボクのようにある程度の予備知識がある人には誰のことは分かる。現に隣に座る萩原さんなんか、不知火さん曰くの”イタズラ好きで嘘

つき”な友人の話を苦笑しながら聞いていた。

こんなな大つぴらな癖して、詳しい実態は掴ませようとしない。はぐらかすのが上手いと言うより、最低限のラインを決めたら、決してそれを破らないように普段の行動から調整する人だ。

……うん、この人なら、大丈夫かな。

「そんなに広い人脈を持つてる不知火さんにこそ聞きたいんだけどさ」

「ん？」

誰にも言わないでね、と前置きして、ボクは彼女の耳の周りに手を添えて、他の誰にも聞こえないように細心の注意を払い、こう訊ねた。

「……成人が子供の体に若返ったって話、聞いたことある？」

数秒その姿勢で固まった後、体を離してボクの顔を見返してきた彼女の顔は、見事にキョトンとしていた。

「……残念だけど無いなあ。ゴメンね」

聞き耳を立てる周りには何の質問か分からない程度の言葉で返してくれた。期待していた返事ではなかったけど、この人は些細なことでも約束を守ってくれるんだと安心する。

「まあでも、全くあり得ない話ではないんじゃないかな。世良ちゃんの周りにそういう

人がいるなら、そうなんだと思うよ」

「し、信じてくれるの?」

「世の中何が起きてても不思議じゃない。寝起きで絶対に爆死してはいけない機動隊24時に巻き込まれたりすることだつてあるんだから」

「クシビちゃん、クシビちゃん、そんな俺達が頻繁に爆死してそうな言い方止めて……もうあんな油断する真似は二度としないつて誓つたんだから……」

思わぬ流れ弾をくらつた萩原さんが震える声で抗議するのを横目に、ボクは不知火さんの手を取つた。

「ボク、もつと不知火さんと仲良くなりたい」

「私と仲良くしたいとな」

「うん、今よりずつと! お互いに秘密を打ち明けられるような!」

ママのこと云々を抜きにして、この人とは打算の無い関係になりたい。真剣な思いで手を握りしめ、彼女の目を見つめる。まるで告白みたいだ。

「あー……その辺で止めた方が良いよ」

と、そこで何故か萩原さんがやんわりと話を遮つてきた。目を泳がせながら言いにくそうに忠告してくる。

まさか萩原さん、ボクにとられまいと……?」

「あんまりクシビちゃんを本気にさせると……その、大変なことになるから。色々」と
あ、何か違うみたい。

萩原さんの真意は、この直後に知ることになる。

「世良ちゃんは私と絆を深めたいの？」

「そう！」

頬を薄く赤らめて嬉しそうにする不知火さんに頷き返せば、彼女は続けてこう言った。

「そっかあ。じゃあ、パンツ用意しておくね！」

「待って
?????」

超高校級な人達の常識は、ボクには到底測れるものじゃなかったようだ。

瞳の中の暗殺者 with V3

絶対にコロシアイしてはいけない米花町24時

「アウト多過ぎじゃね？」

THE END

不知火ちゃんの不思議な話

【レジ袋騒動】

最近、不知火さんのポアロでの出没率が高くなった。

元々は、フラッシュメモリやCD-ROMなど、メールや電話では送れない物質的な情報媒体を景ヒトとの間でやりとりするため、そのお使いとして彼女をポアロに呼んでいたのだが、そのうち彼女自身が喫茶店でまったりするのが好きになったようで、特に用事も無く来店するようになったのだ。

今日もそんな気分らしい。

昼間でも日光が当たらない奥の席で、ケーキとココアを味わいながらフワフワとぼんやりしていた。本を読むでもなく、携帯電話をいじるでもなく、ただうつらうつらと店内に流れるBGMに耳を傾けていた。

とても穏やかな時間だった。

「あつ、不知火さんだ」

そろそろ陽が傾こうかという頃、高木刑事を伴った少年探偵団がポアロにやって来た。

「やあ探偵キッズ。元気そうだねえ」

「もう不知火さん聞いてくださいよ、ボク達下校中に……」

高木刑事を連れてくる時点でそれとなく察していたが、既に今日もあの子達は事件に遭遇したらしい。何でこう毎度毎度……。

ふと目が合った高木刑事に軽く会釈をすれば、苦笑いを返された。今日も彼は子供達の保護者役兼財布役のようである。

「——で、無事に解決したんです！」

「すんごいね」

「オレ達少年探偵団だからな！」

「サイハラくんより修羅場経験してる子供達ってどうなんだろうね……」

サイハラくん——もとい、最原終一。元“超高校級の探偵”で、現在は個人で興信所を運営しているとか。

「最原さんって、確か探偵ですよね？　どんな事件を解決したことがあるんですか？」

「事件とかには滅多に関わらんよあいつは。主に素行調査とかが専門だから」

「なーんだ、つまんねえの」

いや、一般的な探偵はそういうものだろう。コナン君の周辺にいる探偵が特殊過ぎるだけでブーメラン。

「ただまあ、事件ではないけど、変なことならよくあるよ」

「へー、どんな？」

コナン君が食いついた。

「そうだなあ。例えば『レジ袋騒動』とか」

「……レジ袋？」

想像がつかぬ表題に灰原さんが首を傾げ、子供達の興味が向く。高木刑事も不知火さんの方を見ていた。

皆の視線に促され、不知火さんが口を開く。

「雨が多い時期のことだったよ。サイハラくんここに寄せられた、ペットの猫を探して欲しいという依頼が始まりだった」

チロと言う名の真っ白な猫だったらしい。

最原さんは、飼い主の話や周囲の聞き込みから行動範囲を割り出し、地道にその猫を搜索していたそう。

「それでもなかなか見つからなくて、私に協力要請があったんだ」

「チロちゃん、見つかったの？」

「その時はまだ見つからなかった」

雨の中、最原さんと不知火さんで猫がいそうな場所を探し回ったが、それでも見つからない。

これはもしかや……と嫌な予感がし始めた頃、チロちゃんを搜索していた周辺で異変が起き始めたという。

「急に事故が多くなつたんだよ」

「事故？ 事件じゃなくて？」

「事故だよ、交通事故。車をガードレールや電柱にぶつけちゃう自損事故。幸い人的被害も車に乗つてた人達が怪我するだけで、轢き逃げのような事件性は全く無かつたんだ」

車の事故と行方不明の猫……何やら不穏な関係が見えてきたような。

「ただね、その人達は全員同じところで事故を起こしているんだよ」

「同じ場所で、複数の事故が起きたってこと？」

「そう。しかも事故を起こした理由も同じ。急に道路に出てきた猫を避けようとして……つて言うんだ」

「そこで猫に繋がるんですか！」

高木刑事がハツとしたように言う。

猫が行方不明になった辺りで、猫が原因の事故が多発……。

「絶対その辺に何かあると思うじゃん？」

「思う思う！」

「何か見つかったんですか？」

「それがね、あつたんだよ。事故現場の道路脇の側溝の蓋を開けたら……」

「開けたら……?!？」

「木の枝に引つ掛かった、薄汚れたレジ袋が」

「そこでレジ袋!？」

チロちゃんじゃないんかい。

梓さんが脱力する子供達に同調するようにカクリと膝を折った。僕と同じように彼女の話を聞いていたようだ。

「てつきりチロちゃんだと思つて手を伸ばしたら、レジ袋だった……」

「なんてベタなボケを……」

「いや、本当に猫に見えるレジ袋なんだ。風で飛ばされる袋ならまだしも、水に濡れてペチャンコになった袋は猫に見えないでしょ」

「でも……え？」

「数歩離れた位置で見ると猫にしか見えないレジ袋なんだよお」

レジ袋を猫と見間違えたのではなく、猫に見えるレジ袋だと不知火さんは主張した。幻覚作用を有しているとしても言うのだろうか。

「まあとにかく、事故現場のすぐ近くにレジ袋があったわけだけだ」

「それが事故原因だったなんて言わないよね？」

「そこまでは分からないよ」

レジ袋を猫と見間違えたせいで事故が起きていた、という酷いオチは流石に無いようだ。

「そのレジ袋の内側には、白い毛がたくさん張り付いてたんだ」

「白い毛って……まさか……」

「……チロちゃんの体は、レジ袋が見つかった場所から百メートル以上も上流の側溝で見つかった」

……自動車との接触による轢死だと断定されたいらしい。

おそらくはレジ袋に入れられた状態で側溝に隠され、連日の雨でそのレジ袋だけが流されたのだろう、と。

「今となつてはチロちゃんを轢いた奴のことも分からないし、事故を起こした人達が見た猫の正体も分からないけど、少なくともチロちゃんとレジ袋を回収した後は、事故は起こらなくなつたみたいだよ」

「へえー……」

すつかり聞き入ってしまっていた。

柄にもなく、ちよつとシンミリとさせられる……謎ばかりが残る不思議な話であった。

「でねえ、猫に見えるレジ袋は綺麗に洗ってサイハラくんの家にとつてあるんだ」

「えつ、処分してなかったの!?!」

「たまにミヤアて鳴くんだよお」

「いやいやいやいや」

【危険物の話】

ポアロには蘭さんやその友人達がそこその頻度で訪れるが、今日はその中に不知火さんの姿があった。どうやら下校中の彼女達に捕まったようだ。

今やすつかりお馴染みとなった全身真っ黒の彼女は、不審者を通り越してある種のマ

スコットのな存在になつてゐるらしい。日中に外出している姿は珍しいと、レアキャラ扱ひされている話も聞いた。

目立つ風貌に反して未だにマトモな写真を撮られていないことから、不知火さんをこっそり撮影しようとする真つ黒チャレンジなるものが密かに流行つてゐるとか。

本人の許可無くそれはどうかと思うが、とにかく不知火さんはこの辺りの住人に受け入れられていた。

「ねえ見て見てこれ、壮観だと思わない?」

四人がけのテーブル席に、蘭さんと園子さんと世良さんの仲良し三人組に、不知火さんを加えた四人が座つてゐる。

園子さんが興奮気味にスマートフォン画面を隣の不知火さんに見せてゐるが、見せられた方の反応は鈍かった。

「はあー、所謂『映え』というやつ?」

「そうそう……つて、テンション低いわね不知火さん。こういう風景にはあんまり興味無い感じかしら」

「いろんな条件が重ならないと見られない貴重な景色なんだろうけど、写真じゃ実際に見たほどの感動は味わえないしなあ」

「えっ、これの本物見たことあるの!?!」

「何度か？」

「すごーいー！」

盛り上がる女子高生達。

どうやらSNS上で有名な風景写真についての話をしているようだった。

「それってオーストラリアに行かないと見られないですよね……そんなに海外に行くことがあるんですか？」

「仕事とか、行きたい時に行ってるねえ」

「へえー」

そりやあなたなら行きたい放題でしょうね。

「海外にも取引先があるのに、旅行に行けるほどの余裕がある仕事……どんな仕事なのか気になるなあ」

世良さんがやや目つきを鋭くして不知火さんにそう問うた。

理由は分からないが、彼女は不知火さん達ダンガンロンパの17人について探っているようだ。

「よく護衛を頼まれることが多いけど、本業は運び屋さんだよ」

「やだー、如何にも怪しい響きー！」

「犯罪性の無いものであれば、サイズや届け先問わず配達依頼を受け付けてるんだ」

「ふうん……う？」

上手い言い方をしたものだ。

犯罪には関わっていないように聞こえるが、犯罪性の無いものしか受け付けない……とも言っていない。

とは言え、既に自分も後ろ暗い方パーボンので何度か世話になっている身なので、今更そこを追及するつもりなど無い。

生物非生物問わず、如何なる質量があつても、如何なる危険物であつても、安全かつ瞬時に移動してもらえるのは、どんなに法外な代金を取られようともやはりありがたかった。

「最近あつたのは、教科書を貸してくれた隣のクラスのAくんの下駄箱にお礼のお手紙を届ける仕事でした」

「いやん、甘酸っぱい」

ちよつと待て、そこまで客層が広いとは聞いてない。

「他にはねえ、独自に危険物の回収とかやってる」

それはもつと聞いてない。

「危険物!?!」

「あらやだ、本格的にアングラな香りがしてきたわ」

「何をしてるんだい不知火さん！」

聞かれたらどこまでも正直に答えてしまうのが不知火くしび霊という人物である。そして、ちよつとした好奇心でつついてみたら、大蛇どころか八岐大蛇を出してくるような人物でもあつた。

「毒？ それとも爆弾?!」

「いや、そこまでの殺傷力は無いけど、場合によつてはもつと恐ろしいかも。ジワジワと確実に日常を侵食していくようなブツなんだ……」

「え、え、え。私こんなところで社会の闇に触れちゃうのかしら」

頼むから何も知らない女子高生を巻き込まないでくれ。

そんな俺の思いも虚しく、梓さんまで皿洗いの手を止めて聞き耳を立て始めてしまった。

「おかしな物品引き取りますつて名目で回収を受け付けてるんだけどね、多い時には月に二、三の依頼が来るんだよ」

「そ、そんなに」

「どういう人から頼まれるんですか……?」

「依頼者には特に一貫性は無いかな。強いて言うなら普通の人。幸せな家庭を築いているサラリーマンもいるし、なんなら君達みたいな青春真っ盛りの高校生もいる」

「そんな人達の間に……」

やはり組織か。あの無駄に黒い連中がまたいらんことをしているのだろうか。平和に暮らす国民を脅かしやがって。絶対潰す。

「一体どんなものなんですか？ 危ないものなら、私達も気をつけなくちゃいけないし……」

「残念だけど特にコレと決まった品ではないんだ。案件によつて被害も形も多種多様なんだよ」

「例えばで良いから教えてくれない？」

「そうだなー……」

店中の視線を集める不知火さんは、しばし考えたあと、意を決したように口を開いた。
「……最近で一番人的被害が大きかったのは……」

梓さんの喉がゴクリと鳴る。

「一日最低一回……足の小指をぶつける角を持つキャビネットだった」

………？

「？」

「？」

「キャビネット………？」

「そうだよ、飾り筆筒とも言う家具のことだよ」

「足の小指をぶつけるキャビネット……？」

「そう、とつても危ないの」

形容し難い困惑がこの場に満ちていた。

「ボクも家具の角に足をぶつけることはあるけど、そんなに危険なものと言われると……」

「そのキャビネットは特にぶつかりやすいんだよ。毎日……しかも必ず小指を角で強打する。統計的にも、一般的な筆筒より圧倒的に足をぶつける回数が多かったんだ」

何でそんな統計をとろうと思ったんだろう。

「分かった、そのキャビネットのデザインが良くなかったんでしょ。足元の方だけ突き出てたりしてたんじゃない？」

「大型量販店で買ったものだから、デザイン自体は他のものと大差ないんだ。シンプルな直方体だよ」

「じゃあもう単純じゃないか。買った人がそっかしい人つてだけだったんだよ」

「ところがドッコイ、それを引き取った私もしょっちゅう足の小指を強打してるんだなあ」

「不知火さんもその人と同じってことでは……」

「サイハラくんやカエデちゃんもだよ」

「えっ、それは確かにおかしいな」

「おいコラ、何だその反応の差は」

梓さんは、ポンコツな会話を繰り返す彼女達に気づかれないう、肩を震わせて必死に笑いを堪えていた。

「確かに毎日ぶつけるのは多いかもしれないね」

「でしょ！ 依頼者も最終的に右足の小指を疲労骨折したせいでスキーに行けなかったって嘆いてたんだから」

「そこまでいくの？」

「でもなー、危険物と呼ぶにはちよつとなー……」

「毎日地獄のような痛みで悶絶する羽目になるんだよ、立派に危険物じゃないか」

「うううんん」

どうやら不知火さんの思う危険物とは、我々が認識しているソレとは少々事情が異なるようだ。

すっかり元の調子に戻った女子高生達は、面白がって不知火さんに話をせがんだ。

「他にはどんな“危険物”が？」

「いくら念入りに片付けても、最後の一つだけは裸足で思い切り踏んづけてからじゃな

いと見つからないブロックのオモチャとか」

「うわ、それもすつごく痛そう……」

「あろうことか、全て回収したはずなのに今も一つだけ行方不明なんだ……」
なるほど確かにソレは恐ろしい。

大真面目に「危険物」の話をする不知火さんからは、嘘やジョークを言っているような気配は感じられなかった。だからこそ笑ってしまいそうになる。

現に世良さんと園子さんはずつと半笑いで喋ってるし、蘭さんに至ってはテーブルに突っ伏したまま動かなくなっていた。

だつてそうだろう。

その物体が危険なのではなく、扱う人の問題としか思えないのだから。

「君達、信じてないよねえ……」

「だつてえー！」

「危険物の危険性もだけど、それを信じてる不知火さんの方がおかしくて仕方ないよ」

「何がおかしいのさ」

「そういうとこだよー！」

かつてここまで温度差が酷い会話があつただろうか。

「じゃあこんなのさ？」

「ま、まだ何かあるの?」

「いくら残業してもキツチリ定時で打刻されるタイムレコーダー」

それは違う意味で完全にアウトである。

世良さんはヒイヒイと引き笑いを起こし、蘭さんに続いて園子さんまでテーブルに沈んだ。梓さんはしゃがみ込んで俯いているが、その肩は未だ細かく震えていた。

「労働者の権利を脅かす恐るべき代物じゃないか」

「そ、そうだねあはっ、怖いこわいふふふっ」

「笑うとこじやないよ!」

そんなおつかないタイムレコーダー、不知火さんに回収してもらおうより先に労基に通報すべきなのは。

「そんなの絶対経営者が悪いことしてるに決まってるって!」

「えー? でも新品と交換した後は打刻ミスが無くなったと依頼者は言ってるよ」

「そんな馬鹿な……不知火さんが裏で何か掛け合っただんじやないの?」

「それこそそんな馬鹿なだよ。そこまで面倒みたりしないっつてば」

「んんん……?」

実は愉快な17人の暗躍があったのか。はたまた本当に異常なタイムレコーダーだったのか。真相は闇の中である。

「江戸川くんのお墨付きをもらったやつだつてあるんだから」

「へえ、あのコナンくんが認めたのかい？　どんなものを？」

「高頻度で書き間違いを起こすボールペン」

ついに世良さんまでテーブルに沈んだ。

「本当なんだよう。江戸川くんなんて自分の名前すらマトモに書けなかつたんだ」

「しよ、小学生に忖度してもらつてる……！」

「してもらつてないつて！　何度書いても江戸川の『江』のシさんずいを抜かしてたんだよ」

「……ん？」

「『戸』の二画目も、まるで草冠みたいに点を書きそうになるし……」

「ちよつ……!?!　ちよちよちよ、ボクもつとそのボールペンの話詳しく聞きたい」

「やだ、揶揄われるくらいならもう言わない」

「そんなこと言わずにー！」

そう、結局危険物なんて無かつたのだ。

やはり平和が何よりである。

【もつとヤバい危険物の話】

自分が思っているより、不知火さんは松田達と親しいらしい。と言つても、不知火さんがあいつらに懐いていると言うよりは、彼女の方が松田や萩原ハギに一方的に呼び出され、奢つたり奢られたりしているようだ。冗談混じりにデートと称し、不知火さんの最近の動向を聞き出しているようだ。まるで妹が非行に走らないかを心配する過保護な兄みたいである。

別にそれは構わないが、その会場をポアロにしてくるのは控えてくれないだろうか。いきなり話題を振られてヒヤヒヤさせられるこちらの身にもなつてほしい。

「何名様ですか？」

「三人です」

今日は珍しく松田と萩原の二人が揃っていた。非番が重なつたのだろう。

半ば引き摺るように不知火さんをポアロへ連れてきて、いつものように甘いケーキと飲み物を注文した、世間話という名の尋問開始。とても手慣れている。

「ねえ、何か面白いお話とかない？」

やがて話題が途切れた頃、萩が不知火さんにそう言った。

「急になあに」

「いやあ、伊達班長がコナン君から聞いたんだよ。クシビちゃんは面白い話をしてくれるんだって」

それって、たまに不知火さんがポアロでしてくれる話のことだろうか。班長にまで話がいっているとは驚きだ。

やはり例の危険物シリーズの話だろうか？

「俺、カップ麺に付いてた変な調味袋の話とか好きだなあ。あまりにも開けにくくて、開けようとする人が皆怒っちゃうやつ」

「どこからでもキレますってか……」

ユーモアを弁えている無機物、なんて恐ろしいんだ。

「アレねえ、マジックカッターじゃないところを鋏で切ったら何も起こらなくなったよ」

「えーっ、もう無力化しちゃったの!」

「そんなもん残してどうするんだよ……」

「ちよつと試してみたかった」

おいバカそういうところだぞ萩。

「そういうしょーもねえもんしか無いのか?」

「しょーもなくもないでしょ。簡単にマインドコントロールできる代物だったんだぞ」

「小つせえ調味袋なんざ悪用のしようがねえだろ。もつとこう……直接的に人に害が及

ぶようなものとかは？」

「うーん……人が真下を通ったら落ちてくるシャンデリアとかは？ 私をそれを知った

時には、既に何人も被害に遭ってたよ」

「うわっ、本当に危ないやつだ」

それはまた事件性がありそうな。

「……わざと緩く固定していたんじゃないの？」

「取り付けた業者に不審な点は無かったよ。落下時に質量以上の衝撃が発生する異常も観測された」

「どうやってそれを観測したんだよ」

「私に向けて落ちてくるのを避けたら、床がベッコリ陥没するほど思い切り激突して、粉々に砕け散ったんだあ。10kgもない軽いシャンデリアだったのに、とんでもない威力だよ」

「そっか……今はもう無力化済みなんだね」

「お前に目をつけたばかりに……」

被害に遭いかけた不知火さんではなくシャンデリアの方を哀れむ松田。分からなくもないが。

それにしても、不知火さんは本当に危険な物にも対応しているのか。彼女の言う危険

物は太抵気のせいで済むものばかりだから油断していた。

話が本当であれば、そのシャンデリアの脅威は明らかに気のせいで済む範疇を超えている。

「やっぱり事件や事故に繋がるようなものもあるんだね」

「そういうものこそお巡りさんに通報しろつつつてるんだよ。オラ他にもあるだろ、全部吐け」

「うええ、何でそういう話になるのさあ」

松田が厳しく問い詰める一方、萩が新たにミルクレープを追加注文して不知火さんの前にスイツと差し出した。ここまで分かりやすい飴と鞭があるだろうか。大人しく付き合う不知火さんも不知火さんである。

「俺も陣平ちゃんも、別にクシビちゃんを責めようという気は無いんだよ。君達が危ないことに首を突っ込んでないか心配なだけでね？」

「別の意味で余計なことをするのがお前らなだけだな……」

「まあとにかく、頼りたいわけよ。何でも良いから無いかな、お巡りさんにしてもらいたい」と

「んん……」

俺は不知火さんに対してあそこまで優しく言える自信が無い。彼女に対しては何故

か容易に安室の皮が剥がれてしまうのだ。

「それじゃあねえ……」

と、ポツリと不知火さんが口を開いた。

「一つだけ、お巡りさんに聞いてほしいことがあるんだけど」

「！、なになに、何でも聞かせて！」

流石は萩、コミュ力の塊。不知火さんからついに相談事を引き出してみせた。凄い。

『『回想電車』っていう、マイナーな都市伝説を聞いたことある？』

「回送電車？」

「いや、過去を思い出す方の回想って書くの」

「……聞いたこと無いなあ」

不知火さん曰く、何時何分、とある駅で折り返して回送となるナントカ線の何号車に、車掌に見つからずにこっそり乗車して眠りにつくと、そこで見る夢は限りなくリアルな過去の体験になる……という話らしい。

だから『回想』電車なのだと。

「そこで見える夢ってのがかなり鮮明らしくてね。臍げだった幼年時の記憶とかもはっきり再現されるらしいの」

「へえー？」

「故人や故郷の懐古に浸れるとかで、癒される都市伝説として噂されてるみたい」
亡くなった家族や、取り壊された母校。

例え夢でも良いからと、失われたものへの思い出を求め、続けるようにその電車を探す人もいるらしい。

「で、そのセンチメンタルになれる都市伝説が、どうしてお巡りさんに相談したいことなんだよ」

「回想電車で見るのは必ずしも良い夢ばかりとは限らなくてね。昔巻き込まれた事件や事故の、嫌なシーンを見る人もいるんだ」

「ほうほう?」

「トラウマを呼び起こされただけで損する場合が殆どんだけど、中には夢の中で新しい手がかりを得て未解決事件を解決した……なんてパターンもあるみたいなんだ」

「え、マジ?」

「私とその電車の存在に気付いたのは、最近になって唐突に解決する過去の事件事故が増えたからなんだよ。新しい証言を出した人達に共通していたのが、その電車だったの」

「……なるほど?」

警察も、都市伝説の電車で見えた夢だと言われたら動かなかっただろうが、裏が取れる

証言や証拠ならば話は別だ。よっぽど真実味のある証言だったに違いない。

この電車の都市伝説自体も、思っている以上に現実味があるようだ。噂話から知った都市伝説ではなく、事実から辿り着いたものならば。

「なんだかね、その夢を個人の記憶と言うには、当時のその人の主観がまるで含まれてなくってさ」

「ああ、恐怖の対象しか見えなかった、みたいなことが無いんだね？」

「そうそう、犯人以外の風景や人もハッキリ見えたって言うの。もしかしたら、いつそ夢じゃなくて過去の情景そのものである可能性が高いんだ」

おっと。

オカルトかと思いきや、SFのような様相を呈してきたぞ。

「過去の夢を見られるんじゃないやなくて、過去に行けちゃう電車かもしれないってこと？」

「意識だけねえ。夢の中で見る出来事には干渉できないらしいし」

「ふーん……そこまで凄い代物なら、警察や国が管理すべきなんじゃないの」

俺もそう思う。

ここまで聞いた限りでは、夢を見る者への影響を除けば特にリスクは無さそうだ。

上手く使えば、自在に過去を覗き見できる最強の捜査ツールにもなり得るではないだろうか。

「うーん、実はそうもいかなくて……」

「あ、何か裏がある感じ？」

「早いとこスクラップにしないとヤバい感じ」

「そこまで？」

やはりそう上手く事が運ぶわけないか。

「この話の何がそんなにヤベエんだよ」

「さつき私、未解決事件が解決した事例があるって言ったじゃん」

「言ってたね。俺達の立場でもその事件を確認できるくらい、ハッキリしている事実な
んだろう？」

「そこが問題なの」

「どういうこと？」

「捕まった犯人クロ、本当は無実かもしれないの」

「どういうこと!？」

とんでもないことを言い出した。

「ちよつと、まさか冤罪？」

「そうじゃないから問題なの」

「んだよ、冤罪じゃないなら問題無えだろ」

「そうじゃないから問題なの……」

「お願い、順を追って説明して」

「うん……」

不知火さん曰く、例の電車で見た夢がキツカケで捕まった者は、確かに紛れもなく真犯人ではあるという。

事件そのものには整合性しかないのだが……。

「その犯人の足跡そくせきを辿ると、めっちゃ不自然なことになってるんだ」

「どう不自然なの？」

「生まれも経歴も、事件や被害者とは全く関係ないところなのに、事件発生直前になって急に現場へ行くことになってんの」

「……うん？」

「全員が全員、仕事の都合でも知人に会うでもなく、はたまた何かのイベントに参加するでもなく。何の理由も無く突然現場に行つて、そこで事件事故を起こしてるの」

それは……一体どういう意味なのだろうか。

「えつと……単に見えない繋がりでもあつたんじゃない？ ネット上のやり取りで被害者と何かトラブルがあつたとか……」

「勿論その辺も調べたけど、そういうのも無いんだ」

「偶々魔が差したとかじゃねえのか」

「ほーん？ この国のお巡りさんは魔が差した程度の犯行を迷宮入りにしちゃうレベルなんだあ」

「言ってくれるじゃねえか temeエ」

プライドを抜きにしても、確かにそうだとは思いいくない。

電車で見えた夢で解決したのは、それまで解決の糸口が無かった案件なのだから。

……いや、待て。まさか。

「多分だけど……回想電車で見える過去は、きつと本物の過去ではないんだと思うのね」

「なんか、凄く嫌な予感がする……」

「回想電車で見えたものが過去になるんだと思うの」

「やべーどころの騒ぎじゃねえだろソレは」

何たる因果の逆転。犯人が犯人だから証拠が見つかるのではなく、夢で証拠を見たからその人が犯人になるという逆転現象が起きているかもしれない。そして本来の犯人は犯人ではなくなり、全く関係ない人物が犯人になっているかもしれないという可能性。冤罪よりも遙かにタチが悪い。

過去を改竄してしまう電車だと？ 核よりも恐ろしい危険物でしかない。

しかもその存在や方法が、既に都市伝説として流布しているだど!? ここ最近で一番

肝が冷える話じゃないか！

ただ思い出に浸りたいだけの者ならまだしも、悪意のある者がその気で使ってみろ。日本どころか、世界がひっくり返りかねない……！

「改めて相談なんだけど、どうやったら合法的に電車の車両一台をまるまるスクラップにできるかなあ」

「えーっ！ ど、どうしよう……？」

「あークツソ……とんでもねえ藪をつついちまった……」

チラリとこちらに向けられる萩と松田の視線。

お前話聞いてただろ、お得意の違法捜査なら何とかできるだろ、とでも言いたげである。無茶言うな。

「とりあえず……回送電車にお客さんに乗せないように鉄道会社に注意喚起するか」

「今のところ、それしか無えだろうなあ……」

「やっぱり？」

後々、この話がきっかけで俺は不知火さんの“危険物”の処理に付き合うようになるのだが、それはまた別の話である。

ビルとサイコロと、爆発と ①

不知火クシビという不思議な友人とは、自分でも意外なほどの長い付き合いになる。出会い方も出自も雰囲気も特技も何もかもが特殊なクシビちゃんだが、人間性だけ見れば至って穏やかで優しい子だ。

彼女のせいで計画や社会的立場が崩壊したなんて嘆きをよく約1名から聞くけど、余計な下心を持つて近づかなければ何もしつちやかめつちやかにされる事はない。

と言つても本人は無自覚だし、この法則を知るまでが恐ろしく大変だし、こちらが近づかなくとも向こうから寄せられた場合でもアウトだし、そもそも「余計な下心」の判定が曖昧過ぎて分からないので、理不尽極まりないことには変わりはない。なんかの災害かな。

クシビちゃんは美味しいものが大好きなので、手土産にお菓子でも渡せばほぼ間違いない。なくご機嫌でいてくれる。

陣平ちゃんは定期的に食べ物で誘い出して監視みたいなことをしているけど、あらゆ

る意味で自由な彼女の行動をそんなことで制限できるとは思えない。

俺も俺で「犯罪に手を染めないでね」と懇々と言い聞かせているつもりなのだが、残念ながら彼女の倫理観は法をまるっと度外視しているようで効果は薄い。

どちらにせよ、サイコロの愉快な活動は防止のしようがなかった。

いや、クシビちちゃん抜きでも不可能犯罪を完遂されても大いに困るんだけどね。才能の無駄遣いも程々にしてほしい。

死人や怪我人を出させないためとは分かっているが、もうちよつとお巡りさんにも優しくしてほしいなあ……なんて思う今日この頃。

とは言え、確かに彼らは警察組織に対して喧嘩腰ではあるものの、憎むほどの悪感情は持っていないようだ。

特に俺個人はお巡りさんとして懐かれている方で、困った時はしょっちゅう相談を持ちかけられる。一応彼らが気まぐれのように匿っている同期の男もれっきとしたお巡りさんなのだが、どうやらアイツはそれにカウントされていないらしい。俺と違って堂々と警察官として動けないからだろう。

つまり、時には彼らも警察の助けが必要になるということだ。正直とても意外である。

閑話休題。

ここ数日、警視庁は普段以上にピリピリしている。ある会社の倉庫から爆薬が大量に盗まれるという事件が発生したからだ。

今のところ何も起こってはいないけど、俺達はいつでも出勤できるよう待機している。

「スマホ鳴ってるぞ」

「ホントだ」

その電話が来たのは、訓練を一通り終えた後の昼休みがそろそろ終わろうか、という時間だった。食後に一服し、喫煙エリアから出ようとした時にスマホのバイブレーションが低く唸り始めた。

「クシビちゃんからだ……」

「……」

一緒にいた松田が、俺のスマホの画面に表示されたクシビちゃんの名に何かを察知し、吸いかけのタバコの先端を潰して電話に出ると目で促してくる。

相談があるにしても、勤務が終わった時間帯を見計らってメールするだけの彼女が、こんな真昼間から電話をかけてくるだなんて珍しい。

よっぽどのことがあるのだろうと覚悟してから通話ボタンを押すと、間髪入れずフワフワした声が聞こえてきた。

『わあ萩原さん、たしけてえ』

「クシビちゃん？ どうしたの」

口調こそ随分呑気なものだが、ゴオゴオと風を切る音と忙しく走る足音が電話口から聞こえてくる。

『あのねえ、今私爆弾持ってるの』

「えっ、ば……ホント？」

単刀直入で分かりやすい説明ありがとう。

「そういうことなら俺に電話するより先に110番にかけるべきじゃ……」

『パトカー待ってる時間無さそう』

「そんなに切迫してるの？」

『うん、専門家に直接聞いた方が良いかなあつて』

すぐにスピーカーモードに切り替えて周りにも聞こえるようにすれば、状況を把握した松田が連絡を回そうとスマホを構えた。

「場所は？」

『米花駅前から住宅地に向かっているとこお』

「タイマーとか時計とか付いてる？」

『見てないけど音が鳴ってるよお』

足音に合わせて声の音源が上下しており、現在進行形で走って移動していることが窺える。

しかし、いや、待てよ。

「不知火、それくらいならお前一人でも」

俺と同じことに気付いたらしい松田がスマホをいじる手を止め、口を挟んだ。

そう、振動に反応するタイプならまだしも、持って歩けるような爆弾なら、彼女であればどうにでもできるはずだ。いざとなれば人気の無い海中や砂漠のど真ん中にでも放置してしまえば良い。わざわざ俺に電話してまで助けを求めする必要も無いだろう。

と思った次の瞬間。

『萩原さんと話してるの!?!』

クシビちゃんではない、やや甲高い第三者の声が電話口から聞こえてきた。

「んんんクシビちゃん、誰と一緒にいるんだい?」

『江戸川くんだよ。彼が爆弾を持ってきたからおんぶして走ってるよ』

なんてこつたい。

江戸川くんって、あの毛利探偵のところの預けられている江戸川コナン君のことだろ。あの子が爆弾を持ってきたって?!

そりゃクシビちゃんもいつものズルができないはずだ。巻き込まれた側だったのね。

「えーつとコナン君、爆弾のタイマーは今どんな感じ？」

『残り一分を切ってる！ 一時丁度に爆発するんだ！』

「やっちまえ不知火、俺が許可する」

松田が頭を乱暴にガシガシ掻きむしりながら自棄気味にそう言い放った。通報する暇が無いとは言っていたけど、これは極端過ぎる。

確かに一分も無いなら彼女にしかどうにもできないが、コナン君の前ではそうもいかないように。

『でもでもはわわ』

『不知火さん爆弾を解体できるの？』

『できたらくんなに走り回ってないんだよなあ！』

いつも余裕がある彼女にしては珍しく、盛大にテンパっていた。

『じゃあ松田さんは何のことを言ってる？』

「コナン君近くに人がいなくて開けた場所は無いかな!?」

板挟みになって困り果てるクシビちゃんを見かねて俺が話題を変える。こうなったらもう安全な場所ので起爆させてしまおう他ない。

『河川敷の空き地があるよ、高速道路の高架下を抜けた先!』

「じゃあそこで爆発させちゃって! クシビちゃん聞こえた?」

『空き地に行けば良いんだね!』

『え? うわ、あーっ!』

不知火さんが屋根の上走っているとコナンくんが悲鳴混じりに実況してくれた。住宅地の中だと言ってたし、彼女なら普通にやりそうだ。

それから間も無くして、爆弾は無事に死傷者を出さず爆発した。

河川敷の爆発騒ぎからしばらくして。

幸いにして軽傷だったオレ達は、自分達や近隣住民の通報によって集まった救急車に乗せられ、警察病院へと運ばれた。

不知火さんがオレの保護者として連絡を入れてくれた毛利のおっちゃんや阿笠博士の他、爆弾犯と接触したらしい少年探偵団のメンバーと灰原、そしてどこからか情報を聞きつけた安室さんまでが警察病院に集まっていた。

そして、事情聴取のために毎度お馴染みの目暮警部と白鳥警部も同じ部屋にいる。狭い病室内はなかなかの人口密度となっていた。

「よお、お疲れさん」

「死ぬかと思ったよう……」

「大変だったねえ」

電話の向こうで固唾を呑みながら一部始終を聞いていた警察官——萩原さんや松田さんによって代わる代わる頭をもみくちやに撫でられたりグリグリされているのは不知火さんである。

「殺されても死ななさそうだと分かっても、あんまり心配させないでほしいわね」

「灰原ちゃん心配かけてホントごめんねえ！ お見舞いありがとう!!」

そして灰原に対して分かりやすく相好を崩していた。

成り行きで事件に巻き込んでしまったが、被害を最小限にできたのは彼女が協力してくれたおかげに違いない。

誤って爆弾を持ち帰ろうとしたお婆あさんを追う途中でスケボーが壊れてしまい、立ち往生していた時に見かけたのが不知火さんだった。確か彼女は足が速かったはず、渡りに船とはこのことかと思っただが、まさか家の屋根伝いに移動する羽目になるとは……。

「不知火さん！ コナンのバカが大変なご迷惑をおかけしてしまいまして、本っ当に申し訳ない！」

「あ、いえいえ、江戸川くんの判断があつてこそそのこの結果ですし……」

「そもそもだ、コナン！ どうしてこんな無茶をしたんだ！ もう少しで死ぬところだったんだぞ！」

「ゴ、ゴめんなさい……」

毛利のおつちゃんは不知火さんに頭を下げた後、オレには強い語調で叱ってきた。ただの怒りではなく、オレを心配しての言葉だ。素直に謝っておく。

「しかし変ですね、犯人の男は工藤新一くんに電話をしてきたんでしよう？ 何故コナンくんが？」

「だから、新一くんは別の用事があって……それで、コナンくんに頼んだんじゃ」

「ほおー……？」

「何て奴だ、今度あつたらタダじゃおかねえ……！」

実は今夜、新一として蘭と映画を見に行く予定が入っている。と言うか、強制的にその約束を取り付けられてしまった。

どうにか灰原から解毒薬をもらおうと阿笠邸へ行くと、爆弾を仕掛けたから探してみろというふざけた電話が工藤新一あてにかかってきたのである。何でよりもよつて今日なんだよ。

今の自分は江戸川コナンだが、そんなものを聞かされて黙っているわけにもいかず探しに行き……そして今に至る。

新一への挑発をオレが受けたことを疑問に思う安室さんを事情を知る阿笠博士が納得させようとするも、その効果は薄い。

まずいな、阿笠博士は簡単にボコを出してしまいそうだ。安室さん相手に誤魔化し切れるとは到底思えない。

おっちゃんも命に関わる事件をオレに任せたオレに怒っている。灰原からの視線が気まづいことこの上ない。

苦し紛れに、オレは目暮警部に事件そのものへの話題をふることにした。

「それで警部さん、爆弾の種類は？ 分かったの？」

萩原さん達とずつと通話状態だったからか、既に詳しい話が警察の方でも行き渡っているようでその調査も早かった。

不知火さんとてんでこ舞いで処理したキャリアケースの爆弾。そして、それより前に少年探偵団が犯人から渡されたラジコンに搭載されていた爆弾も、どちらもプラスチック爆弾だったらしい。

ラジコンの方は雷管を付けて衝撃爆弾に、キャリアケースの方はタイマーを接続して時限爆弾にされていた。そのどちらも、おそらくは何日か前に盗まれた大量の火薬の一部である可能性が高い……と。

そこまで白鳥警部が調査結果を話したところで、萩原さんが声を上げた。

「そう言えば、キャリアケースの時限爆弾のタイマー。爆発16秒前に一度止まったんだよね？」

不知火さんに背負われて、住宅地を文字通り真っ直ぐ突っ切っている時だった。爆弾の様子を見ていたオレは、ほんの数秒間だけタイマーの数字が止まったのを確認した。

おかげで河川敷に着いたあと不知火さんが爆弾を上空に思い切りぶん投げるだけの隙ができたのだが、あれは何だったのだろう。

「ああ、そのことなんだが、一つはタイマーが故障を起こしてしまった場合。もう一つは犯人が何らかの理由により遠隔操作で止めた場合の、この二つが考えられる」

「二つ目が気になりますね。不知火さん、何か気付きませんでしたか？」

安室さんに訊ねられた不知火さんは、腕組みして首を捻る。

「あの時はとにかく必死だったからよく覚えてないよ。すぐ近くの公園で子供が遊んでいるのが見えたからさ」

「まさか、犯人が子供を巻き込むまいと？」

「そんな配慮をするくらいなら、爆弾をあんな置き方するわけねえだろうが」

「うーん、それもそうだ……」

松田さんの言葉にあっさり意見を翻すおっちゃん。

思い返せば、あの時限爆弾はかなり悪質な設置のされ方をしていた。猫を入れたキャ

リーケースに仕掛けられていたのだ。捨て猫を拾おうとする優しい人間をターゲットにするような——爆弾をその場から持ち去らせることを前提とする置き方をする人間が、わざわざ子供に配慮するだろうか？

しかし、もし遠隔操作でタイマーを止めた理由があつたとしたら、不知火さんの言う通り公園で遊ぶ子供達ぐらいしかない。

だとしたら、やはりタイマーの故障なのだろうか……？

「犯人はわざわざ工藤くんに電話してきたところから見ても、高校生名探偵工藤新一の評判を知って挑戦してきたか……あるいは個人的に恨みのある人物か……」

タイマーが止まったことはさておき、話題は犯人像を絞る方向に。

やはり鍵となるのは、直接犯人から爆弾付きのラジコンを渡された光彦達の証言だ。

あいつらなりに犯人の姿を描いてくれたが、特徴的でありながらもその姿には心当たりが無かった。電話をかけてきた犯人が変声機を使っていたのを考えると、おそらくオレが知っている相手なのだろう。

だとしたら、光彦達が見た姿も変装したものである可能性が高い。

「警部さん、今まで新しくくんが扱った中で一番世間の注目を浴びた事件は、何じやつたけな」

「うーん……それはやはり、西多摩市の岡本市長の事件でしょうな」

目暮警部が語ったのは、かつてオレが真相を暴いたある交通事故のことだ。

西多摩市に住む女性が、車に撥ねられて死亡した事故。当初は市長の息子が運転する車による事故かと思われたのだが、実は運転していたのは市長本人であり、息子さんは助手席に座っていたという真実があった。息子さんが市長である父の立場を慮って身代わりを買って出たらしい。

こうして事実が明るみになると岡本市長は失脚し、同時に彼が進めていた西多摩市の新しい街づくりの計画も一からの見直しとなったそうだ。

もしやこの連続爆弾事件は、岡本市長の息子が、父親が失脚した原因であるオレへの怨恨が動機として起こしているものではないか。

容疑者として名前が浮上した彼の調査をするため、白鳥警部が退室していった。

「他に何か、犯人について思い出したことは無いかな？　なんでもいいんだ」

他に手がかりが無いが、目暮警部にそう問われた子供達はウンウンと唸ると、歩美がポツリとこう呟いた。

「匂い……？」

「え？」

歩美が犯人から甘い匂いがした、と証言した。詳しくは分からないが、化粧品や香水のような匂いではなかったらしい。

「果物とか食べ物匂いなら、小嶋くんが真っ先に反応してそうだよねえ」

「おう！ 食い物のことなら自信あるぞ！」

「食べ物でもなくて、化粧品でもない甘い匂いがするものかあ。嗜好品かな？」

「嗜好品……もしかして、煙草か？」

「あ」

不知火さんが萩原さんと松田さんを交互に目を向けるのにつられ、全員の目がそちらに向く。病院内なので今は煙草を吸っていないが、それでも薄らとこの部屋に漂う煙草の匂いはおそらく彼らからのものだろう。

確かに食べ物ではない嗜好品と言えば、煙草やマリファナのような香りを楽しむものかと思いつく。種類にもよるが、甘い匂いというのにも納得がいく。

「だとしても、タバコ吸ってる奴なんざ腐るほどいるだろ」

「えーっ」

「うーん、決定打には欠けるが、それでも貴重な手がかりであることには間違いない。また何か思い出したことがあつたら教えてくれ」

「はいー！」

松田さんの容赦ない言葉に子供達が残念そうな声を出すも、目暮警部が朗らかにフオーする。

こうして事情聴取が一段落すると、子供達が帰り支度を始めた。

「それじゃあ、そろそろボクたちは帰りましょうか」

「そうだな。コナンも元気になったことだし」

「困ったことがあつたら、あたしすぐとんでくるから！」

オレに手を振つて賑やかに退室していく少年探偵団。

「はいいじゃあお疲れ様でしたあ」

その流れでシレッと席を立つ黒ずくめの不審者が一人。

「クシビちゃんはまだ帰っちゃダメでしょ」

「ええ」

不知火さんの隣に座っていた萩原さんが、当たり前のように帰ろうとする彼女の手首を掴み、その帰宅を阻止した。

「たしけてえ灰原ちゃん」

「大人しく事情聴取されなさい、事件の当事者なんでしょ」

「So cool……」

最後に退室する灰原にバツサリ切られてしまった不知火さん、苦手な警察官に囲まれて完全にアウエーとなつてしまった。

しかし苦手に思っているのはお巡りさんの方でも、扱いが難しい不知火さんにどう質

問したものと互いに目配せし合っている。

その中で唯一人、安室さんだけはニコニコしていた。今度はどういう目的で不知火さんに近づいたのやら……。

と、その直後。

ピリリリリ、とオレの携帯電話の着信音が響き、一気に室内の緊張感が高まった。

おっちゃんや警部さん達とアイコンタクトし、全員が聴こえるようにスピーカー電話にして慎重に電話に出る。

『よく爆弾に気付いたな、褒めてやる。だが、もう子供の時間は終わりだ。工藤を出せ！』

聞こえてきたのは変声機越しの不自然な声。犯人だ。

すると、オレの代わりにおっちゃんが挑戦的な声を上げた。

「そうだな。これからは大人の時間だ」

『誰だお前は。工藤はどうした』

「工藤はいない。オレが相手になってやる！ オレは、名探偵毛利小五郎だ」

『ふっふっふ……良いだろう。一度しか言わないからよく聞け。東都環状線に五つの爆弾を仕掛けた』

犯人からの文字通りの爆弾発言に、室内の空気がザワリと揺れる。

おっちゃんはギョツとしたように目を見開き、目暮警部と阿笠博士は息を呑み、安室さんは目を鋭くし、萩原さんと松田さんはピリつく空気を纏い、不知火さんは無言で天を仰いだ。

続けて犯人が言うには、その五つの爆弾とやらは、午後4時を過ぎてから電車が時速60km未満で走行した場合と、日没まで取り除かなかつた場合に爆発するらしい。

そして仕掛けられた場所は、東都環状線のバツバツのバツ。バツ一つにつき漢字一字が入るといふ。

目暮警部はすぐに警視庁へ報告し、電車の管制室にも通達を送った。

「何のヒントにもならないじゃん！」

呆れたようにそう言ったのは不知火さんだ。おっちゃん達が、犯人から出されたヒントである××の×が何を示すのかを討論している時のことである。

「確かに、二文字の××を電車に関係する熟語、一文字の×を位置や物を示す漢字だとすれば、その組み合わせはいくらでも考えつきますからね」

「やろうと思えば、どんな場所でも大抵は××の×で表現できるよなあ」

安室さん達の言う通りである。そう考えると××の×なんて何のヒントにもなっていない。

座席の下、網棚の上、車体の下、はたまた乗客の鞆、空調の中なんてものまで考えら

れる。例えその中に当たりがあつたとしても、該当する箇所があまりにも多い。環状線全体を考えると、一体どれほどになるだろうか。

これはもう、いつそ起爆条件から考えた方が良いかもしれない。

そしてさらに間の悪いことに、元太や灰原達が病院から帰るために東都環状線に乗つたということまで判明してしまった。

探偵バツジの無線から聞こえてくるのは、爆弾というワードが聞こえてしまった不安そうな小学生三人の声と、それを冷静に宥める灰原の声。ここは灰原に任せるしかない。

「……そろそろ行かねえと」

「じゃ、またねクシビちゃん」

「いつてらつしゃい。気をつけてねえ」

「おう」

と、ここで萩原さんと松田さんが席を立った。本庁へ戻るように指示があつたのだろう。手をヒラヒラ振りながらそれを見送る不知火さんは、いつもよりちよつと真面目な顔をしていた。ついでに言えば安室さんも似たような顔をしている。

そう言えば、萩原さん達は目暮警部とは違って刑事部の所属じゃないみたいだよな。どこの部署なんだろう……？

「あつ、そうだ。そう言えばあいつも電車で来る予定だった」

すると今度は不知火さんがそんな声を出した。慌てたようにスマホをいじり始めた彼女を見て、安室さんが思案げに声をかける。

「何か予定があるんですか？」

「友達を米花駅で出迎える予定だったんだよお」

「ほお、友達……ですか」

“こんなところでお出なのか、不知火さんの友達シリーズ。またの名を、53期の17人”。

ダンガンロンパという公開デスゲームで生き残った天才集団。現在はその有り余る才能を無駄遣いして警察機関に喧嘩を売ってる暇人達。

先ほどまでとは違う緊張感が病室内に漂ってきた。安室さん、もしかしてこれを知ってて病院まで出向いたのか？

今思えば、日中に人の多い駅近くで不知火さんを見かけること自体が珍しかった。運が良いと思つたが、彼女にたまたま外出する理由があつたからなのか。

『くそお、コナンだけに任せておけるか！ オレたちも頑張ろうぜ！ こんな時こそ少年探偵団の出番だ！』

『ちよつと、あなた達！』

探偵バッジからも何やら厄介な空気が流れてきた。この事態をもどかしく思った元太が、皆に発破をかけて爆弾を捜し出そうとしているらしい。灰原が止めようとしているが三人はろくに聞きやしない。

オレも止めようと声を上げかけたその時。

『へえー、少年探偵団？ 面白そうだね！』

『お兄さん、だあれ？』

バッジの向こうで、やけに明るい声が割り込んできた。

『オレも混ぜてよ！ いーでしよ？』

いやその前にお前は誰だ。

訝しむオレやこの場にいる大人たちがそう訊ねる前に、まさかの不知火さんが反応した。

「ダメだよオウマくん、子供達を驚かせちゃ」

突然のDICE首領の最有力容疑者出現の報せに、安室さんと目暮警部が盛大に咽せ込んだ。

ビルとサイコロと、爆発と ②

その人が話しかけてきた瞬間、今まで感じたことのない強烈な感覚が我が身を襲った。

「うわすつげ、何それ無線機能付きのバッジ？」

「急になんなんですか、あなた！」

「もしかしておめーが犯人なのか!？」

「やだなー！ こんな善良なお兄さんを捕まえて一体何の犯人だつて言うのさ！」

いつの間に近づいていたのか。

子供達ですら一発で警戒心を露わにするほど怪しい青年が、探偵バッジで話し合う私達の上からこちらを覗き込んでいた。

『止めたげてえ。その子達を困らせないでよ』

「えっ、まさか不知火さんのお知り合いですか!？」

『うん。その声、聞き間違いでなければそいつは私の友達なんだ。米花駅で降りるところで迎える予定だったんだけど……』

「そうだよ、オレをほつといて何処で何やってんだよ不知火ちゃん！ 早いとこ迎えに来てよね！」

『無茶言うな』

驚くべきことに、この青年は不知火さんの友人だという。探偵バツジを通して交わされる会話は自然なもので、少なくとも不知火さんの方には演技のようなものは感じられない。

「不知火のねーちゃんの知り合いなら、信用できる……の、か……？」

「ビジョーに判断に困りますね……」

「とつても怪しい……」

「あ、ひつでえなー！ オレは王馬小吉、不知火ちゃんとは高校で同級生だったんだぜ。ほら、自己紹介したらぜーんぜん怪しくなくなつたでしょ？」

「えええー……??？」

王馬と名乗った青年の口から流れるように紡がれる言葉、その全てがかく胡散臭い。

見知った不知火さんと知り合いという事実があつても、ようやく、辛うじて、『信頼しても良さそう』という可能性がほんのチョット見えたかもしれない……という程度。まあとにかくひたすら胡散臭い。

不知火さんのソレとはまた違った方向で不審過ぎるその気配に、思わず組織との関連性を疑ってしまった。

だけど、彼の服装はあの組織とはまるで正反対で、全身が白で統一されている。白のセーターベストに白のジャケット、白いスラックスに白いスニーカー。おまけに持っているトランクケースまで真っ白。まさに白づくめ。

不知火さんと親しげじゃなかったらコードネームが『どぶろく』とか『マツコリ』あたりの幹部だと思いついてたかもしれない。世界規模の組織なんだし、それくらいはいてもおかしくないと思う。

ふと、私の胡乱げな視線に気が付いた王馬さんが、白々しい笑みで私の顔を覗き込んできた。

「な、なに……?」

「灰原哀ちゃんだよ。オレ、キミのこと知ってるよ。不知火ちゃんから聞いてるんだ。彼女と仲良くしてくれてありがとう」

待って、名前はともかく何で顔まで知られてるの。

『ごめん！ この前一緒に旅行したときの写真、友達に送ったんだ！』

「こんな人にまで送ったの？」

『そう見えて悪い奴じゃないんだよ！ 気を悪くさせて本当にごめんねえ！』

そう言えば、その旅行中に不知火さんは人の嘘を見抜くことができると言っていた。この疑わしい青年と友人でいられるのは、そういう特技があるからなのしれない。

慎重な不知火さんが写真を送れる相手だということは、王馬さんを信用する判断材料になるかもしれないけど……やっぱりこの胡散臭さはそう簡単には拭えない。

「そう……まあ、不知火さんに免じて、疑うのだけはやめてあげるわ。甘酒さん」
「それってオレのこと？」

「真つ白なあなたにはピツタリでしょ」

あと、アルコールがあるのか無いのか分からないところとか。

「へえー、哀ちゃんネーミングセンス悪くないじゃん！」

「気安く名前を呼ばないでちょうだい」

「オツケー、じゃあ灰原ちゃんだ！」

奇しくも不知火さんと同じ呼び方をされることになった。不知火さんとは同級生と言っていたし、もしかして彼女の方が王馬さんに影響されたのかしら。

「オレが甘酒なら不知火ちゃんは何だろう？」

『じゃあ黒蜜がいい！』

『んん』

何も考えてなさそうな不知火さんの能天気なセリフに、バッジからは何かを堪えるよ

うな複数人の声が。ネタが通じる工藤くと阿笠博士と安室さんあたりかもしれない。コードネームの糖度が急角度で上がっていく。

『あの、あ、甘酒さん、もしよろしければ、電車内の状況を教えて頂きたいのですが……』
「ん？ 誰きみ」

『安室と申します』

『ほらドンペリのことだよ』

「ああ、あの人のことね！」

『ちよつと不知火さん、君の友人にまでその呼び名を広めているんですか!?!』

『んんん……っ』

止まらない環状線の電車内。工藤くんが笑いを堪える声をBGMにして繰り広げられる不知火さんと安室さんのしょうもないコントに緊張を解されながら、私達はこの緊急事態の詳細を聞かされた。

ダンガンロンパ事件の被害者、通称“53期の17人”。あるいはDICEの最有力容疑者。

類稀な才能を持つ彼らには様々な国の組織が注目している。我々日本の警察も例外ではない。

身内に引き込む方法として現時点で最も有効だとされている脅迫勧誘方法は、犯罪組織DICEとの関連性を証明し、彼らの行動に特例的な正当性を持たせる見返りとして協力関係を結ぶこと……とされている。

しかし、未だに彼らはフリーである。

そもそもの話、どうして誰も彼もがあの17人に対して及び腰なのかと言えば、二つほど大きな理由がある。

一つ目は、彼らの外面は飽くまでも一般人であるということ。

ダンガンロンパの事件後、あれだけ世間を騒がせて雲隠れしたくせに、劇中での役名そのまままで戸籍を得ていることから、あの事件の被害者であることについては隠す気がないようだ。

しかし、DICEの関係者であることだけは徹底的に隠している。DICEの活動中でも『警察仕事しろ』のメッセージカード以外の証拠は何一つとして残していない。犯人に繋がるものが何も無いのだから、彼らと結びつくものも無いのは当然だ。

物的な証拠だけではない。いくら監視の目をつけようと、それらしい言動や動きなど、一度だって尻尾を見せたことが無い。それどころか監視中にDICEの犯行を起こ

して逆に無実を見せつけられたりと、完全にこちらの手を読んでいる。

ここまで来ると、本当に彼らがDICEなのか疑わしくなってくる。もしかしたら我々の勘違いなのでは？

何せ彼らとDICEと結びつける唯一の根拠は、放送されずに終わったダンガンロンパの脚本内にしかない。その記録すら既に彼らの雲隠れと同時に消去されている。

このように、表向きには凶悪犯罪に巻き込まれた一般人でしかない以上、無理やりこちらの業界に引き込むことはできないのだ。

そして二つ目。もし彼らに対して強硬手段を取った場合、どんな反撃をしてくるかが分からないという点だ。

当然のことながら、DICE活動のような弱みを握らずとも、権力にものを言わせて彼らを従わせたら良いという強引な意見もチラホラあった。

しかしすぐに他の冷静な意見がそれを遮った。これについては、彼らがダンガンロンパ事件の被害者であることを隠していないことが大きな要因となる。

非暴力主義者である彼らが武力で反撃するとは考えにくい。

しかし考えてみる。もし彼らが、誰もが知るダンガンロンパという残酷な事件に巻き込まれた彼らが、警察機関に脅迫されたなどと世間に公表したら。

彼ら自身ではなく、その公表に憤った市民達の猛反発に遭うのではないだろうか？

自分とは関係ないところで起きた出来事を、自分の身に起きたかのように感じて感情的になるのはよくあることだ。

感情的になった人間は、原因がデマだろうと真実だろうと関係無く、容赦なくそれに対して攻撃する。特に匿名性がある環境であればその傾向は強くなる。正義感の暴走だ。

近年増加している誹謗中傷にまつわる騒動がそれを示している。

一度公表してしまえば、後は何をせずとも関係無い第三者達が勝手に燃料を追加して暴れ回るだろう。所謂炎上である。

鳴り止まぬ電話、送り付けられる抗議文、最悪の場合は暴徒化……大事になるのが目に見えるようだ。

暴動などは彼らの主義にも反しているからそこまで露骨に市民を煽動するような真似はしないと思うが……下手に藪を突くべきではない。

まあとにかくくひたすら扱いにくい連中なのだ。あの問題児どもは。

閑話休題。

東都環状線に仕掛けられた爆弾は五つとも無事に回収された。なんでも高校生探偵として名高い工藤新一の推理によって発見できたらしい。のに設置されていたという。

起爆の条件に電車の速度や日没が関係していたのは、日光が当たらない時間の長さに

よって起爆する仕掛けだったからだそうだ。確かに走行する電車の速度によって日光が遮られる時間も変わる。

……今日が雲一つない晴天で本当に良かった。

「こんな緊急事態でさえなければ、あなたとはゆつくりお話がしたのですがねえ……」

「オレは別にお話したいことなんて無いけどなあ」

ようやく電車から解放され、駅から降りてきた子供達に駆け寄ってハグする不知火さんの横に立つ男にそう話しかけると、わざとらしさを隠そうともしない笑みを浮かべた。そいつは予想通りの言葉を返してきた。

奴の名は王馬小吉。死人が出かねない凶悪犯罪を怪我人を出さないショーへと改変する、世界を股にかけて暗躍する愉快犯的な面白テロ組織DICE、通称サイコロ。

その首領の、最有力容疑者とされる男の名である。

ほぼ限りなくクロだと分かっているにも関わらず、彼とDICEを結びつける証拠が一切残されていないため、こちらが手を出すことができないという厄介な「自称」一般人だ。

「ともあれ、子供達を守ってください、ありがとうございます」

「いやいや、礼を言われるようなことなんて何もしてないよ。オレはただ面白そうなこ

とに首を突っ込んだだけだつて」

「ご謙遜を」

コナンくんのバッジの無線越しに聞こえる音声でしか判断できるものが無かったが、こいつは確かに乗客を守っていた。

いつまでたつても駅に止まらない電車。パニック状態になりつつある中、わざと気に障るような言葉を呟き、乗客の苛立ちを自分へ集めるような真似をしていた。泣いて騒ぐ子供へその矛先が向かないように。

その子をあやすための手品やジョークも他の乗客の不安を和らげた。

ただ好き勝手しただけと言われたら、そうだと納得するしかないかもしれない。

だが、客を飽きさせない手品の展開や話術で周りの意識を集めておきながら、それと同時に暴力沙汰にならないギリギリを狙うヘイトコントロールまで行うその手腕は、見事と言わざるを得なかった。

この男なら、その気になれば世論のコントロールもできるだろう。無理矢理従わせるのは厭しいだろうな。

「ご職業は何なんですか？ ショーを生業としている方とお見受けしましたが」

「さーて、ヒミツの情報筋でとつくにご存知なんじゃないの？」

「まさか、僕は一介の私立探偵の身ですよ」

「またまたあ、ご謙遜を！」

最早腹の探り合いどころではない。互いに互いの腹をかつ捌こうと得物を突きつけ合っているかの如く露骨な会話である。

不知火さんが「この辺りめっちゃ匂う！ スゴク胡散臭い！」と叫んで子供達を連れて退散していった。あの子達に会話を聞かせないようにしてくれたのは有難いが、異臭が発生しているかのような言い方はやめてほしかった。既に周りからの視線が痛い。

やはりこの男には僕のことなど既に筒抜けになっていた。幼馴染が便宜を図ろうとして所属を明かしたと言っていたのは本当だったようだ。

悪用こそしないだろうが、何でよりにもよってコイツに……とは思う。

「この度はどのような目的でこちらに？」

「大した理由なんて無いよ。強いて言うなら不知火ちゃんとおしゃべりすることかな。ちよつとしたカウンセリング的な？」

「……そこまでするほど彼女に問題があるようには見えませんが」

「うーん、不知火ちゃんってああ見えて核より怖いところがあるんだよね。頻繁に様子を確認しとかないと色々ヤバいんだよ」

気心の知れた仲間内でも危険物扱いされているのか彼女は。分からなくもないが。

自分自身や物体を瞬間的に離れた場所へ移動させる不知火さんの特異的なチカラは、

所謂テレポーターションだと思われる。

触れずに物を動かすテレキネシスや、発火現象を操るパイロキネシスと違い、ただ物品の移動などにしか使えない地味なチカラに思えるが、本当は凄まじい破壊力を秘めている。

どれほど頑丈な壁でも、部分的に“引き寄せ”を行えば簡単に穴が開く。要はその物質の強度や性質を丸々無視した破壊行為が可能なのチカラなのだ。生体に対して行えばどうなるかは言わずもがな。

核よりも恐ろしいと言うのも過言ではない。

「悪いけどオレも暇じゃないし、お話はこの辺で切り上げちゃっても良い？」

「ええ、そうですね。僕もやるべきことがあるので、これで失礼します」

非常に惜しいが、そうするしかない。

直後、イヤホンから風見の硬い声が流れる。

『監視をつけますか？』

「いや、要らない。どうせ撒かれる」

『しかし……』

「それよりも今は爆弾犯の方だ」

神出鬼没の不知火さんと一緒にいる以上、どうやったって監視は意味を成さない。変

に食い下がってまた彼女に変な目で見られるようになるのは御免だ。

それに先程、毛利さんから連続爆弾事件に進展があったと連絡があった。犯人がある建築家の作品ばかりを狙っていることが分かったらしい。コナンくんも同行しているとなれば、僕も行くしかあるまい。

「それでは、僕はこれで失礼します」

「あ、そ。じゃあねドンペリ！」

「それは不知火さんにしか許していい呼び名ですよ」

重要参考人であろうその建築家の自宅へ向かうべく車に乗り込み、そして、大きな溜息をつこうとして。

「……は？　米花シティービルに、ですか？」

ちよつと意識を外していた間に事態は急転していた。

車に乗り込んで早速、焦りと怒りを隠しきれない語調の毛利さんから電話を受けた。

犯人は確保できたものの、最後の爆弾は蘭さんが出かけた先のビル——米花シティービルに設置されていると言うではないか。しかも爆発まで幾ばくも無いと。

どうしてこうもコナンくん達はいつもいつも事件の渦中にいるのか。心の中での溜

息が止まらない。

「お力になれるかどうか分かりませんか、僕もそちらへ向かいます。どうか落ち着いて！」

ああ、どうせ犯罪を止めるなら、直接お巡りさんに協力してほしいな……なんて。

まさか設計した本人が自分の作品を抹消しようとする連続爆弾事件を起こすとは世も末だ。予算や建築法の問題で完璧な左右対称にできなかったから？ それだけの理由で一体どれほどの人間の命を脅かしたのだろう。実に身勝手に許し難い。

一連の爆弾事件のラストとなった米花シティービルの爆発。その最後の爆弾を解体したのは俺達爆発物処理班……ではなく、高校生探偵の工藤新一からの助言を受けた一般の女子高生だという。

やむを得なかったとは言え、死者が出なかったとは言え、本来役目を果たすべき俺達は何も出来なかったというのは警察官として如何なものか。結局俺達がやったのは、他に爆発物が無いかを確認するくらいだった。

それを全て終え、やっとのことで帰路に着こうとしていた俺達を待ち構えていたの

は、やけに怖い笑顔をした同期を筆頭とするエリートサマ達であった。

「爆弾のことは本当に何も知らなかったのか？」

『知ってたわけじゃないよ！もし知ってたら江戸川くんに爆弾を追わせるような真似なんてさせなかったってばあ！』

エリート達は不知火との貴重な相互連絡手段を持つ警察官である俺達に用事があった。

苦笑いをする萩の隣に座り、俺には彼女へ電話をかけさせ、そのスピーカーにピタリとボイスレコーダーを当てて息を潜める超エリートな同期サマ。その顔の怖いことと言ったらまあ。

しかしこうなるのも仕方ない。

この同期は、あろうことかこの街でサイコロのボスと接触したのだと言う。この絶好の機会を逃すまいと必死なのである。

優秀過ぎる彼らをどうにかして味方に引き込みたい違法作業上等なエリート達は、犯罪組織であるDICEとの繋がりを証明し、弱みを握る協力し合う形で確保したいようだ。

エリート達はバカみたいに耳が良い不知火に気配を気取られぬよう、俺に喋らせるセリフを声には出さずスマホのメモ機能のカンペで示してくる。

俺は大人しくその通りに読み上げた。

「そう言えば友達と会う約束してたんだってな？ そいつとは会えたのか？」

『うん、会えた』

「今一緒か？」

『いや、いないよ。用事があるってさ』

エリート達に激震走る。

サイコロのボス、もういないってよ。

いやまあ、あの不知火と接触した時点でアリバイも何もかも、とにかく存在証明に関わる全てがアヤフヤのパーになるのだから仕方ない。時々世話になる俺達もよく知っている。

『どうしたの？ 話がしたかった？』

「ん？ ああ、まあ……そうだな。たまには声ぐらい聞きてえ……かな」

『そっか、伝えとくねえ』

正直あの王馬から電話を寄越されたところで話題に困るだけなんだけども。

あの17人とは萩経由で知り合った。

当時世間を沸かせていた集団が訪ねてきたことは勿論、その中にシレッと同期まで混じっていたことにも驚かされたが、事情を聞いた限りではあいつらと一緒に雲隠れした

方が良さそうだと判断するしか無かった。

当時散々警視庁とやりあっていた悪ガキ共ではあったが、裏で行われていた仕打ちを考えれば紛れもなく被害者だった。改善されかけていたとは言え、あいつらを再びそんな環境に押し込むのは流石に良心が咎め、萩達と代わる代わる匿うことにしたのだ。

そんな奇妙な縁もあり、あいつらの安否が全く気にならないわけではない。どんな形であつても全員元気でいてほしい。

で、サイコロとして活動するぐらいなら本格的にお巡りさんに協力して欲しい、と言うのが更なる本音。

閑話休題。

その後、不知火と他愛もない雑談をしてから通話終了。特に大した収穫は無し。

「やっぱりあの時に捕まえておけば良かった!」

受話器のアイコンを押しした途端、エリート同期こと降谷が心底悔しそうに吼えた。

「いやでも、今回王馬は何もしていないんだろ?」

「そう、そこなんだよ……」

王馬小吉が人前に堂々と姿を見せること自体が滅多にない。警察関係者の前に出てくるなど言わずもがな。

そこまですておきながら、今回の一連の爆弾事件には全く関わる気配を見せなかつ

た。それが不可解だと降谷が唸る。

「……不知火さんが萩に電話をかけたと知った時点でおかしいと思うべきだった。奴ら
がその気だったなら、コナン君が爆弾と接触するなんてことは起きなかった筈だ」

D I C E が本気で犯罪に対抗した場合、爆弾や銃火器のような脅威は真つ先に取り除く。あいつらは犯罪の被害者を出させないことを第一にして動くからだ。

あいつらならとづくに全ての爆弾をビックリ箱にでもすり替えておきそうなものだが、今回の事件の爆弾についてはなんと全くのノータッチ。不知火ですら事件解決に動く素振りを見せなかった。

「事件に関わる気が無かったなら、何故王馬小吉が現れたのかが尚更分らない……」

何故王馬が現れたのか。現れたのに事件に関わらなかったのは何故か。事件に関わらなかったのに王馬が現れたのは何故か……。

グルグルと思考が堂々巡りをし始めた降谷を見かね、萩が言った。

「クシビちゃんも王馬も、どちらも爆弾の被害に遭いかけたことは事件そのものを予見してなかった可能性が高いけど、そもそも彼らが事件を把握してなかったこと自体が珍しいと思わない?」

「それは……確かに」

大量の爆薬オカストゲンが盗まれたことは秘匿されず報道されていた。

いつものあいつらなら爆弾事件を起こされる前に盗み出した犯人を特定していそうなものだが、それすらできていない。やけに反応が鈍過ぎる。

「王馬の思わせぶりな行動もそうだけど、俺は病院で見たクシビちゃんの状態も気になるんだよね」

「不知火さんの態度？」

「あいつ、ヤケに冷静だったよな」

「陣平ちゃんもそう思った？」

萩の言う通り、警察病院で会った時からずっと引つかかっていた。

あの大人しきはいっそ不気味なほどだった。

「冷静って……確かに彼女の警察嫌いは知っているが、特に理由も無く反抗的になって捜査を邪魔する程でもないんだろう」

「うーん、どうだろうねえ」

「あいつ長時間警察関係者に囲まれるとワケの分からねえこと言つてパニくるぞ。拷問されて晒し首にされる……って」

「いつの時代の話だ」

やたら怯えたり無駄に攻撃的になったり、不知火の警察アレルギーはどうも実体験からくるトラウマが原因に思える。それこそ実際に生首でも見たかのような……。

「マアあいつの年齢不詳疑惑は今に始まったことではないのでそれはさておき。

「そんなに様子がおかしかったか……?」

「俺や陣平ちゃんのように慣れてるやつだけならともかく、ピリついてる警察官相手にあれだけ落ち着いていたのはちよつと気になる」

「今回の不知火さんは完全に被害者だろう。いつも通り正直に話せば済むからじゃないか?」

「まあ確かに、あいつが聞かれたことを何でもホイホイ答えるバカ正直者つてのは間違いない」

「それにもう一つ。彼女は必ず約束を守る」

「ああ、それは分かる。一度約束させたことに関してはどこまでも律儀だ」

折り返いが悪くても不知火と取引したことはあるらしい。ちよつと意外だった。

しかし、肯定する降谷に対して萩はゆるゆると首を横に振る。

「違う違う、そういうレベルの話じゃなくて」

「どういう話なんだよ」

「彼女との約束つて常軌を逸してるんだよ。例えば……じゃなくて、これは実際に俺が体験したことなんだけど」

「実体験か?」

「カフェで好きなの奢るから福引で掃除機当ててくれない？ つて冗談で言ったら本当に一発で当ててくれたことがあって……」

「怖い話をしろとは言っていない」

そこまでしてまで甘味に執着する様に慄けば良いのだろうか（すつとぼけ）。

「とにかくクシビちゃんは何が何でも約束を守る子なんだよ」

「嫌と言うほどよく分かった」

「だからさ、誰かとそういう約束をしていたなら、苦手な警察に囲まれても完璧な平常心を保っていられるんじゃないかと思って」

「そういう約束……？」

単純に、素直に警察の取り調べを受けてくれという約束か？

それとも、その上で更に別の目的があるとか？

例えば……。

「そもそも零^{ゼロ}が王馬のことを知ったのは、病院でクシビちゃんが彼に連絡したからだよね」

「そう、僕の目の前で……いや、そんなまさか」

「病院で大人しくしていたのは、お前に王馬の情報を流すチャンスを伺っていたから

……かもしれないってことか」

「!?」

衝撃を隠せませんという顔をする降谷。

そこまでして、不知火が王馬の情報を警察の前に落とさねばならなかった理由とは。

「王馬は何らかの罠に過ぎなかった……?」

「だな。自分がどれだけ注目されるか分かってるなら、あり得ない話じゃねえ」

つまり、奴らの本命は別にあるということだ。それを警察に対して隠しているなら、大成功という訳である。

これならあいつらが今日の事件に関わらなかつたことにも納得がいく。爆弾魔そっちのけで優先しなくてはならないほど重大な本命があるのならば。

「僕が彼女を騙すことはあるとしても、彼女が僕を騙すことなんてあるのか!? あの何も考えてなさそうな不知火さんが!」

「どういう歪んだ信頼の仕方してんだよ」

「彼女達は命懸けの騙し合いゲームで世界を欺いたんだ。それを言うのは今更じゃない?」

「くっ……」

よっぽど不知火に謀られたことがショックだったらしい。気持ちは分からなくもない。

だが、あいつらの経歴から考えれば不思議なことではない。あいつらが騙すことも、そしてこちらが騙されてしまうのも。

そもそも不知火は、ダンガンロンパの劇中でも怪しい見た目に反したおとぼけキャラという立場でありながら、それでいて王馬と共に黒幕を嵌めた奴だ。故意にしろそうでないにしろ、無害だと思わせてからの奇襲の威力が致命的なほど高い。

「……景光^{ヒコロ}から聞かされていたんだ。不知火さんに、近々友人と会う予定があるらしいと」

「それで、事件に巻き込まれたクシビちゃんを病院にいと知って様子を見に？」

「諸伏にリークされることを見越していたのか……はたまた諸伏もグルだったとか」

「冗談でもやめてくれ。後でキツチリ問い質すつもりではあるが……」

不知火と諸伏はお互いを利用し合う関係だ。騙し合うことも無きにしも非ずといったところか。

むしろ普段は不知火の方が諸伏にいいようにされてそうだ。諸伏が甘え上手と言うより、まず不知火がチョロ過ぎる……。

「結局本当に不知火さんにそういう意図があったかは分からないが、何の意味も無く王馬が出てくるとも思えない……やはりそういうことなのか？」

「この際クシビちゃんの真意は気にしない方が良いんじゃない？」

「いくら考えたところでただの徒労に終わる気もするぜ」

「……それもそうだな……」

不知火に關してはいつも通り何も考えてない可能性だつてある。病院では偶々機嫌が良かっただけなのかもしれない。

嘘だらけで翻弄してくるのが王馬なら、不知火は周りが勝手に深読みして勝手に踊つてるようなもんだ。本人にその気があるかどうかは大した問題ではない。

「今日よりもっと大きな事件が起こるとするなら、それこそ黙つてるわけにはいかないんだが……」

「いつそ不知火に直接真相を聞いちゃえば？ あいつ嘘は言わねえんだし」

「美味しいもの用意して『隠してることを全部教えて？』つて優しく質問すれば一発だよ」

「仮にその通りにしたところで『やだあ』の一言で終わるのが目に見える……」

「好感度が足りてねえからだろ」

「下がるイベントしか起きないんだよ!!」

この気の毒な同期は相変わらず深刻なバグに見舞われているようだった。

「まあ彼女が本気で隠す気なら何をしても教えてくれないだろうけどね。約束は必ず守る子だから」

「クソツ、そうだった。危うく料亭の予約入れるところだったじゃないか」

「いやあ、そもそもお前の呼び出しに応じてくれるかも怪しいんじゃないの？」

「薄々そんな気はしていたが、いざ口に出して指摘されると傷つくものだな……」

俺や萩の呼び出しにはホイホイ応じるのに、何故降谷にだけここまで厳しいのだろう。

「王馬小吉を囿にしてまで、俺達^{公安}の目を逸らしたい何か——か」

「クシビちゃんには本当に何も知らなくて、王馬は警察をおちよくりに来ただけというパターンも考えられなくもないよなあ。あいつらの性格からして……」

「うんんんん」

果たして降谷の明日はどっちだ。

ビルとサイコロと、爆発と ③

連続爆弾事件が解決して間も無くのこと。

江戸川コナンは少年探偵団のメンバーらと共に、阿笠博士の代理である沖矢昴の引率で郊外へキャンプをしに行った。

崩壊するビルの中に閉じ込められ、幼馴染と共に命懸けの爆弾解体デートを敢行したばかりの彼は、正直とてもそんな呑気なことをするような気分にはなれなかった。

しかし、事件に巻き込まれた己を純粋に心配する小学生の友人らに、気分転換を兼ねて行こうと言われたら、流石にそれを無下にすることはできなかった。

小学生のフリをすることに時々苦痛を感じることはあるが、自分を慕う友人らのことは大切に思っているのである。

そしてそのキャンプの帰り。

子供達の提案により、行き道中で見かけた西多摩市のツインタワービルに寄ったのだが、そこで彼は数々の衝撃的な出来事に出くわすこととなる。更にその晩、ツインタ

ワービルで殺人事件までが発生した。コナンの周りでは林檎が木から落ちるくらい自然なことである。

その翌日、事件の参考人として警察署に呼ばれたコナンと沖矢は、帰りに情報を整理するため一度工藤邸へ寄ることにした。

コナンの本来の実家であるその工藤邸に居候している謎多き大学院生、沖矢昴。もとい、FBI捜査官の赤井秀一。似た秘密を抱える者同士だけで密談するために。

「不知火さんの友達がいたのに、どういふことなんだよ」

たまたま寄っただけのつもりだった西多摩市のツインタワービルの前で、コナンは幼馴染の蘭やその父である毛利小五郎、そして鈴木園子といった見慣れたメンバーと鉢合わせた。

なんでも小五郎の大学時代の後輩がビルのオーナーをやっており、その誼で彼らは招待されたのだという。

そんな偶然だけでもコナンは十分驚かされたのに、出迎えたオーナーのその秘書の後ろで静かに控える人物を見て思わず二度見した。つい最近、サイコロの扱いに悩まされる知り合いのFBIが見せてくれた写真に、その顔が載っていた気がしたのだ。

更に三度見、四度見。

そして恐る恐るその人物の名前を訊ねてみて、それからようやく確信した。

「オーナーのお手伝いとして雇われてた東条斬美キルミさんって、超高校級のメイドだった人だよな」

「ああ、間違いない」

元「超高校級のメイド」こと東条斬美。ダンガンロンパ事件の生き残りである17人のうちの1人だ。

依頼とあらば食事からボディガードまで何でも完璧にこなしてしまいうスーパーメイドさんであり、現在はフリーランスの家政婦の仕事をしているという。

「あの人たちも表向きにはカタギとして働いてるみたいだから、それだけなら単なる偶然で済ませられたんだけど……」

東条との思わぬ出会いを疑わしいものに変えたのは、その後に起きたことである。

「あの黒いポルシェのことだな」

「確証は無いけど、でもアレは、ジンの車だった」

自分達がいるビルの前に因縁深い車が停まったのである。その時のコナン達の心中たるや如何に。

自分達が追う組織の影。そして例の17人。

どう考えても無関係だとは思えなかった。

「これはもう、ツインタワービルで組織が仕出かす何かにDICEが乗じる……としか

思えないんだけどなあ……」

「そこで殺人事件が発生したことが引つかかっているのか」

「それなんだよなあ……」

コナンがツインタワービルを訪れたその日の夜に起きた殺人事件。

殺害されたのは西多摩市の市議会議員。場所はビルのスイートルーム。犯人はまだ捕まっていない。

「あのDICEのメンバーがすぐ近くににいるのに殺人が起きたのが腑に落ちねえ。何で阻止できなかつたんだ？」

「その理由ならいくつか考えられる」

サイコロことDICEは、コロシ^殺アイ^人阻止のために犯罪を乗っ取る面白テロ組織として知られている。コナンの周りで滝の如くボトボト落ちる林檎を唯一枝に留めておける可能性を秘めた組織でもある。

そんな彼らでも殺人を見逃すパターンはあると、赤井が言う。

「一つ目は、単純に事件発生を予見できなかった場合」

「あー、それは仕方ないかも」

「連中の仕事は綿密に計画が練られている。十分な下調べができない場合は見送るしかないのだろう」

突発的な犯行を防ぎようがないのはコナンにも理解できた。

「二つ目は……まあ、気分だ」

「き、気分？」

「彼らにとつてDICEの活動は義務ではない。仕事が忙しければそちらを優先するだろうし、メンバー同士の都合が合わないこともあるだろう」

「随分所帯じみた理由だね、いや分かるけど」

「——もしくは、被害者が助ける価値の無い人物という場合もあるかもしれない」

「それって……」

「連中が優先しているのは、どちらかと言えば人命よりも心だからな」

殺してやりたいほどの憎悪は復讐で晴らすべきとまでは考えていないだろうが、そこまで恨まれるようなことをした人間を、自分達がリスクを負ってまで助けるつもりも無いのだろう。

それほどの憎悪があるなら、一度殺人を止めたぐらいでは諦めない。また別の機会を狙って再び同じことを繰り返す。如何にコロシアイを厭うサイコロと言えど、そこまで決意が固い人物を説得する気は無いのだろう。

——と、赤井は絶句するコナンにそう言った。

コナンは基本的に殺人を犯す者が絶対悪だと思っっているが、殺されても仕方ないほど

の所業をしでかした被害者がいることも知っている。それ故に殺人犯の動機を許容するDICEの方針に対して複雑な思いを抱いた。

元から悪の組織を自称しているだけのことはある。自分の正義と彼らの正義が異なるだけなのだろうと、自分に言い聞かせることにした。

マア基本的に人死を減らそうとしているのだから、無遠慮にじゃんじゃか死体を増やす傍迷惑な黒い某組織と比べれば随分ありがたい存在ではある。

「さて三つ目だが」

気を取り直すように赤井が三本目の指を立てて話を続けた。

「事件に構ってられないほど、大きな案件を抱えている場合だ」

「えっ、あの人達って殺人の阻止以外にも活動してるのか？」

「殺人に限らず、人が無闇に死なずに済むようにアレコレと手回ししていると云うべきかな」

「前に言ってた人助けのボランティアのこと？」

「そう、それだ」

赤井はコナンは知らないであろう事例をいくつか知っている。

例えばアメリカのある大企業で起きた件。

社長の養子であったギフトテッドの少年がビルから飛び降り自殺してしまったのだが、

後にDICEに救出されていたことが判明した。その少年は現在、日本で実の父親と共に暮らしている。

例えばある反社会組織に潜入中だった日本の公安警察官。

NOCであることが露見し、一時は自決も決意したが、たまたま遭遇した17人となんやかんやあつて今も元気に生きている。

「ボウヤが知らないのも無理はない」

「誰も死ななければ事件にならないもんな」

「そういうことだ」

事件になり得ることを事件にさせない。

DICEの本懐はコロシアイ阻止。なので、その活動の殆どは目立たない。

家族の仇打ちを果たそうとした月影島の医師然り、美國島の巫女然り、コナンや赤井が実際に目にしてきたサイコロの暗躍の結果も、それほど大きなニュースにはならなかった。せいぜい地方紙の隅にその顛末が簡略的に掲載される程度だった。

大きな犯罪を失敗させて『警察仕事しろ』のメッセージを残すという、DICEと聞いて真っ先に思い浮かぶあのふざけた一連の活動は、おそらく犯罪を未然に阻止しきれなかった場合の苦し紛れではなからうか。

あるいは、恐ろしい犯罪が起きかけたという事実より、サイコロがまたバカやったと

いう印象を世間に植え付けるためのパフォーマンズか。

そうすれば、人々が受けるショックは少なくて済む……。

いや待て。

まるであの17人が聖人のようになってきたので、赤井は頭を軽く振って思考を一旦中斷した。

そもそも聖人は警察機関に喧嘩を売ってきたりしない。やはりあいつらは頭が回るだけの悪ガキである。

「話を総合すると、東条さんがツインタワービルにいた理由は、昨日の殺人事件とも組織とも関係無いかもしいないってことか」

「彼女の家政婦としての評判はなかなか高いらしい。ビルのオーナーの目に留まるのも不自然ではない。ただの仕事中だったという可能性も十分ある」

「でもなー……同じところに東条さんがいたこととジンの車が停まったことは、どうしても無関係だとは思えねーんだよ」

「確かに全てを偶然として片付けるには出来過ぎだが、如何せん情報が足りない」

少しでも怪しげなことがあると、どうしても事件に結びつけたがるのは探偵のサガなのだろうか。探偵に優しいこの世界では、いくら深く疑っても考え過ぎにはならないのである。

冷静な赤井とは裏腹に、コナンはウンウン唸つてあーでもないこーでもないと考えを巡らせ、やがて彼は据わつた目で携帯電話を取り出した。

「いつそ不知火さん呼んで直接聞いちまうか」

「待て、ボウヤ、待て」

いつかの「正直に謝れたで賞」で贈呈された貴重な不知火^{くしび}の電話番号をしようとして、赤井に止められた。

「そんなことをしたらこの場が地獄になる」

「いくら何でも地獄は言い過ぎじゃない?」

「よく考えてみる。ボウヤは彼女に正体を伏せているが、本当に誤魔化せているという保証はあるのか?」

「あつ」

諸事情によって体が小学生のそれへと縮んだ高校生、工藤新一こと現江戸川コナン。

諸事情によって架空の人間の変装をして日本に潜伏中のFBI捜査官、赤井秀一こと現沖矢昴。

諸事情によってデスゲームの生き残りとなった自称ダンロン以前の名前は不明不知火^{くしび}。

そんな秘密だらけの三人が集まればどうなるだろうか。

まずコナン少年。

彼は赤井に対しては問題無く自然体で話せるが、不知火に対しては自分が高校生であることを伏せているつもりでいる。それが本当に通じているかは分かっていない。

沖矢の正体については勿論知っているが、不知火もそれを知っているかどうかはハッキリ判別がついていない状態である変装が見抜かれていることは知っているこれはボウヤに伝えてない赤井が悪い。

次に赤井秀一。

彼はコナンと不知火、どちらにも正体を明かしている。

不知火の異常性をそれとなく知っているが、それをコナン少年に教える気はない。

そして、不知火がコナンの正体を知っているかどうかを明確に把握していない。

最後に不知火。

彼女はコナンのことをちよつとませた子供としか思っていないし、ましてやFBIの捜査官らとの親交が深いだなんて夢にも思っていない。

沖矢とは互いに正体は明かしており、向こうに自分の異常性やサイコロとの関係性を知られていると薄らながら認識しているが、探偵を目指す純朴なコナン少年には自分のチートを知られたくないと思っている。

——とまあ、三人が三人ともどこまで情報を開示すべきか、どこまでラフに話して良

いのか分からず、誰も口を開けない状態に陥る事態を赤井は危惧したのだ。さながら秘密の大渋滞、にっちもさっちもいかぬグリッドロック。

ちなみにその判断は大正解である。

「仮に彼女がボウヤを本気で小学生だと思っていたら、組織やDICEの話をするのは尚更マズイだろう」

「あぶねっ、そうだった……」

「なら、こうするのはどうだ？」

子供に甘い不知火霊から情報を引き出すにはどうしたら良いか。

赤井の提案に乗ったコナンは、それから間も無くして工藤邸から出発した。

昨晩の事件に触発された少年探偵団が余計なことをしないかを心配したのだが、果たしてその予感は的中した。日がとつぷり暮れるまで、彼は無鉄砲な子供達と共に事件関係者の家を回ることになる。

二日前、オレ達はキャンプの帰りに寄ったツインタワービルで会ったプログラマーの原佳明よしあきさんと彼の自宅へ行くという約束をした。子供達に試作のゲームを遊んでもら

い、その感想を聞きたいと言っていたのだ。

歩美、元太、光彦の三人組に灰原とオレを加えたいつも五人。そして、保護者役として沖矢さんこと赤井さんにも付き合ってもらい、そこにやや強引ながら不知火さんを呼ぶことにした。子供からの誘いなら領いてくれるだろうと思って試しに電話したら、思った通り簡単にのつてきてくれた。

これで彼女から話が聞けそうだと思っていた矢先、思わぬ事態に遭遇してしまう。

原さんは、オレ達が彼の自宅を訪れた時には既に亡くなっていた。何者かに射殺されると言う最悪の形で……。

「おねえさん、大丈夫？」

「あんまじだいじよばない……」

「ゲームできないからって、そこまで落ち込むことねーだろ」

「そういう理由じゃないと思いますよ元太くん」

原さんの自宅を検分する警察官が慌ただしく出入りする中、不知火さんはマンションの入り口に戻って三角座りでじっと俯いていた。遺体が発見されてからずっとこの調子だ。

殺人を極力阻止したい彼女達からすれば、他殺体との遭遇は相当ショックなことなのだろう。

「きみたちタフなのね……」

「そりやあ怖いですけど、ボク達は少年探偵団ですからね！」

「キッツのガッツすんごい」

殺人現場に慣れた子供つてのもどうかとは思っけどなお前が言うな。

好奇心や英雄願望が強い真正正銘の子供である三人はさておき、明らかに知識量や精神年齢がおかしいオレや灰原に対しても特に疑問を抱かない不知火さんは、ある意味とても貴重でありがたい存在だった。オレの周りには詮索好きばかりが集まるからなお前が言うな。

「そう言えば、原さんと会った西多摩市のツインタワービルで、あなたの友人と会いましたよ」

「ここでそれを切り出しちゃうの沖矢さん。

「あのメイドさんでしょ？ 歩美も覚えてるよ！」

「すげー人だったよな」

「仕事ができる人つて、ああいう人のことを言うんでしょうね」

子供達が反応する。

ツインタワービルのオーナーである常盤美緒さんが、仕事で忙しい自分の代わりに家事を任せるお手伝いとして雇ったのが東条斬美さんだった。

家事だけでなく、唐突な来客であるオレ達にもビルのパンフレットを配ったり、お茶の用意をしてくれたりと、まさに痒いところに手が届くような敏腕ぶりだった。美緒さんの秘書である沢口さんも、実は自分もしょっちゅう彼女に助けられていると、子供達だけにこっそり教えてくれた。

話の流れで改めて自己紹介したら、穏やかに微笑んで存じ上げておりますと言われて驚いた。どうやら不知火さんの米花町の友人として把握されているようだった。

「メイド……ああ、キルミちゃんのことね」

「わ、随分砕けた呼び方をするんですね」

「仲良しさんなの？」

「そうだよ」

大人達が大人達だけで世間話をし始め、ビルからの眺望にも飽き始めた頃、子供達は東条さんに軽い手品等を見せてもらったり、クイズを出してもらったりと、何かと構ってもらったらしい。初対面でありながらも懐いたようだった。

彼女のアレがすごかったコレが凄かったと、興奮気味に東条さんの完璧超人ぶりを話す子供達に、不知火さんはウンウンと頷いて付き合っている。少しは気分が晴れたようだった。

この調子なら、東条さんがあの場にいた理由や、ジンの車に関しても何か情報が引き

出せるのではないか？

沖矢さんと目配せし、いよいよ動こうとしたオレに待ったをかけたのは、思わぬ人物だった。

「工藤くん、何を考えてるの？」

「エッツ」

背後から灰原がジトリとこちらを見据えてそう言った。

途端に沖矢さんが何も見ていないフリを始める。この人本当に灰原に弱いな！

「な、何のことだよ」

「五年前のデスゲーム事件」

「アツ」

「不知火霊、東条斬美、王馬小吉……以前会った最原さんや赤松さん達もそう。全員あの事件の生き残りよね」

ついにバレてしまった。

「い、いつから……？」

「確信したのは東条さんが不知火さんの友人だと知った時よ。でも、疑惑自体は最原さん達と出会ったあたりからあったわ」

「だいぶ前じゃねーか！」

だがオレと似た立場の灰原ならあり得る話だ。五年前と言ったら、オレも灰原も中学校に上がる前後の年齢。事件のことを覚えていても不思議はない。

あれだけ世間を賑わした事件の関係者の名前が揃えば、痕跡が消された今でも事件のことを連想できるだろう。特に不知火さんや東条さんの名前なんてかなり特徴的だし。

とは言え、オレも赤井さんにハッキリ教えてもらわなければ、確信に至るまでもっと時間がかかったかもしれない。

「まさかとは思うけど、彼女達を私達の事情に巻き込もうだなんて考えてないわよね」
「ウツ」

「何を考えてるのよ、いくら才能があるからって組織に関わらせるなんて」

アツ、これDICEとの関係までは分かってないやつだ。

サイコロごと不知火さん達が既に組織とバチバチにやり合っていると知ったら、灰原はどうな顔をするんだろう。

「唐突に彼女を呼ぶからおかしいとは思ったけど、そんな危険なことを……」

ダンガンロンパのメンバーだと知られたなら、もうDICEのことも言ってしまったても良いような気もするけど。

どうしようかと確認するつもりで沖矢さんの方をチラリと見たら、あの人は子供達と不知火さんの会話に参加していて、オレの方は見てもいなかった。

オレだけこの空気に取り残さないでくれる？

「あいつらの恐ろしさはあなたも分かっているでしょう？ 人を消すことに何の躊躇いも無い残虐な連中だつて」

不知火さん達はそういう連中に全力でホラー風のドツキリメリーさんを仕掛けて精神病院送りにした人達だよ。

と教えてやりたかった。

「とにかくそれだけは認められないわ。あんな奴らのせいで親しい誰かが死ぬなんて、もう嫌よ……」

「灰原……」

たった一人の家族であるお姉さんをジンに殺された灰原からしてみれば、そう切実に思うのは当然のことだった。

流星に配慮が足りなかったな、と反省する。

「……悪かった」

「いいの。分かってくれば、それで……」

「つーか、その」

「何？」

「そこまで不知火さんに気を許してるとは思わなくてよ」

旅行に誘われたらそれに頷くような仲だとは知っていたが、事情を知る博士やオレや、同級生である歩美達と同列レベルの仲間意識を持っているとまでは思っていないかった。

純粹な疑問を投げかけると、灰原は言いにくそうにこう答えた。

「変な話だけど……」

「おう」

「独特の安心感があるのよ」

「安心感？」

「この前の旅行もそうだったけど、不知火さんと一緒にいると物騒なことが起きにくい気がするの……」

それって言い換えると、オレ達と一緒にだと物騒なことが起きやすいということになるんだけど。

全く自覚が無い訳でもない。行く先々で事件に巻き込まれるのはどうしようもない事実だ。

でもオレのせいじゃねーぞ犯人が原因なのでこれは正論!?

「それに……」

「まだあるのかよ」

「私が何をしても全く詮索してこないから、一緒にいても気が楽なの」

「オイ」

それって言い換えると、詮索してくるオレ達がいると居心地が悪いということになるんだけど。

いや仕方ねーじゃん！ 組織の気配に鋭いお前の挙動が気になるのは当たり前だろ

！

今日だって、お前が真夜中にどこかへ電話してるらしいと博士から聞いたばかりなんだ。危ないことをしてるんじゃないやねーだろーな？

奴らに関することならどんなに些細なことでも知らせてほしい。オレや灰原だけじゃなく、周りも守れるように構えておかなくちやいけねえんだから。

むしろそれに関しては不知火さんが鈍感過ぎるのだとオレは思う。

あの高木刑事でさえオレの精神年齢を訝ったり知識量に感心したりするのに、あの人はオレが何を口走ろうと平気でスルーする。物知りだねえの一言で済ませる。

オレの周りにはやたら謎解きに長けた……と言うより謎は解かねば気が済まないタイプの人間ばかり集まるが、不知火さんは謎のままに許容できるという稀有なタイプだった。単に推理が苦手なだけなのかもしれないけど。

「普通の一般人とまでは思っていないけど、あのデスゲームの生存者なら、あの組織ほど

後ろ暗いことはしないでしようしね」

それどころか積極的にそういう後ろ暗い連中の顔面にパーティ用のクリームパイを叩きつけていくような人達だよ。

と言ってみたかった。

「だから、私達の問題に巻き込まないであげて」

「まあ……うん、ソウダナ」

サイコロとの関係性とその所業を知っているか否かで、ここまで認識に激しいギャツプが生まれるとは。

ああ本当のことを言いたい。

ダメかな赤井さん？

「ボウヤが彼女の気を引いてくれていたおかげで、興味深いことが聞けたぞ」
「えっ」

事件の実況見分とオレ達への事情聴取が終わり、不知火さんと子供達と別れた後のこと。灰原が阿笠博士の家に入っていくのを見届けた沖矢さんが不意にそう言った。

そもそも不知火さんを無理に呼んだのは話を聞くためだったので、手がかりを得られ

たのは不思議なことではないが……ただ灰原の詰問から逃げてただけじゃなかったのかと驚いたのは内緒である。

「不知火さん、何を言ってたの？」

「いや、話を聞いたのは子供達からだが」

「そっち!？」

結局聞けてねえのかよ!!

「元太達からそんなに重要な話が聞けるとは思えねえんだけど……」

「それでもない。少なくとも今日の事件の全容が察せるほどのものだ」

「そこまで言うう?」

露骨に訝しむオレに対し、沖矢さんはニツと笑ってこう言った。

「あの子達は、警察が原さんの家から事件とは関係無さそうなあるものを運び出すところを見たそうだ」

「あるもの……?」

「精巧な作りの、西洋人形だよ」

ビルとサイコロと、爆発と ④

現場は西多摩市のとある小高い山。富士山が見える道路脇の歩道に私達は立っていった。

そこから遠目に見えるのは、荘厳な富士山を背景にして並び立つ二つの高層ビル。

高さが少し異なるそのビルは、まるで仲の良い男女が寄り添っているかのよう。

マアこれから爆破されるらしいんだけど。

仲の良いカップルを祝うスラングとしてリア充爆発しろとよく言われるが、どうやらそれは建築物にも適用されるようだった。

「このふざけた見た目だけが残念でならない……」

「アンタ自身の希望でそのデザインになったんでしょうがよ」

「まあまあ、誰にも見つからなければ良いんだし」

「見つかったら社会的にしんじやうね」

「言うな。分かっているから」

イカれたメンバーを紹介するぜ！

角無し雌鹿頭の私！

折れ耳猫頭のニヤンさん！

そしてキュートな芝犬頭のドンペリ！

以上だ！

と言うか異常だ。

暇を持て余し気味な私にして珍しくギツチギちなスケジュールの中、成り行きでドンペリの仕事を手伝うことになった。

先日の仕事に引き続き、今夜はあるビルに忍び込んでデータを盗るためのサポートをする。そのビルこそが、今から向かうリア充タワーであった。

泥棒みたいな真似をするからか、ドンペリの服装もいつもの洒落たものではなく、人の印象に残りにくそうな地味でカジュアルなものを着ていた。ニヤンさんに至っては怪しいギターケースまで背負っている。それに加えてこのおふざけアニマルマスク……うーんとても不審者お前が言うな。

「このアイコン……マスクを被っている者同士の位置が表示されているのか？」

「そうだよ。周りの壁とか家具とか、人も勿論、お互いのある遮蔽物とかも検知して

自動でマッピングしてくれるんだ」

「下のメニュー画面に電波を検知して視覚化する項目がある。発信機の類が無いか一目で分かるぞ」

「くそつ、この見た目じゃなかったら普段使いしてやるのに！」

「でも可愛いよドンペリ！」

「初めて褒められたのに全く嬉しくない……」

見た目はデイスカウントストアで売られてそうなジョークグッズ。

しかしその中はロボットアニメに出てきそうなハイレベルなセンサーまみれのコックピット。

それが元「超高校級の発明家」たるミウちゃんが開発した、人間拡張アニマルマスクである。

「まずはコンピューター室から行くこうと思う」

「はいはい」

気を取り直したドンペリが指示を出した。

会話が外部に聞こえないように音声はマスクの外には漏れず、お互いのマスク内のスピーカーからしか聞こえない設定になっている。

聞こえてくるドンペリの声は真剣そのものだが、見た目は可愛いワンちゃんなので

ギャップが凄かった。

「ところで何でニヤンさんもあんなモン持つて参加することになったの？ パソコンいじるだけならドンペリだけでよくない？」

「ああ……個人的に気になることがいくつあつてな。念のため来てもらうことにした」

場所は変わり、現在地はリア充タワーの高い方であるA棟。その40階のコンピューター室。

ドンペリの用事があるのは、そこにあるT O K I W Aというグループのメインコンピューターだった。

照明が落とされた闇の中。一台だけ電源が入れられたパソコンの画面がボンヤリと照らし出す異様な動物頭達の姿は、まるで病気で魘されている時に見そうな悪夢のワンシーンであった。

「零ゼロが微妙に言葉尻を濁していたのを覚えているか？ 『データの確保 “など”』を手伝ってくれ』って……」

「あー言つてたね。やっぱ他に何かあるんだあ」

「何だ、ちゃんと気付いてて手を貸してくれているのか。騙した形になったかと内心ヒ

ヤヒヤしていた」

「ヒヤヒヤするくらいならばつきり明言しろよドンペリイ」

「すまない、あまり頼み事が多過ぎると協力を断られるかと思つて……」

「そういう何でもかんでも打算的などが好きになれないんだよドンペリイ……」

「職業柄仕方ないだろ」

今の時間帯は、75階のパーティ会場でビルのオープンパーティが開かれている。

でもつて、もう少ししたらドンペリの黒い方のお友達がこのビルを吹っ飛ばしちゃう予定らしい。

オープンパーティすらマトモに開催させてもらえないリア充タワーが気の毒過ぎるんだが。

マア要は、私達がこのコンピューター室に忍び込んで悪いことをするには、ビルが吹っ飛ばされる前の、警備の目がパーティの方に集中しているこのタイミングしか無かつたというワケである。

「……ん？　待て、好きになれない？　好こうとしてくれるのか？　俺のことは嫌いなんじゃない……」

「まあ、払いが良い相手にいつまでも苦手意識持つのは失礼だから、それなりに努力はしてる。そもそも嫌いな奴にここまでチカラを貸すほど私もお人好しじゃないよ」

「つまり本当は俺のことが好き……?」

「ついさつき好きになれないって言ったばつかなんだけど……」

ドンペリに警戒することは多々あれど、嫌うというほどでもなかった。

だけど好きにもなれなかった。

「お前がホストの類じゃないってのは分かったし、ニヤンさんとも親密だし、それなりに信用できる立場なんだろうとは思ってる」

「……」

「でも隙あらば私を隷属させる気にいるだろ。そういうところがダメ」

「……だそうだが」

「……」

ドンペリは黙ったまま。

やがて、夢から覚めたかのような声で言う。

「そうか……嫌われては、いなかったのか……」

「えっ、まだ話題そこなの」

「それほど衝撃的だったんだ、察してやってくれ」

「ふふふっ」

「ニヤ、ニヤンさん……」

「察してやって……」

その表情は芝犬マスクで見えなかったが、機嫌良く穏やかに笑うドンペリの声はかなり恐ろしく感じた。喫茶店での万人受けしそうな笑顔ではない時はいつも険しい響めっ面をしているイメージがあるので余計に怖かった。

それから程なくしてデータの確保作業は無事に終了。

次は何をするのかと聞けば。

「爆弾の量を減らしたい。せめてパーティーの参加客が避難できるぐらいには」

「んん？ 全部取っ払っちゃおうの？」

「できることならそうしたいところだが……実はそうもいかないんだ」

今回のドンペリには黒いお友達達の物騒な計画を防ぐ気が無かった。

いや、防げないと言うべきか。

爆破計画の発案から実行までが短いために計画の存在を知る人間が限られており、そこで完全に爆破を阻止してしまうと、その限られた人間が情報を流出させたとすぐにバレてしまう。結果的にドンペリにスパイの疑いがかかってしまうのだ。

まあ実際そうなんだけど。

本当なら看過などしたくないのだろうが、今後とも黒いお友達と仲良くやっていくには致し方ないことなのだという。ドンペリも大変だ。

「安全にビルを爆破させようってか。難しいことおっしやるう……」

「協力してくれるか？」

「そりゃ協力ならするけど……」

「どうかここは犠牲者を出させないと約束してくれると助かる」

「か、確約は厳しい」

「報酬ならいくらでも上乘せする」

「そういう問題じゃないって」

押しが強い。必死過ぎる。

「私だけに任せるなよお」

「勿論俺も全力を尽くす。その上で頼んでいる」

「うええ……分かったよ、私も頑張る」

「犠牲者を出さないと約束してくれるのか」

「皆の頑張り次第だけどね」

「っありがとう」

やはりマスクで表情は見えなかったが、随分嬉しそうな声音だった。

『こちら甘酒、パーティ会場でティフィンが江戸川ちゃんと接触。黒蜜へ、至急ティフィンとダーズリンとの交代作業を要請する。どうぞ』

『こちら黒蜜。ごめん無理、今抜けられない。フォロー頑張れ甘酒。どうぞ』

『こちら甘酒。ごめん無理じゃねーんだわ。フォローはするけど黒蜜ちゃん今どこで何やってんの。どうぞ』

『こちら黒蜜。同じタワー内でドンペリとニヤンさんと一緒に爆弾を処理してるよ。ニヤンさんに頼まれて適当に“返品”してるとこ。どうぞ』

『こちら甘酒。爆弾は薄々予想してたけど、そのメンツまでいるのは想定外だわ。いつでもどこで爆発すんの。どうぞ』

『こちら黒蜜。地下の電気室と40階のコンピューター室、それと連絡橋と屋上のヘリポートにもあるっぽい。あと一時間ちよつとくらいかなあ。避難できる形で爆破するらしいのでよろしく。どうぞ』

『こちら甘酒。何一つよろしくできないんだけど。つーか爆発するのは確定なの？ そのメンツなら一時間もあれば阻止できそうだよな。どうぞ』

『こちらダーズリン。ティフィンと交代しないのなら私も協力できるわ。応援に行きましようか。どうぞ』

『こちら黒蜜。ありがとうダージリン。でも残念ながら諸事情により爆発は不可避の様。ティフィンの動向を見守ったげて。あとで避難経路のマップ送つとくので、皆で頑張つて避難してねえ。どうぞ』

『こちら甘酒。もつといっぱい説明してどうぞ』

連続殺人事件が起きているにも関わらず、開催が決行されたツインタワービルのオーブンパーティー。

キャンプの帰りにタワーに立ち寄ったオレを含む少年探偵団の五人と沖矢さん、そしてビルのオーナーと大学時代の誼がある毛利のおっちゃん、蘭と園子。その九人がパーティーに招待されることになった。

その会場で、忙しそうに招待客へ接待していた東条さんと再会して話していた歩美達が見つけたのは、思いも寄らぬ人物だった。

「あつ！ あの時のおにいさん！」

「真つ白さんも来てたんですね！」

「いや真つ白さんって何だよ。オレには王馬小吉って名前があるの」

ついこないだの連続爆弾事件で、灰原や子供達が東都環状線に閉じ込められた時に出会ったという王馬小吉、その人だった。

その時のオレは病院から森谷帝二の邸宅へ行ったため、直接会うことはできなかった。これが初対面となる。

「その格好、すっげー目立つな」

「でしょ？ オレ目立ちたがりだからさ」

光彦に真つ白さんと称されるだけあって、確かに全身真つ白な出立をしている。純白のスリーピーススーツなんて、祝いの席でも滅多に見ないぞ。

「ねえねえ。東条さんもおにいさんも、不知火さんのお友達なんだよね？」

「お二人もお知り合いなんですか？」

「そりやあ勿論！ 東条ちゃんには今も昔も凄くお世話になってるし」

「ふふ、そうね」

以前ここで会った東条さんならまだしも、更に王馬さんまで加わるとは思っていない。思った。

沖矢さんの方をチラリと窺い見ると、流星は現役捜査官、表情一つ変えていない。しかし注意深く王馬さんの動きを注視している。

その王馬さんは、怪しいものを見る目を隠さない灰原に気付くと、にこやかに挨拶し

た。

「やあ灰原ちゃん。おめかしバツチりきまつてるね」

「こんばんは。貴方みたいな人が呼ばれているなんて本当に意外だわ」

「オレみたいになってどう言う意味？ オレも一応このタワーの出資者の一人として呼ばれてるんだけど」

マジかよ。

言われてみれば、このパーティーは招待制なので、それなりに身元が確かでなければ参加すらできない。

オレや沖矢さんがいきなり現れたDICEのボスにどう対応すべきか様子を見てみると、何も知らない恐れ知らずの子供達が口々に質問しました。

「おにいさん、とっても怪しいのには？」

「どんなお仕事をされてるんですか？」

「そんなに気になるなら教えてあげる。誰にも言うなよ？ 悪の秘密結社の総統さー！」

「ええー、本当？」

実は本当なんだよなあ。

「なんか悪いこと企んでるんじゃないか？」

「おっ、勘が良いね。実はそうなんだよ」

「そんな簡単に白状するなんて、やっぱり嘘くせーな」
実際のところ、どうなんだろう。

ダンガンロンパの劇中では、王馬さんは息をするように嘘をつき、周りを掻き乱す厄介なトリックスター役だった。

それは現在においても変わらず、面白テロ組織DICEの首領としてあちこちの国の警察や反社会組織を翻弄・攪乱している。

そんな彼の言葉をどう判断したものかと迷うオレの視線に気付くと、王馬さんはオレの身長に合わせて身を屈めてニタリと笑い、周りに聞こえないように小声で言う。

「やあ江戸川ちゃん、一応初めましてだね」

「い、一応ってどういう意味？ ボク子供だからわかんない……」

「やだなあ、無理にしらばつくれんなって。もうお互い知り合いたいなものでしょ？」
いつか会った人間さんが言っていた通り、例の17人の殆どはオレの正体を知っているようだ。そして、こちらが彼らを探っているということも。

ならば猫を被る必要も無いかと開き直り、子供達や灰原の興味が東条さんに向いていることを確認してから、オレは思い切って王馬さんに訊ねた。

「……王馬さん、ここで何をやる気なんだ？ これから何が起きるんだ？」

まさかサイコロのボスに直接こんなことを聞くチャンスが訪れようとは。

王馬さんはオレの質問に予想通りと言わんばかりの笑みを浮かべ、こう答えた。

「オレもそれを知りたかったところなんだよ」

「は？」

顔はニヤニヤしているが、声は真剣そのもの。彼が生粋の嘔吐きということを考えると、ますますどういう意図なのか分からない。

王馬さんはオレにだけ見える位置で沖矢さんを小さく指差し、こう続ける。

「アイツFBIの人間だろ？ こんなパーティに何の用事があるんだよ」

「えっ」

「おっと、その様子じゃキミも何も知らないみたいだね。しょーがないなあ」

「ちよちよちよちよ」

向こうだけが勝手に納得してしまった。

沖矢さんの正体もサラツと流すくらい当然のように知っていたことにも驚いたが、オレの反応から何を察したんだ？

やれやれと立ち上がるうとする彼のスーツの裾を引っ張り、慌てて引き止める。

「待って王馬さん、本当に何も知らないの？」

「おいおい。オレにそれを聞いてマトモな答えを貰えるなんて期待しちやってる？」

「い、いやあ……」

「こつちも散々なんだよ。今回ばかりは、どちらかと言えばオレ達も振り回される立場つつーかさ」

話に脈絡が無くて全く要領を得ない。これも彼の会話術の一つなのだろうか。それにしても、ただの愚痴にしか聞こえないような気もするけど。

「じゃーね名探偵ちゃん、お互い無事に生き延びようぜ」

「へっ!？」

オレが混乱している際に、王馬さんは何やら物騒なことを言い残してスルリと人混みの中へ紛れて行ってしまった。目立つはずの白いスーツはもう見えない。

「あれ? おにいさんもう行っちゃったの?」

「ああ……ん? 東条さんは?」

「また後でねって、お仕事に戻っちゃいました」

「なんだかヨユー無さそうだったぞ」

いつの間にか、歩美達を構っていた東条さんもいなくなっていた。もうすぐ余興のゲームを始めるらしく、その準備があるのだとか。そこでようやく、事態を静観していた沖矢さんが話しかけてきた。

「見事にカモられましたね」

「……一方的に情報を取られた気がする」

いきなりサイコロのボスが出てきて、何の心構えができていなかったところを突かれてしまった。

いや、そうでなくても終始向こうのペースだった。

「君が来ることを知っていて、予め知りたいことを絞っていたのでしよう。自分から余計な情報を漏らさぬよう、必要最低限の言葉で君の反応を引き出し、後はさっさと撤収ですか」

「オレ、あの人苦手だわ……」

嘘をつく人間なら何人も出会ってきたし、その嘘を暴いてきたことだって何度もある。

「だけど、彼はそういう保身や悪事のために嘘をつく人達とは根本的に違う。何の目的も無い嘘をつける人なのだ。」

謎を解く立場からすれば、巧妙に練られた嘘より目的が無い嘘の方が厄介かもしれない。目的が無いなら、それを暴かなければならない理由も無いからだ。

「むしろ彼の方が君を警戒していたように見えましたよ。演技でなければ、ですが」

「え、そうだった？」

「彼も自分の嘘が完璧だとは思っていないのでしよう。君と長時間対峙するのはリスクがあると見なして、早々と撤収したように思えます」

「やっぱり何か隠してること？」

「我々にそう悟られても問題ない程度の秘密でしょうけどね」

「……尚更分かんねーな」

彼らが本気で隠す気なら、隠している素振りすら見せないはず。

しかし、そこまででもない秘密というのはどういことなんだろう。とりあえず隠す気はあるので、オレ達に解いて欲しいわけでもないらしい。

「王馬さん、今回は振り回されてる立場だつて言つてたけど……これは嘘じゃないかもしれない」

「その根拠は？」

「東条さんと王馬さん、このタワーにメンバーが揃つておきながら関係者が既に二人も殺されている。多分、彼らにとって予想外の何かが起きているんだと思う」

「なるほど……」

すると、沖矢さんが口元に手を当てて思考し、こう言つた。

「私としては、非常に判断がつきかねると言うのが本音です」

「どうして？」

「……原さんの殺害現場で子供達が見た西洋人形。アレは何だと思えますか？」

そう言えば、歩美や元太達がそんな人形を見たと言つていたような。

「原さんは初対面の子供にゲームを試遊させてくれるほど遊び心のある子供好きな人だ。きつとその関係で家に置いてあったものではないか、と思っていたのだが……。」

「あの人形は、一通りあの家の中を見た我々が見つけられなかったところにあつたようです」

「……飾つてあつたのならともかく、どこかにしまつておくのは少し不自然かも……?」子供を喜ばせるつもりがあるなら、目につくところに飾つておくだろう。わざわざしまつてある物を引つ張り出してまで遊ばせようとは考えにくい。

「更に言うなら、そんなものを警察が押収するのも不思議な話ですよね」

「確かに。殺害に使われた凶器も、残されていた割れた猪口も、データが消されていたパソコンも……あの事件に関わつた物品は全て出揃つているはずなのに」

「考え方を変えてみましょう。あの人形が原さん殺害に関わつていないなら、何に關係していると思いますか?」

と、沖矢さんがオレを真っ直ぐ見てきた。

人形が何に繋がるだつて?

いや、そもそもこれは原さんの事件の話ではない。

オレ達がしていたのは……。

「王馬さん……そしてDICE……つて、まさか!」

「サイコロと西洋人形と言ったら、最早アレしか思い浮かびませんよね」
メリーさんしかいねえじゃん！

組織の方でその報せがあつたのは、連続爆弾犯である森谷帝二が逮捕されてすぐだつた。

組織のデータが盗まれたことが発覚し、盗んだ裏切り者の始末と、盗まれたデータが転送された先のサーバーを破壊するという計画が持ち上がった。幹部のジンが自ら決行するらしい。

そこで、このまま放置すればこの世から抹消されるであろう人物とデータを公安で確保するため、いつものように景光^{ヒロ}經由で不知火さんに相談することにした。

不知火さんと俺は個人的に何かと相性が悪いが、殺人阻止のためならば比較的快く頼み事を聞いてくれる。場合によっては彼女を仲介して他の同級生の力も借りられる。

そこまでしてくれるぐらいなら本格的に協力者登録をしてほしいところだが、飽くまで不知火さんが友人に頼むと言う形でしか実現していない。

その肝心の不知火さんの身元は、相変わらず無戸籍で住所不定。その上職業も謎の多

い運送業者。公的な関係を結ぶには、あまりにも不安定な立場だった。

しかし、だからこそ公には言えないイリーガルなことを話しやすい人物とも言えた。さて、閑話休題。

「うーわ、ホントにこないだ見た奴がスタンバツてる……」

「このマスク本当に優秀だな。こんな高倍率の光学ズーム機能まで備えていて」

不知火さんには先日の死んだフリ作戦に引き続き、データの確保作業にも付き合ってもらうことにした。

ジンの爆破計画は、盗まれたデータが転送されたであろうT O K I W Aグループのメインコンピューターの破壊が目的だ。

しかし、わざわざ人が集まるオープンパーティーが開催される日を選び、目的のコンピューター室だけに留まらず、避難に影響する電気室や連絡橋にまで爆弾を設置している。ただの証拠隠滅にしてはやたら気合が入り過ぎていると思ひ、密かに探りを入れてみればこの通り。

爆破予定のビル。その向かいのビルに、セットしたライフルの横に立つジンの姿を発見した。

どう見ても今夜のパーティーに参加する誰かを暗殺する気である。

「お前、あいつと同じ部屋にいたんだろ。よくそんな呑気なことが言えるなあ」

「作業に集中する方が大変だったよ」

一昨日決行された、組織の裏切り者である原佳明よしあきの死んだフリ作戦。ジンが自ら処刑するのを止める手立てではなく、全て不知火さんを信じて任せるしかなかった。

その方法は単純にして、この上なく危険なものであり、そして不知火さんにしかできないもの。ジンが放った弾丸を、被害者の体に食い込んだ瞬間に偽装死薬のカプセルにすり替えるという作業であった。

そのタイミングを見計らうため、不知火さんはジンが被害者を撃つその現場にいてはならなかった。弾丸のすり替えも勿論のこと、あの用心深いジンに気付かれずに最接近するなど、隠密力がアホみたいに突き抜けた彼女にしかできない芸当である。

その後は、死体（仮）となった原佳明を第三者に発見してもらい、表向きに殺人事件として立件する裏で公安がその身柄を確保する流れになっていた。

しかし、事件の第一発見者がコナン君達になるのは流石に予想外であった。下手人である不知火さんまで成り行きで現場に戻る羽目になったと言うのだから手に負えない。

どうにかその場は誤魔化せたようだが、果たして……。

「また死んだフリさせるの？ 薬のカプセル、今からじゃ用意できないよ。ターゲットの体格によってミウちゃんに調べてもらわないといけないし」

偽装死薬、万歳。

元はダンガンロンパの運営が作り出した違法薬物だが、強制的に対象を生命維持ギリギリの仮死状態に陥らせるその薬には。これまでに幾度となく助けられてきた。目の前にいるヒロも良い例である。

この薬の存在が世間に知れ渡った場合を考えると恐ろしいが、現在は53期の17人の間でのみ秘匿されている。連中の使い方はアレだが、平和的に使用されているので黙認する他ない。

欲を言うならウチにも情報を開示してほしいとは思いますが、死神の目をも騙らかせる大それた代物だ。このまま彼らがヒツソリと墓まで持つていった方が、世のためになるのかもしれない。

「公安としてもターゲットやそのシチュエーションが分からない以上、死んだフリはさせられない。だからヒロを呼んだんだ」

「まさか撃ち合う気？」

「そこまではしない。牽制できれば十分さ」

ジンが誰かを確実に殺害する気なら、きつと自らの手で射殺するはず。爆弾はおそらくターゲットを誘導するためのものだろう。

そう踏んで、スナイパーのヒロに声をかけた。

「それ、結局ドンペリの立場怪しくならない？ せっかく爆破の阻止は諦めたのに、銃を

使つてまで狙撃を邪魔したらさあ」

「そうだな。君達がこのビルにいなかったら、ヒロは呼ばなかったかもな」

「ど……どういう意味……?」

「ビルのオーナーが自ら君の友達を招待しているんだ。あいつらがそれを知らないはずが無い」

「おま……」

ところで、DICEに辛酸を嘗めさせられているのは、何も警察だけではない。

俺がバーボンとして所属している組織も、高頻度でそのイタズラの被害に遭っている。

密輸した銃火器はオモチヤに、薬物であれば小麦粉やラムネ菓子にすり替えられ。

誰かを暗殺しようとすればすぐ別の事件が発生し、野次馬や警察が集まってきて結果的に失敗する。……多分その近くで不知火さんが散歩してたんじゃないかな。

そして諜報員はその派遣先での記憶を乳幼児向けの教育番組等の記憶で上書きされ思い出しライトの悪用、せつかく得た情報を全てパーにされる始末。

ここままでして報復されないものだろうか？

その答えは否であり、応でもある。

日本の警察やFBIのように、DICEが例の17人だと知っている機関にも、残念

ながら組織の息がかかった者は少なからず関わっている。

それでも公にバレないのは何故か。

その答えはかの悪名高い回転木馬騒動にある。
メリューランド

優れた才能を持つ17人に引き込もうとして手を出して怒らせた結果、恐怖のメリューさんに容赦無く片っ端から構成員の素性を世間に暴かれる羽目になった組織はかつてない危機感を覚えた。この勢いでは最深部にいるあの方——組織のボスにまで及ぶではないかと。メンツより機密性の保持を優先した奴らは、それ以降はあの17人に関わらぬよう徹底するようになった。

だからもしも組織の人間がサイコロの正体を知ったとしても、それ以上の調査ができなくなる。禁じられているという前提があるし、その危惧通りに不知火メリューさんさん達に気付かれた場合でも社会的に終わるからだ。

こちらが覗き込まなくても向こうから積極的に覗き込んでくる深淵アビスとは誰の言葉か詩ジン。

そもそもそんな報告を堂々としようとする奴がいるとも思えない。

仮に危険を顧みず17人を調べ上げるほど忠誠心の高い奴がいたでしょう。

『ワケ分からん手段で組織の活動をパーにしてくる天才バカ集団は、かつてワケ分からん手段で作業員をゴツソリ病院送りにした高校生達でした』と報告した勇氣あるソイ

ツはどうなるだろうか。

重大な背信行為と見做され、問答無用で頭を撃ち抜かれる展開が目に見える理不ジ
ン。

つまり、組織の関係者も真相を知ったとて知らないフリをするしかないのである。

……しかし、機会さえあれば仕返ししてやりたいと思う奴も当然いる。あのジンもその一人だ。

「君達をドサクサに紛れて始末しようとしたら反撃してきた……ぐらいにしか思わないんじゃないかなあ」

「おま……お前……」

そう、ヒロの狙撃をこいつらの仕業にしてしまえるのである。

「よ、よりにもよって、コロシアイ一步手前の行為を私達のせいになろうと……!」

「俺の違法作業の片棒を担いでもらうのは今に始まったことじゃないし、あまり深く気にしないでくれ」

「お前が言うな!?!」

使えるものなら何でも使う。

それが例え、貴重な信頼であつてもだ。

「まあまあ、オレも奴を撃つまではしないし……」

「うええ」

「クシビ？」

「ドンペリもニヤンさんも嫌いだあ」

「!?」

唐突にメソメソしだす鹿頭にギョツとする猫頭。これまで彼女に嫌われたことが無かったのだろう。俺も流石に泣かれるとまでは思わなかった。

「くつそ忙しい中でお前らの仕事にも付き合っただけなのに、何だようこの仕打ち」

「ク、クシビ……悪かったって……」

おいコラ猫頭、こつちに非難がましい目を向けるんじゃない。お前もそのつもりで俺の話に乗っただろうが。

彼女が警察病院で俺に一芝居打ってきたかもしれないという話……それに一枚噛んでるといふ疑惑を晴らせるなら協力しようと、お前が言ったんじゃないか。

「この仕事終わったらドンペリン家にニヤンさん置いてってやる……ニヤンさんなんかもう知らない……」

「え、そんな、お前と別居だなんて！」

「急にソレは困るな……悪かった、頼むから拗ねないでくれ」

「知らん、知らない、もう好きにドンパチャれば良いんだ……」

「自棄にならないでくれクシビ！」

「気安く触んなあ」

しがみついてくる猫頭の肩に腕を突つ張り、ギチギチと音がしそうな勢いで仰け反つて抵抗する鹿頭。表情が見えない分余計にシユールな絵面に見える。

「うーん……いい加減景光に新しいセーフハウスを用意しようと思つていたしな。良い機会かもしれない」

「とうとうホテル暮らしも卒業か……」

「晴れてサヨナラだねニヤンさん」

「お前も一緒に住むだろう？」

「何言つてんの……」

「そうだな。目の届く場所に居てくれた方が助かるから、引き続き景光と組んでくれ。浮浪者に戻るよりはマシだろう」

「何言つてんの……」

流石にそこまで付き合う義理は無いぞと、首を横に振る鹿頭。

確かに、これまで彼女がヒロを匿い続けたのは義務ではなく慈善だ。

しかし今更彼女を野放しにできるわけがない。どうにか上手く言いくるめよう。

「そもそも公安の人間の家にこんな不審者置くのはどう考えてもアウトでしょうが」

「よし、狙撃ポイント探しに行くぞ」

「何もよし〴〵じゃないんだけどニヤンさん」

「時間が惜しい。さっさと行こう」

「話題の変え方が雑過ぎるんよお前らあ」

ビルとサイコロと、爆発と ⑤

赤井さん曰く、ダンガンロンパの生き残りである17人が現在のDICEだという情報は一応極秘扱いされているが、黒ずくめの組織には既に認識されているらしい。

ただし、地雷や不発弾のような触れてはならないタブーとして。

日頃から散々悪戯を仕掛けてくる憎き相手の正体ではあるが、同時に伝説のメリーさんから喧嘩を売られていると知るワケだ。その真相を知った者は、身バレの巻き添えを恐れて組織から離脱したがるようになるという。

組織に関わる者の中には、ただ暴力がふるいたいだけだったり、奴らのおこぼれをもらうだけが目的の破落戸ごろっき同然の人間も大勢いる。

そして、かつての灰原のように人質をとられたりして、仕方なく奴らに従うしかない人も少なからずいる。

サイコロはそういった組織への忠誠心が無い人物を狙い、わざと自分達の情報を流している可能性がある……。

赤井さん達のチームのボスであるジェイムズさんは、そう考察しているらしい。

例えば破落戸のような連中の場合。

運良くDICEの正体を掴み、これで報酬がたまり貫えるぞと意気揚々と引き上げようとしたら既に足元に置かれていた——という曰く付きの人形を抱え、保護してくれると半泣きで自首しにくる下っ端が後を絶たないらしい。

そこまできたら悪質な当たり屋の被害者である。可哀想に。

その一方で、灰原のような立場の人の場合。

奴らに無理矢理従わされている人達にとって、かつて組織を黙らせたメリーさんが現在も執拗な嫌がらせをしているという情報は大きな希望になると言う。

「原さんもそういう人だったかもしれないってこと!?!」

原さんの自宅にあった西洋人形。

おそらくそれは、DICEから送り付けられたメリーさんではないかと沖矢さんが言った。

「きつと原佳明はよしあきプログラマーとしての能力を組織に目をつけられ、奴等に加担せざるを得なくなつた人間なのかもしれない。そこでDICEの情報を掴み……あるいは掴まされて……」

『こつちもお前を知ってるぞ』という意思表示のメリーを送り付けられた……」
だとすれば、彼のパソコンのデータが消されていたのは。

「原さんが殺害されたのは、D I C Eに情報を流していたことが組織にバレたから……いや、それなら殺害すらされていない可能性も？」

組織に不本意で従っている人が、D I C Eがかつてのメリーさんだと知った場合。殆どの人はそのままD I C E側に寝返るのだと赤井さんは言う。

横流しされた情報はそのまま組織への嫌がらせの新しいネタになり、時には警察機関にも流され、その人を保護するきっかけにもなるのだとか。

「警察によって人形が回収されたことを考えると、おそらく彼らと連携した上で十八番^{オハコ}の死んだフリをさせたのかもしれないね」

この推理が当たっていたとすると、原さんの事件に遭遇した時に見せた不知火さんのあの態度は、人が殺されて落ち込んでいたんじゃないやなくて、オレ達に真相がバレないように落ち込むフリに専念していただけということになる。

「つてことは、現場にあったあの割れた猪口は……」

ツインタワービルのスイートルームで市議会議員の大木さんを殺害した犯人が、自分の犯行に見せかけるために置いたものなのでは？

そして原さんが組織の人間に殺害（仮）されたとするなら、これは連続殺人事件では

なくなる。

となると、犯人は……？

「DICEがツインタワービル関係者の殺人事件にではなく、対組織のために動いているなら、市議会議員の殺害が防げなかったことは仕方なかったのかもしれない」

沖矢さんが考察を続ける。

「ですが……王馬小吉までこんな場所に出てくる意味が分からない。組織に対して死んだフリを執行したのなら、それ以降、その人の周辺では極力気配を消すはずだ」

「そうだよな。死んだフリをさせた可能性を組織に仄めかすことになったら意味がなくなるし……」

原さんの事件が彼を組織から逃すためのDICEの作戦であれば、そこまではしっかりと計画的に動いていることになる。自分達の情報をわざと流してメリーさんまで用意したり、警察と情報共有して原さんの保護まで任せているのだから。

だが、それにしてもその他の部分がお粗末過ぎる。組織に狙われた人間が参加するはずだったパーティに、組織と思いきり反目しているサイコロのボスが参加するなんて、慎重な王馬さんが計画するとも思えない。

DICEのメンバーは、例の「警察仕事しろ」のメッセージを自ら残すような「犯行

“ を行う場合、その現場で目撃されることが無い。

組織に嫌がらせをするときも同じらしく、知らないうちに酷い目に遭わされているのが常だと赤井さんは言う。ちなみに組織相手の場合は、メッセージではなく玩具の賽子サイコロを現場に残していくとか。

とにかく、どこぞのファンサービスに溢れる怪盗とは違い、その気があつて動く時には決して姿を見せたりしない。

と言うことはつまり、東条さんと王馬さんが堂々と人前にいる今、彼らにそこまで派手なことをする気は無いと考えるても良いはずだ。

「おそらく、原さんの件を中心に動いていたところで、途中から想定外のアクシデントがいくつも舞い込んだのではないかと思います」

「オレもそんな気がする……」

先日の連続爆弾事件。

そこで偶々会った不知火さんは、爆弾に対して大いに狼狽えていた。あの事件もアクシデントの一つだったのかもしれない。巻き込んでしまったのは本当に申し訳無い。

そして一昨日の原さん宅への訪問。あれもきつと、彼女にとつては想定外のことだったはず。

なんだかんだ言つてオレ、不知火さんを巻き込んでばっかりだな。

「じゃあ、王馬さんが振り回されている立場だつて言つてたのは本当なのかもしれないけど、沖矢さんは何が引つ掛かつてるの？」

判断がつきかねるとは言つていたけど。

「……些細なことなんですが」

「うん」

「何故彼は、ボウヤに私のことを確認したのだろう、と思ひまして」

「……言われてみれば、確かに？」

王馬さんが沖矢さんこと赤井さんの正体を知っているなら、オレに聞かなくても良かったはずだ。

なのにオレの反応を見るためにわざわざ接触してきた。

そもそもDICEとして活動する気が無いなら、赤井さん達を警戒する必要も無いはず。

王馬さんは何を何のために知りたかつたんだ……？

『皆様、本日は私共TOKIWAのツインタワービルオープンパーティーにご臨席くださいます、誠にありがとうございます。ここでちよつと余興に、ゲームを行いたいと思ひます』

オレの思考を遮ったのは、会場のステージに上がった常盤美緒さんの挨拶だった。体感だけで30秒を当てるゲームを行い、一番正解に近い人に会場に展示されている真紅の車——マスタングコンバーチブルを贈呈するという。

「なかなか魅力的な景品ですね」

「沖矢さん、参加するの？」

「いえ、愛車は持っていますし、やめておきます」

そう言えばこの人既に赤のシエルビー・マスタング持ってたな、と思い出す。ゲームの結果、景品のマスタングはなんとおっちゃんの手に渡った。

『こちらダーズリン。どうか कोरोシアイ 阻止成功。どうぞ』

『こちら甘酒。ダーズリン、グッジョブ。土壇場にしては上出来過ぎるよ。どうぞ』

『こちら黒蜜。パーティ会場で कोरोシアイ ってマジ？ 何が起きたの。どうぞ』

『こちらダーズリン。日本画の紹介中、照明が落ちている間にオーナーが狙われたわ。首を吊らせるつもりだったみたいね』

『えぐう……』

『裏方で待機していたからこそ、彼女の発する異音に気付けたわ。ティフィンと交代しなかったのは不幸中の幸いね。酸欠で気絶して搬送されてしまったから、彼女の口から直接犯人のことは聞き出せないけど……』

『こちら甘酒。どうやってあんな高い位置のピアノ線を切ったの？ どうぞ』

『こちらダーズリン。プロのメイドならあれくらいスプーンの投擲で切れるわ。黒蜜、スプーンが壁に刺さってしまったから回収してくれるかしら。どうぞ』

『こちら黒蜜。オツケエ回収把握。プロのメイドすんごい。どうぞ』

『こちら甘酒。トランプでも物が切れるんだから金属製のスプーンなら尚更余裕でしょ。ダーズリンはそのまま裏方で待機。オレは適当に警察をいなしとくから。どうぞ』

『こちらダーズリン。待機続行ね、了解。どうぞ』

『……こちら黒蜜。ちよいとヤバいことになった。爆発予定時刻早まるかも』

『は？』

『なっ、』

『警察が踏み込んだことで連中が予定変更するかもしれないってさ』

『勘弁してくれよ……』

『あっ、今タワー揺れ、』

明かりが消えて闇夜に溶けてしまいそうな高層ビル。真つ赤に燃え上がる階層が、徐々に、しかし確実に上下へと侵食していく。

そんな瀕死のビルの中心を真つ直ぐ上下する唯一の光は、そのビルが辛うじてまだ生きていることを証明する鼓動のようだった。

オレは、その光——展望エレベーターをライフルのスコップ越しに虎視眈々と狙う黒い男を、同じくライフルのスコップ越しに注意深く観察していた。

「やはりアレで避難する者を狙っていたか」

ゼロの読み通りだった。

爆弾は本命ではなく、奴の獲物を炙り出すための誘導に過ぎなかったのだ。

「どうする？ あいつが撃つ前にこちらから仕掛けるか？」

「できれば奴のターゲットを確認できてからにしたい、が……」

芝犬マスクで展望エレベーター内を確認しつつ、どこからか入手したオープンパーティの参加者名簿を参照するゼロの答えは煮え切らない。

「もし心当たりがあるならば是非教えてもらいたいんだが……なあ、不知火さん」

「それどころじゃないの」

さっきのやり取りが原因で、鹿頭のクシビはすっかり臍を曲げてしまった。

多分、いやほぼ確実にジンの狙いについて心当たりがあるはずなのに。

「人命がかかっている時に私情を優先しないでくれ」

「やかましい。こっちはそれどころじゃないんだってばあ」

これは拗ねていると言うより、焦っているのか？

さつきから時々、じつと黙り込んでいるタイミングがある。オレ達のマスクと通信を切って、他の誰かと話しているのかもしれない。きっとパーティに参加している二人の友人とだと思われるが……。

「……………ん？ 止まった……………？」

ひたすらノンストップで最上階と最下階を行き来していた展望エレベーターが不意に下降速度を落とし、停止したことにゼロが気が付いた。

隣のB棟と繋がる連絡橋は60階と45階にある。一瞬だけスコープから目を離して確認すれば、エレベーターは60階の連絡橋より少し上の階で止まっていた。

「あの展望エレベーター、外からはコンサートホールがある66階からしか止められないらしいが……………」

「ありや、探偵キッズ乗ってるじゃん」

「東条さんもいるじゃないか」

今オレ達がいる場所は、ジンがいるビルやツインタワービルからは離れた建物の屋上だ。

ここからでは小さな点にしか見えないエレベーター内の様子は、ライフルを構えるために猫マスクを外しているオレには見えなかった。

「あつー！」

ゼロとクシビ、二人して同時に叫んだ。

ジンの方に集中すべきなのに気になるじゃないか。

と思ったが、事態はそれどころじゃなかった。

「哀ちゃんとお東条さんがエレベーターから降りた！」

「何だと?」

「66階で赤ん坊を抱っこしてる女の人と入れ替わったんだよ。灰原ちゃん達らしいと言えばそうかもしれないけど……」

きつと彼女達には、60階まで降りて連絡橋でB棟に渡ろうという算段があつて、定員オーバーだったエレベーターにその女性を乗せてあげたのだろう。

だが、オレ達は知っている。

その連絡橋には、それを落とすための爆弾が仕掛けられているのだと。

「行け、クシビ」

「え、でも」

「今はオレのことはいい。これだけ離れていれば、あいつもそう簡単にこちらの居場所
は掴めないはずだ」

「……分かった。連絡くれたらすぐ戻るから、それまで撃たれたりすんなよ」

その瞬間、鹿頭の姿はその場からフツと掻き消えた。

本当に便利な力だな、とつくづく思う。

オレと二人だけ残されたあと、ゼロがしみじみと呟いた。

「あれだけ言い合った割に、こっちの心配も欠かさないんだな。そこにつけ込まれると
は思わないだろうか……」

「適度にチョロいから可愛いんだよ」

基本的にクシビはチョロい。情に訴えかければ何でも思い通りにできそうできて、し
かし、なかなかどうしてそうならないという不思議な奴でもあった。

「景光ヒロの言うことには本当に素直だよな」

「地道に培った信頼関係があるからな」

「ここ最近を僕を信用してくれてるようだし、いつかはそうなれると良いんだが……」

「あいつも言ってただろ。いくら信用があっても、隷属させる気がある以上は懐いてく

れないよ」

「ぐ……敵しぐ」

萩原や松田達は、それらしい理由をつけながらも結局クシビを構いたただけだ。クシビにもそれが分かっているからあいつらに懐いている。

一方でゼロのクシビへの接し方には、あの17人を引き込みたいという意思が常に根底にある。かつての塩対応を思えば、協力を拒否しないだけでもかなり譲歩されていると思う。

「そもそも仕事のためだけなら、今の関係性で十分じゃないか？ 一度交わした約束は何であろうと遂行してくれるんだから」

「ただ指示したことだけを実行するんじゃないやなくて、もっと柔軟に融通を利かせてほしいんだ。それこそお前に対するように」

「……お前はあいつの仕事の腕しか信用していない。だからあいつもお前からの報酬しか信用していない。ただそれだけなんだよ」

「……、」

聴いゼロなら、これがどういうことがすぐ分かるだろう。

クシビは与えられたものの価値以上のものは決して返してこない。

逆を言えば、こちらにとって容易くても、あいつにとって価値の高いものを与えれば、

想像以上のリターンがあるかもしれないということだ。例えば、安価でも美味しい食べ物なら単純で分かりやすいだろう。

もつと言うなら、そこに彼女を喜ばせたいという善意があれば、更に価値が高まったりする。

あるいは、信頼だ。

「どうしても懐いてほしいなら、ひとまず色んな前提を捨ててあいつを信頼してみろ」

「信用じゃなくて、信頼しろと？」

「あいつは周りからの信頼に特にチョロ……左右されやすいから」

「(やつぱりチョロいのか)」

信用と信頼。

どちらも相手を信じるという意味だが、相手の何を信じるかが異なる言葉である。

クシビは自分に向けられる嘘が分かる。

と言つても、本当のことが分かるわけでもなく、又聞きの情報や自分以外に向けた嘘には反応できないなど、真実の追及で頼るには少々抜け穴は多い。

しかし、少なくとも彼女に対してハツタリや演技の類は一切通用しない。本人から名乗られれば瞬時に偽名かどうかを判別できるなど、とにかく騙そうとする意図にはこの上なく強力な特技である。

そんな風に嘘をつかれたり、疑われることに対しては強い反面、自分が信じられることには滅法弱い。

特に信用より信頼されることに弱く、周りに期待されるとそれに応えようと頑張るのだ。特にオレの頼み事にあれこれ悩む姿は健気で可愛い。

「実績を見るより先に信頼しろ、か。なかなか難しい注文だな」

「現実主義の公安としてはあり得ない見方だし、そう言うのも仕方ないか」

一度この世のどこにも居場所を無くしたオレだからこそ、先に信用ではなく信頼を置くという特殊な関係を築けたのかもしれない。

今でこそ腹を探り合ったり利用し合ったりする悪友のような仲だが、当時は唯一味方でいてくれたあいつらを利用する気なんて、そんな発想すらしなかった。将来DICEとして暗躍すると知ってたら何か違っていたかもしれないが。

少なくとも、今でもオレに手を貸してくれるクシビに対しては、ずっと大切に思っている。

……そのクシビの機嫌を著しく損ねてしまったので、しばらくの間は非常に苦勞することになる。

今のうちに少しでも挽回しておきたいが、あの調子では難しいだろうなあ。せめて別居だけは避けたいところだが……。

「なんかもう……特殊な時計でもあれば彼女と何らかの契約が結べそうな気がするんだ……」

「それ、本人の前では絶対に言うなよ」

「自由に不知火さん呼び出せたら、さぞ便利なんだろうな……」

「そんな調子だから未だにメタルが友情の証もらえないんだよ」

ジンが動き出すまでの間、クシビが聞いたら確実に怒りそうなしような会話をして口と繰り広げていた。

ツインタワービルの関係者が殺傷された一連の事件。

その最後はビルのオープンパーティーの最中に起きてしまった。ビルのオーナーである常盤美緒が狙われたのだが……何者かの介入により、ギリギリの瀬戸際で彼女の命は失われずに済んだ。

ステージのキャットウォークに引つ掛けたピアノ線を、常盤美緒のネックレスとスクリーンに繋げ、スクリーンの降下によって吊り上げて絞殺するつもりだったようだが、その途中でピアノ線が切断されて彼女の体が落下し、その物音で事態が発覚したのであ

る。

ピアノ線の切断はほぼ間違いなくDICEのメンバーによる妨害だと思われるが、事件発覚直前まで王馬小吉はステージ前、東条斬美は会場の出入り口付近に立っていたのを確認している。そんな位置にいた彼らが、幕が下ろされたステージ上のスクリーンにかかるピアノ線に直接干渉できたとは考えにくい。

だとすれば、あんなことができたのは一人しかいない。

「やはり君がいたか」

「うわっ、誰かいると思っただらお前かよ」

ツインタワービルのスイートルームでの殺人事件、そして先ほどの常盤美緒の殺人未遂。

真相を悟ったボウヤに頼まれて犯人の見張りをしていた俺は、パーティ会場の近くの階段を彷徨っていた不審者を発見した。やけにリアルな鹿の頭を模した被り物をした、紛れもない不審者である。何故かスプーンを手にしていた。

しかしこのふざけたマスク、どこかで見たような……。

「ところで……沖矢さん？ それとも……」

「原則的に外では沖矢ですよ」

「あっはい」

被り物に変声機能があるらしく、声と顔は分からないが、今の自分が沖矢かそうでないかを真つ先に確認してくるあたり、やはりこの鹿頭は不知火君のようだ。

例えその場にいらなくても、DICEが関わっている以上、疑うべき人物はもう一人追加される。不在証明を自在に操れる彼女のことだ。

「いやいやいや、何で避難してないの」

「実は殺人事件の犯人もここに残っているんですよ。私はその見張りです」

「じゃあ早いとこソイツふん縛って避難して。連絡橋が落とされちゃうよう！」

「……何だと?」

やはりただの爆発ではなかったのか。

「そうと知りながら、何故あなたもここに?」

「お前みたいに残ってる奴が他にいないか見てただけだよ。まさか最上階に二人もいるとは思わなかったわ……」

連絡橋も爆破されると予告したりと、どうやら彼女は初めからこのビルに爆弾が仕掛けられていると知っていたようだ。だからこうして見回りのようなことをしていたのか。

いや、それより。

「他に……？ 私や犯人の他にも、まだ誰かいるのですか」

「灰原ちゃんが私の友達と一緒に66階付近にいるみたいなんだよ」

「！」

志保まで取り残されているだと？

しまった、犯人ばかりに気を取られていて完全に抜かった。

ここ最近、姉の^{明美}声聞きたさで彼女の隠れ家に電話をかけるなどの不安定な様子を見せていたのに、そうと知りながら目を離してしまふとは何たる失態か。

「そりゃあ、最悪私が無理矢理にでもここから連れ出す気ではいるけど……友達からの要請が無い以上、近づけないんだよねえ」

「ああ、そうか。そのための君か……」

なるほど、不知火君がいるというだけで安心感が桁違いである。

「……いざと言う時には私のことも頼んでも良いですか？」

「飛び込み予約は高くつくよ」

「ええ、構いません。命には代えられませんしね」

「毎度ありがたい」

そう言えば彼女の本業は運送業だったな、と思い出す。シチュエーションを問わずに仕事を完遂してくれる者ほど有難いものはない。

「君は、そう……手の甲辺りに専用の紋様でも刻んでおけば、回数制限付きでも如何なる依頼をもこなしてくれそうな気がします」

「日本のサブカルに染まる暇があったら仕事しろよ、えふびいあい……」
その直後。

腹に重く響くような爆音と共に、ビルが再び揺れた。

「橋……落ちちゃったってさ」

「退路を断たれましたね」

下の階は火の海。B棟には移れない。

残されている正規の避難手段は、屋上で救助のへりを待つことのみか。

それができなければ不知火君による送迎だろう。

とにかくこうなってしまう以上は最早どうしようもない。

パーティ会場のステージ前で立ち尽くす事件の犯人の様子にも意識を向けつつ、鹿頭と今後のことを軽く話し合う。

不知火君曰く、志保と同行している彼女の友人から連絡が入り次第その場へ赴き、屋上で救助を待つか、あるいは不知火君が送迎するかを判断するのだと。

後者の場合は志保を気絶させるそうだ。流星に志保にまで自分の異能を見せる気は無いらしい。

「最悪の場合は、沖矢さんが一人で犯人と灰原ちゃんを連れて脱出したってことにしといてね」

「その最悪まで既に想定しているということは、屋上にも何か仕掛けられてるようですね」

「察してくれて助かるよ……」

執拗かつ確実に逃げ道を塞いでいくこのやり方。

やはりあの組織の仕業に違いない。

「私のことは頑張って誤魔化してね」

「……流石にボウヤには怪しまれそうだな」

しかし例え正直に話したとて、あのリアリストな少年が素直に信じるとも思えないが。

そう考えたタイミングで、自分のジャケットの内ポケットが震えだした。

噂をすれば何とやら、ボウヤからの着信だった。

『沖矢さん、今どこにいる!?!』

「75階のパーティ会場前です。犯人もそこにいますよ」

『それどころじゃねえんだ! さっき連絡橋が落ちちまって!』

ボウヤの話は、大方不知火君の言っていた通りであった。

先に展望エレベーターで降りたボウヤは何事も無く最下階まで降りられたそうだが、彼よりも先に降りたはずの志保の姿が無いことに気が付いたらしい。

一緒にいた三人の子供達によれば、エレベーターが66階で止まって赤ん坊を抱いた女性と乗ろうとしてきたが、既に定員オーバーだったため、志保と東条斬美が代わりに降りたのだそう。

その後に連絡橋が落ちてしまい、彼女達が脱出できなくなってしまったと。

『だから今、B棟の60階に向かつてる!』

「は、」

会話が聞こえていたらしい不知火君が鹿頭ごと軽く首を傾げた。

『A棟に飛び移るから、沖矢さんも灰原んところに向かつて!』

「おい待て」

何故そうなるんだボウヤ。

鹿頭がギョツとしたように体を跳ねさせる。

そして一方的に切られた通話。

おりの沈黙が肌に痛い。

「江戸川くんも合流しちゃうの!?!」

「どうやらそのようだな……」

「ごめん沖矢さん、さっきの話全部無かったことにして」
「!？」

不知火君がボウヤ探偵に対して極端に律儀で、そして弱いということが判明してしまった瞬間であつた。

ツインタワービルのオープンパーティーで起こってしまった殺人未遂事件。立て続けに爆発火災まで発生。

どうやら神様は私のことをトコトン嫌っているようだ、思わず自嘲しそうになる。最上階の会場から展望エレベーターで避難する途中で乗ろうとしてきた赤子連れの女性。既にエレベーターは満員だったので、私と一緒に吉田さん達三人が彼女の代わりに降りようとしたのだけれど、一緒にいた東条斬美さんがそれを遮った。

危険なビル内で子供が四人はぐれるより、大人と子供一人ずつの方がまだ安全だろうと言つて、自分が子供三人分として降りると申し出たのだ。

ならばちよつど良いと思ひ、残る子供一人分として私が降りることにした。

それからずつと、東条さんと行動を共にしているのだけど……。

「随分落ち着いているのね。怖くないの?」

渡ろうとした連絡橋まで目の前で落とされてしまい、立ち往生することになってしまった。

大人しく救助を待つしかない、体力を無駄に消費しないように座った私に対して、東条さんがそう話しかけてきた。

「……不安じゃないと言ったら嘘になるけど、取り乱したところで事態は好転しないもの。貴女こそ怖くないの?」

「私? 私は……」

逆に問い返してみれば、東条さんは困ったような笑みを浮かべた。

「そうね、怖いわ」

「あら、正直に言うのね」

「こんな状況が怖くない人なんて、普通はいないでしょう」

どこで何が爆発するか分からず、下からは炎が迫り来る……確かに恐ろしくないわけがない。

けど。

「でも貴女は、もっと絶望的な状況にいたことがあるでしょう?」

「え?」

「貴女だけじゃない。あの王馬さんだって」

「まあ……知ってたのね」

ダンガンロンパ事件の生き残りなんでしょうと暗に仄めかせば、誤魔化されることなく肯定された。

「記憶を消されて、殺し合いを強要されて……いつ誰が自分を殺すか疑心暗鬼にならざるを得ない環境に閉じ込められるなんて、想像しただけでも恐ろしいじゃない」

「……そうね」

東条さんは当時を思い出すかのように目を伏せて苦笑した。

誰かを殺さなくては外へ出られないという狂った学園。その中で、彼女は殺される側でなく殺す側になってしまった。

外に出なくてはならない使命感を掻き立てられ、外に出ることに希望を見出せない人を止むを得ず殺してしまう——そんな役だった。

「だからこそ、こんな苛烈な悪意を向けてくる人が恐ろしく思えるわ。電源を絶って、避難経路を潰して……大勢の無関係の人を巻き込んでまで、そんなことを決行できるほどの悪意の持ち主が」

悩みに悩み抜いた末に仕方なく殺人を犯す犯人役だったからこそ、この状況を作り出せる人間が恐ろしいと東条さんは言った。

「でも、やられっぱなしではいられないわ。そういう奴への一番の仕返しは、ちゃんと生き残つてみせることなんだから」

東条さんは悪戯っぽく笑つてそう言った。

実際に彼女達はその通りになしてみせた。

何も知らない視聴者からも、ダンガンロンパを運営する者からも、その死をエンターテイメントとして期待された彼女達は、見事に全員を騙しきつて生還したのだ。

「だから哀ちゃんも負けちゃダメよ。しぶとく生きて、奴らに目に物見せてやりましよう」

「ええ」

それから間も無くして、B棟からスケボーで飛び移ってきた工藤君に度肝を抜かされるのであった。

『こちら黒蜜。ティフィンが通信切つてるみたいで連絡取れない。どうしよう。どうぞ』

『こちらダーズリン。今はそつとしてあげましょう。どうぞ』

『こちら甘酒。何もしてないのに疑ってくる警察に囲まれて超気まずい。黒蜜ちゃん助けて。どうぞ』

『こちら黒蜜。甘酒は自力で頑張つて。ダーズリンはテイフィンとの通信生きてるの？
どうぞ』

『こちらダーズリン。会話は聞こえないけど位置情報は送られているわ。いざという時には救難信号を出すそうよ。どうぞ』

『今こそいざという時でしょうがあ！』

『オレのことスルーしないで黒蜜ちゃん』

『邪魔するのは野暮よ。今は我慢しましょう』

『クシビ？ 今何してるんだ？』

『ニヤンさん？ どうしたの。どつか撃たれた？』

『こつちは無事だ。ジンは撤収した』

『阻止できたんだね』

『おかげさまで。そつちの首尾は？』

『今待機中う……』

『何故だ？　せめて哀ちゃんだけでも早く避難させてこい』

『私はドンペリと同レベルの野暮だったのか……』

『どういう意味だオイ』

『色々事情があるんだよう』

『オレ達にできることがあるなら協力するぞ』

『ノーセンキュウ』

『君は一体誰を警護しているんだ？　つべこべ言わずに一枚噛ませろ』

『ドンペリ、なんか焦ってない……？』

『ああ……さつき思わぬ人物を見てしまったてな……』

『ジンが狙っていた彼女を守っているなら、俺も黙っているわけにはいかないんでね』

『結局アレは別人だったろう。鈴木財閥の御令嬢じゃなかったか？』

『鈴木ちゃんが狙われてたん!』

『違う違う』

『白状しろ不知火^{くしび}霊、誰を警護している……!』

『こわ、しばらく通信切つとくねえ』

『逃げるな卑怯者!!』

『やかましいわ』

ビルとサイコロと、爆発と　　E N D

大木さんの殺害、及び常盤さんの殺人未遂の犯人は、常盤さんの日本画の師である如月峰水さんだった。犯行の動機は、このツインタワービルそのもの。

富士山の絵を専門に描いていた如月さんは、富士山が綺麗に一望できる丘を買い取り、そこに仕事場を兼ねた家を建設した。先日オレ達が光彦達と一緒に訪問したのはその家だ。

ところが、そんな彼の生涯をかけた富士山への想いを常盤さん達が踏み躪ってしまった。彼の家から見える富士山の真ん中に、ツインタワービルを建ててしまったのだ。

建設の障害であった景観保護の条例を、T O K I W Aの社長である常盤さんと、専務の原さんが市議会議員の大木さんに賄賂を渡し、改正させたのである。一連の事件の被害者達は、まさにその件に関わる人物達だった。

如月さんの絵を高額で売り捌いているという噂や、さっきの30秒当てゲームでパーティの参加客から回収した時計に宝石を添えて返すと宣言した大盤振る舞い……常盤

さんには財力に物を言わせて無理を通すきらいがあるようだ。

その姿勢は、グループの発展を担う者としてなら正解なのかもしれないが、如月さんのような情緒や趣を大切にすると人は相容れなかった。自宅から見える愛する富士山が、日に日に伸びていくビルの影で蝕まれていく光景を、彼はどのような気持ちで見たいのだろう。

そして、今回のような悲劇がうまれてしまった……。

犯行現場に残された割られた猪口は、ビルの建設によつて富士山を真つ二つにされた如月さんの怒りのメッセージだったというワケである。

語気荒く動機を語り、オレに決定的な証拠を突きつけられた如月さんが取り出したのは、十中八九毒薬が入っているとされる小瓶だった。

そうはさせないと、咄嗟に麻酔針を撃ち込んで彼を眠らせた。

……そんな物まで用意していたということは、オレに問い詰められるまでもなく、最初から如月さんは全ての元凶であるこのビルで自らの命を絶つ気だったのだろう。燃え盛るこのビルから避難せずに留まっていたのもそのせいだ。

そして同時に、この事態は彼にとつても想定外だったことが窺える。

つまり、この爆発は……。

「……ダメですね、屋上の炎はしばらく消えそうにありません」

「こつちも時間が無いわ」

如月さんを見張ってくれた沖矢さん。そして二人一緒にいた灰原と東条さんの計三人と合流できたところまでは良かったが、その後が問題だった。

B棟への連絡橋が落ちた今、唯一残された脱出方法は救助ヘリだけ。

ところが、刑事さん達が呼んだそのヘリコプターがヘリポートに降りようかというその瞬間、見計らったかのように屋上が爆破され、炎上してしまった。

その上、最上階のパーティ会場にも多数の時限式爆弾が設置されていることまで発覚。

まさに八方塞がりであった。

「ふう、困ったわね」

「……その割にあまり焦ってないようだけど」

東条さんはやけに落ち着いていた。上下を炎に挟まれ、目の前に並ぶ爆弾はあと五分足らずで爆発するというのに。

「もしや秘策でもあるのでしょうか？」

沖矢さんが冗談っぽく言う。きつと東条さんの友人について言及しているのだろうが、流石に彼らでもこの状況は……。

「秘策……まあ、あるにはあるけど、それは飽くまで最終手段ね」

「ホォー……?」

「けど、きつとそれを使うまでもないわ」

東条さんはオレや灰原、そして沖矢さんの顔を見回しながら、明るく笑ってこう言った。

「こんなにも頼もしい顔触れが揃っているんですもの。怖いものなんてないわ」

それは意外にも、彼女の友人の方ではなく、ここにいるオレ達の方を信じているという言葉だった。

この場にそぐわぬ穏やかな笑みを浮かべる彼女に、沖矢さんが僅かに目を見開く。

「絶対絶命だけど、だからこそ絶望を吹っ飛ばすような起死回生の案が出そうな気がするのよ」

東条さんって、こんな根性論的なことを言う人だったっけ？ 少なくともダンガンロンパの劇中では、もっと冷静で論理的で、客観的な意見を言う人だったと思うんだけど……。

……待てよ。

吹っ飛ばすような起死回生の案……?!

自然と目が向いた先には、ゲームの景品であった赤いマスターグ。

急いで駆け寄れば、幸いにもシリンダーにキーが刺さったままだった。「……本当にあるかもしれないよ。その起死回生の案つてやつ」

最後の最後で、ようやく全てに合点がいった。

サイコロが全ての事件にスルーをきめたのも、王馬小吉が現れてまでこちらの注意を引いたのも、全てはシエリーを——宮野志保を守るためだったのではないかと。

どういふ縁があるのか、DICEは宮野姉妹を守る立場にいるらしい。

いつかのミステリートレインでもそうだった。彼女を狙うベルモットの計画を滅茶苦茶に破綻させたのは、まさに今夜ツインタワービルに集結したような、ふざけた動物頭の三人組だったではないか。

俺が展望エレベーターで見た彼女は別人だったが、ジンがあれだけ執拗な計画を練っていたところを見ると、あの場に何らかの形でシエリーが関わっていたことには間違いないな。

公安からも組織からも守り通すのはさぞ骨が折れたことだろう。特にこちらは彼女の存在にすら気付けなかった。王馬小吉の囷は見事に機能したというわけだ。素直に

悔しい。

「本当に申し訳ない。こんな転がり込むような形になってしまって……」

「お前だけが悪いわけじゃないだろう。しかし、まさかアレが本気だったとは……」

そして、ヒロを俺のセーフハウスに置いていくという不知火さんの言葉も、その通りになってしまった。

どうせあの場の感情に任せただダの癪癪だと高を括っていたらそんなことは無く、帰還を頼んだらヒロまで一緒に俺の部屋に送られてしまった。その数分後にヒロの私物が詰め込まれたスーツケースも転送され、彼女の本気度を察してしまった。流石に舐め過ぎたかと反省する。

「できるだけ気配は潜めるつもりだけど……」

「ああ、防音はしっかりしている部屋だから、そこまで気を張らなくても大丈夫だ」

「そ、そうか」

「……………」

テンションが低い。どう見ても落ち込んでいる。返信が来ないスマートフォンをじっと見つめるヒロの目は、不安げに揺れていた。

確かにヒロをこの部屋に置いておくのにリスクが無いわけではないが、全くの不可能

というわけでもない。

この住民には自分をしがらない独身のアルバイトだと通しているので、一人暮らしを装うために多少の息苦しきは強いことになるかもしれないが。

それはさておき。

「ところで景光、いくつか確認したいことがある」

「……何だ？」

「不知火さんが引き寄せられるのは、もしかして物質だけに限らないんじゃないか？」

「！」

萩原ハキが言っていたことがずつと気になっていった。

約束したことは必ず実現させるといふ、彼女の特異性のことだ。

「……どうしてそう思った？」

不安げだったヒロの目つきが一変して鋭くなる。

「萩原から聞いたんだ。彼女が福引で狙った景品を当ててくれたってな」

「あいつが……」

「やはりそうなのか？」

「……………」

ヒロは黙ったままこちらの言葉を待っている。他に根拠が無ければ話さない、と。

「……以前から、不知火さんの持つ『超高校級の悪意』の正体について考えていた」

語りながら思い返すのは、彼女と出会ってからそう間も無い頃のことだ。

「『探偵』や『ピアニスト』のような職業や立場の名を冠する才能と違い、『悪意』は不確定要素が多くて、定義も曖昧過ぎる。だけど歴代ダンガンロンパには、それと同じように不確定要素だらけの才能が度々登場していただろう？

『超高校級の幸運』のことだよ」

記念すべき一作目における一代目も、そして歴代『幸運』の中でも最強クラスの運の持ち主とされる二代目も、作中では重要なキーパーソンであった。

その後も『超高校級の幸運』は時々出演していたが、二作目までの重要そうな印象を逆手にとり、単なるミスリード役でしかない回もあつたりと、古参の視聴者を楽しませる要素となっていた。

「もしや『悪意』には、その『幸運』が関わっているんじゃないかと思ったんだ」

「……へえ？」

「仮に『超高校級の幸運』が単純に自分の幸運を操れる才能であるとしたら、『超高校級の悪意』は自分を含めた周りの運を操れるんじゃないか？ 周りの運を奪い、自分だけ幸運をもたらすような、まさに悪意に満ちた使い方ができるとかな」

おそらくかつての自分もそういう被害に遭っていたのでは、と思っている。

不知火さんに関わろうとする度に降りかかってきた、あのビミョーな不運の連続。俺を貶めようとする何らかの悪意は感じたが、それを実行したという証拠はどこにもなかった。本当にただの不運だったのだ。

「運を操るなんて、本気で信じているのか？」

「何期から本物の人間を使ったデスゲームになったかは不明だが、後期のダンガンロンパにも『幸運』の生徒役はいた。脚本によって幸運を演出することもできるだろうが、人工的に才能を開発し、それを生きた人間に移植できるあの運営チームのことだ。そんな技術が存在しているもおかしくないだろう？」

以上が俺の推理だと断言すれば、しばらくヒロは思索するように俯き、やがて観念したように口を開いた。

「……そうだよ、お前の思っている通りだ。クシビには運や巡り合わせを操るチカラがある」

ああ、やっぱりか。

ヒロがなかなか認めようとしなかったのは、その並外れたチカラが悪用されぬよう、誰にも気付かれないようにしていたからだろう。

「強制的に植え付けられたせいか、本人も制御しきれない才能なんだ。常に無意識で作
用しているらしい」

「どう作用するものなんだ？」

「元々が『超高校級の幸運』だから、本人がそうあれかしと思うことが実現しやすくなるみたいだね」

「物事を上手く運べる才能か……」

シンプルだが羨ましい才能である。俺も欲しい。

しかし、そうではないとヒロは首を横に振った。

「『幸運』と違って、『悪意』は周りに影響する才能なんだ。クシビ本人の願いが叶いやすいわけじゃない」

「……と、言うとは？」

「周りの運を上げ下げするチカラなんだよ。特にクシビがそうあれかしと思う……例えば、幸せになってほしいと思われる人物が、そうなりやすくなる」

「！」

ああ、ならアレは、そういうカラクリだったのか！

「じゃあつまり、萩は不知火さんに福引を当ててもらったんじゃないかって、彼女に当てさせたのか！」

「表面的な事実は変わらないけど、仕組みとしてはそうなるのかもな」

周りの人間の運を上げ下げする才能。不知火さんに好かれている人間には幸運をも

たらずチカラ。

と言うことは？

「……で、僕はその逆だと」

「まあ……その、うん……」

非常に言いにくそうだったが、最終的に頷かれてしまった。

ハギとは逆、つまり彼女に嫌われている奴には不運がもたらされると言うワケである。なんて単純明快。

分かっているさ、彼女に懐かれていないなんて百も承知だ……。

「でも、零^{ゼロ}ほどの実力があるなら大した障害にはならなかっただろう？ お前を遠ざけたい程度の意思の表れだから、そこまで深刻なことにはならなかったはずだ」

「致命的な事態にはならなかったが、メンタルや胃には結構なダメージがきたぞ……」

「その節はクシビが大変なご迷惑を……」

計画的な嫌がらせではなく、運や巡り合わせに作用するものなら、回避のしようがなかったのも当たり前であった。

「無意識でそうなるなら、やっぱり現状維持が一番無難なんだろうな……」

ハギのように彼女の嫌をとれたら恩恵を受けられるのかもしれないが、好感度が低い俺の場合はそうもいかない。今のところ目立った不運は感じられないが、更に好感度

が下がれば以前の状態で逆戻りだ。それだけは避けたい。

そう考えると、これまでで不自由無く不知火さんと潜伏生活をしてきたこの幼馴染は、どうなっているんだ……？

「あともう一つ、気になることがある」

「うん？」

「お前が彼女にやらせていた『返品』とやら。アレはどうなっている」

ツインタワービルで爆弾を処理していた時のこと。ヒロが不知火さんに爆弾の処理を頼むと、彼女は何処へともなくそれを消し去っていた。ヒロはその作業を『返品』と呼んでいた。

その言葉通りに解釈するなら、彼女は爆弾を元あった場所に戻したということになるが……。

「いくら彼女でも、あの爆弾がどこで製造されてどう運ばれてきたかまでは把握していないはず。まさか物品の時間を遡らせることまで出来る——なんて言わないよ……？」

「まさか、それもほぼ運任せだよ」

「運任せ？ ランダムな場所に飛ばしているのか？」

「……と言うには、ちよつと強烈過ぎるけど」

ヒロ曰く「返品」とは、その物体を最も効果的な場所へ送るだけの作業だという。「効果的な場所だど？」

「人的被害が無い場所が最低条件だけど、その物体に悪意が込められていたら、優先的にソレに対して反撃するようになっていいる。仕掛けた奴に仕返しするから、皮肉を込めて「返品」と呼んでいるんだ」

「そ……そんなピンポイントな場所を、運だけで選べるのか!？」

確かに歴代の「超高校級の幸運」の中には、不可能を可能にするレベルの強烈な幸運の持ち主もいた。

しかし、そこまで現実味の無いことまで実現させてしまうものだろうか？

俺が疑問の声を上げると、ヒロは困ったように頬を掻きながら、言いにくそうにこう続けた。

「さっき「超高校級の悪意」について話しただろう？ あれの補足になるんだが……」

「まだ何かあるのか？」

「アレは本来、黒幕側が有利になるように設定されていたんだ」

それは、ダンガンロンパの摘発後に発見された脚本にも記載されていない事実で、黒幕役の記憶を与えられた白銀つむぎやAIのモノクマしか知らないことだと、ヒロが言った。

黒幕側……つまりダンガンロンパの命題である希望と絶望のうち、絶望陣営のための才能であったそうだ。

言われてみれば、不知火靈くしびというキャラの元々の設定は、どちらかと言えばガッツリ絶望陣営寄りのものである。

「今でこそクシビの気まぐれのように作用しているけど、本来の『超高校級の悪意』は、その名の通り周囲の悪意に同調して運を調整するものだったんだ」

「悪意に同調……悪意を持つ者に幸運をもたらすものだったのか？」

「そう。悪意が強ければ強いほど、強力な運を与えるんだ。学級裁判が盛り上がるよう、犯人が分かりにくいハイレベルな殺人計画が成功するように」

「絶望のための『幸運』役、か……」

一作目の『幸運』役は完全に希望陣営だった。

二作目で強烈に捻くれた『幸運』役が登場してからは何かと複雑に設定がいじられるようになった才能枠だが、大抵は一作目に倣って希望陣営だった。

徹頭徹尾絶望側の『幸運』役はいなかったはず。

「だけどクシビは、それらの設定を一切受け付けなかった。終盤まで生き残らせる予定だったのに、真っ先に殺されにいった挙句に自力で蘇生するわと、初っ端から前代未聞のやりたい放題だ」

「あの暴挙の連続には、チームダンガンロンパもさぞ肝を潰したことだろうな……」

「そして絶望も希望もおかまいなく、コロシアイを阻止するためにダンガンロンパそのものに対して反逆するようになった。……するとどうなったか？」

「……そうか、才能が悪意に同調しなくなつたんだな？」

「ああ。実際にはそれと逆のことが起きるようになった。その結果が、誰も死ななかつた幻の一回目の放送だ」

運営からすれば相当な脅威だつたはずだ。絶望をもたらず役で投入したはずのキャラクターが、希望側に寝返るでもなく、ストーリーも無視して企画そのものに襲い掛かつてきたのだから。

自分達で作つたフィクションに己の存在や思考を見透かされ、自分達がいる現実にも影響を及ぼしてくる……下手なホラーよりよっぽど恐ろしい。

「悪意に同調しなくなつた結果が今の状態なら……周りの運を調節する匙加減は、全て不知火さんからの印象次第なのか？」

「うーん……あいつからの印象と言えば半分当たつてるような、そうでもないような……？」

「随分曖昧な……」

「そりゃあ、他の才能と違ってハッキリ明文化できるようなものじゃないしね」

それもそうだった。

まず運という目にも見えず測定もできない要素が絡んでいる時点で定義付けが難しい。

「そうか。だったら、むしろよくここまで掘り下げられたものだと感嘆すべきなんだな」「クシビとの付き合いも長いし、自然と経験則もできてくるよ」

「さつきまでの話もその経験則か？」

「そうだな。モノクマが教えてくれた設定も加味した、オレの観察結果といったところかな」

ダンガンロンパ事件以降の不知火霊を最も長く間近で見ってきたのは、おそらくヒロだろう。同級生の16人を除いて、彼女について最もよく知っている人間だと言ってもいいはず。

「オレの見立てでは、今のクシビのチカラは信頼に強く同調しているように感じるよ」「信頼……」

「クシビからの印象と言えばその通りでもあるけど、ただあいつと仲が良い程度の人間と、あいつが心を許している人間とでは、決定的に何かが違う気がするんだ」

「データが取れないチカラだから、感覚的な判断しかできないけどね、とヒロは付け加えた。」

確かに何もかも曖昧模糊な話だが、しかし、「信頼」というワードで全てがストーンと腑に落ちた。

才能が変質したことについても納得できる。

本来なら不知火さんは、誰からも信じてもらえない孤独な役だった。だから運営にとつて都合の良い「悪意」なんてものを背負わされたのだろう。

だけど、コロシアイに反発して日夜凶器となり得るものを片っ端から処分するようになる、そんな状況が一変した。赤松楓さんを始めとした周りから、彼女ならコロシアイを起こさないだろうと信頼されるようになった。それに応えようとした結果なのだろう。

ハギが幸運に恵まれやすいのも、あるいは俺のようにその逆になってしまうのも、全ては彼女との信頼によるものが大きかったのだ。

道理でヒロが信用ではなく信頼しろと助言したわけである。

運が関わってくるのは未来のことだ。過去の実績を評価する信用ではなく、この先を期待する信頼の方に影響されるのは当然だろう。

だとすれば。

「……彼女の才能は、常に無意識で作用してると言ったよな」

「ああ、言ったよ」

「でも、無意識でしか使えない……とも言ってないよな？」

「……………」

俺の予感、否定も肯定もされなかった。

「なるほどなあ……『返品』の条件がやたら具体的だと思つたら、お前自身がそう望んだからなのか」

鎮火されていくツインタワービルが遠目に見える峠の中腹。そこに私達才囚学園の同級生は集結していた。

「だーっ！ つつかれたあ！ もう二度とこんなことするかっての!!」

警察の追及を乗り切り、何とか現場から撤収してきたオウマくんが天を仰いでそう叫べた。その背中をヨシヨシとさすれば、結局助けてくれなかつたくせに……と言いたげなジツトリとした視線を寄越される。すまんて。

「ダージリンのお仕事、これからどうなっちゃうんかな」

恨めしげなオウマくんを誤魔化すつもりで適当な話題を振る。

私達の他に誰もいないのにコードネーム呼びを続けているのは、まだ今回の作戦が完

了しきっていないからである。適当に作ったコードネームだけど、皆それぞれ気に入っていたり。

「そうね……雇い主である常盤さん次第だけど、あんなことが起きてはどう転ぶかわからないわ」

「……あの社長さん、今回の件で色々ボロが出そうだよ。少なくとも贈賄については明るみになるんじゃないの？　それが原因で当事者一人が死んでちゃあ、警察も無視できないだろうしさー」

まさかあの場でロシアイが起きるとは……。

既に一人殺されたので全く予想外のことではなかったけど、大事な作戦に集中している真つ最中に起こされるのは勘弁してほしかった。

それを瀬戸際で阻止したダージリンことキルミちゃんは、本当にフアインプレーである。

「絵画の高額転売も違法ではないけど、世間からのイメージは確実に下がってしまっ
ね」

「常盤財閥、どうなっちゃうんだろ」

もし私達が、リア充タワーに纏わる一連の騒動に対して本格的に対策していたとしたら、それくらいの裏事情は事前に調査して把握していたかもしれない。

しかし、今回ばかりは全てが不測の事態だらけだった。

そもそもキルミちゃんや常盤美緒さんに雇われたのは、彼女が個人的な仕事として依頼を受けたからに過ぎない。それもタワーの竣工を間近に控えた頃で、今から二ヶ月近く前の話だった。江戸川くん達と出会ったのも単なる偶然でしかない。

キルミちゃんは、その初対面時にあの子から意味深な疑惑の目を向けられたらしいが、その時は本当に何も無かったのだ。

……そう、その時まで。

「ところで黒蜜ちゃん。例の死んだフリの後始末は？」

「お人形は警察署から回収済み」

「オツケー、材料の出所とか調べられると面倒だしね」

私達が原佳明よしあきさんの事情を知ったのは、キルミちゃんが常盤さんに雇われるよりも少し前のこと。

あ……私達が裏でやってる活動について、その依頼をこっそり集めてるホームページがいくつかあるのだが、それらを例の酒臭い組織の一員であるプログラマーが探つてると、ホームページの管理人でもあるAIの学園長モノクマからの通知があったのだ。それが原さんである。

で、皆で話し合った結果、プロジェクト・メリーさんで撃退することになった。今更

ハッカーなんぞ、アジトのブレーカーを適当に上げ下げしたり、無線LANの電源コードを千切つとけばアツサリ無力化できるものだが、どうやら彼は脅迫されている部類の人間らしい。ならばそういう嫌がらせはせずに警察へ丸投げしよう、という方向で話が纏まった。

よく誤解されるが、私達は正義の味方やダークヒーローを気取ってるわけではない。確かに『ロシアアイダメ。ゼツタイ。』という絶対的なモットーはある。でも、才囚学園と外の世界では、倫理観があまりにも違い過ぎた。

外の世界では、何かもう、何て言うか、日常にロシアアイが当たり前のように含まれているのだ。何か問題が発生した時の思考に、『クロス』コマンドがデフォルトで組み込まれたやたらレベルの高い人間が多過ぎる??クロス こうどう アイテム みのがす。

問題の当事者とちゃんと話し合ったり、他の誰かに相談したり、あるいはその場で携帯電話で警察に通報するとか、少なくとも閉ざされた才囚学園より外の世界の方が、使える選択肢の幅は遥かに広い。ロシアイをせずに済む解決方法だってあるはずなのだ。

なのに頼るべき『なかま』の中に余計な人達▶なかま

▶?きようはんしや

やばいそしき

かぞく

ともだちが含まれてたり、使える『アイテム』の中にやたら物騒なもの▶アイテム
▶?ほんもののナイフ

ピストル

どく

ぼくだん

けいたいでんわが多いせいで、結局高確率でコロシアイへと収束してしまう。これではいくら阻止してもキリが無い。

要はもう、犯罪被害者を減らす活動は、単なる趣味の一つとしてやってかないと身が持たないのだ。

閑話休題。

とにかく原さんのことは警察に丸投げすることにした。それに必要な情報を随時寄越してもらい、あとはタイミングを見計らってドンペリに動いてもらうだけだった。

キルミちゃん原さんも務める常盤さんのところに雇われようと決めたのは、彼の動向を見守るのに都合が良いという理由もあつたが、これは結果論であつて特に狙つたものではない。

全て計画通りだったなら、あんな恐ろしく忙しいタイミングでドンペリとの共同戦線

を張る羽目にはならなかった。

「あと残ってるのはティフィンだけだよね」

「ええ。彼女がオーナーの搬送された病院に着き次第、私と交代する予定よ」

「よろしく黒蜜ちゃん」

「任された」

今回の作戦で、彼女には便宜的に“ティフィン”というコードネームを与えられた。

ティフィンとは、ドイツのあるメーカーが製造・販売している紅茶リキュールの銘柄だ。その製造過程で、キルミちゃんのコードネームでもあるダージリンの茶葉が使われている。

彼女の格好をさせることを意識した名前であり、この度の狂乱とも言える騒動の中核にいる人物でもあった。

この数日、私もオウマくんもキルミちゃんも、彼女の頼み事に振り回されっぱなしであった。

家族を自ら手放した私達には、唯一の家族に会いたいと強く望む彼女を止めることなんて出来なかったのだ。

「ティフィンは妹ちゃんと呼ぶくり話せたのかなあ」

「今後はもつと余裕を持って計画を立てて欲しいよねー。何もかも急過ぎだつーの」

「例のメツセージ、『明後日にツインタワービルのオープンパーティーに行く』……だったっけ」

「準備期間が二日も無かったのは、流石に厳しかったわ」

「妹ちゃんコールがあるたびに現地へ連れて行かされるのもキツかった……」

「お疲れ黒蜜ちゃん」

全ての始まりは、深夜にかかってくるティフィンの妹ちゃんからの留守電だった。

そのメツセージで伝えられる場所に連れて行ってほしいと、ホームシックとシスコンを複雑に拗らせたティフィンに散々拌み倒されたのである。

どんな犠牲を払うことになっても構わない、だからどうかあの子に会わせて欲しいと、強引に私に約束までさせたのだ。そこまでされたら、もうどうすることもできなかった。

そんな経緯で始まった妹ちゃんツアー。

ただ現場に連れていくだけなら特に問題は無い。なのにそれを、妹ちゃんの姿が見える位置を確保したいという要望付きで約束してしまったのが、私の運の尽きであった。

妹ちゃんの姿が見えるということは、向こうからこちらが見える位置でもある。しかしティフィンは嚴重に死んだフリをしている立場。妹ちゃん相手でも姿を見せられない。同じく死んだフリ中のニャンさんと違って高度な尾行や追跡等の技術も持つてお

らず、私が全てをフォローせねばならなかった。

妹ちゃんから留守電で伝えられる内容も問題だった。友達と一緒にどこそこへ買い物に行くだの、遊びに行くだの、その殆どが友達との予定の報告なのだ。当然その友達にもティフィンの姿は見られてはいけない。

しかも私の苦手なお日様が出ている時間帯の予定ばかり。

何より一番の問題だったのは、その妹ちゃんもお友達も、全員が私の風貌を知っている子供達だということだった。

一言で表せば、バカみたいな高難易度のスニーキングミッションである。

知り合いの子供達に気付かれぬよう、ティフィンを連れてひたすら彼らの後をついて回るその罪悪感たるや……妹ちゃんの楽しそうなキャンプにずっと張り付いてた時なんか、もう色んな意味で死にそうだった。

そんな無茶苦茶なミッション期間の最中に連続爆弾事件が発生。更には原さんのスパイ活動までバれてしまい、急遽ドンペリとの共同戦線を張るためにあちこちへ奔走。

そして、リア充タワーへ行きたいと言うティフィンの最後の無茶振りにも応えたら、あろうことかそのタイミングでタワーが爆破されると言う……。

……………。

その果てに待ち受けていたのが、あのドンペリとニャンさんによる心無い裏切りであ

る。

実害は無いとは言え、あらゆるものを極限まで擦り減らした私に対し、最大の地雷たるロシアイを想起させるイメージを擦りつけてきたのは……あまりにもピンポイント過ぎた。衝動的に張つ倒さなかつただけ有情だつたと思つてほしい。

「はあ……なーんかも、最初から最後まで爆弾まみれだつた気がする」

「いやあマジで災難だつたよね。オレも偶々乗つた電車が吹っ飛ばされそうになつたのは初めてだよ」

「大多数の人間はそうでしょうよ」

「江戸川くん、なんであんな頻繁に爆弾に遭遇するんだろ……」

ティフィンの無茶苦茶な望みを実行した通り、私には何かを必ず実現させるようなチカラがあるらしい。オウマくんやサイハラくん曰く、私に約束させたことが実現するんだとか。ハッキリとした自覚は無いが、皆が口を揃えてそう言うのできつとそうなのだろう。確かに私は一度交わした約束は必ず守る主義である。

その一方で、私の能力で出来ることを明らかに超えた約束を強引にさせてきた相手、その後でとんでもなく理不尽な災難に遭うことは昔から知っていた。だから、守れないと思つたことは迂闊に約束しないようにも心掛けている。

そういう意味では、無理矢理私に約束を取り付けたドンペリの今後がちよつと心配で

もあつた。マア向こうから頭を下げてこない限りは助けてやらんけどな。絶対にだ。

ニヤンさんは災難を覚悟した上で私に無茶振りする奇妙な奴である。さつきも私に爆弾を返品させた。毎度毎度、本当に都合良く飛ばせるものだろうかと我ながら疑問に思うのだが、その直後に怪我人のいない爆破事故のニュースが流れるので、きつと成功しているのかもしれない。

そうして、甘んじて災難を受け入れるニヤンさんをフォローするのもまた私……だったのだが、今回ばかりは知らない。ドンペリなら多分何とかしてくれるだろう。多分。「それにしても、久々に命の危機を感じたよ……」

「黒蜜ちゃんに爆死されたら、今後オレ達どうやって生きてけば良いのか路頭に迷うところだったよ」

「嘘つけ、皆立派に稼いでる癖して」

「仕方ないよねー。あの江戸川ちゃんがいたんじや、黒蜜ちゃんは殆ど何もできなくなっちゃうんだから」

「あんな幼気いたいけな子の前でチートなんて使えない」

「(そんなに幼気かしら……)」

「実際使えなくなるんだってば。あの探偵ちゃんには、本当に、マジで、気をつけてよ、黒蜜ちゃん」

「わ、分かった」

オウマくんの珍しいガチ顔である。嘘をついていないのが分かるだけに迫力があつた。

どうやら私には、江戸川くんに対して極端に弱い部分があるらしい。いや、江戸川くんだけに限らないな。米花町で会った自称探偵さん達にはやたら萎縮してしまうという自覚がある。彼らの前だといつも通りにチカラが使えなくなるのだ。

「つまりアレだよね。おぼけなんてないさつて思われたら、バカ正直に感化されてその通りになっちゃうんだよ！」

「誰がおぼけだ！」

彼らは今、最高にツイてなかった。

途中までは彼らの思惑通りに事が進んでいた。

ビルを爆破し、当初の予定通りコンピューターを破壊。更に彼らが狙っていた獲物を炙り出すことまで成功した。

そして愉悦の笑みを浮かべ、自らの手でターゲットを始末しようとしたその瞬間……

一発の弾丸が彼の目の前に着弾した。

全く予期しなかった威嚇射撃に警戒しているうちに、ターゲットは彼の射程範囲から外れてしまう。襲撃者の正体も分からずじまい。

後でその時狙っていたターゲットも人違いであると知り、歯噛みした。

ターゲットは自分達の前に姿を現さないだけで、ビルの中にはいるのだろう。そう踏んで用意していたダメ押し爆弾があつたにも関わらず、その爆風を利用し車で隣のビルに飛び移ると言う奇跡を起こされ、結局爆弾では誰も始末できなかったという結果に終わった。

そして、車で避難した者の中には想定していたターゲットは乗っておらず、代わりに彼らの天敵とも言えるサイコロのメンバーがいたと知って肝を潰した。

とにかく、狙撃を邪魔したのは奴らだろうと断定し、それ以上刺激せぬようにその場を後にしたのだが、彼らの不運はまだ続く。

「兄貴……業者が来るまで何時間かかるか分からないようですぜ……」
「……………」

原因不明のエンストを起こして停止した愛車の中で、彼は何度目かになる舌打ちをす
る。

仕方なく彼の弟分がロードサービスを呼んだのだが、彼ら自身が起こした爆発騒ぎの

せいで、近隣の住民の避難や多くの緊急車両の通行による深刻な渋滞が発生しているため、問題が解決するまでまだまだ時間がかかるようだった。

ここに至るまでに正体不明の落下物で愛車のボンネットが凹んだり、対向車のトラックが落とした積載物にぶつかりかけたなど、既に散々な目に遭っているというのに。

そして、本日最大の不運が彼らを直撃する。

「ラ、ラムからこんなメールが……」

「何だ……?」

ソレは要約すれば、彼らの所属している組織が使っている倉庫がまたしても爆発したという知らせであり、そこにあつた爆薬を使う作戦を立てた彼らの不始末を疑うものであつた。

どうにかこうにかツインタワービルから脱出できたオレ達は、今にも泣きそうな蘭や子供達に出迎えられた。おっちゃんや刑事さん達には、なんて無茶をするんだと叱られながらも無事を喜ばれた。

確かにとつともない賭けをしたという自覚はある。あんな命懸けの脱出ショー、言わ

れるまでもなく二度とやろうとは思わない。

アレが成功したのは、狭いパーテイ会場内で可能な限りの最高速度を出せた沖矢さんのドライブテクがあつてのこと。ちなみに起爆のタイミングを見計らうのにはオレのスマホのストップウォッチ機能を使った。

「あつ、東条さん」

事件の犯人である如月さんを刑事さん達に引き渡し、消防の人達に怪我の有無を確認された後、ようやくそれぞれが帰路に着けるようになった。

そこでオレは、常盤さんの秘書である沢口さんに付き添う東条さんの姿を見つけ、彼女に駆け寄った。

「あら江戸川君、どうしたの?」

「色々お礼が言いたくつて」

特に灰原をずつと見守ってくれたこと。

あいつはお姉さんの声が録音された留守電のメッセージを聞くために、彼女の家に電話をかけていた。組織の連中に目をつけられるリスクを冒してまで。

普段は誰よりも慎重な灰原がそんなことをするとは、平気なフリをする裏で相当参っていたようだ。

「哀ちゃんを守ってくれて、ありがとう」

オレがそう言うのと、こちらと視線を合わせるように身を屈めた東条さんは一瞬だけ目を丸くし、そして穏やかに微笑んだ。

「いいのよ。私が一番したかったことなんだし」

「え？」

丁寧だった東条さんの口調が少しラフになった。

いや、それよりも一番したかったって？

オレ達が話し込んでいるのを見て、気を利かせた沢口さんは先に行くと言、この場から去って行った。

それと同時に、オレの後ろから灰原と沖矢さんがやってくる。

「もうお帰りですか？」

「ええ。今の私の雇用主であるのは常盤さん……契約が切れるまで彼女に従うのが私の仕事よ」

沖矢さんに話しかけられた時には、東条さんの口調は元に戻っていた。

「もしやその契約には、彼女を助けるという内容も含まれていたのでは？ 貴女の友人の協力も含めて……」

沖矢さん、グイグイ攻めるなあ。

常盤さんを絞殺しようとしたピアノ線は途中で切断されていた。

しかし東条さんや王馬さんはそれができる位置にはいなかった。だとすれば、別の誰かがやったとしか思えない。

問われた東条さんは、表情を崩さずにこう返した。

「そうね……確かにアレは、私がやったと言えばそうなるし、そうでもないとも言えるわ」

「それは、どういう……？」

ある意味自供ともとれることを曖昧にぼかして明かした東条さんに、沖矢さんが僅かに驚く。てつきり誤魔化されると思っていたのに。

と、ここで静観していた灰原が口を挟んだ。

「ちよつと待つて二人とも。東条さんが常盤さんを助けたつて、どういうこと？」

そう言えば、灰原は東条さん達が人助けをしていることを知らないんだつた。

もうDICEとの関係性を言つてしまおうか。

そう沖矢さんとアイコンタクトを交わしかけた時、東条さんは灰原に向けて思わぬことを言う。

「私がここに来た本当の目的は、あなたと会うことよ」

「え……」

灰原に会いたかつた？

予想外の言葉に呆気に取られるオレ達の前で、東条さんは数回咳払いをした。

そして、灰原の前で膝をつき、彼女の手を取って……、

「こんな形でごめんなさいね、志保」

発せられたその声に、誰もが目を剥いた。

東条さんの声ではない、しかしどこかで聞き覚えのある声だった。

「あなたがここに来ると聞いて、居ても立っても居られなくなって……だから、東条さんに無理を言つて入れ替わらせてもらったの」

「……おねえ……ちや……?」

灰原が驚愕に目を見開き、口に手を当てる。

オレも開いた口が塞がらない。

沖矢さんに至ってはピクリとも動かなくなっていた。

「なん、で」

「あんな寂しそうな声の留守電を聞いたら、私だつて我慢できなくなるじゃない」

「……っ」

灰原の留守電メッセージ——おそらくそれは、今夜ツインタワービルに行くというものだ。

それを聞いていたということは、やはりこの人は……!

「声帯模写や変装技術、家政婦の仕事の特訓。そして私の護衛に、私から目を逸らすための役役……あの人達を随分と振り回すことになっちゃった」

「あの人達って……」

「私ね、今は王馬さんや東条さん達にお世話になつてるの。普段は入間さんの家で助手をしているわ」

サイコロ、おいサイコロ。

何やってんだサイコロ、仕事し過ぎだろ。

道理でオレや沖矢さんの前でも堂々とカミングアウトできるわけだよ。

お互いに正体を知ってる者同士だもんな！

唯一黙るしかないのは、灰原の前で正体を明かせない沖矢さんだけだった。赤井さんだって彼女に声をかけたいはずなのに、なんて気の毒な……。

それに、王馬さんがオレにFBIこと赤井さんについて聞いてきたことにも納得できた。灰原のお姉さんがいるならピンポイントで関係者じゃないか。

でもって、振り回されていると言うあの言葉も嘘ではなかったことが判明した。組織に狙われている宮野姉妹二人を陰から守りきるのは相当大変だったはずだ……。

「皆とも色々話したい……ことがあるけど、そろそろ病院に行かなくちゃ……」

東条さんの姿をした宮野明美さんは、名残惜しそうにオレ達にも目を向けた。彼女か

らチラリと視線を受けた沖矢さんがピクリと反応する。

そうして立ち上がりかけた彼女を、灰原が必死に呼び止めた。

「ま、待つて！」

「志保、」

「また、また会えるよね……お姉ちゃん」

「ええ、勿論」

その場凌ぎではない確信めいたその言葉に、灰原の顔が明るくなった。ここまで嬉しそうな灰原は初めて見るかもしれない。

「不知火さんや最原君達に言えば、きっと上手く都合してもらえと思うわ」

「ダンガンロンパの関係者で良いのね」

「そう。あの17人なら、私やあなたの事情を知ってるわ」

「私のことまで……?」

「何でも知ってる人達なのよ」

知り過ぎてるんだよなあ。

そして宮野さんは再び数回払いをして、声を変えた。

「では、またどこかで会いましょうね」

東条さんの声でそう言い残して、彼女は沢口さんの待つ方向へと去って行った。

ご機嫌が最高潮に達した灰原に対し、何もできなかつた沖矢さんのテンションは目に見えて低く。

帰り際、子供達が沖矢さんの車に揃うまで、しばらく愛車のハンドルに突っ伏していた。

「工藤君」

「あっはい」

「あの人達が何者なのか、教えてくれるわよね」

「うっす」

そして今ここに、新たなサイコロ信者が増えることとなる。

なんと恐ろしいチカラだろうか。

不知火さんは、ただ無作為に幸運や不運を周りにもたらすだけではない。彼女と強い信頼がある相手に頼まれれば、不可能を可能にするような幸運までもたらすのだ。

最早それは、願いを叶えることにも等しい。

そう言えば王馬小吉もこう言っていたな。

不知火さんには核より怖いところがある、と。

「分かった、ひとまず彼女をヒロの協力者として登録しよう。手続きはこちら^セらでやっておく。記録上だけでも正式に確保しておかないと……」

協力者とは通常、警察庁のゼロに申請を通した公安部の刑事が獲得し、その各々で管理するものである。その呼び名通り、警察に情報提供などで協力する者だが、飽くまで彼らは民間人。警察官と同じようには扱えない。だから基本的に複数の刑事の間で共有されることはなく、その情報も各地の公安警察を統括するうち^セに上がるのみ。

だが、あの17人に関してはそれらの通例に当てはめることができない。とても個人で占有して良いような人材ではないからだ。

彼らの突出した才能は、日本の警察だけでなく、あらゆる国のあらゆる機関から狙われている。

俺達がそんな彼らを追うのは、単に彼らの力を国のために有効活用したいからだけではない。彼らの才能が他国に渡り、この国の脅威となることを防ぐためでもあるのだ。

中でも特に、技術面で「発明家」の入間さんが、諜報活動では「コスプレイヤー」の白銀さんが明らかな脅威となるのが容易に予測できる。神出鬼没の不知火さんに至っては才能を抜きにしても手に負えない。

他にも、総合的なステータスが高い「宇宙飛行士」の百田さんや、ブレインとして優

秀な『探偵』の最原さんも、そして言うまでもなくあの王馬小吉も、敵に回していいものではない。

流石に文芸的な才能の持ち主にはそこまでの脅威は無いかもしれないが、彼ら17人は一蓮托生だ。何かあれば全員で結束し、連携しながら動く。むしろそうであつてこそ、彼らの真価が発揮されるのだ。彼らを抱え込むのであれば、全員まとめてに限る。

幸いにして、現時点では無戸籍の不知火さんを除いて全員が日本の国籍を持つている。他国に掠め取られる前に、何としてでも日本国内に留め置き、確保せねばならない。だから俺は、彼女達に対して常に必死なのだ。

「どうしてもっと早く言つてくれなかつたんだ。そんなに危ういものなら、最優先で管理すべきじゃないか」

不知火さんはもう既に立派なヒロの協力者のようなものだ。些か親密過ぎる気もあるが、こちらの事情とその重大さを理解した上で、守秘義務を厳守する誠実さを持つている。約束によつて課された仕事は必ず忠実にこなし、万が一のことがあつても確実な自衛手段まで持ち合わせているという……ある意味、俺やヒロにとつては最高に都合の良い人材である。

ただ、仕事の内容や出自が特殊過ぎて、公的な文書に正確な記録を残せそうになかつたのがネックだつた。

しかし、もう四の五の言ってる暇は無い。建前など後からどうにでもできる。

任意の望みを叶えるチカラなど、魅力的である以上に悪用されるのが恐ろしい。

「確かにお前の言う通り、クシビに頼み込めば、好きな望みを叶えるだけの運をもたらしてくれる」

気まずそうにずっと黙っていたヒロが、溜息混じりに白状した。

「だけど一つ、大きな勘違いをしている。あいつのチカラは、お前が思っているほど都合が良いものじゃない」

「どういう意味だ？」

「掘れば無尽蔵に富が湧く油田や金鉱山のようなものを想像しているのかもしれないが、それは全く違う。言うなれば、銀行みたいなものなんだよ」

「……銀行？」

願いを叶えるという御伽噺のような話なのに、その例えで出てきたのは、やたら現実味のある銀行という単語だった。

「お金の代わりに信頼や運をやり取りする銀行だと仮定するから、そのつもりで聞いてくれ」

「あ、ああ……」

「クシビの無意識でもたらされる、ささやかな幸運や不運は、利息や利子みたいなものな

んだ」

「はあ」

「幸運は、あいつに預けた信頼への利息。不運は、足りてない信頼を自動で補う借金のせいで、勝手に持っていかれる利子、かな。それらはクシビと関わっているだけで、何もしなくても付与されるものだと思ってほしい」

「……なるほど……？」

現実的なワードのおかげで、仕組みのイメージがすんなりと頭に入ってくる。

その言葉を借りるなら、今の自分は利息も利子もつかないニュートラルな状態なのだろう。

「萩原の福引の話は……あいつから何かをもらったクシビが、そのお礼として相応の運を萩原の口座に振り込んだんだと思う」

「そう言えば、掃除機を当ててくれたら喫茶店で奢ると言っていたな」

「きつとソレだ」

「じゃあ！ 僕も不知火さんに何か貢げば……！」

「……零の場合はクシビから信頼されてないから、口座すら存在していないんじゃないかな……」

「そんな!!？」

確かに彼女から信頼されていない自覚はあったが、それが口座開設の手数料すら払えないレベルだったとは正直なところ知りたくなかった。具体的な例えを出されると尚更シヨックがデカかった。

「それなら、不知火さんに望みを叶えてもらうというのは……」

「ここまで言われたら流石に想像がついた。

油田や金鉱山ではなく銀行ならば、その行為に相当するのは……。

「彼女からの融資だな？」

「そう、要は莫大な借金だね」

借金、さつきも一瞬その言葉が出てきた。

足りない信頼のために借金をして利子を取られる……不運をもたらされる理由の例え話だ。

「その借金の出所って、まさか」

「未来の自分自身から、だよ」

そういうことだったのか。

融資に限らず借金、いや、借りるといふ行為全般がそうだ。返却しなければならぬものは、未来の自分が差し出すものなのだから。

借金をするせいで不運になる。何故不運になるのか。運の借入先が自分自身だからだ。

借りたその場合は凌げても、将来的に不運になるのは当然である。

「身の丈に合わない幸運でも、信頼があれば叶わせてくれる。でもそれは、クシビから直接もたらされたものじゃない。あいつはその手助けをしてくれるだけなんだ」

「信頼があれば、か」

「現実の融資だつて、お互いへの信用や信頼は必要不可欠だろう？」

「それはそうだけど」

「クシビからの融資でも同じだよ。あいつからの信頼があれば、それを担保にできる。

あいつから信頼されているほど、その後起こる不運を緩和してくれるんだ」

「じゃあ、不知火さんに信頼されていない奴が大きな融資を頼むと……」

「不運を通り越して、災厄に見舞われる」

不運を上回る災厄……。

利子程度のしようもない不運だけで、あれだけ心と胃を荒らされたのだ。絶対にろくなことにならない。

自分が怪我するどころか、周りを巻き込む命の危機が起こってもおかしくない。

「それって、具体的にどんなことが起きるんだ……う？」

「……オレの実体験でいい？」

「じつ、実体験？」

「外を歩くだけで道路が陥没。蛇口を捻っただけで水道管が破裂。電灯のスイッチを入れただけで電気火災。他にも……」

「ちよちよちよちよ」

「とにかく、見えない不発弾に囲まれるような状況と言っても過言ではないよ……」

王馬小吉は、そういう意味でも核より怖いと言ったのか……？

クシビがいなければ死んでたとヒロは言うが、そんな状況を作り出したのも彼女である。シンプルに怖い。

一体ヒロは何を願った代償でそうなったのか。

「……結局のところ、不運や災厄は契約不履行へのペナルティなんだな。借りた運はどうしたって返せないんだから」

「まあ、そういうことになるのかな？」

「そして、こちらから契約を履行できる唯一の手段が、不知火さんから十分な信頼を得ておくことである……と」

「お、おお……流石、理解が早いなあ……」

散々金融的な話で例えられたおかげで理解できた。

不知火さんとの特殊な取引で有効なのは、彼女が認めたものだけなのだ。こちらの価値観を基準とした信頼^{通貨}だけではなく、それを認めた向こうからの信頼も必要なのだ。

ただ信頼すると言っても、彼女を一方的に信頼するだけでは意味が無い。あちらからも信頼されて、そこで初めて意味を成すのだろう。

「それで、零の気は変わった？」

「え？」

「協力者の件だよ」

「ああ……」

そう言えばそんな話をしていたなと思ひ出す。

不知火さんを囲い込む必要性、か。

「とりあえず、緊急性が無いのは分かったよ。悪用や濫用の危険性も低いだろう。けど諦めるつもりもない」

「……そっか」

「懐柔するかどうかは……せめて、口座を作れてから考えることにする……」
「が、頑張って……」

流星に口座すら無いと言われたのには堪えた。信頼される可能性すらないと言われているのと同じだ。今後は少しずつでも彼女達への態度を改めようと思う。

依然として、有用な才能であることには間違いない。それはヒロやハギが証明している。

しかし同時に、扱いを間違えれば恐ろしい災厄をもたらすものでもある。それをフォローできないければ到底使えたものではない。有効活用など夢のまた夢。職務どころか日常生活まで九死に一生スペシャルにされるのは流石に勘弁願いたい。

そもそも不知火さんと良好な関係が築けなければ意味が無い。ヤな奴だと思われればマトモに接触することも厳しくなるだろう。一にも二にも彼女からの信頼を得ることが最優先だ。

地道にターゲットの信用や信頼を得て絆していくのは協力者の獲得作業における定石だが、嘘偽りを見抜く不知火さんが相手ではまるで話が別である。今の俺がまさにそうだ。下心がある時点でアウト判定を出される。

ならば、その下心を下心でなくしてしまえばいい。最初から全て正直に言ってしまうしかない。『あなた達の身柄と才能をこの国で管理したいので、お友達から始めませんか』と。

……物凄い目で見られそうだな。

しかし、最終的にそれに快く領いてももらえるような、そんな関係になろうと努めるほどの気概が無いのなら、いつそ彼女の意識から外れ、全くの無関係でいた方が良く。下手に関われば、幸運どころか不運と言う名の利子が勝手に差っ引かれてしまうからだ。彼女と接触させる人員も慎重に選ばなくてはならない。

……もし、利子を取られる同僚を増やしてしまったら、缶飲料を開ける前にプルタブが取れて、プリンターやコピー機の紙詰まりが頻発して、割り箸が片方の先端付近で短く折れるような職場になるんだろう。地味に嫌だな……。

そんなことを延々と考えていたら、不意にヒロが居住まいを正し、こちらに向けて深く頭を下げてきた。

「改めて言う。零、本当に申し訳ない」

「急にどうした?」

「オレはしばらくの間、今回の『返品』の負債で何もできない役立たずになる。クシビのフォローが無い以上、お前に頼るしかないんだ」

「ああ、そうか」

あれだけの爆弾の処理を頼めば、流石のヒロでも無傷では済まなかったようだ。いくら不知火さんからの信頼が厚くても、不運を軽減できる限度はあるらしい。

「そう気に病むなよ。衣食住の心配だつてしなくて良い。あれだけの惨事で死者を一人も出さずに済んだのは、そのおかげでもあるんだしな」

ジンは執拗なまでにビルのあちこちに爆弾を仕掛けていた。自分の把握していない場所にもあるかもしれないしなかったし、事実パーティー会場にまで設置していたことまでは知らなかった。

あのコナン君達を乗せた真紅の車が爆風と共に空を飛んだ時にはどうなるかと思っただが、結果的には爆弾による死傷者はゼロ。赤い車を駆る沖矢昴の凶にはほんの少しイラツとするものはあったが、奴の技量あつての脱出劇であつたことは認めざるを得ない。

とにかく、最良の結果で終わらせることができたのは、紛れもない事実だ。

だが、ヒロの表情はどこか曇つたまま。

「それは、多分、零のアレも……」

「アレって？」

「クシビに約束させてただろう。死傷者を出させないって」

「ああ、そのことか。彼女なら無理矢理にでも避難させられるだろうと思つたんだよ。それこそお前をこの家に預けていったような要領でな」

「……………」

どうしてそこで黙り込むんだ。

何か不味いことだつたかと考えてみて……そして、俺は思い当たってしまった。

「……まさかアレが、不知火さんに融資を頼んだことになつたなんて、言わないでくれよ」

冗談じゃない。俺は彼女からの信頼残高が全く無いんだ。

だからこそ扱いに気をつけようと、ついさつき誓ったばかりなのに。

「運に頼る気なんて無かった約束だ。融資には当てはまらないだろう?」

「……まあ確かに、運頼りの約束であれば事前にクシビから警告されたはずだ。この後災難に見舞われる覚悟は良いか、って」

「あ、ちゃんとリスクは教えてくれるのか」

「でもそれなら、どうして沖矢達はあんな脱出方法を取ったんだろうとって……」

不本意だが、言われてみればその通りである。

不知火さんが俺の思惑通りに動いていたら、コナン君達はあんな危険な賭けをする必要は無かったはず。

「きつとクシビにとつても不測の事態が起きたんだ。だけどお前と約束した以上は遂行しなくちやいけない。だから運に頼るしかなかった、とか……」

「こういう場合の債務不存在確認訴訟って何処でできるんだ……!?!」

「おち、落ち着け零」

最早詐欺ではないかと思わず吼えそうになった。

そうだと落ち着けゼロ、まだ負債を抱えたとは限らないじゃないか。

深呼吸を数回し、息を整えて考えてみる。

今のところ、ヒロが言っていたようなトンデモ不運は起きていない。セーフハウスに

戻ってきてから家中確認したが、家電や電灯は無事に使用できたし、水回りも一通り問題無く使えている。勿論、部屋の床が陥没するようなことにもなっていない。ハロも寝床で健やかな寝息を立てていた。

ただ、確実に負債を抱えたヒロがいるだけで……。

「……参考程度に聞きたいんだが」

「うん？」

「お前の負債は、どれくらいのものなんだ？」

「そうだな……クシビのフォローがあると仮定したら、宿泊している部屋から一步も出ないまま、仕事も家事も何もしないニート生活を一ヶ月ほど続けて……それでようやく無傷のままやり過ぎさせる程度だと思う」

「よく分かった。僕も債務者確定だ」

「本当にゴメン……」

俺が抱えてしまった負債は、いつも通りトリプルフェイスをしながら、超社会人級のジゴロ”となったヒロを匿いながら養うことだった。

いや、ヒロを養うこと自体は問題視していない。帰ったら親しい誰かが待つてくれるのはむしろ嬉しいくらいだ。

真に問題なのは、真面目で勤勉なこの幼馴染が、不本意にもジゴロにならざるを得な

くなるほどの不運を抱えているという点である。

不知火さんがヒ口を俺に預けた理由が痛いほど分かる気がする。色んな意味で。

……おそらくコレは、あの約束で発生した負債だけではない。不知火さんを泣かし、元から無い信頼を更に減らした分も上乘せされているはずだ。

果たして俺は、これから襲いくる災厄を乗り切れるだろうか。バーボンの仕事を含めでもこんなに不安になったことはない。

「約一ヶ月……結構具体的な数字だけど、これも経験則なのか?」

「そうだよ。流石に何度もやらかしてたら、負債の程度もそれとなく察せるようになってしまった」

「……えっ、何度も?」

ちよつと待て。

それって何度も望みを叶えてもらっているということになるんだが? あの聞かだに恐ろしい融資を何度も頼んだのか?

「クシビが助けてくれなかったら、一体何回死んでたことやら……」

「その度に不知火さんが助けてくれるのか?」

「うん、そうだよ」

繰り返される先の見えないニート生活を??

な、何だそれは。どういうことなんだ？

やはりヒロにはジゴロの才能があるのか？

それとも不知火さんがチョロ過ぎるのか？

「あいつが戻ってくるまでに、またお礼を考えておかなくちや」

「あ……あんな喧嘩をしたのに、彼女が戻ってくると思ってるのか……??？」

「？ ああ、いつもこんな感じだからね」

ダメだこいつら。早くなんとかしないと。

「終わったアアアア！ これで任務終了!!」

「本当に……本当にありがとうがとう不知火さん。まさか志保とまた言葉を交わせる日が来るなんて、夢にも思わなかったわ」

「それにしても、あの灰原ちゃんや宮野ちゃんの妹だとは思わなかったよ。歳の差もあるし、苗字どころか名前も聞いてたのと違うし」

「ええ……特殊な事情があつてね」

「深くは聞かないよ、フクザツなご家庭つてやつでしょ」

「えっ」

「サイハラくんのお仕事手伝つてると色んな修羅場を体験できるんだあ。夫婦がどちらも不倫してたり、歳が二回り以上離れた婚外子のきょうだいの存在が発覚したり……」

「(全然違うけどそれもそれで嫌だわ)」

「江戸川くんも似たご家庭なのかもね」

「え？」

「偽名使ってることは分かるけど、本名までは分かんないし」

「(そこまで分かかっててスルーなんだ……)」

「じゃあ宮野ちゃん、私はこれで」

「彼のところには戻らないんじゃないの？」

「や、やつぱりニヤンさんのことが心配でえ……」

「……あなた、いい加減に彼と決別すべきよ。絶対にいいように利用されてるわ」

「別れるも何もそういう関係じゃないし……」

「向こうはどう思ってるか分からないでしょう？　これを機にスッパリ解消しちゃいなさっ」

「でも……」

「でも……」

「そもそも潜入捜査官なんて地雷しかないんだから」

「せ、説得力が違う」

時計じかけの摩天楼

天国へのカウントダウン

with V3

明美ちゃん、我儘を言うの巻

THE END

ハロウインの花嫁
with V3 ①

ヒロが公安からの潜入捜査員であると組織に露見した件から早数年。つい先日、そのヒロがようやく正式に警察官として復帰した。それまで生存していたことも伏せていたため、特に風見などは涙ぐんでヒロの帰還を喜んだ。

今夜はそれを祝うという名目で、久しぶりに同期五人が集まって飲むことに……なんてことができたら最高ののだが、現実はそのままで甘くない。

まず己の複雑な立场上、外での飲酒そのものに情報漏洩のリスクがある。実力者揃いで気心も知れた知人達とは言え、あの組織に目をつけられる可能性も考えたら、そうそう迂闊なことではない。

まあそもそも話、所属がバラバラの五人の休みが重なる機会が無いに等しい。

つまり、秘密裏に機密性の高い場所を確保できて、参加者の移動を自在にコントロールできる某超能力者がいれば、どうにかなる話である。しかし残念ながら、今回はその彼女の都合が合わなかったため、集まることは叶わなかった。

その代わり、時間を決めてSNS上で話すことにした。似非リモート飲み会というやつだ。勿論それに使うアカウントやスマートフォンも厳密に管理しなくてはならないが、実際に本人達と対面するよりかはずっと危険性は低い。

・今夜は飲むぞ(5) 三。
今日。

《left》皆もう揃ってるか? 《left》

既読 4

20:57

《left》hiroいるよ 《left》《left》

20:57 《left》

《left》MTDいる 《left》《left》

20:57 《left》

《left》ケンちゃん21時からだったよね？ 《left》《left》

20:58 《left》

《left》伊達すまん

まだ帰宅途中 《left》《left》

20:58 《left》

《left》お疲れ様

無理せず帰ってくれ 《left》

既読 4

20:58

《left》MTD事故にだけは遭うなよ 《left》《left》

20:59 《left》

《left》ケンちゃん(事件の方が遭遇率高いんだよなあ)《left》《left》

20:59 《left》

《left》hiro嫌なフラグ立てないで…《left》《left》

20:59 《left》

《left》伊達俺に構わず先にやっててくれ《left》《left》

21:00 《left》

+…:…:… 《left》: Aa《left》??… 《font:u58》ぬ《left》

font》

う。 班長はまだ準備ができていないようだった。捜査一課は本日も大忙しだったのだから。かく言う自分も似たようなものだ。落ち着いてテーブルについているような顔の

メッセージを打ったが、実は自分も先程帰宅したばかりで、今もまだスーツから着替えている最中である。

ヒロと松田と萩原は本当に余裕があるのか、この三人はメッセージを頻繁に送り合っていて、着替える片手間に見る画面はそこそのスピードで流れていく。適度に自分もそこに参加しながら、酒やつまみの駄菓子を用意やハロの世話などをして、ようやく腰を落ち着けた。

《left》ケンちゃんそれでどうだった？

久々のお勤めは《left》《left》

21:11 《left》

《left》hiro懐かしくて涙が出そうだったよ《left》《left》

21:11 《left》

《left》MTD戻ってくるのがおせーんだわ《left》《left》

21:13 《／left》

《left》何年も音信不通だった奴を戻すなんざ

そんな特例に見合うモノといったら 《／left》《left》

21:13 《／left》

《left》ケンちゃんあの子達しかいないよね 《／left》《left》

21:14 《／left》

《left》hiro彼らとの繋がりがああるなら

身内に戻すべきだって 《／left》《left》

21:14 《／left》

《left》ヒロが唯一彼女を

安全に捕まえておけると 《／left》

既読 4

21:15

《left》僕がアピールしておいた《left》

既読 4

21:15

《left》伊達まあ事実だな《left》《left》

21:15 《left》

《left》MTD少なくともゼロ本人よりは確實《left》《left》

21:16 《left》

《left》やかましいぞ《left》

既読 4

21:16

・
+ : : : : :
font》 《left》. Aa 《left》?? : 《font : u58》ぬ 《

ヒロは例の17人とのコネクションという強力なカードを持っていた。だから実現したと言っても過言ではない。

不知火さんの身柄を自分の近くに留め置ける口実を得られたのは、普段から彼女のチカラを借りている僕やヒロにとつて都合が良かったのは言うまでもないが、警察としてもそうするしかなかったのも事実である。

警察は例の17人に対して、あの手この手でアプローチを試みているが、彼らのガードは非常に堅固で取り付く島もない。どれだけ上手く偶然を装って接触しても必ず警察関係者であることがバレてしまい、冷たい目で見られるだけで終わる。

そんな勝ち目が全く見えない状況で、見事に不知火さんの信頼を勝ち得た元警察官が

古巣に戻りたがっているなら、それを拒む理由が無いどころか、喜んで特例扱いしてやりたくなくてもおかしくない……ということだった。

《left》ケンちゃん改めてあの子と同居するんだってね《left》《left》

21:17 《left》

《left》本人から聞いたよ《left》《left》

21:17 《left》

《left》hiroそういう要請なんだ《left》《left》

21:18 《left》

《left》伊達命令じゃなくて要請？《left》《left》

21:18 《left》

《left》ヒロへの命令じゃなくて

不知火さんへの要請だよ《left》

既読 4

21:18

《left》ケンちゃんそつちか《left》《left》

21:18 《left》

《left》監視されてくださいと頭を下げたんだ《left》

既読 4

21:18

《left》hiroオレは正式に現状維持を頼まれた《left》《left》

21:19 《left》

《left》MTD流石のお偉いさん達も

不知火への強制力は無いんだな《left》《left》

21:19 《left》

《left》ケンちゃん物理的にも法的にも拘束できないしねえ《left》《left》
t》

21:19 《left》

《left》伊達やつぱりあいつは不能犯扱いになるのか？ 《left》《left》

21:19 《left》

+. 《left》: A a 《left》?? : 《font:u58》ぬ 《left》

font》

現状、不知火さんのやることに対して、警察は何も取り締まることができない。

あらゆる拘束が意味を成さないという物理的な理由だけでなく、法律面においても、行動と結果の因果関係を証明できない——客観的に犯罪を立証できない不能犯という

立場になるからである。そういう意味でも彼女は非常に手強い。

《left》ケンちゃんいいなあ諸伏ちゃん《left》《left》

21:23 《left》

《left》なんかズルい《left》《left》

21:23 《left》

《left》MTD何がズルいんだよ《left》《left》

21:23 《left》

《left》ケンちゃん俺の方が先にクシビちゃんと会ったのに《left》《left》
t》

21:23 《left》

+. 《left》. A a 《left》?? 《font:u58》ぬ《left》

font》

不知火さんについてアレコレ話しているうちに、急に萩原がそんなことを言い出した。

先に出会ったとは、おそらく七年前に起きた爆弾事件のことを言っているのだろう。その事件に不知火さんがどう関わったかは、ヒロから聞かされた大まかなあらましか知らない。

《left》それって爆弾が設置されたマンションに

彼女が不法侵入していた話か？ 《left》

既読 4

21:24

《left》ケンちゃん大雑把にザックリ言うよね 《left》 《left》

《left》ケンちゃん忘れもしない七年前の11月7日《left》《left》

21:27 《left》

《left》都内の二箇所爆弾が仕掛けられた《left》《left》

21:27 《left》

《left》MTD片方は俺の班が担当してすぐ片づけたが

ハギの班が担当した本命の爆弾は

バラすのに手間取ってな《left》《left》

21:28 《left》

《left》ケンちゃん残念ながら時間切れギリギリのところ

犯人の要求に屈することになった《left》《left》

21:28 《left》

《left》覚えてる

悔しかった《left》

既読 4

21:29

《left》ケンちゃん俺の不徳の致すところです《left》《left》

21:29 《left》

《left》伊達もう終わったことだ《left》《left》

21:30 《left》

《left》hiro最善を尽くしたんだろう《left》《left》

21:30 《left》

. +
 《left》: A a 《/left》?? : 《font:u58》ぬ《/font》

犯人からの要求は十億円。マンションの住民を一人でも避難させたら爆破させると
 いう脅迫付きだった。つまり遠隔操作も可能な爆弾である。

《left》ケンちゃん犯人にタイマーを止めさせた後に

住民の避難が開始されたんだけど《/left》《left》

21:31 《/left》

《left》その真っ只中で彼女が発見されたのよ《/left》《left》

21:31 《/left》

《left》伊達不知火が? 《/left》《left》

21:31 《/left》

《left》ケンちゃんそう 《/left》《left》

21:31 《／left》

《left》俺達が爆弾と対峙してるその階に《／left》《left》

21:32 《／left》

《left》つまり真つ先に避難が完了したはずの階に《／left》《left》

21:32 《／left》

《left》子供が閉じこもって出てこない部屋があると

待機中だった俺達に無線が入った《／left》《left》

21:32 《／left》

《left》hiro同じ階にいたの? 《／left》《left》

21:33 《／left》

《left》さぞ驚いただろうな《／left》

21:33

《left》ケンちゃんそりやあもう! 《left》《left》

21:33 《left》

《left》今でこそカラクリは分かっているけど 《left》《left》

21:33 《left》

《left》厳戒中の警察官だらけの中に

いきなり出現したわけだからね 《left》《left》

21:34 《left》

* +:..... 《left》: Aa 《left》??: 《font:u58》ぬ 《left》

font》

初めて当事者の口から聞いたが、改めて考えてみると何とも奇妙な話である。一つ一つ部屋を訪ねて住民に避難を促したはずだろうに、何故一軒だけ取りこぼすなんてことが起きるのか、と。

マア実際は警察の確認ミスではなく、不知火さんがパツとその場へ現れただけなのだろうが、当時の現場にいた者達はさぞ慌てたに違いない。

《left》ケンちゃんいくら呼びかけても出てこないって言うから 《left》
eft》

21:34 《left》

《left》人当たりが良いと評判の俺が

説得しに行くことになったんだ 《left》《left》

21:35 《left》

《left》ちよつといいか 《left》

既読 4

21:35

《left》ケンちゃんどうしたの? 《left》《left》

21:35 《／left》

《left》その評判が自称なのか他称なのか
なんとなく気になった 《／left》

既読 4

21:36

《left》hiro実はオレも 《／left》《left》

21:36 《／left》

《left》ケンちゃんそこつつこまれるとは思わなかった 《／left》《left》

21:36 《／left》

《left》MTD実際に評判だったんだよ

ガタイが良い機動隊の中だと

あのコミュカ力の高さは特に際立つから《left》《left》

21:37 《left》

《left》納得した《left》

既読 4

21:37

《left》hiroなるほど《left》《left》

21:37 《left》

+.:.:.:.:.
 《left》:. Aa《left》??:.
 《font》:u58《ぬ》

font》

実は以前から、人の機微に睨く洞察力に長けた萩原は割と公安向きの人材ではないかと、ヒロと話すことが度々あった。

テロのような重大犯罪が起こされぬように先手を打つ公安警察は、とにかくそれらの前兆となるような情報をかき集めるのが肝となる。初対面の人間とも打ち解けやすく、その懐に入り込めるあいつの人柄は、なかなか魅力的なのだ。

今の萩原は、捜一から機動隊に戻った松田と共に爆発物処理班として活躍しているが、何か機会があればそういう話を持ちかけたいと思っている。

気持ち切り替えるようにハイボールの缶を一口呷ると、画面の中の話題は七年前の事件に戻っていた。

《left》ケンちゃんそんなコミュ力が高い俺ですが 《left》 《left》

21:38 《left》

《left》残念ながらクシビちゃんを

部屋から出すことは叶いませんでした 《left》 《left》

21:38 《／left》

《left》伊達食べ物を持ってなかったからか：《／left》《left》

21:39 《／left》

《left》ケンちゃんいやあだろう《／left》《left》

21:39 《／left》

《left》思い返すと当時のクシビちゃんは

今はかなり雰囲気違っていた《／left》《left》

21:39 《／left》

《left》少なくとも食べ物では釣れそうになかった《／left》《left》

21:39 《／left》

《left》MTD別人じゃねえか《／left》《left》

21:40 《／left》

《left》ケンちゃんドアをほんの数センチ開けた向こうで

こつちをジツと見つめてくるだけ 《left》 《left》

21:40 《left》

《left》 鍛えてる機動隊の野郎数人がかりで

押ししても引いても扉はビクともしなかった 《left》 《left》

21:40 《left》

《left》 既に数センチ開いた扉がだよ? 《left》 《left》

21:40 《left》

《left》 チェーンもかけてなかったのにね 《left》 《left》

21:41 《left》

《left》 ひろホラーかな? 《left》 《left》

21:41 《left》

《left》 ホラーでしかない 《left》

既読 4

21:41

《left》伊達酔いがさめそう《left》《left》

21:41《left》

《left》MTDこんな時間に聞く話じゃねえ《left》《left》

21:42《left》

+.....

《left》: A a《left》??: 《font:u58》ぬ《left》

font》

緊迫した現場には似つかわしくない、静かに佇むだけの少女の姿を思い浮かべてみた。違和感しかない。

心なしか、冷蔵庫の製氷庫が低く唸るような音が、やけに大きく聞こえてくる。なんだか季節外れな肝試しのような空気になってきた。

スマートフォンの上では五人が賑やかに喋っているが、現実では部屋に自分一人

だけ。かろうじて愛犬のハロが側にいるが、僕に撫でられて気持ち良さそうに目を細め、今にも眠ってしまいそうだ。既婚者の班長がちよつと羨ましい。

《left》ケンちゃんしばらく部屋の前で膠着してたけど

結局ドアを閉めて鍵もかけられちゃって《left》《left》

21:42 《left》

《left》そうなると鍵を壊してでも

連れ出さなきゃいけない《left》《left》

21:43 《left》

《left》でもその判断は現場の俺達だけじゃできない《left》《left》

21:43 《left》

《left》既に犯人の要求を飲んで

その上で更に時間と手間が必要になるから《left》《left》

21:43 《left》

弾を無力化すべきという結論を出したらしい。

警察は、市民の安全を最優先にするのは当然のことながら、同時に脅威たる犯罪者の特定や確保もしなくてはならない。新たな脅迫材料を提供して、更に増長させるようなこともあつてはならない……そう考えた末の結論なのかもしれない。

《left》ケンちゃんクシビちゃんとの初対面はそんな感じ《left》《left》

21:45 《left》

《left》爆弾も無事に処理してめでたしめでたし《left》《left》

21:45 《left》

《left》hiroお疲れ様《left》《left》

21:46 《left》

《left》伊達とんでもないところで邪魔されたんだな《left》《left》

21:46 《left》

《left》ケンちゃん実は一概にはそうとも言えなくて《left》《left》

21:46 《left》

《left》と言うと? 《left》

既読 4

21:46

《left》MTD住民の避難が完了するまでの間

ハギの班は万が一に備えて

防護服を脱いで待機していたらしい 《left》《left》

21:47 《left》

+.

《left》. . . Aa 《left》?? . . . 《font》:u58 《ぬ》

font》

爆発の衝撃から身を守る防護服は、総重量が30kg以上にもなる。駆動性も悪く、通気性などあるわけなので着心地も悪い。そんなものを着用した状態で待機し続けられ、無駄に体力を消耗してしまう。

住民の避難に備えていたことを考えると、萩原がそれを身に付けていなかったのもおかしくはない。不本意ながらも犯人によって爆発しないと安全が確保されていたなら、住民の避難に集中すべきだったのだろう。

《left》MTD犯人は二人いた

そのうち一人は事件中に交通事故死 《left》《left》

21:47 《left》

《left》残されたもう一人がそれを逆恨みして

四年後に同じような爆弾事件を起こした 《left》《left》

21:48 《left》

《left》hiroそれが三年前の事件? 《left》《left》

21:48 《／left》

《left》 松田が観覧車で吹っ飛びかけたあれか 《／left》

既読 4

21:48

《left》 ケンちゃんそんな執念深い犯人だからさ 《／left》 《left》

21:49 《／left》

《left》 七年前の事件はかなり

ギリギリだったのかもしれない 《／left》 《left》

21:49 《／left》

《left》 伊達相方が死んだ時点で

起爆させていたかも、と? 《／left》 《left》

までだとされているらしい。それが鉄筋コンクリートまで破壊するほどの威力になると、防ぎきれなかった衝撃で命に関わるようなダメージを受けてしまうそうだ。

七年前の事件現場となったのは超高層マンション。耐震性や耐火性等に優れた鉄筋コンクリート造だ。すぐ真上と真下を頑丈なコンクリートの天井と床に挟まれているため、爆破の衝撃は上下方向に逃げづらく、その分横方向へ広がっていく。

それでも複数の一般家屋分もの面積を持つ集合住宅の、その一つの階を全て吹き飛ばす規模の爆弾なら、たとえ防護服を装備していても無事では済まなかったかもしれない。それを解体すべく至近距離にいたのなら尚更だ。

だが待て。

わざわざそんなことを改めて主張するということは、まさか……？

《left》だからって防護服脱いだまま

解体作業をしてないだろうな？ 《left》

21:51

《left》伊達萩原? 《left》《left》

21:52 《left》

《left》hiroもしや凶星? 《left》《left》

21:52 《left》

《left》MTDおいこら 《left》《left》

21:52 《left》

《left》返事しろ 《left》《left》

21:53 《left》

《left》ケンちゃん俺の不徳の致すところです 《left》《left》

21:54 《left》

《left》伊達お前な! 《left》《left》

21:55 《left》
 《left》hiroはい審議《left》《left》

21:55 《left》

☎?

グループ音声通話が
 開始されました。

21:55

+.
 《left》: Aa 《left》?? : 《font》:u58 《ぬ》
 font》

そのまさかだった。

あろうことか、萩原は勤務中に防護服無しで爆発物に触れたらしい。七年越しに明かされた失態に全員が呆れ返った。

機動隊の寮住まいである松田と萩原に配慮し、音声が出る通信は避けていたが、これ

ばかりは直接一言申さねばと通話を開始する。

『待機中はともかく、それはないよ……』

「調子のいいところはお前の長所だが、よりにもよってそんな場面で発揮しなくても良いだろう」

『うぐつ。確かに危ない橋を渡った自覚はあるけど、手元が自由だからスムーズに解体できたかなって……』

『言い訳すんな。何のために防護服での訓練があると思ってるんだよ』

『何事も無かったから良かったけど……なあ?』

『ごめんなさい! それ以降は違反してません!!』

「当たり前だつ」

示し合わせたかのように皆でネチネチ責めると、萩原はすぐに音を上げて素直に謝罪を口にした。あいつは口が回るから、感情任せに叱ったところで上手くないなされてしまふ。こうしてジワジワと責めた方が効果的であると、俺達四人は経験則で知っていた。酒が入ったノリもあつたのは否定しない。

決して誉められたことではないが、七年も前に終わったことについて今更謝罪が聞きたいわけではないし、わざわざ査問にかけようとも思わない。そのことをしっかり反省して今に活かしているなら、それで良かった。ただ、仲間内で萩原を弄るネタが増えた

な、と。

このことは俺達の中で秘密にしようと思ひ合い、ひとまずチクチク突くのは止めにした。

22:00

グループ通話が終了しました。

《left》ケンちゃんまあとにかく《left》《left》

22:01 《left》

《left》もし犯人が裏切る可能性があったなら《left》《left》

22:01 《left》

《left》急いでバラすのが最善で

唯一の方法だったんじゃないかと《left》《left》

22:01 《left》

《left》俺は思っております《left》《left》

22:02 《left》

《left》hiro唯一って? 《left》《left》

22:02 《left》

《left》MTD被害者を出さずに済む方法としてだろ 《left》《left》

22:02 《left》

・+:::..... 《left》: Aa 《left》??: 《font:u58》ぬ 《left》

font》

本来なら住民の避難が終わった後に解体作業を再開するはずだった。それが不知火さんのせいで大幅に前倒しになった。

指示が変更されたタイミングが、犯人の片割れが死亡する前だったのか後だったのか、そもそも本当に犯人が裏切るつもりだったのか、今となっては何も分からない。

しかし結果的には全て上手くいった。今更それらの因果関係を調べたところで、何の意味も無いのだろう。

《left》ケンちゃんその後クシビちゃんのいる部屋に戻ったら《left》《left》
 《left》

22:03 《left》

《left》扉の鍵が開いていた代わりに《left》《left》

22:03 《left》

《left》部屋の中には誰もいませんでした《left》《left》

22:03 《left》

《left》伊達ホラー再び《left》《left》

22:03 《left》

《left》ケンちゃん後の調査によれば《left》《left》

22:04 《left》

《left》実はその部屋は空室で

元から誰も住んでおらず《left》《left》

22:04 《／left》

《left》指紋や足跡のような誰かがいた痕跡は

何一つ見つからなかったそうです 《／left》《left》

22:04 《／left》

《left》hiro世にも奇妙な物語 《／left》《left》

22:04 《／left》

《left》ケンちゃん以上 《／left》《left》

22:05 《／left》

《left》数年後にダンロン事件が起きて

クシビちゃんと再会するまで 《／left》《left》

22:05 《／left》

《left》俺の班で語り継がれていた怪談でした 《／left》《left》

22:05 《／left》

女らしいと言うか何と言うか。

《left》伊達だから事あるごとに

不知火に貰いでるのか？ 《left》《left》

22:06 《left》

《left》ケンちゃん初めはあの時のお礼のつもりだったけど 《left》《left》
t》

22:07 《left》

《left》今はある意味習慣みたいなの？ 《left》《left》

22:07 《left》

《left》貢ぐのが習慣だと…？ 《left》

既読 4

22:07

《left》ケンちゃん野良猫に懐かれたみたいで
 ついつい構いたくなる 《left》 《left》

22:07 《left》

《left》MTDそれな 《left》 《left》

22:08 《left》

《left》わかる 《left》 《left》

22:08 《left》

《left》まんま餌付けじゃないか 《left》

既読 4

22:08

《left》ケンちゃんだからこそ 《left》 《left》

22:08 《left》

《left》諸伏ちゃんに独占されて悔しい《left》《left》

22:09 《left》

《left》伊達そこでそれに行き着くのか《left》《left》

22:09 《left》

+.....
font》 《left》.. Aa《left》??.. 《font:u58》ぬ《left》

不知火さんと同居するヒロにズルいと言い出したのは、お気に入りの猫をとられたせいであったようだ。

しかし僕が知る限りでは、ヒロの方が不知火さんに猫扱いされている気がする。彼女は気ままな性質こそ猫っぽいが、ヒロの腰の低い我儘を逐一聞いてやっている。拾い主たる義務感のようなものでもあるのかもしれない。

《left》hiroあまり懐かれ過ぎて

良いことばかりじゃないよ《left》《left》

22:l0 《／left》

《left》色々と遠慮しなくなってくるから 《／left》《left》

22:l0 《／left》

《left》ケンちゃんお腹を見せてくれるみたいで可愛いじゃん 《／left》《left》
ft》

22:l0 《／left》

《left》むしろヒロの方こそ

彼女への遠慮が無い気がする 《／left》

既読 4

22:l1

《left》hiroえ? 《／left》《left》

22:11 《／left》

《left》ゼロにはそんな風に見えてたの? 《／left》《left》

22:11 《／left》

《left》そうとしか思えないが? 《／left》

既読 4

22:12

《left》ケンちゃんその話詳しく 《／left》《left》

22:12 《／left》

《left》こちらの事情が絡んでるので話しにくい 《／left》

既読 4

22:12

《left》伊達そんなデリケートな仕事にまで

あいつを巻き込んでいるのか《／left》《left》

22:13 《／left》

《left》ケンちゃん女の子の親切心につけ込むお巡りさん《／left》《left》

22:13 《／left》

《left》MTDお前ら二人揃って無茶振りしてそう《／left》《left》

22:13 《／left》

《left》否定しようと思ったけど

言われてみたらその通りだった《／left》

既読 4

22:13

《left》hiroそこまでの無理はさせてないよ《／left》《left》

22:14 《left》

font》
 +.....
 《left》: Aa《left》??:
 《font:u58》ぬ《

そう言えば、潜伏生活をしていたヒロが不知火さんの世話になつていたことはともかくとして、僕まで彼女に色々お手伝つてもらつてゐることを明かすのは初めてかもしれない。

初耳だと言わんばかりの反応をする三人の様子からして、不知火さんは彼らに僕達との仕事の話はしていないようだ。僕達が知己同士と知つていても、仕事とプライベートにキチンと線引きし、しっかり秘密を守つてくれている。言動はフワフワしているが、なかなかどうして隙が無い。

《left》hiroこう言うのもなんだけど《left》《left》

22:15 《left》

《left》オレもクシビに振り回される立場だからね《left》《left》

22:15 《left》

《left》伊達例えば? 《left》《left》

22:16 《left》

《left》hiroしよつちゆう変なものを拾ってくる《left》《left》

22:16 《left》

《left》ケンちゃんいよいよ猫みたい《left》《left》

22:16 《left》

《left》hiro血塗れで半透明な人間が映る鏡とか《left》《left》

22:16 《left》

《left》目を離した隙に

足元へ寄ってくる市松人形とか《left》《left》

22:17 《／left》

《left》ケンちゃんシンプルに怖い《／left》《left》

22:17 《／left》

《left》MTD半殺しのセミを枕元に置かれるのと

同じくらいハイレベルなラインナップ《／left》《left》

22:17 《／left》

《left》伊達一課御用達の神社教えてやろうか《／left》《left》

22:17 《／left》

《left》ケンちゃん（お祓いの効果薄そう）《／left》《left》

22:18 《／left》

《left》MTD（祓ってもキリがないってのが真相）《／left》《left》

22:18 《／left》

《left》シツツツ《left》

既読 4

22:18

・
+:::.....
《left》:: Aa《left》??:
《font:u58》ぬ《
font》

不知火さんが拾うようなそういう系のブツが発生するのも、もしかしてこの街の治安の悪さも一因ではないだろうか。その鏡に映る半透明の人なんか、事件現場に持つていったら犯人を指差していそうな気がする。せめて推理させてくれ。

《left》hiroホテルの備え付けの冷蔵庫に

血液製剤を入れられたこともある《left》《left》

22:19《left》

《left》MTD輸血の真つ赤なアレを? 《left》《left》

22:19 《left》

《left》hiro肉や魚を包むように新聞紙で包まれていた 《left》《left》
t》

22:19 《left》

《left》ケンちゃん確かにナマモノだけど 《left》《left》

22:19 《left》

《left》なんでそんなものが? 《left》《left》

22:20 《left》

《left》hiroクシビは不定期にでも輸血しないと

コンディションがガタ落ちするんだ 《left》《left》

22:20 《left》

《left》MTD初耳 《left》《left》

22:20 《／left》

《left》ケンちゃんどこで調達してくるの： 《／left》《left》

22:20 《／left》

《left》伊達公衆衛生法に引っかけりそうだな 《／left》《left》

22:21 《／left》

《left》hiro食中毒起きても困るからやめさせたよ 《／left》《left》

22:21 《／left》

《left》そういう問題じゃない 《／left》

既読 4

22:21

《left》いや食中毒も恐ろしいが《/left》

既読 4

22:22

・
+.....
《left》: Aa《/left》??: 《font:u58》ぬ《/font》

輸血が必要ということはヒロ經由で知っていたが、彼女の不思議な生態にツツコミどころが多くて、何から指摘すべきか分からない。

なんとなく手持ち無沙汰になった手が、ポテトチップスの袋に伸びる。次の缶ビールの蓋を小気味良い音を立てて開けると、班長が心配げに発言した。

《left》伊達あいつはそんな難病を抱えているのか? 《/left》《left》

22:22 《/left》

《left》MTDそれはない

少なくとも病弱つてガラじゃねえ《／left》《left》

22:23 《／left》

《left》ケンちゃん身体能力も感覚機能も人並み以上《／left》《left》

22:23 《／left》

《left》武術こそ習得してないけど

単純な筋力なら俺以上《／left》《left》

22:23 《／left》

《left》弱点と言えば直射日光ぐらい？《／left》《left》

22:24 《／left》

《left》伊達輸血が必要で

馬鹿力で

日光には弱い？《／left》《left》

22:24 《left》

font》
 +.....: 《left》: Aa 《left》??: 《font:u58》ぬ 《left》

班長が確認するようにまとめたその言葉の後、しばらくの間メッセージの流れが止まった。

皆が何を連想しているのか、手に取るように分かる。

《left》ケンちゃんねえ諸伏ちゃん 《left》 《left》

22:25 《left》

《left》クシビちゃんに嘸まれたことある? 《left》 《left》

22:26 《left》

《left》hiroないよ 《left》 《left》

22:26 《left》

《left》輸血は普通にチューブの針を血管に刺してる《left》《left》

22:26 《left》

《left》MTDでつきり10秒チャージ感覚で

あの袋を叩ってるのかと思つたわ《left》《left》

22:27 《left》

《left》hiro輸血だと言ってるじゃないか《left》《left》

22:27 《left》

+..... 《left》: Aa《left》??: 《font:u58》ぬ《left》

font》

同居人へのあらぬ疑惑をヒロが淡々と否定する。否定はしても、そう疑われること自体は仕方ないと思っているようだった。

《left》hiroクシビは変わってるところが多いけど《left》《left》

22:28 《left》

《left》ただそれだけなんだよ《left》《left》

22:28 《left》

《left》ケンちゃんその変わってるところが

ピンポイントで意味深過ぎるんだってば《left》《left》

22:28 《left》

《left》hiro確かに《left》《left》

22:28 《left》

《left》大抵の怪我や病気を一日足らずで

治せる治癒力は人並み外れてると思う《left》《left》

22:29 《left》

《left》ケンちゃんそれ医療業界がひっくり返らない？ 《left》《left》

22:29 《left》

《left》病院要らずは素直に羨ましい 《left》

既読 4

22:29

《left》hiro歯もやたら鋭利な気がする 《left》《left》

22:30 《left》

《left》MTD牙じゃねえか 《left》《left》

22:30 《left》

《left》伊達牙だな 《left》《left》

22:30 《left》

《left》hiro生活リズムも一般的な人とは

12時間くらい綺麗にズレてるけど 《left》 《left》

22:31 《left》

《left》ケンちゃん昼夜逆転生活 《left》 《left》

22:31 《left》

《left》MTD夜行性 《left》 《left》

22:31 《left》

《left》hiroあいつ自身はちよつと食いしん坊で

自由人な女の子ってだけなんだよ 《left》 《left》

22:32 《left》

《left》伊達なあ諸伏

語るに落ちるって言葉知ってるか 《left》 《left》

22:33 《／left》

《left》ケンちゃん陣平ちゃんたら《／left》《left》

22:33 《／left》

《left》仮にも年頃の女性をラーメンに誘ってんの？《／left》《left》

22:33 《／left》

《left》伊達そういうところだぞ松田《／left》《left》

22:34 《／left》

《left》MTD何がだよ《／left》《left》

22:34 《／left》

《left》ニンニクが弱点になるのは

魔除けになるからだ《／left》

既読 4

22:34

《left》疲労の回復や殺菌力といった

効果があることに由来している《left》

既読 4

22:34

《left》そういう意味では邪悪ではないんだろう《left》

既読 4

22:35

《left》hiro一番相性が悪いゼロが言うと言説力があるね《left》《le

f t

2 2 : 3 5 《 / l e f t 》

《 l e f t 》 M T D じゃあ流水は？

あいつ泳げんのか？ 《 / l e f t 》 《 l e f t 》

2 2 : 3 5 《 / l e f t 》

《 l e f t 》 h i r o 真夜中に冬の日本海へ

何度か泳ぎに行ったことがあるよ 《 / l e f t 》 《 l e f t 》

2 2 : 3 6 《 / l e f t 》

《 l e f t 》 ケンちゃんいくら日光が N G だからって 《 / l e f t 》 《 l e f t 》

2 2 : 3 6 《 / l e f t 》

《 l e f t 》 それはちよつと極端過ぎない？ 《 / l e f t 》 《 l e f t 》

2 2 : 3 6 《 / l e f t 》

《left》流水が弱点になる理由はいくつかある《left》

既読 4

22:37

《left》水を恐れる狂犬患者の特徴

または邪気を流すキリスト教の洗礼に弱い《left》

既読 4

22:37

《left》という話が由来らしい《left》

既読 4

22:37

ハロウィンのイベントに駆り出されてて《left》《left》

22:38 《left》

《left》毎日仮装して渋谷に出かけてる《left》《left》

22:39 《left》

《left》ケンちゃんマジ? 《left》《left》

22:39 《left》

《left》クシビちゃんのコスプレ見てみたい《left》《left》

22:39 《left》

《left》MTD素でコスプレしてるだろうがよ《left》《left》

22:39 《left》

《left》伊達それ本人に言ったらはっ倒されるぞ《left》《left》

22:40 《left》

《left》ケンちゃん何の仮装? 《left》《left》

22:40 《left》

《left》hiroゾンビだつて 《left》《left》

22:40 《left》

・ +: : : : : : 《left》: Aa 《left》??: 《font:u58》ぬ 《left》

font》

誰も言葉にはしなかったが、おそらく全員がこのタイミングで、血を吸うオバケじゃないのかと心の中でツツコンだに違いない。

《left》ケンちゃん写真撮ってない? 《left》《left》

22:41 《left》

《left》hiro写真撮るほど凝ったものじゃないよ《left》《left》

22:41 《left》

《left》服装もいつもの黒いコートだし《left》《left》

22:42 《left》

《left》頭から蛍光ピンクの塗料を被るだけだから《left》《left》

22:42 《left》

《left》ケンちゃん赤なら分かるけど何で蛍光ピンク？《left》《left》

22:42 《left》

《left》MTDどこがゾンビなんだ《left》《left》

22:43 《left》

《left》hiro後頭部を砲丸で潰されたゾンビだつてさ《left》《left》

22:43 《left》

《left》MTD草《left》《left》

22:43 《left》

《left》伊達まさかの実体験《left》《left》

22:43 《left》

《left》コメントに困るよな《left》

既読 4

22:44

《left》ケンちゃんそれネタ分かる人いるの…? 《left》《left》

22:44 《left》

《left》hiro意外といるみたい《left》《left》

22:44 《/left》

《left》 コアなファンはかなりいるらしい 《/left》

既読 4

22:45

・ +:.....
font》 《left》: Aa 《/left》??: 《font:u58》ぬ 《/

自分の死体姿なんてブラックジョークを極めたような仮装、どう反応したら良いんだろう。他でもない本人が認めているなら不謹慎とも言いつらい。

ネタが分かる人がいるのも驚きである。不知火さんが殺されたのは幻の一回目の放送の、その初っ端だ。アレを覚えているのは警察関係者か、相当根強いファンくらいしかない。

《left》 伊達そもそもどんなイベントなんだ? 《/left》 《left》

22:45 《left》

《left》hiro全国からアトリエや工房が出店している

渋谷ヒカリエのハロウィンフェアで《left》《left》

22:46 《left》

《left》17人のうち一人がそれに参加している《left》《left》

22:46 《left》

《left》クシビはそのスタッフ《left》《left》

22:46 《left》

《left》商品と届け出と契約内容は確認済み《left》

既読 4

22:47

《left》MTD当然のように把握している公安サマ《left》《left》

22:47 《left》

《left》当たり前だ

奴らが集まるなんて

絶対何かあるに決まってる《left》

既読 4

22:47

《left》ケンちゃんあの子達また何かしようとしてるの?《left》《left》

22:48 《left》

《left》まだ何も分からない《left》

既読 4

22:48

《left》hiro一応店は常に監視しているけど《left》《left》

22:48 《left》

《left》クシビが隠しカメラのレンズに片っ端から

カボチャのシールを貼っていくんだ《left》《left》

22:48 《left》

《left》ケンちゃん Happy Halloween 《left》《left》

22:49 《left》

《left》MTD Trick or Treat ☆ 《left》《left》

22:49 《left》

《left》伊達実質トリック一択じゃないか? 《left》《left》

《left》MTD不知火ゾンビ見てみたい《left》《left》

22:50 《left》

《left》伊達ナタリーがその店興味あるって《left》《left》

22:51 《left》

《left》予約は必要か? 《left》《left》

22:51 《left》

《left》hiro特に要らないよ《left》《left》

22:51 《left》

《left》ワークシヨップコーナーが

多少時間かかる程度かな《left》《left》

22:52 《left》

《left》本物のカボチャを彫ってくれるんだけど

なかなか見応えあつて楽しいよ《left》《left》

22:52《left》

《left》売上に貢献しようとするな《left》

既読 4

22:52

+. 《left》: Aa《left》??: 《font》:u58《ぬ》

font》

酔っ払い達の他愛の無い雑談は、まだまだ続いた。